

# 北山廃寺、北山三嶋遺跡

— 中山間総合整備事業（北山地区）に伴う発掘調査報告書 —

2012年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター





254- 窯 (北から)



262- 窯 (北から)



## 序文

紀の川市は、自然、地理的環境にも恵まれ、紀伊国分寺をはじめとする数多くの遺跡が分布する、古くから栄えた豊かな町です。

本書は、こうした遺跡の一つであり、古くから古代寺院の所在地として知られ、紀の川市の指定史跡に指定されている北山廃寺の周縁部および、北山三嶋遺跡を、和歌山県（那賀振興局地域振興部農地課）の計画した中山間総合整備事業（北山地区）に伴い、3年にわたって発掘調査し、2年にわたって出土遺物整理を実施した成果を報告したものです。

今回の発掘調査は、台地上に広がる北山廃寺、北山三嶋遺跡のほぼ全てを調査するという、大規模なものとなりました。

発掘調査の結果、多数の遺構が検出され、遺物収納コンテナ1,400箱を超す膨大な量の遺物が出土しました。特に注目されるのは、古代の瓦窯3基、中世の瓦窯2基であります。特に、台地の北側で検出されました古代の窯は、後世の破壊をほとんど被らず、完全なかたちで出土しただけでなく、何度も修理・改造を施しつつ長期にわたって使用され続けた過程を追うことのできる、極めて良好な事例がありました。

また、今回の発掘調査では、瓦を焼く窯のみならず、瓦の素材となる粘土を採掘した跡も同時に確認されました。このことは、瓦造りの素材の獲得から焼成、使用にいたる一連の流れを一つの遺跡の中で追うことができるることを示します。県内では唯一、全国的にみても非常に貴重な事例です。

こうした重要な成果を含め、先人が北山の地に残した文化遺産である遺跡の調査成果を報告書としてまとめ、刊行いたします。本書が、地域の歴史を解明する一助となり、今後、文化財をより身近なものと感じ、その意義について考えていただくしなれば幸いです。

最後になりましたが、本調査を遂行するにあたり、御協力いただきました諸機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

平成24年3月29日

公益財団法人 和歌山県文化財センター  
理事長 森 郁夫



## 例　　言

- 1 本書は、和歌山県紀の川市に所在する北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、2008（平成20）年度と2009（平成21）年度に発掘調査を、2010（平成22）年度に中山間総合整備事業（北山地区）に伴う工事監理として調査を行い、2010（平成22）年度と2011（平成23）年度に出土遺物整理を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物整理業務は、和歌山県（那賀振興局産業振興部農地課）の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山県文化財センター（平成23年4月1より公益財団法人和歌山県文化財センター）が受託して実施した。
- 4 発掘調査及び出土遺物整理の調査組織は以下のとおりである。

理事長	小関 洋治（平成20年度、平成21年度）
	鈴木 嘉吉（平成22年度）
	森 郁夫（平成23年度）
専務理事	白藤 正和（平成22年度）
	小堀 基二（平成23年度）
事務局長	酒部 三依（平成20年度） 管理課長兼務
	田中 洋次（平成21年度～）
事務局次長	山本 高照（平成23年度） 管理課長兼務
埋蔵文化財課長	村田 弘（平成20年度～）
管理課長	富加見泰彦（平成22年度）
発掘調査・監理担当	井石 好裕（平成21年度、平成22年度）
	富加見泰彦（平成20年度、平成21年度）
	尾藤 徳行（平成21年度）
	佐々木宏治（平成21年度）
	樋口 薫（平成21年度）
	岩井 顕彦（平成20年度、平成21年度）
	菅原 正明（平成20年度）
	山野 晃司（平成21年度、平成22年度）
	手島美美子（平成20年度）
出土遺物整理	岩井 顕彦（平成22年度、平成23年度）

- 5 本書は公益財団法人和歌山県文化財センターの岩井顕彦が執筆・編集した。
- 6 図版遺構写真は各年度の担当者が撮影し、遺物写真は岩井が撮影した。
- 7 調査・整理業務で作成した図面・写真および台帳等の記録資料は公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
- 8 現地調査並びに報告書作成に際し、関係機関および地元の方々から助言・協力を得た。記して感謝の意を表したい（敬称略、50音順）

北山地区土地整備組合、紀の川市教育委員会、紀の川市農地課、那賀振興局農地課、  
和歌山県立紀伊風土記の丘、和歌山県教育委員会  
井藤 徹、大脇 潔、河内一浩、北野隆亮、浜中邦宏、浜中有紀、藤原 学、前田敬彦、  
和田大作、和田晴吾

## 凡　　例

- 1 北山廃寺、北山三嶋遺跡の調査は、財団法人和歌山県文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年版）を基準として進めた。詳細については、第3章似て記述している。
- 2 地区割りおよび遺構実測図の基準線は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）に基づき、図示した北方位は座標北を示す。
- 3 遺構実測図の基準高は東京湾標準潮位（T.P.）である。
- 4 調査で使用した調査コードは、以下の通りである。

08-10・27・49（2008年度 - 貴志川町・北山廃寺・北山三嶋遺跡）、  
09-10・27・49（2009年度 - 貴志川町・北山廃寺・北山三嶋遺跡）  
10-10・27・49（2010年度 - 貴志川町・北山廃寺・北山三嶋遺跡）
- 5 報告書掲載の遺物番号は通し番号とし、遺物の種別にかかわりなく1からはじまる数字を付した。この番号は、本文・実測図・写真図版とも一致する。
- 6 遺構番号は、報告にあたって、遺構の種別にかかわりなく1からはじまる通し番号を新規に付した。調査時の遺構番号との関係等については、第3章第5節に詳述している。
- 7 遺構の縮尺は、原則として遺構配置図が1/150以上の小縮尺、平面図および断面土層図が1/40または1/80を基本としたが、必要に応じて異なる縮尺を用いて掲載しており、図ごとにバースケール示した。
- 8 遺物実測図の縮尺は土器、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦が1/4、平瓦、丸瓦が1/6、石器・石製品、鉄器類は1/2で掲載することを原則としたが、必要に応じて異なる縮尺を用いて掲載しており、図ごとにバースケールを示した。複数のスケールを掲載する場合は、スケールの上部に適用される遺物の番号を表示している。  
土器の断面は、須恵器が黒塗り、土師器が白抜き、瓦器が50%網伏せである。瓦、石器、鉄器の断面は斜線で示した。  
遺物写真的縮尺は統一していない。
- 9 土器および調査時の土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』2005年版を基準としている。

# 目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

<b>第1章 調査の経緯と経過</b>	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
<b>第2章 遺跡と周辺の環境</b>	3
<b>第3章 調査の方法</b>	7
第1節 調査方法の基準、調査コード	7
第2節 地区割り	7
第3節 調査区の設定	8
第4節 掘削、記録方法	8
第5節 出土遺物等整理	9
第4章 基本層序の概要	14
<b>第5章 2008（平成20）年度調査の成果</b>	16
第1節 1 - 1 区	16
第2節 1 - 2 区	18
第3節 2 区	30
第4節 3 区	39
第5節 4 区	41
第6節 5 - 1 区	44
第7節 5 - 1 区 第2遺構面	70
第8節 5 - 2 区	73
<b>第6章 2009（平成21）年度調査の成果</b>	81
第1節 5 - 1 区 第2遺構面	81
第2節 6 - 1 区	87
第3節 6 - 1 区 第2遺構面	90
第4節 6 - 2 区	90
第5節 6 - 2 区 第2遺構面	112
第6節 7 - 1 区	120
第7節 7 - 3 区	120
第8節 7 - 4 区	128

第9節 7 - 4 区 第2遺構面	141
第10節 8 - 1 区	150
第11節 8 - 2 区	158
第12節 8 - 3 区	164
第13節 8 - 4 区	171
第14節 8 - 5 区	197
第15節 9 区	204
第16節 11 区	210
<b>第7章 2010（平成22）年度調査の成果</b>	<b>214</b>
第1節 7 - 2 区	214
第2節 8 - 6 区	224
第3節 10 区	239
<b>第8章 総括</b>	<b>261</b>
<b>写真図版</b>	

## 挿図目次

図 1 北山廃寺、北山三嶋遺跡とその周辺の遺跡	3	図 48 5-1 区 54- 土坑	54
図 2 調査範囲と地区割りの方法	6	図 49 5-1 区 51、53、54、69- 土坑 出土遺物	55
図 3 調査区の設定と地区割りの関係	7	図 50 5-1 区 55、56- 粘土探掘穴	56
図 4 基本層序模式図	15	図 51 5-1 区 55、56- 粘土探掘穴 出土遺物	57
図 5 1-1 区 遺構全体図	16	図 52 5-1 区 57、58、60、61、62- 粘土探掘穴	58
図 6 1-1 区 土坑、溝、小穴	17	図 53 5-1 区 64、65、66、67- 粘土探掘穴	59
図 7 1-1 区 出土遺物	18	図 54 5-1 区 粘土探掘穴 出土遺物	60
図 8 1-2 区 遺構全体図	19	図 55 5-1 区 68- 溝	61
図 9 1-2 区 9、10- 土坑、7- 溝、8- 小穴	19	図 56 5-1 区 46、68- 溝 出土遺物	62
図 10 1-2 区 11、12- 土坑	20	図 57 5-1 区 70- 溝 出土遺物	63
図 11 1-2 区 19、22、23、24- 土坑	21	図 58 5-1 区 43- 土器集中部	63
図 12 1-2 区 25、28- 土坑	22	図 59 5-1 区 43- 土器集中部 出土遺物	64
図 13 1-2 区 28、12- 土坑 出土遺物	23	図 60 5-1 区 水路西側側溝掘削中 出土遺物	66
図 14 1-2 区 9、10、11、19、22、23、24、25- 土坑、 21- 溝 出土遺物	24	図 61 5-1 区 包含層 出土遺物 (その 1)	67
図 15 1-2 区 26- 井戸	25	図 62 5-1 区 包含層 出土遺物 (その 2)	68
図 16 1-2 区 26- 井戸 出土遺物	25	図 63 5-1 区 第 2 遺構面 遺構全体図	70
図 17 1-2 区 21、27- 溝とその周辺	26	図 64 5-1 区 第 2 遺構面 71、72、73、74、75、76、 77、78- 粘土探掘穴	71
図 18 1-2 区 7、27- 溝とその周辺	27	図 65 5-1 区 第 2 遺構面 79、80- 粘土探掘穴	72
図 19 1-2 区 13、14、15、17、18、20- 小穴	27	図 66 5-1 区 第 2 遺構面 出土遺物	72
図 20 1-2 区 13、14、15、17- 小穴 出土遺物	29	図 67 5-2 区 遺構全体図	73
図 21 1-2 区 包含層 出土遺物	29	図 68 5-2 区 88- 掘立柱建物と周辺の遺構	74
図 22 2 区 遺構全体図	30	図 69 5-2 区 88- 掘立柱建物と周辺の遺構 出土遺物	74
図 23 2 区 29- 構築物	31	図 70 5-2 区 82、83- 土坑	75
図 24 2 区 30- 構築物	32	図 71 5-2 区 82- 土坑 出土遺物	76
図 25 2 区 30- 構築物 出土遺物	33	図 72 5-2 区 82、83- 土坑 出土遺物	77
図 26 2 区 31- 構築物	33	図 73 5-2 区 81- 瓦溜り	78
図 27 2 区 31- 構築物 (拡張後)	34	図 74 5-2 区 81- 瓦溜り 出土遺物	79
図 28 2 区 32- 構築物	35	図 75 5-2 区 包含層 出土遺物	80
図 29 2 区 29、31、32- 構築物 出土遺物	36	図 76 5-1 区 第 2 遺構面 (2009 年度調査分) 遺構全体図	81
図 30 2 区 34- 溝	37	図 77 5-1 区 第 2 遺構面 (2009 年度調査分) 89、90、91、92- 粘土探掘穴	82
図 31 2 区 34- 溝 出土遺物	38	図 78 5-1 区 第 2 遺構面 (2009 年度調査分) 93、95、96、97、99、100- 粘土探掘穴	83
図 32 2 区 包含層 出土遺物	39	図 79 5-1 区 第 2 遺構面 (2009 年度調査分) 89、90、91、93、95、97、98- 粘土探掘穴 出土遺物	84
図 33 3 区 遺構全体図	39	図 80 5-1 区 第 2 遺構面 (2009 年度調査分) 94- 溝	85
図 34 3 区 35、36- 溝	40	図 81 5-1 区 第 2 遺構面 (2009 年度調査分) 94- 溝、包含層 出土遺物	86
図 35 3 区 出土遺物	40	図 82 6-1 区 遺構全体図	87
図 36 4 区 遺構全体図	41	図 83 6-1 区 出土遺物	89
図 37 4 区 39- 掘立柱建物	42	図 84 6-1 区 第 2 遺構面 遺構全体図	91
図 38 4 区 37、38- 土坑	43	図 85 6-2 区 遺構全体図	92
図 39 4 区 出土遺物	43	図 86 6-2 区 118、121、126- 土坑	93
図 40 5-1 区 遺構全体図	45	図 87 6-2 区 118- 土坑 出土遺物	94
図 41 5-1 区 40、41、42、44、45、47- 土坑	46		
図 42 5-1 区 40、41、44、45、47- 土坑 出土遺物	47		
図 43 5-1 区 48、49- 土坑	48		
図 44 5-1 区 49- 土坑 出土遺物 (その 1)	49		
図 45 5-1 区 49- 土坑 出土遺物 (その 2)	50		
図 46 5-1 区 50、51、52、53、69- 土坑、70- 溝	51		
図 47 5-1 区 50- 土坑 出土遺物	52		

図 88	6-2 区 121- 土坑 出土遺物	95
図 89	6-2 区 126- 土坑 出土遺物	96
図 90	6-2 区 126、128- 土坑、122- 小穴 出土遺物	97
図 91	6-2 区 108、109、110、111、112、114、115、 116、117- 粘土採掘穴 出土遺物	99
図 92	6-2 区 108、109、110、112、113、 114- 粘土採掘穴 出土遺物	100
図 93	6-2 区 118- 溝、121- 土坑、120- 溝、120、123、 124- 小穴	101
図 94	6-2 区 128- 土坑、127- 溝	103
図 95	6-2 区 127- 溝 出土遺物	104
図 96	6-2 区 127- 溝（上層）出土遺物（その1）	105
図 97	6-2 区 127- 溝（上層）出土遺物（その2）	106
図 98	6-2 区 127- 溝（上層）出土遺物（その3）	107
図 99	6-2 区 131- 溝	108
図 100	6-2 区 131- 溝 出土遺物	109
図 101	6-2 区 129- 小穴	109
図 102	6-2 区 129- 小穴 出土遺物	110
図 103	6-2 区 129、130- 小穴	111
図 104	6-2 区 123、124、125、130- 小穴 出土遺物	111
図 105	6-2 区 包含層 出土遺物	112
図 106	6-2 区 第2遺構面 遺構全体図	113
図 107	6-2 区 第2遺構面 136、138- 土坑	114
図 108	6-2 区 第2遺構面 137- 土坑	115
図 109	6-2 区 第2遺構面 136- 土坑 出土遺物	116
図 110	6-2 区 第2遺構面 137- 土坑 出土遺物	117
図 111	6-2 区 第2遺構面 138- 土坑 出土遺物 (その1)	118
図 112	6-2 区 第2遺構面 138- 土坑 出土遺物 (その2)	119
図 113	6-2 区 第2遺構面 132、133、134、 135- 粘土採掘穴	119
図 114	6-2 区 第2遺構面 134、135- 粘土採掘穴 出土遺物	120
図 115	7-3 区 遺構全体図	121
図 116	7-3 区 143、145、146、147- 土坑	122
図 117	7-3 区 148、149- 土坑	123
図 118	7-3 区 145、148、149- 土坑 出土遺物	124
図 119	7-3 区 139- 溝、140、141、 142- 土器集中部	125
図 120	7-3 区 139- 溝、144- 小穴、140、141、 142- 土器集中部 出土遺物	126
図 121	7-3 区 包含層 出土遺物	127
図 122	7-4 区 遺構全体図	128
図 123	7-4 区 151- 掘立柱建物と周辺の遺構	129
図 124	7-4 区 154- 掘立柱建物と周辺の遺構	130
図 125	7-4 区 161- 掘立柱建物と周辺の遺構	131
図 126	7-4 区 153、155、162- 小穴 出土遺物	132
図 127	7-4 区 150、157、160- 土坑、158- 小穴	133
図 128	7-4 区 152、157、160、163- 土坑 出土遺物	134
図 129	7-4 区 156、158、165- 土坑 出土遺物	135
図 130	7-4 区 164、166- 溝、165- 小穴	136
図 131	7-4 区 169- 溝	137
図 132	7-4 区 164、166、167- 溝 出土遺物	138
図 133	7-4 区 168- 溝 出土遺物（その1）	139
図 134	7-4 区 168- 溝 出土遺物（その2）	140
図 135	7-4 区 第2遺構面 遺構全体図	141
図 136	7-4 区 第2遺構面 170- 土坑	142
図 137	7-4 区 第2遺構面 170- 土坑 出土遺物	142
図 138	7-4 区 第2遺構面 171- 溝	143
図 139	7-4 区 第2遺構面 171- 溝 出土遺物 (その1)	144
図 140	7-4 区 第2遺構面 171- 溝 出土遺物 (その2)	145
図 141	7-4 区 第2遺構面 171- 溝 出土遺物 (その3)	146
図 142	7-4 区 第2遺構面 171- 溝 出土遺物 (その4)	147
図 143	7-4 区 第2遺構面 171- 溝 出土遺物 (その5)	148
図 144	7-4 区 包含層 出土遺物	149
図 145	8-1 区 遺構全体図	150
図 146	8-1 区 177、184- 掘立柱建物と周辺の遺構	151
図 147	8-1 区 172- 柱列	153
図 148	8-1 区 183、175、189- 土坑、190- 小穴	154
図 149	8-1 区 175、179、182、183、186、188、 189- 土坑、173- 小穴 出土遺物	155
図 150	8-1 区 180- 溝、小穴類、包含層 出土遺物	156
図 151	8-2 区 遺構全体図	158
図 152	8-2 区 196- 掘立柱建物	159
図 153	8-2 区 197、198- 土坑	160
図 154	8-2 区 195- 土坑	161
図 155	8-2 区 193、195、197、198- 土坑 出土遺物	162
図 156	8-2 区 溝、小穴、包含層等 出土遺物	163
図 157	8-3 区 遺構全体図	164
図 158	8-3 区 200、201- 土坑	165
図 159	8-3 区 200- 土坑 出土遺物（その1）	166
図 160	8-3 区 200- 土坑 出土遺物（その2）	167
図 161	8-3 区 201- 土坑、包含層 出土遺物	168
図 162	8-3 区 199- 土坑	169
図 163	8-3 区 199- 土坑 出土遺物	170
図 164	8-4 区 遺構（黒色土除去後）全体図	172
図 165	8-4 区 遺構全体図	173
図 166	8-4 区 210- 土坑と周辺の遺構	174
図 167	8-4 区 209、212- 土坑	175
図 168	8-4 区 209、210、211、212- 土坑 出土遺物	176
図 169	8-4 区 213、214- 土坑、206- 溝	179
図 170	8-4 区 203、204、205、213、214- 土坑 出土遺物	180
図 171	8-4 区 202- 溝 出土遺物	182

図 172 8-4 区 206- 溝 出土遺物 (その 1) .....	183	図 208 7-2 区 238- 石垣、包含層 出土遺物 .....	222
図 173 8-4 区 206- 溝 出土遺物 (その 2) .....	184	図 209 8-6 区 遺構全体図 .....	225
図 174 8-4 区 207- 溝 北半 (上層検出時) .....	185	図 210 8-6 区 251- 落込みと周辺の遺構 .....	226
図 175 8-4 区 207- 溝 南半 (上層検出時) .....	186	図 211 8-6 区 251- 落込み 断面土層図 .....	227
図 176 8-4 区 207- 溝 (下層検出時) .....	187	図 212 8-6 区 253- 窯 .....	228
図 177 8-4 区 207- 溝 下層 出土遺物 (その 1) .....	188	図 213 8-6 区 253- 窯 出土遺物 (その 1) .....	229
図 178 8-4 区 207- 溝 下層 出土遺物 (その 2) .....	189	図 214 8-6 区 253- 窯 出土遺物 (その 2) .....	230
図 179 8-4 区 207- 溝 下層 出土遺物 (その 3) .....	190	図 215 8-6 区 254- 窯 遺物出土状況 .....	232
図 180 8-4 区 207- 溝 上層 出土遺物 (その 1) .....	191	図 216 8-6 区 254- 窯 完掘状況 .....	233
図 181 8-4 区 207- 溝 上層 出土遺物 (その 2) .....	193	図 217 8-6 区 254- 窯 出土遺物 (その 1) .....	234
図 182 8-4 区 207- 溝 上層 出土遺物 (その 3) .....	194	図 218 8-6 区 254- 窯 出土遺物 (その 2) .....	235
図 183 8-4 区 207- 溝 上層 出土遺物 (その 4) .....	195	図 219 8-6 区 254- 窯 出土遺物 (その 3) .....	236
図 184 8-4 区 207- 溝 上層 出土遺物 (その 5) .....	196	図 220 8-6 区 255- 落込みと周辺の遺構 .....	237
図 185 8-5 区 遺構全体図 .....	197	図 221 8-6 区 252、255- 落込み 出土遺物 .....	238
図 186 8-5 区 217- 土坑、216- 小穴、包含層 出土遺物 .....	198	図 222 10 区 遺構全体図 .....	239
図 187 8-5 区 218- 溝 .....	199	図 223 10 区 土坑、粘土採掘穴、落込み 出土遺物 .....	240
図 188 8-5 区 218- 溝 部分拡大 .....	200	図 224 10 区 258、259- 窯と周辺の遺構 .....	242
図 189 8-5 区 218- 溝 出土遺物 (その 1) .....	201	図 225 10 区 258、259- 窯と周辺の遺構 断面土層図 .....	243
図 190 8-5 区 218- 溝 出土遺物 (その 2) .....	202	図 226 10 区 258、259- 窯 出土遺物 .....	244
図 191 8-5 区 218- 溝 出土遺物 (その 3) .....	203	図 227 10 区 262- 窯と周辺の遺構 .....	246
図 192 9 区 遺構全体図 .....	204	図 228 10 区 262- 窯 平面と縦断面図 .....	247
図 193 9 区 221、224- 土坑、226- 溝 .....	205	図 229 10 区 262- 窯 横断面図 .....	248
図 194 9 区 221、222- 土坑 出土遺物 .....	206	図 230 10 区 262- 窯 壁立面図 .....	249
図 195 9 区 220- 溝 .....	207	図 231 10 区 262- 窯 煙道立面・断面図 .....	250
図 196 9 区 196- 落込み .....	208	図 232 10 区 262- 窯 焚口部閉塞瓦 (その 1) .....	251
図 197 9 区 224、226- 土坑、223、225- 溝、 219- 落込み、包含層 出土遺物 .....	209	図 233 10 区 262- 窯 焚口部閉塞瓦 (その 2) .....	252
図 198 11 区 遺構全体図 .....	210	図 234 10 区 262- 窯 燃焼部出土遺物 .....	252
図 199 11 区 227- 掘立柱建物と周辺の遺構 .....	211	図 235 10 区 262- 窯 分焰柱転用瓦 (その 1) .....	253
図 200 11 区 236- 土坑 .....	212	図 236 10 区 262- 窯 分焰柱転用瓦 (その 2) .....	254
図 201 11 区 出土遺物 .....	213	図 237 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 1) .....	255
図 202 7-2 区 遺構全体図 .....	215	図 238 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 2) .....	256
図 203 7-2 区 239、246、248、249- 土坑 .....	216	図 239 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 3) .....	257
図 204 7-2 区 240、241、242- 土坑 .....	218	図 240 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 4) .....	258
図 205 7-2 区 243、250- 溝 .....	219	図 241 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 5) .....	259
図 206 7-2 区 土坑、溝、小穴 出土遺物 .....	220	図 242 10 区 262- 窯 煙道構築瓦 .....	260
図 207 7-2 区 238- 石垣 .....	221	図 243 表面採集遺物 .....	261

## 写真目次

写真1 整理作業風景	9	写真13 8-4 区 210- 土坑断面土層と 212- 土坑検出状況	177
写真2 地山の土色の変化 (7-4 区西端)	14		
写真3 5-1 区 52- 土坑 出土遺物	53	写真14 8-4 区 212- 土坑、210- 土坑 出土遺物	178
写真4 5-1 区 66- 粘土採掘穴断面土層	57	写真15 8-4 区 213- 土坑	181
写真5 5-1 区 包含層出土遺物	69	写真16 8-4 区 207- 溝下層遺物出土状況と 208- 盛土断面	196
写真6 6-1 区 105- 小穴 断割り状況	88		
写真7 6-1 区 105- 小穴、107- 小穴 出土遺物	90	写真17 7-2 区 246- 土坑と 238- 石垣	217
写真8 6-2 区 127- 溝、218- 溝遠景と 127- 溝断面土層	102	写真18 7-2 区 包含層出土遺物	223
写真9 6-2 区 126- 土坑出土滓と 127- 溝出土遺物	102	写真19 8-6 区 254- 窯	231
写真10 7-3 区 140- 土器出土地点	126	写真20 8-6 区 254- 窯断割り状況と 255- 落込み断面土層	231
写真11 7-4 区 169- 溝と 162- 小穴	132		
写真12 8-1 区 調査区中央部小穴群	150	写真21 10 区 262- 窯	259

## 表目次

表1 新旧遺構対応表 (その1)	11	表3 新旧遺構対応表 (その3)	13
表2 新旧遺構対応表 (その2)	12		

## 写真図版目次

卷頭図版 1	2. 2 区 31、32- 積穴建物 (北から)
1. 254 - 窯 (北から)	写真図版 6 2 区遺構
2. 262 - 窯 (北から)	1. 30- 積穴建物 (北西から)
写真図版 1 調査区遠景、近景	2. 31- 積穴建物 (南から)
1. 調査地遠景 (北から)	3. 32 積穴建物 (南から)
2. 調査地近景 (南から)	写真図版 7 3 区遺構
3. 調査地近景 (南西から)	1. 3 区全景 (航空写真: 上が北)
写真図版 2 1-1 区遺構	2. 35、36- 溝 (北から)
1. 1-1 全景 (航空写真: 上が南)	写真図版 8 4 区遺構
2. 3 - 土坑 (南東から)	1. 4 区全景 (北西から)
3. 4 - 土坑 (西から)	2. 41、42- 土坑 (北東から)
4. 1- 溝 (北から)	写真図版 9 5-1 区遺構
5. 1- 溝 (北東から)	1. 5-1 区全景 (航空写真: 上が北)
写真図版 3 1-2 区遺構	2. 45- 土坑 (北から)
1. 1-2 区全景 (航空写真: 上が北)	3. 49- 土坑 (北東から)
2. 1-2 区全景 (西から)	4. 52- 土坑 (東から)
写真図版 4 1-2 区遺構	5. 54- 土坑 (南から)
1. 23- 土坑 (南から)	写真図版 10 5-1 区遺構
2. 24- 土坑 (南から)	1. 69- 土坑 (北西から)
3. 28- 土坑 (南から)	2. 61、62- 粘土採掘穴 (東から)
4. 26- 井戸 (西から)	3. 65- 粘土採掘穴断面土層 (南から)
5. 17、18- 小穴 (東から)	写真図版 11 5-1 区第 2 遺構面遺構
写真図版 5 2 区遺構	1. 5-1 区第 2 遺構面全景 (航空写真: 上が西)
1. 2 区全景 (航空写真: 上が北)	2. 74- 粘土採掘穴 (南から)

3. 75- 粘土探掘穴（南から）
4. 78- 粘土探掘穴（北東から）
5. 80- 粘土探掘穴（北から）

写真図版 12 5-2 区遺構

1. 5-2 区全景（航空写真：上が南）
2. 88- 掘立柱建物ほか（南から）
3. 82- 土坑（南東から）
4. 84- 土坑断面土層（東から）
5. 81- 瓦溜り（南から）

写真図版 13 5-2 区第2遺構面遺構 2009年度調査分

1. 5-1 区第2遺構面 2009年度調査分全景  
(航空写真：上が南)
2. 89- 粘土探掘穴（北から）
3. 90- 粘土探掘穴（南から）
4. 96- 粘土探掘穴（東から）
5. 99、100- 粘土探掘穴（南から）

写真図版 14 6-1 区遺構

1. 6-1 区全景（南から）
2. 6-1 区第2遺構面全景（北東から）

写真図版 15 6-2 区遺構

1. 6-2 区全景（航空写真：上が北東）
2. 118- 土坑（西から）
3. 121- 土坑（西から）
4. 126- 土坑（北西から）
5. 109- 粘土探掘穴（南西から）

写真図版 16 6-2 区遺構

1. 127、131- 溝（南から）
2. 131- 溝（南西から）
3. 129- 小穴（南東から）

写真図版 17 6-2 区第2遺構面

1. 2 区全景（航空写真：上が南）
2. 6-1、6-2 区全景（北東から）
3. 136- 土坑（北から）

写真図版 18 6-2 区第2遺構面、7-1 区遺構

1. 137- 土坑（西から）
2. 138- 土坑（北西から）
3. 133- 粘土探掘穴（南から）
4. 135- 土坑（北西から）
5. 7-1 区全景（航空写真：上が南）

写真図版 19 7-3 区遺構

1. 7-3 区全景（航空写真：上が南）
2. 149- 土坑（北から）
3. 140、141、142- 土器出土地点（南から）

写真図版 20 7-4 区遺構

1. 7-4 区全景（航空写真：上が西）
2. 151- 掘立柱建物（北から）
3. 154- 掘立柱建物（北から）

写真図版 21 7-4 区遺構

1. 161- 掘立柱建物（北西から）
2. 150- 土坑（東から）
3. 160- 土坑（東から）
4. 158- 小穴（北から）

5. 165- 小穴（南西から）

写真図版 22 7-4 区第2遺構面

1. 7-4 区第2遺構面全景（航空写真：上が北）
2. 171- 溝（北から）

写真図版 23 8-1 区遺構

1. 8-1 区全景（航空写真：上が南）
2. 172- 柱列（南から）

写真図版 24 8-1 区遺構

1. 177- 掘立柱建物（西から）
2. 184- 掘立柱建物（東から）

写真図版 25 8-1 区遺構

1. 179- 土坑（西から）
2. 183- 土坑（北から）
3. 189- 土坑（北西から）

写真図版 26 8-2 区遺構

1. 8-2 区全景（航空写真：上が南）
2. 196- 土坑（北から）
3. 198- 土坑（北東から）

写真図版 27 8-3 区遺構

1. 8-3 区全景（航空写真：上が南）
2. 199- 土坑（南東から）
3. 200- 土坑（南西から）

写真図版 28 8-4 区遺構

1. 8-4 区全景（航空写真：上が南）
2. 210- 土坑（北西から）
3. 212- 土坑（北から）
4. 213- 土坑（北から）
5. 214- 土坑（南から）

写真図版 29 8-4 区遺構

1. 207- 溝とその周辺（航空写真：上が北）
2. 208- 盛土（南から）
3. 208- 盛土断面土層（北西から）

写真図版 30 8-5 区遺構

1. 8-5 区全景（航空写真：上が北）
2. 218- 溝（北から）
3. 218- 溝（東から）

写真図版 31 9 区遺構

1. 9 区全景（航空写真：上が北西）
2. 221- 土坑（東から）
3. 222- 土坑（北から）
4. 224- 土坑（北から）
5. 226- 土坑（西から）

写真図版 32 11 区遺構

1. 11 区全景（航空写真：上が北）
2. 227- 掘立柱建物（東から）
3. 236- 土坑（東から）

写真図版 33 7-2 区遺構

1. 7-2 区全景（航空写真：上が南）
2. 244- 土坑（北西から）
3. 248- 土坑（北から）

写真図版 34 7-2 区遺構

1. 243- 溝（北から）

2. 238- 石垣（西から）

3. 238- 石垣立面（北西から）

写真図版 35 8-6 区遺構

1. 8-6 区全景（航空写真：上が北）

2. 252- 落ち及びその周辺（東から）

写真図版 36 8-6 区遺構

1. 253- 窯遺物出土状況（南東から）

2. 253- 窯完掘状況（南東から）

写真図版 37 8-6 区遺構

1. 254- 窯遺物出土状況（北から）

2. 254- 窯遺物出土状況（南から）

写真図版 38 8-6 区遺構

1. 254- 窯完掘状況（南から）

2. 254- 窯、252- 落ち（北から）

3. 255- 落ち断面土層（南東から）

写真図版 39 10 区遺構

1. 10 区全景（航空写真：上が南）

2. 258、259- 窯とその周辺（北東から）

3. 258、259- 窯（北から）

写真図版 40 10 区遺構

1. 258- 窯（北から）

2. 259- 窯（北から）

3. 259- 窯焼成部（東から）

写真図版 41 10 区遺構

1. 262- 窯とその周辺（北東から）

2. 262- 窯（南東から）

3. 262- 窯焼成部遺物出土状況（東から）

写真図版 42 10 区遺構

1. 262- 窯焼成部（南西から）

2. 262- 窯隔壁（南西から）

3. 262- 窯南側壁（北西から）

4. 262- 窯奥壁（東から）

5. 262- 窯奥壁平瓦除去後（東から）

写真図版 43 10 区遺構

1. 262- 窯煙道構築状況（東から）

2. 262- 窯煙道断面土層（北西から）

3. 262- 窯燃焼部断割り断面土層（北東から）

写真図版 44 1-1 区～5-1 区出土遺物

写真図版 45 5-1 区～5-1 区第2遺構面 2009 年度調査分

出土遺物

写真図版 46 6-2 区出土遺物

写真図版 47 7-3 区～7-4 区出土遺物

写真図版 48 8-1 区～8-3 区出土遺物

写真図版 49 8-4 区出土遺物

写真図版 50 8-5 区～8-6 区出土遺物

写真図版 51 10 区出土遺物

写真図版 52 10 区出土遺物

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

今回の調査は、和歌山県（那賀振興局地域振興部農地課）の計画した中山間総合整備事業（北山地区）に起因する。本事業地内には、紀の川市の指定史跡が所在することから、その保護を目的として平成18年度に紀の川市教育委員会による確認調査が実施された。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である古代寺院「北山廃寺」の周辺で寺院以外の遺構・遺物が確認されたことから、紀の川市教育委員会及び和歌山県教育委員会が協議のうえ、埋蔵文化財包蔵地の範囲を新規に認定し、「北山三嶋遺跡」とした。

中山間総合整備事業（北山地区）は、上記の遺跡の全域に及ぶため、和歌山県教育委員会が、事業者との協議を経て、試掘調査を実施した結果、本調査を要する範囲として 19,547 m<sup>2</sup>を認定した。そこで、和歌山県教育庁文化遺産課の指導のもと、財団法人和歌山県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査の経過

### 2008（平成20）年度（発掘調査）

2008年10月から2009年3月にかけて実施した。調査実施面積は、7調査区、約7,500 m<sup>2</sup>である。遺構面が2面存在するとされた5-1区については、約1,900 m<sup>2</sup>を対象として第2遺構面の調査を実施した

### 2009（平成21）年度（発掘調査）

2009年5月から2010年3月にかけて実施した。調査実施面積は、13調査区、約15,000 m<sup>2</sup>である。

### 2010（平成22）年度（工事監理、出土遺物等整理）

中山間総合整備事業（北山地区）に伴う工事監理として、整備事業の工事で施行される掘削作業の監理を行うことで遺跡の記録保存を実施した。対象は、3調査区、約3,000 m<sup>2</sup>である。

工事監理と並行して、出土遺物等整理業務を実施した。本業務は、2ヶ年計画で実施し、2010（平成22）年度は、その初年度にあたる。前年度までの発掘調査により出土した、収納コンテナ約1,000箱分の遺物を対象として、作業を実施した。工事監理によって出土した収納コンテナ約400箱分の遺物については、現地での応急整理作業によって洗浄された遺物の一部を対象とした。2事業は、一部並行して行われ、2009年6月から2010年3月まで実施した。

### 2011（平成23）年度（出土遺物等整理）

出土遺物等整理業務として、2011年4月から2012年3月まで実施した2009、2010年度調査で出土した遺物および前年度の工事監理によって出土した遺物の整理作業を行い、3月末

に報告書を刊行した。最終的な整理対象数量は、遺物収納コンテナ約1,400箱、整理作業完了時の収納箱数にして約1,700箱である。

#### **普及活動・現地説明会**

2009（平成21）年2月19日、2010（平成21）年10月17日、2011（平成22）年12月17、18日と、発掘調査・工事監理毎に現地説明会・現地公開を実施した。また、発掘調査成果をいち早く報告するとの趣旨で、文化庁からの補助金を活用し、2011（平成22）年3月6日に調査報告会を、2012（平成23）年1月23日には公開シンポジウム「寺を造る」を開催している。

## 第2章 遺跡と周辺の環境(第2図、写真図版1)

### 地理的環境

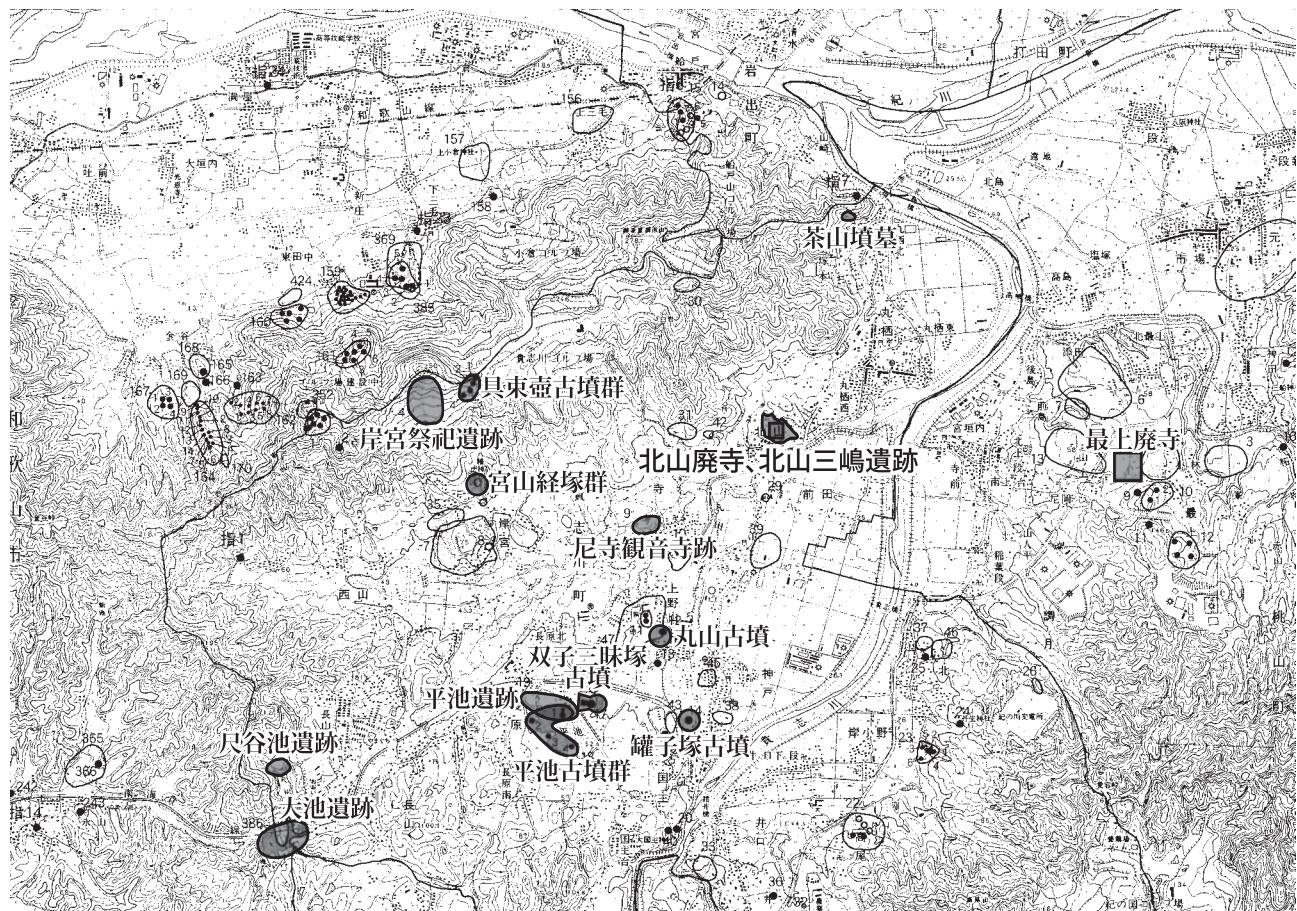
北山廃寺、北山三嶋遺跡は、紀の川市貴志川町に所在し、鳩羽山の南側に広がる標高約35mの河岸段丘上に位置する。段丘の南側は、貴志川の支流の一つである丸田川によって区切られ、東西は、鳩羽山に源を発し、東に向かって流れる小河川によって周囲の段丘と隔てられている。

遺跡の南から東は、丸田川や貴志川によって形成された氾濫原が広がっている。遺跡は、この氾濫原を一望できる地点に形成されている。東南を向けば、ほぼ同時期に造立された最上廃寺を望むことも可能である。

### 歴史的環境

北山廃寺、北山三嶋遺跡の南側を流れる貴志川およびその支流の河川には、河岸段丘が発達し、遺跡の多くはその上に立地している。

この地に人類が初めて足跡を残したのは、旧石器時代にまでさかのぼる。旧石器時代の遺跡としては、平池遺跡や、尺谷池遺跡、大池遺跡などがあるが、いずれも表採によるため、遺構



第1図 北山廃寺、北山三嶋遺跡とその周辺の遺跡

の様相は明らかではないが、ナイフ形石器等の出土が知られている。北山三嶋遺跡でも、遺構に伴うものではないが、有舌尖頭器が出土しており、人類の活動範囲が当遺跡まで及んでいたことがわかる。ただし、その痕跡は現在のところ、濃いものではない。

こうした状況は、次の縄文時代から弥生時代にかけても同様であり、先述した大池遺跡で、縄文時代の石鏃とみられる遺物が採集されているのが目を引く程度である。そのなかにあって、弥生時代のまとまった数の建物跡と遺物が出土した北山三嶋遺跡の存在は、貴重な例であろう。

古墳時代になると、中期以降、古墳が盛んに築造されている。中期古墳としては、詳細は明らかではないものの、鉄鉢など、希少な遺物の出土した丸山古墳などが特筆される。後期に入ると、平池古墳群など、段丘や山腹に群集墳が築造される。終末期には、北山三嶋遺跡の北側の山塊に具足壺古墳群、七ツ塚古墳群が築造されている。

古代は、貴志川流域の歴史上、最も華やかな時期である。具体的には、本報告書の対象である北山廃寺、北山三嶋遺跡のほか、南西には詳細不明だが尼寺観音寺跡、西の山腹には、岸宮祭祀遺跡が位置する。貴志川をはさんで東側には北山廃寺とほぼ同時期に最上廃寺が造立されている。なお、那賀郡には、北山廃寺、最上廃寺以外に、西国分廃寺が存在するが、いずれも共通の意匠を持つ单弁軒丸瓦が出土している。

中世以降は、遺跡の情報が極端に少なくなる。特に、中世半ば以降の情報が極端に少ない。これは、居住地が現在の集落下に移行したためであろうか。わずかに、刀子や土師皿が出土した宮山経塚群や、応祖上人宝篋院塔、北宝篋院塔などから、当時の人々の活動をうかがうことができる。北山三嶋遺跡でも、13世紀から14世紀ごろに行われた土地改変以降、258- 窯、259- 窯を除けば、遺構・遺物の存在が極めて希薄となる。おそらく、耕地化され、近世、近代と同様の土地利用が連綿と続き、現在に至ったのであろう。

## 北山廃寺の調査・研究史

北山廃寺、北山三嶋遺跡の調査・研究は、半世紀近くにわたって行われ、その成果が、遺跡の範囲の認定や、出土遺構、遺物の評価に大きな影響を及ぼしてきた。そこで、遺跡の調査歴を中心に、調査・研究史に触れておきたい。

北山廃寺の伽藍配置については、『貴志川町史』上で具体的な考察が行われ、既に知られていた塔芯礎を中心に、現況の地割や地名等から、方1町の寺域の存在と伽藍配置が想定された(褐磨ほか 1981)。

その後、1993(平成5)年から1995(平成7)年の3年次にわたって、貴志川町(現紀の川市)教育委員会が、国庫補助事業として範囲確認調査を実施し、44ヶ所にトレーナーを設置した。

その結果、推定塔心礎を中心に、南北10mの範囲に版築による基壇構築の痕跡が確認された。寺域に関しては、中門、回廊とそれに伴う溝、寺域の西限を画する溝などが検出された。また、塔、金堂、回廊に伴うとされる5ヶ所の瓦溜まりが確認された(富加見 1996)。

この3年間次の調査は、トレーナー調査であったため、遺構の面的な広がりは捉えられなかつたが、各トレーナーであたかも古代寺院の伽藍配置の研究成果に沿うかのように、瓦溜り、溝等

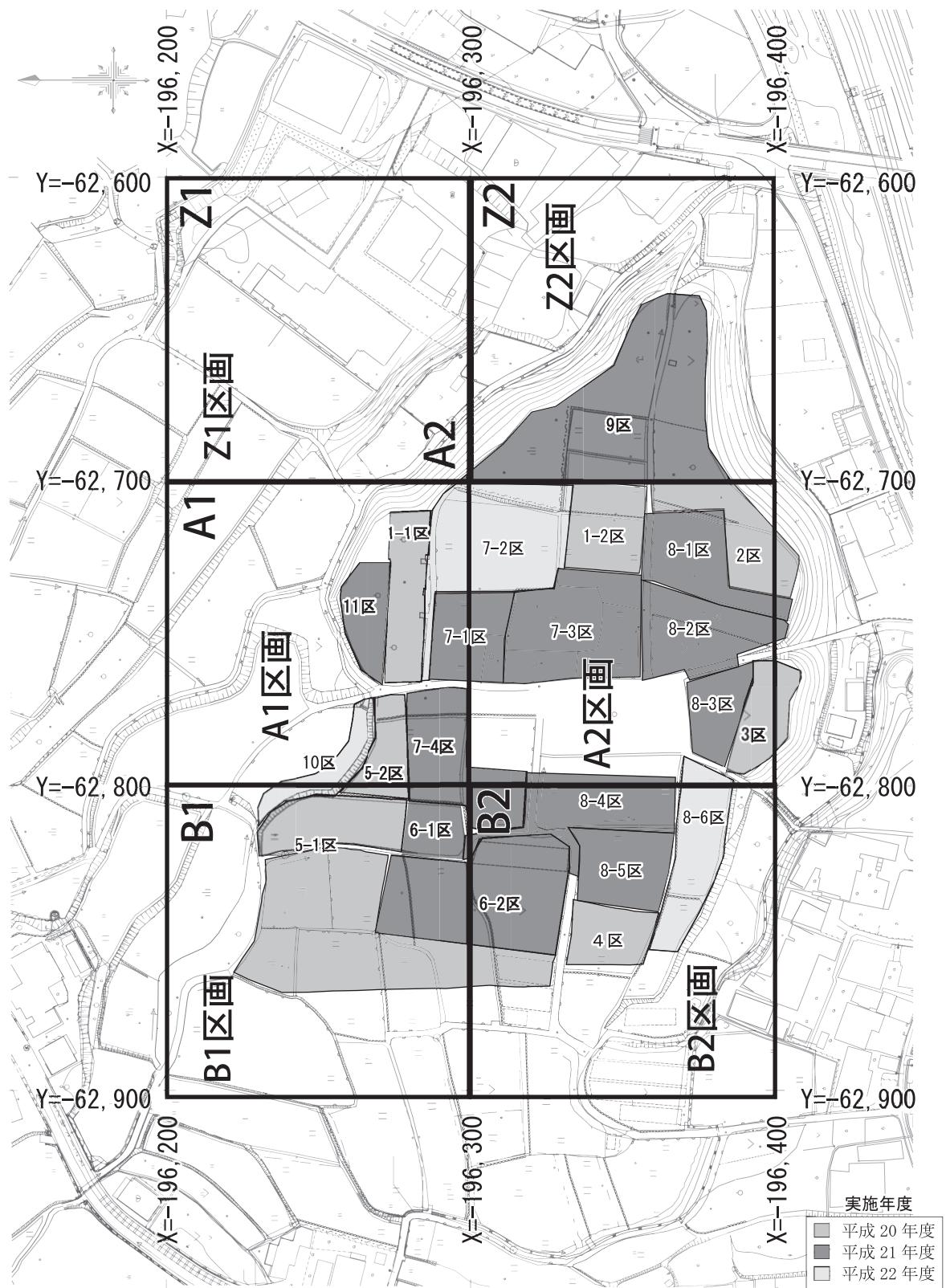
が検出されたことから、各遺構に「塔」、「金堂」といった名称が与えられ、寺院の広がりが示された。そして、瓦溜まりが南北に並ぶという結果から、消去法的に導き出された「四天王寺式」の伽藍配置を取るとの推定がなされた。成果が公表された調査としては唯一、寺域中枢部を調査しているうえ、軒丸瓦をはじめとする豊富な遺物も報告されており、後の調査・研究に大きな影響を及ぼした。

2006（平成18）年から2008（平成20）年にかけては、紀の川市教育委員会が確認調査を実施し、10ヶ所にトレンチを設置した。

その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である「北山廃寺」の範囲外で、弥生時代等の遺構・遺物が確認された。北山廃寺で古代以外の遺物が出土することは、既往の調査でも指摘されていたが、この調査によって、寺域外にまで遺構が展開していることが明確に示されることになった。古代寺院の所在地として注目されていた当地が、古代寺院をも含みこんだ複合遺跡であることが明らかになったのである。また、北山廃寺の造営作業が複数回にわたって行われていることも判明したこと、特筆すべき成果であろう（立岡2007、2010）。

2007（平成19）年には、和歌山県教育委員会文化遺産課が確認調査を実施し、8ヶ所にトレンチを設置した。その結果、紀の川市教育委員会による調査の成果を再確認するとともに、遺跡の範囲、遺構面の時期が明確にされた（和歌山県教育委員会2009）。

これらの成果を踏まえ、寺院の中枢域にあたる範囲が圃場整備対象外とされることになった。本報告書で報告する調査の範囲では、寺院の中枢といえる遺構は確認されておらず、6回に及ぶトレンチ調査およびそれにもとづく遺跡の評価が、妥当であったことを示すといえよう。



第2図 調査範囲と地区割りの方法

## 第3章 調査の方法

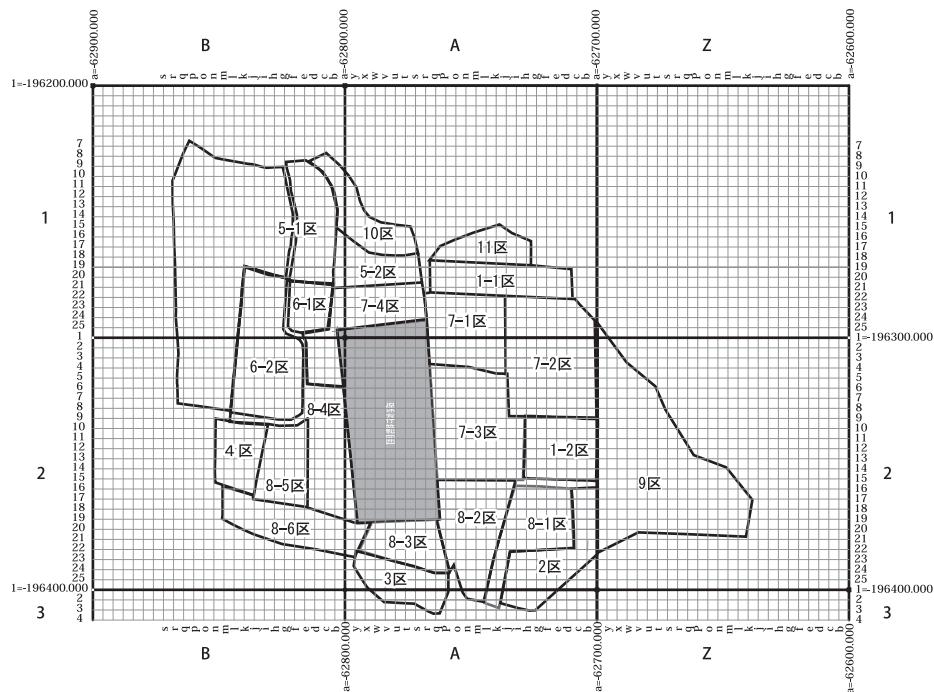
### 第1節 調査方法の基準、調査コード

北山廃寺、北山三嶋遺跡の調査は、当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006）を基準として進めた。

調査コードは、2008年度調査が08-10・27・49（2008年度 - 貴志川町・北山廃寺・北山三嶋遺跡）、2009年度調査が09-10・27・49（2009年度 - 貴志川町・北山廃寺・北山三嶋遺跡）、2010年度調査が10-10・27・49（2010年度 - 貴志川町・北山廃寺・北山三嶋遺跡）である。出土遺物、発掘調査記録等は、このコードを用いて保管している。

### 第2節 地区割り（第2図、第3図）

遺構図作成や遺物取り上げの際に用いた調査区の地区割りは、国土座標（世界測地系）の第IV系の座標軸を使用し、X = -196200.000m、Y = -62700.000mを起点としている。この基点から100m四方の区画を1単位として区画を設定し、北東端を起点として西方向へは大文字のアルファベットでA・B、東方向へはZ・Yと、南方向へアラビア数字で1・2と表記した。さらに、4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を起点として西方向へ小文字のアルファベットでa～yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した（第3図）。遺構図作成や遺物取り上げの際には、原則として小区画を用いた。方位は座標北を用い、標高は東



第3図 調査区の設定と地区割りの関係

京湾平均海面（T.P）からのプラス値を使用した。検出遺構は種類にかかわらず、調査年度をまたいで検出順に 1 から通し番号を付している。

### 第3節 調査区の設定（第2図、第3図）

2008（平成 20）年度は、当初、遺跡の周縁部を 5 地区に分割し、一括して調査した後、5 区（変更後の 5-1 区）の第 2 遺構面を調査する計画であった。しかし、事業者との契約変更、地元からの要望等により、調査区の追加・変更の必要が生じ、最終的には 7 調査区に分割して調査を実施した。分割した調査区は枝番を与えている。調査区は、1-1 区、1-2 区、2 区、3 区、4 区、5-1 区、5-2 区である。

2009（平成 21）年度は、掘削土の排土置場等を確保する必要があるため、当初、4 分割し、前半と後半とに分けて調査を実施する計画を立てていた。しかし、地元の要望を受け、一部の調査区や調査区内の里道、用水路の調査を後半に実施する必要が生じた。そのため、調査区を追加・変更し、11 調査区に分割した。調査を進める過程で、一部調査区は面積減となり、新たに調査を要する範囲が増加したことにより、2 調査区が追加となった。そのため、最終的な調査区は 13 調査区となった。なお、追加調査区は、計画当初の発掘調査予定範囲よりも東に位置しており、当初設定した A 区画、B 区画の地区割の範囲に収まらなかった。追加調査区を網羅する位置に再度、A 区画を設定し、区画名を付け替えた場合、既存の調査との混乱が生じる可能性が高かったため、A 区画よりも東には、アルファベットの最後の文字である Z を割り当てることで対応した。地区割り名称が若干イレギュラーなものになっているのは、そのためである。

分割した調査区は枝番を与え、追加された調査区には新たな番号を割り当てる。調査区は、5-1 区、6-1 区、6-2 区、7-1 区、7-3 区、7-4 区、8-1 区、8-2 区、8-3 区、8-4 区、8-5 区、9 区、11 区である。

2010（平成 22）年度は、3 調査区を設定し、予定通り調査を実施した。調査区は、7-2 区、8-6 区、10 区である。

### 第4節 掘削、記録方法（第2図、第3図）

掘削は、工事請負方式にて実施した。耕作土と近現代の床土及び整地層は重機を使用し掘削・排土を行った。遺物包含層以下は人力で掘削を行っている。なお、掘削土は、地元からの要望を受け、耕作土とそれ以外の土とに分けて仮置きし、必要に応じて埋め戻しを実施した。

検出した遺構は、その種類にかかわらず 1 から始まる番号を付した。ただし、複数の調査区にて同時進行で作業を行うために、調査区毎に 200 から 300 程度の番号をあらかじめ割り振ったことで、一部で、欠番が生じている。

調査における記録作業として、図面作成と写真撮影を実施した。図面は、航空写真測量による縮尺 1/50 の図化、調査員・調査補助員・調査作業員による縮尺 1/10 及び 1/20 の遺構実

測図作成（平面図・断面図）、縮尺 1/100 の遺構配置図作成を行った。方位は座標北を用い、標高は東京湾平均海面（T.P）からのプラス値を使用した。

写真撮影は、ヘリコプターを使用した航空写真、4×5 判、6×7 判、35mm 判のカメラを使用したカラーリバーサル及びモノクロームフィルムでの撮影、有効画素数 610 万画素以上のデジタルカメラを使用して行った。撮影した写真には、フィルムの種類ごとにナンバーを付し、撮影日時・地区・遺構・撮影方向等を記入したうえで、アルバムに収納した。

## 第5節 出土遺物等整理（第1表から第3表、写真1）

出土遺物整理は、整理補助員・整理作業員を直接雇用し、実施した。出土した遺物は、洗浄後、遺物の取り上げ単位ごとに 1 から始まる遺物登録番号を付した。さらに、番号ごとに調査



写真1 整理作業風景

年度、調査区、出土遺構、取上げ日、出土遺物の数量等を記入した台帳を作成し、遺物の内容把握を行った。本文中で記述している遺構からの遺物出土数は、この段階でのものである。注意されたい。

本整理業務では、対象遺物が遺物収納コンテナ 1,400 箱以上と多量で、しかも、過半が瓦片であることから、登録番号の付与と同時に登録以降の作業の実施対象とする遺物を抽出した。抽出した遺物は、2000 から始まる番号を付したコンテナに仮収納した。抽出した遺物は、合計 450 箱である。

抽出した遺物のうち、木製品、金属製品以外の遺物には、注記を行った。注記は、調査コードと遺物登録番号を記入した。接合は、調査区毎に遺構出土分を重点的に実施した。脆く、接合作業が困難な遺物については、バインダー No. 17 溶液を水または 40% 程度のエタノール水溶液にて 10% に希釈したものにどぶ漬けした後、表面を水にて洗浄、乾燥させ、補強を行った。

接合が終了したもののうち、報告書作成に必要な遺物については、実測および採拓作業を実施した。実測対象遺物の抽出は、一定の基準に基づき、実施した。土器類は、原則として、口径復元が可能なものを対象としたが、考古学的に重要と判断した遺物は、この限りではない。石器は、製品と未製品を対象とした。素材および剥片は、原則として図示対象としていない。瓦は、軒瓦が形態や製作技法の判明するもの全て、平・丸瓦が 3 辺以上残存しているものを対象としている。ただし、窯や一部の溝など、出土数の多い遺構の場合は、各種属性からみて特徴的と思われるものを適宜抽出している。報告書掲載遺物を用いた定量分析の際には、注意が必要である。トレースには、遺構実測図に Adobe Illustrator、遺物実測図にロットリングペンを使用して実施した。

遺構番号は、報告書作成に際し、新たに番号を振り直すとともに、新旧対応表を作成した（第 1 表から第 3 表）。なお、新しく振り直した遺構番号で管理されているのは、報告書掲載遺物のみで、未掲載遺物は、旧遺構番号のまま収納している。

報告書掲載遺物は、コンテナ番号が、3000 から始まるコンテナに、注記以降の作業を実施したが、報告書に掲載しなかった遺物は、番号が 4000 から始まるコンテナに、登録以降の作業を行っていない遺物は、1 から 1,158 番までのコンテナに収納している。2000 から始まる番号は、抽出遺物の仮収納に使用したため、欠番となっている。収納作業の結果、コンテナ数は、報告書掲載遺物 228 箱、未報告遺物 1,467 箱（注記等実施分 314 箱を含む）となった。

表1 新旧遺構対応表（その1）

地区	調査時遺構番号	報告書遺構番号	地区	調査時遺構番号	報告書遺構番号
1-1区	651	1 溝		1266	62 粘土採掘穴
	701	2 小穴		321	63 粘土採掘穴
	715	3 土坑		369	64 粘土採掘穴
	726	4 土坑		297	65 粘土採掘穴
	719	5 小穴		273	66 粘土採掘穴
	724	6 土坑		285	67 粘土採掘穴
1-2区	1024	7 溝		240	68 溝
	1027	8 小穴		257	69 土坑
	1030	9 土坑		258	70 溝
	1013	10 土坑	5-1区 第2遺構面	1437	71 粘土採掘穴
	1010	11 土坑		1438	72 粘土採掘穴
	1006	12 土坑		1429	73 粘土採掘穴
	994	13 小穴		1457	74 粘土採掘穴
	940	14 小穴		1458	75 粘土採掘穴
	941	15 小穴		1419	76 粘土採掘穴
	1276	16 小穴		1406	77 粘土採掘穴
	1280	17 小穴		1424	78 粘土採掘穴
	1281	18 小穴		1413	79 粘土採掘穴
	1110	19 土坑		1415	80 粘土採掘穴
	1279	20 小穴	5-2区	瓦溜まり	81 瓦溜まり
	1100	21 溝		586	82 土坑
	1175	22 土坑		585	83 土坑
	1237	23 土坑		574	84 土坑
	1140	24 土坑		643	85 小穴
	1189	25 土坑		638	86 小穴
	985	26 井戸		620	87 小穴
	881	27 溝		-	88 挖立柱建物
	880	28 土坑	5-1区 第2遺構面 2009年度 調査分	1500	89 粘土採掘穴
2区	808	29 橫穴建物		1501	90 粘土採掘穴
	770	30 橫穴建物		1504	91 粘土採掘穴
	840	31 橫穴建物		1502	92 粘土採掘穴
	900	32 橫穴建物		1505	93 粘土採掘穴
	1366	33 小穴		1507	94 溝
	925	34 溝		1514	95 粘土採掘穴
3区	1	35 溝		1537	96 粘土採掘穴
	2	36 溝		1542	97 粘土採掘穴
4区	42	37 土坑		1561	98 粘土採掘穴
	41	38 土坑		1556	99 粘土採掘穴
	-	39 挖立		1557	100 粘土採掘穴
5-1区	613	40 土坑	6-1区	3539	101 粘土採掘穴
	614	41 土坑		3518	102 粘土採掘穴
	198=400	42 土坑		3554=3569	103 粘土採掘穴
	土器集中部	43 土器集中部		3552	104 粘土採掘穴
	357	44 土坑		3556	105 小穴
	355	45 土坑		3509	106 粘土採掘穴
	611	46 溝	6-1区 第2遺構面	3575	107 小穴
	404	47 土坑		2128	108 粘土採掘穴
	309	48 土坑		2131	109 粘土採掘穴
	308	49 土坑		2145	110 粘土採掘穴
	409	50 土坑		2119	111 粘土採掘穴
	142	51 土坑		2078	112 粘土採掘穴
	188	52 土坑		2076	113 粘土採掘穴
	154	53 土坑		2075	114 粘土採掘穴
	402	54 土坑		2031	115 粘土採掘穴
	420	55 粘土採掘穴		2053	116 粘土採掘穴
	1267	56 粘土採掘穴		2168	117 粘土採掘穴
	874	57 粘土採掘穴		2025	118 土坑
	557	58 粘土採掘穴		2024	119 溝
	500	59 粘土採掘穴		2020	120 溝
	472	60 粘土採掘穴			
	477	61 粘土採掘穴			

表2 新旧遺構対応表（その2）

地区	調査時遺構番号	報告書遺構番号	地区	調査時遺構番号	報告書遺構番号
6-2区	2026	121 土坑		1797	182 土坑
	2185= 2186	122 小穴		1777	183 土坑
	2028	123 小穴		-	184 掘立柱建物
	2027	124 小穴		1746	185 小穴
	2215	125 小穴		1735	186 小穴
	2016	126 土坑		1732	187 小穴
	2001	127 溝		1750	188 小穴
	2018	128 土坑		1739	189 土坑
	2006	129 小穴		1787	190 小穴
	2004	130 小穴		1829	191 小穴
	2002	131 溝		3934	192 溝
	2266	132 粘土採掘穴		3949	193 土坑
6-2区 第2遺構面	2265	133 粘土採掘穴		3924	194 小穴
	2255	134 粘土採掘穴		3935=3922	195 土坑
	2267	135 粘土採掘穴		-	196 掘立柱建物
	2233	136 土坑		3930	197 土坑
	2232	137 土坑		3927	198 土坑
	2245=2231	138 土坑		1601	199 瓦溜り
	2506	139 溝		1603	200 土坑
7-3区	2589	140 土器出土地点		1604	201 土坑
	2590	141 土器出土地点		3835	202 溝
	2591	142 土器出土地点		3882	203 土坑
	2543	143 土坑		3883	204 土坑
	2609	144 小穴		3823	205 土坑
	2528	145 土坑		3822	206 溝
	2514	146 土坑		3801	207 溝
	2522	147 土坑		盛土	208 盛土
	2501	148 土坑		3858	209 土坑
	2502	149 土坑		3855	210 土坑
	3210	150 土坑		3857	211 土坑
	-	151 掘立柱建物		3869	212 土坑
7-4区 第1遺構面	3218	152 土坑		3812	213 土坑
	3036	153 小穴		3807	214 土坑
	-	154 掘立柱建物		3879	215 小穴
	3154	155 小穴		1904	216 小穴
	3207	156 小穴		1903	217 土坑
	3196	157 土坑		1901	218 溝
	3219	158 小穴		4141	219 落込み
	3049	159 小穴		4149	220 溝
	3181=3229	160 土坑		4140	221 土坑
	-	161 掘立柱建物		4142	222 土坑
	3118	162 小穴		4127	223 溝
	3192	163 土坑		4130	224 土坑
	3017	164 溝		4128	225 溝
	3213	165 小穴		4150	226 溝
	3015	166 溝		-	227 掘立柱建物
	3004	167 溝		4280	228 落込み
	3014	168 溝		4282	229 溝
	3002	169 溝		4281	230 土坑
7-4区 第2遺構面	3003	170 土坑		4285	231 溝
	3244	171 溝		4283	232 小穴
8-1区	-	172 柱列		4284	233 小穴
	808	173 小穴		4277	234 土坑
	1836	174 小穴		4254	235 小穴
	1726	175 土坑		4236	236 土坑
	1774	176 小穴		4243	237 小穴
	-	177 掘立柱建物		4401	238 石垣
	1837	178 小穴		4424	239 土坑
	1779	179 土坑		4412	240 土坑
	1795	180 溝		4410	241 土坑
	1753	181 小穴			

表3 新旧遺構対応表（その3）

地区	調査時遺構番号	報告書遺構番号
8-6区	4428	242 溝
	4405	243 溝
	4409	244 土坑
	4407	245 溝
	4414	246 土坑
	4476	247 小穴
	4425	248 土坑
	4450	249 小穴
	4402	250 土坑
	4301	251 落込み
10区	4309	252 落込み
	4308	253 窯
	4310	254 窯
	4312	255 落込み
	4505	256 落込み
	4503	257 粘土採掘坑
	4504	258 窯
	4513	259 窯
	4502	260 落込み
	4501	261 落込み
	4515	窯
	4521	窯(煙道)
	4525	窯(煙道)
	4524	窯(煙道)
	4522	窯(煙道)

## 第4章 基本層序の概要(第4図、写真2)

### 基本層序の設定

本調査は、調査区が東西・南北300mの範囲に広がっているものの、基本層序には、ほとんど差がない。ただし、各層位を形成する土壤には違いがあり、おおよそ、地区割りのA-1nラインを境に、各層位とも、同じシルト質でも、東では砂・礫混じりに、西では粘土混じりになる傾向にある。地区割りのA2区画は、全ての調査区で、土に礫が混じる傾向が強い。

ここでは、各調査区における基本層序の関係について整理しておきたい。

**第1層**：現代の耕作土である。すべての調査区で確認されている。

**第2層**：現代の水田床土である。床土の形成状況は地筆によって差が大きく、果樹園として利用された地筆では、薄くなる傾向がある。

**第3層**：遺物包含層である。多量の古代瓦片、古代の須恵器片と少量の瓦器片、青磁片等を含む。第2層と同じく、層厚は地筆によって差が大きく、同一地筆内でも、南東側で厚く、北西側では薄くなる傾向にある。色調は、A区画の西半、B区画ではやや灰色がかかった色調で、シルト質なのに対し、A区画の東半とZ区画では暗赤褐色を帯び、砂が混じる傾向にある。厚く堆積している地点では、色調の差から細分が可能だが、堆積の時期差等を把握することはできなかった。

**第4層**：包含層下に堆積する。すべての調査区において、この層の上面を第1遺構面として掘削を進めた。

**第5層**：4、5-1、5-2、6-1、6-2、7-4、8-4、8-5区で確認した、灰色系の粘土、または砂質土からなる。5-1、6-1、6-2区では、この層の上面を第2遺構面検出面とした。

### 遺構面の様相

第4層とした土は、1-1、1-2、2、3、7-1、7-2、7-3、8-1、8-2、8-3、9、11区では、段丘礫を含んだ黄褐色、あるいは赤褐色系の砂質又は砂混じりシルトで、極めてよく締まっている。地山と推定される。1-2区の一部や8-3区の一部では、この層の上面に第3層に類似するが、やや色調が明るく、礫の少ない層が広がっており、この層の上面と第4層の上面の2面から遺構が掘りこまれていることが確認されている。

いっぽう、4、5-1、5-2、6-1、6-2、7-4、8-4、8-5、8-6区では、礫をほとんど含まない黄褐色系のシルト質土である。5-1、6-1、6-2区では、複数の色調の土がブロック状に堆積している部分も存在しており、人為的な地形改変によって形成された可能性もなくはない。4、



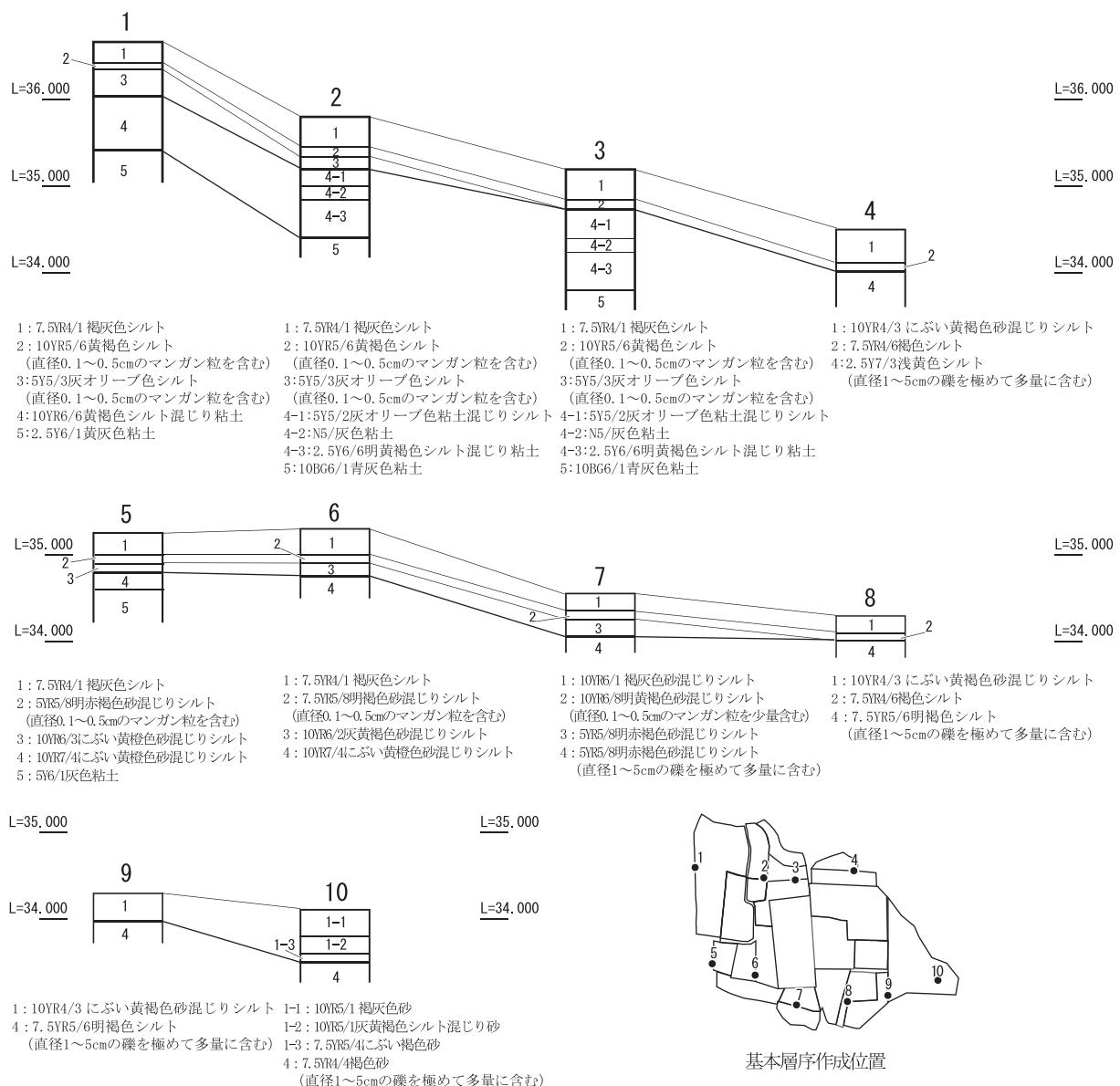
写真2 地山の土色の変化(7-4区西端)

5-2、7-4 区では、側溝や下層認トレンチを掘削によって第 5 層上の遺構の確認を試みたが、遺構は存在しなかった。

4 層上面で検出した遺構からは、古代瓦片、古代の須恵器片に混じって土師質の土鍋や瓦器片など、中世期の遺物が出土していることから、古代～中世の遺構面と考えられる。

いっぽう、5-1、6-1、6-2 区の第 4 層からは、小片かつ少量だが、古代瓦、須恵器が出土しており、少なくとも一部地区では、第 4 層が古代から中世にかけて形成されたことを示している。

なお、第 2 遺構面は、いわゆる粘土採掘坑の埋め戻し土の検討結果から、第 4 層がある程度堆積した段階で形成されたとみられる。しかし、現地調査の段階では、遺構面の存在が確認できず、第 5 層を検出面として調査を実施した。



第 4 図 基本層序模式図

## 第5章 2008(平成20)年度調査の成果

### 第1節 1-1区 (第5図から第7図、写真図版2、写真図版44)

#### 調査区の概要

1-1区は、A1区画に位置する、東西に長い長方形の調査区である。調査区の東よりの地点には、和歌山県教育委員会が実施した試掘トレンチが南北にはしる。

調査区東側は、削平が著しく、遺構の残りが良くない。調査区中央付近には、柱穴の可能性がある小穴が散在しているが、建物として認識できるまどまりは見いだせなかった。

#### 土坑

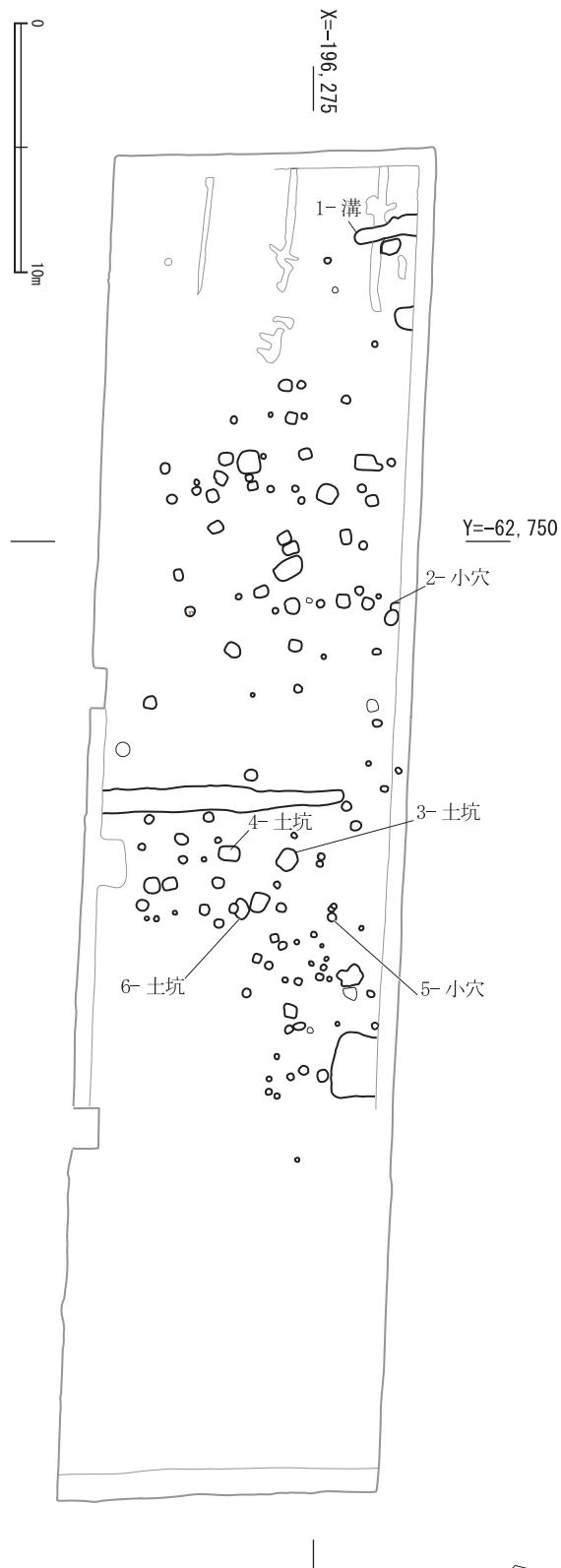
3- 土坑 (第6図、写真図版2) 長径約0.9m、深さ0.2m弱の平面橢円形の土坑である。土師器片6点が出土しているが、小片のため図示できなかった。

4- 土坑 (第6図、写真図版2) 長径約0.9m、深さ0.2mの平面橢円形の土坑である。検出面および中層までは焼土粒を含んだ土が堆積しているが、土坑の側壁は、被熱していない。また、底面付近の土にも、焼土が含まれていない。平瓦1点が出土しているが、小片のため図示できなかった。

6- 土坑 (第6図、第7図) 長径約0.9mの平面橢円形の土坑である。小穴に切られている。瓦1点、須恵器2点、土師器12点、黒色土器1点が出土した。このうち、4の土師器の把手1点を図示した。

#### 溝

1- 溝 (第6図、第7図、写真図版2) 調査区の西端に位置する。北を向いた幅約0.6mの溝である。11区で検出した231-溝と同一遺構である。平瓦25点、丸瓦3点、須恵器4点、土師器4点が出土した。このうち、

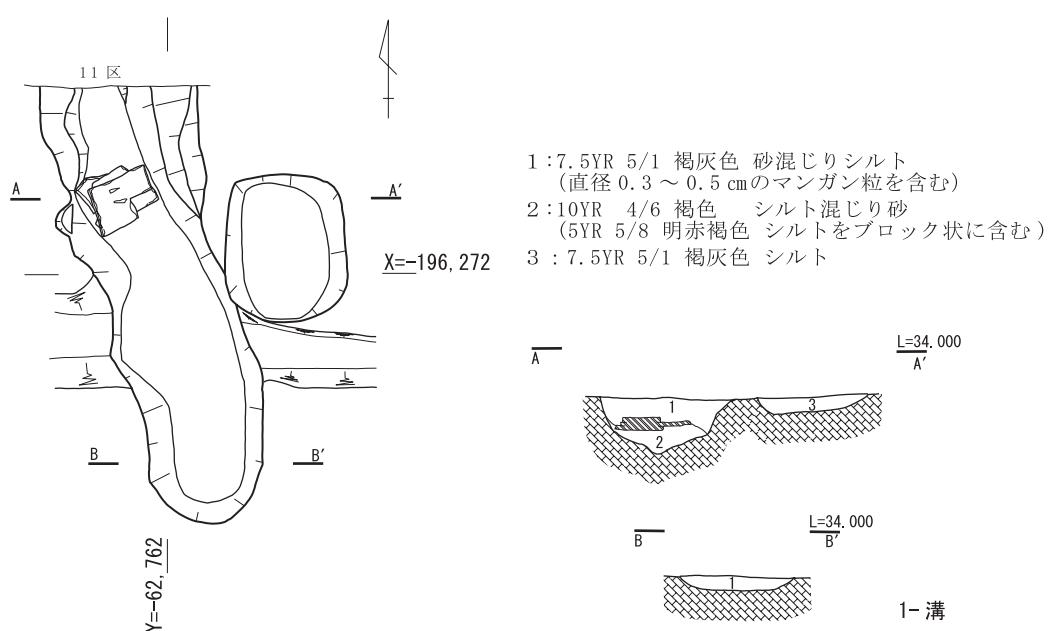
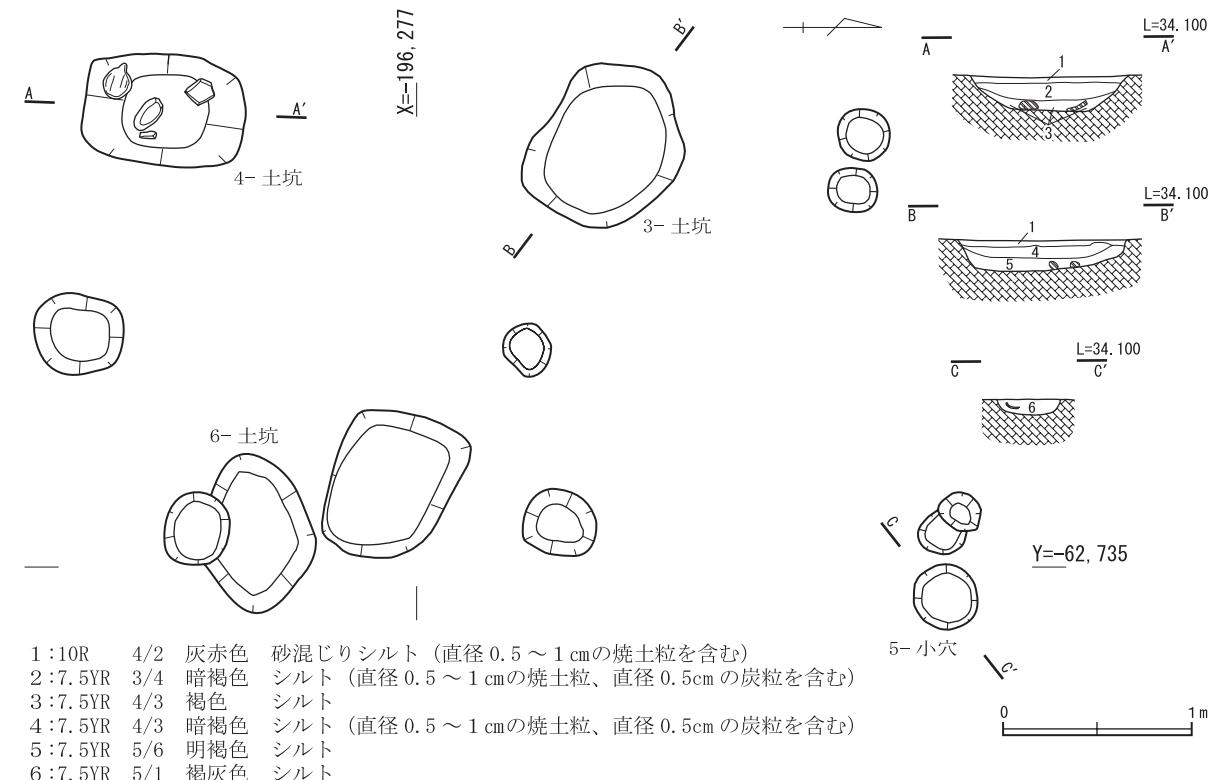


第5図 1-1区 遺構全体図

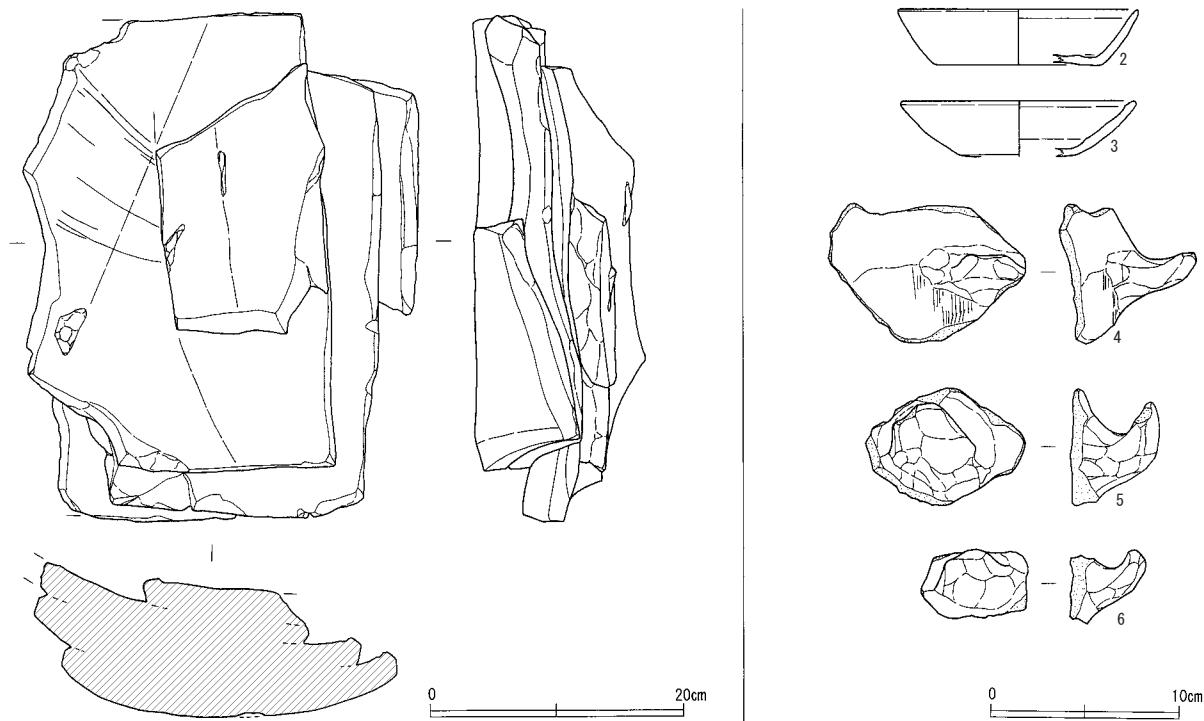
1の平瓦1点を図示した。凹面布目、凸面に縄目タタキで、一枚作りの平瓦が少なくとも4枚融着し、一体となっている。

### 小穴

**2- 小穴 (第7図)** 調査区北端に位置する小穴である。平瓦4点、須恵器4点、土師器24点と小穴としてはまとまった数量が出土している。2の土師器の碗1点を図示した。



第6図 1-1区 土坑、溝、小穴



第7図 1-1区 出土遺物

5- 小穴 (第6図、第7図) 3- 土坑、6- 土坑の北側に位置する深さ約 0.1 m の小穴である。

3 の土師器坏が 10 点以上に碎片化した状態で出土した。

#### 包含層 (第7図)

包含層出土遺物のうち、2 点を図示した。いずれも把手だが、5 は土師器、6 は須恵器である。

### 第2節 1-2区 (第8図から第21図、写真図版3、写真図版4、写真図版44)

#### 調査区の概要

1-2 区は、A 1 区画に位置する。東西約 30 m、南北約 25 m の調査区である。調査前の現況は、水田である。調査区内には、西側のやや北寄りに、紀の川市教育委員会の、南端に貴志川町教育委員会の試掘トレンチがそれぞれ 1 本ずつ設定されている。

調査前、一段下がった別の地筆であった調査区南東部は、削平が著しく、遺構の残りが良くなかった。しかし、それ以外では、中小の土坑や溝、小穴が比較的高い密度で検出された。柱痕の確認できる小穴も少なくなく、掘立柱建物の存在を念頭に置いて検出・掘削を行ったが、建物として認定可能な柱の並びは、確認できなかった。

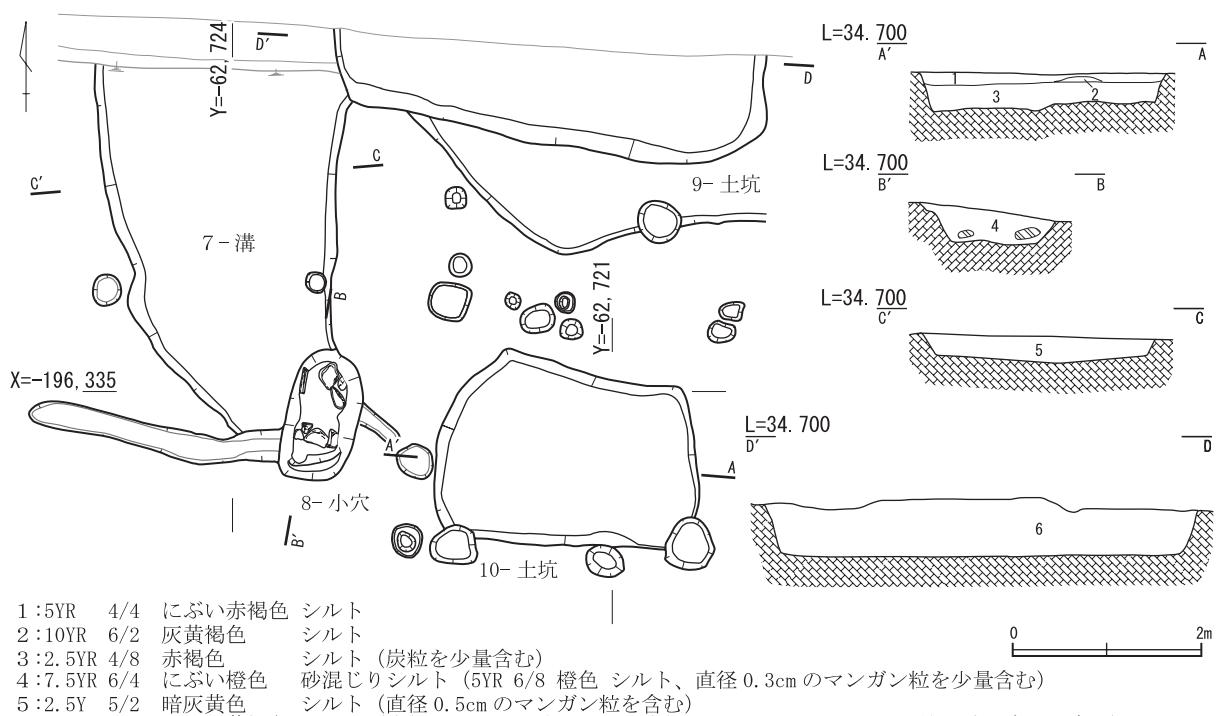
#### 土坑

9- 土坑 (第9図、第14図、写真図版44) 調査区北端で確認された方形の土坑である。

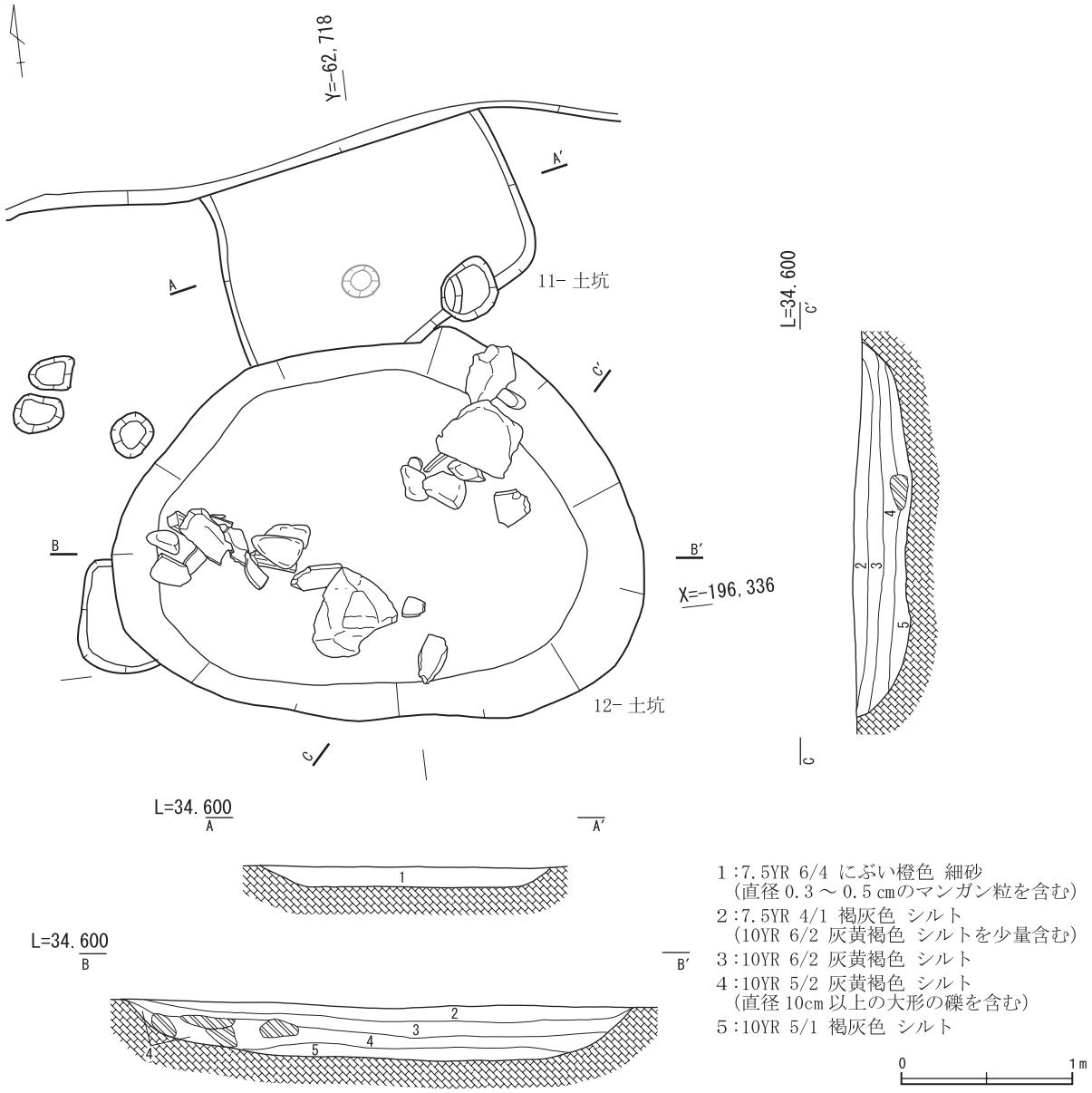
7-2 区で検出した 248- 土坑と同一の遺構である。遺構内には、スサ混じりの焼土塊を多量に含む覆土が厚く堆積しているが、土坑の壁面に被熱痕は、観察されなかった。覆土の来歴やその性格は明らかでない。



第8図 1-2区 遺構全体図



第9図 1-2区 9、10- 土坑、7- 溝、8- 小穴

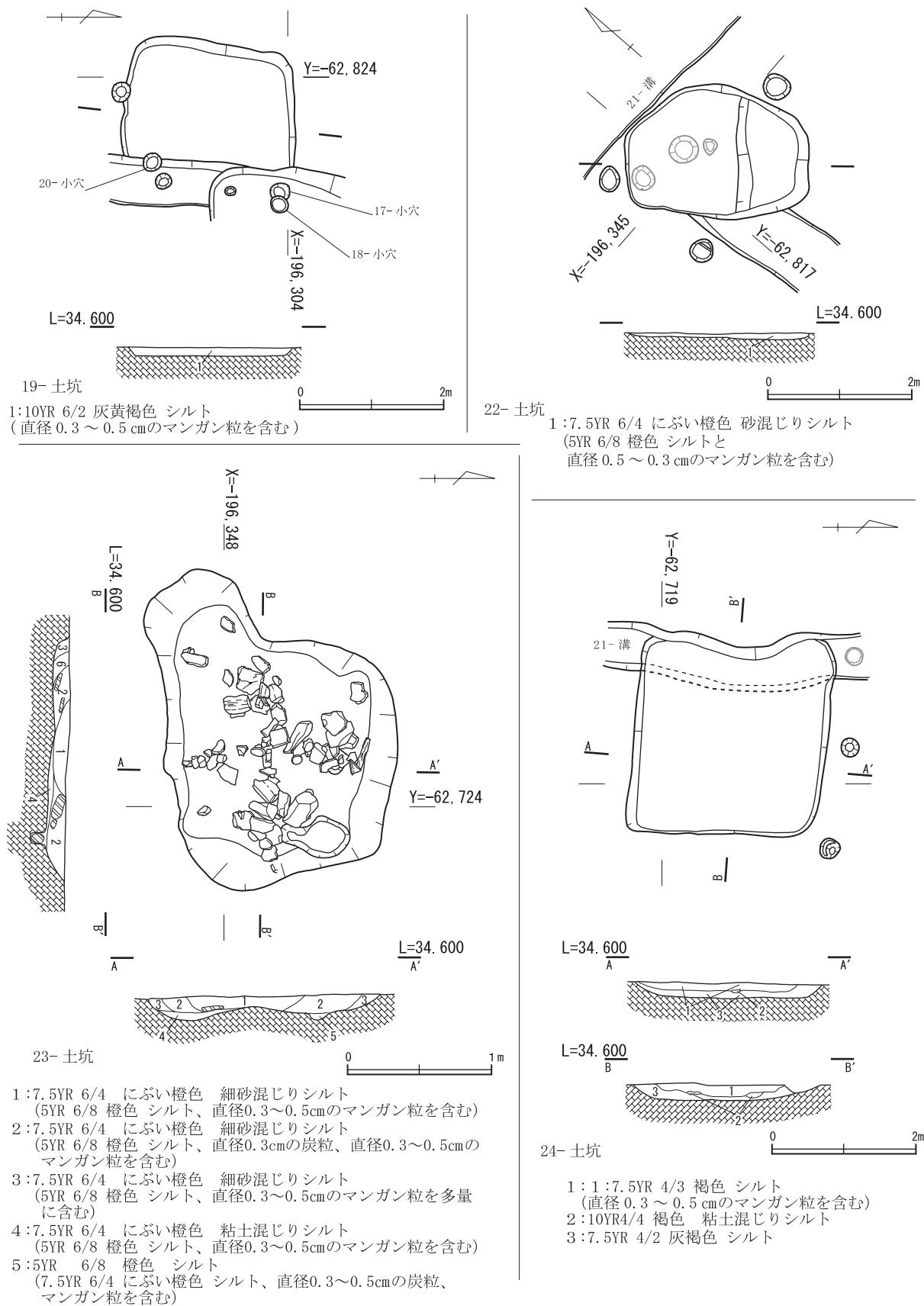


第10図 1-2区 11、12-土坑

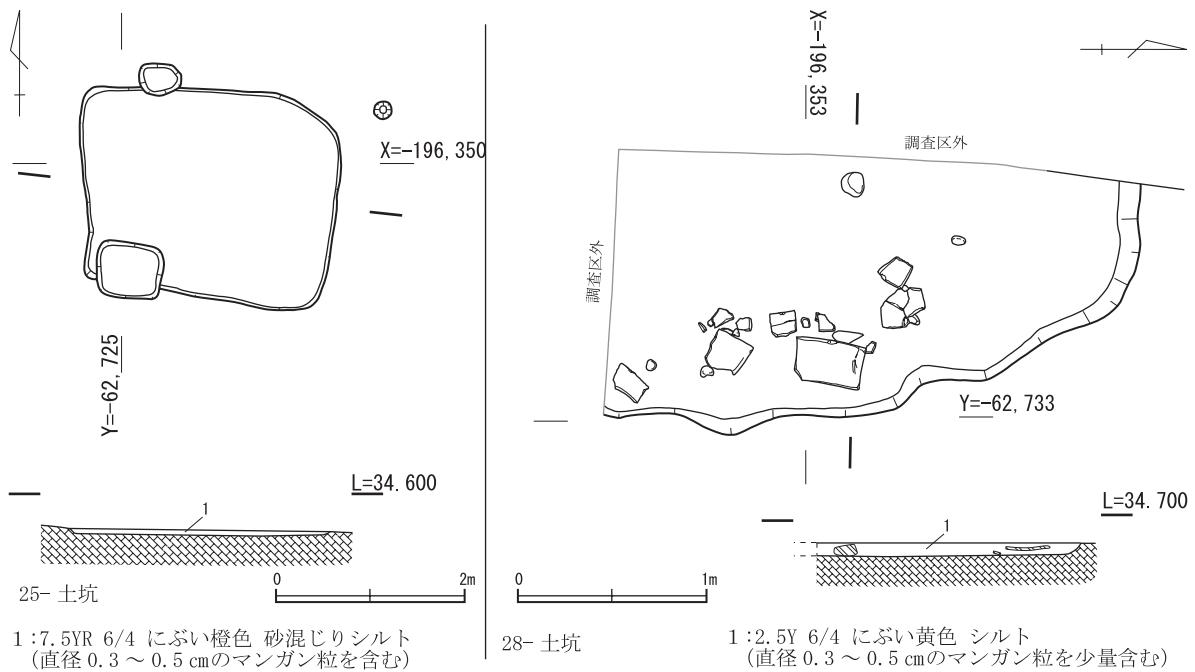
平瓦6点、丸瓦2点、須恵器2点、土師器13点、瓦器1点が出土した。このうち、2点を図示した。17は瓦器碗である。器壁はやや厚手で、底部には、ハの字形に開いた高めの貼付け高台を持つ。胴部は強い丸みを帯びつつ立ち上がる。口縁部は強くナデて胴部よりも薄く仕上げ、外反させる。器表は、剥離が激しいが、内外面とも横方向のヘラミガキを施している。炭素の吸着は良好で、均一だが、焼成はやや甘く、軟質である。18は土師器の小皿である。歪みが激しい。

**10- 土坑（第9図、第14図）** 9- 土坑の南側で確認された方形の土坑である。複数の小穴に切られている。

平瓦5点、丸瓦1点、土師器9点、瓦器1点が出土した。このうち、1点を図示した。16は、土師器の皿である。内外面ともナデで仕上げている。



第 11 図 1-2 区 19、22、23、24- 土坑



第12図 1-2区 25、28-土坑

11- 土坑（第10図、第14図） 12- 土坑や土坑の北側に位置する溝状の遺構に切られた隅丸方形の深い土坑である。

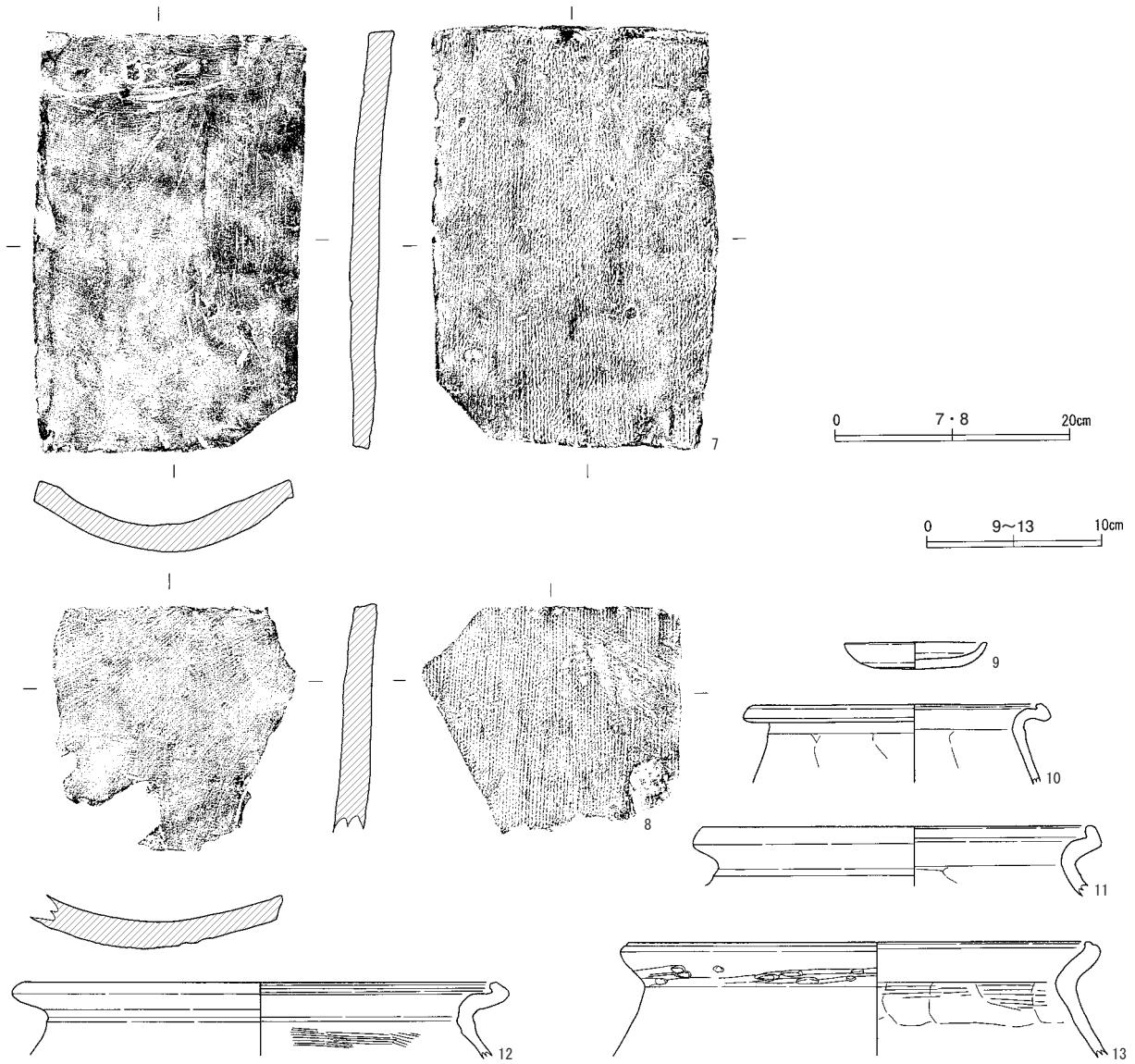
平瓦2点、須恵器1点、瓦器2点、土錘1点が出土した。このうち、14の土師質の土錘1点を図示した。

12- 土坑（第10図、第13図） 長径約3m、短径2.2m、深さ約0.3mの平面橢円形の土坑である。11- 土坑を切っている。遺物は、主として覆土中層以下、主として断面土層図の4から、大形の礫とともに出土している。

平瓦9点、須恵器3点、土師器27点、瓦器2点が出土した。5点図示した。8は一枚造りの平瓦である。凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。焼成はやや甘く軟質で、色調は灰白色である。9は土師器小皿である。口縁部内側には、2次焼成痕がみられる。10から13は土師器の鍋である。いずれも大きく屈曲した口縁部を有するが、細部の形態には差がある。また、胴部の調整も個体差が強い。10は、胴部は、内外面ともにヘラナデで仕上げている。11は外面をナデ、内面をヘラケズリ調整している。12は外面ナデ、内面は強いハケである。13は、口縁部外面に強いミガキを施し、胴部はナデ。胴部内面はヘラケズリの後、粗くハケを施す。

19- 土坑（第11図、第14図） 一辺約2.5mの隅丸方形の深い土坑である。20- 小穴等に切られている。

平瓦24点、須恵器1点、土師器54点、瓦器1点が出土した。このうち、1点を図示した。15は瓦質焼成で、形状から甕か壺の底部とみられる。外面ヘラ削り、内面は粗いナデで仕上げ、底部は未調整である。



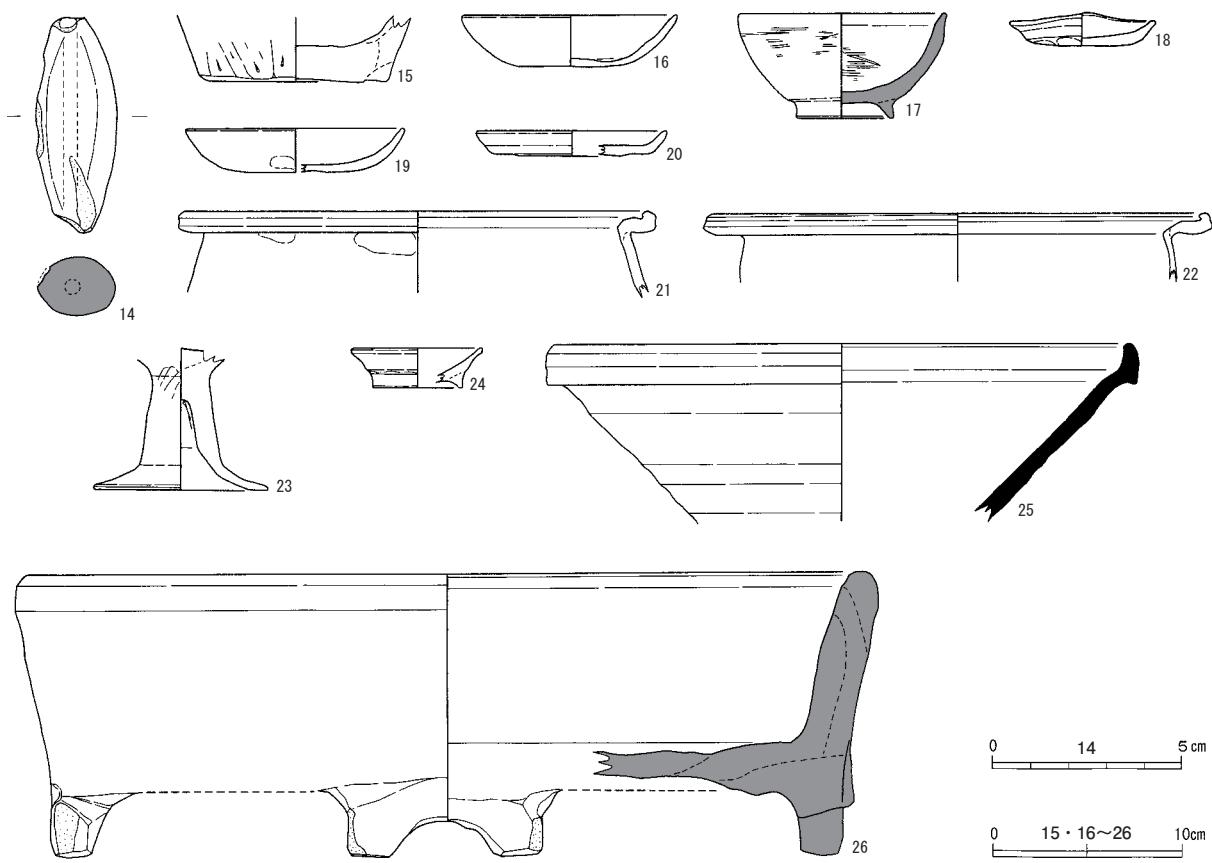
第13図 1-2区 28、12-土坑 出土遺物

**22- 土坑（第11図、第14図、写真図版44）** 21- 溝の南に接する。直径約2.4mの不整円形のごく浅い土坑である。

平瓦1点、丸瓦1点、須恵器2点、土師器20点が出土した。1点図示した。23は土師器高環脚部で、表面に赤色顔料を塗布した痕跡がある。

**23- 土坑（第11図、第14図、写真図版4）** 調査区南東部に位置する。直径約1.6mの不整円形の土坑である。

平瓦13点、丸瓦2点、須恵器4点、土師器13点、瓦器3点が出土した。3点図示した。24は土師器の小皿である。ハの字に開き、口径に比して大形で高い貼付け高台を持つ。25は須恵質の捏鉢である。26は瓦質の火鉢である。残りが良くないが、3足ないしは4足になる。厚手で、断面には粘土の接合痕が明瞭に残る。外面はヘラナデ、内面はナデで仕上げる。脚表面はヘラケズリで整形したままで、調整しない。



第14図 1-2区 9、10、11、19、22、23、24、25- 土坑、21- 溝 出土遺物

**24- 土坑（第11図、第14図、写真図版4）** 21- 溝に北端を切られる。一辺約2.6mの隅丸方形の浅い土坑である。

平瓦3点、土師器12点、瓦器1点が出土した。1点図示した。19は、土師器の皿である。  
10- 土坑から出土した16と器形、調整ともよく似る。

**25- 土坑（第12図、第14図）** 調査区南西部、27- 溝の北側に位置する。一辺約2.5mの隅丸方形のごく浅い土坑である。複数の小穴に切られている。

平瓦3点、丸瓦1点、土師器1点、瓦器1点が出土した。1点図示した。20は瓦器の皿である。底面は調整を施さず、口縁部および内面全体はナデで仕上げる。

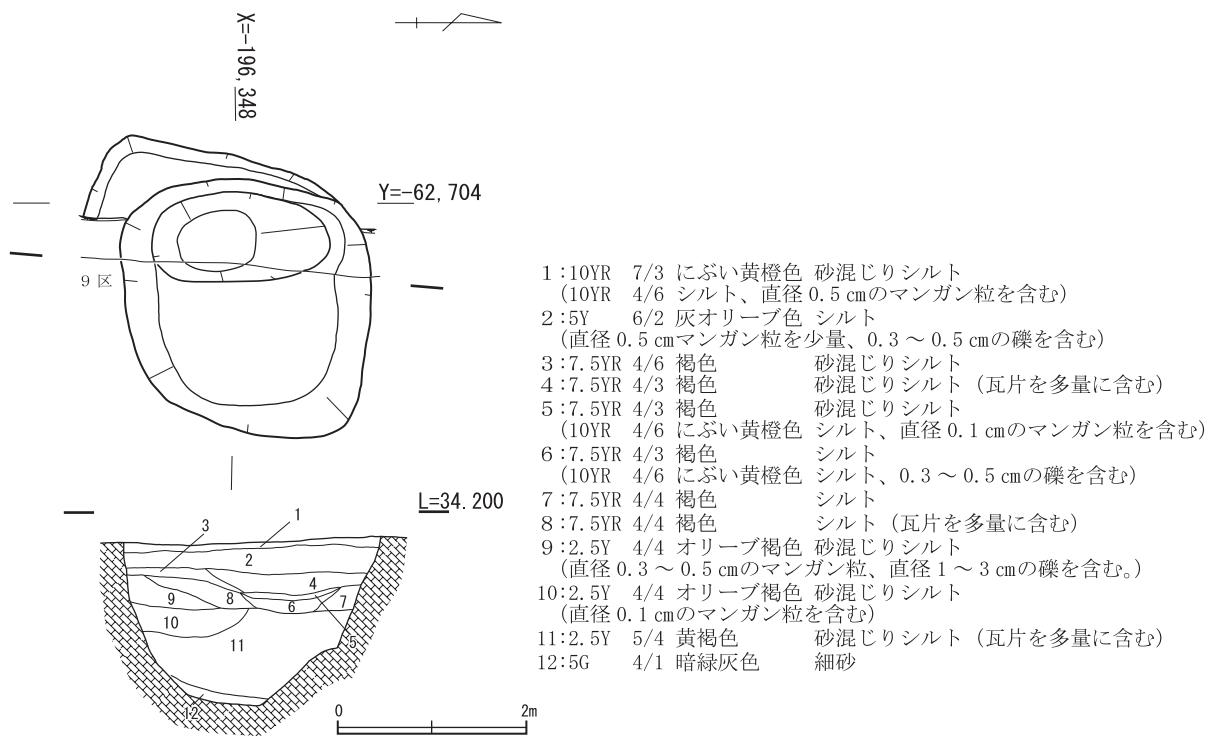
**28- 土坑（第12図、第13図、写真図版4）** 調査区南西端に位置する不整形の土坑である。遺構は、調査区外に伸びている。

平瓦27点、丸瓦1点が出土した。1点図示した。7は、ほぼ完形の平瓦である。一枚造りで凹面は、布目痕を一部ヘラケズリで消し、両側縁には面取りを施している。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。

## 井戸

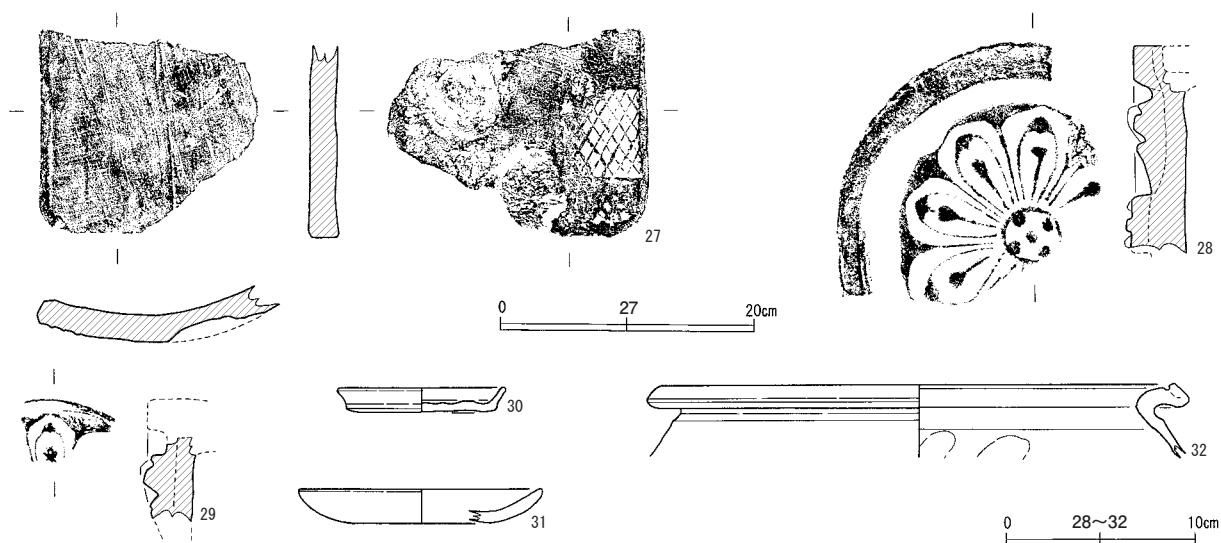
**26- 井戸（第15図、第16図、写真図版4）** 調査区東端に位置する。9区で検出した222- 井戸と同一遺構である。直径約2.8mの平面円形で、深さは約1.8mである。底面からは、掘削中も水が湧き出していた。底面から約1mまで土層番号10、11で一気に埋め戻されたのち、土層番号1から9によって埋没している。

瓦類 100kg 以上、土師器 14 点が出土した。瓦類は、出土量こそ多いものの、いずれも碎片で、残りの良いものはなかった。出土遺物のうち、6 点を図示した。平瓦は、調整が特徴的と判断した 27 のみ、図示した。27 は桶巻造の平瓦で、凸面はナデののち格子タタキ、凹面は布目痕をヘラで一部ナデ消している。角を丸く切り落とし、凹面、凸面とも側縁および端面を丁寧に面取りしている。28・29 は軒丸瓦である。いずれも、粘土塊の継ぎ目を観察することができる。30 は土師器の小皿である。器面全体に丁寧なナデを施している。外面には、

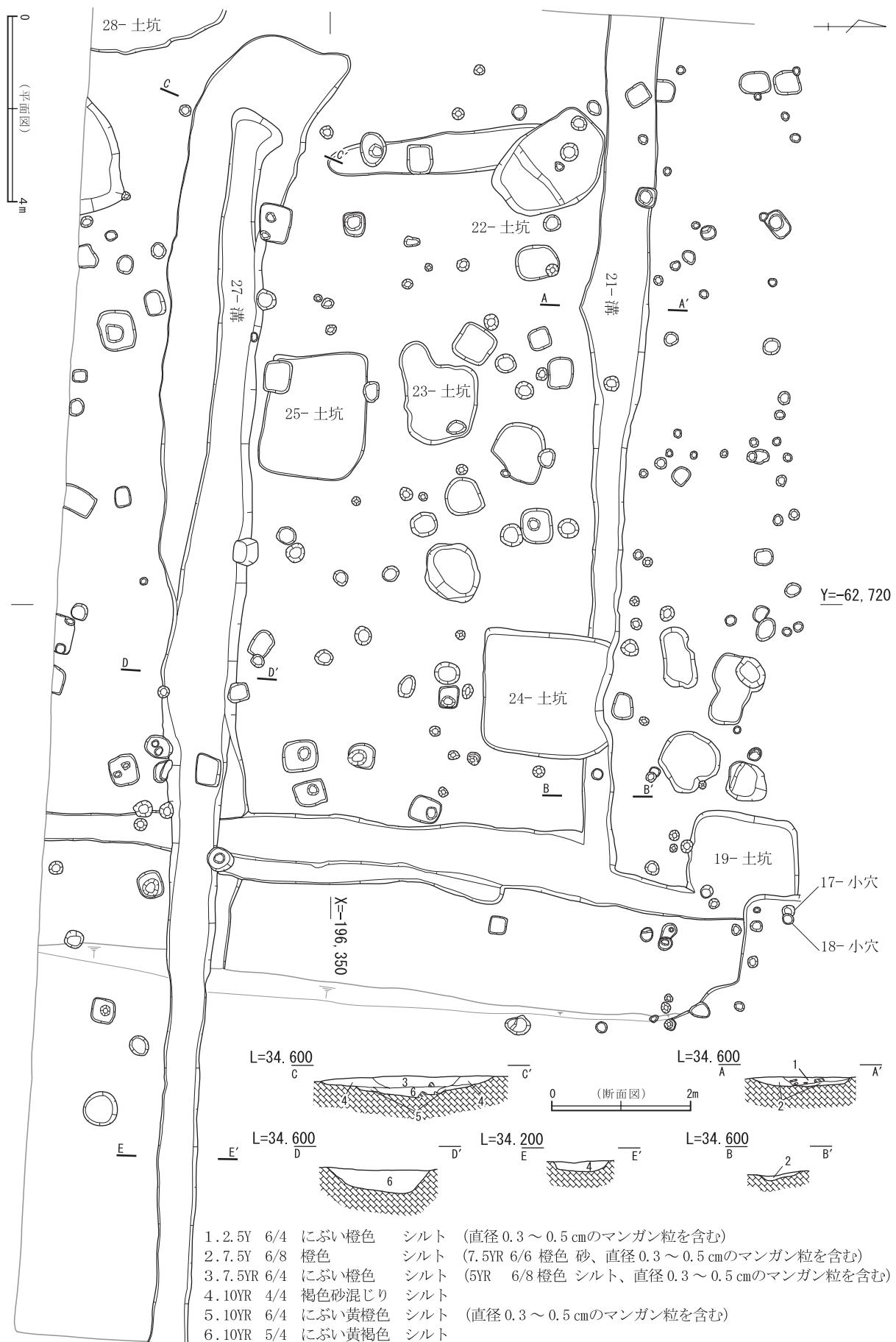


26- 井戸

第 15 図 1-2 区 26- 井戸



第 16 図 1-2 区 26- 井戸 出土遺物



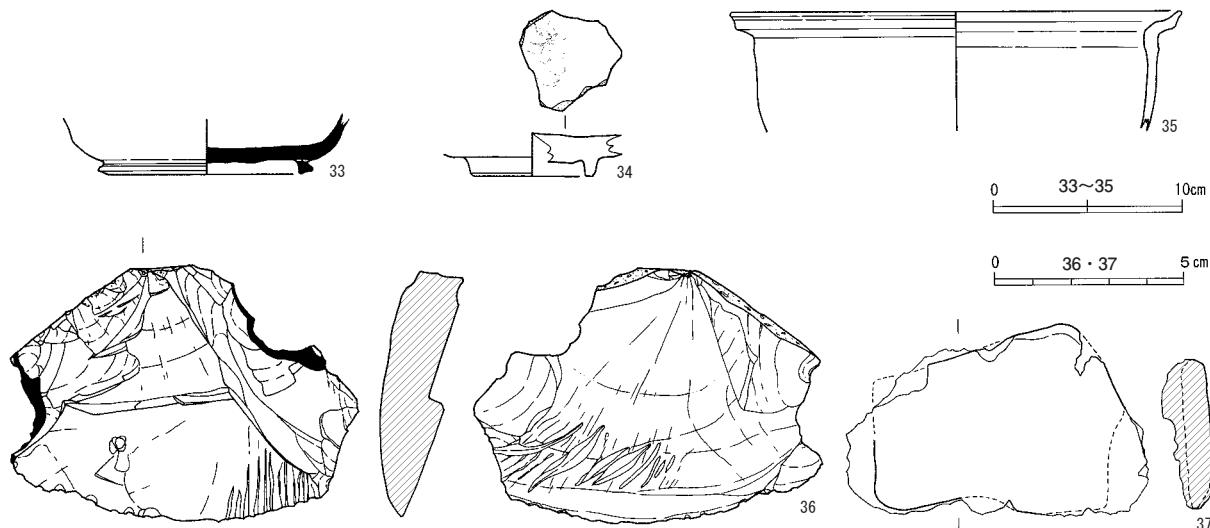
第 17 図 1-2 区 21、27- 溝とその周辺

黒斑が存在する。31は土師器の皿である。32は土師器の鍋である。口縁部は大きく屈曲し、端部は斜め上へつまみ出す。胴部内面はユビ押さえ、外面はナデで仕上げている。

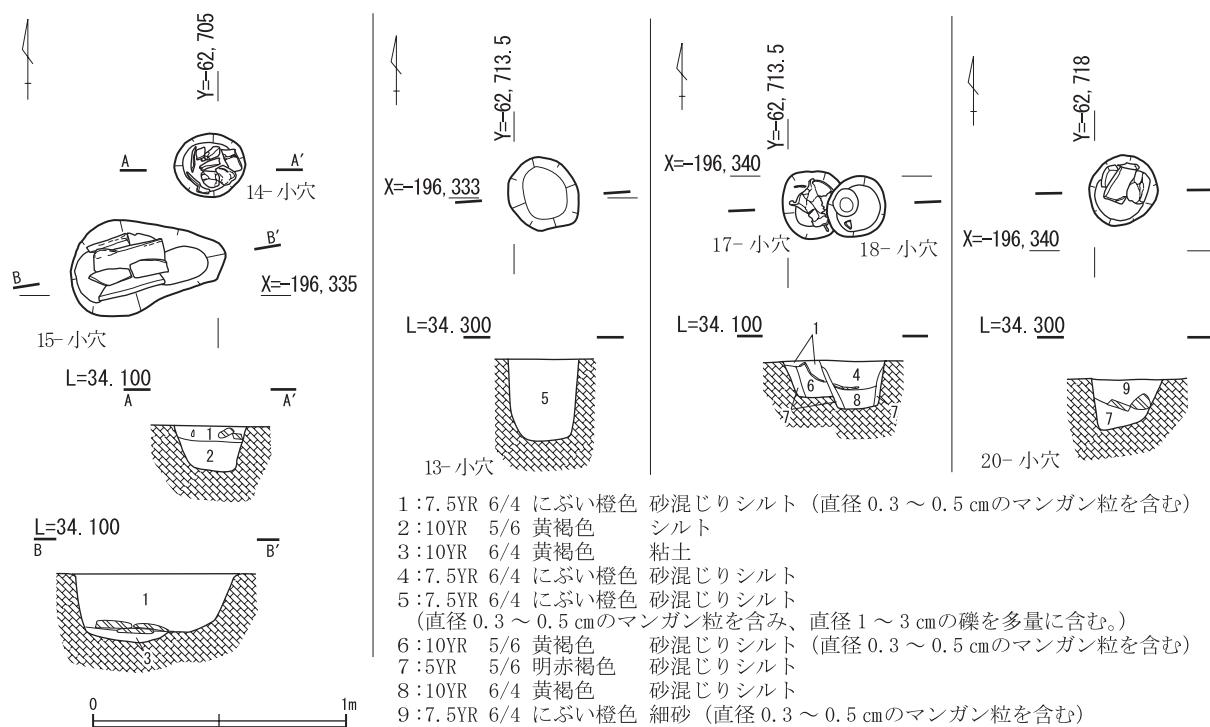
## 溝

7-溝（第9図、第14図） 調査区北端に位置し、9-土坑に切られる。遺構は、7-2区に伸びている。

平瓦46点、丸瓦3点、須恵器12点、土師器22点が出土した。土師器の鍋1点、35を図示した。内外面とも2次焼成による器壁の剥落が著しく、調整は明らかでない。外面には、ススが付着している。



第18図 1-2区 7、27-溝とその周辺



第19図 1-2区 13、14、15、17、18、20- 小穴

**21- 溝（第 14 図、第 17 図）** 調査区中央を東西にはしる浅い溝である。

平瓦 100 点以上、丸瓦 22 点、須恵器 3 点、土師器 75 点、瓦器 1 点が出土した。このうち、21、22 の 2 点を図示した。いずれも、大きく屈曲し、端部を上へつまみ上げる口縁部を持つた土師器の鍋である。

**27- 溝（第 17 図、第 18 図）** 調査区南側を東西にはしる浅い溝である。東端付近の断面土層をみる限り、埋没した溝を再度掘削している可能性が考えられる。

平瓦・丸瓦 100 点以上、須恵器 5 点、土師器 21 点、瓦器 2 点、青磁 2 点、石器 1 点、鉄器 2 点が出土した。このうち、4 点を図示した。瓦類は多量に出土したもの、いずれも碎片で破断面の磨滅も著しいなど依存状態が良くないため、図示していない。34 は青磁で、ほぼ垂直に立つ削り出し高台を持つ。見込みには文様があるが、意匠は明らかでない。36 はサヌカイト製の石器である。背部には自然面を残す。整形、調整剥離はほとんど施されておらず、背面には主剥離面が残されたままである。刃部には、使用痕とみられる剥離が観察される。37 は平たい五角形の鉄器で、明確な刃部を持たない。火打金の一種であろうか。

## 小穴

**8- 小穴（第 9 図）** 7- 溝を切る小穴である。石が壁面に沿って根固め状にめぐっているが、柱痕等は検出できなかった。遺物は出土していない。

**13- 小穴（第 19 図、第 20 図）** 調査区北端に位置する小穴である。平瓦 1 点、土師器 1 点、瓦器 1 点が出土した。このうち、1 点図示した。42 は、瓦器の碗である。口縁部にのみ、炭素が良好に吸着している。

**14- 小穴（第 19 図、第 20 図、写真図版 44）** 調査区北東端に位置する。内部から、1 個体の土師器が細かく潰れた状態で出土した。

土師器 91 点、石器 1 点が出土している。このうち、2 点を図示した。38 は結晶片岩製の砥石である。石の目は細やかで、やや軟質である。破損していなかった 2 面は、ともに使用痕が残る。39 は土師器の鍋である。器壁の剥離が著しく、調整は不明である。外面はススの付着が著しい。

**15- 小穴（第 19 図、第 20 図、写真図版 44）** 14- 小穴に近接する。橢円形の小穴である。須恵器 1 点、土師器 2 点が出土した。40 の土師器の小皿 1 点を図示した。

**16- 小穴（第 20 図）** 調査区中央やや北寄りの地点で多数検出された小穴の一つである。土師器 4 点が出土した。41 の 1 点を図示した。41 は、土師器の鍋である。口縁部は大きく屈曲し、端部を斜め内側へ摘み出している。

**17- 小穴、18- 小穴（第 19 図、第 20 図、写真図版 4、写真図版 44）** 19- 土坑に近接するが、切り合い関係は不明である。ほぼ同じ大きさの小穴が切り合っている。遺物の破損状況から、17- 小穴が古く、18- 小穴が新しいとみられる。

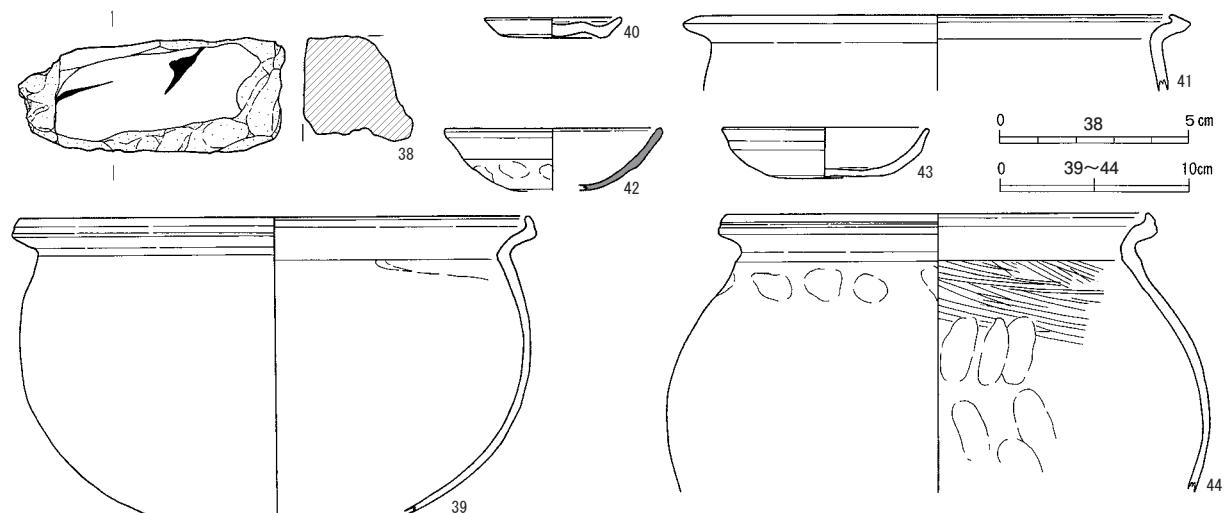
17- 小穴からは、須恵器 1 点、土師器 26 点、18- 小穴からは土師器 1 点が出土した。44、43 の 2 点を図示した。44 は、17- 小穴から出土した土師器の甕である。口縁部は、大きく屈曲し、凹線文を施している。口縁部端部は上面へ摘み出す。外面は器壁の荒れが激しく、

口縁部直下の肥厚部を形成するためのユビ押さえ痕のみ確認できる。内面は、ユビ押さえの後、ハケで仕上げている。43は18-小穴から出土した土師器の皿である。口縁部は胴部よりやや薄くし、わずかに外傾させている。内外面とも器壁の荒れが激しいが、ナデで仕上げている。

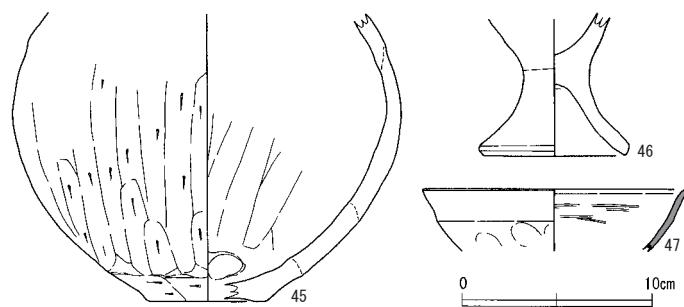
**20- 小穴 (第 19 図)** 19- 土坑を切る小穴である。覆土の上層と下層との境界から平瓦 4 点が出土した。小片で、磨滅も激しいため、図示していない。

#### 包含層

包含層出土遺物のうち、3点を図示した。45・46は弥生土器である。45は、壺であろう。外面をヘラ削りしたのちナデで仕上げている。46は高坏の脚部である。47は瓦器碗である。内面にはかすかにだが横方向のミガキが観察される。



第 20 図 1-2 区 13、14、15、17- 小穴 出土遺物

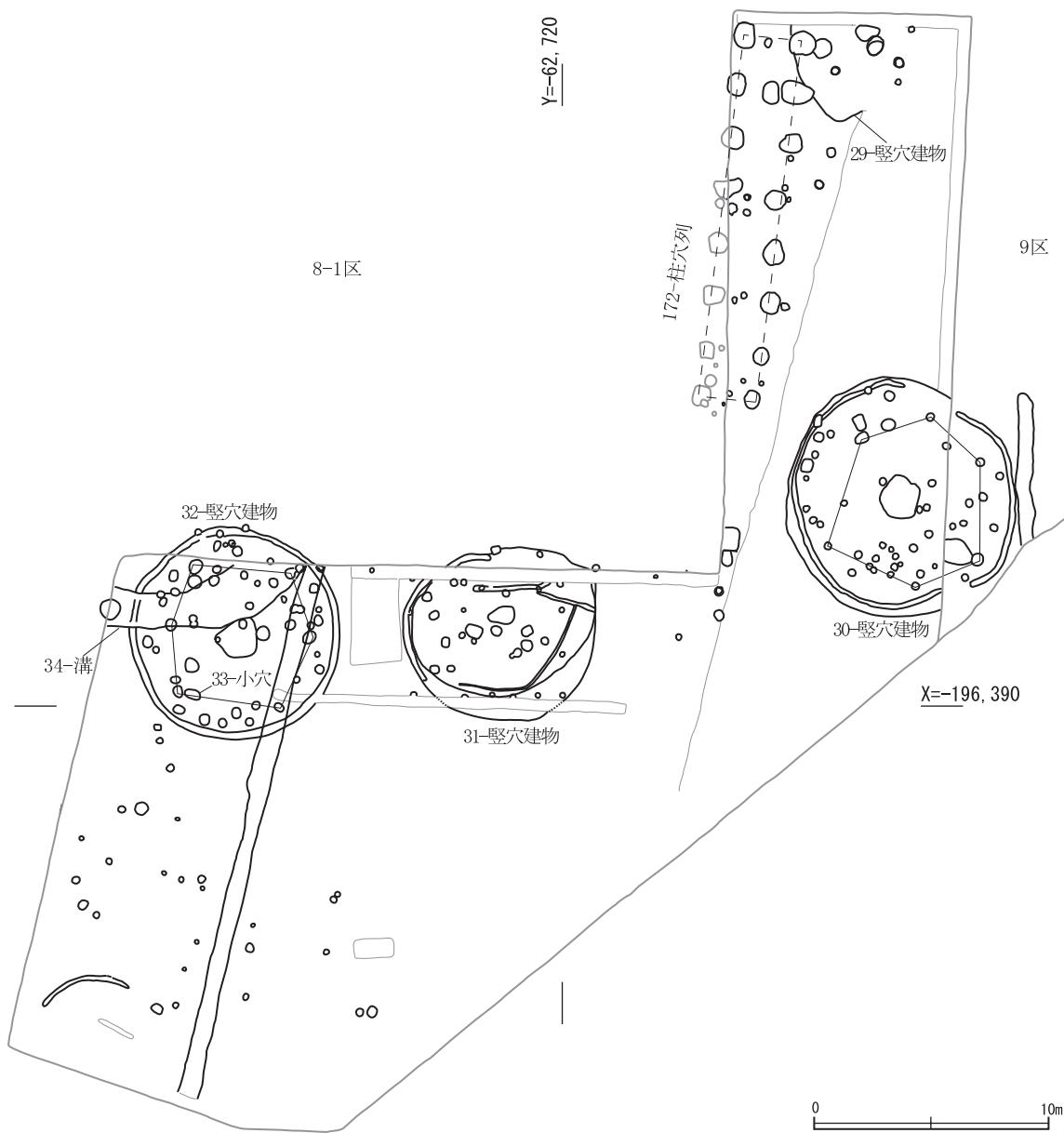


第 21 図 1-2 区 包含層 出土遺物

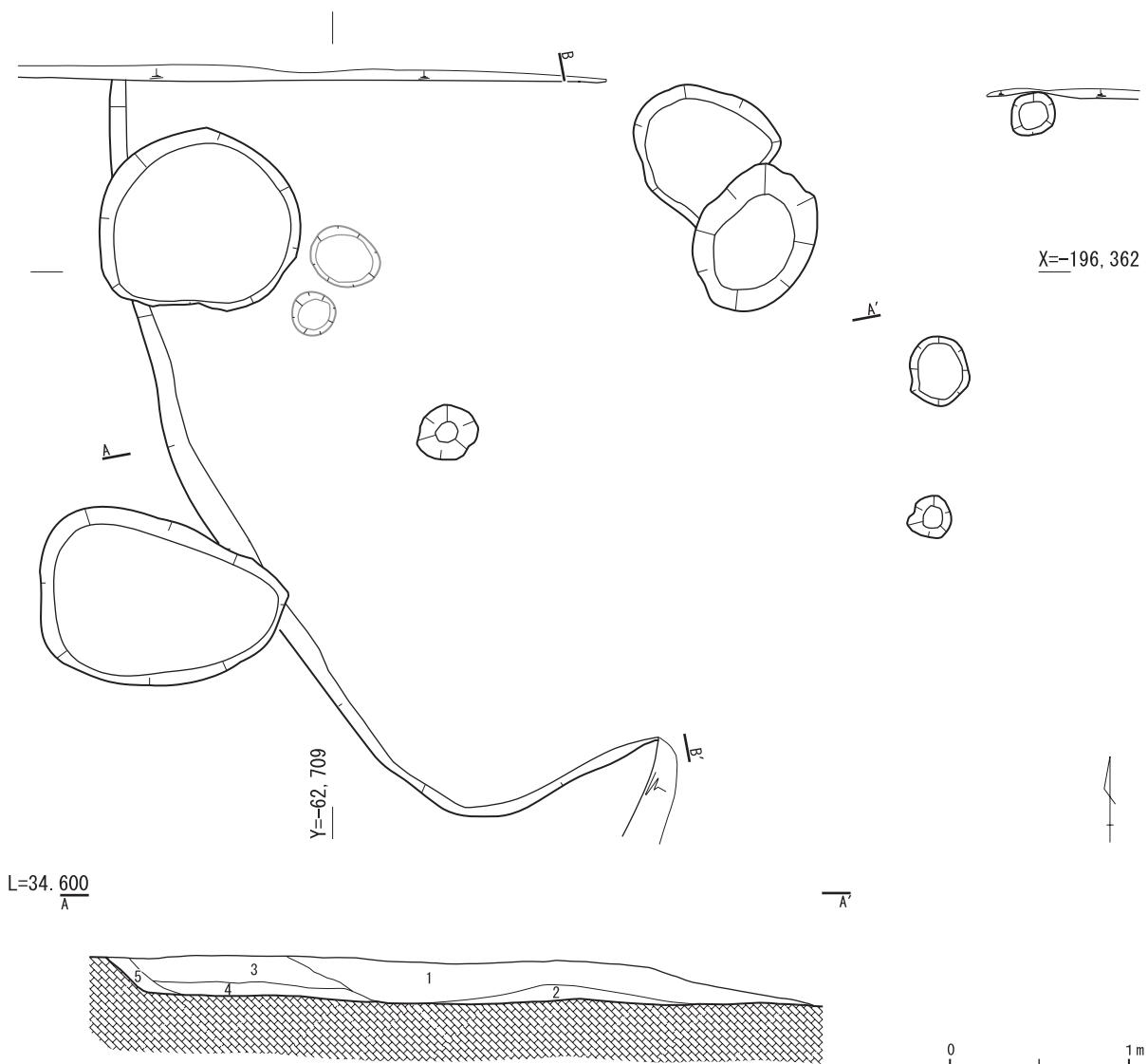
### 第3節 2区（第22図から第32図、写真図版5、写真図版6、写真図版44）

#### 調査区の概要

2区は、A2、A3区画に位置する。鍵状に屈曲した調査区である。遺構密度はあまり高くなないが、竪穴建物4棟、柱穴列などが検出された。紀の川市教育委員会、和歌山県教育委員会が、それぞれ南北・東西に試掘トレンチを掘削している。

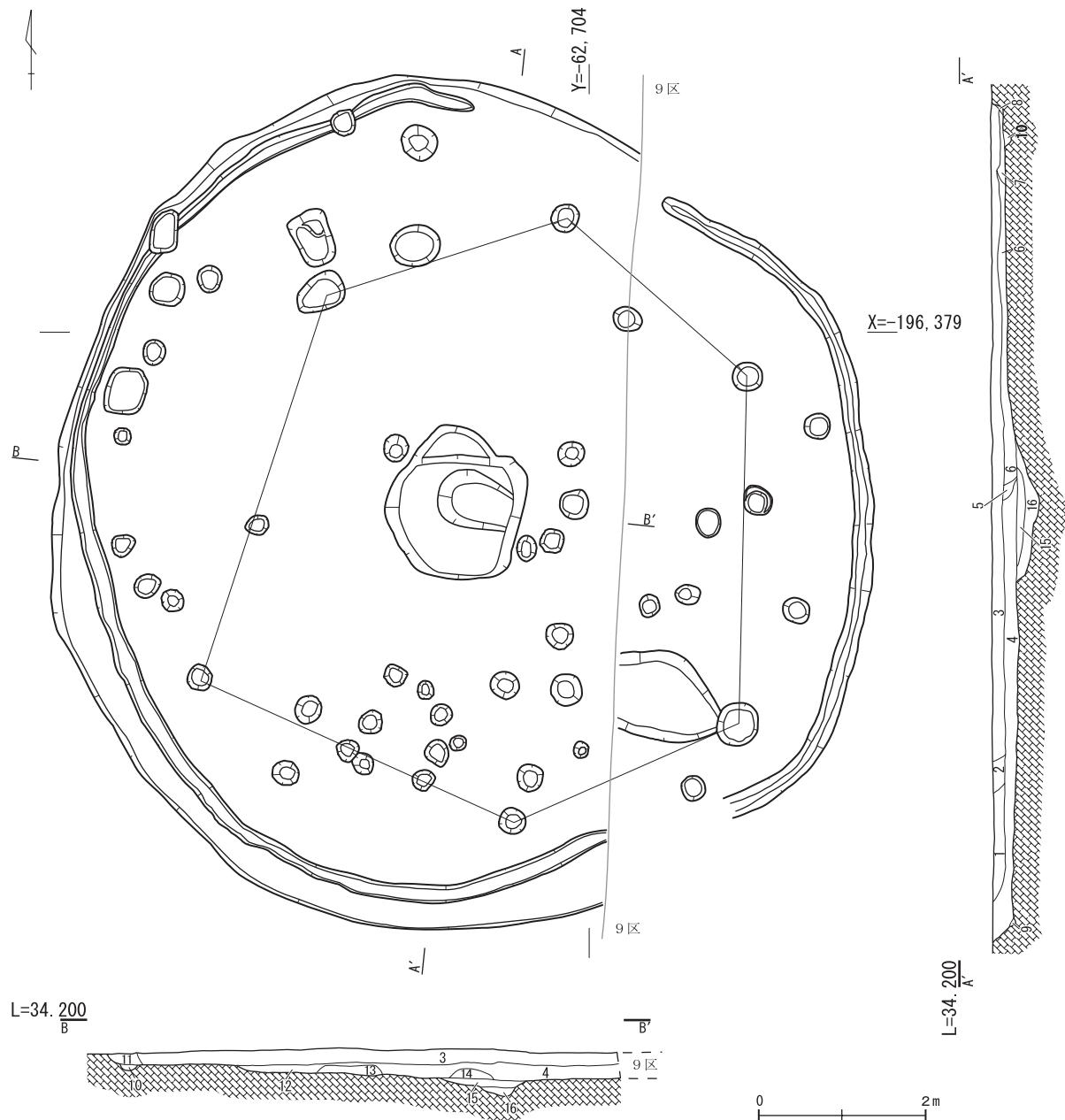


第22図 2区 遺構全体図



- 1 : 10YR 3/4 暗褐色 シルト  
 (直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
 2 : 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 シルト混じり砂  
 (炭化物粒、直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
 3 : 10YR 4/4 褐色 シルト  
 (直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
 4 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト  
 (直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
 5 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト

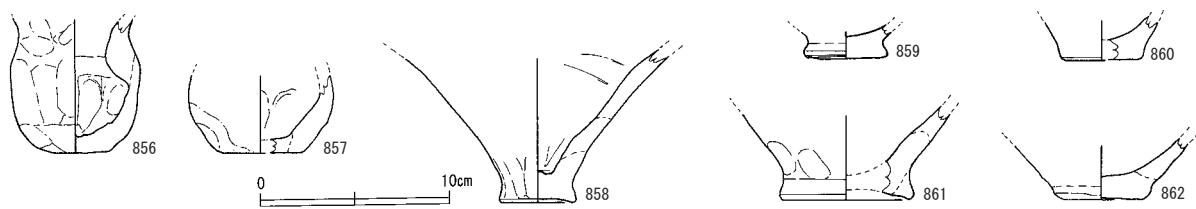
第 23 図 2 区 29- 穴建物



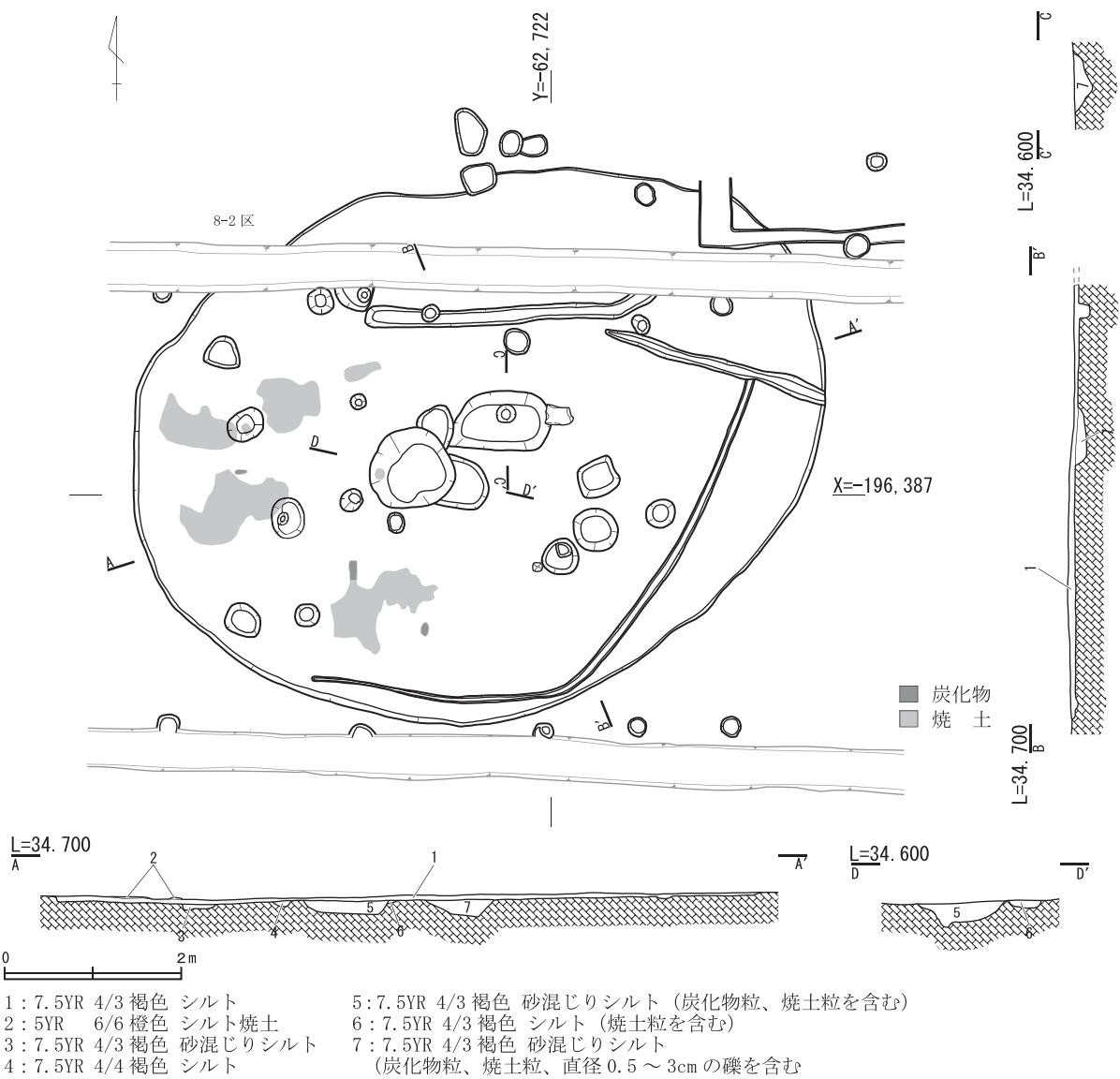
1 : 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 シルト  
(直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
2 : 5Y 4/4 暗オリーブ色 砂混じりシルト  
(炭化物粒を少量含む)  
3 : 10YR 3/4 暗褐色 砂混じりシルト  
(直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
4 : 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 シルト  
(直径 1 ~ 5 cm の礫を含む)  
5 : 2.5Y 3/3 オリーブ褐色 シルト混じり砂  
(2.5Y 4/6 オリーブ褐色 シルトを含む)  
6 : 10YR 4/4 オリーブ褐色 砂混じりシルト  
(炭化物粒、直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
7 : 10YR 4/4 オリーブ褐色 シルト混じり砂  
(10YR 4/6 褐色シルト混じり砂を含み、炭化物粒、  
直径 0.5 ~ 3 cm の礫を含む)

8 : 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 シルト混じり砂  
9 : 10YR 6/6 明黄褐色 シルト  
(直径 0.5 ~ 3 cm の礫を少量含む)  
10 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト  
11 : 10YR 3/4 暗褐色 砂混じりシルト  
12 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト混じり砂  
(直径 0.5 ~ 3 cm の礫を含む)  
13 : 10YR 3/4 暗褐色 シルト  
(直径 1 ~ 5 cm の礫を極めて多量に含む)  
14 : 10YR 4/4 オリーブ褐色 砂混じりシルト  
(直径 1 ~ 3 cm の礫を多量に含む)  
15 : 10YR 3/4 暗褐色 シルト混じり砂  
(直径 1 ~ 5 cm の礫を多量に含む)  
16 : 10YR 3/3 暗褐色シルト

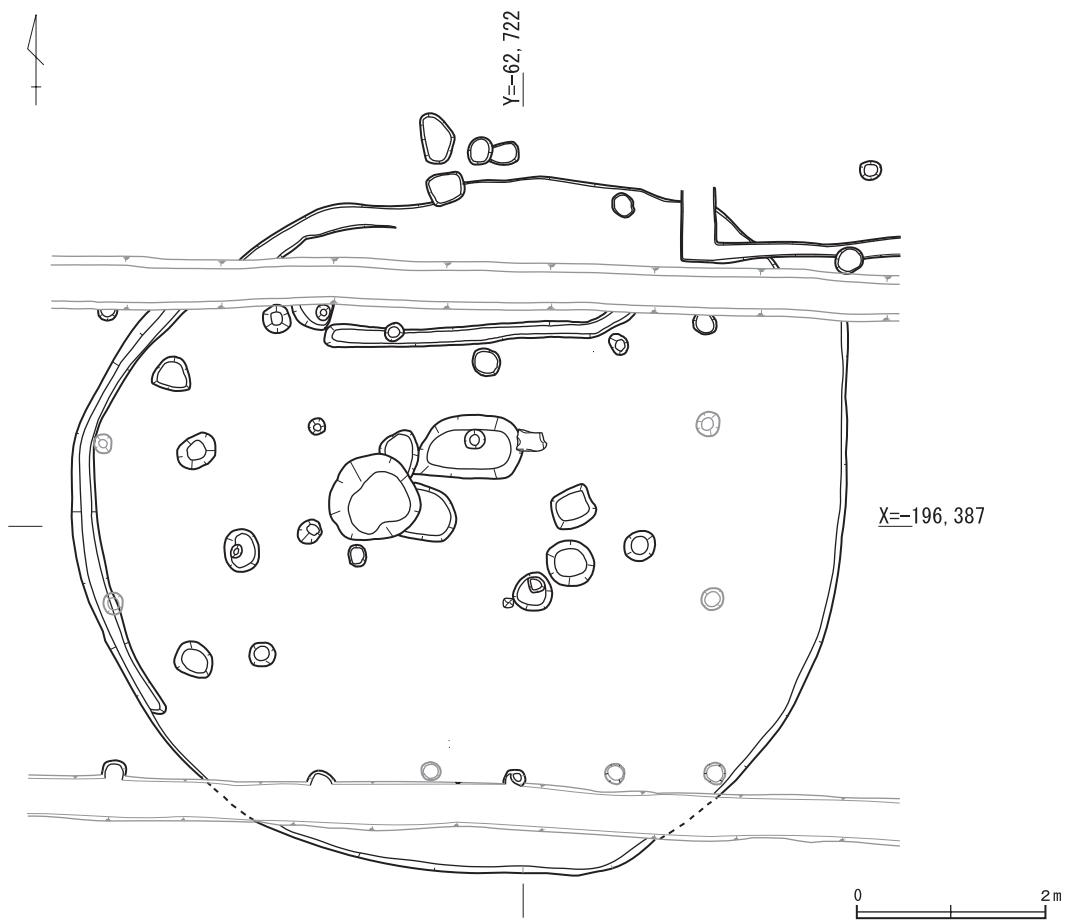
第 24 図 2 区 30- 穴建物



第25図 2区 30- 竪穴建物 出土遺物



第26図 2区 31- 竪穴建物



第27図 2区 31- 竪穴建物（拡張後）

### 竪穴建物

**29- 竪穴建物（第23図、第29図）** 調査区北端に位置する。削平により、遺存状態は、悪い。調査区壁面の土層をみる限り、1辺6m程度の隅丸方形で、主柱穴が2本の竪穴建物と推定される。図版右上の切り合っている土坑からは焼土が検出されており、炉の可能性がある。弥生土器36点が出土した。このうち、48の1点を図示した。

**30- 竪穴建物（第24図、第25図、写真図版6）** 調査区西端に位置する。一部が9区に伸びている。直径約10mの竪穴建物である。建物跡の直上に果樹があったこともあり、残存状況は余り良くないが、中央に直径約1mの炉を備え、ほぼ全面に壁溝をめぐらせる。床面からは深さ0.2m程度の小穴が多数検出された。柱の通りがややいびつだが、小穴の状態から6本柱の竪穴建物と推定する。

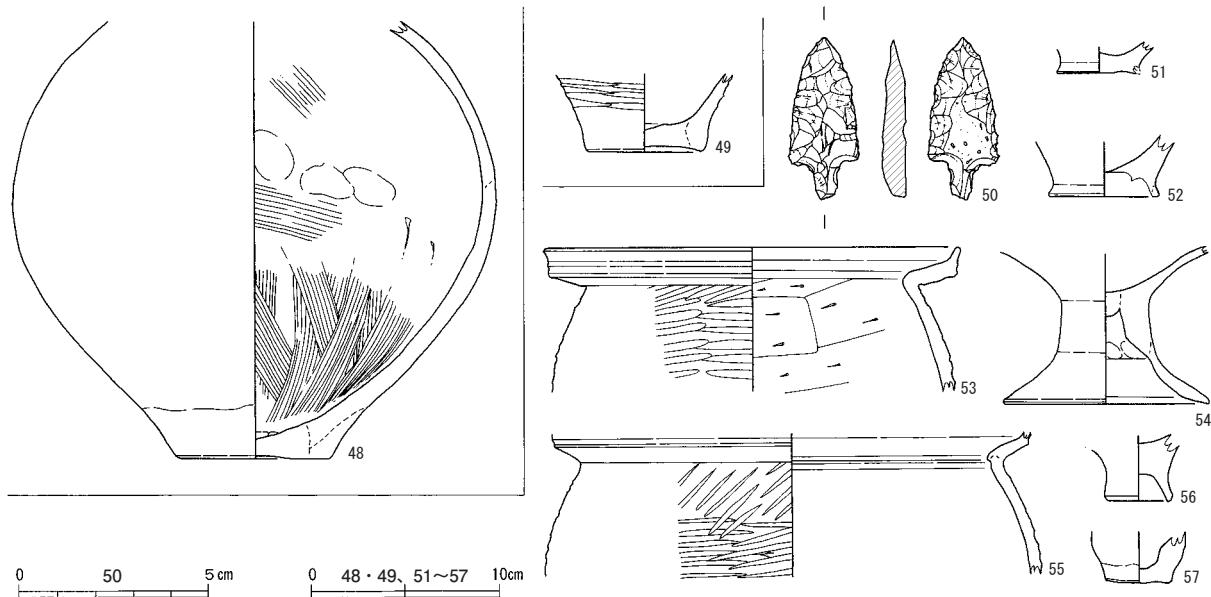
弥生土器78点、サヌカイト片5点が出土した。出土土器数は多いが、胴部小片や底部片が大半で、全体の形状を把握できるものは少ない。856から862の7点を図示した。

**31- 竪穴建物（第26図、第27図、写真図版5、写真図版6）** 調査区北端に位置する。中世の掘立柱建物に切られている。一部が8-1区に伸びている。残存する掘り込みが極端に浅



- 1 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト  
 (直径 0.5 ~ 1 cm の礫を多量に含む)  
 2 : 10YR 4/4 褐色 シルト  
 (直径 0.5 ~ 1 cm の礫を多量に含む)  
 3 : 10YR 4/4 褐色 シルト  
 (炭化物粒、焼土を極めて多量に含む)  
 4 : 10YR 4/6 褐色 シルト  
 5 : 10YR 3/3 暗褐色 シルト  
 (直径 0.5 ~ 1 cm の礫を多量に含む)  
 6 : 10YR 4/4 褐色 シルト (焼土を含む)  
 7 : 10YR 4/4 褐色 シルト  
 8 : 10YR 7/8 黄橙色 シルト  
 9 : 10YR 5/4 にぶい黄褐色 シルト (焼土を少量含む)  
 10 : 10YR 2/1 黒色 シルト (炭化物粒を多量に含む)  
 11 : 10YR 3/2 黒褐色 シルト  
 (炭化物粒を含み、直径 0.5 ~ 1 cm の礫を多量に含む)  
 12 : 10YR 4/4 褐色 シルト (炭化物粒、焼土を含む)  
 13 : 10YR 3/3 暗褐色 シルト  
 (直径 0.5 ~ 1 cm の礫を含む)  
 14 : 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト  
 15 : 10YR 5/4 にぶい黄褐色 砂混じりシルト  
 (直径 0.5 ~ 1 cm の礫を多量に含む)

第28図 2区 32-竪穴建物



第29図 2区 29、31、32- 竪穴建物 出土遺物

いうえ、覆土が焼土・炭化物が散発的に混じる以外、地山と似た色調だったため、遺構の平面形を確定することが難しく、当初は不整円形で、炉の作り替えのある建物とみた。しかし、南側の壁面にサブトレンチを掘削したところ、遺構が南へ伸びることが確認された。壁溝の状態等から、当初は4から6mの不整円形の竪穴建物が、直径約8mのほぼ円形の竪穴建物へと拡張されたとみられる。

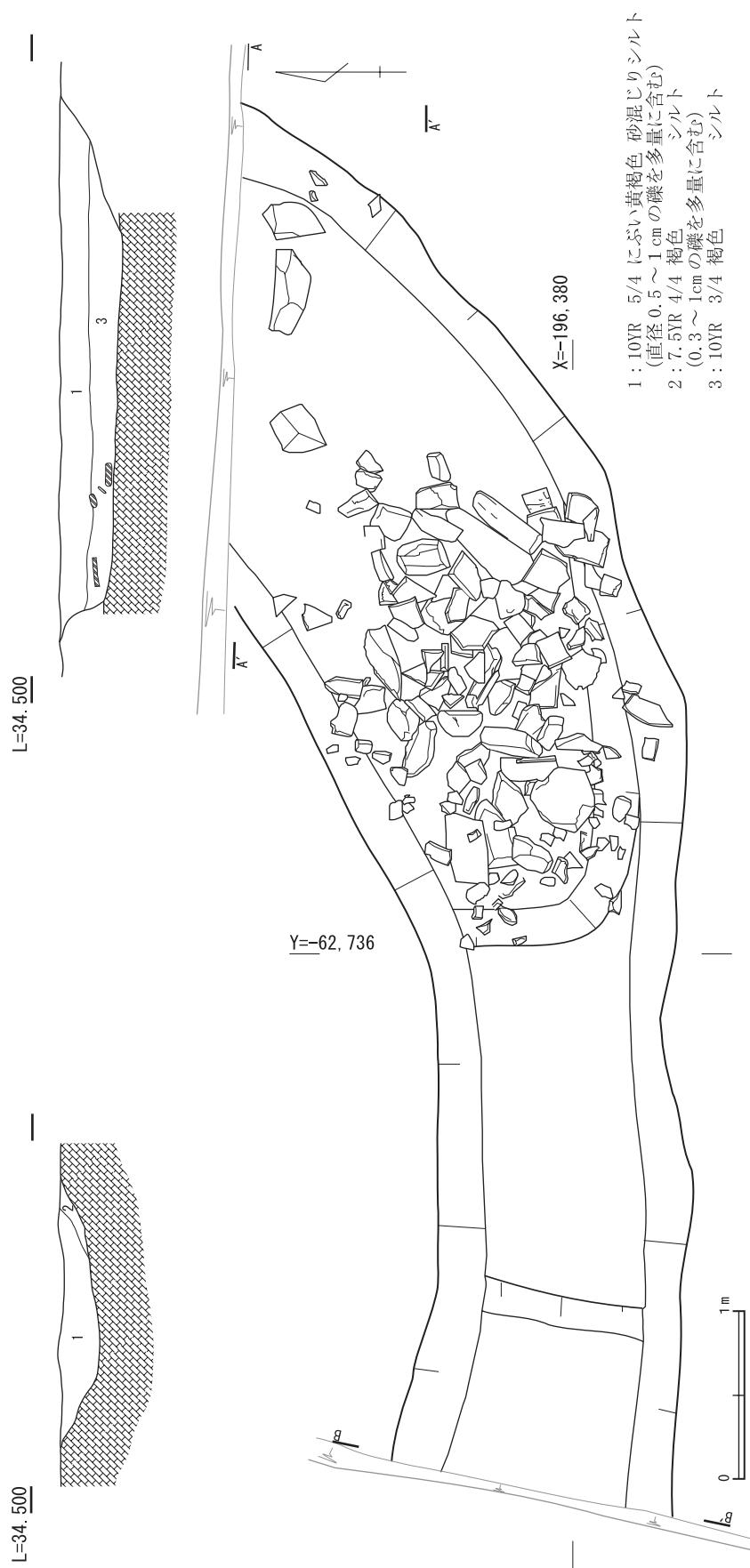
弥生土器53点のほか、平瓦3点、丸瓦2点が出土しているが、瓦類は混入であろう。49の甕底部1点を図示した。

**32- 竪穴建物（第28図、第29図、写真図版5、写真図版6）** 調査区北端、31- 竪穴建物の西側に位置する。34- 溝によって北半が攪乱を受けているほか、南北にはしる中世以降の溝にも切られている。直径約9mのほぼ円形の竪穴建物である。覆土最下層には、焼土と炉を中心に放射状に広がる炭化物が確認された。壁溝は、炉は土堤を備え、東側に小穴を付設する。壁溝は全面にめぐらされている。主柱穴は、6本と推定される。

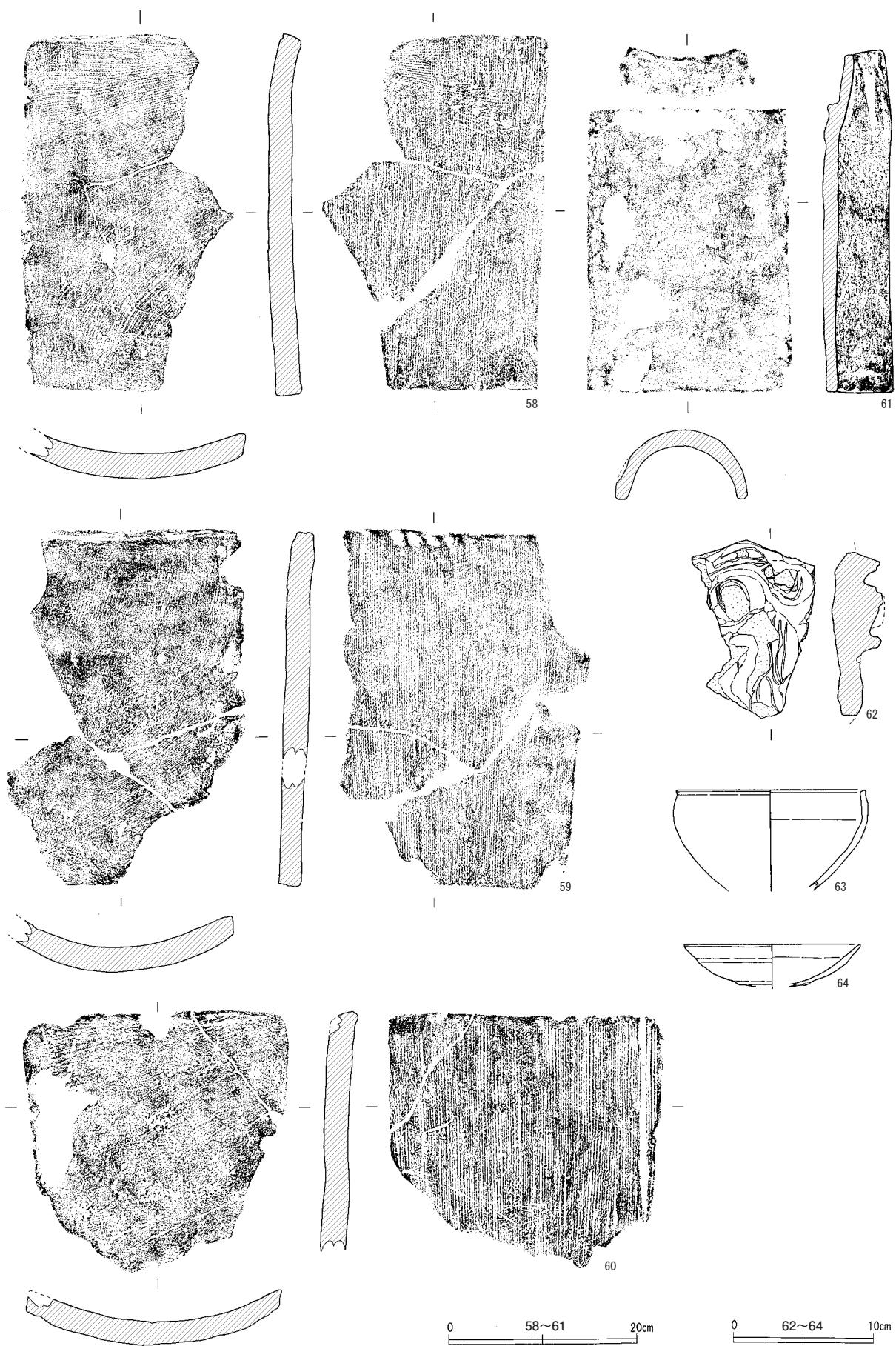
弥生土器100点以上、サヌカイト片1点のほか、平瓦3点が出土しているが、瓦類は混入であろう。51から57の7点を図示した。51から53は床面直上から出土した遺物である。53、55は口縁部に凹線をめぐらした甕、54は円盤充填技法で製作された高環脚部である。主柱穴に隣接する33- 小穴からサヌカイト製石鏃1点（50）が出土している。

## 溝

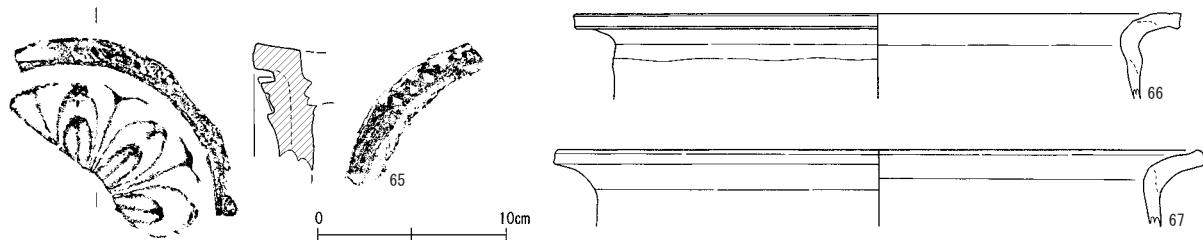
**34- 溝（第30図、第31図、写真図版44）** 調査区北端に位置し、32- 竪穴建物を切り、8-1区に伸びる幅約1.4から2mの溝である。ただし、底面の凹凸が激しく、溝として機能したか疑問な点も存在する。32- 竪穴建物との重複部分が深く落ち込んでおり、ここから石や瓦片等がまとまって出土した。平瓦100点以上、丸瓦37点、磚2点、須恵器2点、土師器62点、



第30図 2区 34-溝



第31図 2区 34-溝 出土遺物



第32図 2区 包含層 出土遺物

瓦器 10 点が出土した。このうち、58 から 64 の 7 点を図示した。58 から 61 は古代瓦である。62 は、鬼瓦片と推定されるが、表面には均質に炭素が吸着しており、中世以降の所産であろう。63 は土師器の碗、64 は高台がほぼ退化した瓦器の碗である。916 は磚、917 は軒平瓦である。

### 包含層

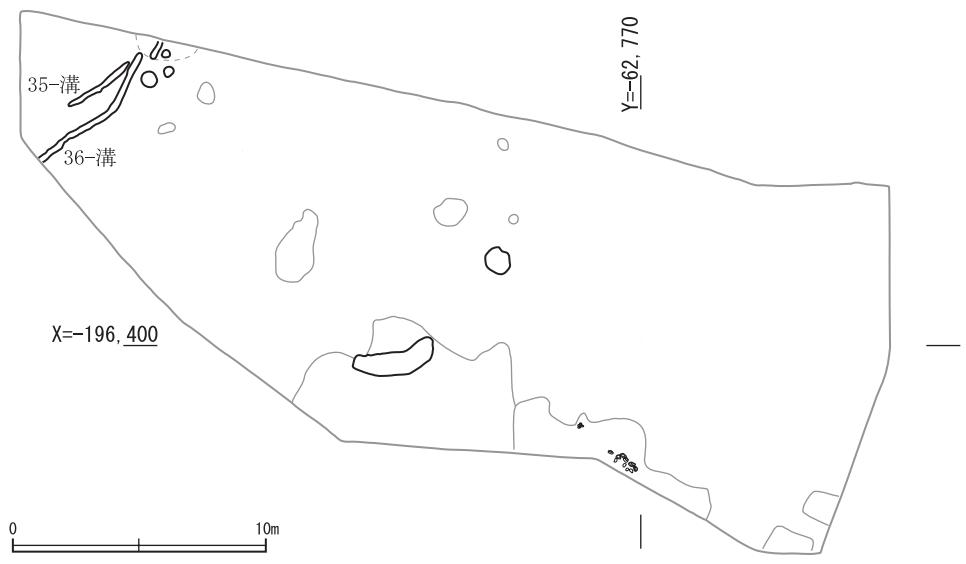
包含層出土遺物のうち、3 点を図示した。いずれも、調査区西壁に沿って側溝を掘削中に出土したもので、34- 溝に伴う可能性が高いが、確定できない。65 は軒丸瓦で、丸瓦部との接合面に格子タタキを施している。66、67 は土師器の鍋である。

## 第4節 3区（第33図から第35図、写真図版7、写真図版44）

### 調査区の概要

3区は、A2 区画に位置する。不整方形の調査区である。貴志川町教育委員会、紀の川市教育委員会が試掘トレチを一部重複しつつ複数設定しており、調査区内の半分程度が試掘を受けていた。南側の崖

に面した落込みを中心とし、古代瓦を含む整地土が厚く堆積しており、台地を拡張するために瓦を含んだ土で整地を繰り返したことを見出している。遺構の残りは極めて悪く、西側で溝を数条検出したにとどまる。



第33図 3区 遺構全体図

## 溝

35- 溝（第 34 図、写真図版 7） 36- 溝に並行する幅約 0.2 m、深さ約 0.1 m の溝である。

遺物は出土しなかった。

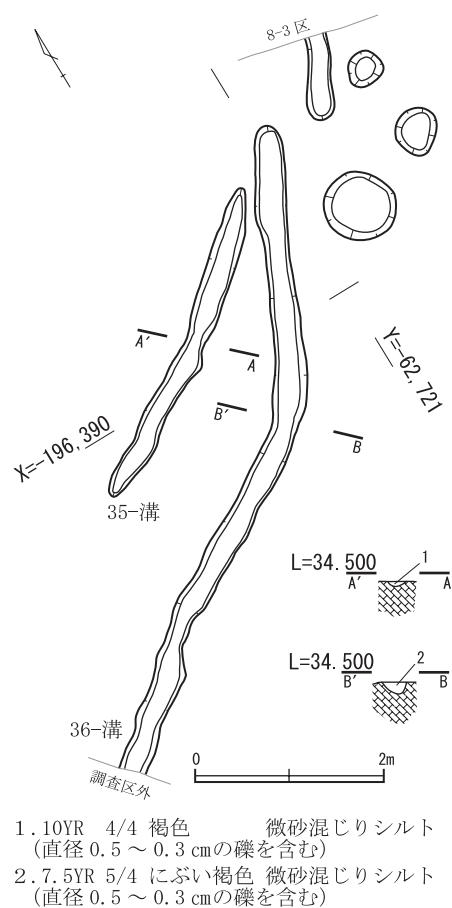
36- 溝（第 34 図、写真図版 7） 南北にはしる幅約 0.2

m、深さ約 0.1 m の溝である。

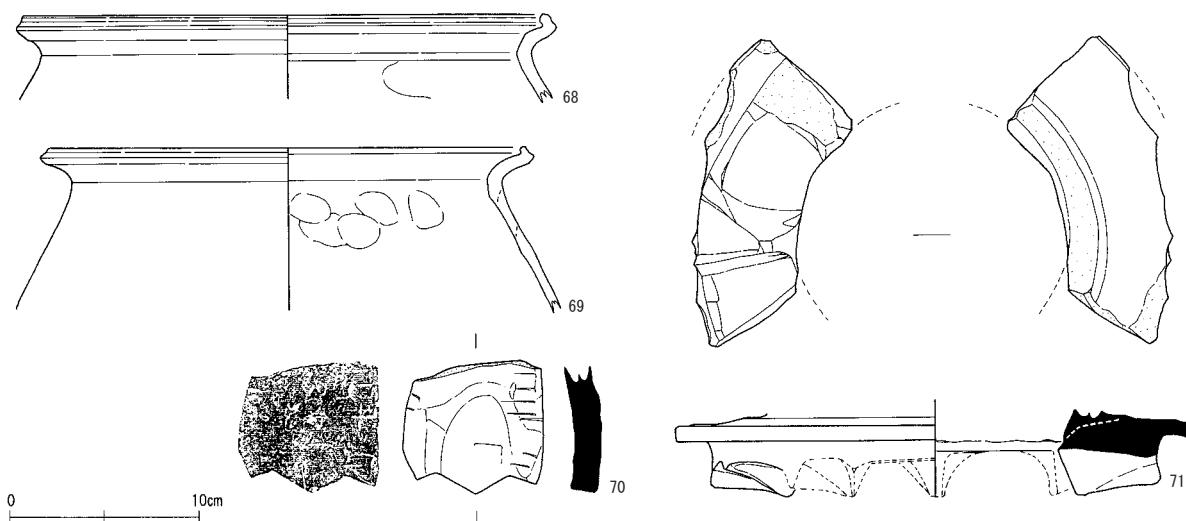
平瓦 1 点、土師器 52 点、瓦器 2 点が出土した。土師器の鍋 35、36 を図示した。

## 包含層（第 35 図、写真図版 44）

包含層出土遺物のうち、2 点を図示した。いずれも、調査区南側の落込みを埋める整地土から出土したものである。70 は須恵質の土製品である。幅約 7cm、下端はヘラで山状に整形している。表面はヘラナデでやや粗く仕上げている。71 は須恵質の土製品である。相輪の一部と推定される。同様の製品が貴志川町教育委員会による試掘調査の際にも出土している。



第 34 図 3 区 35、36-溝

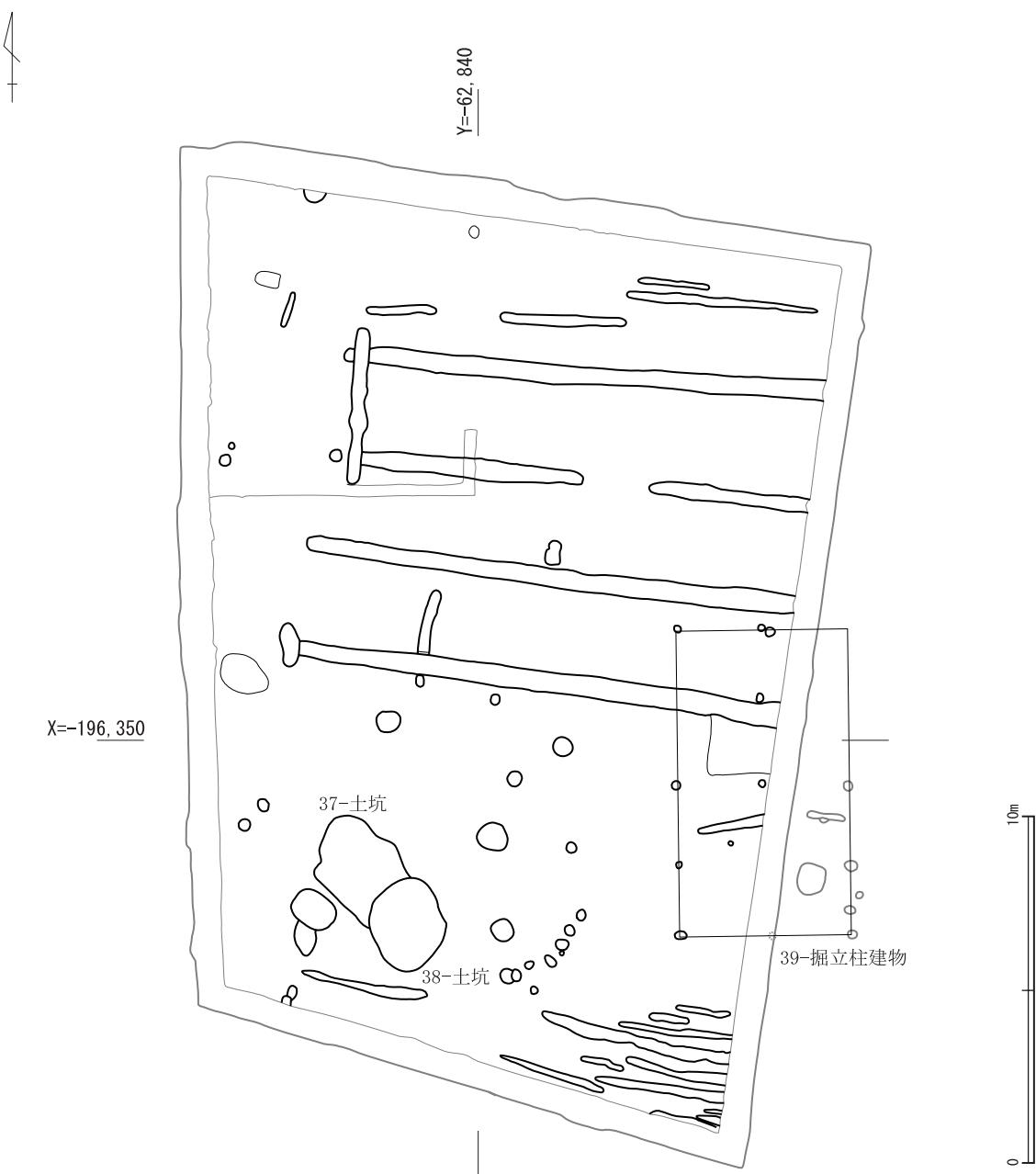


第 35 図 3 区 出土遺物

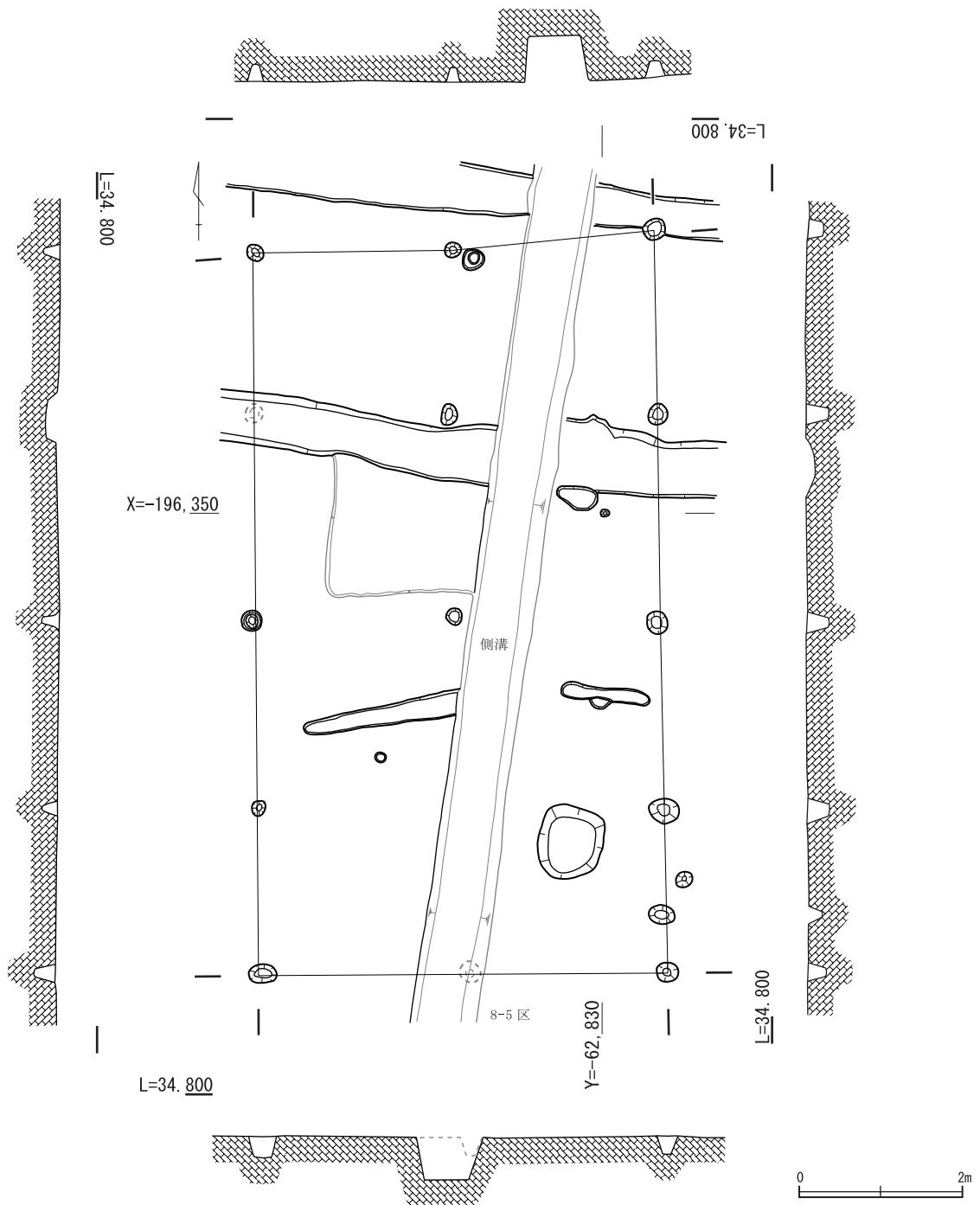
## 第5節 4区（第36図から第39図、写真図版8、写真図版44）

### 調査区の概要

4区は、B2区画に位置する。方形の調査区である。貴志川町教育委員会、紀の川市教育委員会が試掘トレンチを設定している。遺構面は南に向かって緩やかに傾斜し、南端付近で大きく落ち込む。中世以降の鋤溝、東西方向に並行してはしる浅い溝のほか、掘立柱建物、土坑を検出した。



第36図 4区 遺構全体図



柱穴埋土 : 2.5YR 5/2 灰赤色 シルト (7.5YR 6/8 橙色 シルトをブロック状に少量、直径0.5~1cmのマンガン粒を少量含む)

第37図 4区 39-掘立柱建物

### 掘立柱建物

39-掘立柱建物（第37図、写真図版7） 8-5区との境界上に位置し、南北に主軸をとる4間×2間の掘立柱建物である。柱穴を構成する小穴は、いずれも直径0.2m、深さ0.2m程度と小規模で、掘方も明確でない。各柱穴からは、瓦や土師器の小片が出土しているが、図示可能なものは、なかった。

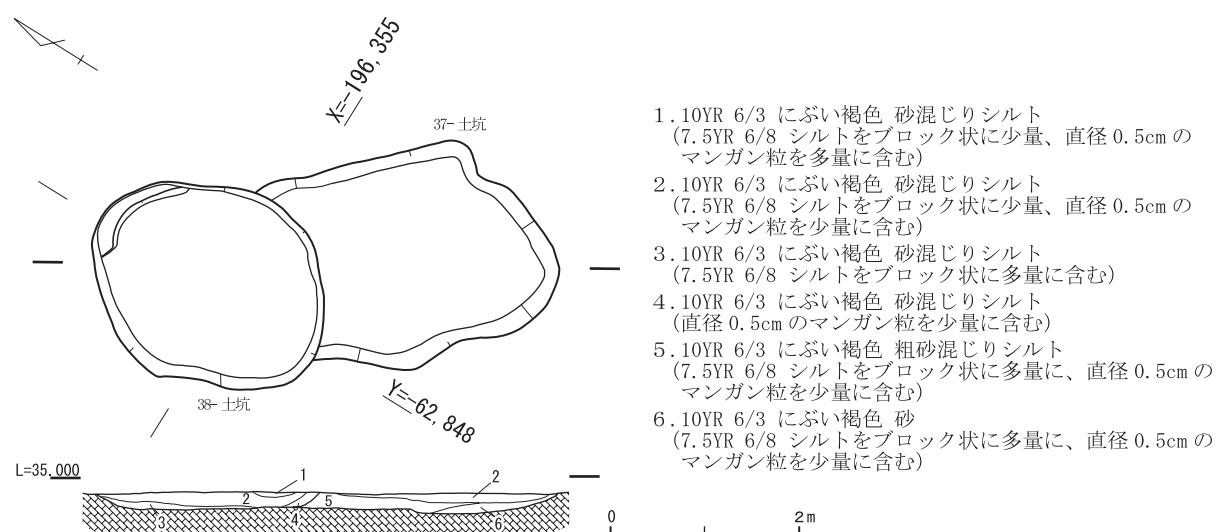
## 土坑

37- 土坑（第 38 図、第 39 図、写真図版 8） 調査区南西部で検出された長辺 2.4m、短辺 2m の隅丸方形の土坑である。38- 土坑に切られている。平瓦 30 点、道具瓦 1 点、須恵器 5 点、土師器 2 点が出土した。このうち、73 の道具瓦、74 の土師器の把手の 2 点を図示した。

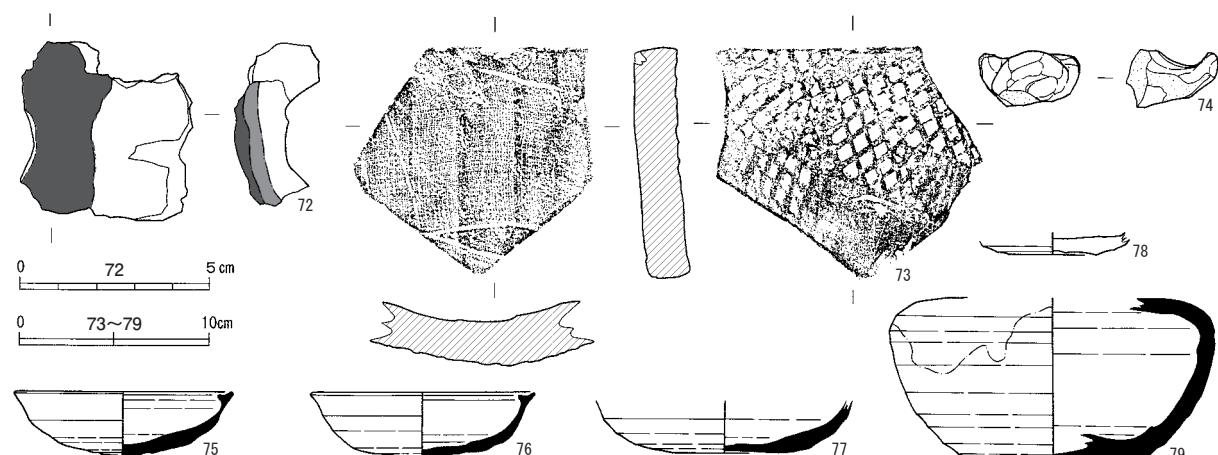
38- 土坑（第 38 図、第 39 図、写真図版 8） 37- 土坑を切る、直径約 2.7 m の土坑である。平瓦 83 点、須恵器 14 点、土師器 27 点、羽口 4 点が出土した。このうち、72 の羽口 1 点を図示した。内径は約 5.4 cm、表面の一部はガラス化している。

## 包含層（第 39 図、写真図版 44）

包含層出土遺物のうち、5 点を図示した。75、76 は須恵器の坏身で、2 点まとまってほぼ完形で出土した。いずれも焼成不良で脆く、土師器に近い色調である。78 は青磁の底部、79 は須恵器の壺である。



第 38 図 4 区 37、38- 土坑



第 39 図 4 区 出土遺物

## 第6節 5-1 区（第40図から第62図、写真図版9、10、44、45）

### 調査区の概要

5-1 区は、B1、B2 区画に位置する、鍵状に屈曲した南北に長い長方形の調査区である。調査前の現況は、水田および畑である。調査区内には、紀の川市教育委員、和歌山県教育委員会が実施した試掘トレンチがそれぞれ、1、4ヶ所存在する。

調査区は、もともと南東に向かって傾斜していた地形を段状に整形しているためか、北西側の地盤では遺構や包含層の削平が著しく、逆に南東側の地盤では、遺構が良好に残存している傾向にある。

土坑、粘土採掘穴、溝等の多数の遺構を検出した。いっぽう、掘立柱建物、竪穴建物は検出されなかった。

東端では 262- 窯の一部を確認した。この段階で既に一部を掘削したが、後に隔壁であることが明らかになる壁面を穴窯の窯尻と判断し、調査区外へ延びる焼成部とともに調査を実施することが望ましいと判断したため、周辺の精査を含め、掘削を行わなかった。

### 土坑

**40- 土坑、41- 土坑（第41図、第42図）** 調査区の東側、里道に面した位置に所在する。

40- 土坑は短辺 2 m の土坑で、中央に浅い小穴が存在する。

40- 土坑からは平瓦 6 点、須恵器 14 点、土師器 34 点が出土した。うち、1 点を図示した。80 は土師器のやや小振りの甕である。胴部外面は整然としたハケを施す。口縁部はナデで調整し、端部をわずかに薄く仕上げる。内面は口縁部直下に強いユビ押さえが観察される

**41- 土坑（第41図、第42図）** 調査区の東側、里道に面した位置に所在する。40- 土坑の南に位置する。大半が調査区外に伸びているため、規模等、詳細は明らかでない。

須恵器 1 点、土師器 2 点が出土した。このうち 1 点を図示した。81 は須恵器の坏身である。丸みを帯びた底部を持ち、そこから、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部端は丸く収める。底面外部にはヘラケズリ調整を施す。それ以外は、ナデ調整で仕上げている。焼成は甘く、脆く、色調は灰白色である。

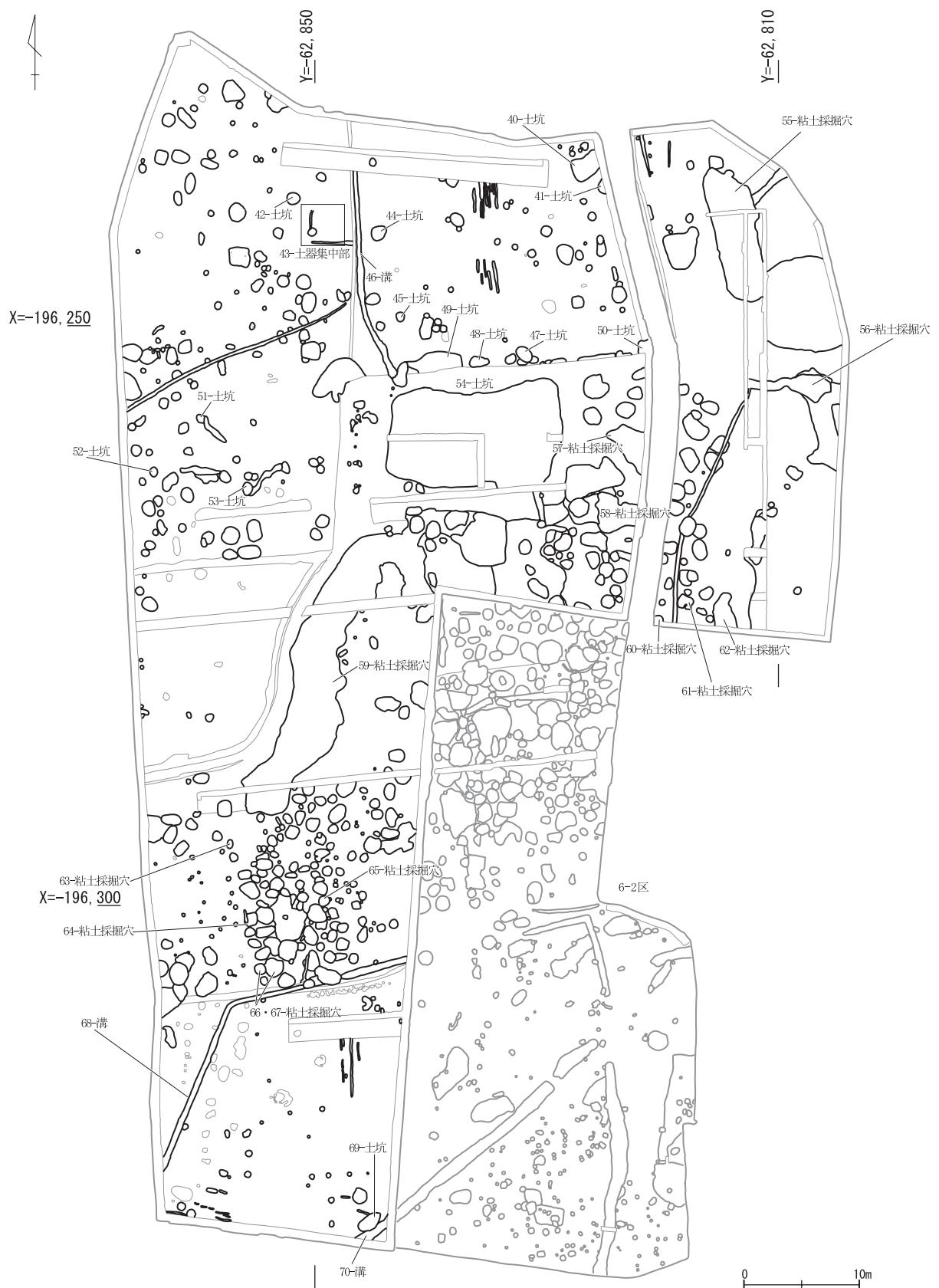
**42- 土坑（第41図）** 直径約 1 m、深さ約 0.2 m の平面橢円形の土坑である。土坑中央は、周囲より一段下がっている。

土師器 36 点が出土した。一個体が小片となっていると考え、接合を行ったが、図示可能な状態には至らなかった。

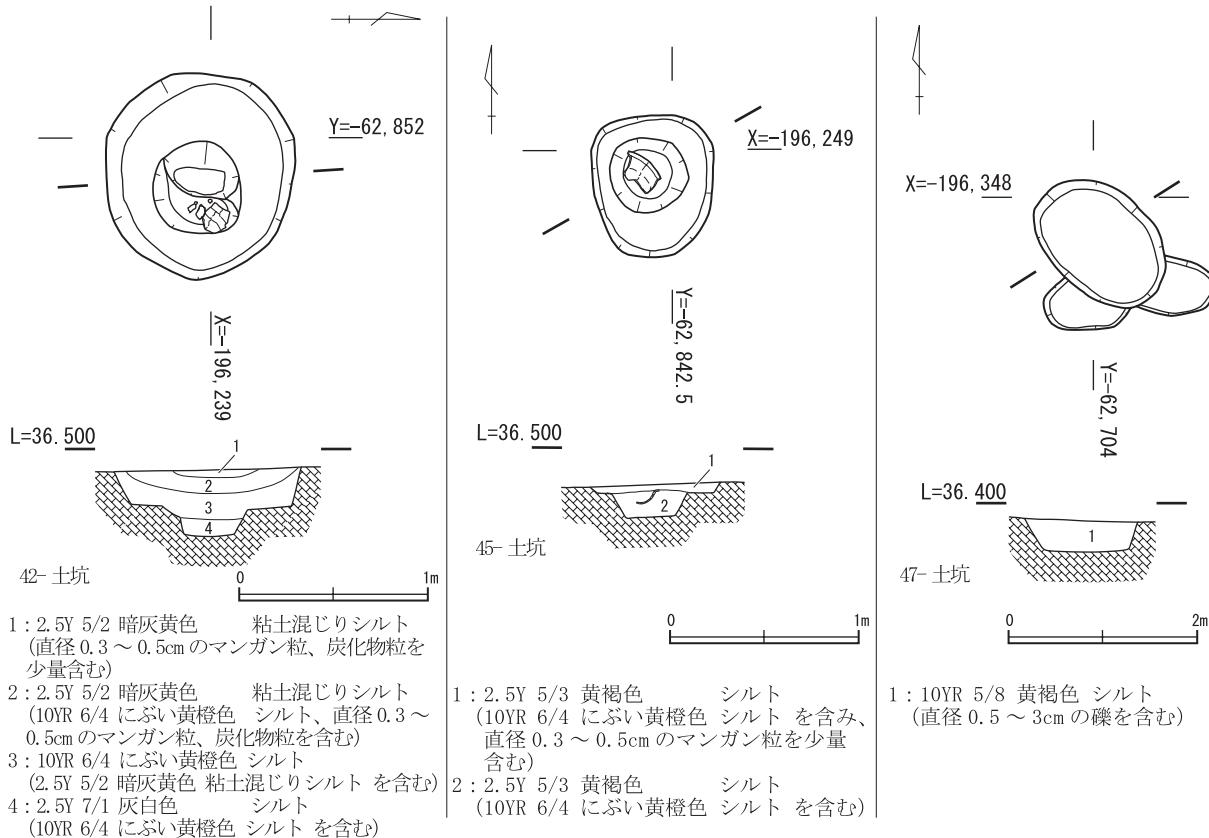
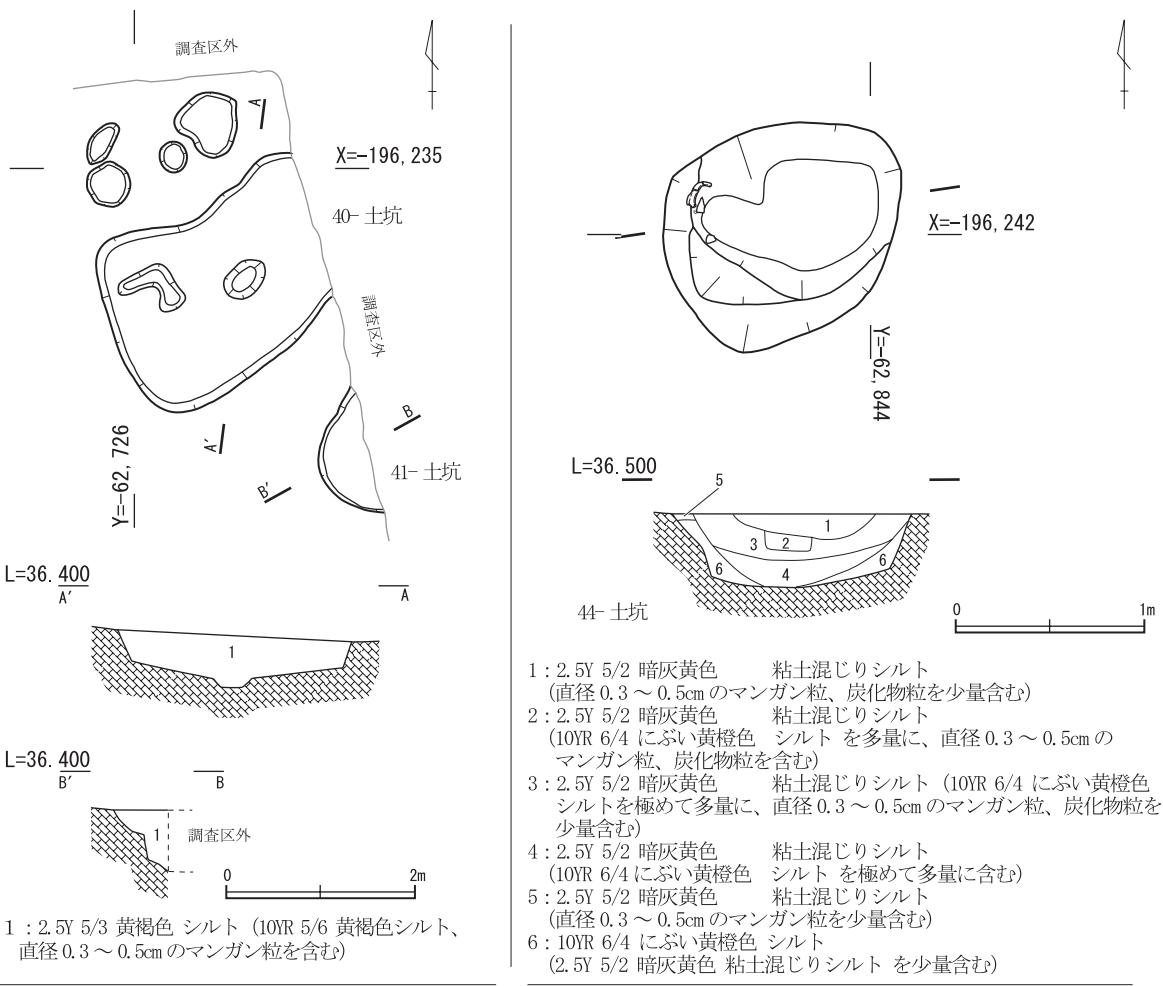
**44- 土坑（第41図、第42図）** 長径約 1 m、深さ約 0.4 m の土坑である。土坑上面付近、断面土層図の 6 層中から、壁近くに張り付くようにして、土師器が出土した。

土師器 24 点が出土した。1 点を図示した。83 は土師器の甕の口縁部である。器表は 2 次焼成を受けて赤変し、剥落が著しい。口縁部は、くの字形に屈曲し、端部を薄く仕上げる。

**45- 土坑（第41図、第42図、写真図版9、写真図版44）** 直径約 0.7 m の土坑である。中央は大きく落ち込んでおり、平面図をみると柱穴状になっている。



第40図 5-1区 遺構全体図



第 41 図 5-1 区 40、41、42、44、45、47- 土坑

土師器 27 点が出土した。ほぼ全ての破片が接合し、1 点の土器となった。82 は土師器の鍋である。器壁はやや厚く、胴下半には黒斑がみられる。平底で胴部下半はナデ、上半は指跡が残る強いナデで、口縁部は内外面ともヘラナデで仕上げている。胴部内面は上半にはユビ押さえが明瞭に残る。下半及び底面はナデで仕上げている。口縁部には、わずかにだが片口を作り出しているように見える。

47- 土坑(第 41 図、第 42 図、写真図版 9、写真図版 44) 長径約 1.6 m の楕円形の土坑である。

48- 土坑の東側、50- 土坑の西側に位置する。

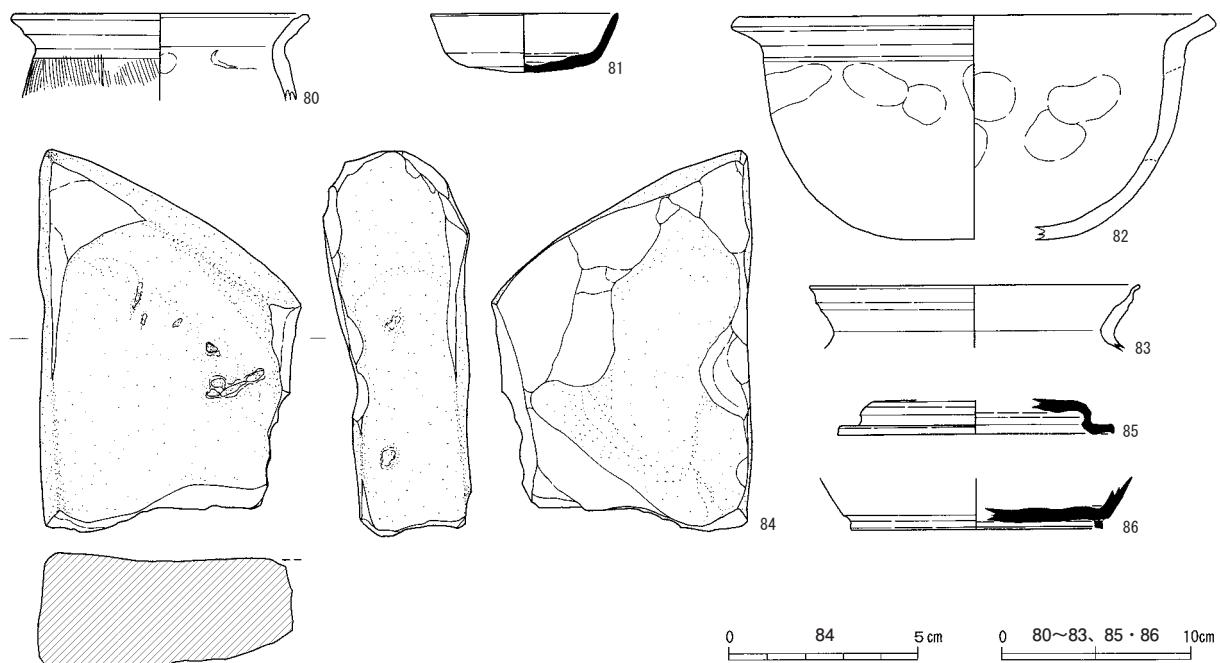
丸瓦 1 点、須恵器 5 点、土師器 7 点、石器 1 点が出土した。このうち、3 点を図示した。84 は砂岩質の砥石である。石の目は粗く、砂粒が肉眼で確認できる。図示した 3 面とも、使用痕がみられる。85 は天井部に丁寧なヘラ削り調整を行い、口縁部が大きく屈曲した須恵器の蓋である。86 は貼付け高台を持つ須恵器の坏身である。高台は、ほぼ垂直に立ち上がる。

48- 土坑、49- 土坑(第 43 から 45 図、写真図版 9) 調査区北側に位置する土坑である。

48- 土坑は長径約 1.6 m の不整円形の土坑、49- 土坑は長径約 6 m 以上に達する楕円形の土坑とみられるが、後世の削平を大きく受けている。いずれも覆土は一層である。

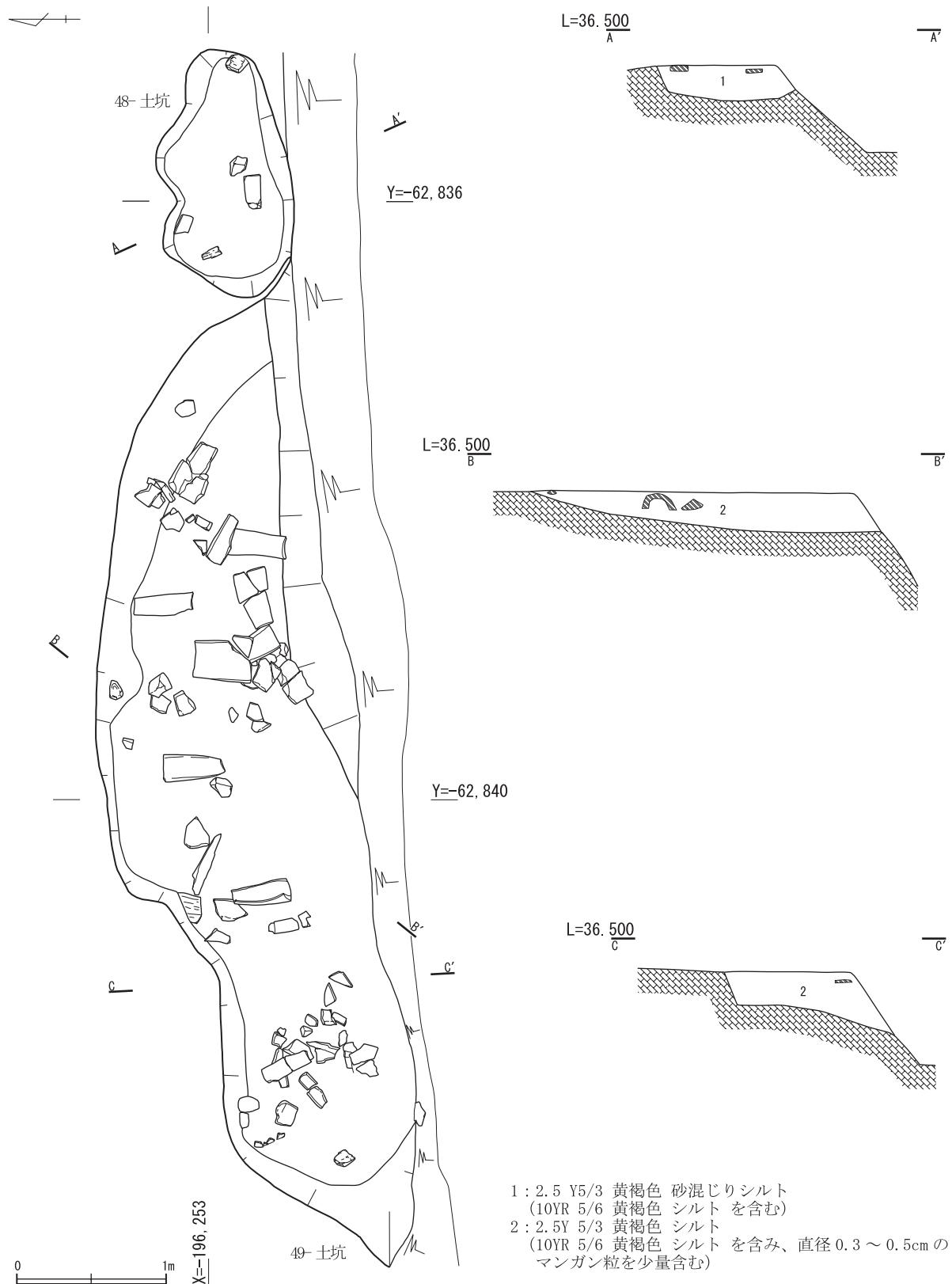
48- 土坑からは平瓦 1 点が出土した。49- 土坑からは平瓦 50 点以上、丸瓦 50 点以上、須恵器 3 点、土師器 4 点が出土した。出土品に占める完形、あるいはそれに近い行基式丸瓦の比率が高いことが特徴である。

48- 土坑出土遺物は、図示していない。49- 土坑出土遺物は、87 から 97 の 11 点を図示した。87 から 95 は丸瓦である。いずれも、凸面に縄目タタキを施している。88 や 90 は、歪みが激しい。特に、90 は、くの字形に歪んでいる。95 は、玉縁式丸瓦である。玉縁以外の凸面には、縄目タタキが施されている。

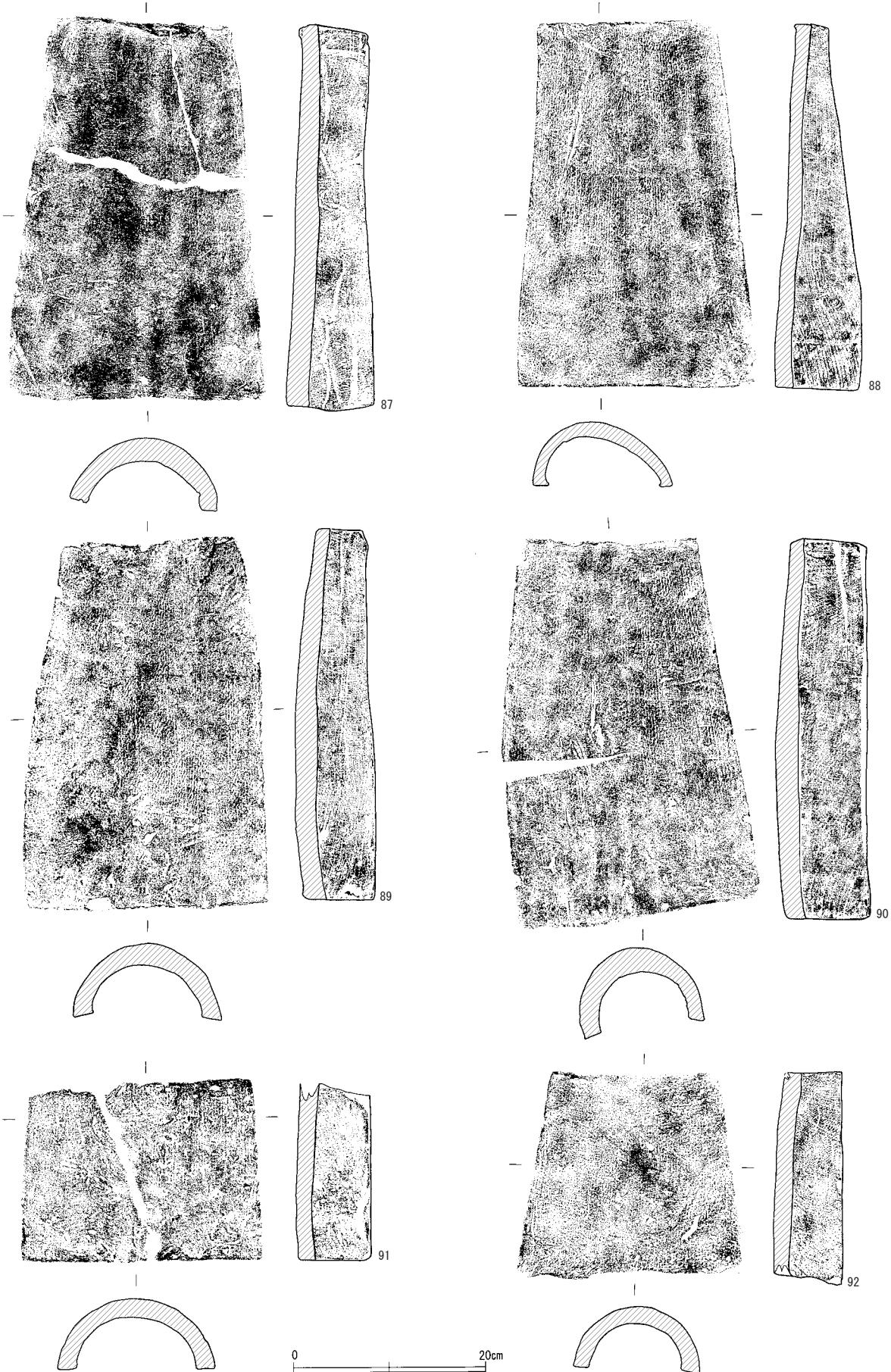


第 42 図 5-1 区 40、41、44、45、47- 土坑 出土遺物

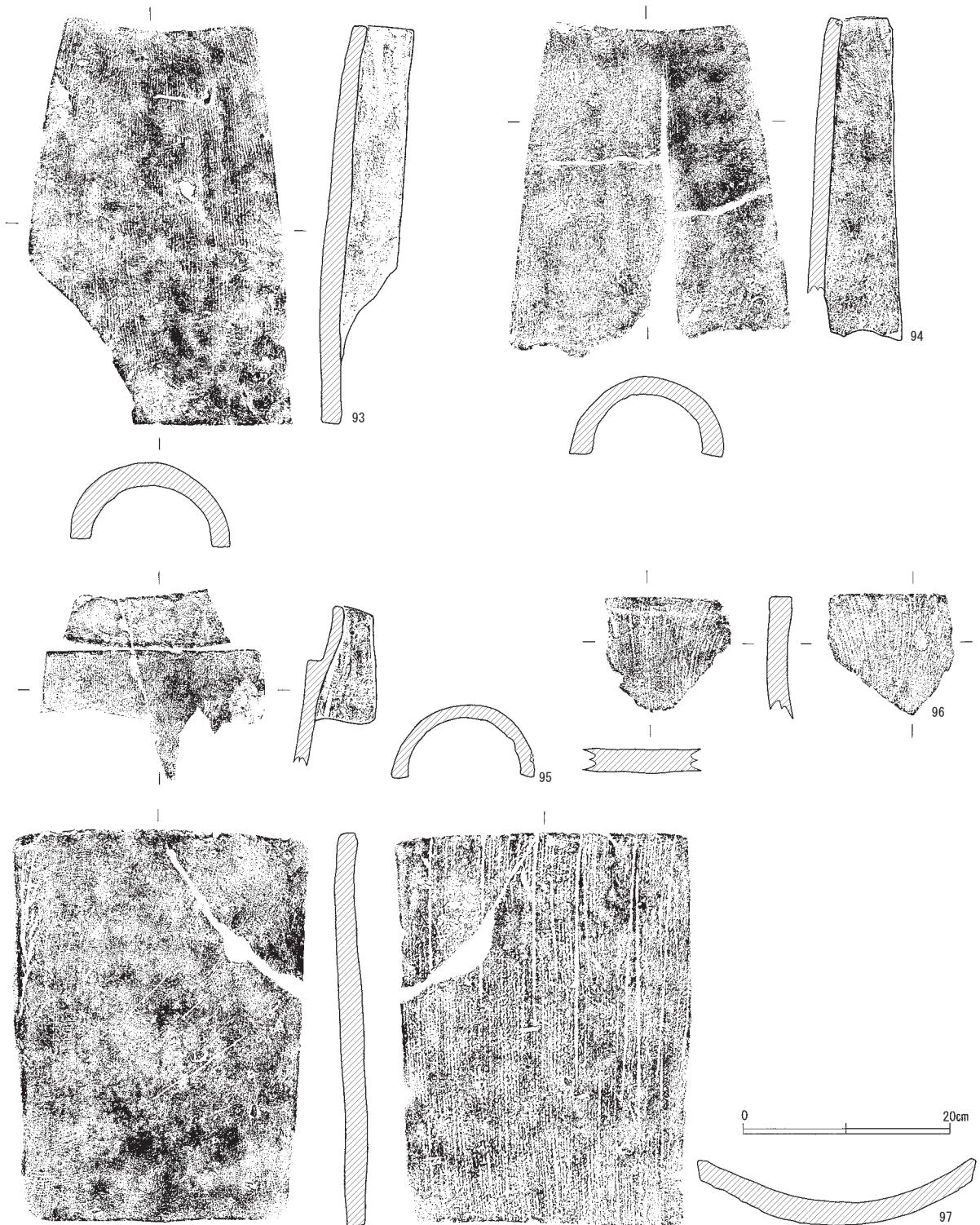
96は、凹面、凸両面に糸切り痕を明瞭に残す。97は一枚造りの平瓦である。凹面は糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。タタキの一部は、凹面・凸面ともに糸切り痕が明瞭に残る。



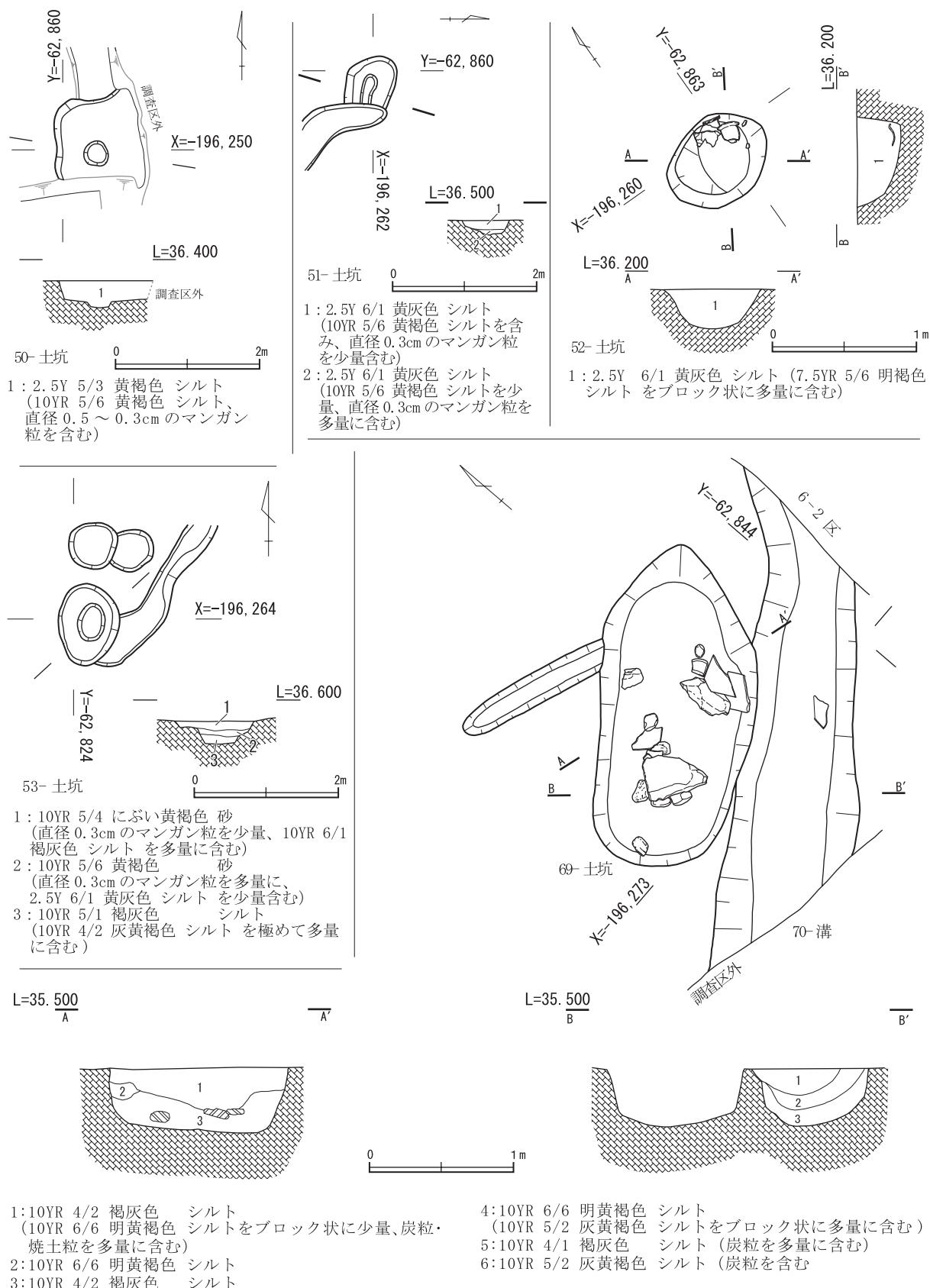
第43図 5-1区 48、49-土坑



第44図 5-1区 49-土坑 出土遺物（その1）



第45図 5-1区 49-土坑 出土遺物（その2）



第46図 5-1区 50、51、52、53、69- 土坑、70- 溝

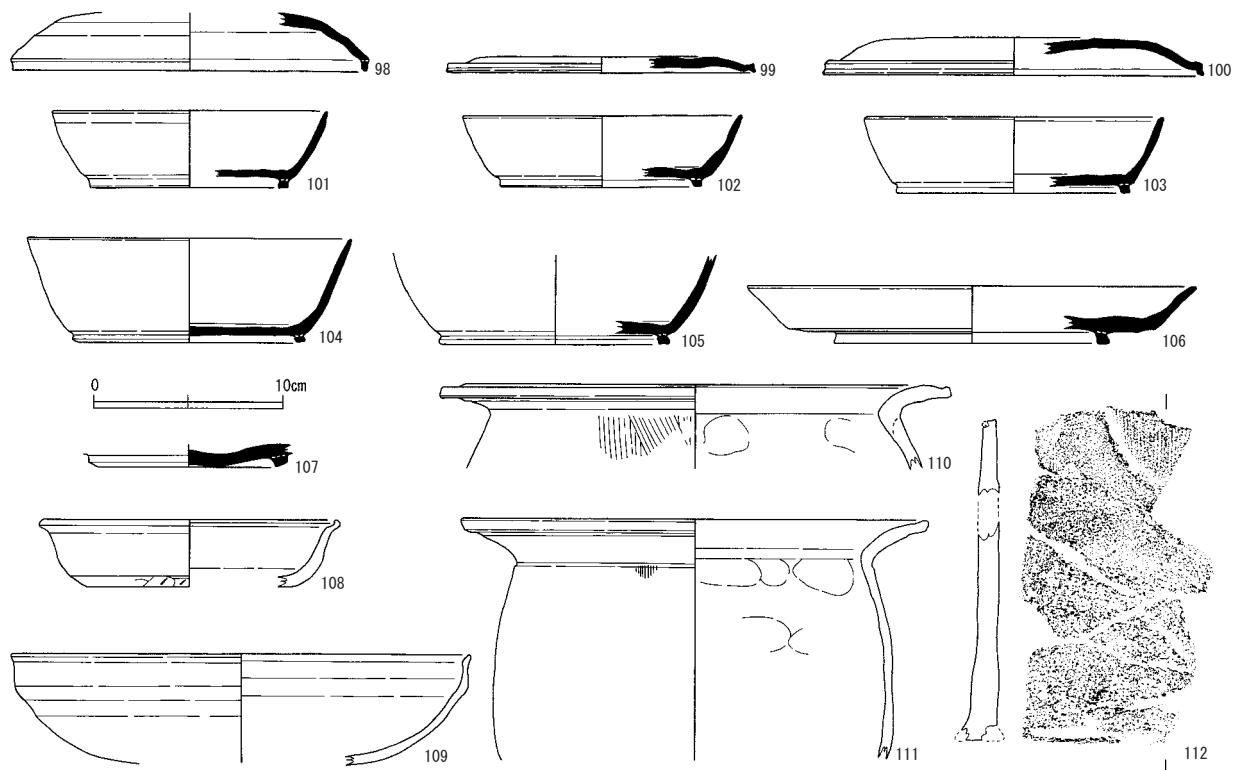
50- 土坑（第 46 図、第 47 図） 調査区東側、40- 土坑の南に位置する土坑である。一辺 1 m 程度の隅丸方形の土坑とみられる。しかし、南側は削平で失っており、東側は調査区外のため、詳細な形状は不明である。覆土は一層で、遺物と遺物との隙間に土が入っている状態であった。短期間のうちに大量の遺物で埋没したものと推定される。

平瓦 14 点、丸瓦 1 点、須恵器 100 点以上、土師器 100 点以上と多量の遺物が出土した。後述するが、遺構検出作業に先立って行った側溝掘削中にも当遺構の付近から大量の遺物が出土しており、実際に遺構内に埋没していた遺物量は、さらに多かったとみられる。

98 から 112 の 15 点を図示した。98 から 100 は須恵器の环蓋である。いずれも天井部分を欠損しており、摘みの形状は不明である。98 と 100 には口縁部端が明瞭に垂下するが、99 では不明瞭である。

101 から 105、106 は貼付け高台を有する須恵器の环身である。101 はほぼ垂直に立ち上がる高台を持つ。他の高台は、ハの字形に広がる。107 は底面が高台よりも下がった位置にあり、安定感に欠ける。106 は高台付の皿である。

108 から 111 は土師器である。108 は皿である。かすかに外傾しつつ立ち上がり、口縁部は横へ大きく張り出したのち、斜め内側に向かって突出させる。底面外部はヘラケズリ、それ以外はナデで仕上げる。109 は鉢である。器表の剥落が著しく、調整は分かりづらいが、底部外面がヘラケズリ、それ以外はナデである。胴部は丸みを帯びつつ立ち上がり、口縁部は垂直に伸びる。口縁端部は外傾している。110、111 は甕である。いずれも大きく外反す



第 47 図 5-1 区 50- 土坑 出土遺物

る口縁部を持ち、胴部外面にはハケ、内面には強いユビナデが観察される。112は竈片である。2次焼成を受けている。

**51- 土坑（第46図、第49図、写真図版44）** 調査区北西側に位置する土坑である。長辺約1mの隅丸方形の土坑である。中央は浅く細長い落込みが付随する。溝状の遺構に切られている。

須恵器6点が出土した。1点を図示した。113は、須恵器の台付き壺の底部である。ハの字形の安定感のある貼り付け高台を持つ。外面は並行タタキの後、タタキを消すように力キ目を密に施す。底部外面にもタタキ痕があるが、これはナデ消されている。内面は胴部が同心円状の当て具痕をナデ消して、底面がナデで仕上げている。焼成は良好で、表面は青灰色である。

#### 52- 土坑（第46図、写真3、写真図版9）

調査区東端に位置する土坑である。長径約0.8m、深さ約0.3mの平面橢円形の土坑である。埋土は1層で、ブロック状の堆積がみられることから、人為的に埋め戻されたものとみられる。底部から1個体の土師器の鍋が、割れた状態で検出された。

須恵器1点、土師器10点が出土した。このうち、ほぼ完形に復元された土師器の鍋1点を写真3で提示した。

**53- 土坑（第41図、第42図、写真図版9、写真図版44）** 調査区北東側に位置する。長径約1.2mの橢円形の土坑で、土坑中央は一段下がる。溝状の遺構を切っている。

須恵器19点、土師器7点、石器1点が出土した。石器1点を図示した。118はサヌカイト製の打製尖頭器である。内外面とも丁寧に剥離を施し、断面レンズ状に仕上げている。表面は、風化が著しく、また、先端および茎を欠損している。混入遺物であることは明らかだが、この地の人間活動の開始期を示唆する遺物として、提示した。

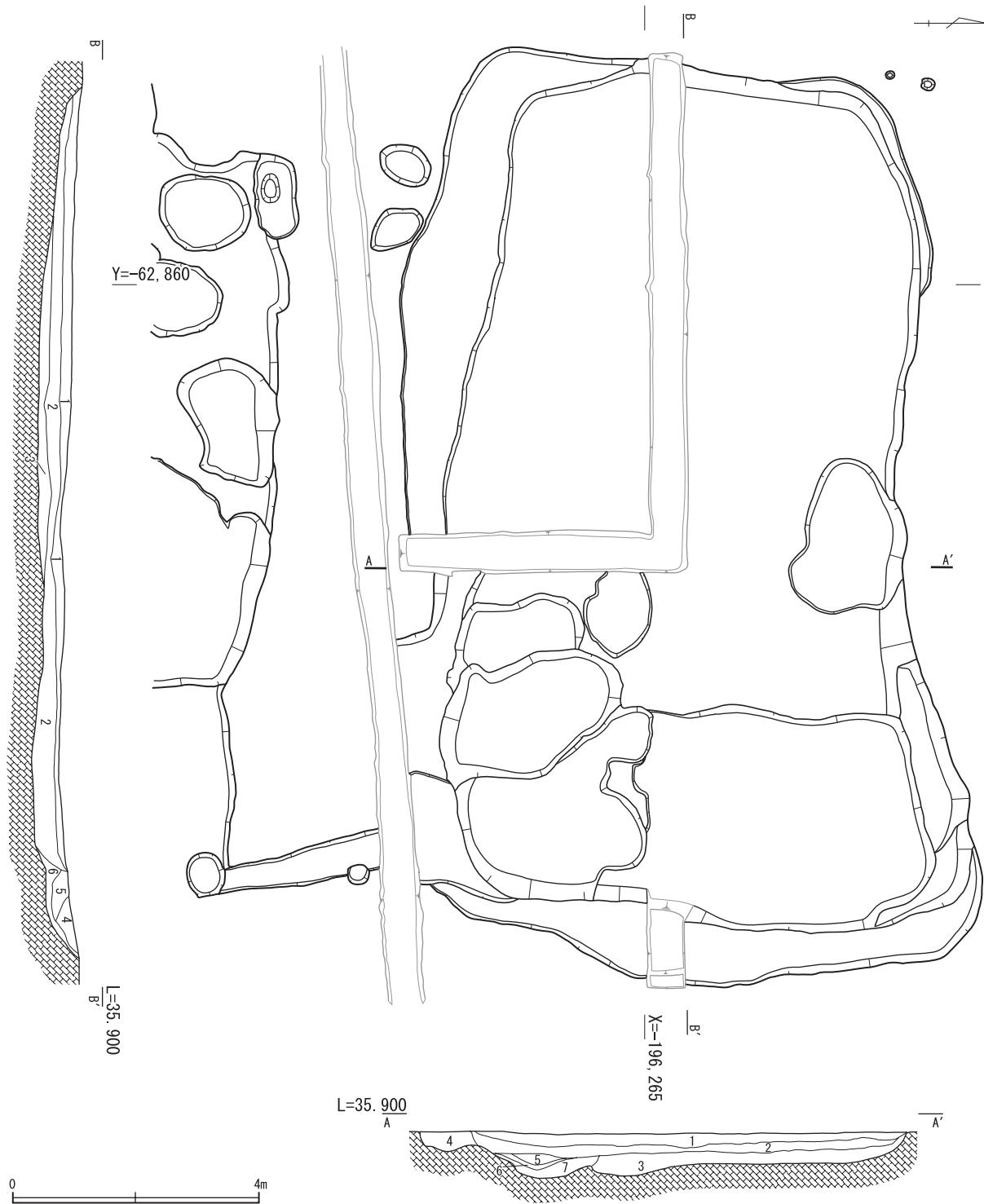
**54- 土坑（第48図、第49図）** 調査区東側に位置する土坑である。長辺約15m、短辺約8mの隅丸方形の大規模な土坑である。周囲の粘土採掘穴の埋土が黄褐色系のシルト質土を主とした特徴的なブロック状の堆積土なのに対し、54- 土坑は、灰色系の細かな粘土質の土が複数層にわたって、薄く広く堆積している。このため、粘土採掘坑とは性格が異なると判断し、土坑の項で報告することとした。底面は、西側が比較的平坦なのに対し、東側は凹凸が激しい。断面土層の観察から、凹凸の激しい部分は再掘削等が行われていた可能性が高い。

土坑の南東端には溝状の遺構が取り付いている。和歌山県教育委員会の試掘調査で、石がハの字状に落ち込んでいることが指摘された遺構である。全面を調査した結果、試掘調査で確認された2点以外の石塊は、確認できなかった。この溝状遺構は、南に向かって底面がや



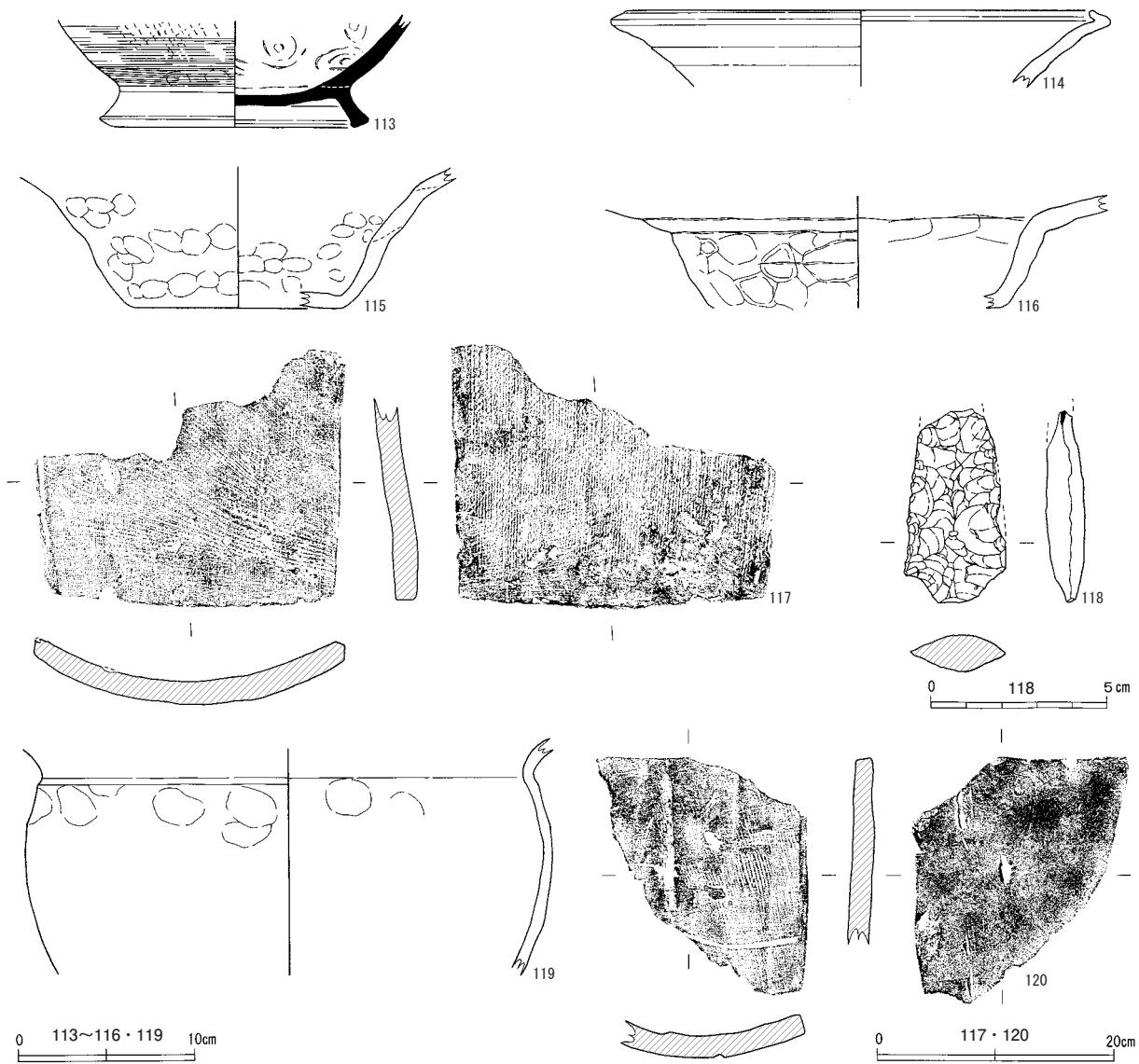
919

写真3 5-1区 52- 土坑 出土遺物



- 1 : 2.5Y 5/3 黄褐色シルト  
(10YR 5/6 黄褐色 シルト、10YR 6/1 褐灰色 シルトを含む)  
2 : 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘土  
3 : 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘土  
(5YR 5/8 明赤褐色 粘土を含む)  
4 : 2.5Y 5/3 黄褐色 シルト  
(10YR 5/6 黄褐色 シルトを含む)  
5 : 5GY 5/8 明赤褐色 粘土  
(2.5GY 6/1 オリーブ灰色粘土、5YR 5/8 明赤褐色 粘土を含む)
- 6 : 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘土  
(5YR 5/8 明赤褐色 粘土を含む)  
7 : 7.5YR 6/8 橙色粘土  
(2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘土を多量に含む)  
8 : 2.5Y 5/4 黄褐色 シルト  
(10YR 6/2 灰黄褐色砂を含む)  
9 : 2.5Y 5/4 黄褐色 シルト混じり粘土  
(7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粘土、10YR 6/2 灰黄褐色 砂を少量含む)  
10 : 2.5Y 5/4 黄褐色 粘土  
(2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘土を含む)

第48図 5-1区 54-土坑



第49図 5-1区 51、53、54、69- 土坑 出土遺物

や下がっており、先端が粘土採掘穴に切られているため断定は難しいが、54- 土坑に滞留した水を外部へ排出した役割を担っていたのであろうか。

土坑内からは、平瓦 100 点以上、丸瓦 100 点以上、須恵器 50 点以上、土師器 50 点以上、瓦器 1 点と多量の遺物が出土した。114 から 117 の 4 点を図示した。

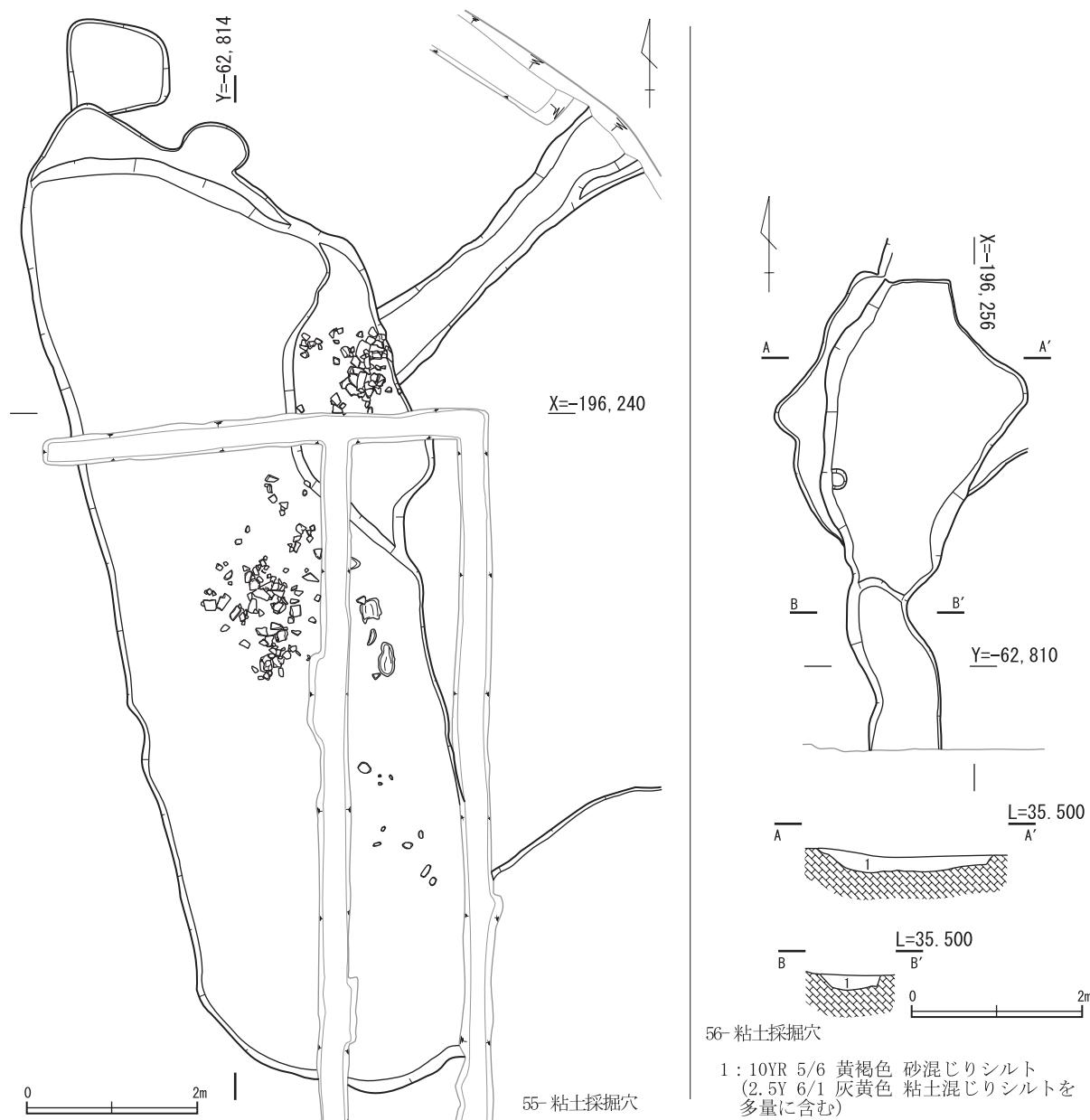
114 から 116 は土師器である。114 と 115 は接合しなかったが、同一個体の可能性がある。115、116 ともに底部は平坦で、口縁部は朝顔形に大きく開く。調整は単位が明瞭に残るユビ押さえのみと非常に粗く、表面には粘土紐の積み上げ痕が残っている。胎土は砂粒を多量に含み、粗い。内外面には、タール状の炭化物が付着している。北山廃寺、北山三嶋遺跡では、50- 土坑からのみ出土した器種である。

69- 土坑（第 46 図、第 49 図、写真図版 10） 調査区南端に位置する。長径約 2.2 m の楕円形の土坑である。70- 溝を切っている。主として 3 層から遺物が出土している。

平瓦 2 点、須恵器 3 点、土師器 18 点が出土した。2 点を図示した。119 は土師器の鍋である。2 次焼成を受けており、器面の荒れが激しいが、内外面とも、口縁部の直下に明瞭なユビ押さえ痕がみられる。120 は桶巻造りの瓦である。凹面には糸切り痕と布目痕が観察される。凸面は丁寧にナデ調整を施し、タタキを消している。

#### 粘土採掘穴（第 50 図から第 54 図、写真 4、写真図版 10）

調査区の南東側、調査前の現況地形で一段低くなった地盤のうち、68- 溝よりも北側に広がる不整形の土坑群である。



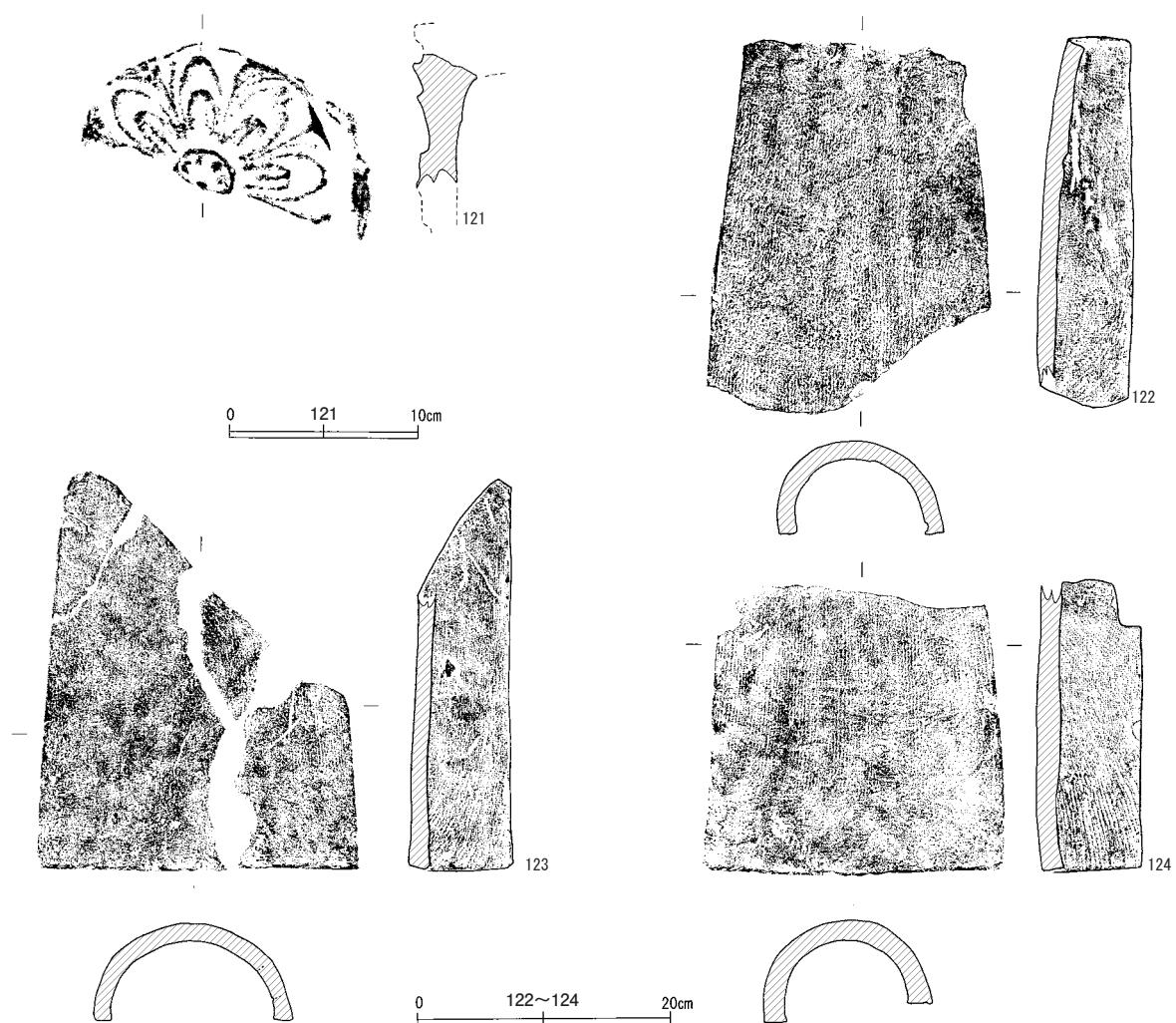
第 50 図 5-1 区 55、56- 粘土採掘穴

規模は、直径 0.5 m 程度の小穴から、4 m を超えるものまであり、一定しない。断面形状も、規則性がなく、垂直に掘り込むもの、断面逆台形に掘り込むもの、内部に段があり、一部のみ深く掘削しているものなど、さまざまである。ただし、いずれも基本層序（第4図）第5層上面で掘削を停止するという共通点を持つ。

埋土は、10YR5/6 かそれに近い色調の基本層序第4層、基本層序第5層にあたる 2.5Y6/1 かそれに近い色調のシルト質の土に起源不明の 2.5Y5/3 などのやや黒みを帯びた黄褐色系の土がブロック状に堆積したものである（写真4、写真図版10）。

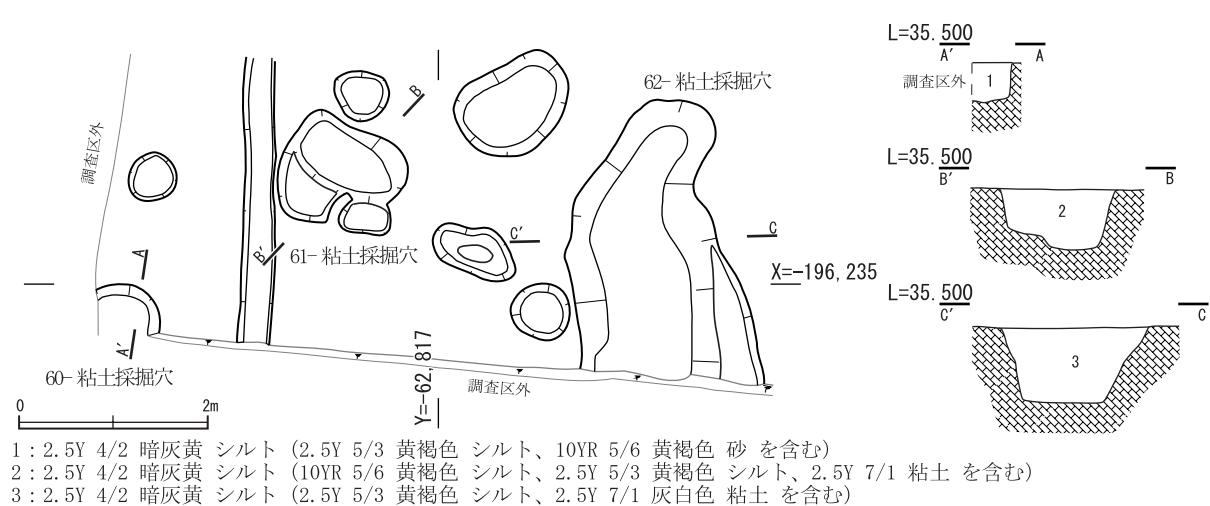
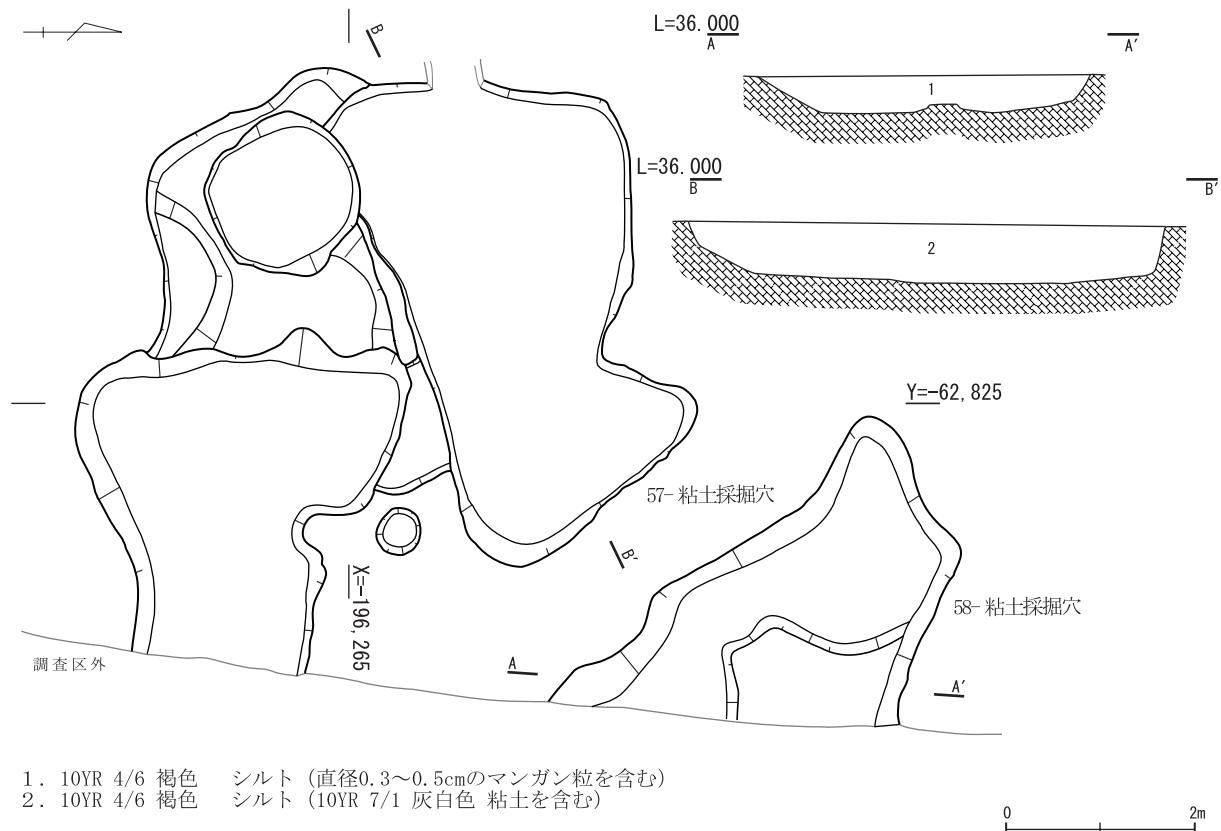


写真4 5-1区 66-粘土採掘穴断面土層

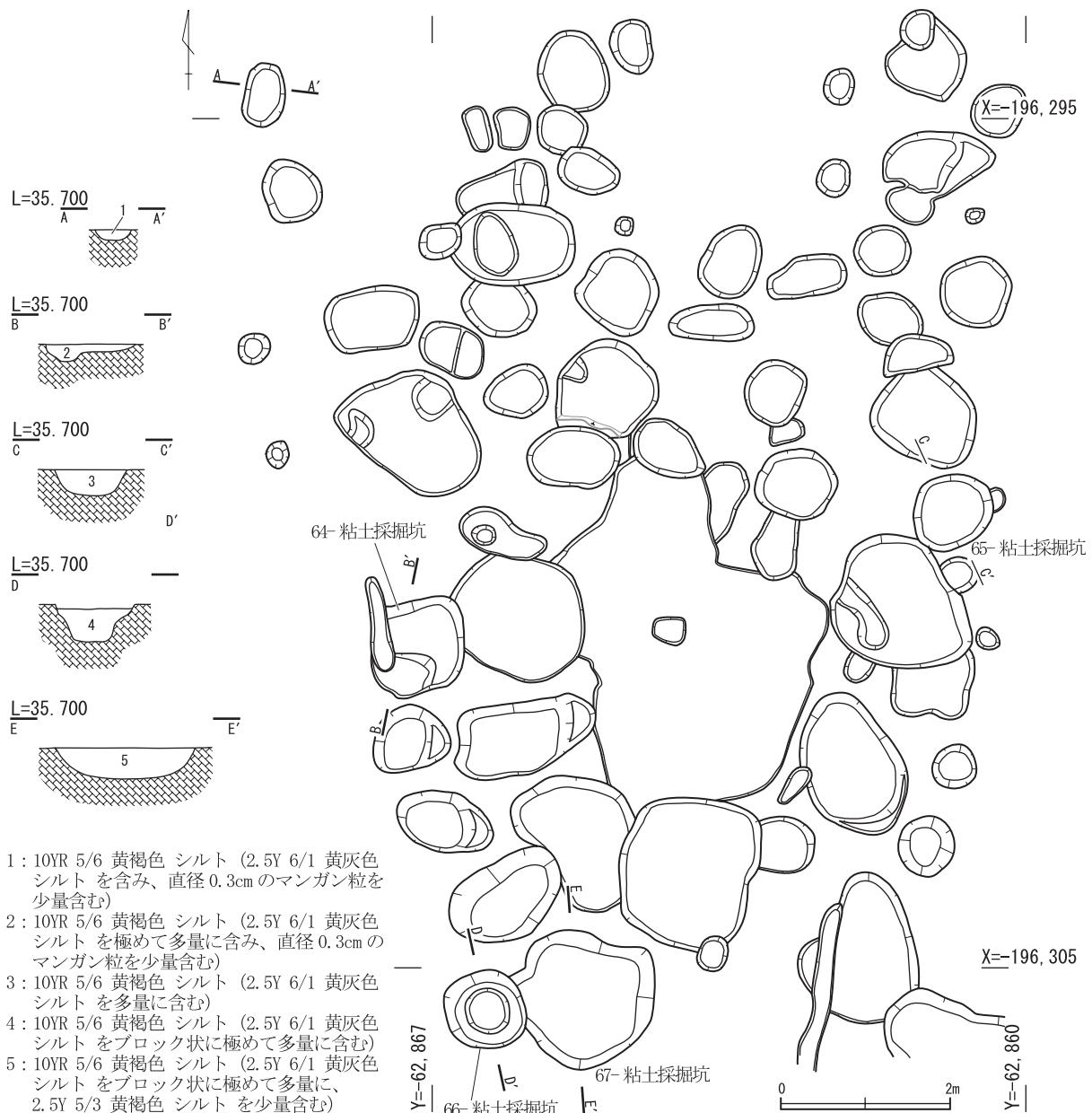


第51図 5-1区 55、56-粘土採掘穴 出土遺物

土坑の範囲や相互の切り合い関係は、それぞれの埋土に含まれる3種類の土の割合の差をもとに判断している。極めて近接した地点を繰り返し掘削しているものもある。59-粘土採掘穴は、その代表例で、個々の掘削単位を弁別できず、大きく溝状に広がる遺構として検出、掘削を行った。このように、本報告で図示した形状は、必ずしも当初掘削時のそれと同じとは限らないことに注意されたい。



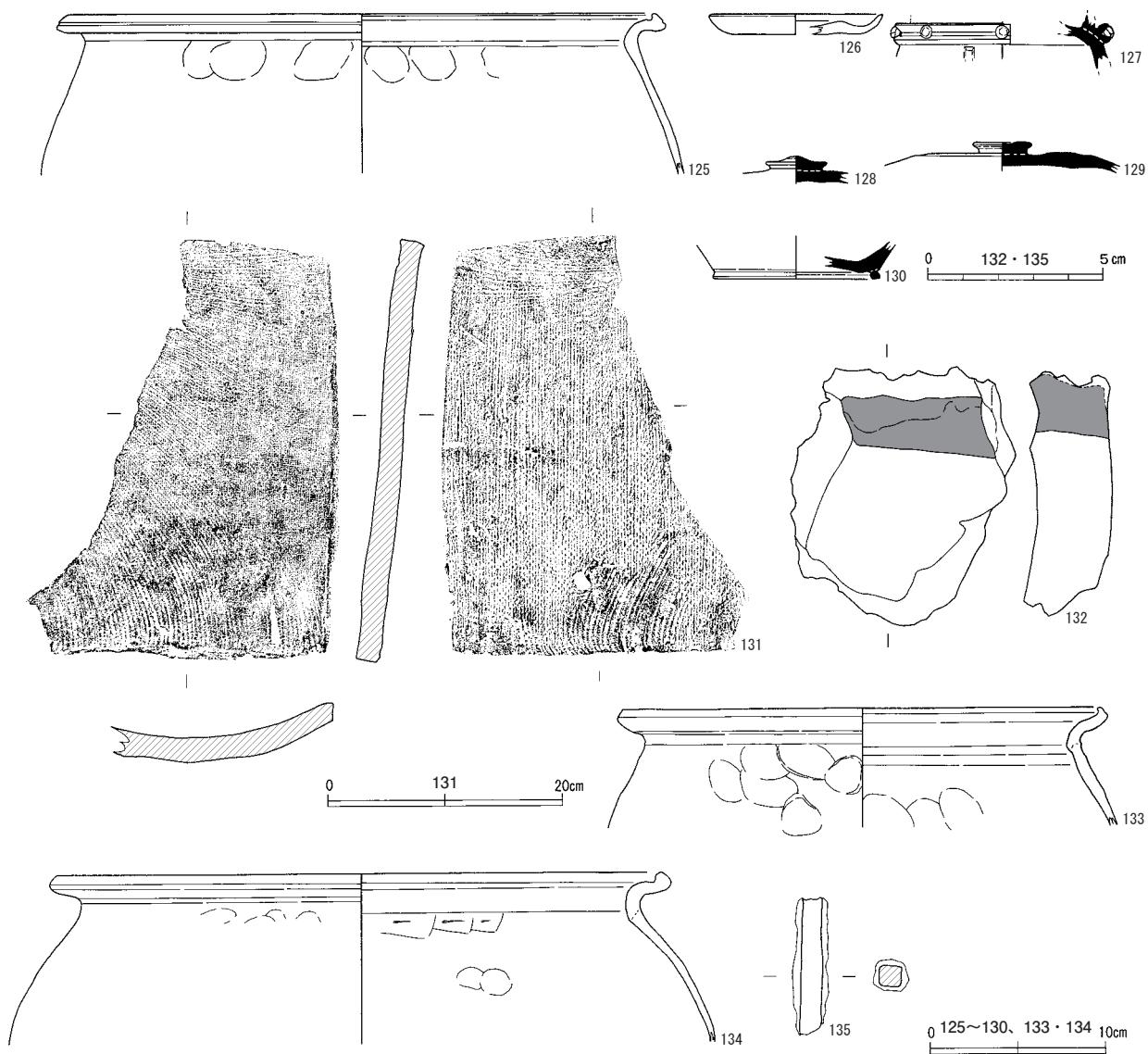
第52図 5-1区 57、58、60、61、62-粘土採掘穴



第 53 図 5-1 区 64、65、66、67- 粘土採掘穴

55- 粘土採掘坑のように遺物がまとまって出土することは珍しく、大半の例では、小片が数点出土するにとどまる。121は55- 粘土採掘穴から出土した軒丸瓦である。貴志川町教育委員会による発掘調査報告書で、A類とされたものである。122から124は、56- 粘土採掘穴出土の丸瓦である。いずれも凹面には糸切り痕と布目痕がみられ、外面には縄目タタキが施されている。125は57- 粘土採掘穴から出土した鍋である。胴部は内外面ともナデ調整。口縁部直下にはユビ押さえの痕跡が明瞭に残る。大きく屈曲し、端部は斜め上へつまみ出す、北山廃寺、北山三嶋遺跡で普遍的に出土する鍋の口縁形態を有する。

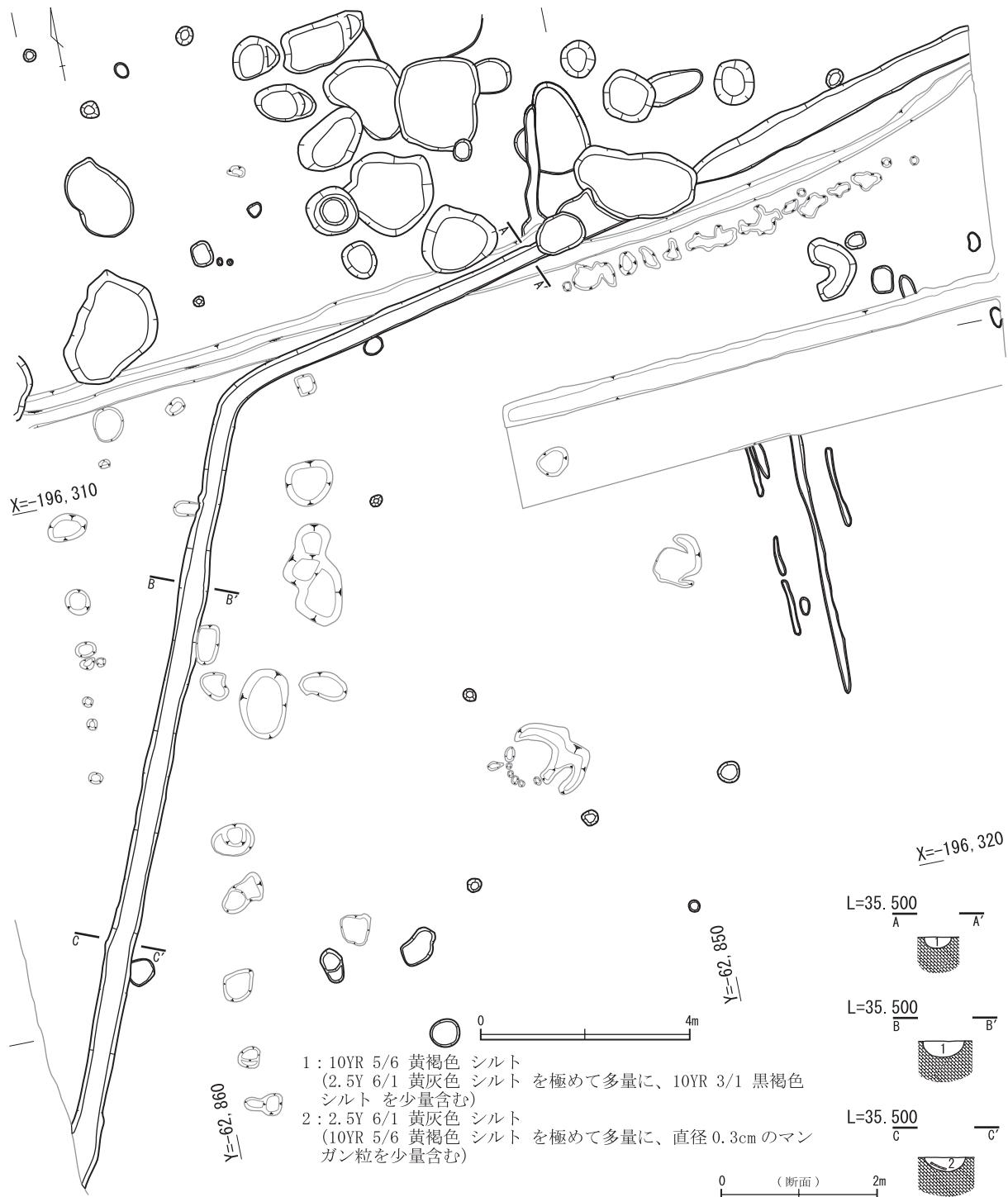
126から128、131は58- 粘土採掘穴から出土した。126は土師器の小皿である。127は破損が著しいが円面鏡である。圈脚円面鏡であろう。128は須恵器の壊蓋である。131は一枚造りの平瓦である。凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキ



第 54 図 5-1 区 粘土採掘穴 出土遺物

を施し、糸切り痕を消している。

129 は 59- 粘土採掘穴から出土した。須恵器の坏蓋である。130 は 64- 粘土採掘穴から出土した須恵器の坏身である。ほぼ直立する貼付け高台を持つ。132 は 63- 粘土採掘穴から出土した。高温で上端がガラス化した粘土板である。炉壁の一部であろうか。133 は 60- 粘土採掘穴から出土した鍋である。胴部は内外面とも連続的な強いユビ押さえの痕跡が残る。口縁部は、大きく屈曲し、端部は斜め上へつまみ出す、134 は 62- 粘土採掘穴の鍋である。大きさ、口縁部形態とも 125 に似るが、外面は強いナデ、内面はヘラケズリで調整している。胴部にはスヌが付着している。135 は 61- 粘土採掘穴から出土した。断面正方形の小形の鉄器であるが、性格は不明である。釘の一部であろうか。



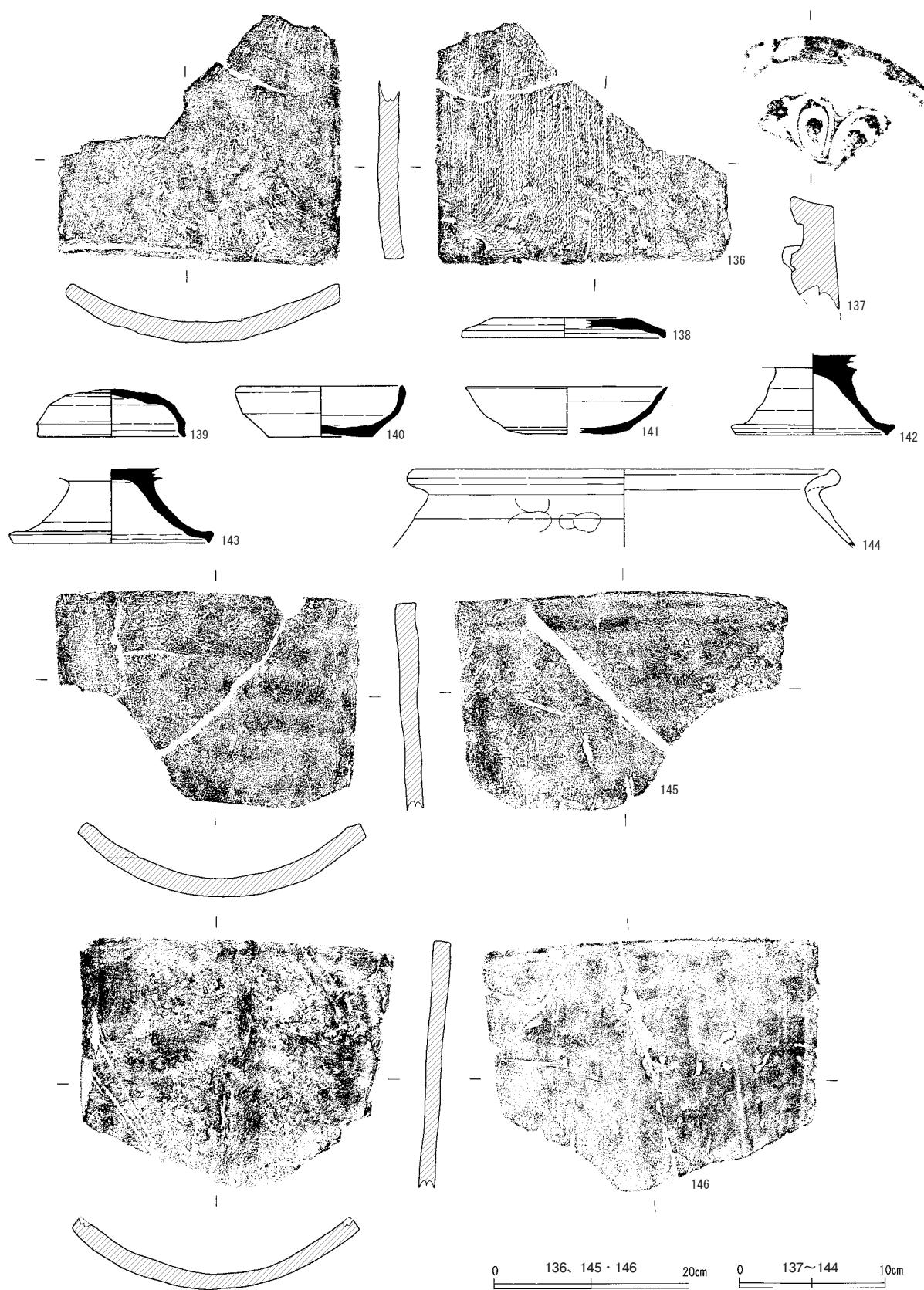
第 55 図 5-1 区 68- 溝

## 溝

**46- 溝 (第 56 図)** 調査区の北側に位置する。幅約 0.6 m、深さ約 0.2 m の溝である。底面は南に向かって傾斜している。

軒丸瓦 1 点、平瓦 25 点、丸瓦 8 点、須恵器 13 点、土師器 21 点が出土した。このうち、136 から 138 の 3 点を図示した。136 は平瓦である。一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。137 は軒丸

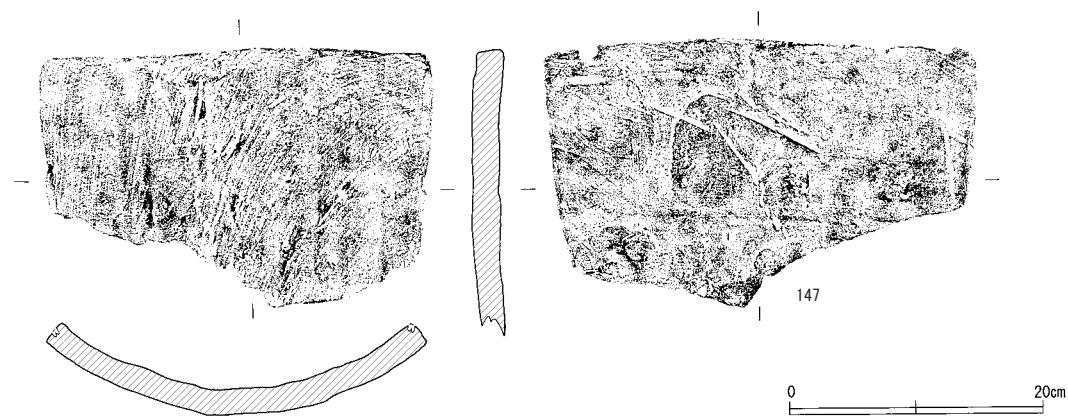
瓦である。貴志川町教育委員会による発掘調査報告書で、B類とされたものである。138は須恵器の坏蓋である。



第56図 5-1区 46、68-溝 出土遺物

68- 溝（第 55 図、第 56 図、写真図版 44） 調査区の西端に位置する。幅約 0.6 m、深さ約 0.2 m の溝である。調査区を東西方向に横切ったのち、南北方向に鈍角に折れる。底面は南に向かって傾斜している。

平瓦 12 点、須恵器 45 点、土師器 23 点が出土した。瓦器や中世の須恵器は出土していない。このうち、139 から 146 の 8 点を図示した。139 は須恵器の壊蓋である。天井部はヘラ切り離しの後、調整を行わない。口縁部は、僅かに外傾する。成形、調整時の歪みが著し



第 57 図 5-1 区 70- 溝 出土遺物



第 58 図 5-1 区 43- 土器集中部

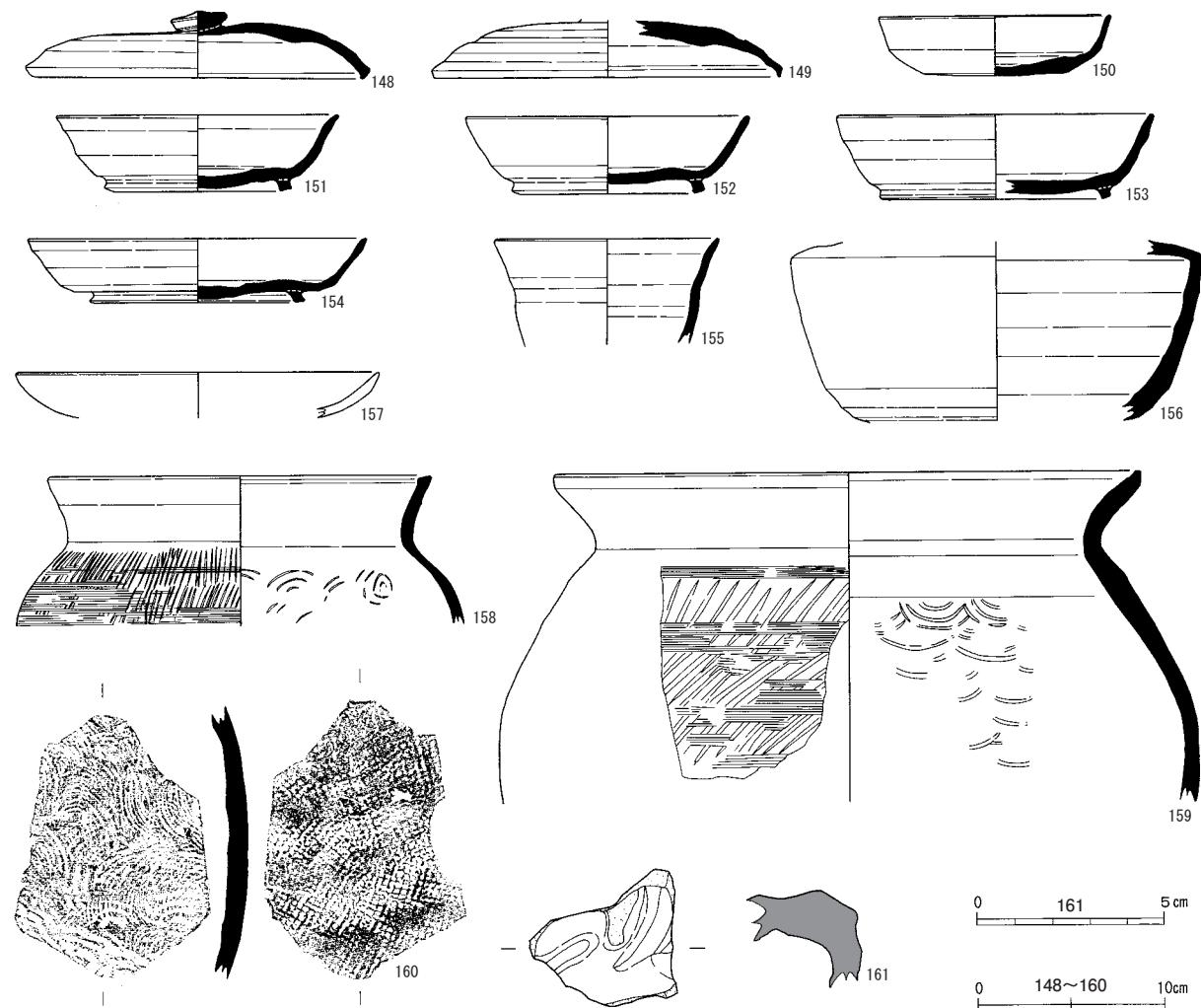
い。140、141は須恵器の坏身である。底部外面はヘラ切り離しの後、調整を行っていない。142から143は須恵器の高坏脚部である。145、146は桶巻造りの平瓦とみられるが、凹面に模骨痕が残っていない。凸面は、丁寧にナデて仕上げている。145の凹面には、粘土板の接合痕が確認される。

**70- 溝（第46図、第49図写真図版10）** 調査区南端に位置する。6-2区131-溝と同一遺構である。69-土坑に切られている。

平瓦1点、須恵器2点、土師器16点が出土した。平瓦1点を図示した。147は桶巻造の瓦で、凹面をナデ調整しているが、中央付近に1条だけ縄痕が付いている。

### 土器集中部

**43- 土器集中部（第58図、第59図、写真図版45）** 調査区北側に位置する。耕作土直下に周辺の包含層よりも黒みの強い土が約2m四方に広がっており、その中から遺存度の良好な土器が集中して出土した。遺物の密度が異常に高かったため、出土状況を記録している。



第59図 5-1区 43- 土器集中部 出土遺物

この地点から、平瓦 11 点、須恵器 100 点以上、土師器 200 点以上、瓦質製品 1 点が出土した。このうち、148 から 161 の 14 点を図示した。148 は摘み付きの須恵器の坏蓋である。歪みがやや激しく、摘みが傾いている。149 は坏蓋だが、天井部分を欠損している。口縁部端は、若干だが垂下する。

150 は須恵器の坏身である。底面にはヘラケズリ調整を施している。151 から 153 は、貼付け高台を有する坏身である。154 は器高が低く口径の大きい、高台付の坏身、あるいは皿である。

155 は、須恵器の壺の口縁とみられる。156 は須恵器の壺の胴部である。157 は土師器の皿である。内外面とも表面の剥落が著しく、調整は不明である。

158、159 は須恵器だが、焼成不良で土師器に近い色調である。160 は、須恵器の甕の胴部とみられる。外面には格子タタキ、内面には細かな同心円状の当て具痕を密に残る。北山廃寺、北山三嶋遺跡出土の甕は、外面に並行タタキ、内面に 160 よりも粗い同心円状の当て具痕を残すものが多く、160 のような整形、調整具の組み合わせは数が少ないと想定した。

161 は、いわゆる「瓦猿」の胴体、両手で桃を抱えている部位であろう。

瓦猿が出土していることから、43- 土器集中部の形成時期は近世以降まで下ることが確実である。しかし、この地点に土器が集中している理由は、明らかにすることができなかった。農作業の障害となるこれら土器片等を一ヶ所に集積したものが埋没したものであろうか。

#### 包含層（第 60 図から第 62 図、写真 5、写真図版 44）

調査区東側、40- 土坑から 50- 土坑にかけての調査区界に側溝を掘削した際、出土した遺物を第 60 図に図示した。調査当時の記録から、大半が 50- 土坑から出土したとみられるが、確定できないため、本項目で扱う。

162 は平瓦である。一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした繩目タタキを施している。

163 は須恵器の坏身である。底面は粗くヘラケズリ調整を施したのち、ナデで仕上げている。164 須恵器の坏身である。底部はヘラケズリの後、ナデで仕上げている。口縁部は大きく外反し、端部は丸く收める。165 は高台付の坏身の転用硯である。坏の内面を硯として使用している。166 は金属器模倣の須恵器とみられ、胴部に切り込みがみられる。

167 は甕の口縁部である。ほぼ直立し、ナデによる稜線が明瞭に残る。168 は須恵器の甕だが、やや軟質の焼き上がりで、断面は薄い橙色である。外面は並行タタキの後、カキ目を施す。内面は、胴部がユビ押さえ、口縁部直下には連続的に非常に強いユビオサ工を施している。胴部と口縁部との接合部分には、ヘラ状工具で横方向にナデしているが、先端に凹凸があったためか、カキ目状になっている。

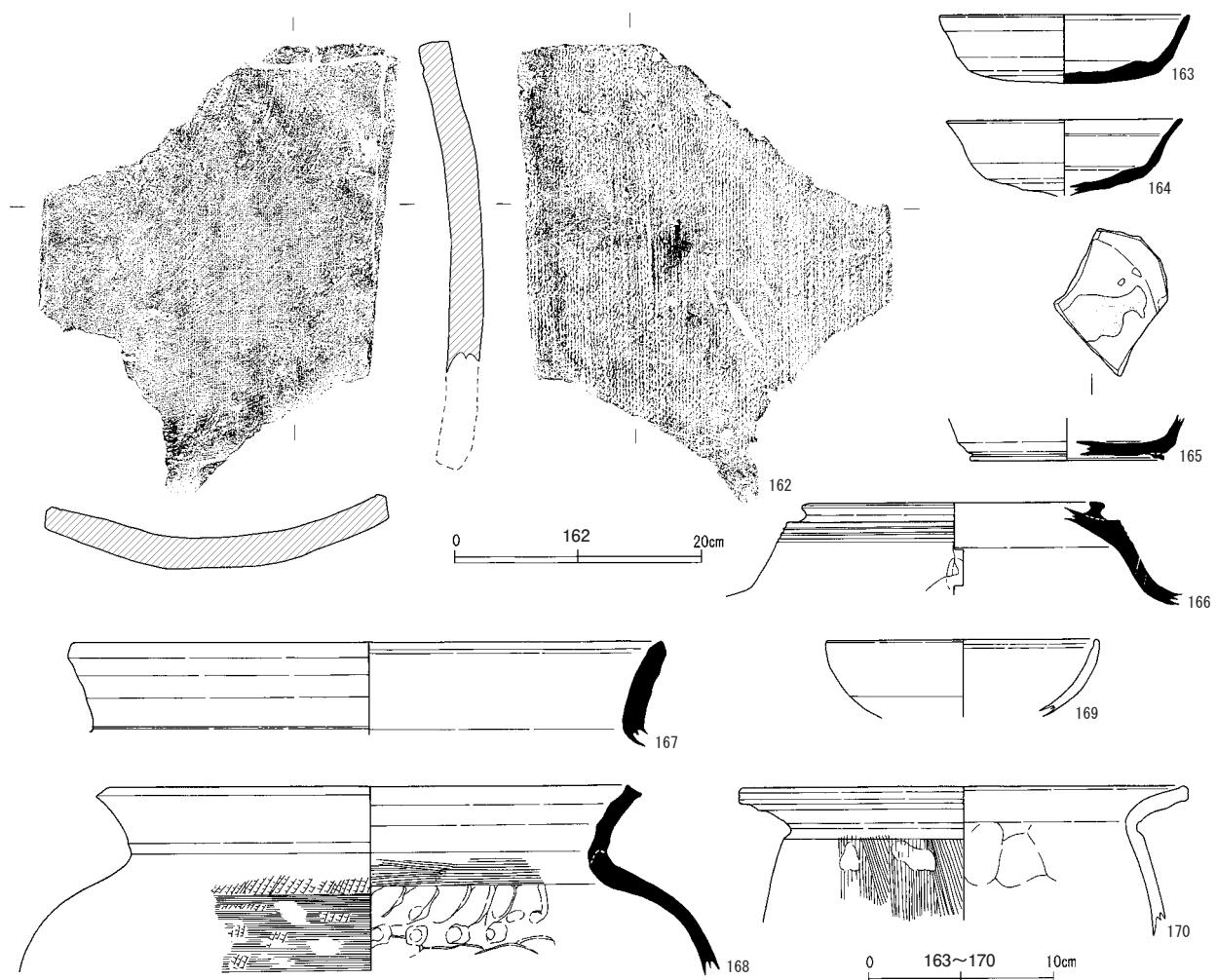
169 は土師器の碗である。表面の荒れが激しく、調整等は不明である。口縁部内側には、沈線をめぐらす。170 は土師器の鍋である。口縁部は大きく外反する。胴部外面は、ハケを施した後、一部に指頭圧痕が付く。内面は、連続的なユビ押さえで調整している。

第 61 図、62 図は包含層出土遺物である。調査区が広いためか、包含層出土遺物の量も少なくない。北山廃寺、北山三嶋遺跡を特徴づけると考えた遺物を抽出して図示した。

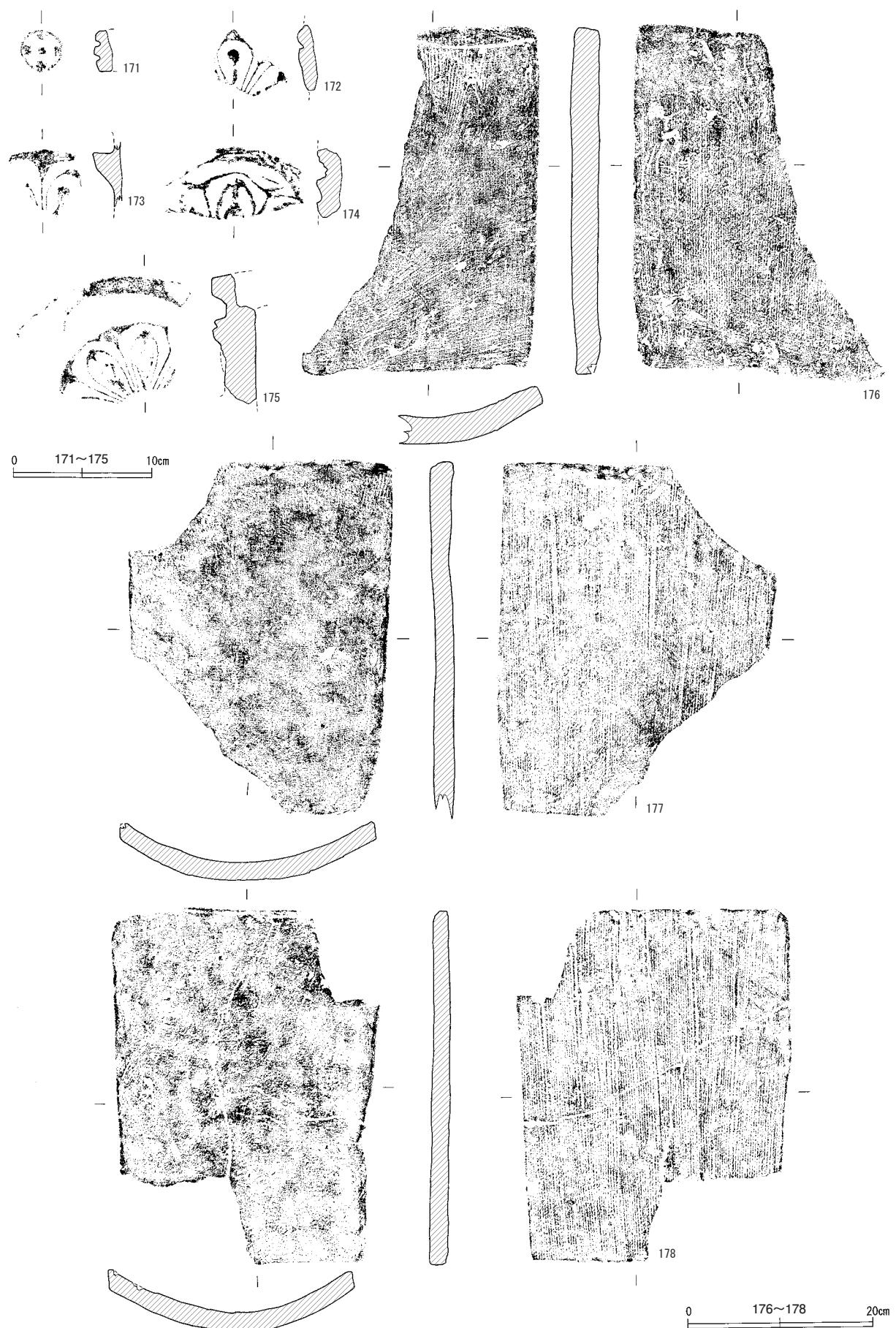
171 から 175 は軒丸瓦である。171 のように中房のみのものをはじめ、いずれも小片である。

176 から 178 は一枚作りの平瓦で、凹面に糸切り痕と布目痕を残し、凸面には縄目タタキを整然と施す。広端面には指頭圧痕の観察されることが多い。北山廃寺、北山三嶋遺跡で最も目にするこの多い特徴を持つ平瓦である。181 は凸面に縄目タタキを施した丸瓦 2 個体が融着している。182、183 はサヌカイト製の石器である。182 は主剥離面を一部に残す石鏸である。193 は断面台形の石器である。裏面には調整を受けないままの主剥離面がそのまま残る。

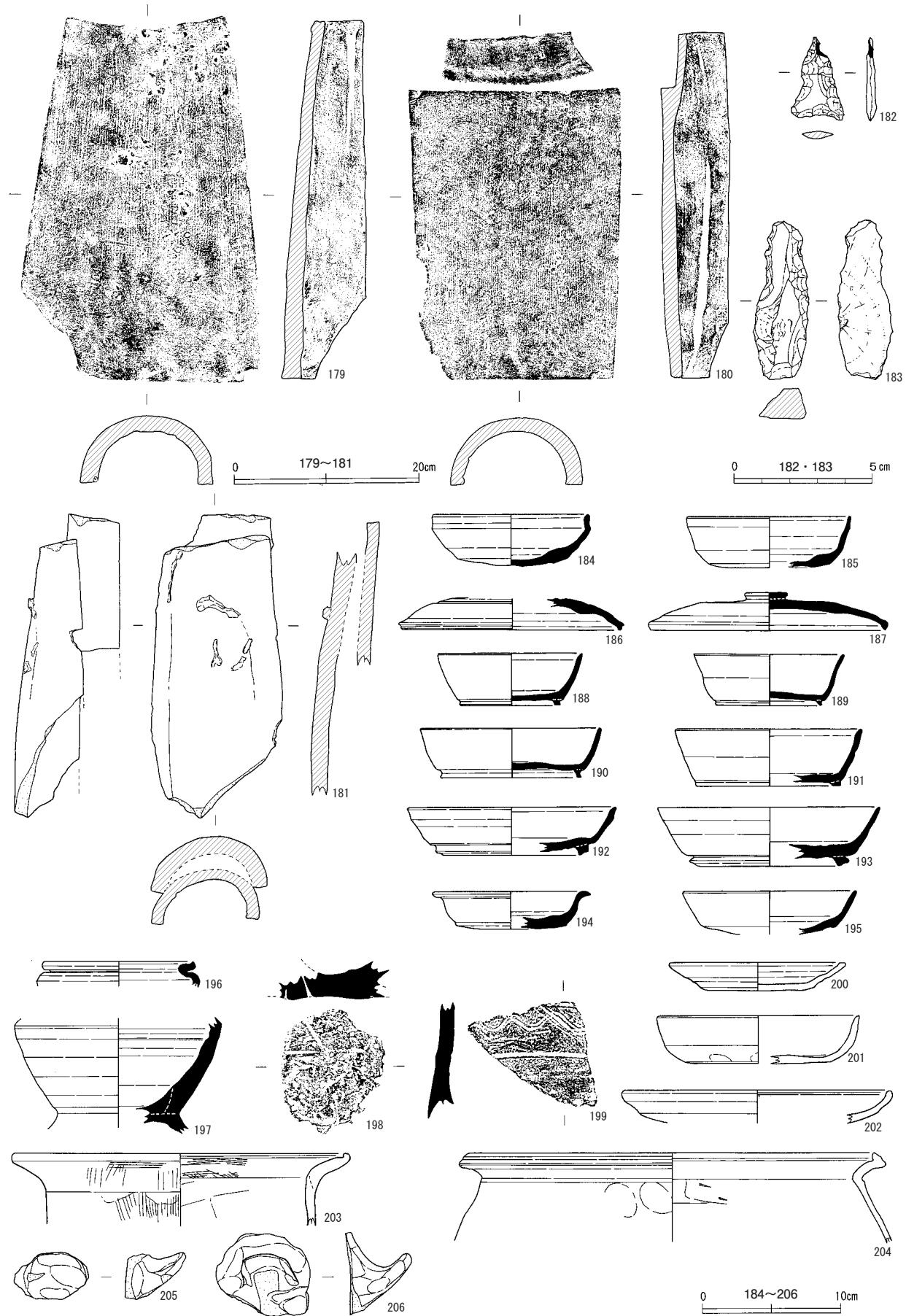
184 から 199 は須恵器である。184 は坏身である。ヘラ切り離しのまま未調整の底部を持ち、口縁部は内傾し、端部は丸く收める。185 は底面の一部をヘラケズリ調整する。口縁部は、緩やかに外傾しつつ立ち上がる。



第 60 図 5-1 区 水路西側側溝掘削中 出土遺物



第61図 5-1区 包含層 出土遺物（その1）



第62図 5-1区 包含層 出土遺物（その2）

186、187 は壺蓋である。いずれも口縁端部をわずかに垂下させる。187 には扁平な摘みが付く。188 から 193 は貼付け高台付の壺身である。194 は底面をヘラケズリで仕上げ、口縁部端を水平につまみ出す。195 は高壺の壺部とみられる。

196 は須恵器の小形の壺である。口縁部は強く屈曲している。197 は台付き壺の底部から胴部である。高台は、破損している。198 は捏鉢の底部である。貫通しないものも含め、刺突が施されている。199 はごく甘い波状文を施した口縁部片である。

200 から 206 は土師器である。200 は皿で、内面にはナデの単位が明瞭な稜線を形成している。口縁部にはススが付着し、見込みには糲圧痕がみられる。201 は皿である。全体をナデで調整している。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。202 は皿である。表面の荒れが非常に激しく、単位の把握も困難ではあるが、内面には暗文が施されているようである。口縁部内面には、沈線がめぐる。203 は甕である。口縁部は大きく外反し、端部は僅かにつまみ出す。外面は胴部がハケ、口縁部はハケの後ナデで、内面は胴部がヘラナデ、口縁部が細かな単位のハケで調整している。204 は鍋である。口縁部は、大きく屈曲し、凹線をめぐらしている。端部は斜め上へつまみ出す。205、206 は土師器の把手である。

920 は羽口である。表面はガラス化し、礫等が付着している。918 は滓である。滓として一括したが、性格は異なるようである。左側のものはごく軽く、イネ科植物の纖維痕が混和されている。中央の 2 点は、部分的に赤錆が発生しており、磁着する。右下の円形の滓は、緑青が付着している。

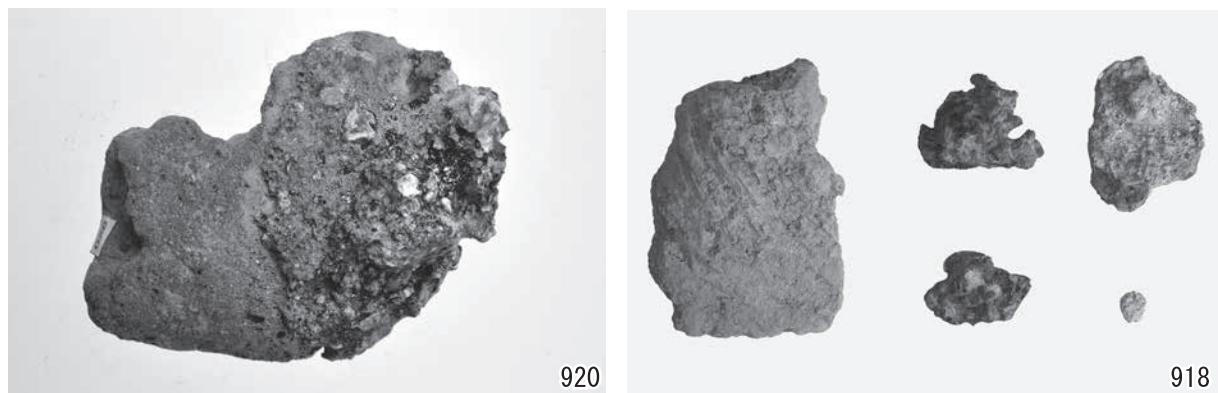


写真 5 5-1 区 包含層出土遺物

## 第7節 5-1区 第2遺構面

(第63図から第66図、写真図版11)

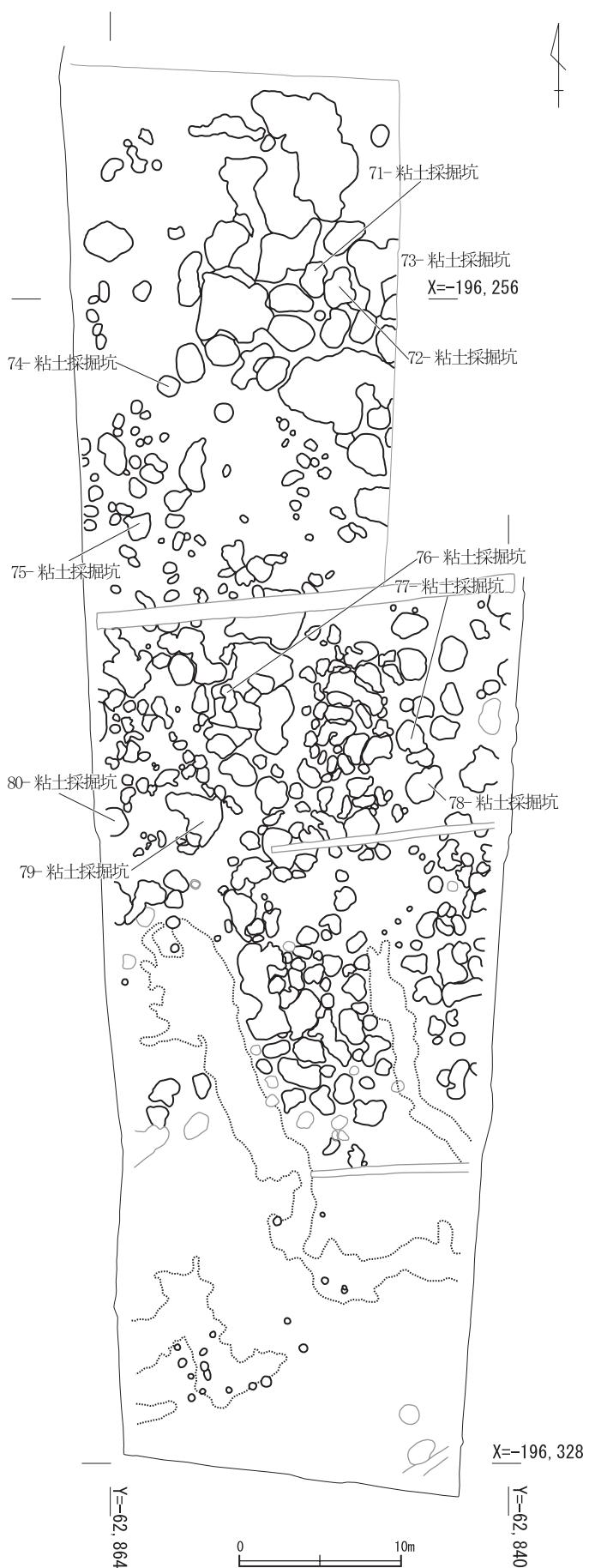
### 調査区の概要

5-1区のうち、2008(平成20)年度の調査は、西側約1,700m<sup>2</sup>を対象とした。南北約90m、東西約20mの調査区である。基本層序(第4図)第5層上面を検出面として調査を実施した。調査区南西側を除く全面で粘土採掘穴を検出した。遺構密度に比して遺物出土数はごく少ない。包含層にあたる第4層からの遺物も少なく、図示できたのは、209の土師器鍋の1点だけである。

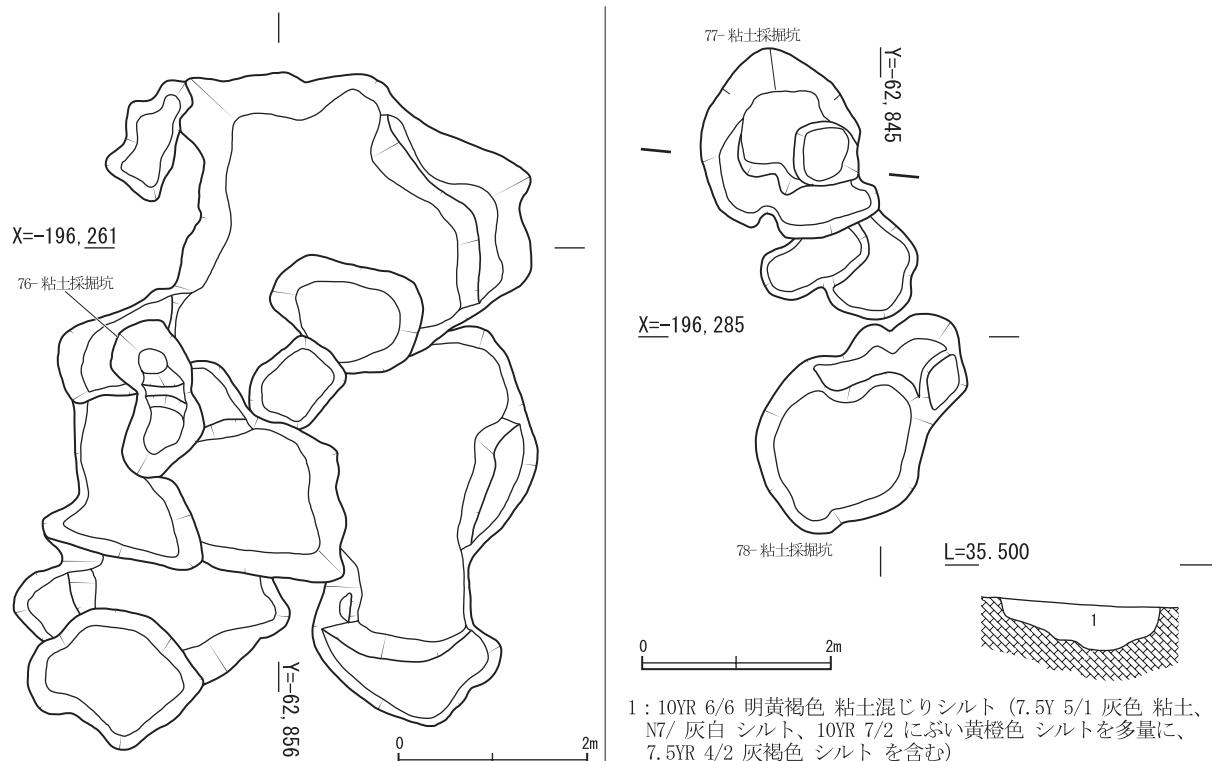
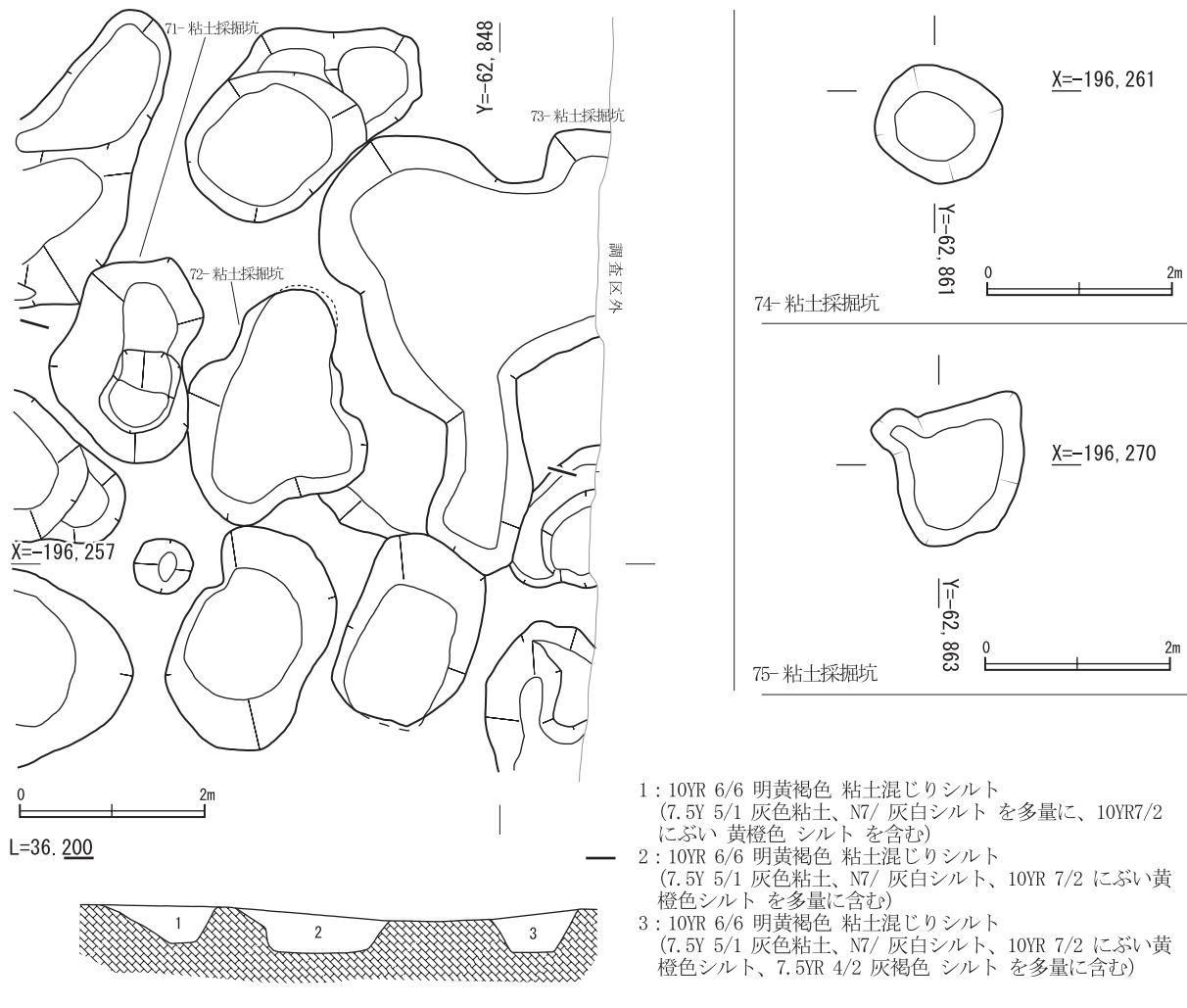
### 粘土採掘穴(第64図から第66図、写真図版11)

調査区の広い範囲から検出された。検出されなかった南側の地点では、検出面の土が砂質を帶びている。第63図には、検出面の土が直径約0.5cmの礫を極めて多量に含んでいる範囲を破線で示したものである。遺構の大半が、あるいは礫質土を避けて掘削していることが見て取れよう。

粘土採掘穴は、第1遺構面の粘土採掘穴と同様に、不整形の土坑である。深さ0.1m程度のごく浅いものと、0.5m以上の深いものとに大別される。採掘穴によっては、断面がフラスコ型になっている。このうち、浅い土坑に関しては、底面が砂質を帶びているものが多い。深いものに関しては、第5層のさらに下層のN4/の非常によく締まった粘土の上面で掘削を停止している。



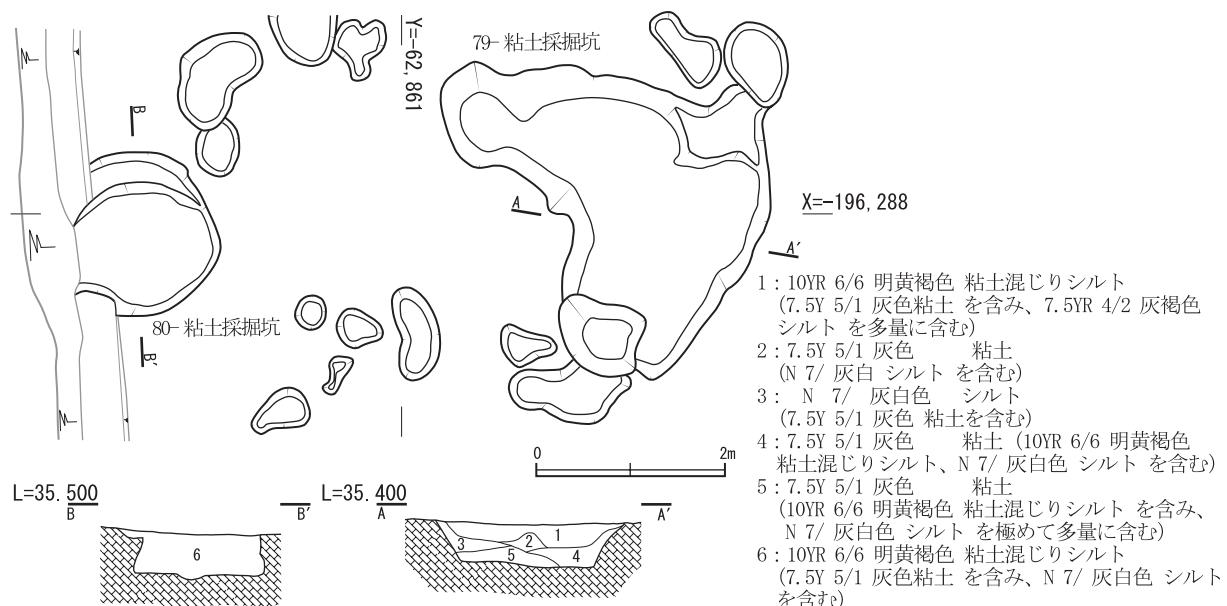
第63図 5-1区 第2遺構面 遺構全体図



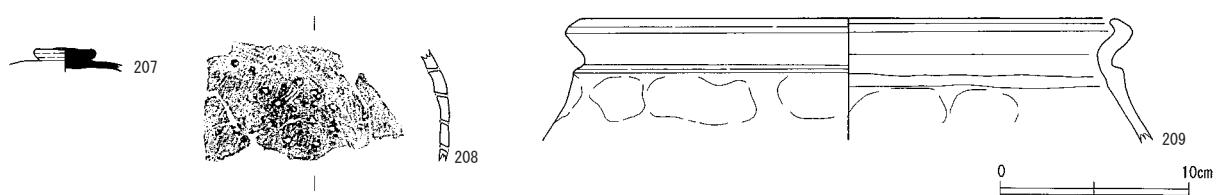
第64図 5-1区 第2遺構面 71、72、73、74、75、76、77、78-粘土採掘穴

埋土は、10YR6/6 かそれに近い色調の基本層序第4層、基本層序第5層にあたる7.5Y5/1や、同じ5層だが、N7/と白みが強く、掘削時はパウダー状に飛散する締りのないシルト質土がブロック状に堆積したものである。第1遺構面の粘土採掘穴に比べて、埋土が粘土質を帶びている。遺構の切り合い等の判断は、第1遺構面の粘土採掘穴と同じく、それぞれの土の含まれる割合の差をもとにしている。

粘土採掘穴からの遺物の出土数はごく少ないうえ、細片が多く、図示できたのは2点にとどまる。207は、76-粘土採掘穴から、208は73-粘土採掘穴から出土した。208は、胴部片だが、外から内側に向かって不規則な穿孔を施している。



第65図 5-1区 第2遺構面 79、80-粘土採掘穴



第66図 5-1区 第2遺構面 出土遺物

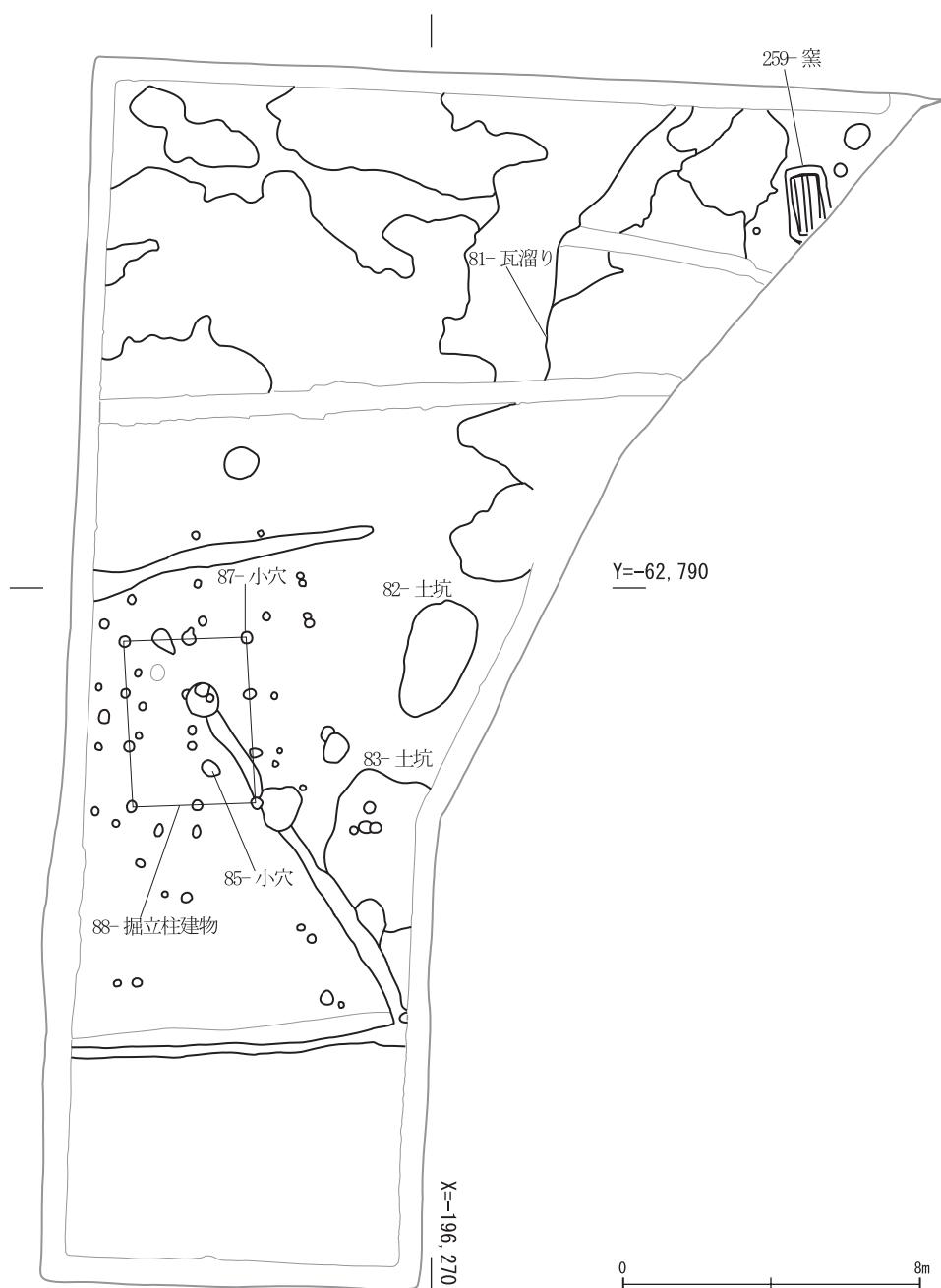
## 第8節 5-2区（第67図から第75図、写真図版12、45）

### 調査区の概要

5-2区は、A1、B1区画に位置し、台地の北端に面した調査区である。調査区内には、貴志川町教育委員会が実施した試掘トレーニングが存在する。調査区の西側からは、5-1区と同様の粘土採掘穴が、中央部からは掘立柱建物が検出された。北端からは台地の崖に続く落込み上に形成された瓦溜りと、瓦溜りの上に築造された瓦窯を検出した。

### 掘立柱建物

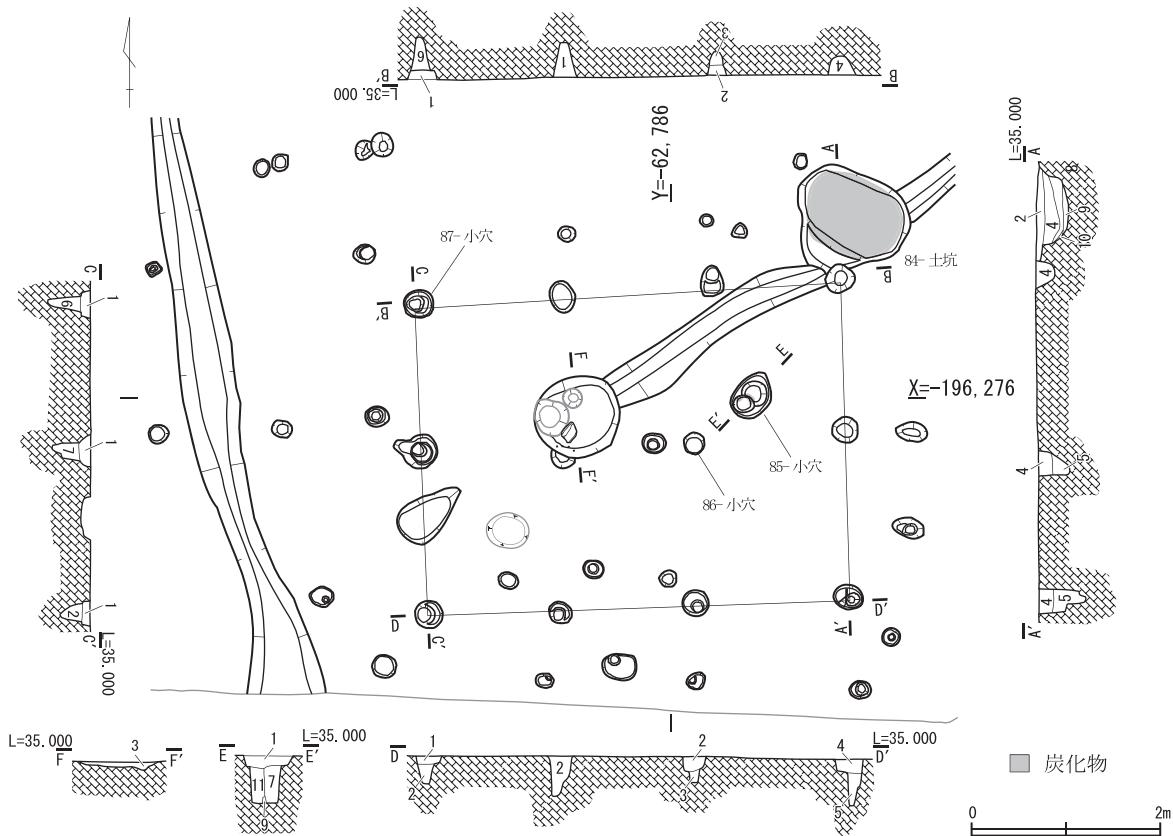
88-掘立柱建物（第68図、第69図、写真図版12） 東西に主軸をとる3間×2間の掘立柱建物である。西側には小溝があり、この溝を境に東側では粘土採掘穴が検出されなくなる。



第67図 5-2区 遺構全体図

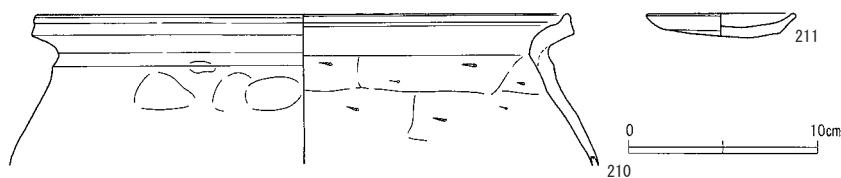
柱穴を構成する小穴のうち、北西隅の 87- 小穴から 210 として図示した土師器鍋が出土している。これ以外の小穴からは、瓦片や土師器片が出土したが、いずれも小片で、図化できなかった。

建物を構成する小穴ではないが、56- 小穴からは 211 の土師器の皿が出土している。85- 小穴は、覆土の質が大きく異なる 2 基の柱痕が連接している。北側は粘土採掘穴の埋土に類似し、固く締まった土が、南側は周辺の小穴と類似した土で、底面付近には柱に伴うと推定される炭化物が検出された。



- 1 : 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト  
(2.5Y 7/1 灰白色 粘土を少量含む)
- 2 : 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト  
(直径 0.3 ~ 0.5cm のマンガン粒を少量含む)
- 3 : 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト  
(直径 0.5 ~ 3cm の礫、直径 0.3 ~ 0.5cm のマンガン粒を少量含む)
- 4 : 2.5 Y5/3 黄褐色 砂混じりシルト  
(直径 0.3 ~ 0.5cm のマンガン粒を少量、7.5YR 7/6 橙色シルトを含む)
- 5 : 2.5 Y5/3 黄褐色 粘土混じりシルト  
(直径 0.3 ~ 0.5cm のマンガン粒を少量、7.5YR 7/6 橙色シルトを含む)
- 6 : 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト (直径 0.3 ~ 0.5cm のマンガン粒を少量、2.5Y 7/1 灰白色 粘土、2.5YR 7/6 橙色シルトを含む)
- 7 : 2.5Y 5/3 黄褐色 粘土 (直径 0.3 ~ 0.5cm のマンガン粒を少量含む)
- 8 : 2.5Y 5/3 黄褐色 砂混じりシルト (直径 0.3 ~ 0.5cm のマンガン粒を少量、炭化物粒、7.5YR 7/6 橙色シルトを含む)
- 9 : 炭化物層
- 10 : 烧土層
- 11 : 2.5Y 5/6 黄褐色 シルト (2.5Y 4/1 黄灰色 粘土、7.5Y 6/8 橙色 シルトを多量に含む)

第 68 図 5-2 区 88- 掘立柱建物と周辺の遺構

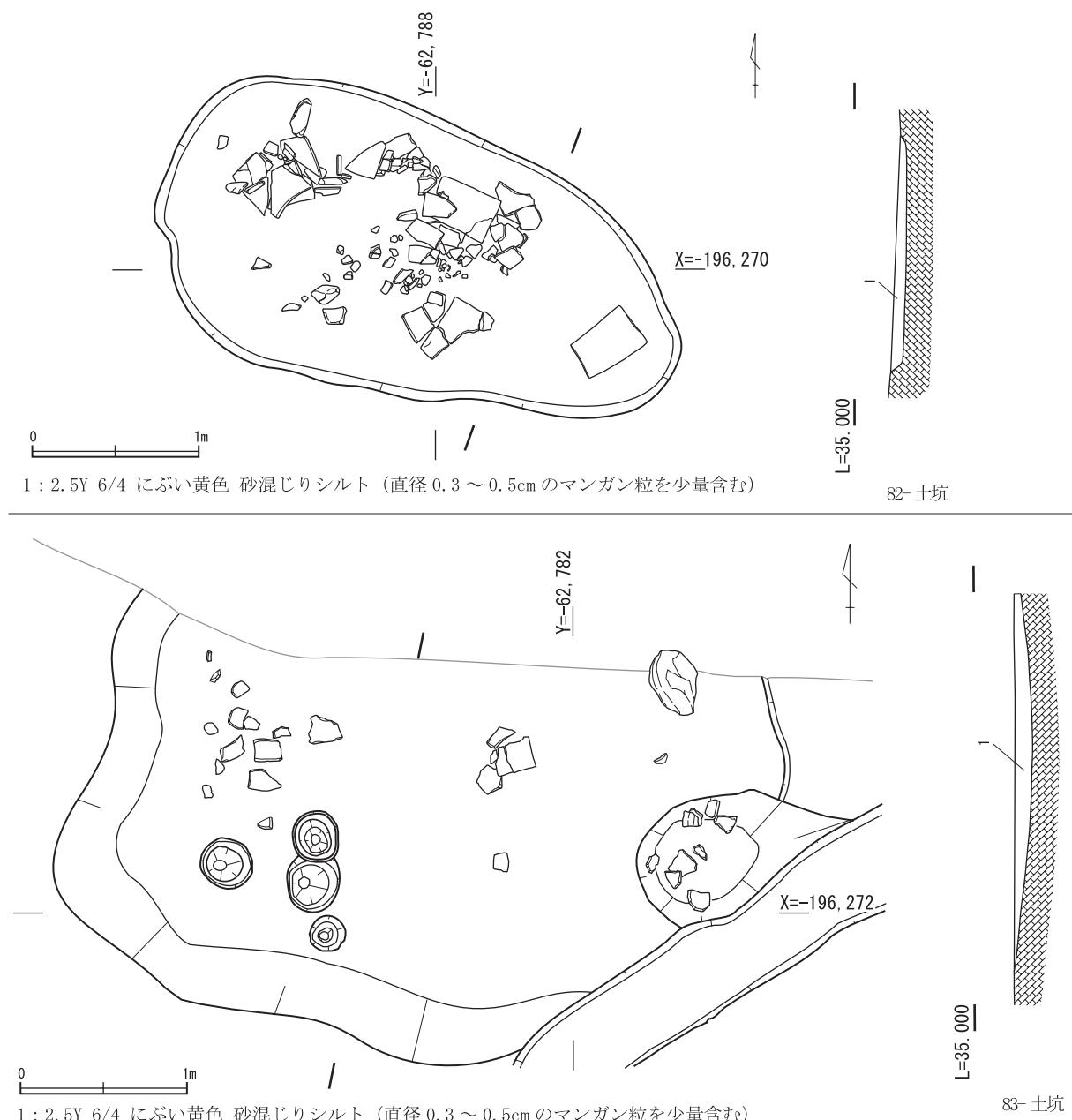


第 69 図 5-2 区 88- 掘立柱建物と周辺の遺構 出土遺物

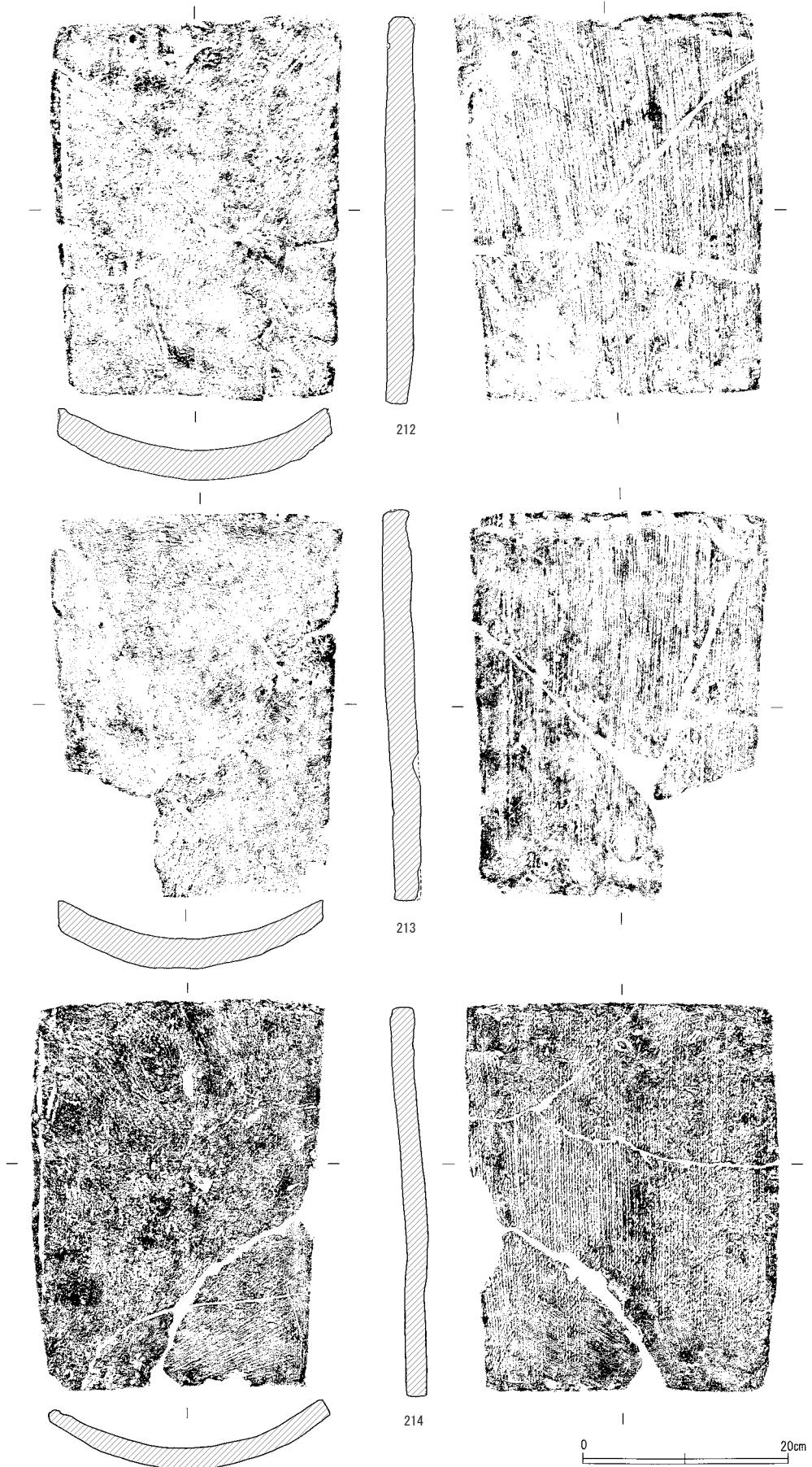
## 土坑

82- 土坑（第 70 図から 72 図、写真図版 12、写真図版 45） 調査区の北側、81- 瓦溜りの東に位置する。長径約 3.2 m の浅い土坑である。平瓦 50 点以上、丸瓦 10 点、須恵器 4 点、土師器 50 点以上、サヌカイト片 1 点が出土した。212 から 216、218 を図示した。

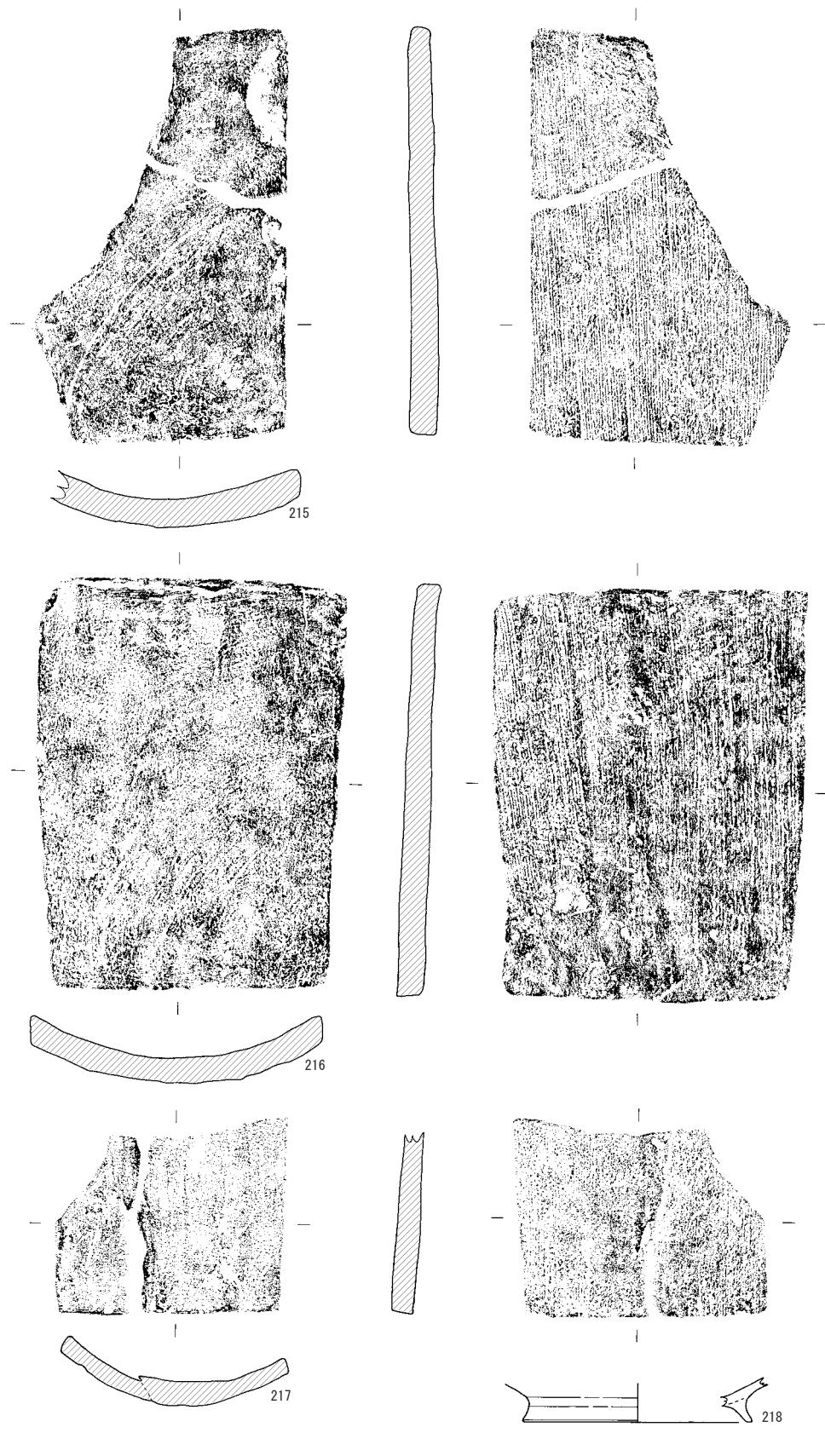
83- 土坑（第 70 図から 72 図、写真図版 12、写真図版 45） 82- 土坑に直径約 4.4 m 以上の不整円形の土坑とみられるが、北半は削平されている。底面から複数の小穴を検出している。平瓦 26 点、丸瓦 5 点が出土した。217 を図示した。217 は、北山廃寺に普遍的な凸面に縄目タタキを有する平瓦である。粘土板 2 枚を接合して成形している。接合面には布目が明瞭に残されている。



第 70 図 5-2 区 82、83- 土坑



第71図 5-2区 82-土坑 出土遺物

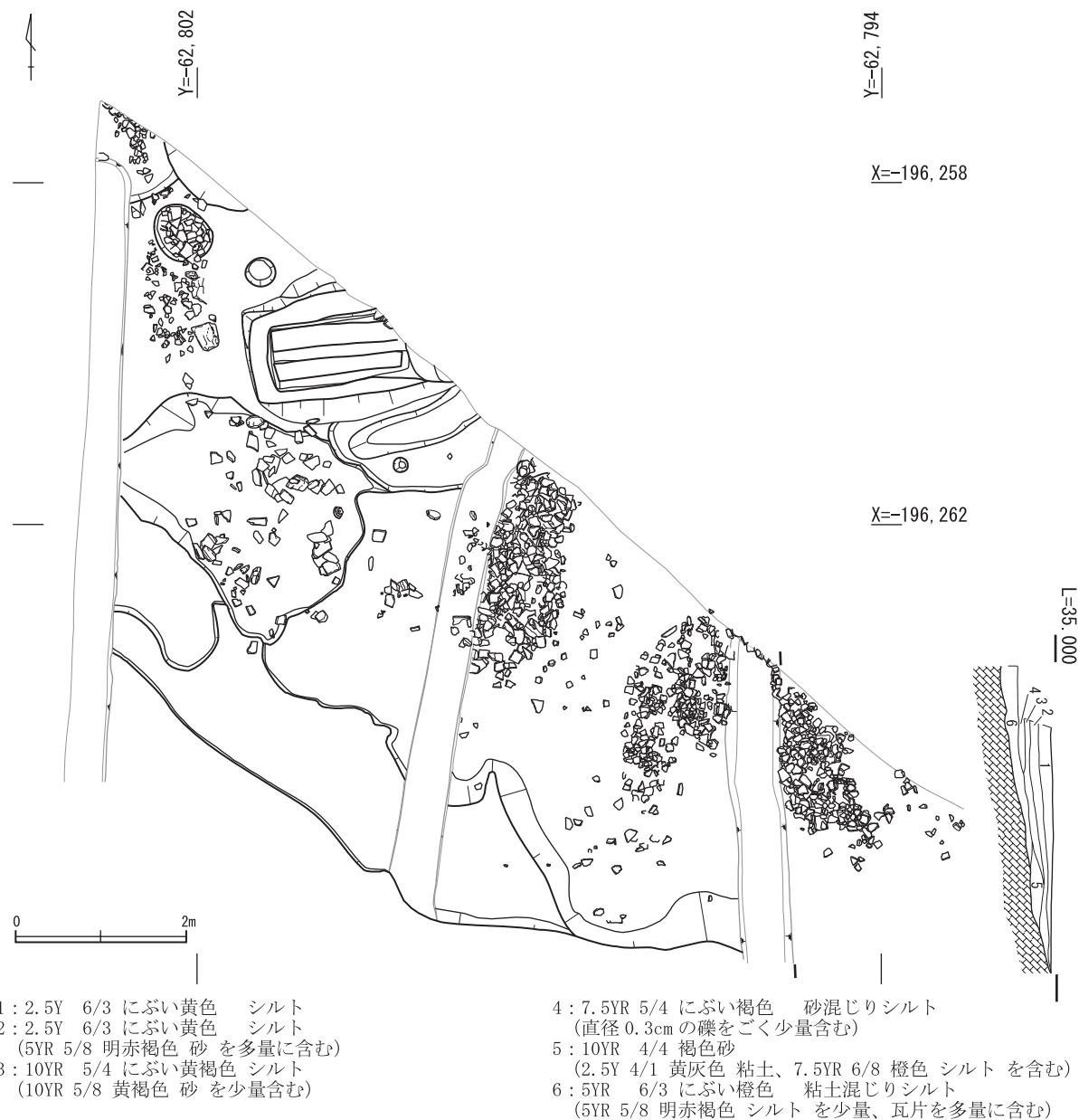


第72図 5-2区 82、83-土坑 出土遺物

84- 土坑（第 68 図、写真図版 12） 88- 掘立柱建物の北東側に位置し、当該建物を構成する小穴に切られている。長径約 1.2 m の浅い土坑である。壁面は被熱により赤色化し、底面には細かく碎かれた炭が確認された。覆土の下層、断面土層図の 8 から 10 層には、炭化物粒や焼土粒が含まれる。

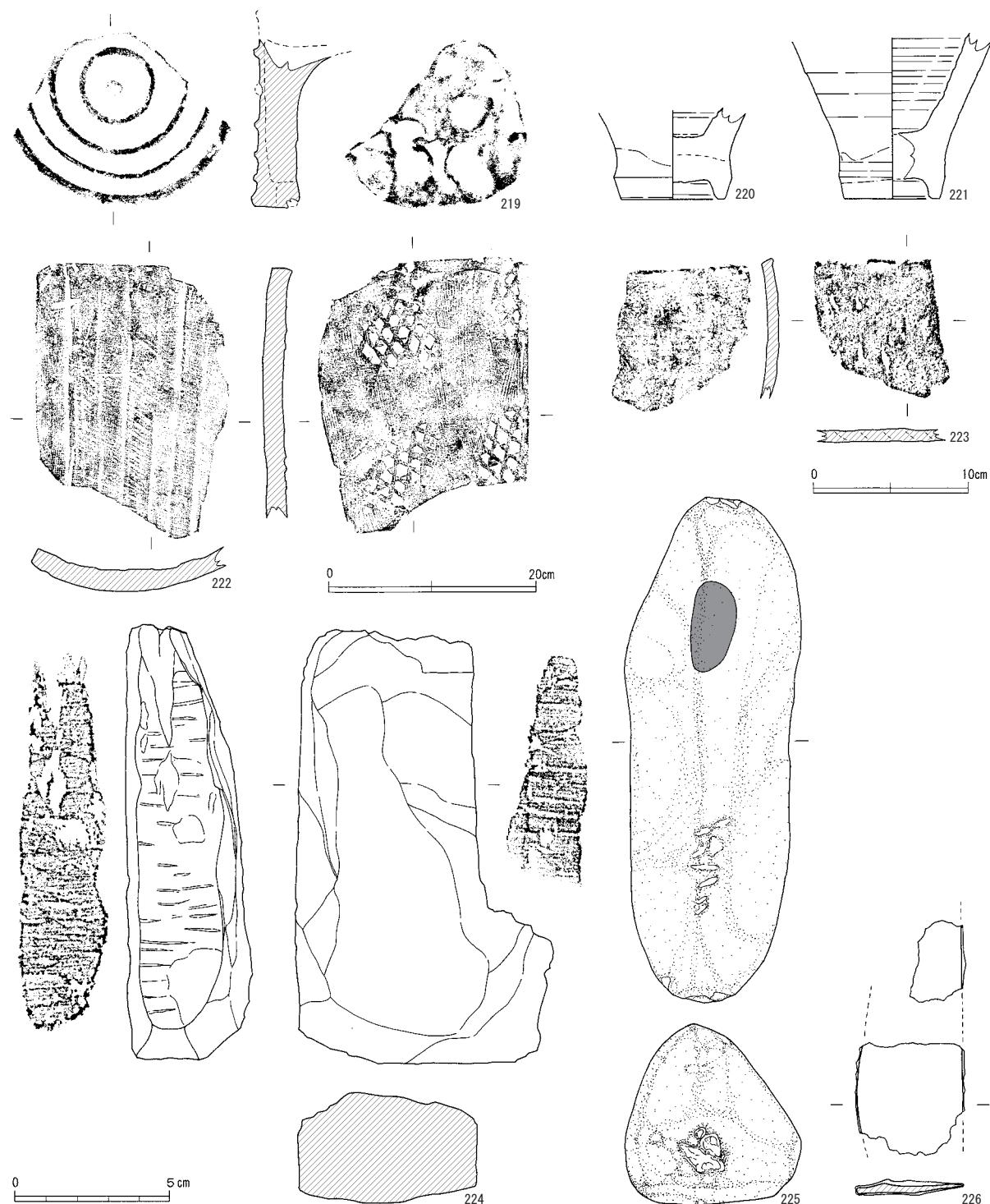
#### 瓦溜り

81- 瓦溜り（第 73 図、第 74 図、写真図版 12、写真図版 45） 調査区の北西端に位置する。台地端部の崖に面した落込みを、瓦を多量に含んだ土で整地した結果、形成されたと推定される。瓦は主として断面土層図の 6 層に含まれるが、259- 窯が 6 層を切って構築されていることから、少なくともこの窯より古い時期に形成されたと推定される。瓦は、落込みに均等に散布しているのではなく、一定のまとまりをもって分布している。



第 73 図 5-2 区 81- 瓦溜り

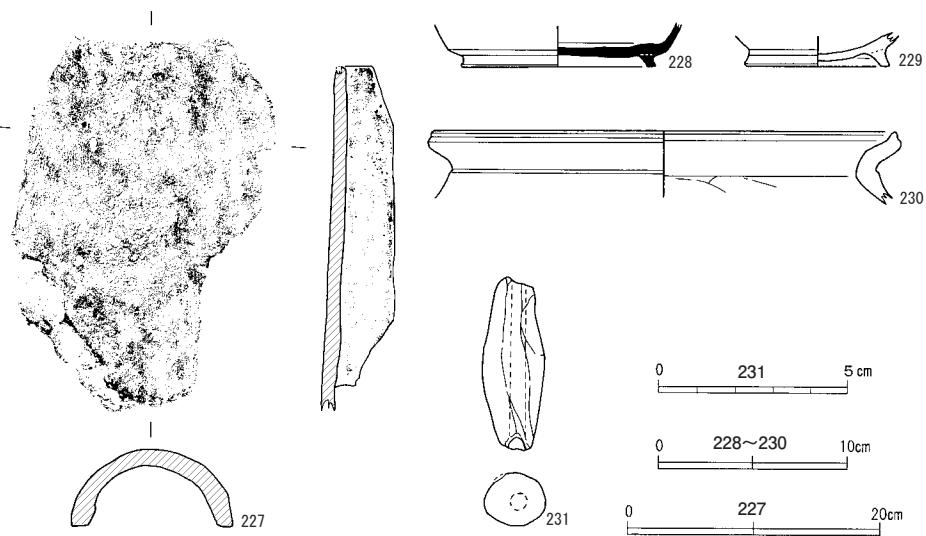
遺物収納コンテナ 50 箱以上の遺物が出土した。碎片となり、断面が摩耗している瓦が大半である。このうち、8点を図示した。219は三重圏文軒丸瓦である。220と221は削出し高台の青磁の壺底部。2点の形状はよく似ているが、別個体である。222は桶巻造りで凸面を粗いハケで調整したのち、まばらに格子タタキを施す。223は器種不明の土師器である。224は左右両側面に工具痕が残る滑石片である。225は叩き石で図示面の上部にはススが付着している。226は片面に刃を作り出した薄手の鉄製品である。



第74図 5-2区 81-瓦溜り 出土遺物

### 包含層（第75図）

包含層出土遺物のうち、目に付いた5点を図示した。227は行基式の丸瓦で、狭端面の角を切り落としている。229は土師器の底部。231は土錐である。



第75図 5-2区 包含層 出土遺物

## 第6章 2009(平成21)年度調査の成果

### 第1節 5-1区 第2遺構面 (第76図から第81図、写真図版13、写真図版45)

#### 調査区の概要

5-1区第2遺構面のうち、2008(平成20)年度に調査しなかった範囲である。調査区のほぼ全面で粘土採掘穴を検出した。粘土採掘穴以外の遺構のうち、性格が明らかなものはごく少なく、本報告で取り上げるのも94-溝一条にとどまる。

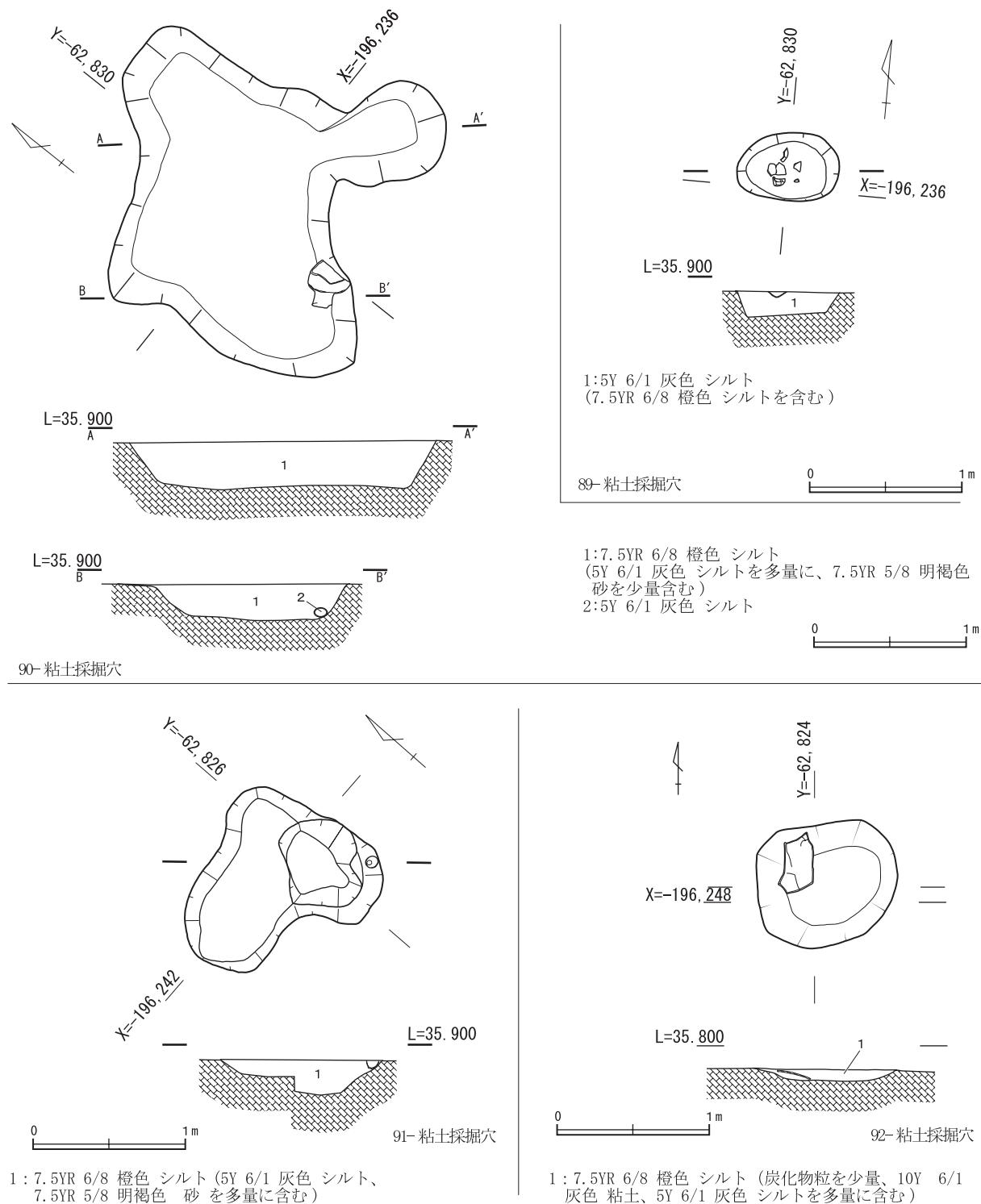
#### 粘土採掘穴 (第77図から第79図、第81図、写真図版13、写真図版45、)

調査区のほぼ全域から検出された。検出されなかった調査区西側は、検出面から0.1m程度掘削すると、色調は同じだが砂質土に変化する。94-溝の周囲も、検出面が砂礫層となっており、前年度の調査結果と同じく、粘土質の土壤の部分にのみ、採掘穴が分布していることを確認した。

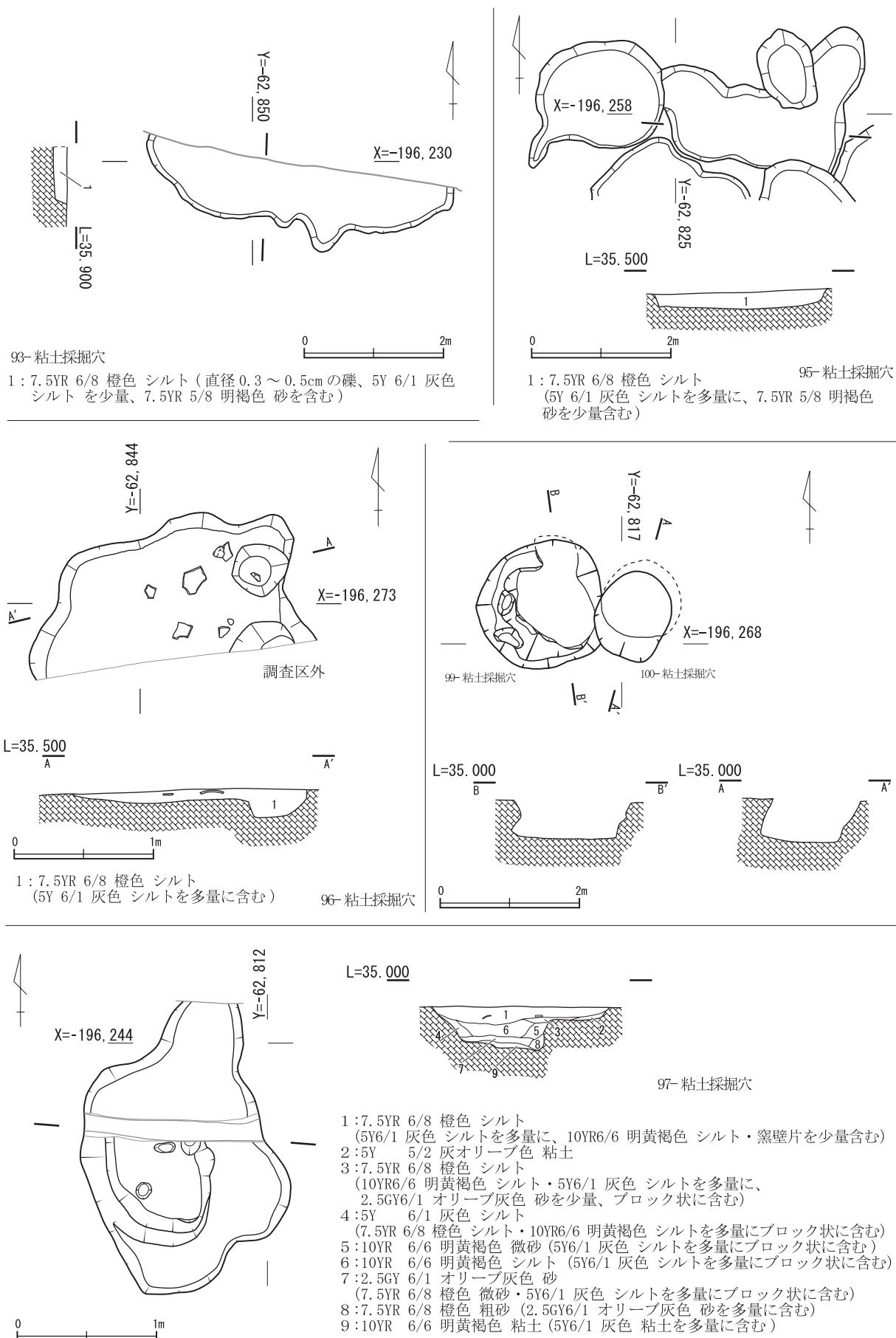


第76図 5-1区 第2遺構面 (2009年度調査分) 遺構全体図

粘土採掘穴の特徴は、前年度と大きくは変わらない。ただし、調査区の北西側、89から96- 粘土採掘穴は、埋土に砂質土が混じるほか、比較的残りのよい弥生土器などが散発的に出土している。また、98- 粘土採掘穴やその周辺では、遺構が密集し、検出面である基本層序第5層が広範囲で消失している。98- 粘土採掘穴は、もともと複数の粘土採掘穴が連接したものと推定されるが、切り合いが極端に複雑で、大きな一つの遺構として掘削せざるを得なかつ



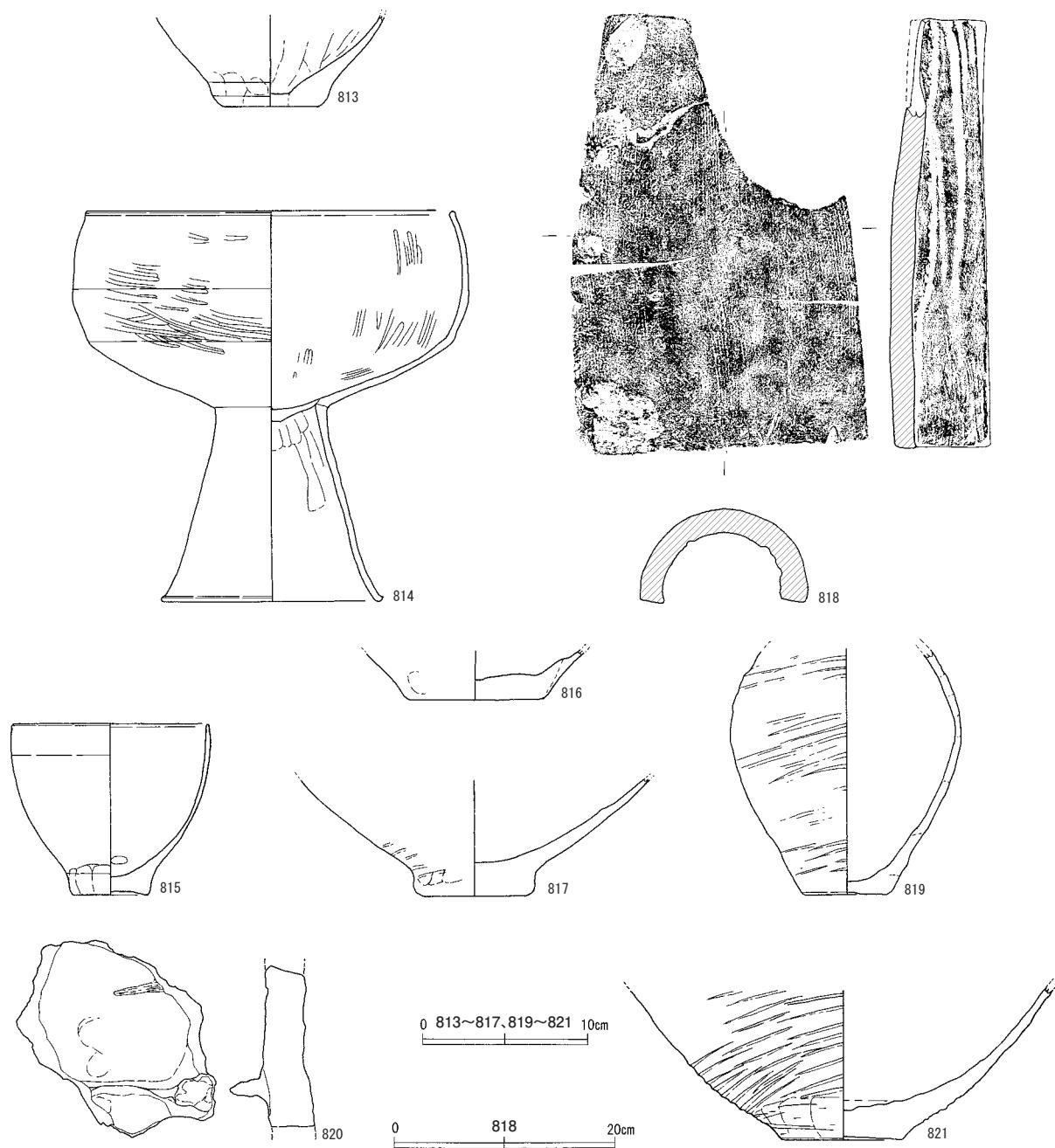
第77図 5-1区 第2遺構面 (2009年度調査分) 89、90、91、92- 粘土採掘穴



第78図 5-1区 第2遺構面 (2009年度調査分) 93、95、96、97、99、100-粘土採掘穴

た。平面の切り合は複雑だが、いずれも基本層序第5層の下部に広がるN4/の非常によく締まった粘土の上面を底面としている。その結果、平面不整形で底面が平坦になっている。紀の川市教育委員会の試掘調査で、溝として報告されていた遺構は、こうした連接する粘土採掘穴の一部を、調査区の限られたトレーニング調査で検出したものであろう。

89- 粘土採掘穴からは弥生土器の813が出土した。90- 粘土採掘穴からは814が出土した。813は、底部片である。814は、台付鉢である。底部を円盤充填技法で塞ぐ。器表は剥落が激しいが、内外面とも、ミガキを施している。全体的に薄手で丁寧な造りである。89- 粘土採



第79図 5-1区 第2遺構面 (2009年度調査分) 89、90、91、93、95、97、98- 粘土採掘穴 出土遺物

掘穴の東肩付近にほぼ完形のまま、横倒しになった状態で出土した。91- 粘土採掘穴からは、815が出土した。815は、鉢である。91- 粘土採掘穴の東肩からほぼ直立したまま出土している。

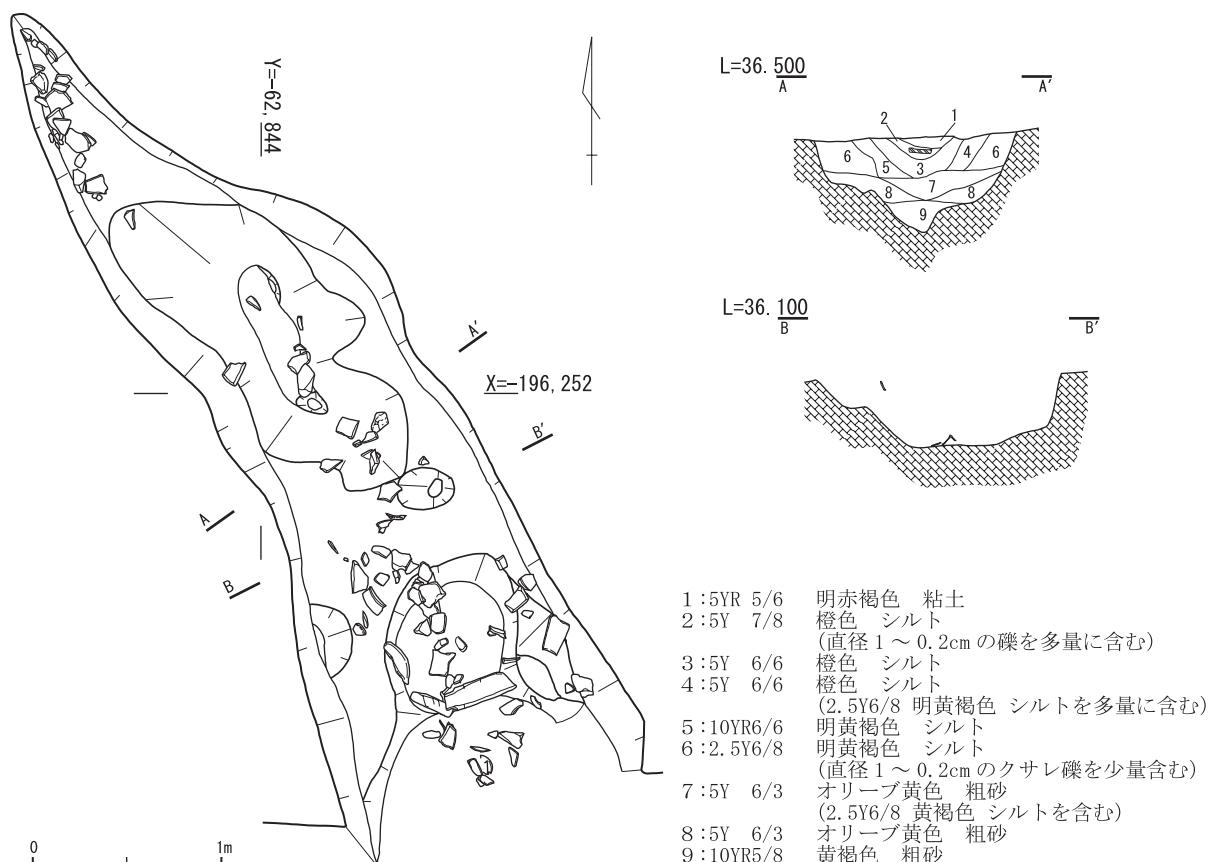
93- 粘土採掘穴から 816、817、95- 粘土採掘穴から 819、98- 粘土採掘穴から 821 が出土した。818 は 95- 粘土採掘穴出土、820 は 92- 粘土採掘穴出土の窯壁片である。92- 粘土採掘穴からも、弥生土器の甕か壺の胴部片が出土している。

## 溝

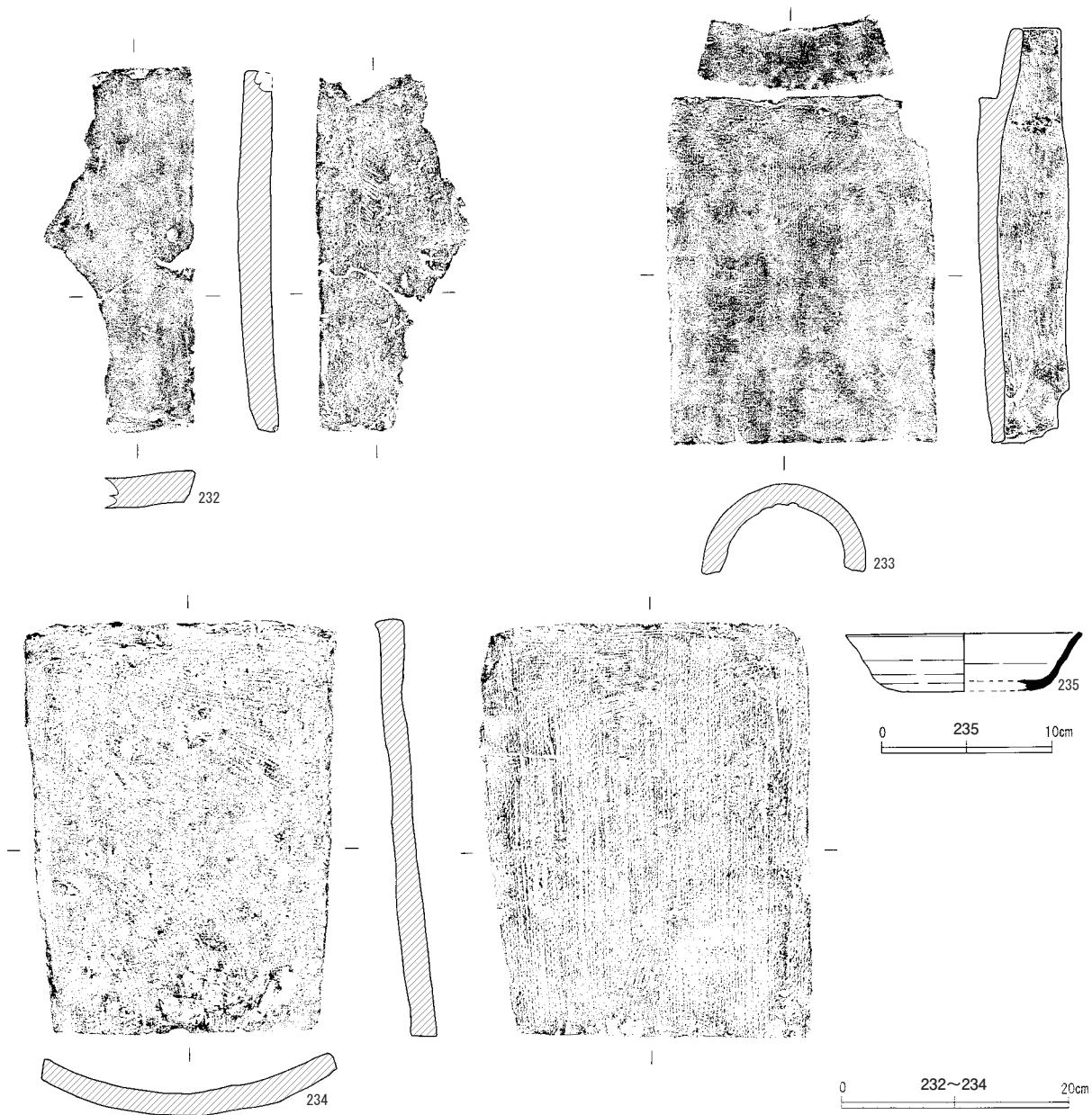
94- 溝（第 80 図、第 81 図、写真図版 45） 幅は最大約 1.5 m の溝である。底面は全体的に南に向かって傾斜しているが、凹凸が激しい。断面土層図 7 を境に上層と下層に分けられるが、出土遺物の時期に差はなかった。平瓦 50 点以上、丸瓦 29 点、須恵器 18 点、土師器 50 点以上が出土した。このうち、232 は平瓦、233 は丸瓦である。

## 包含層（第 81 図）

包含層出土遺物の総数は、遺物収納コンテナ 6 箱程度と決して多くはない。このうち、2 点を図示した。227 は一枚造りで、凸面に縄目タタキを施す平瓦、235 は須恵器の坏である。



第 80 図 5-1 区 第 2 遺構面 (2009 年度調査分) 94- 溝



第81図 5-1区 第2遺構面（2009年度調査分）94-溝、包含層 出土遺物

## 第2節 6-1 区（第82図、第83図、写真図版14）

### 調査区の概要

6-1 区は、B 1 区画に位置する。南および東で接している 7-4 区よりも、0.2 m程度高くなっている。調査区のほぼ全面で粘土採掘穴を検出した。また、柱の残存する小穴を確認したが。周囲に対応する柱穴を見出しがれなかった。

### 粘土採掘穴（第83図）

第5章第6節で報告した粘土採掘穴と、同様の特徴を持つ土坑である。ただし、当地区の粘土採掘穴は、基本層序第5層を 0.1 m程度掘削している場合が多い。



第82図 6-1区 遺構全体図

236 は 102- 粘土採掘穴から出土したサヌカイト製の平基式石鏸である。237 は 101- 粘土採掘穴から出土した土師器の小皿である。238 は 104- 粘土採掘穴から出土した軒丸瓦の外区の小片で、斜めに孔を穿っているが、背面まで貫通していない。

241、244、245 は 103- 粘土採掘穴から出土した。241 は軒丸瓦の丸瓦部で、瓦当の脱落した痕跡が明瞭に残っている。244、245 は桶巻造りで凸面の格子タタキをナデ消している。2点とも、全長 45cm を超える、北山廃寺、北山三嶋遺跡では大形に属する平瓦である。244 のほぼ中央には、粘土板を張り合わせた痕跡が残る。凸面左下側には、種子の圧痕が観察される。形状からみて、モモの類であろうか。

#### 小穴（第 83 図、写真 6、写真 7）

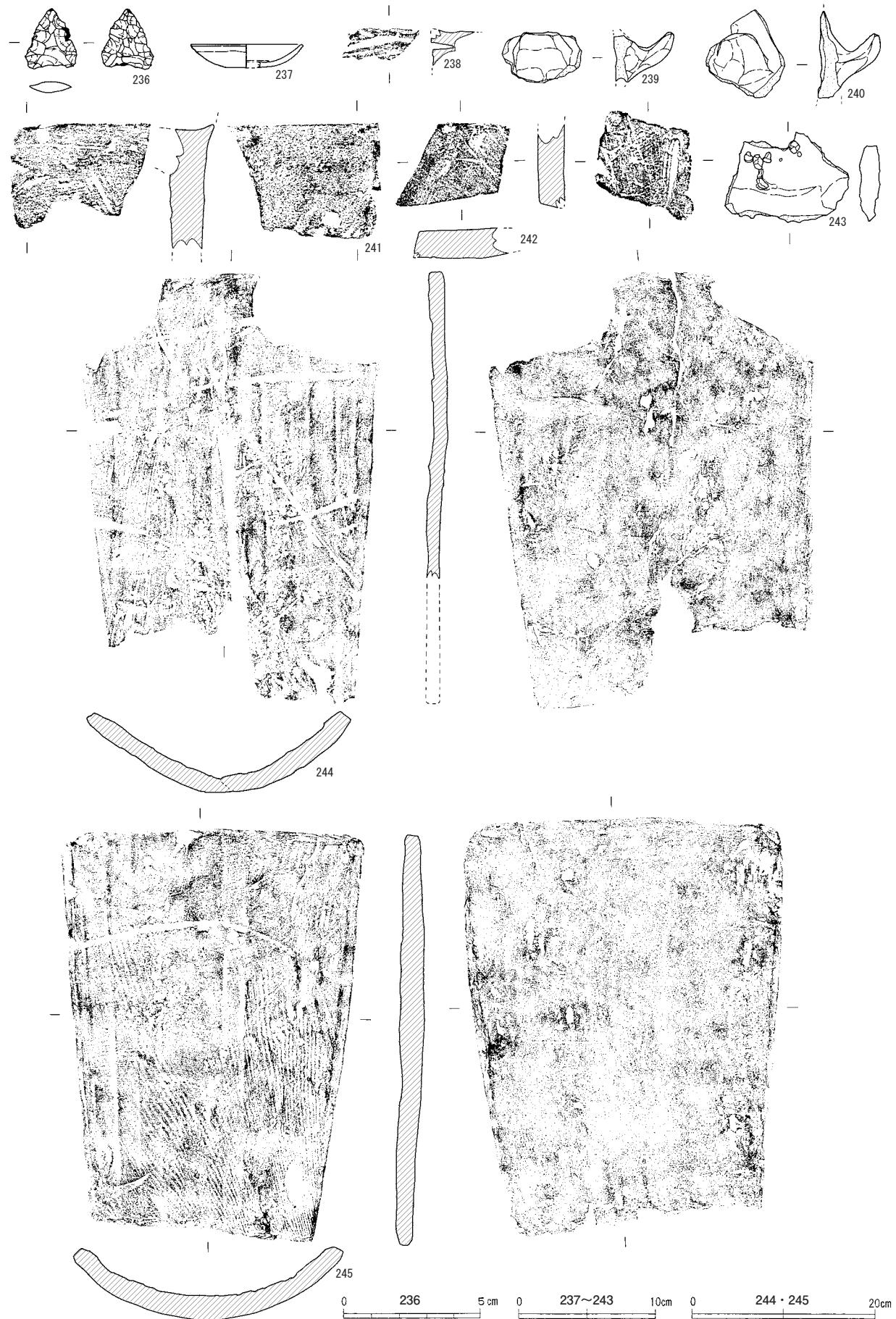
105- 小穴（第 83 図、写真 6、写真 7） 調査区西側に位置し 106- 粘土採掘穴に切られる。内部から直径約 30cm の柱が出土した。樹種鑑定は行っていないが、針葉樹とみられる。

#### 包含層（第 83 図）

4 点を図示した。239、240 は土師器の把手、242 は道具瓦である。243 の表面はガラス化しており、一部には緑青が付着している。胎土は 0.2cm から 0.4 cm の砂と粗殻で、粗く脆い。炉壁あるいは鋳型の一部であろうか。



写真 6 6-1 区 105- 小穴 断割り状況



第83図 6-1区 出土遺物

### 第3節 6-1 区 第2遺構面（第84図、写真図版14）

#### 調査区の概要

調査区のほぼ全面で粘土採掘穴を検出した。7-4区の南側も基本層序第5層まで掘削したが、明確な遺構は、6-1区東端から約10mの範囲までにとどまっている。出土遺物は、他の粘土採掘穴と同じく、僅少で、図示可能なものは、なかった。

#### 小穴

106- 小穴（第84図、写真7） 調査区西側に位置する。105- 小穴に近接するが相互の関係は明らかでない。柱とみられる木片と、平瓦5点が出土した。

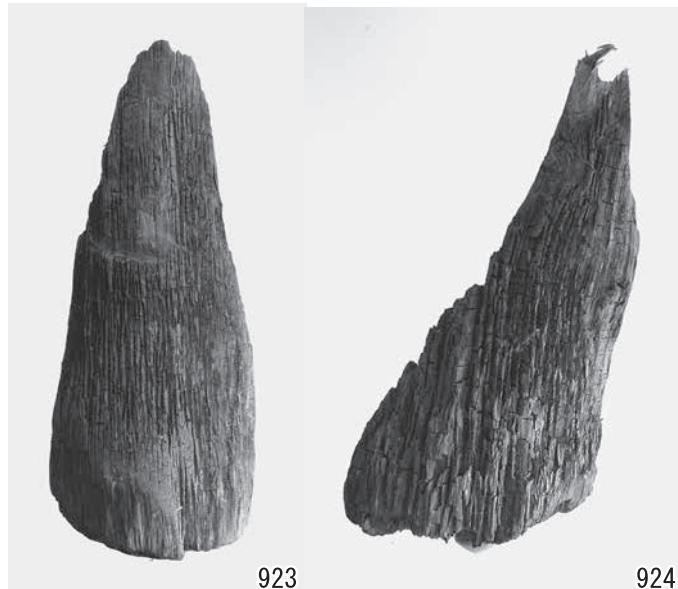


写真7 6-1区 105- 小穴、107- 小穴 出土遺物

### 第4節 6-2 区（第85図から第105図、写真図版15、16、46）

#### 調査区の概要

6-2区は、B1、B2区画に位置する、長方形の調査区である。調査前の現況は水田及び果樹畠で、段状に複数の地筆に分かれていた。

調査区内には、和歌山県教育委員会が実施した試掘トレンチが2ヶ所存在する。調査区は、5-1区と同様に、もともと南東に向かって傾斜していた地形を段状に整形しているためか、地筆ごとに遺構や包含層の残存状況が異なる。

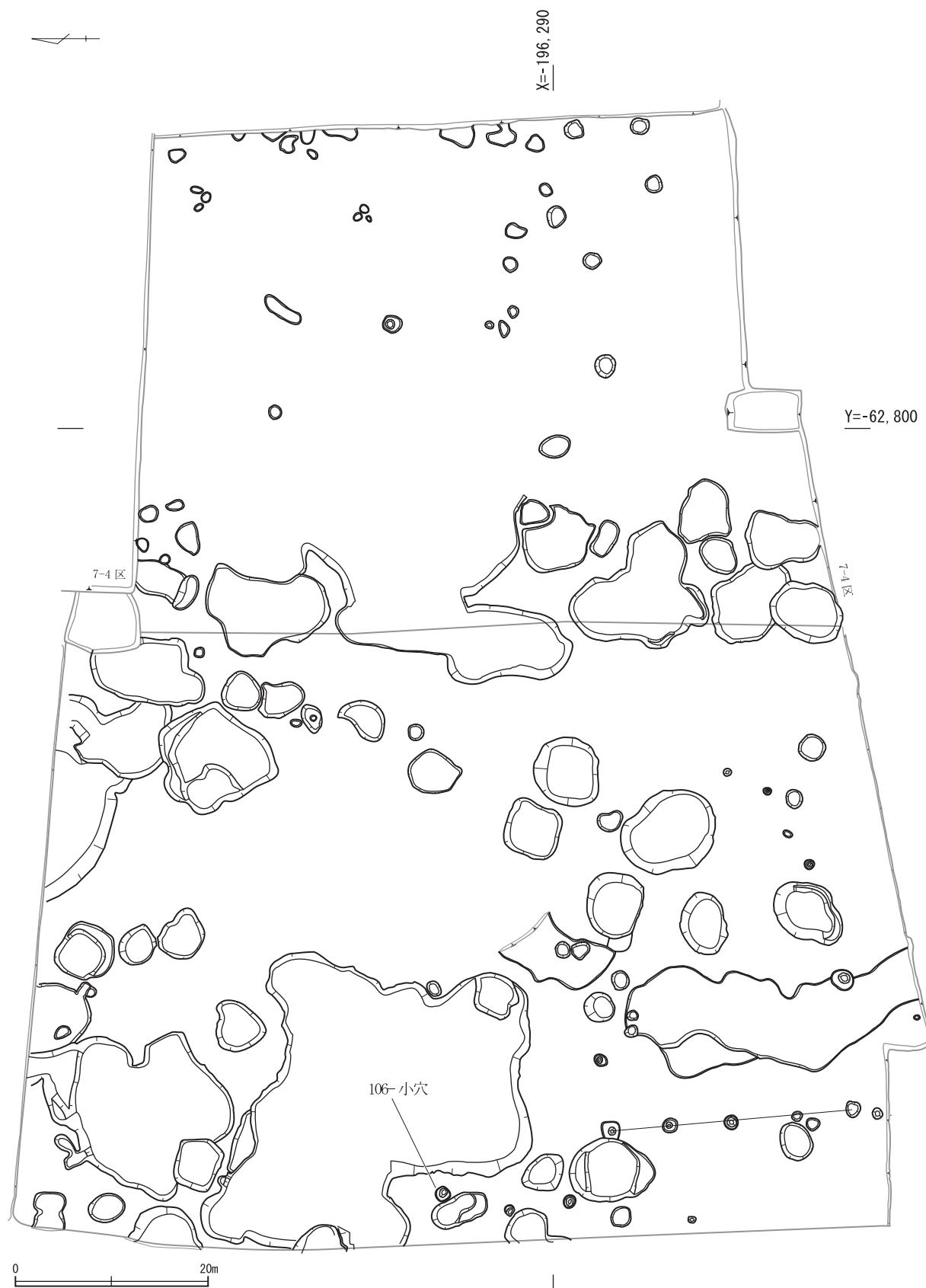
土坑、粘土採掘穴、溝、小穴等を多数検出した。

#### 土坑

118- 土坑（第86図、第87図、写真図版15） 調査区の東側、里道に面した位置に所在する。長径約3m、短径約1.5mの土坑である。覆土は一層で、遺構の東西の肩付近から遺物がまとめて出土した。

平瓦8点、須恵器2点、土師器1点が出土した。このうち2点を図示した。246、247はいずれも、一枚造りの平瓦で、凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした繩目タタキを施している。凸面の広端面には、タタキの上から付く、連続的な指頭圧痕が残る。凹面広端面端部付近には、布の綴目とみられる縫みが横方向に一直線に伸びている。

121- 土坑（第86図、第88図、写真図版15） 調査区のほぼ中央に位置する。長径約2.4m、短径約1.2mの土坑である。内部から多量の平瓦が折り重なるようにしてまとめて出土した。

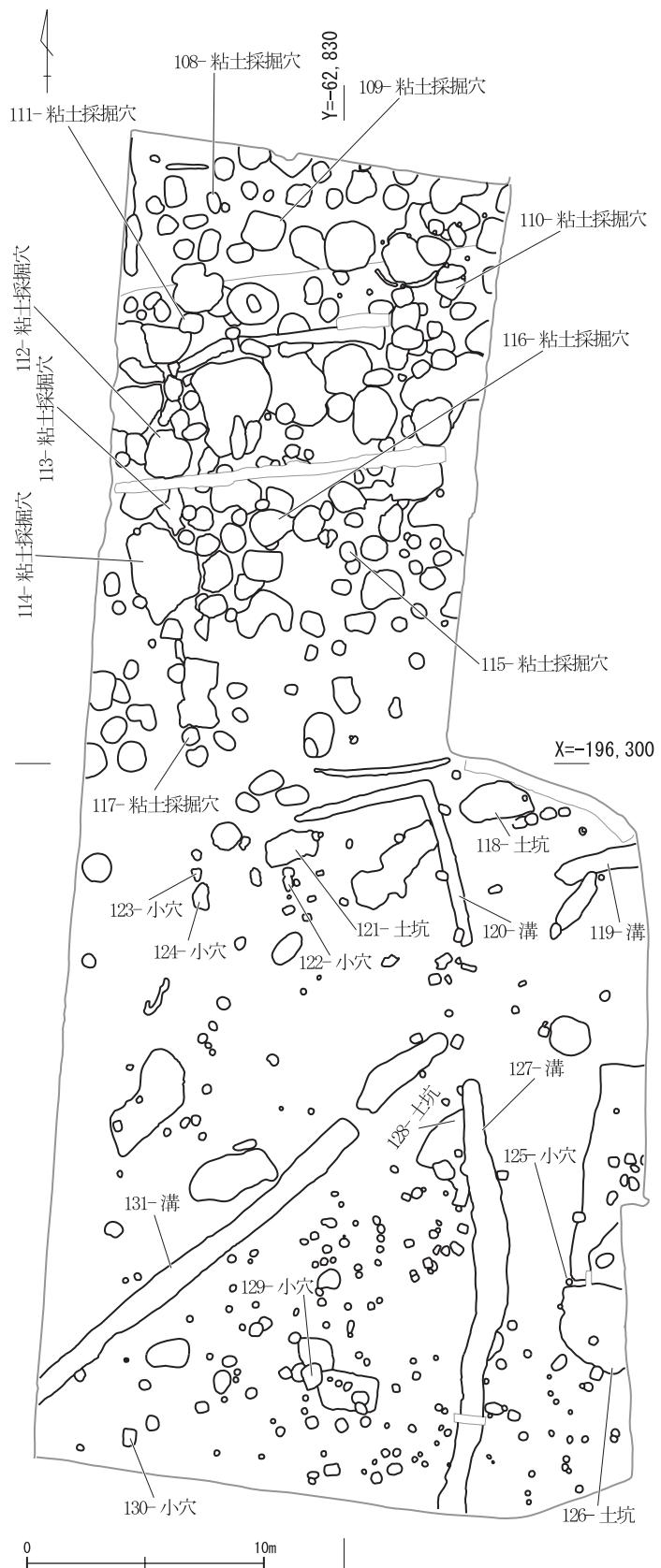


第84図 6-1区 第2遺構面 遺構全体図

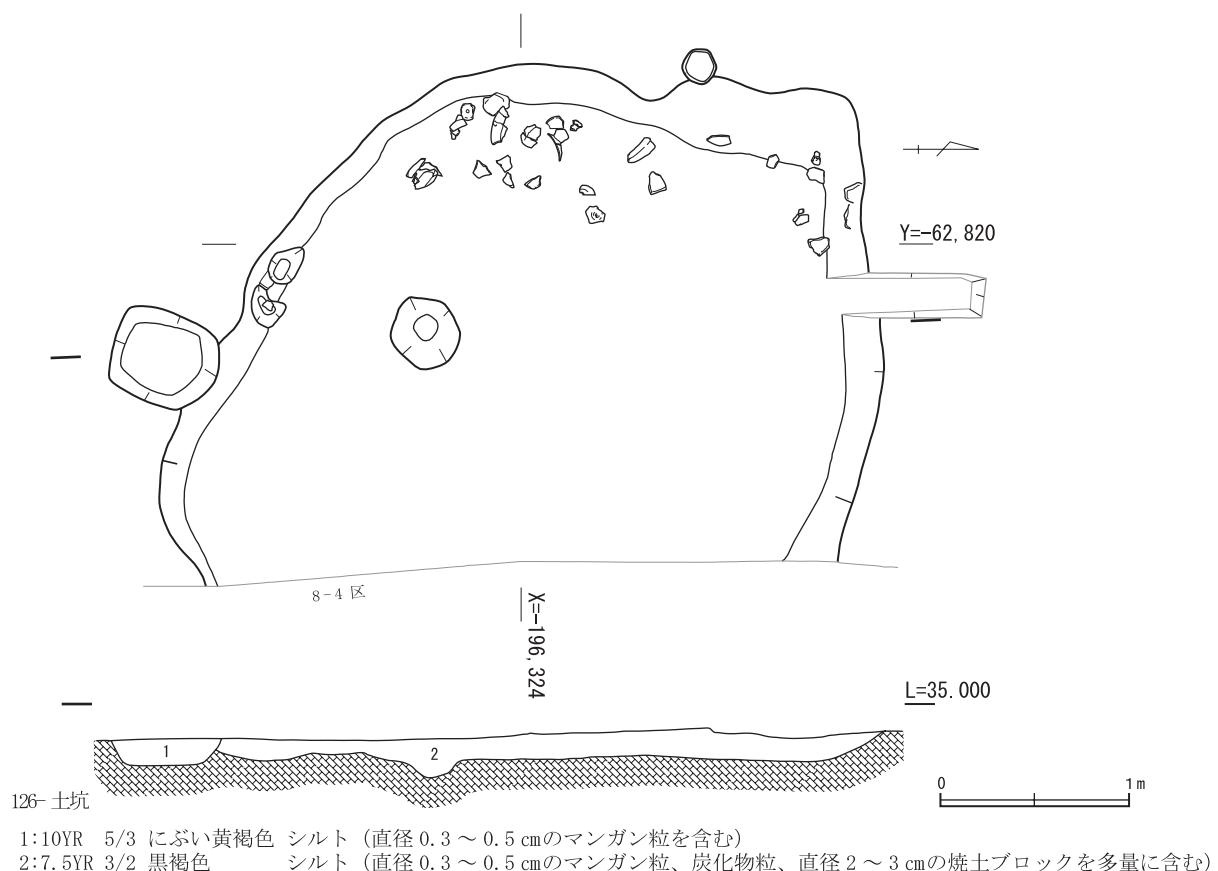
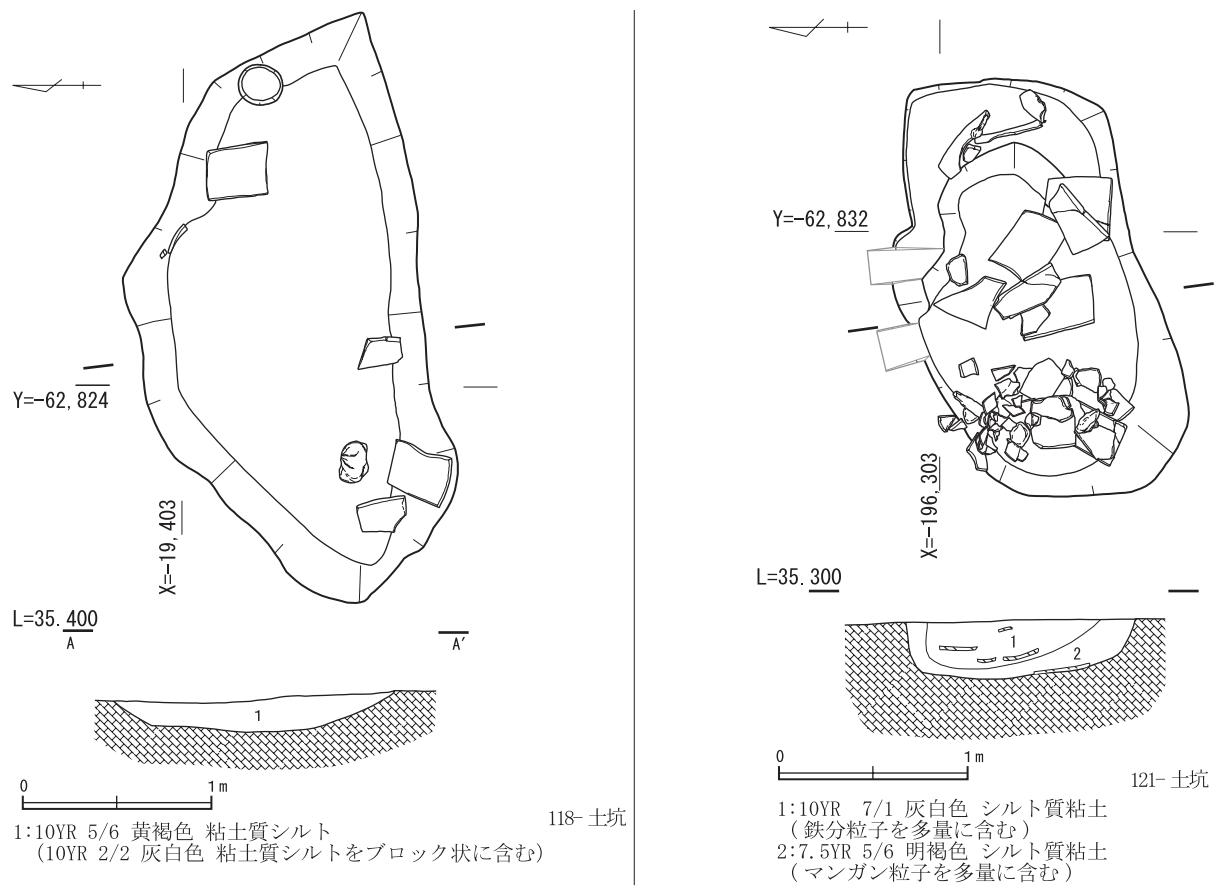
平瓦 100 点以上、丸瓦 18 点、須恵器 16 点、土師器 3 点が出土した。このうち、248 から 250 の平瓦 3 点、丸瓦 1 点を図示した。平瓦は、いずれも須恵質焼成の一枚造りの平瓦で、凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。248 は、凹面の布目痕をナデで消す。また、凸面のタタキの単位が、瓦の中央付近で角度を変えている。250 は丸瓦である。凸面には、縄目タタキを施している。

**126- 土坑（第 86 図、第 89 図、第 90 図、写真 9、写真図版 15、写真図版 46）** 調査区の東端に位置する。直径約 3.6 m、深さ約 0.1 m 強とごく浅い不整形の土坑である。底部には、小穴状の落込みが 1 力所にあるほか、肩付近を幾つかの小穴に切られている。遺構の東側は 8-4 区へと伸びている。覆土には焼土、炭化物を含むが、土坑内部に、被熱痕等は確認されなかった。

第 86 図に提示した図面では、遺構の西側から遺物が散発的に出土しているように読み取れる。これは、調査時の判断というバイアスがかかっているため、注意が必要である。当初、覆土には焼土、炭化物を含むものの、ごく浅い皿状の遺構だったため、定石通り、土層観察用の畦を残して掘削を行った。多量の遺物が出土し、本土坑が短なる深い落込み状の遺構ではなく、出土状況の記録が必要な遺構だと気付いた段階では、既に東半分の掘削が完了し、遺物は取上げられてい



第 85 図 6-2 区 遺構全体図



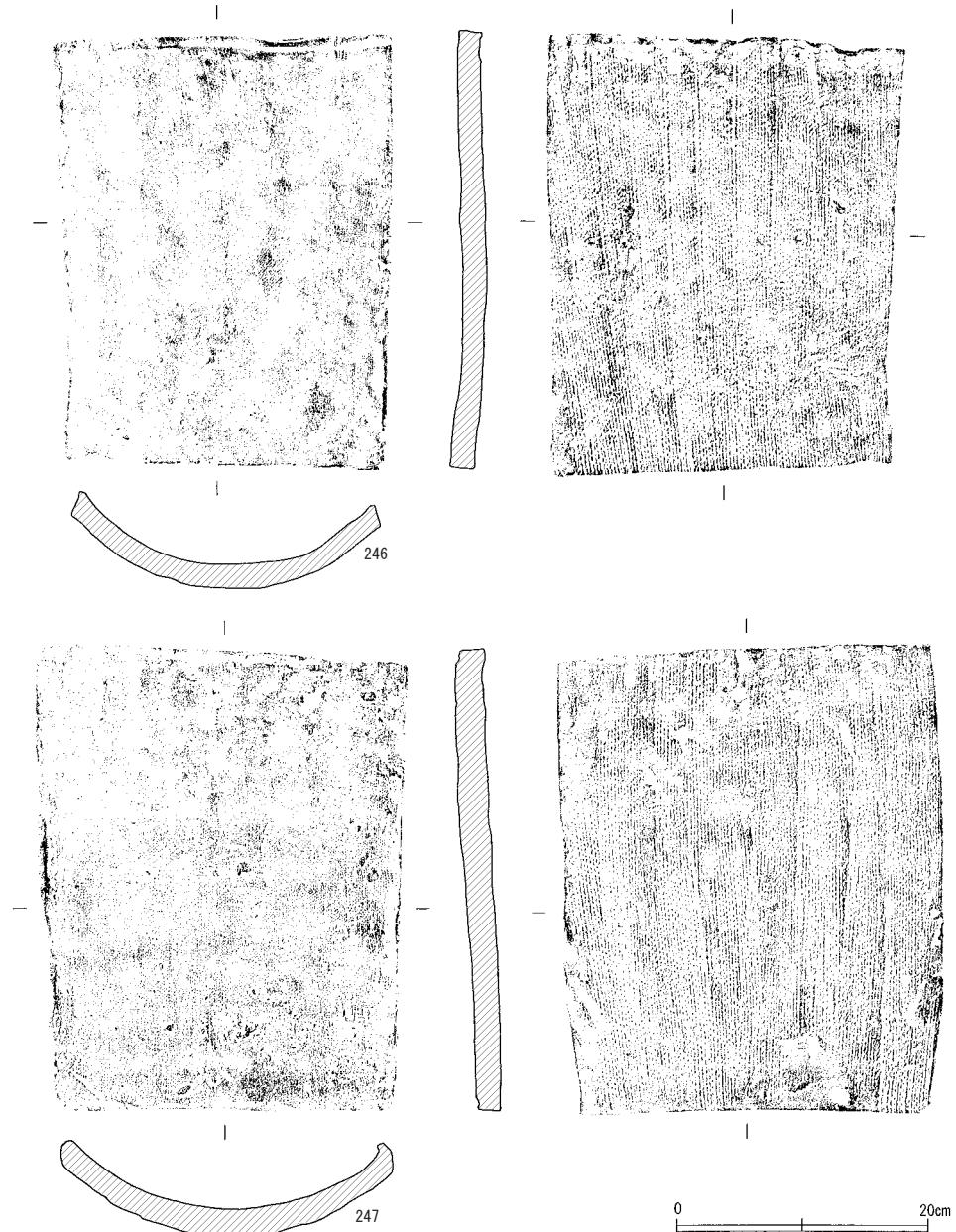
第 86 図 6-2 区 118、121、126- 土坑

た。やむなく、残りの畦よりも西側部分のみ、遺物を出土状態のまま残して掘削し、図化した。平瓦 35 点、丸瓦 10 点、須恵器 150 点以上、土師器 200 点、瓦器 5 点、津 18 が出土した。このうち、27 点を図示した。

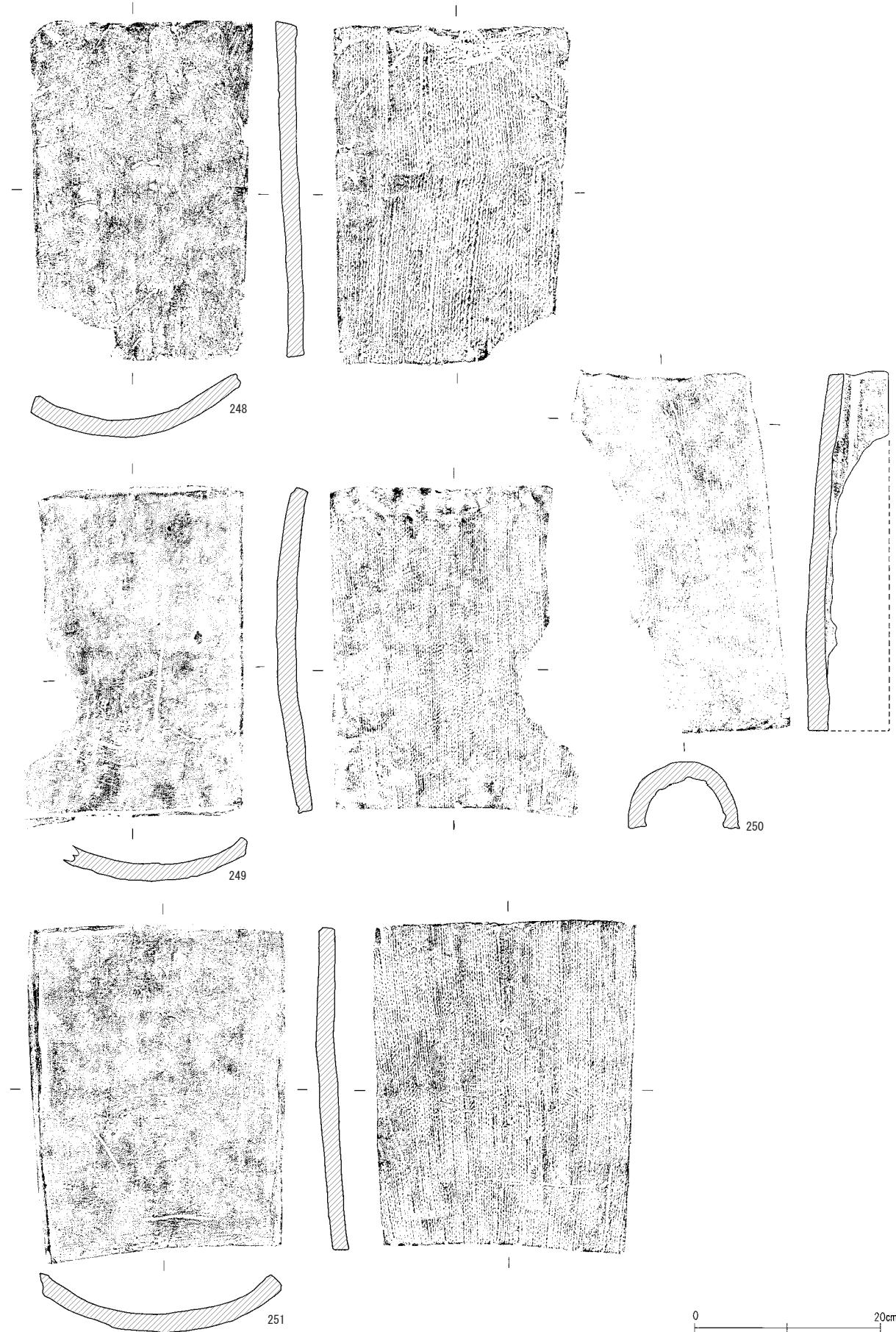
252 から 254 は平瓦である。いずれも一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。凸面の広端面側には、縄目タタキの上から付く、連続的な指頭圧痕が見られる。252 の狭端面小口には、布目痕がみられる。

255 は玉縁式の丸瓦である。凸面の玉縁以外の全面に縄目タタキを施す。タタキの原体は、平瓦のタタキ原体に比べてやや太い。

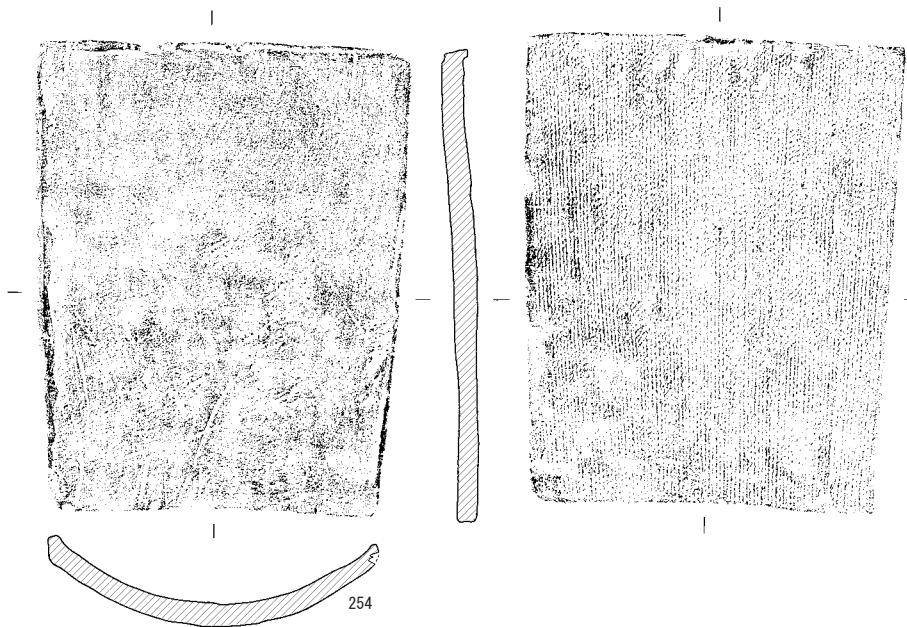
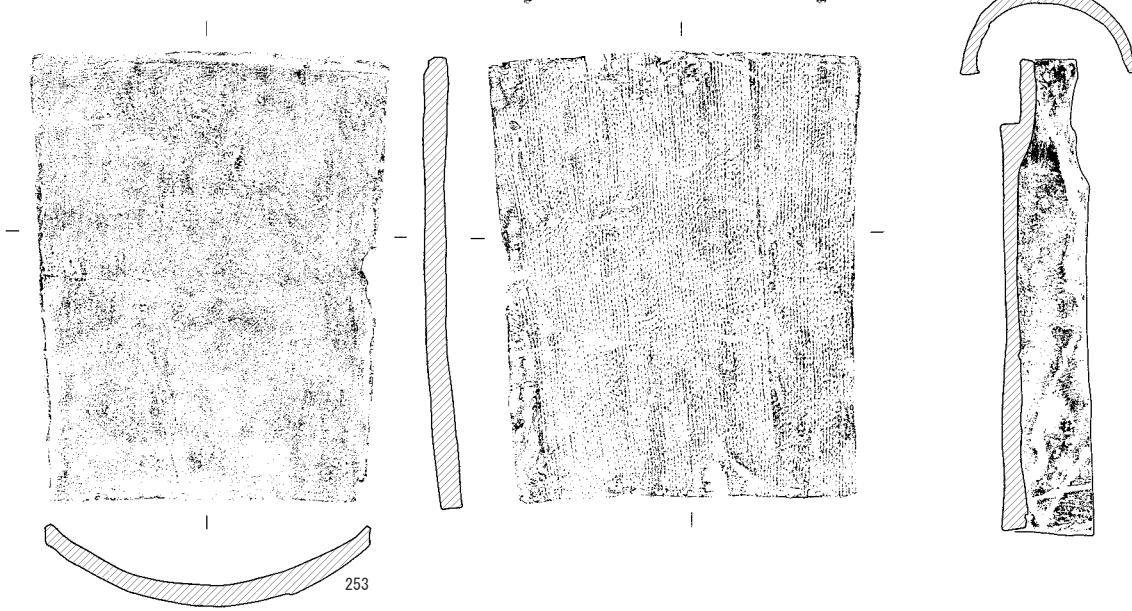
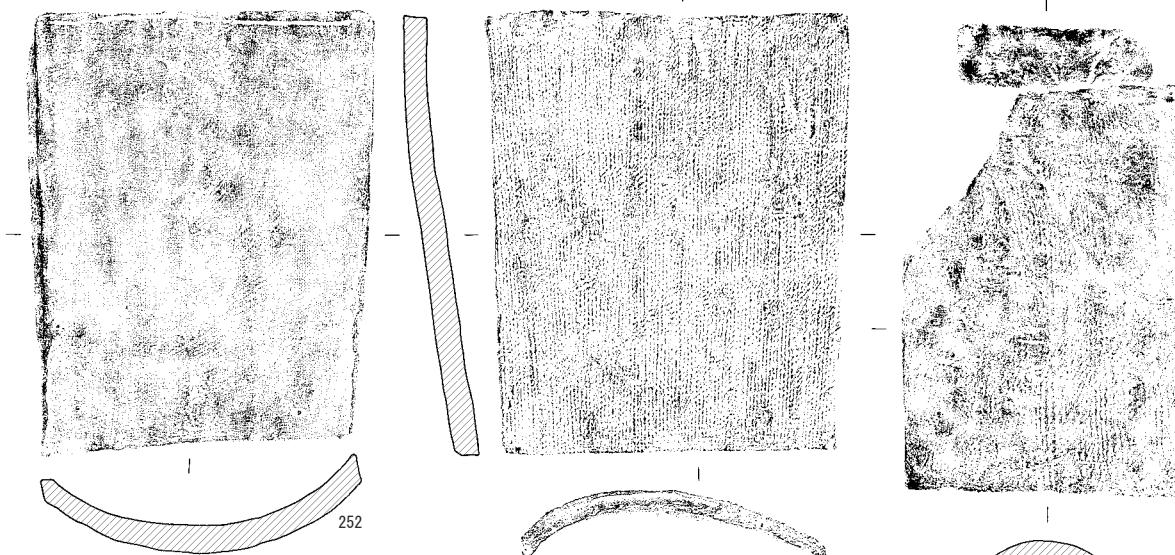
256、257 は須恵器の壺蓋である。256、257 とも天井部にヘラケズリ調整を施す。口縁部は、256 は僅かに、257 は大きく外反する。



第 87 図 6-2 区 118- 土坑 出土遺物



第88図 6-2区 121-土坑 出土遺物



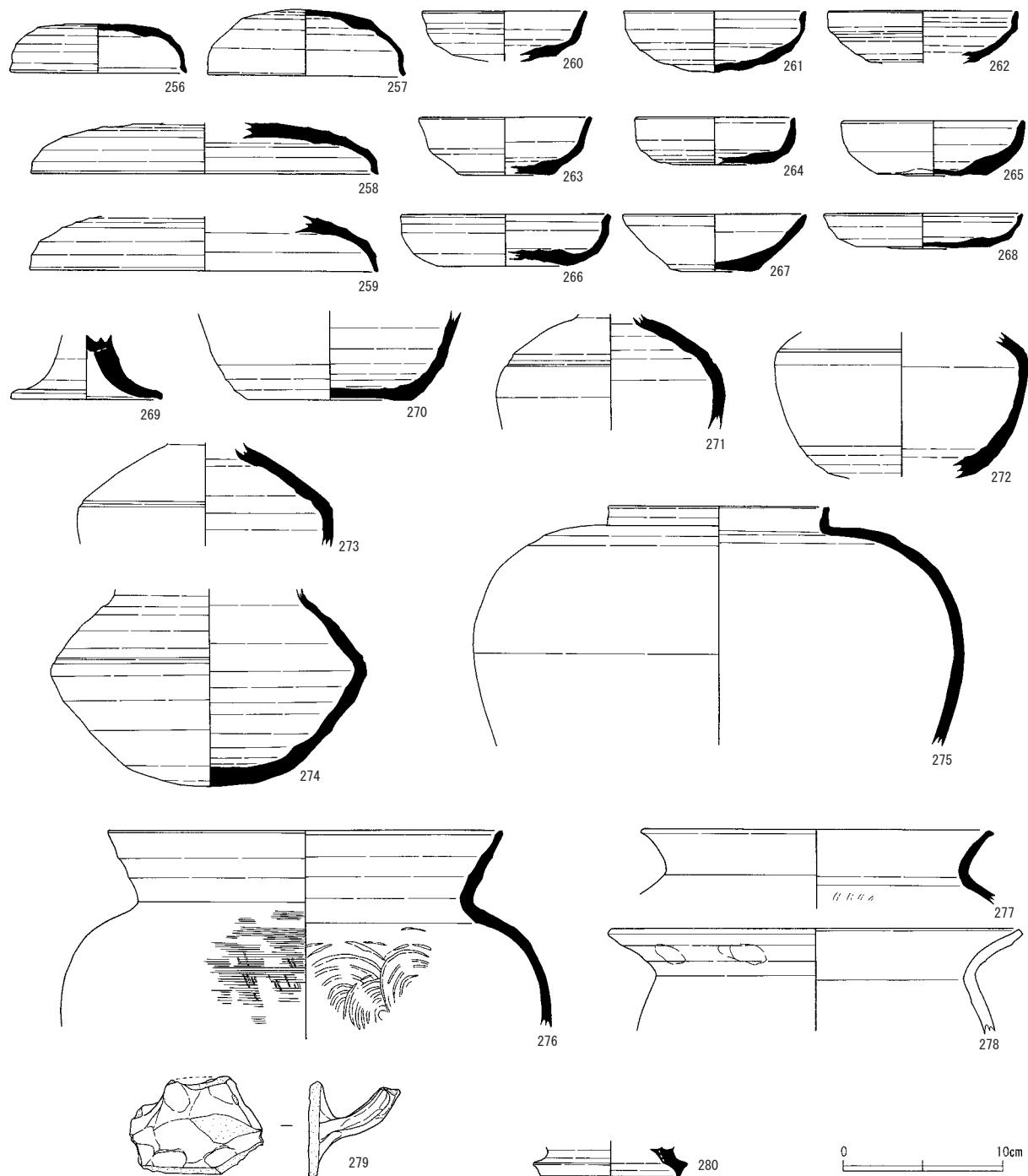
0 20cm

第89図 6-2区 126-土坑 出土遺物

260から268は須恵器の坏身である。263、262以外は、底部をヘラ切りのままで、調整を施さない。262は垂直に立ち上がる口縁部を持つ。内外面ともロクロナデによる稜線が顕著に観察される。底面はヘラ切り後、ナデている。263は底面をヘラケズリで調整している。底面は激しく磨滅している。268は器高の低い坏身と考えたが、蓋の可能性もある。

258、259は須恵器の蓋である。いずれも天井部分にはヘラケズリを施す。口縁部は、258が鋭く内傾するのに対し、259は丸く収める。

269は高坏の脚部である。270は壺の底部である。外面はヘラケズリ、内面はロクロナデによる稜線が明瞭に残る。271から274は壺の胴部である。271から273の胴部は、丸み



第90図 6-2区 126、128- 土坑、122- 小穴 出土遺物

を帶びつつ立ち上がり。最大径に達すると、やや急角度ですぼまる。最大径付近には、沈線をめぐらせている。3点とも比較的よく似た形態を示すが、接合しない。274は先の3点と同様に最大径付近に沈線をめぐらせるが、そろばん玉に近い縦断面形である。275は短頸壺である。内外面ともナデで滑らかに仕上げている。276は外面には平行タタキの後、力キ目が器面全体に整然と施されタタキを消す。内面には同心円状の当て具痕が器壁をめぐる。焼成不良で脆く、胎土は黄灰色である。

須恵器は、北山廃寺、北山三嶋遺跡出土例としては全体的に古相で、当該遺跡で普遍的に出土する高台付の壺身やごく扁平な摘み付きの壺蓋の出土割合は少なく、図示できるものもなかった。

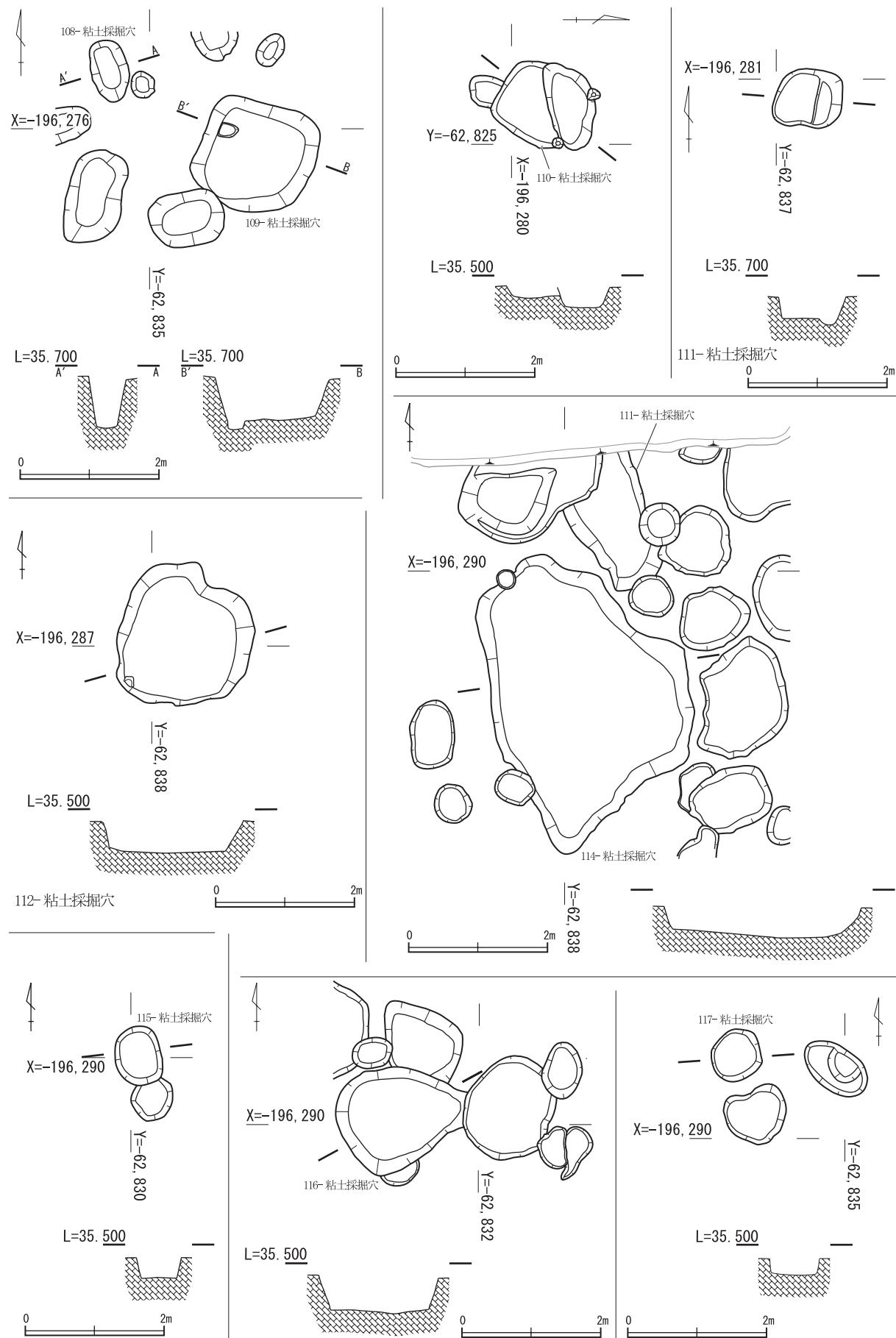
土師器の出土数は多いが碎片が多く、図化できたのは278の土師器甕の1点のみである。内外面とも器壁の剥離が著しく、調整等は不明である。

**128- 土坑(第90図、第94図)** 調査区の南側に位置する。127- 溝に切られている。直径約3.5m、最大深さ約0.2mの不整形の土坑である。出土した土師器把手1点を279として図示した。薄く、舌状の把手である。

#### 粘土採掘穴(第91図、第92図、写真図版15)

調査区の北半、120- 溝よりも北側、調査前の現況地形で一段高くなった地盤に広がる不整円形の土坑群である。前年度に調査した5-1区の粘土採掘坑と埋土や遺構平面等の特徴は同じである。前年度調査の所見を踏まえ、ブロック状に含まれる土の組成の差に着目して遺構検出及び掘削作業を行ったため、より細かな切り合い関係等を把握することができた。今年度調査分の粘土採掘穴がやや小振りで、切り合いが激しいように見えるのは、場所による遺構の性格の差ではなく、遺構検出技術の向上によるところが大きいとみられる。

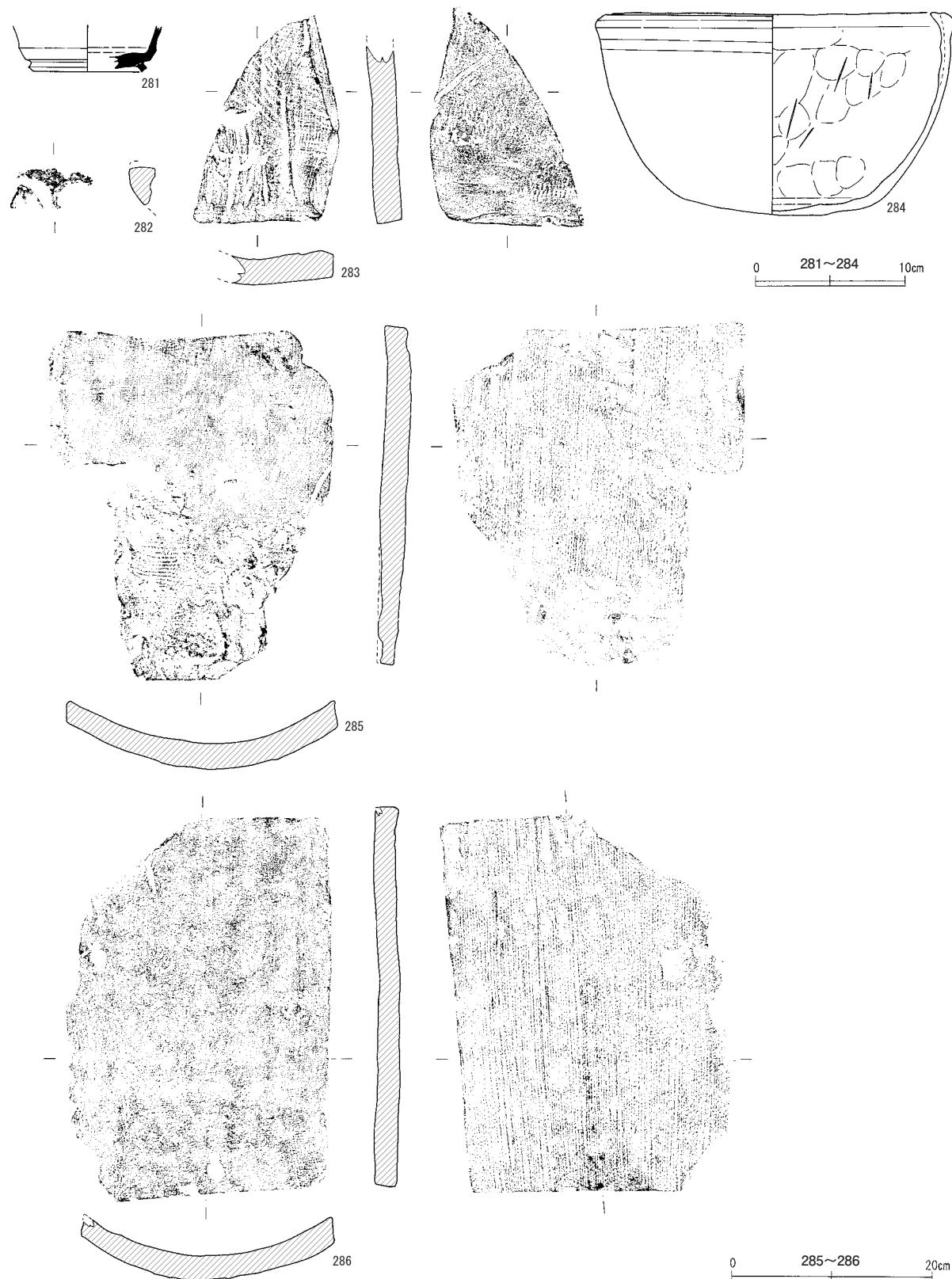
遺物出土量は少なく、大半が混入遺物と思われる。目に付いた遺物6点を図示した。281は108- 粘土採掘穴出土の須恵器である。ハの字形に開いた貼付け高台を持つ須恵器の壺身である。282は109- 粘土採掘穴から出土した。残りが良くないが軒丸瓦である。283は112- 粘土採掘穴から出土した桶巻造りの平瓦である。角を切り落としている。凹面は端部をヘラケズリ調整し、凸面は縄目をヘラでナデ消している。284は110- 粘土採掘穴から出土した土師器である。底部から胴部は薄手の造りだが、口縁部に向かうにしたがって若干肥厚する。口縁部は内傾し、上部には浅い凹線を刻む。外面は丁寧にナデて調整する。内面はヘラナデの上に、連続的な指頭圧痕が残されている。285は113- 粘土採掘穴から出土した平瓦である。一枚造りで凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。2枚の粘土板を接合して一枚の瓦としているが、接合部分から破損している。接合面には、ハケが施されている。286は114- 粘土採掘穴出土から出土した。一枚造りの平瓦で、凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。



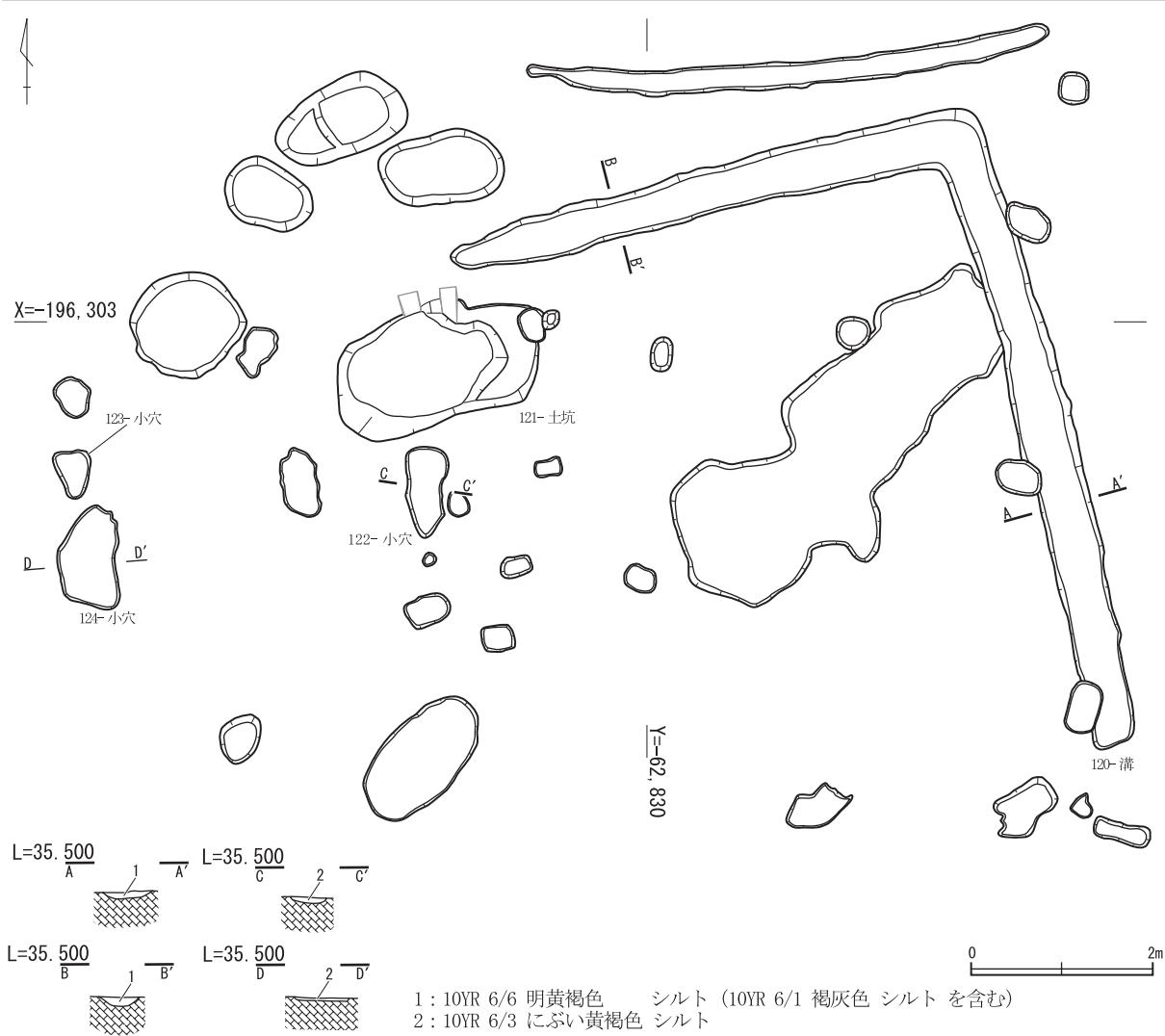
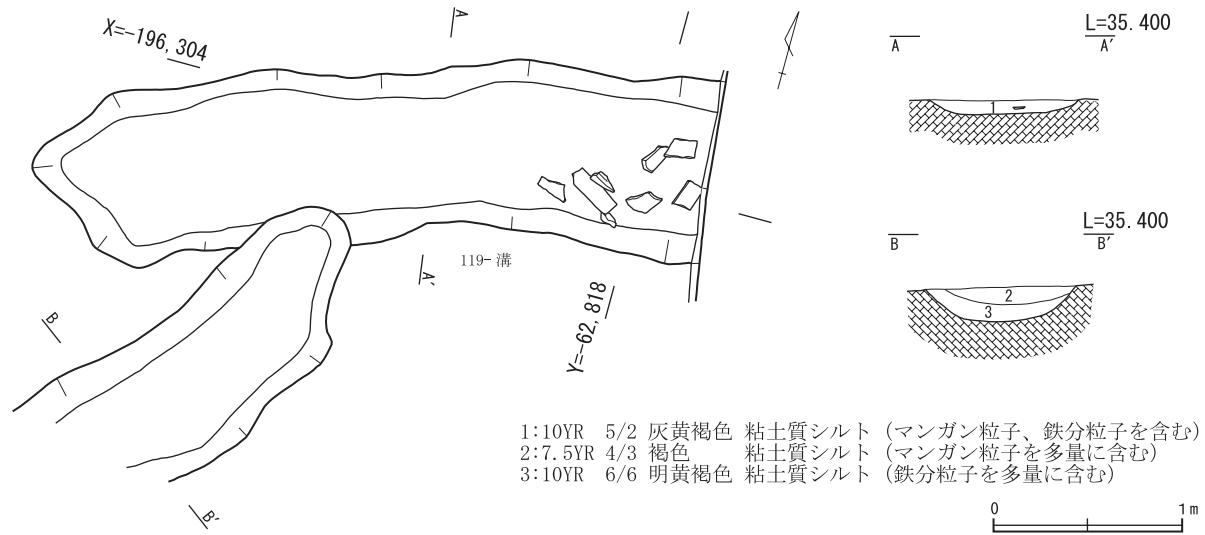
第91図 6-2区 108、109、110、111、112、114、115、116、117-粘土採掘穴

溝

119- 溝（第 93 図、写真図版 45） 幅最大約 0.8 m の溝である。7-4 区 168- 溝、8-4 区 202- 溝と同一の遺構である。調査区界付近を中心に遺物が出土した。



第 92 図 6-2 区 108、109、110、112、113、114- 粘土採掘穴 出土遺物



第93図 6-2区 118-溝、121-土坑、120-溝、120、123、124-小穴



写真8 6-2区 127-溝、218-溝遠景と127-溝断面土層

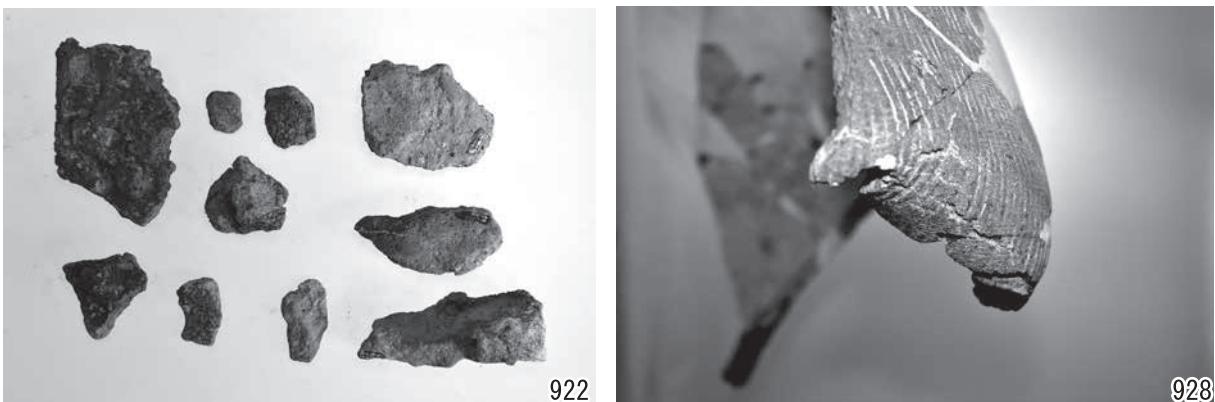


写真9 6-2区 126-土坑出土滓と127-溝出土遺物

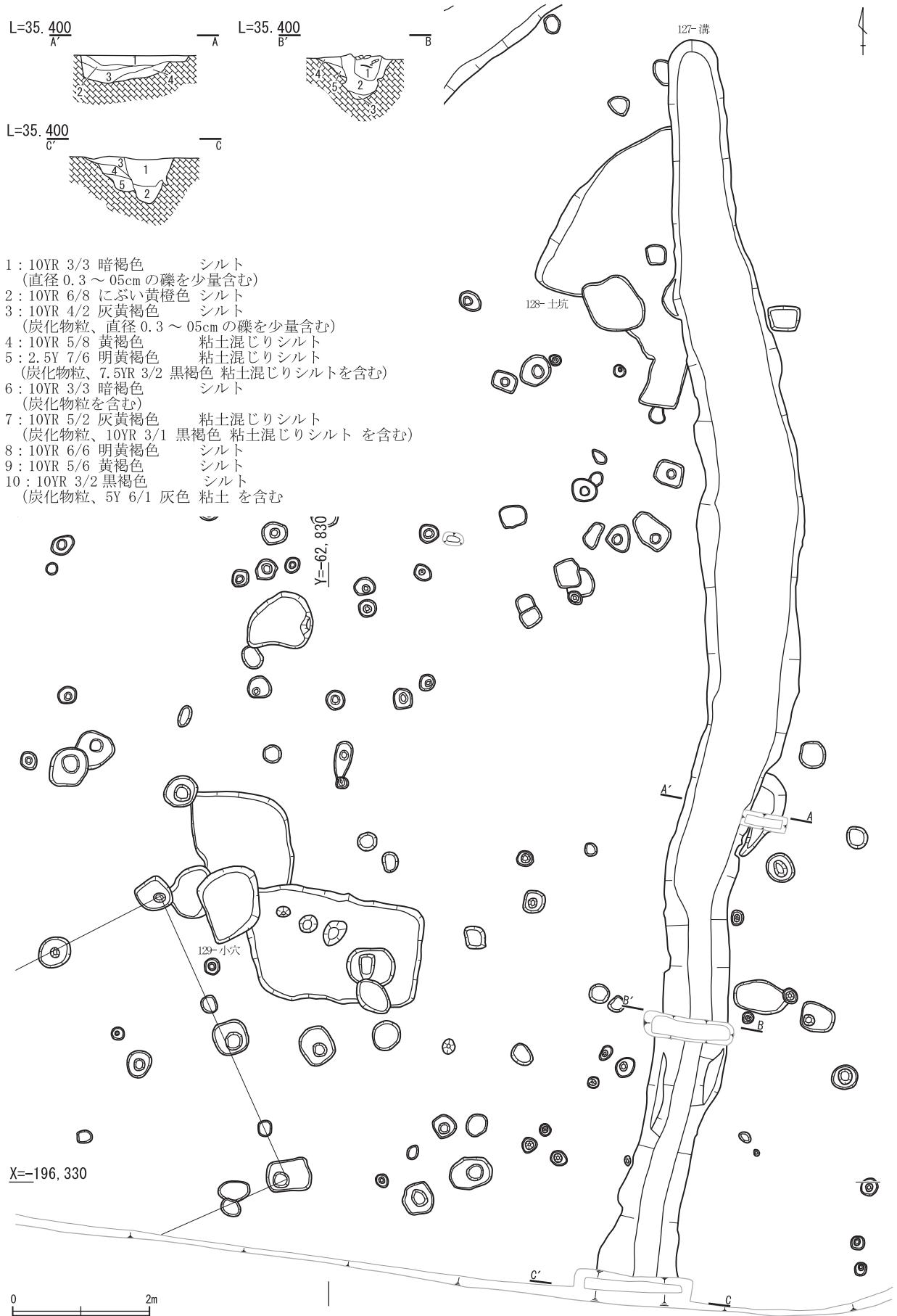
平瓦 15 点、丸瓦 8 点、須恵器 4 点、滓 1 点が出土した。遺物は、いずれも小片で、図示できるものはなかった。

**120-溝（第93図）** 幅最大約 0.4 m の溝である。5-1 区の 68-溝の延長線上に位置し、鍵状に折れる浅い溝である。68-溝からは多数の遺物が出土したが、本溝からは、遺物が出土しなかった。

**127-溝（第94図から第98図、写真8、写真9、写真図版16、写真図版46）** 幅最大約 1.5 m、深さ約 0.6 m の北から南へ流れる溝である。128-土坑を切っている。8-4 区 206-溝、8-5 区 218-溝と同一の遺構である。覆土は大きく 2 層に区分される。断面土層図の 2 から 5 でほぼ埋没したのち、再度掘削され、最終的に断面土層図の 1 の土で埋没している。断面土層図の 1 と、2 以降を分離して取上げた。

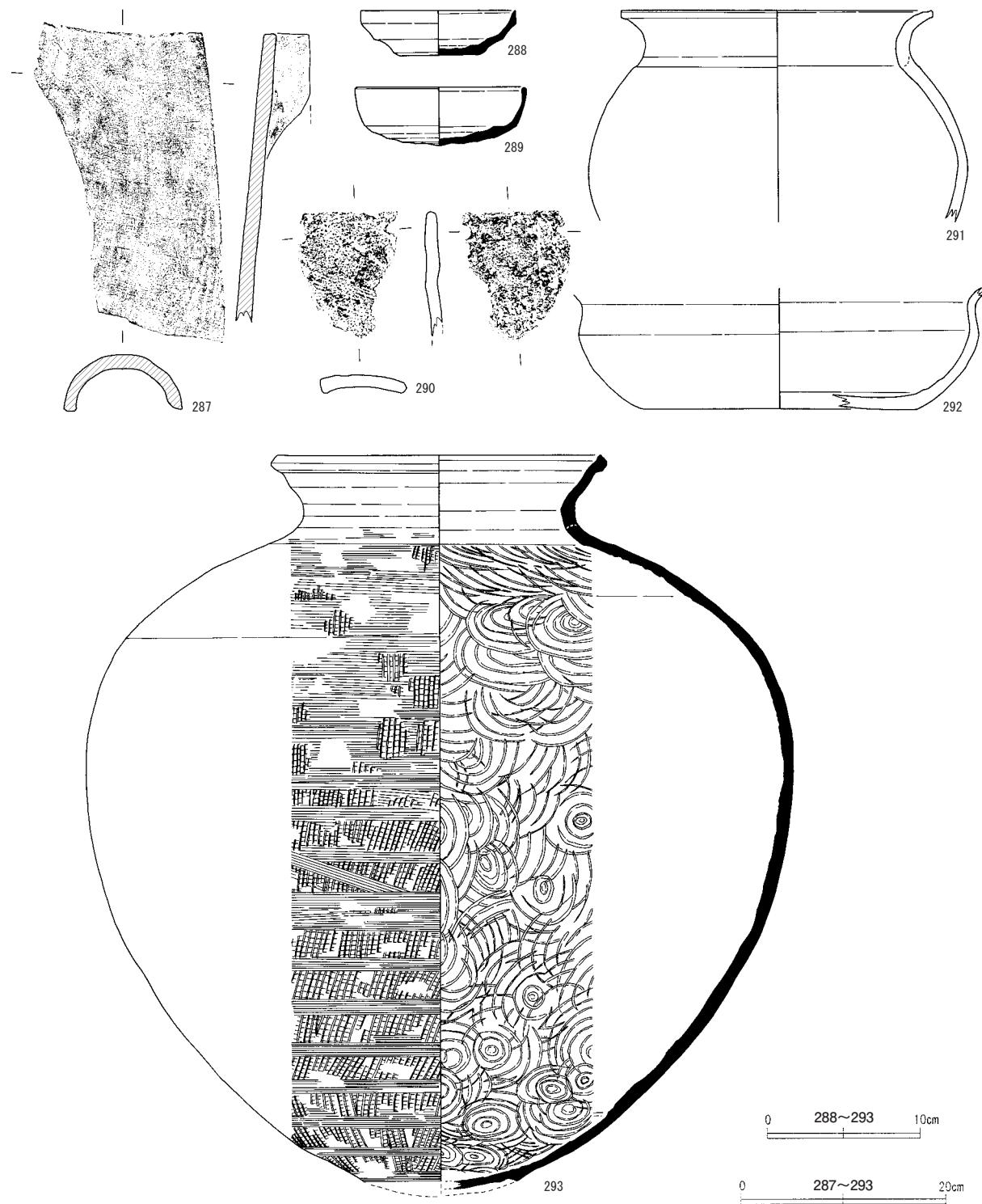
2 層以下からは、平瓦 7 点、丸瓦 2 点、須恵器 13 点、土師器 50 点以上が出土した。このうち、7 点を図示した。

287 は須恵質焼成の行基式丸瓦で、凸面は格子タタキをナデ消している。288 は須恵器の坏身で、底部はヘラ切り離しのまま未調整。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。289 は同じ須恵器の坏身だが底部はヘラケズリ調整を施している。290 は土師器の口縁部で、横断面作成位置に焼成前穿孔が施されている。293 は須恵器の甕である。底部の一部が欠損しているが、ほぼ完形に復元された。外面にはタタキ及びカキ目が器面全体に整然と施され、内面の当て



第94図 6-2区 128-土坑、127-溝

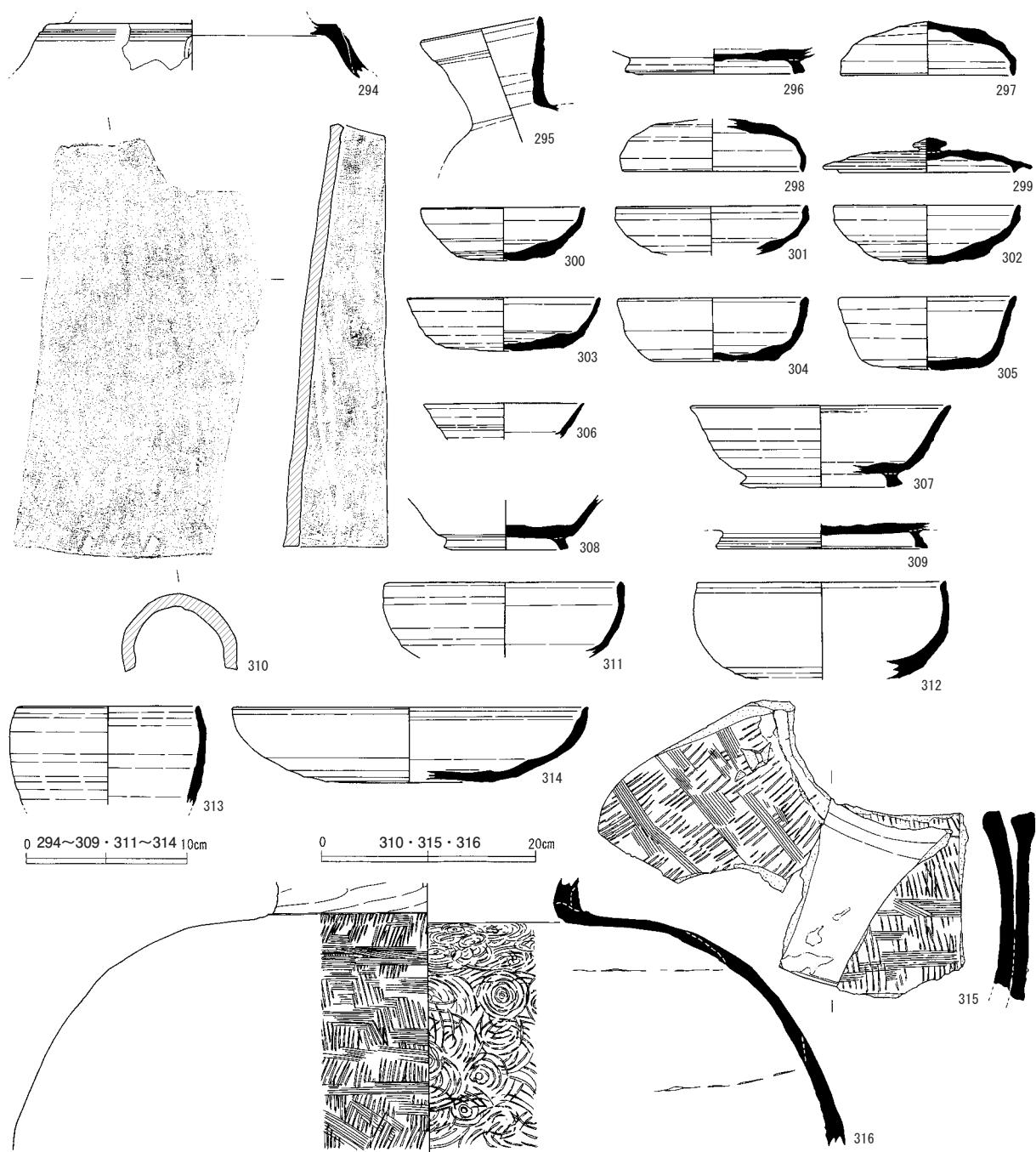
具痕も整然と器壁をめぐる。全体的に薄手の造りで、歪みも少ない。胴部片が 131- 溝の底面直上から出土したほか、口縁部が同一の遺構とはいえ、やや離れた 8-5 区 218- 溝の下層からも出土するなど、広範囲から出土した破片が接合した。また、1 層からも破片が出土している。



第 95 図 6-2 区 127- 溝 出土遺物

1層からは、平瓦2点、丸瓦2点、須恵器200点以上、土師器600点以上、石器・石製品2点が出土した。このうち、32点を図示した。

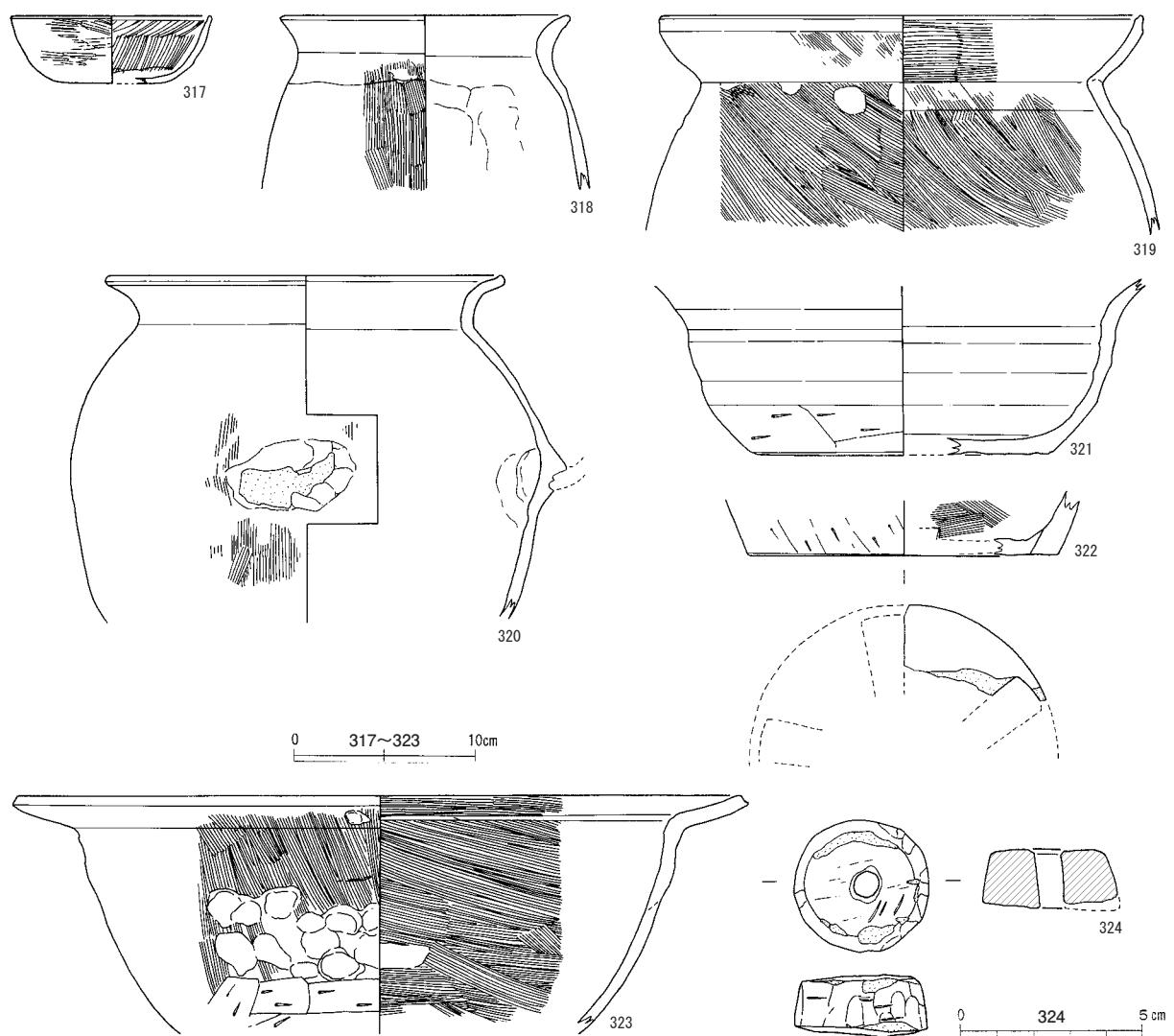
310は須恵質焼成の行基式丸瓦で、凸面は格子タタキをナデ消している。294は5-1区出土の166と極めて類似した、金属器を模倣したとみられる須恵器である。295は平瓶の口縁部である。296、307、308、309は須恵器の高台付きの坏身である。297は天井部分をヘラケズリ調整した坏蓋である。298は天井部分をヘラケズリ調整した後、丁寧にナデて仕上げている。299は摘みを持ち、やや扁平な坏蓋である。天井部は丁寧にヘラケズリを施



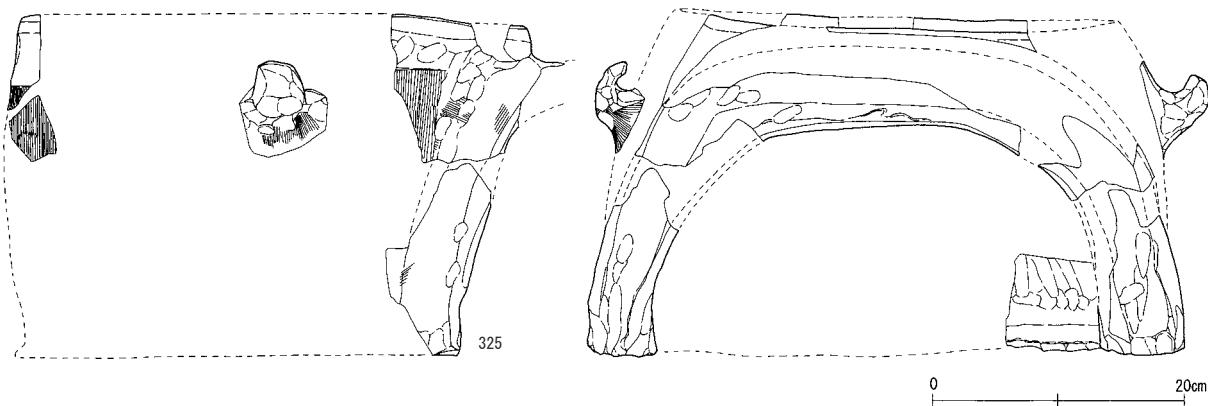
第96図 6-2区 127-溝（上層）出土遺物（その1）

している。300から305は須恵器の坏身である。300、301は底面にヘラケズリを施すが、302から305はヘラ切り離しのままで、調整を行わない。303の外面には、ススが付着している。

311と312は、須恵器の坏だが、器高がやや高く、立ち上がりも丸みを帯びている。いずれも底部を欠くが、胴部および口縁部はナデで仕上げる。口縁部端は、311は丸く收め、321は外傾する。314は須恵器の盤である。底部はヘラケズリ、胴部から口縁部はナデで仕上げる。口縁部はやや薄く仕上げ、内側には稜線がめぐる。焼け歪みが激しい。315は須恵器大甕の口縁部および胴部上半で、焼成時に口縁部が胴部に融着したものである。口縁部は接合面から外れて胴部に付着している。胴部外面は平行タタキの後、カキ目を施す。内面には同心円状の当て具痕が残る。口縁部は、ナデで仕上げている。胴部との接合面には平行タタキが明瞭に残っている。316は須恵器の大甕で胴部外面は平行タタキの後、カキ目を施す。内面には同心円状の当て具痕が残る。315と似た調整を施しているが、接合しない。



第97図 6-2区 127-溝（上層）出土遺物（その2）



第98図 6-2区 127-溝（上層）出土遺物（その3）

317は内面に暗文を持つ壺である。北山廃寺、北山三嶋遺跡出土の同種の土師器は、器表の状態の良くないものが多く、317のように暗文が観察可能な事例は、数少ない。323は浅い鍋である。底面を欠損している。胴部は丸みを帯びつつ立ち上がり、口縁部は横へと延びる。胴部外面は、底部付近はヘラケズリ、胴部中央はユビ押さえの後、ハケ目、胴部上半および口縁部は整然としたハケを施し、端部はナデてハケを消す。内面は、胴部から口縁部の全面に整然としたハケを施している。

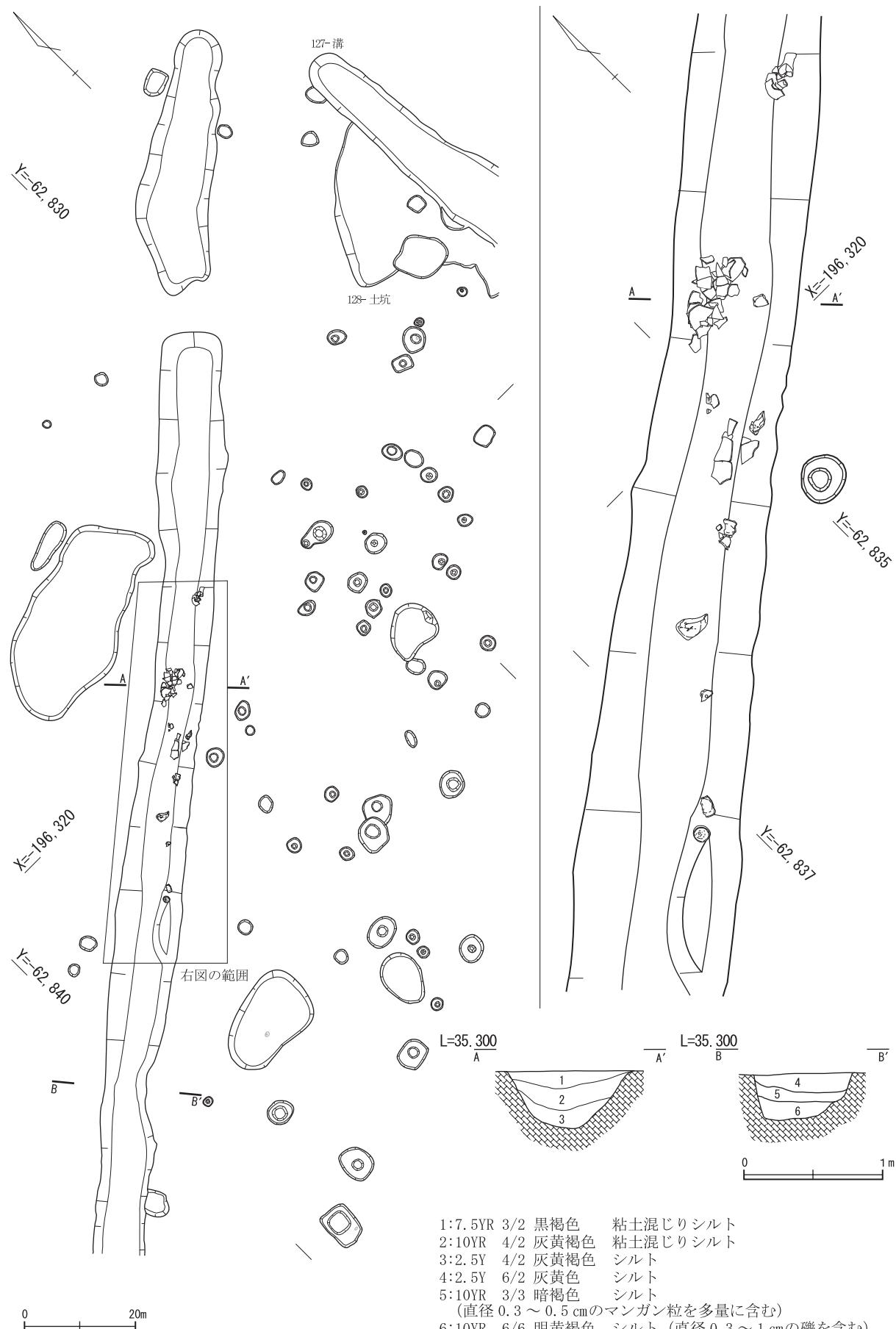
324は滑石製の断面台形の紡錘車である。325は竈である。一部接合しなかったが、調整等から同一個体と判断し、復元・図化した。928は大甕の胴部で、胴部外面は平行タタキの後、力キ目を施す。内面には同心円状の当て具痕が残る。全体形状は不明だが、端部が高熱で変形し、一部は融け落ちている。この甕も接合する破片が218-溝から出土している。

131-溝（第99図、第100図、写真図版16、写真図版46）幅最大約1.2m、深さ約0.4mの北東から南西方向へと流れる溝である。5-1区70-溝と同一遺構である。第99図の出土状況図は、底面直上から出土した遺物のみ、図化したものである。断面土層図のAライン付近から折り重なるようにまとまって出土した甕片は、127-溝出土の須恵器甕（293）と接合した。

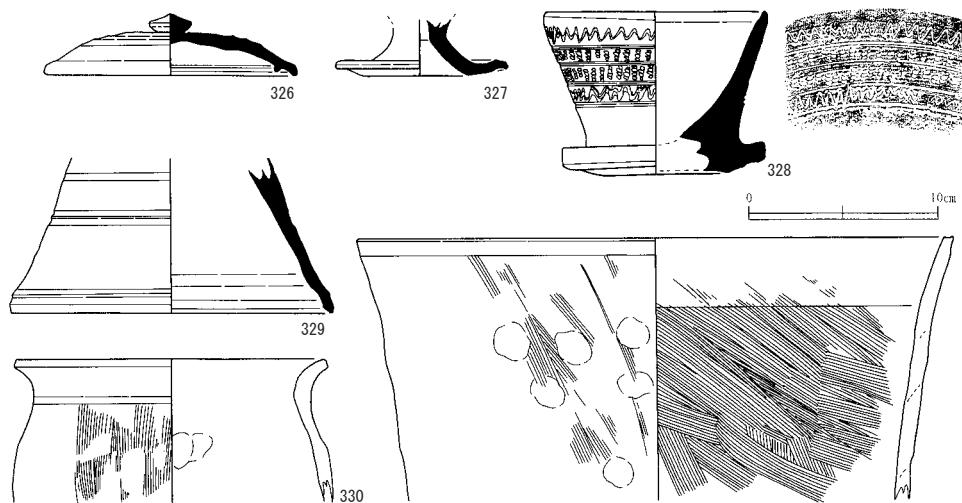
平瓦7点、丸瓦2点、須恵器50点以上、土師器50点以上、石器1点が出土した。このうち、6点を図示した。

326は須恵器の壺蓋で、摘みを持つ。327は高壺の脚部。脚端部は、反り返っており、地面と接していない。328は須恵器のいわゆる捏鉢で、ほぼ完形だが底部が抜け落ちている。口縁部から胴部にかけては、沈線文をめぐらせたのち、波状文と列点文を施す。内面と底面外部は使用に伴うと摩耗が著しく、平滑になっている。329は沈線文をめぐらす須恵器の脚部である。

330は土師器の甕である。外面に縦方向のハケを施している。内面は、剥落が著しく、調整不明である。331は甕の口縁部から胴部であろうか。薄手の造りで、焼成はやや白みがかつた軟質、破断面には粘土紐の接合痕が残る。



第99図 6-2区 131-溝



第100図 6-2区 131-溝 出土遺物

### 小穴

122- 小穴（第90図） 121- 土坑の南側に位置する小穴である。須恵器 11 点、土師器 100 点以上と小穴としてはまとまった数量が出土している。

280 の須恵器を図示した。ごく短脚の須恵器である。円面硯の脚であろうか。土師器は碎片で、図化できなかった。

123- 小穴（第93図、第104図） 121- 土坑の西側に位置する小穴である。平瓦 2 点、土師器 1 点が出土した。

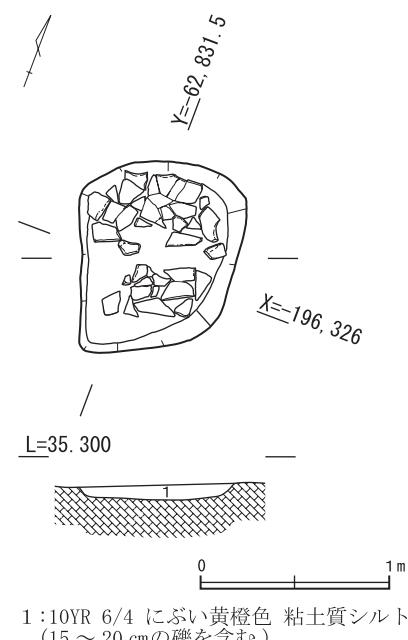
このうち、334 の平瓦 1 点を図示した。334 は凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。広端面には、縄目タタキの上に指頭圧痕が残されている。

124- 小穴（第93図、第104図） 121- 土坑の西、  
123- 小穴の北側に位置する小穴である。平瓦 15 点が  
出土した。

このうち、335 の平瓦 1 点を図示した。凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。

125- 小穴（第104図） 126- 土坑に隣接する。直径 0.2 m の小穴である。須恵器 2 点が出土した。336 は、須恵器の脚部である。4 方向に方形の透かしが切られている。大きさ、高さから考えて、円面硯の脚であろうか。

129- 小穴（第101図、第101図、写真図版16） 調査区の南端、127- 溝と 131- 溝に囲まれた場所に位置する小穴である。一辺約 1 m と土坑と小穴の境界にある規模だが、深さは 0.1 m とごく浅い。

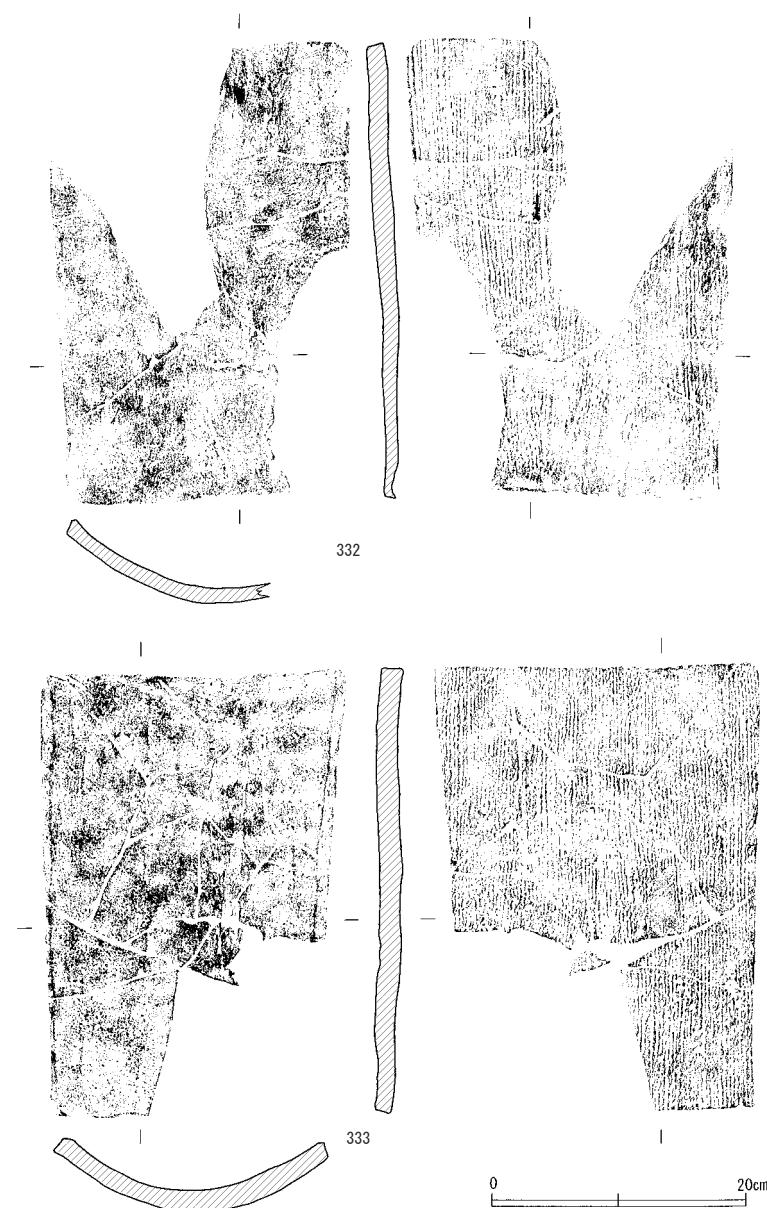


第101図 6-2区 129- 小穴

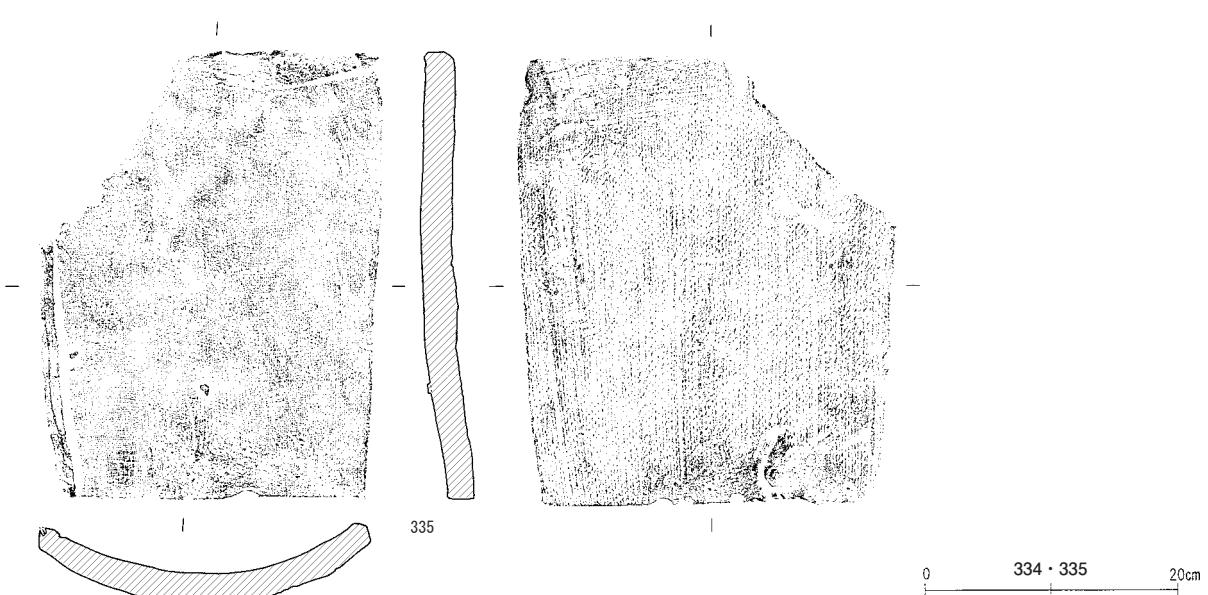
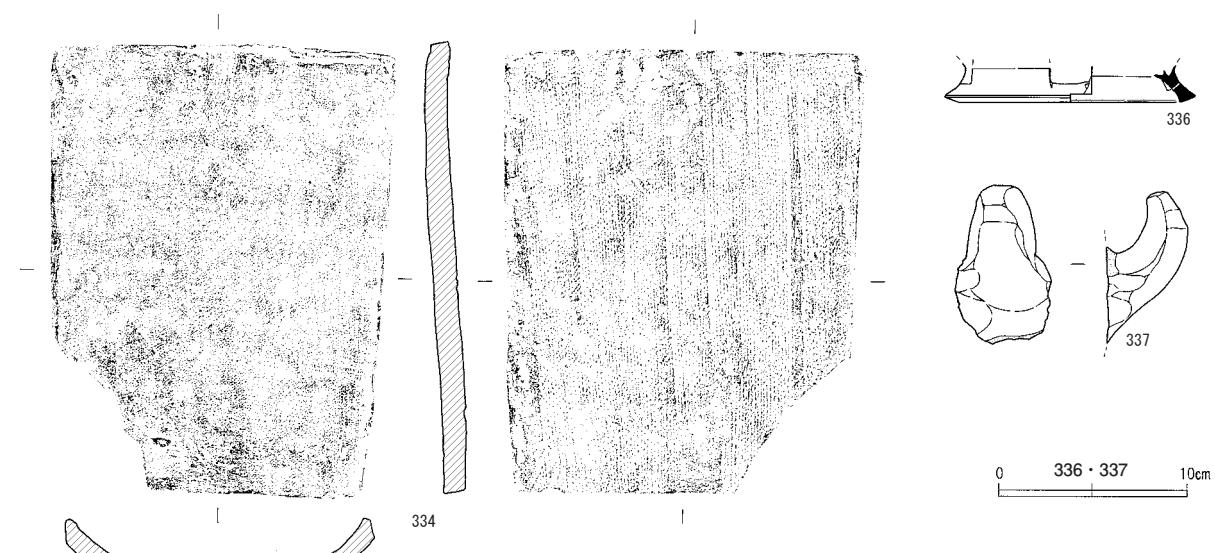
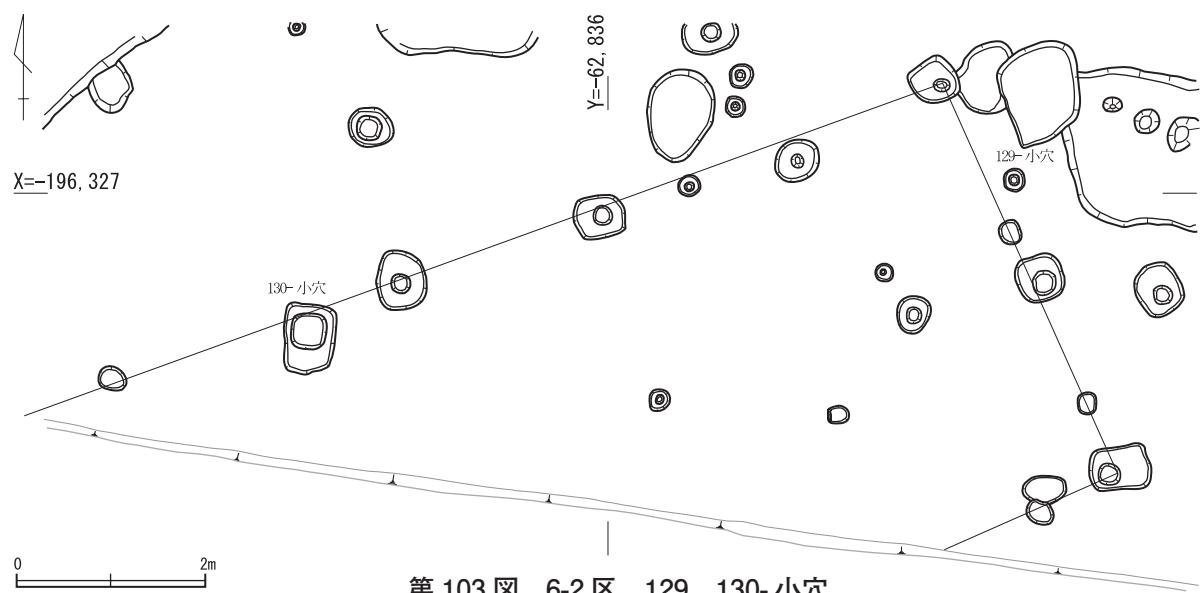
小穴内部を埋めるように、平瓦 50 点以上、丸瓦 2 点、炉壁 3 点が出土した。このうち、332、333 の平瓦 2 点を図示した。232 は凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。233 は、凹面の布目痕をナデ消し、両側面の端部には、ヘラによる面取りを施している。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。332、333 とも焼成はやや悪く、軟質である。色調は灰白色である。

130- 小穴（第 103 図、第 104 図） 調査区の南端には、0.5 m から 0.6 m の方形掘り方の小穴がまとまって検出された。大半が調査区外のため、建物と断定することは難しいが、3 間 × 2 間以上の建物が存在した可能性もある。

130- 小穴はこれら小穴群のひとつである。須恵器 2 点、土師器 1 点が出土した。このうち、337 の土師器の把手 1 点を図示した。



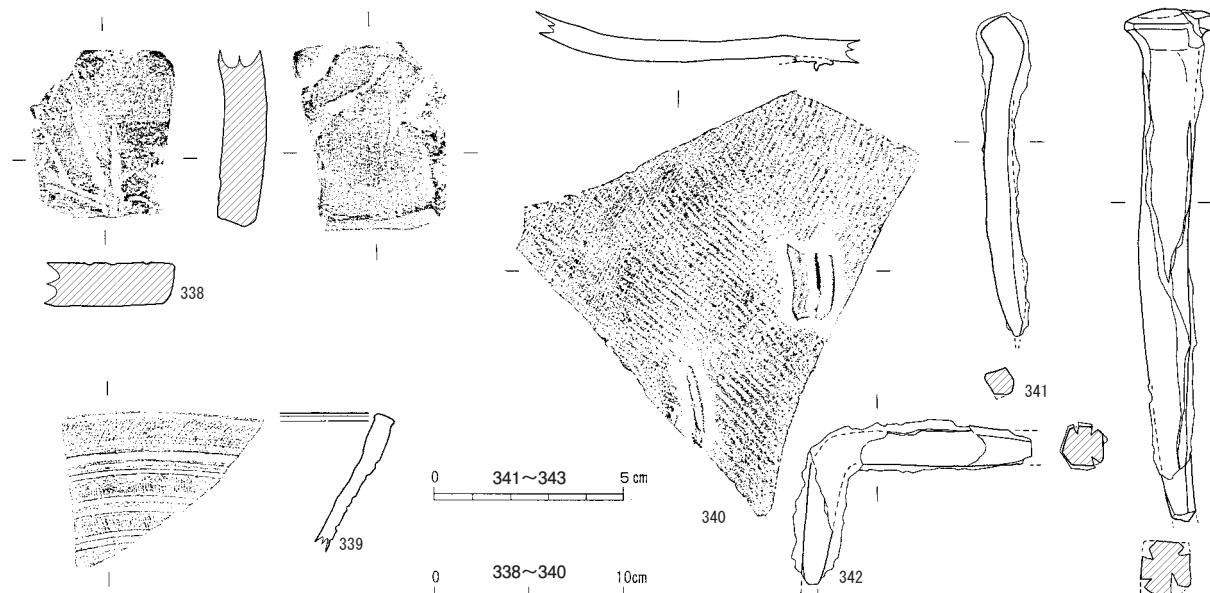
第 102 図 6-2 区 129- 小穴 出土遺物



第 104 図 6-2 区 123、124、125、130- 小穴 出土遺物

## 包含層（第 75 図）

包含層出土遺物のうち、6 点を図示した。338 は平瓦で、ヘラで凸面に丁寧な面取りを行っている。339 は須恵器の口縁部。カキ目に近い波状文を施す。340 は平行タタキを施す甕の底部で、壺の口縁部が融着している。341 から 343 は釘、鎌である。いずれも銹化が激しい。



第 105 図 6-2 区 包含層 出土遺物

## 第 5 節 6-2 区 第 2 遺構面（第 106 図から第 114 図、写真図版 17、写真図版 19）

### 調査区の概要

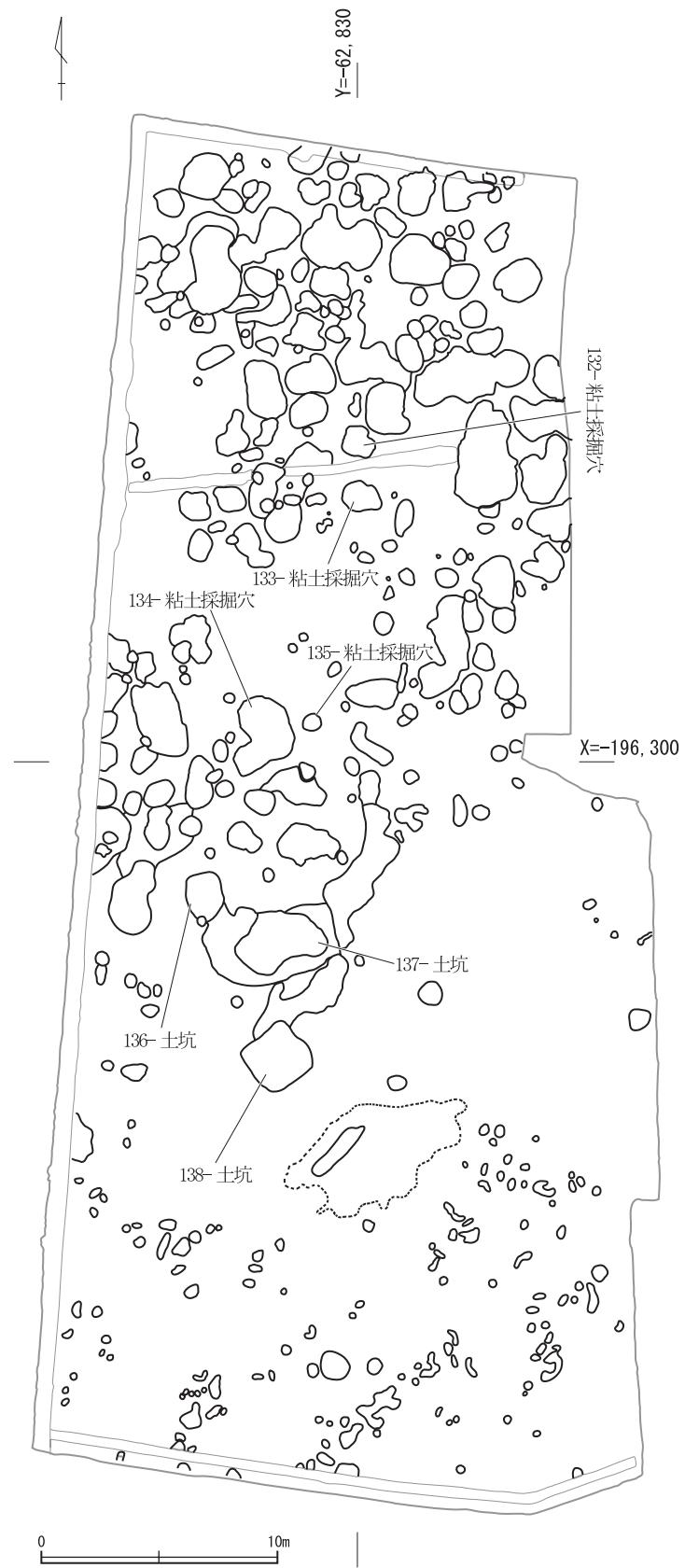
他の調査区と同様に、基本層序（第 4 図）第 5 層上面を検出面として調査を実施した。調査区の北半、およそ  $X=-196,300$  よりも北側では粘土採掘穴が検出された。粘土採掘穴のほぼ南限に、覆土の全く異なる土坑があり、この土坑よりも南側には、性格不明の小穴が散発的に分布する。

### 土坑

**136- 土坑（第 107 図、第 109 図、写真図版 17）** 調査区の中央やや北より、粘土採掘穴群に接する位置にある長径約 2.1 m、深さ約 0.3 m の土坑である。覆土は、灰色系の粘質土と橙色系のシルト質土で、ブロック状に堆積しない。

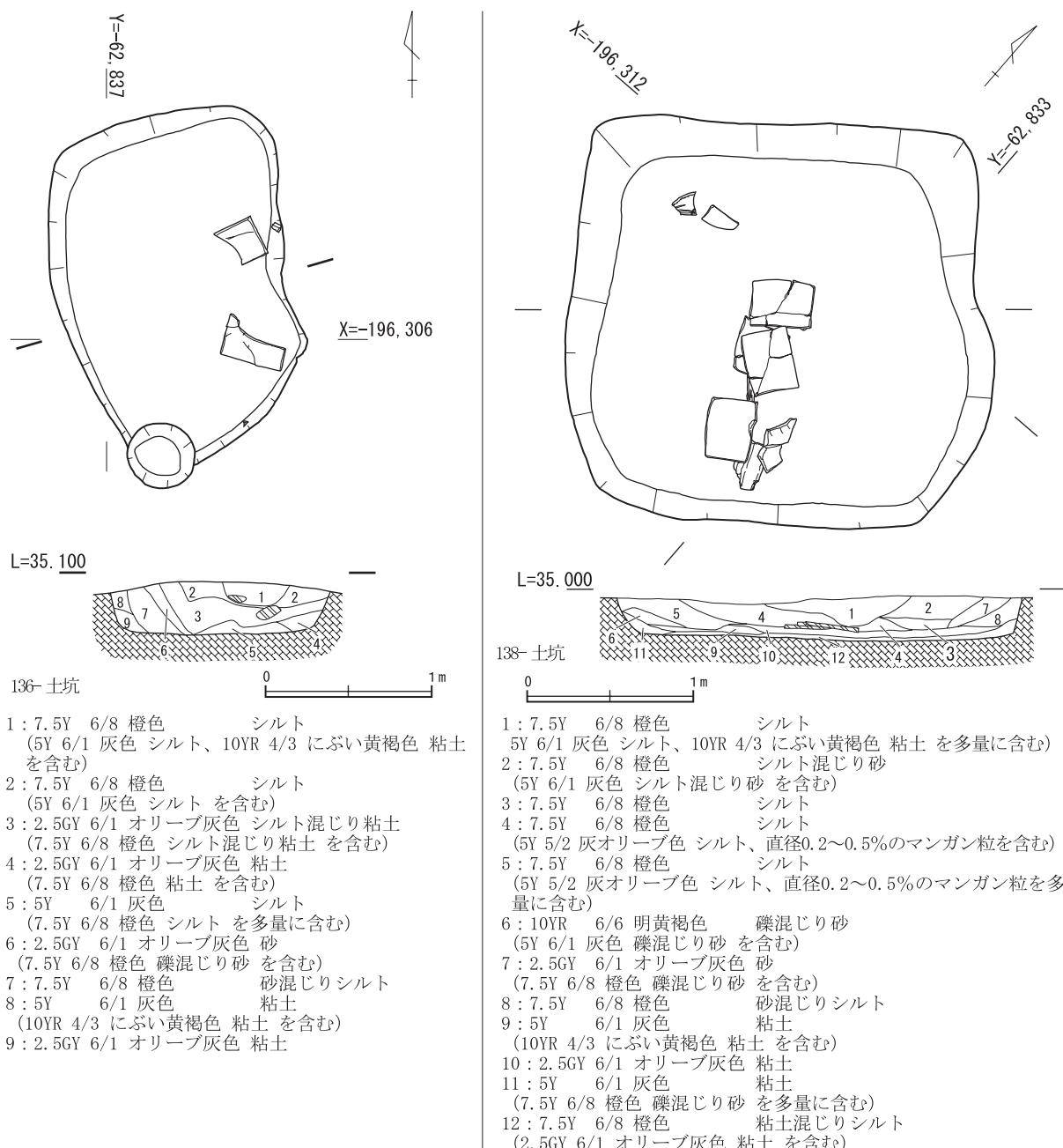
平瓦 27 点、丸瓦 1 点が出土した。うち、平瓦 3 点を図示した。いずれも、一枚造りで凸面には整然と縄目タタキを施す。822 は焼成がやや甘く、褐色で脆い。823、824 は須恵質焼成である。両者で凹面の糸切り痕の方向が逆である。

**137- 土坑（第 107 図、第 109 図、写真図版 17）** 長径約 4 m の不正形の土坑である。周囲を別の浅い落ち込み状の遺構が取り巻いている。遺物は、土坑の北肩付近からまとめて出土した。

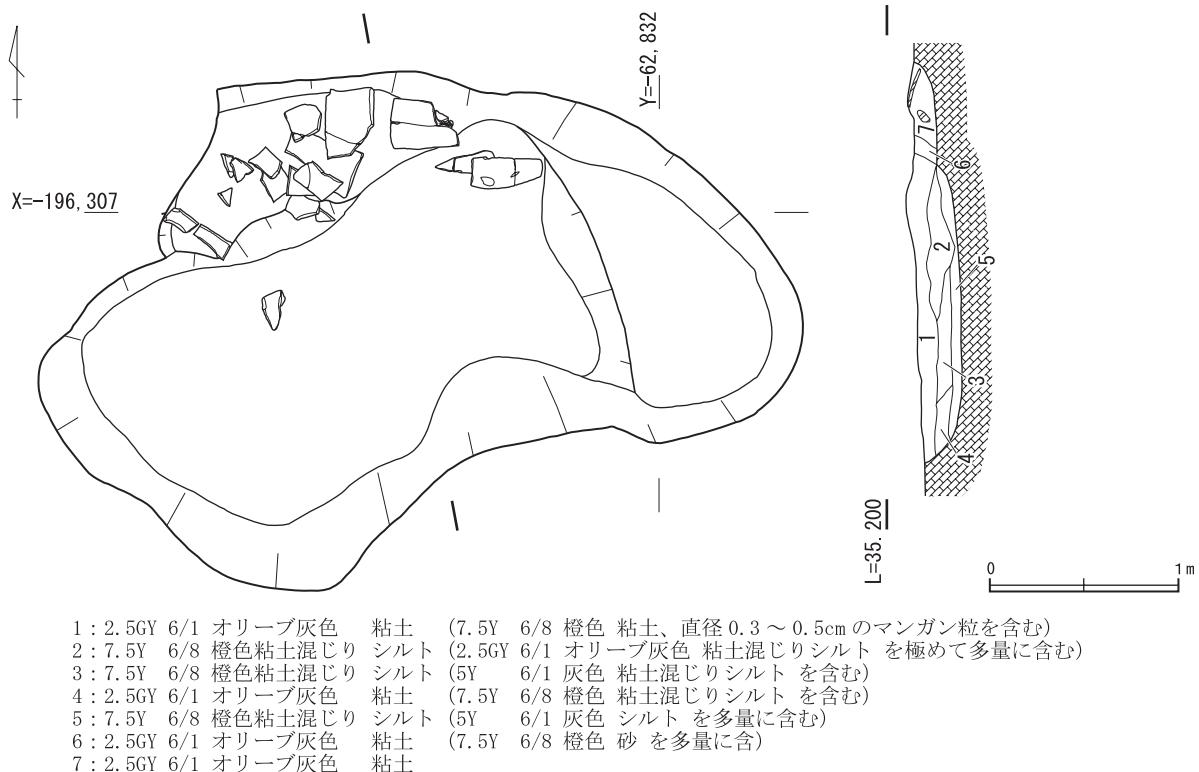


第106図 6-2区 第2遺構面 遺構全体図

平瓦 38 点、丸瓦 1 点、須恵器 8 点が出土している。うち、825 から 829 の平瓦 4 点、須恵器 1 点を図示した。825 から 828 は平瓦である。825 は、土師質の焼成で脆く、表面の剥落が著しい。他の平瓦に比べると厚みが不均一で、かつ、全体的に厚手である。凹面の布目を強いヘラナデで消しており、ヘラの単位が明瞭に残る。凸面には縄目タタキを施すが、827、828 に比べて原体の縄が太い。826 は凹面の布目をナデ消している。凸面には縄目タタキを施すが、825 と同様に原体の縄が太い。827 は須恵質焼成、828 は須恵質焼成の平瓦である。829 は須恵器の壺蓋である。



第 107 図 6-2 区 第 2 遺構面 136、138- 土坑



第 108 図 6-2 区 第 2 遺構面 137- 土坑

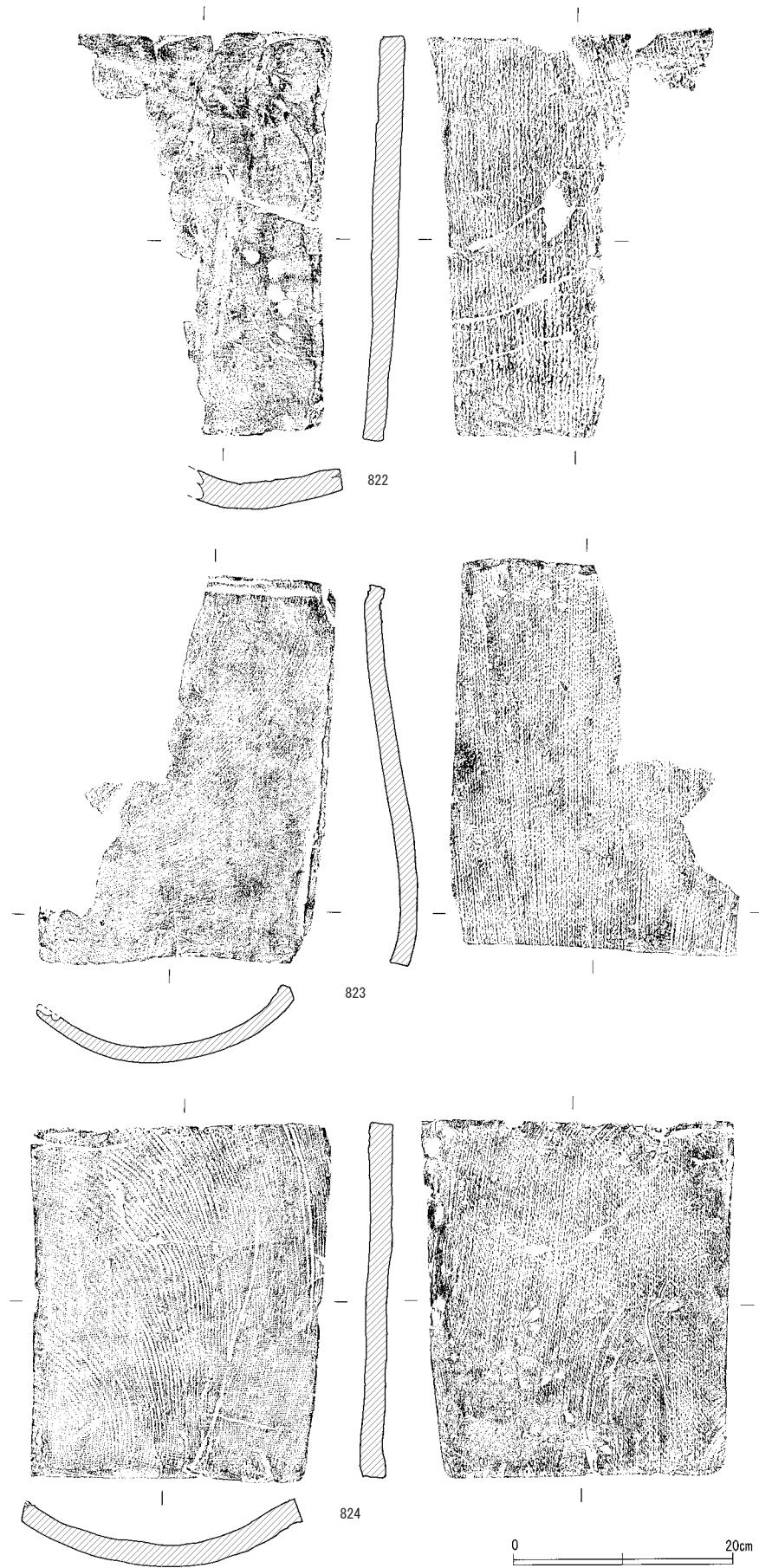
138- 土坑（第 107 図、第 109 図、写真図版 17）一辺約 2.4 m の方形の土坑である。覆土は、2 層に大別可能で、上層が断面土層図 8までの橙色系のシルト、下層が断面土層図 9 層以降の灰色系の粘土である。平瓦は、上層と下層の境界付近から、土坑の主軸に沿って出土した。

平瓦 50 点、丸瓦 2 点、須恵器 4 点、土師器 5 点が出土した。うち、平瓦 4 点、土師器 1 点を図示した。830 から 833 は平瓦である。このうち、832 は土師質焼成で、軟質の焼き上がりである。土師質の焼成を行うと赤橙色になる粘土と白色になる粘土の 2 種類を素材とし、かつ、両者の混和が不十分だったとみられ、表面は赤橙色の地に白色の粘土でマーブル模様を描いたようになっている。834 は土師器の鍋である。内面は強いユビ押さえとナデ、外側はナデで仕上げている。

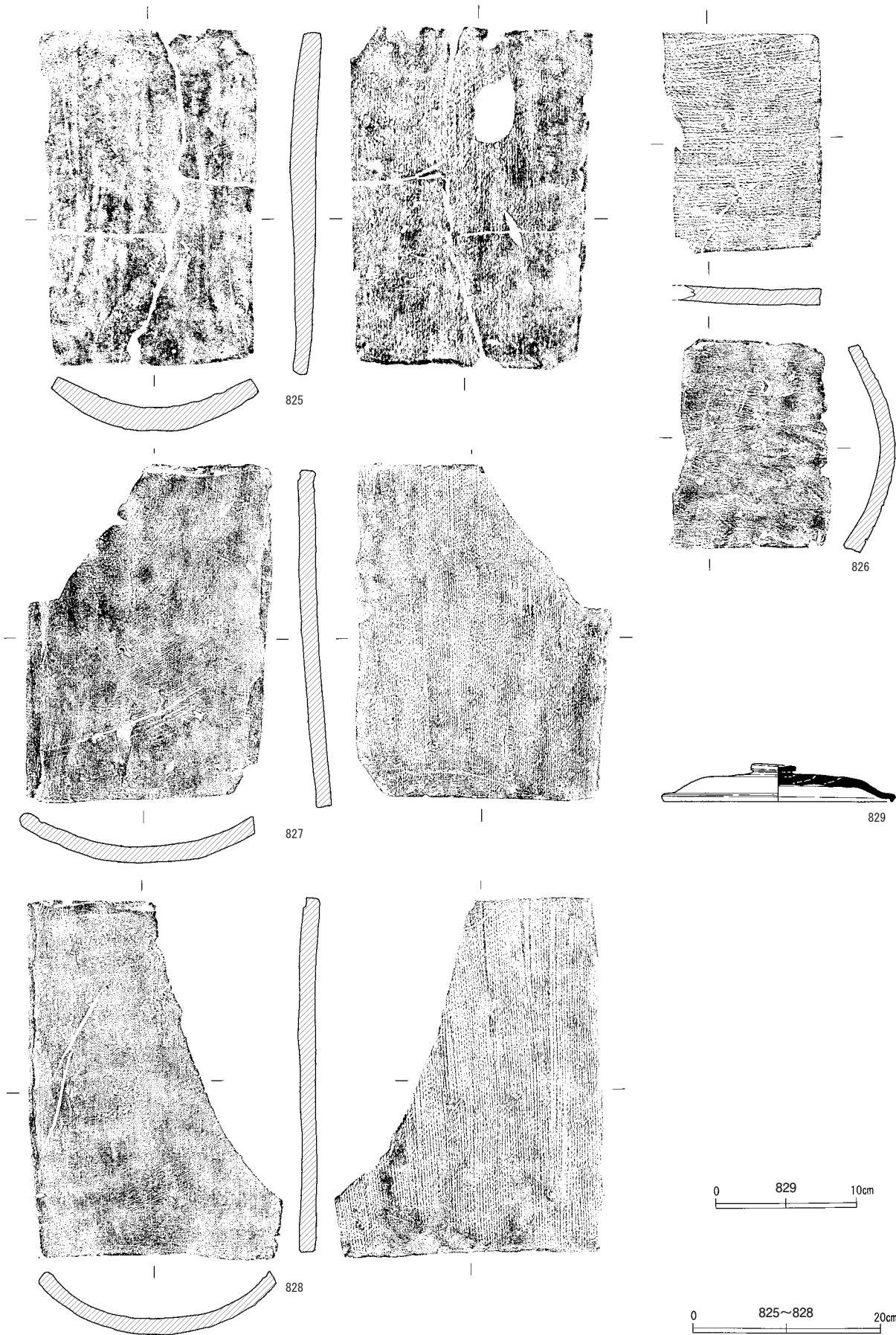
#### 粘土採掘穴（第 113 図、第 114 図、写真図版 18）

136- 土坑、137- 土坑よりも北側で検出された。不整形の土坑群である。検出されなかった南側の地点では、他の調査区と同様に、検出面の土が砂質を帶びている。近接して位置する土坑とは、他の地区と同様、埋土が特徴的なブロック状堆積を示す点で弁別可能である。当地区の粘土採掘穴の埋土状況の代表例として 133- 粘土採掘穴を提示した（写真図版 18）。調査区やや北寄りの位置にある。直径約 1.5 m 程度の不整形の土坑である。遺物は出土していない。

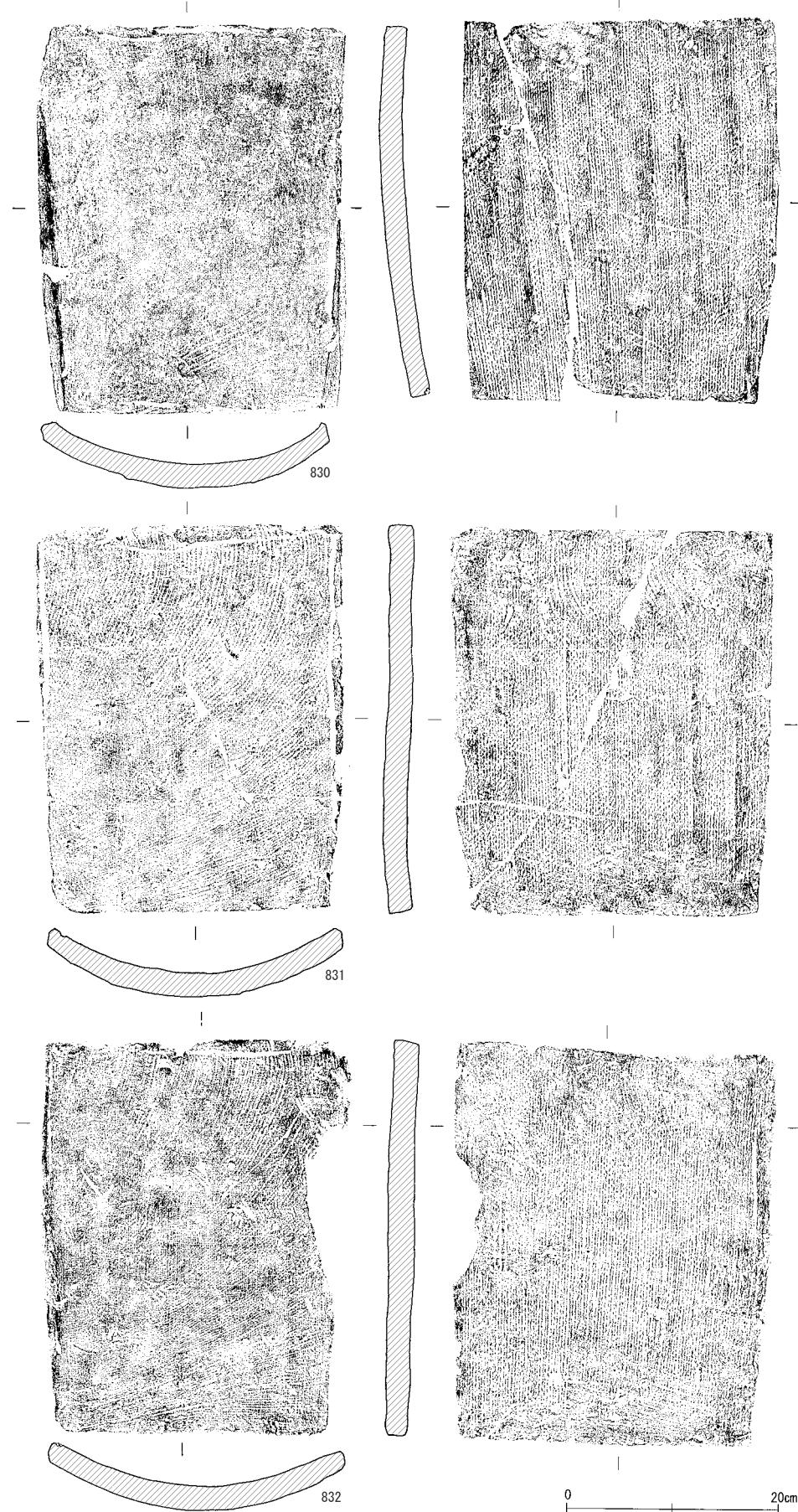
遺物の出土数は、決して多くないが、134- 粘土採掘穴のように、碎片のみだが平瓦 50 点以上、丸瓦 6 点、須恵器 2 点、土師器 1 点が出土した例がある。134- 粘土採掘穴出土遺物として、平瓦 1 点を図示した。835 は、桶巻造りで凸面を丁寧にナデで仕上げている。凹凸両面とも、端部をヘラにて丁寧に面取りしている。



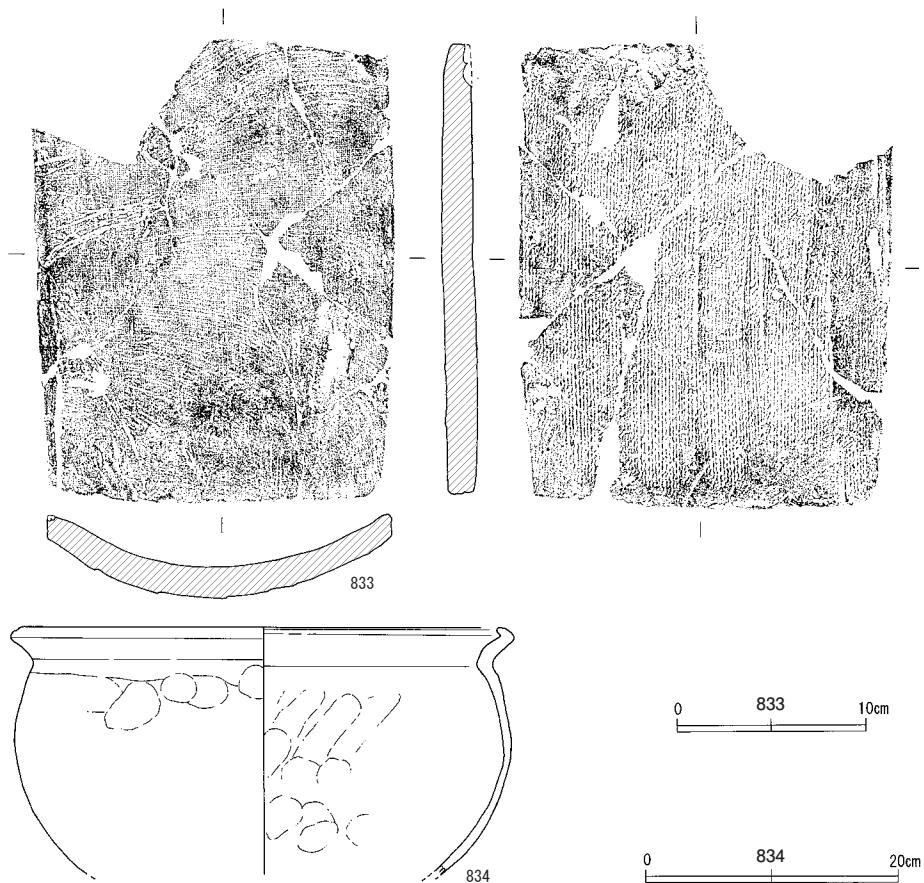
第109図 6-2区 第2遺構面 136- 土坑 出土遺物



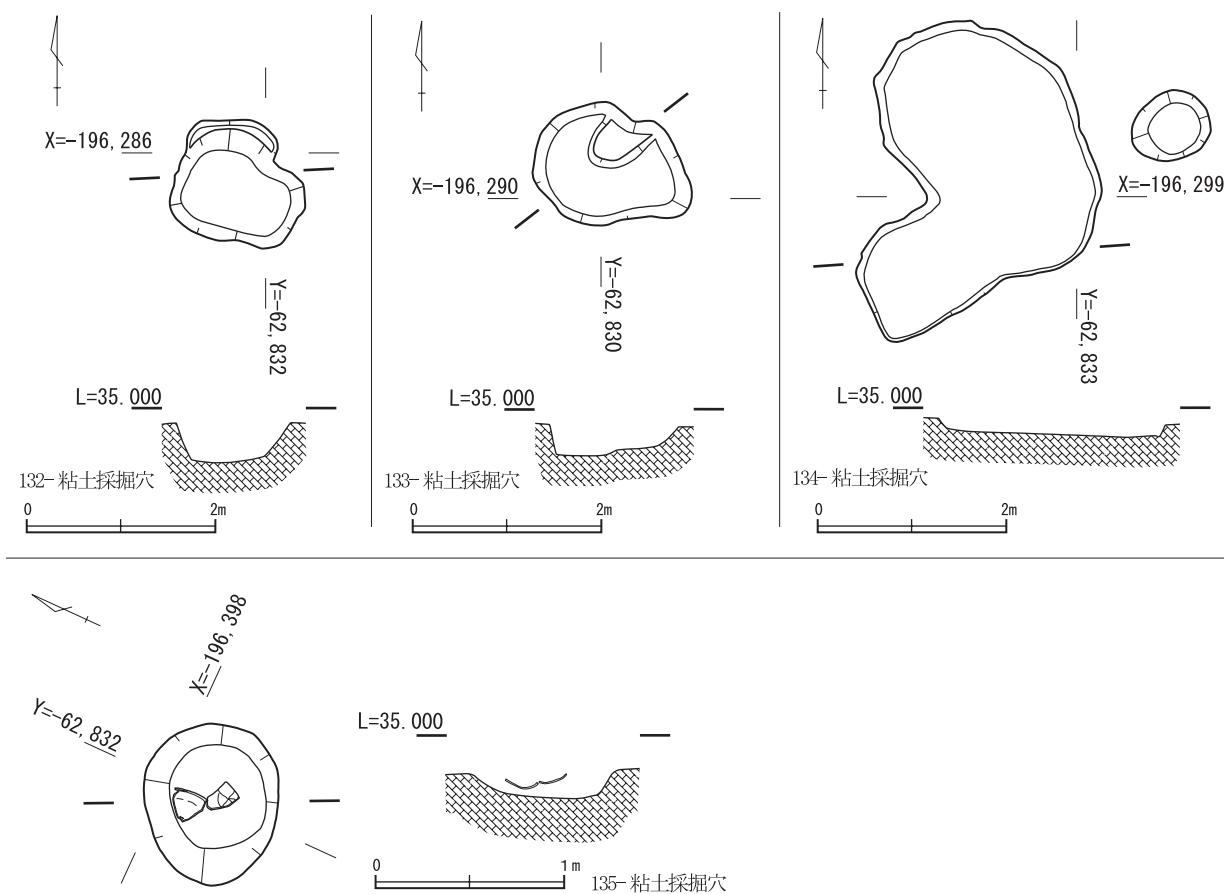
第110図 6-2区 第2遺構面 137-土坑 出土遺物



第111図 6-2区 第2遺構面 138- 土坑 出土遺物（その1）

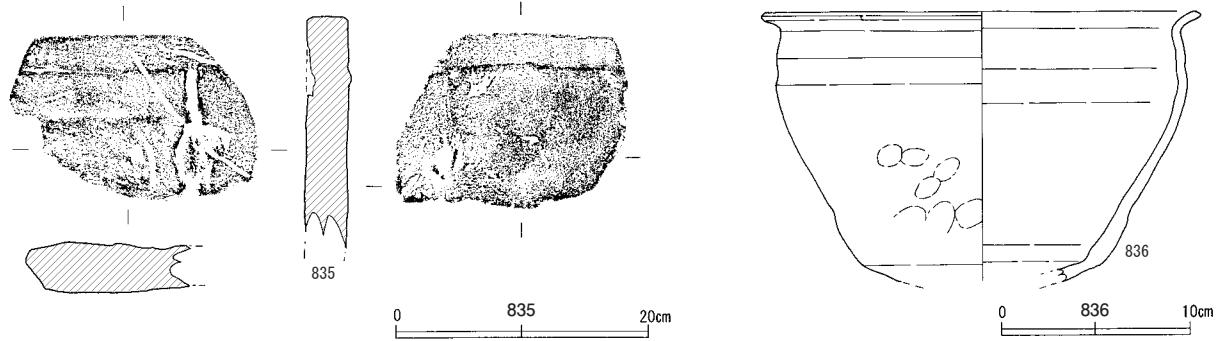


第112図 6-2区 第2遺構面 138- 土坑 出土遺物（その2）



第113図 6-2区 第2遺構面 132、133、134、135- 粘土採掘穴

135- 粘土採掘穴は、134- 粘土採掘穴の東側に位置する。直径約 0.8 m、深さ 0.14 m程度の浅い円形の粘土採掘穴だが、須恵器 5 点が出土した。このうち、1 点を図示した。836 は、須恵器の鉢である。全体を回転ナデで整形したのち、胴下半をユビで押されたことにより、いびつな形状になっている。底部は残りが悪いが、30 度程度に傾斜しており、安定感に欠ける。



第 114 図 6-2 区 第 2 遺構面 134、135- 粘土採掘穴 出土遺物

## 第 6 節 7-1 区（写真図版 18）

### 調査区の概要

1-1 区の南側、A1、A2 区画に位置する。北側約 4 分の 3 は水田、残りは水田より約 0.6 m高く、梅などの果樹が植栽されていた。

遺構検出面は 1 面で、水田部分では現代の表土及び床土直下、果樹畠では表土層直下が検出面である地山となる。水田部分の地山面はほぼ水平で、もともと、7-1 区から 1-1 区、11 区に向かって北に傾斜していた旧地形を削平・整形し水田化したものと推定される。南側部分の高まりは人為的な盛土等ではなく、地山を段上に整形したものである。上述の削平により、調査区の中央部分では全く遺構は検出されず、北端部で近世以降の土坑数基と水田耕作に伴う鋤溝を数条検出したのみである。

遺物は、包含層を含む調査区内の出土数合計で平瓦 46 点、丸瓦 2 点、須恵器 7 点、土師器 53 点、青磁 1 点、陶器 1 点とごく少なく、しかも碎片のみであったため、図示しなかった。

## 第 7 節 7-3 区（第 115 図から第 121 図、写真図版 19、写真図版 47）

### 調査区の概要

7-1 区の南側、A2 区画に位置する。保存範囲の東側に位置し、回廊の存在が推定された調査区である。貴志川町教育委員会の設定した試掘トレーニングが 1 本、調査区内に存在する。調査前の現況は水田及び果樹畠で、段状に複数の地筆に分かれていた。

包含層は調査区内でも、地表面の標高が最も高い北東部分にのみ遺存していた。遺構は、北側で柱穴や土坑、溝等を多数検出したが、地山面が 1 段低くなる調査区南側では、遺構の存在は希薄であった。後世の削平によって消失したのであろう。

## 土坑

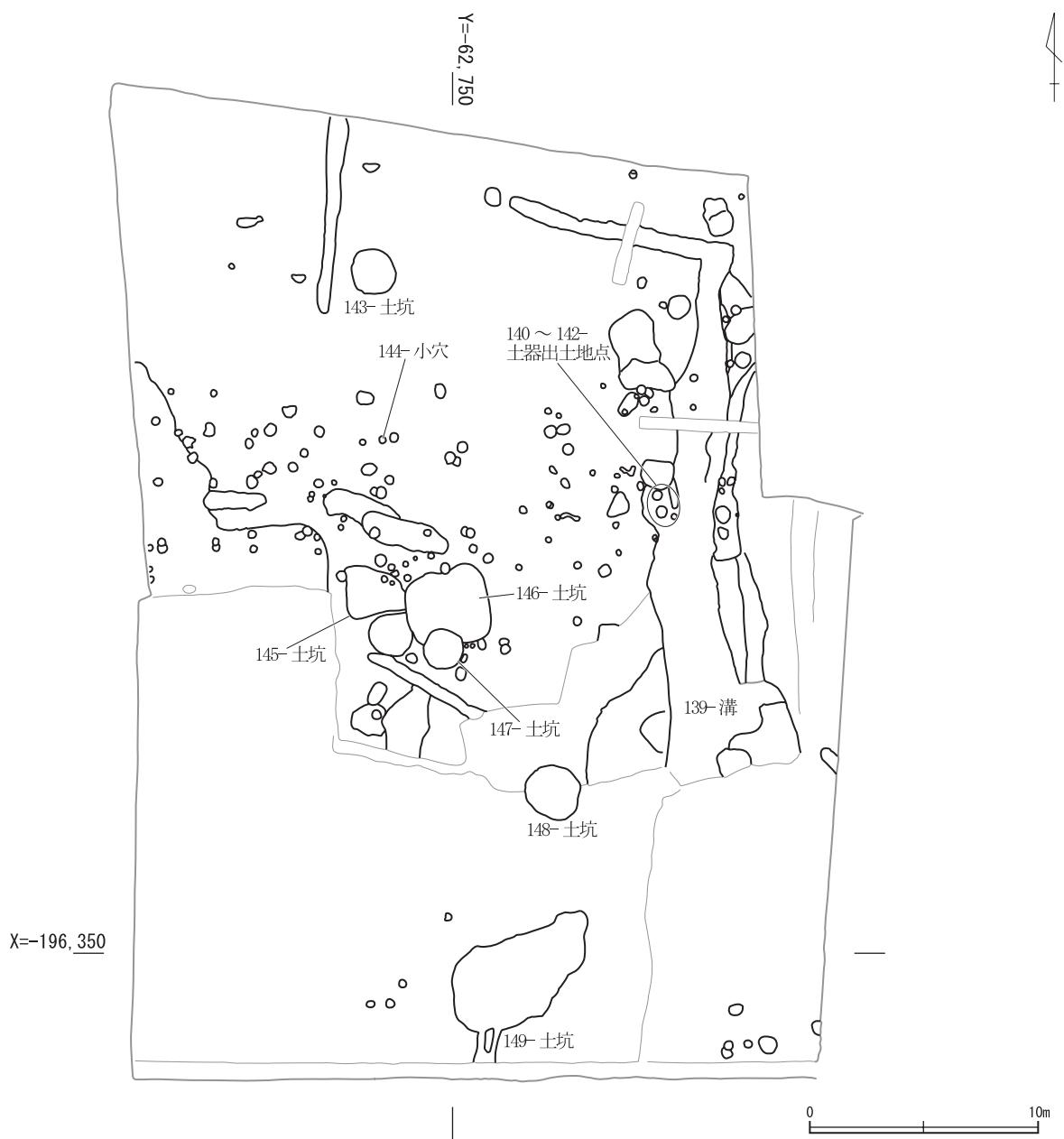
143- 土坑（第 116 図、第 118 図、写真図版 17） 長径約 2.1 m の土坑である。平瓦 50 点以上、丸瓦 10 点、須恵器 1 点、土師器 1 点が出土した。覆土は東西に傾いて堆積している。遺物は、断面土層図の 7 層から礫とともに出土している。いずれも碎片で、図示していない。

145- 土坑（第 116 図、第 118 図） 一辺最大約 2 m の三角形に近い平面形の浅い土坑である。

146- 土坑に切られている。軒丸瓦 1 点、平瓦 41 点、丸瓦 6 点、土師器 17 点が出土した。

344 の軒丸瓦 1 点を図示した。

146- 土坑（第 116 図、第 118 図） 一辺約 2.4 m の隅丸方形の浅い土坑である。145- 土坑を切り、147- 土坑に切られる。平瓦 50 点以上、丸瓦 16 点、土師器 1 点、鉄器 1 点が出土した。遺物は、いずれも碎片で、図示していない。



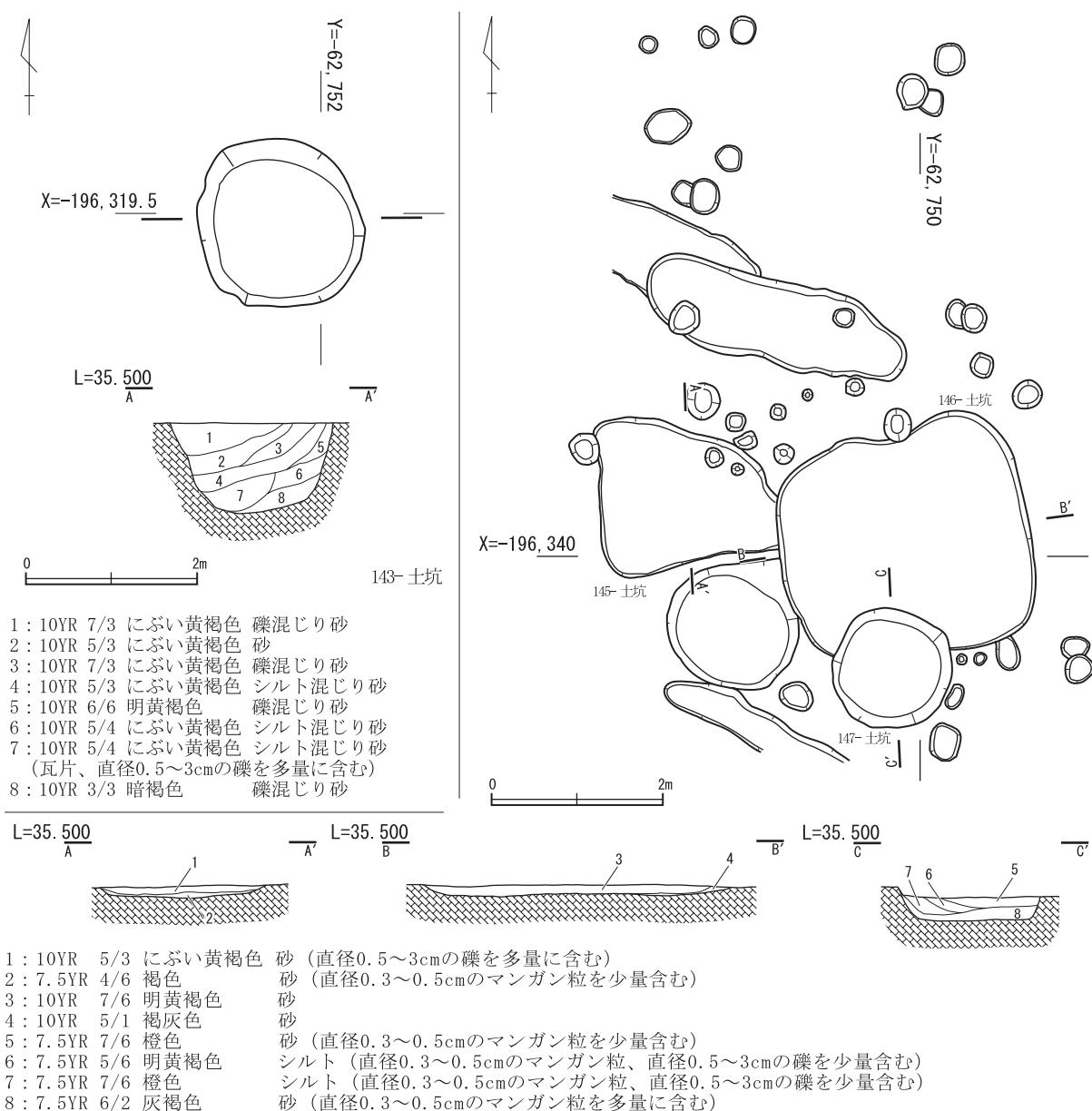
第 115 図 7-3 区 遺構全体図

147- 土坑(第116図、第118図) 直径約1.4mの円形の土坑である。146- 土坑を切っている。西側にも似た土坑が1基あるが、これは、146- 土坑に切られている。

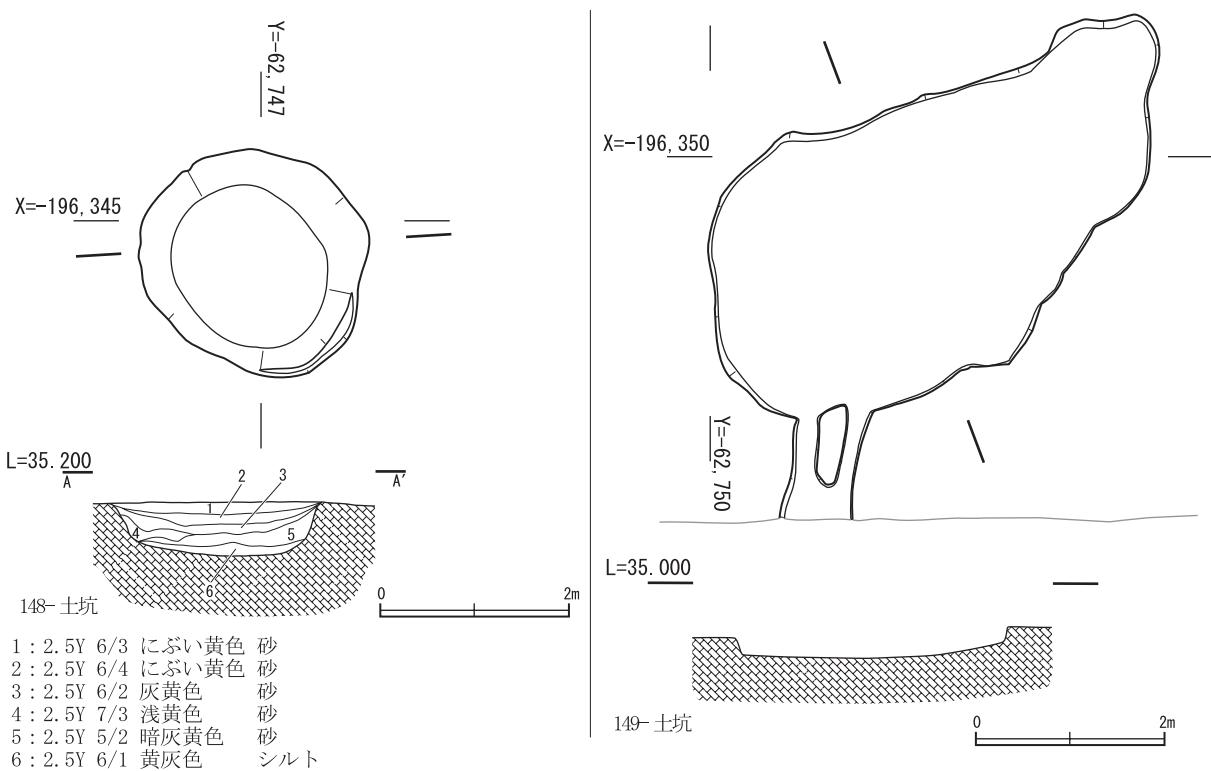
平瓦15点、丸瓦3点が出土した。1点図示した。345は道具瓦である。凸面に格子タタキを施し、焼成前に三角形に成形している。

148- 土坑(第117図、第118図、写真図版47) 調査区の南側、調査前の地筆の境界に位置する、直径約2.4mの円形の土坑である。上面には砂質土が、底面付近には灰色系のシルト質土が堆積しているが、出土遺物に時期差はない。

軒丸瓦1点、平瓦200点以上、丸瓦50点以上、須恵器3点、土師器6点、瓦器1点が出土した。3点図示した。346は、円盤型土製品である。縄目タタキを施した土師質焼成で軟質の平瓦を打ち欠き、作製している。347は土師器の小皿である。348は瓦質焼成の羽釜である。口縁部外面には3条の凹線を施す。破断面からは、胴部に板状の粘土を斜め上から



第116図 7-3区 143、145、146、147- 土坑



第 117 図 7-3 区 148、149- 土坑

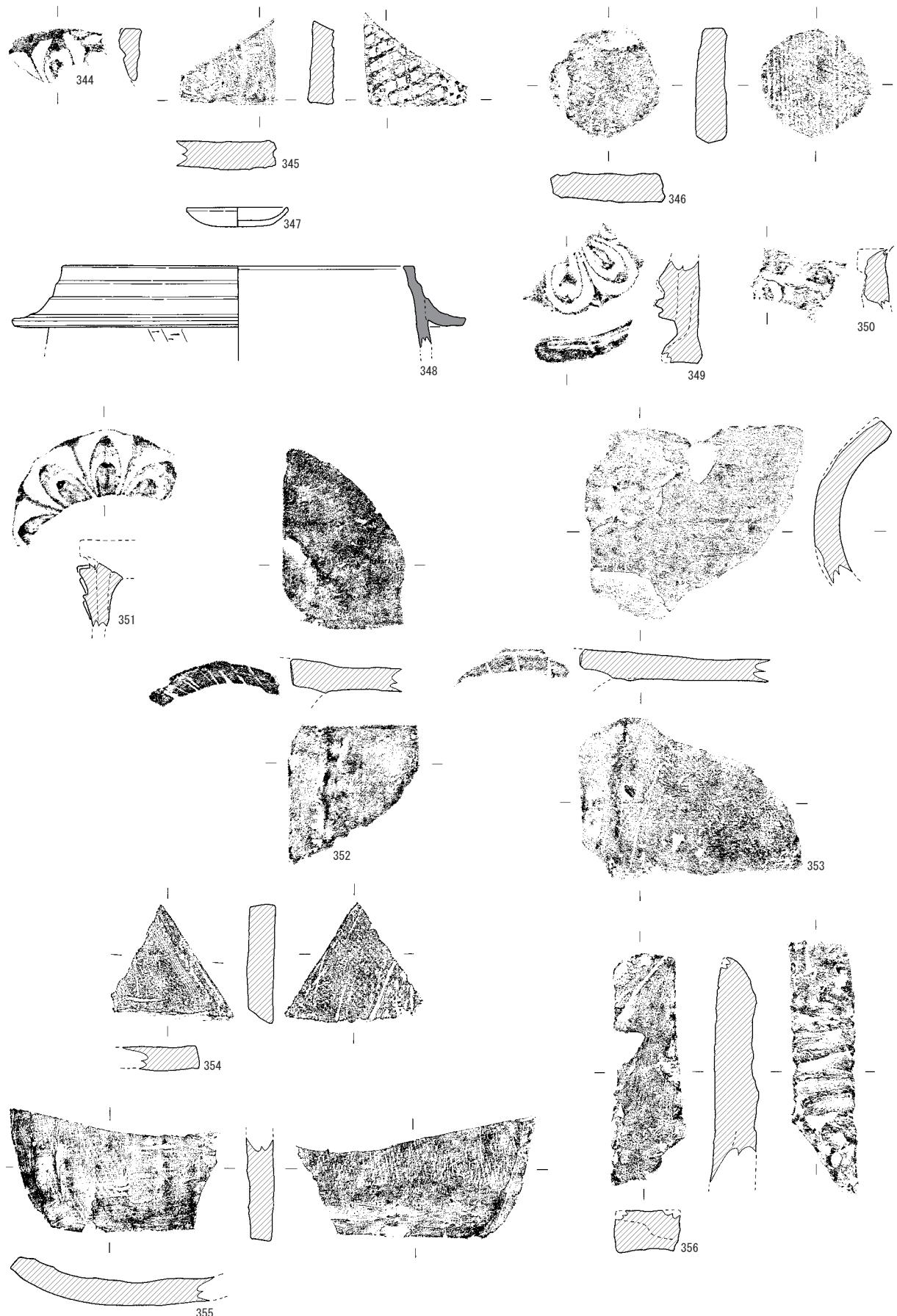
押しつけて鍔部を作出した状況が明瞭に観察できる。鍔部の下部には、ススが付着している。

**149- 土坑（第 117 図、第 118 図、写真図版 19）** 調査区の南端に位置する。長径約 6 m、短径約 2.8 m の浅い土坑で、南側に溝状の遺構が取り付く。

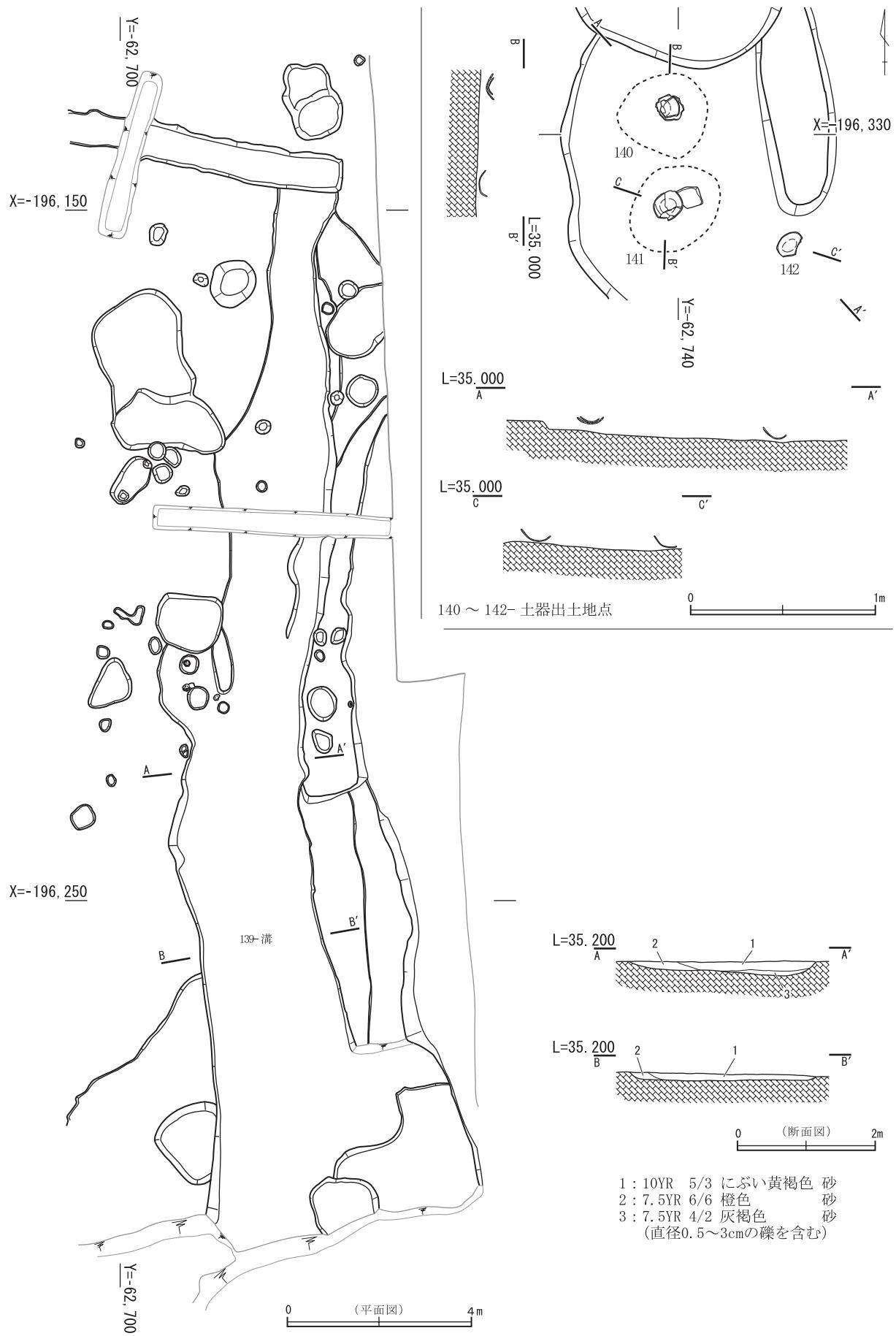
遺物収納コンテナ 39 箱分の遺物が出土した。大半が碎片となり、破断面の摩耗した平瓦、丸瓦である。平・丸瓦以外では、軒丸瓦 6 点、道具瓦 2 点、須恵器 8 点、土師器 18 点、陶器 1 点が出土した。349 から 356 の 8 点を図示した。349 から 353 は軒丸瓦である。351 は、の断面からは、瓦范に薄く粘土を押しつけた後、さらに粘土を張り付けて厚みを出している。352、353 は軒丸瓦の丸瓦部である。丸瓦の先端を若干削って薄くし、端面にはヘラで切込みを入れている。354 から 356 は道具瓦である。354 は凸面ナデ仕上げで、焼成前に三角形に成形しており、残存している 2 辺はヘラで丁寧に面取りされている。355 は桶巻造りで凸面に浅い縄目タタキを施す。残存する 2 辺には、ヘラで面取りを施している。356 は棒状の道具瓦と思しき土製品で、3 面はナデ調整だが、残り 1 面は横方向に粗く凹凸を残したヘラナデで仕上げている。

### 溝

**139- 溝（第 119 図、第 120 図）** 調査区の東側に位置し、北から南へと流れる最大幅約 2.8 m、最大深さ約 0.2 m の溝である。南側は後世の削平で完全に消失している。別に項目を立てて触れるが、溝内からほぼ完形の土器が出土している。遺物収納コンテナにして 13 箱分、軒丸瓦 1 点、平瓦 400 点以上、丸瓦 50 点以上、須恵器 5 点、土師器 18 点、陶器 1 点が出土した。2 点図示した。357 は軒丸瓦、358 は土師器である。



第118図 7-3区 145、148、149- 土坑 出土遺物



第119図 7-3区 139-溝、140、141、142-土器集中部

## 小穴

調査区中央よりもやや北よりの地点からは、小穴がまとまって検出された。いずれも直径0.2 mから0.3 mの小規模なものだが、柱痕の確認できるものも少なくない。掘立柱建物の存在に留意しつつ掘削を進めたが、建物として認定できる並びは、見いだせなかった。

**144- 小穴（第115図、第120図）** 小穴のうち、図示可能な遺物が出土した一基である。平瓦1点、土師器7点、瓦器4点が出土した。このうち、363、364の2点を図示した。363は土師器の小皿、364は瓦質焼成の羽釜の口縁部である。

## 土器出土地点

**139- 溝** 溝の検出作業中に確認した遺構である。完形、あるいはそれに近い瓦器碗が3か所から出土した。周辺を精査し、掘方の確認を試みたが、土色、土質に差がなく検出は難航した。写真撮影時には掘方らしき輪郭を確認していたが、掘削の結果、ごく浅い落込みで、遺構ではなかった。なお、139- 溝を掘削後、底面で小穴を検出したが、140- 土器出土地点を除き、土器と位置がずれていることから、無関係の遺構と推定される。

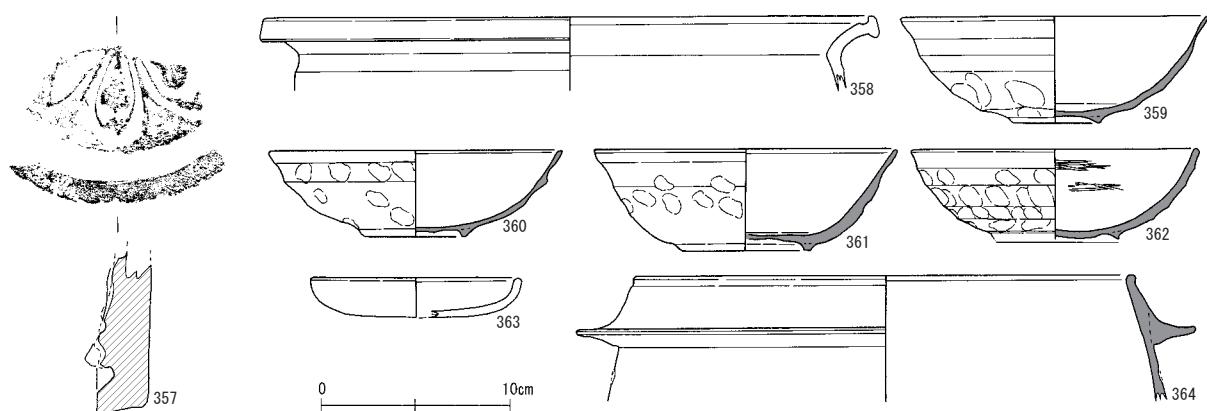
**140- 土器出土地点（第119図、第120図、写真10、写真図版19）** 最も北側に位置する。2点の瓦器碗が正位で重ねられた状態で出土した。

出土遺物は、360、361として図示した。退化の著しい貼付け高台を持ち、表面にはユビ押さえの痕跡が明瞭に残る。焼成は甘く、脆い焼きあがりで、表面の炭素吸着も不均一である。器壁が荒れていることもあり、暗文は不明瞭である。

**141- 土器出土地点（第119図、第120図、写真図版19、写真図版47）** 140- 土器出土地点のほぼ真南に位置する。瓦器碗1点がほぼ完形で正位を保った状態で出土した。瓦器碗の下層からは平瓦1点、土師器7点が出土しているが、掘方が不明瞭な状況下での出土で、同一



写真10 7-3区 140- 土器出土地点

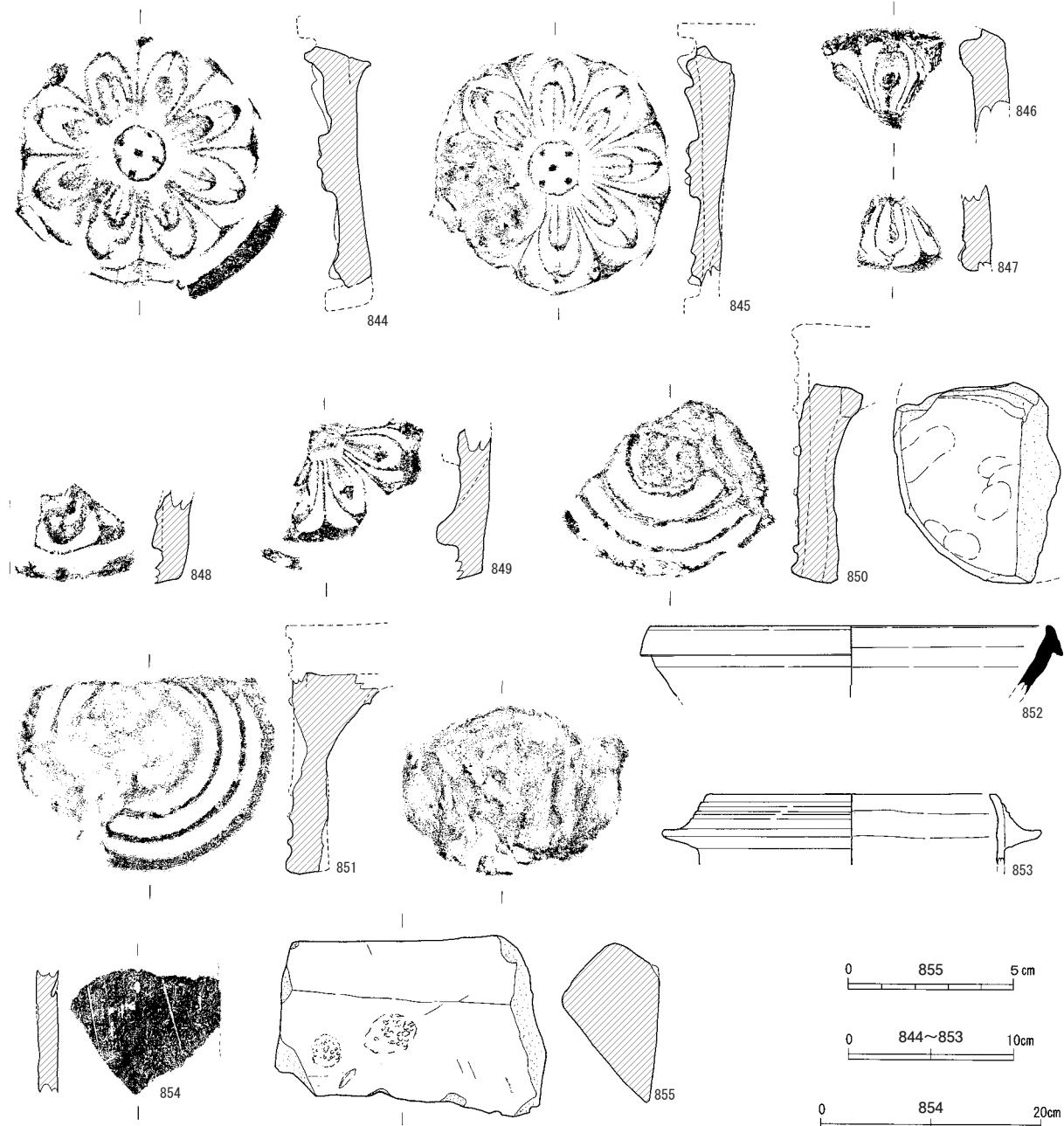


第120図 7-3区 139- 溝、144- 小穴、140、141、142- 土器集中部 出土遺物

遺構に帰属するか、不明である。なお、図示した 359 の瓦器碗 1 点以外に図化可能なものはなかった。359 は、高台は退化した貼付け高台。口縁部から胴部はナデで仕上げるが、胴下半にはユビ押さえの痕跡が明瞭に残る。焼成は甘く、内外面とも剥離が著しいため、暗文は図化できなかった。

142- 土器出土地点（第 119 図、第 120 図、写真図版 19、写真図版 47） 141- 土器出土地点の東側に位置する。瓦器碗 1 点がほぼ正位を保って出土した。

遺物は、362 として図示した。掘削作業中に一部を欠損しているが、ほぼ完形である。土器出土地点の瓦器碗としては、最も焼成の良好な例だが、それでも脆く、表面の炭素吸着も不均一である。暗文は横方向に施されているのをかろうじて確認したが、極めて不明瞭である。見込みの暗文は、確認できなかった。



第 121 図 7-3 区 包含層 出土遺物

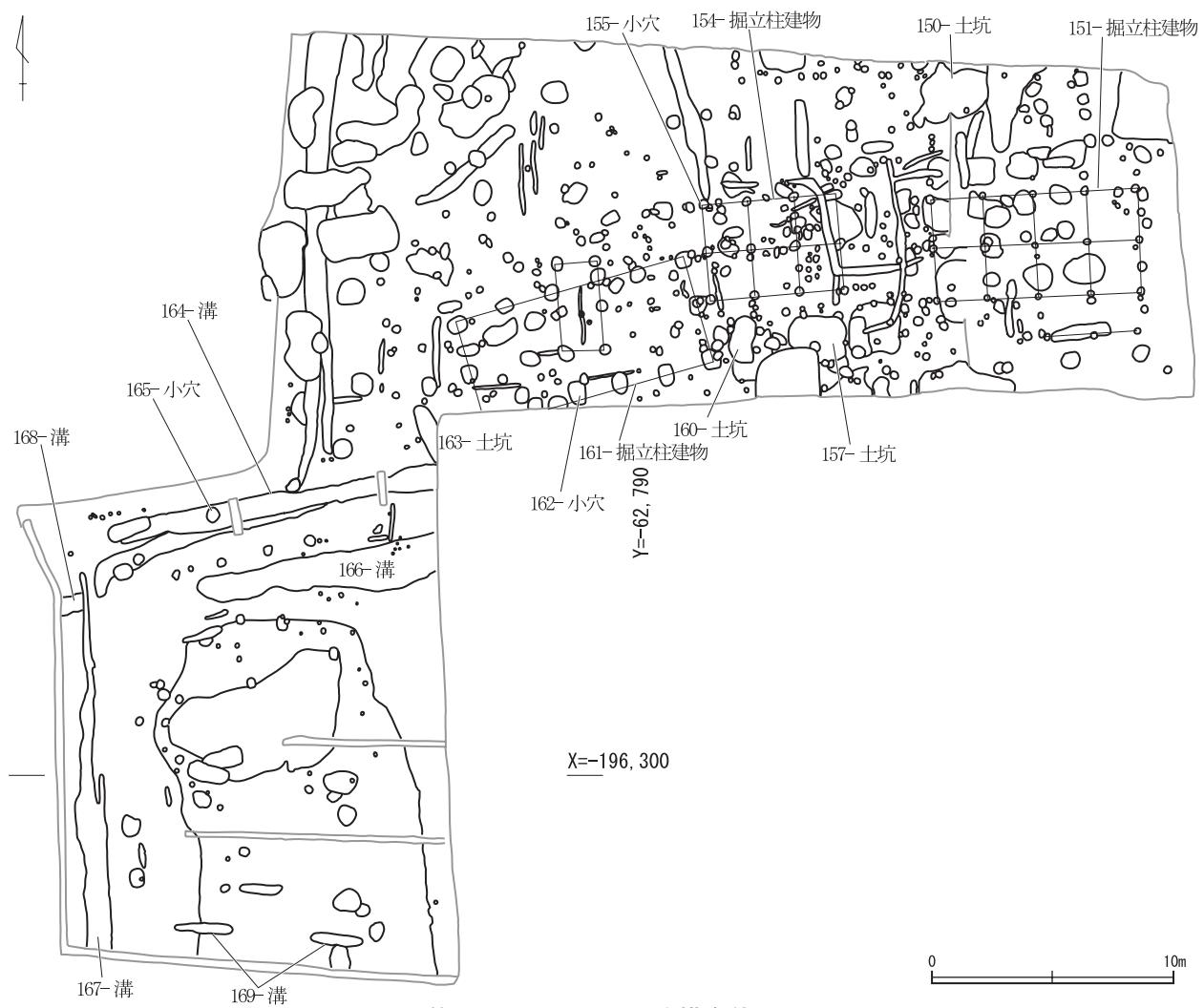
## 包含層（第 121 図）

包含層出土遺物のうち、目に付いたものを図示した。844 から 851 は軒丸瓦である。844、845 は貴志川町教育委員会による調査で A 類とされた、全体的に薄手で、凹凸の少ない軒丸瓦である。850 と 851 は重圈文軒丸瓦。いずれも三重圈文で、850 は有心、851 は破損のため心の有無が不明である。2 点とも、厚手の瓦当面で、瓦当裏面には強いナデ痕を残したままであるなど、造りがやや粗い。852 は中世の東播系須恵器の捏鉢、853 は土師器の羽釜である。854 は平瓦で凸面をナデで仕上げる。中央上端付近に斜め方向からの刺突がみられる。855 は砥石で、上下端を折損する。4 面全てに使用痕がみられる。

## 第 8 節 7-4 区（第 122 図から第 134 図、第 144 図、写真図版 20、21、47）

### 調査区の概要

7-4 区は A1、B1、B2 にまたがっており、6-1 区の南東側、里道を挟んで 8-4 区の北側に位置する。調査前の現況は水田及び畑で、段状に複数の地筆に分かれていた。調査東側に貴志川町教育委員会の設定した試掘トレンチが、調査区西側の南端に紀の川市教育委員会の設定した

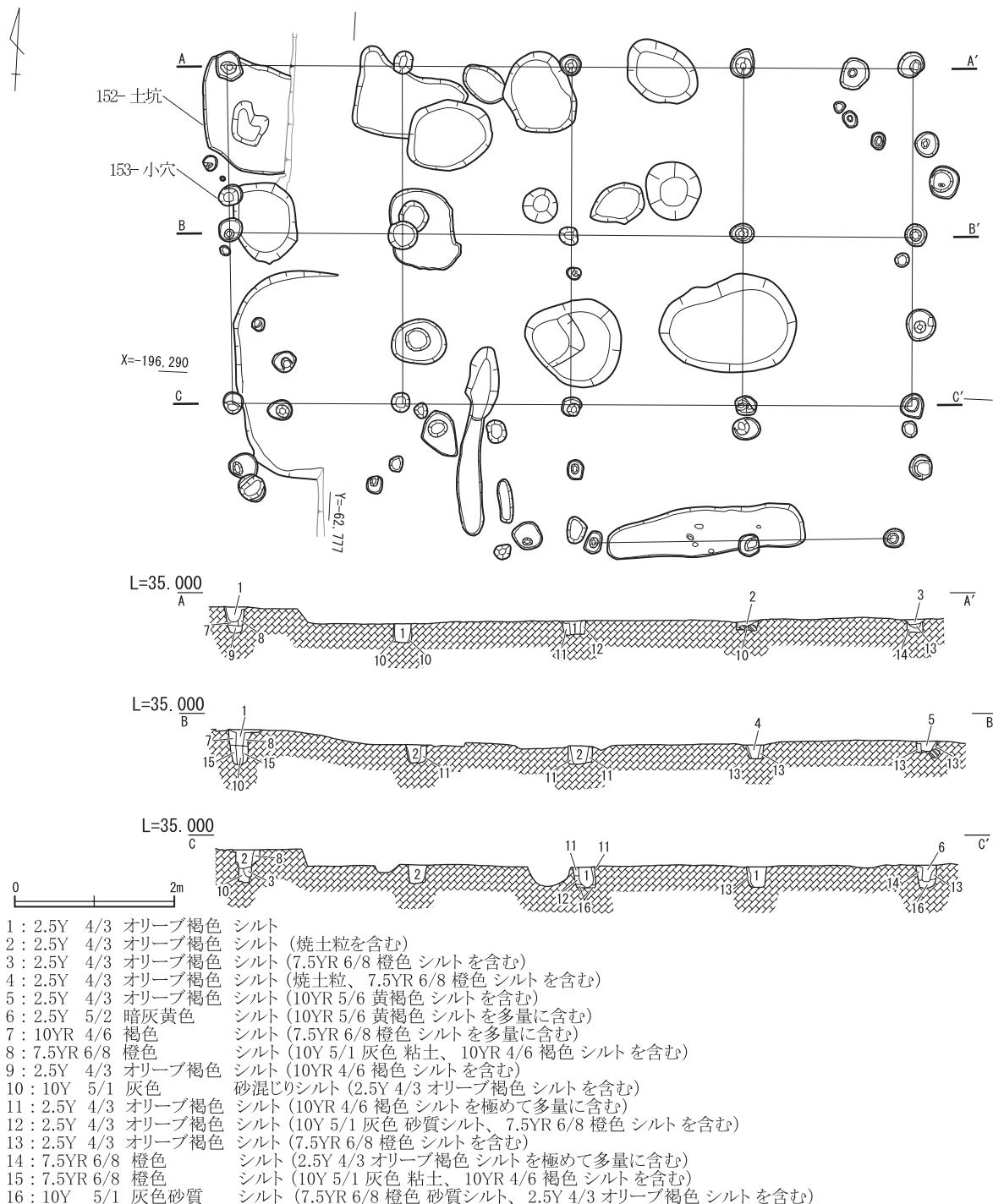


試掘トレーニチがそれぞれ1本、存在する。

南現代の耕作土及び床土下に瓦器、古代瓦片を含む包含層があり、この層を除去したところで第1遺構面を検出した。ただし、166-溝の南側には、包含層下に黒色系のシルト質でマンガン粒を多量に含む土（調査時のカードには「マンガン層」または「マンガン斑層」と記載）が落込み内に堆積していた。この黒色系シルトの上面では遺構を検出しなかったため、調査区全域で包含層を除去後、続いて掘削を行い、その後、遺構検出作業を行った。

第2遺構面は、西側についてのみ、調査を行った。詳細は、後述する。

第1遺構面では、調査区北側で古代の掘立柱建物1棟、中世の掘立柱建物3棟を含む小穴多



第123図 7-4区 151-掘立柱建物と周辺の遺構

数、土坑等を検出した。調査区南側では、溝状遺構、落ち込み、小穴、土坑等を検出した。

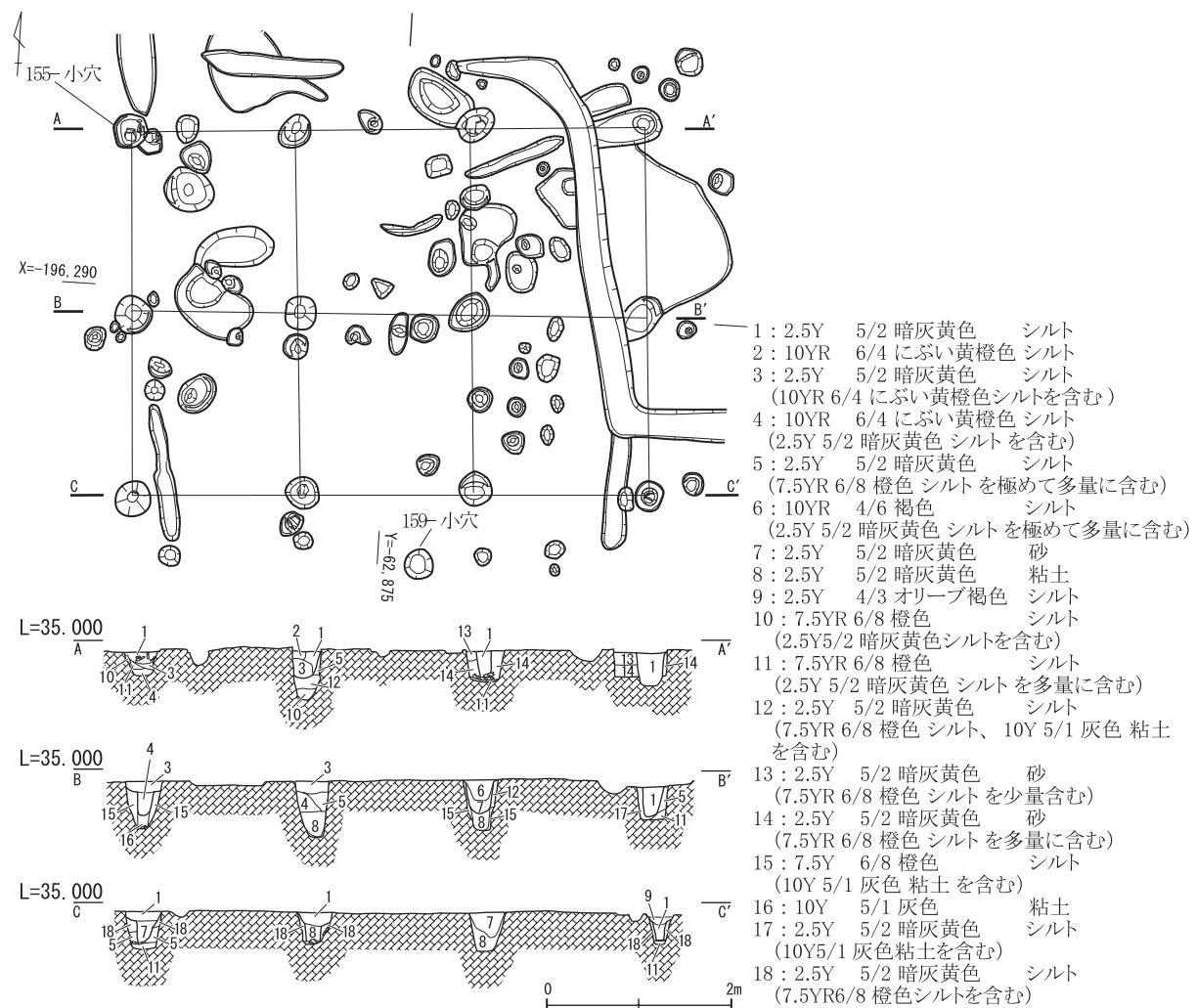
### 掘立柱建物

**151- 掘立柱建物（第 123 図、第 126 図、写真図版 20）** 調査区東端で検出した。主軸を東西にとる 4 間 × 2 間の総柱の掘立柱建物である。西端の柱穴以外は、削平により底面付近しか残されていない。南側には、庇か縁を構成するとみられる柱穴が 3 基並ぶ。掘立柱建物を構築する柱穴の掘方は、直径 0.3 m 程度とやや小ぶりである。

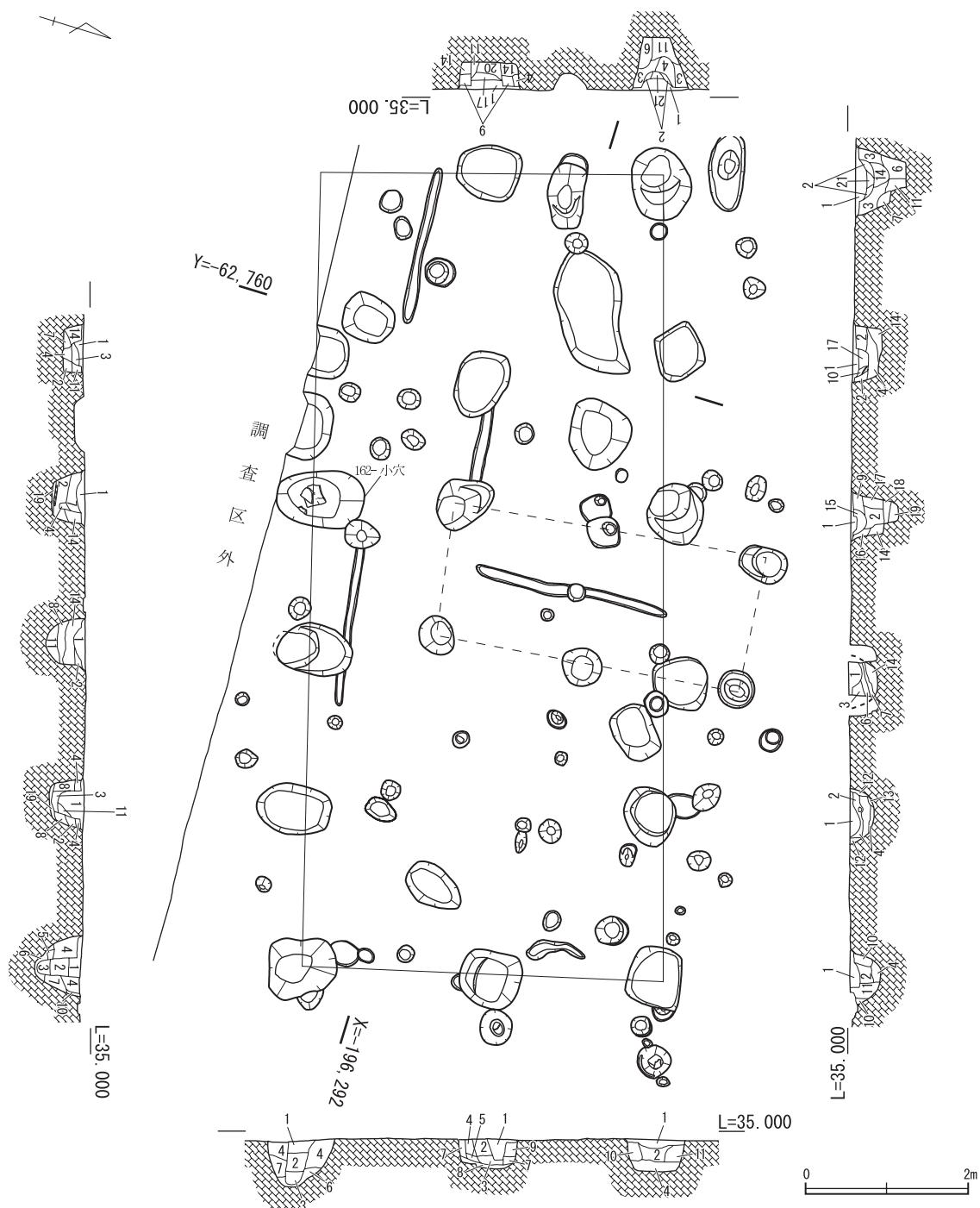
覆土および掘方埋土から、瓦器、古代瓦碎片が散発的に出土している。出土遺物は、図示できなかった。近接して検出された 153- 小穴からは、365 の瓦器が出土している。

**154- 掘立柱建物（第 124 図、第 126 図、写真図版 20）** 調査区北側ほぼ中央で検出された、東西に主軸を取る 3 間 × 2 間の総柱の掘立柱建物である。掘方は直径 0.3 m から 0.4 m、深さは約 0.4 m から 0.6 m である。また、底面には、礎板に転用されたとみられる古代瓦片や、塊礫を敷いている柱穴がある。

遺物としては、瓦器、古代瓦片が出土している。このうち、掘立柱建物の北西隅にあたる 155- 小穴から出土した 366 の瓦器を図示した。ほぼ痕跡的になった貼付け高台を持つ浅い碗である。焼成は不良で、脆く、表面の炭素吸着も不均一である。内面には暗文が粗く施されている。

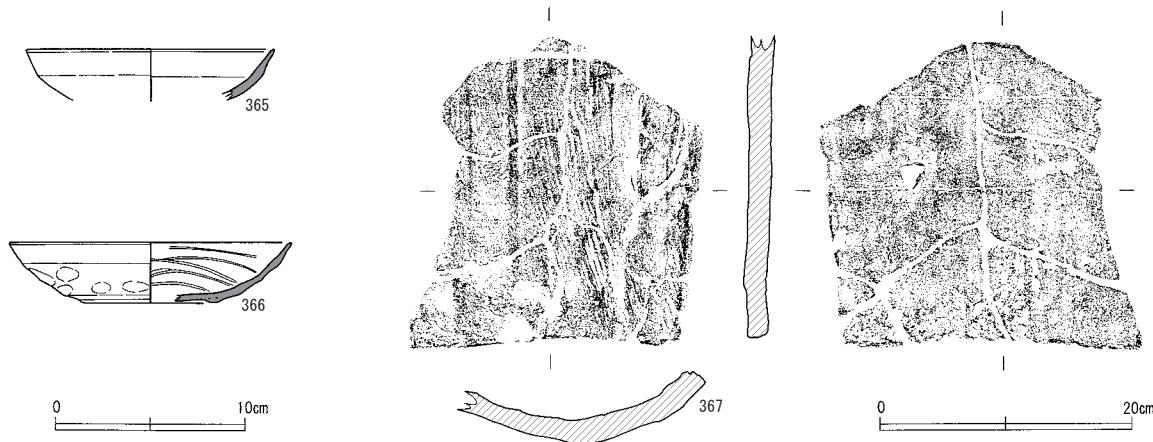


第 124 図 7-4 区 154- 掘立柱建物と周辺の遺構



- |   |   |
|---|---|
| 1 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト                                     | 11 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 粘土<br>(10Y 5/1 灰色 粘土を多量に含む)              |
| 2 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト<br>(7.5YR 6/8 橙色 シルトを多量に含む)         | 12 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト                                      |
| 3 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト<br>(7.5YR 6/8 橙色シルト、10Y5/1 灰色粘土を含む) | 13 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 粘土                                       |
| 4 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト<br>(7.5YR 6/8 橙色シルトを含む)             | 14 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト<br>(10Y 5/1 灰色粘土、10YR 4/6 褐色 シルトを含む) |
| 5 : 10YR 6/8 にぶい黄橙色 砂                                       | 15 : 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト  |
| 6 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 砂<br>(7.5YR 6/8 橙色砂、10Y 5/1 灰色砂を含む)     | 16 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト<br>(2.5Y 4/3 オリーブ褐色 シルトを多量に含む)       |
| 7 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト<br>(10Y 5/1 灰色粘土を多量に含む)             | 17 : 10YR 4/6 褐色 シルト<br>(7.5YR 6/8 橙色シルトを多量に含む)               |
| 8 : 10Y 5/1 灰色 砂<br>(10YR 6/4 にぶい黄橙色砂を多量に含む)                | 18 : 10YR 4/6 褐色 粘土<br>(7.5YR 6/8 橙色粘土を多量に含む)                 |
| 9 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 シルト<br>(10Y 5/1 灰色砂を多量に含む)              | 19 : 10Y 5/1 灰色 砂   |
| 10 : 7.5YR 6/8 橙色 シルト<br>(10YR 6/4 にぶい黄橙色シルトを多量に含む)         | 20 : 10YR 4/6 褐色 シルト  |
|   | 21 : 10YR 6/4 にぶい黄橙色 粘土                                       |

第 125 図 7-4 区 161- 掘立柱建物と周辺の遺構



第 126 図 7-4 区 153、155、162- 小穴 出土遺物

**161- 掘立柱建物（第 125 図、第 126 図、写真 11、図版 21）** 調査区のほぼ中央で検出した。東西に主軸を取る 5 間 × 2 間の掘立柱建物である。ただし、南北方向については、調査区外へ柱が伸びているため、規模は確定したものでない。主軸は、北へ約 6～8 度傾いている。掘形は隅円の正方形或いは長方形で、規模は 0.8～0.5 m、深さは約 0.5 m である。柱穴の断面土層図作成時には、掘方と柱痕との関係に注意したが、土層からは、柱痕の存在を確定できなかったものがある。掘方の埋土は、シルト質と砂質の土が互層になっているものが多く、丁寧に構築されているといえよう。

なお、破線で示したが、この掘立柱建物に交差するように、建物跡と思しき小穴の組み合わせが確認される。並びの方位や土師器、瓦器碎片が出土することなどから、中世の掘立柱建物の可能性が高かろう。

柱痕、掘方とともに遺物がほとんど出土しなかった。162- 小穴の底面に張り付くようにして出土した平瓦片 1 点を図示した。367 は桶巻造りで、凸面の格子タタキをナデ消した平瓦片である。

#### 土坑

**150- 土坑（第 127 図、写真図版 21）** 短径約 2 m の不整形の土坑である。東側を後世の削平で失っている。土坑の中央、検出面とほぼ同じ高さの位置に、瓦の破片が整然と敷き詰められていた。

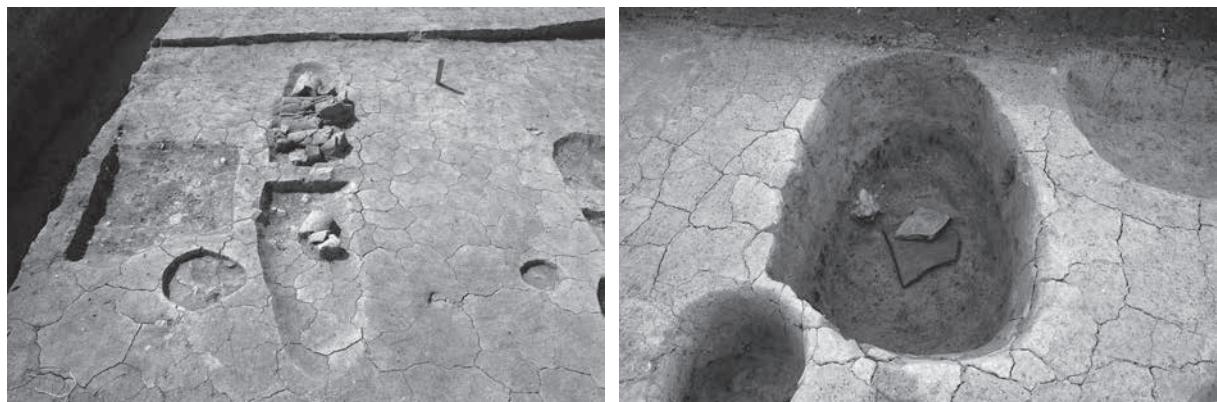


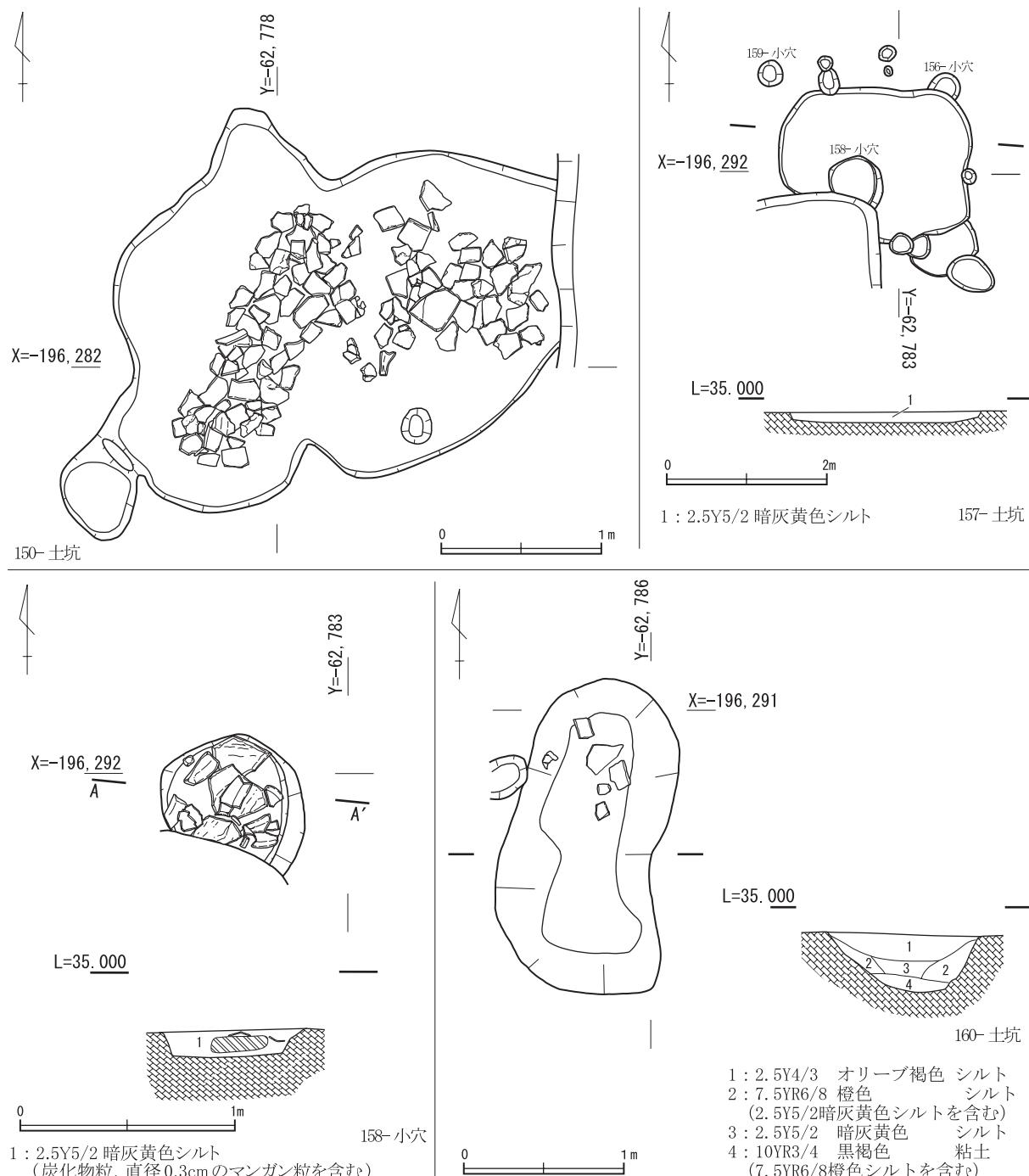
写真 11 7-4 区 169- 溝と 162- 小穴

平瓦 100 点以上、丸瓦 36 点、須恵器 8 点、土師器 12 点、瓦器 8 点が出土した。図示遺物はない。

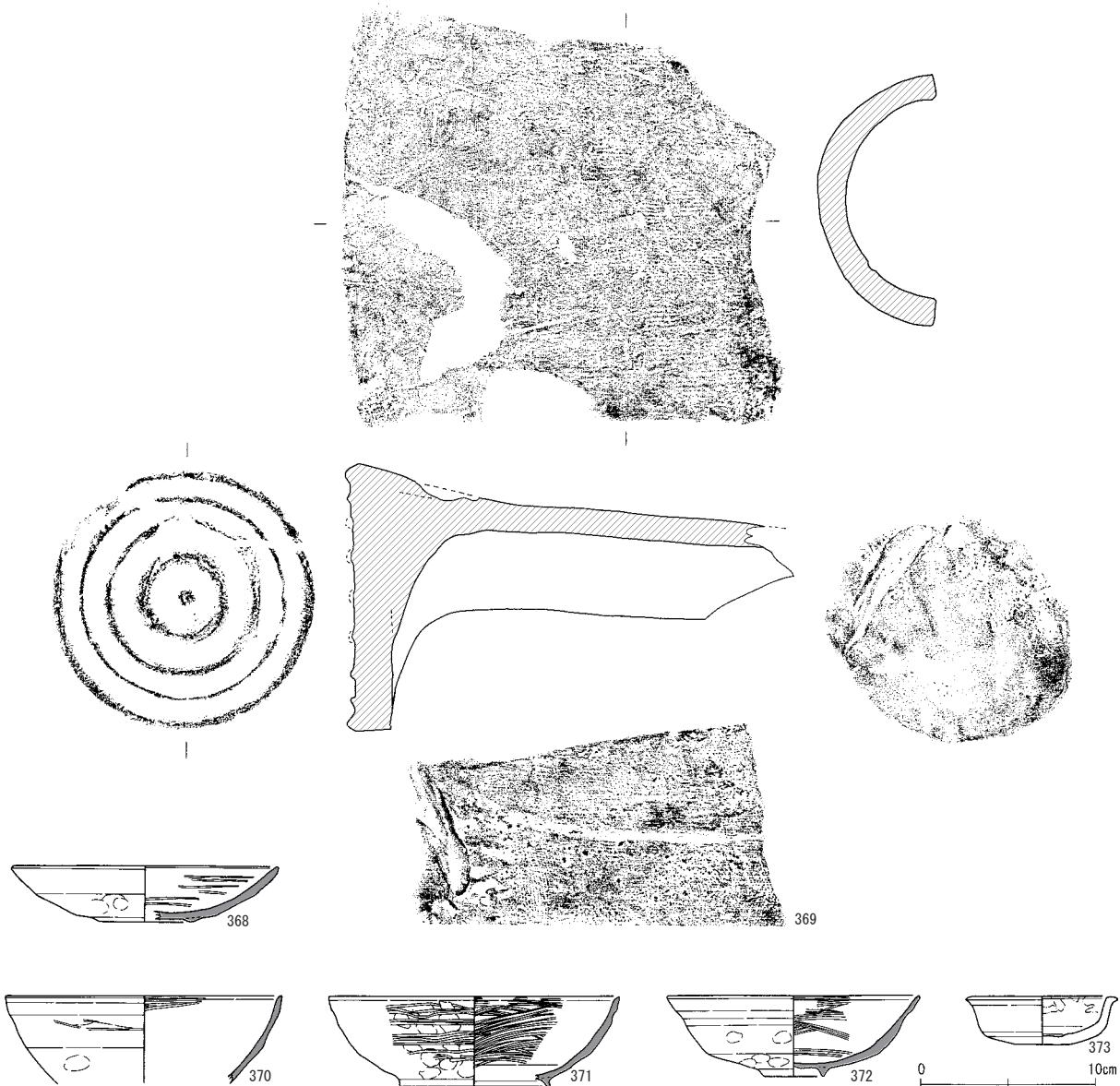
**152- 土坑（第 127 図、第 128 図、写真図版 21）** 調査区東側で検出した。長辺約 1.2 m の不整方形の土坑である。深さは約 0.15 m で、底面中央は周囲より約 0.1 m 落ち込んでいる。

**151- 掘立柱建物を構成する小穴に切られている。**

平瓦 2 点、軒丸瓦 2 点が出土した。369 の軒丸瓦 1 点を図示した。369 は、有心の三重圈文軒丸瓦である。丸瓦部の凸面には縄目タタキを施す。瓦当の裏面には、丸瓦部との接合に伴うユビ押さえの痕跡が明瞭に残る。



第 127 図 7-4 区 150、157、160- 土坑、158- 小穴



第128図 7-4区 152、157、160、163- 土坑 出土遺物

**157- 土坑（第127図、第128図、写真図版21）** 調査区中央南よりの地点で検出した。長辺約2.4mの深い土坑である。156- 小穴、158- 小穴を切っている。

平瓦18点、須恵器4点、土師器15点、瓦器2点が出土した。このうち、瓦器1点を図示した。368は、ほぼ痕跡的になった貼付け高台を持つ浅い碗である。焼成は不良で、脆く、表面の炭素吸着も不均一である。内面には暗文が粗く施されている。

**160- 土坑（第127図、写真図版21）** 調査区中央南端、154- 掘立柱建物の南で検出した。長径約2m、短径約1mの深い土坑である。

平瓦43点、丸瓦5点、須恵器5点、須恵器1点、土師器27点、瓦器19点が出土した。このうち、3点を図示した。370から372は、瓦器である。371は、貼付け高台を持つ碗である。焼成は良好で堅く、表面への炭素吸着は極めて良好である。内外面には、密に横方向の暗文が施されている。底面が欠損しており、見込みの暗文は、観察できなかった。焼成不良で脆く、表面の炭素吸着も不均一な瓦器が一般的な北山廃寺、北山三嶋遺跡では、数少ない事例である。

163- 土坑（第 128 図） 調査区東側、164- 溝に近接している、細長い土坑である。遺構の南端は調査区外へ伸びており、164- 溝との切り合い関係も不明である。

平瓦は 2 点、須恵器 7 点、土師器 92 点が出土した。373 は、土師器の小形の壺である。底面はヘラケズリで調整し、胴部は直線的に立ち上がる。口縁部は水平につまみ出している。内面には、口縁部付近を中心に黒色の樹脂が付着している。

#### 小穴

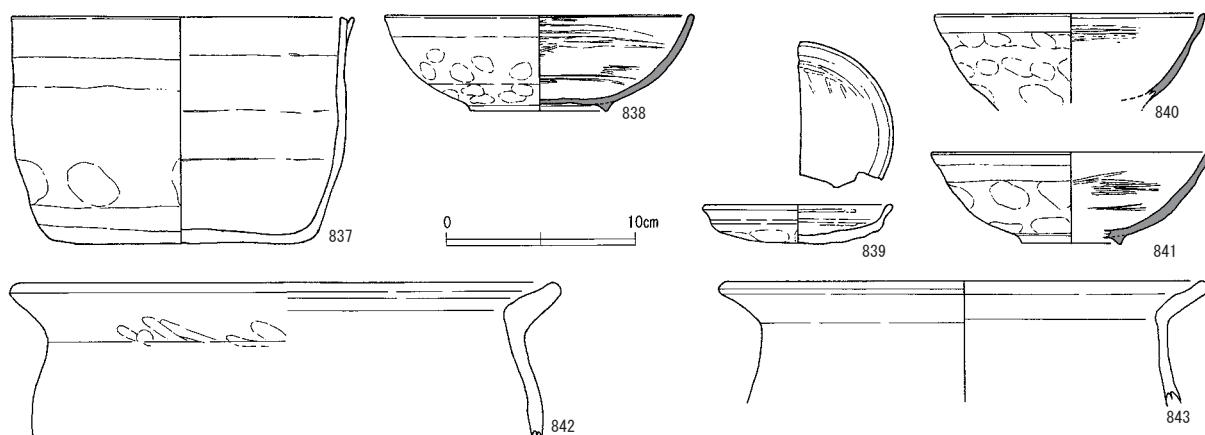
156- 小穴（第 127 図、第 129 図、写真図版 47） 調査区東側に広がる小穴の一つで、157- 土坑に切られている。平瓦 2 点以上、土師器 4 点、瓦器 18 点が出土した。1 点図示した。838 は断面 3 角形の貼付け高台を持つ瓦器碗である。焼成は甘く、表面の剥落が著しい。炭素吸着も不均一である。内面には横方向にはしる暗文が粗く施されている。見込みに暗文は確認できなかった。

158- 小穴（第 127 図、第 129 図、写真図版 21、写真図版 47） 調査区中央南端付近に位置する。157- 土坑を掘削後、検出した。直径約 0.7 m、深さ約 0.12 m の小穴である。南側約 3 分の 1 を別の土坑に切られている。

小穴の内部から、扁平な礫や土器片が折り重なるように出土した。土師器 17 点、瓦器 7 点が出土した。うち、5 点図示した。839 は瓦器の小皿である。外面は、口縁部は横ナデで丁寧に調整しているが、底部はユビ押さえの痕跡が明瞭に残存する。内面は、口縁部に横方向の暗文を、剥落が著しく詳細は不明だが、底部内面にも暗文を施している。840、841 は瓦器碗である。焼成は甘く、表面の剥落が著しい。炭素吸着も不均一である。内面には横方向にはしる暗文が粗く施されている。842、843 は、土師器である。いずれも 2 次焼成のため、表面が荒れている。842 には外面の口縁部直下に帶状に粘土の剥離痕が観察されることから、羽釜であろう。

165- 小穴（第 129 図、第 130 図、写真図版 21、写真図版 47） 調査区の西側、164- 溝を掘削後、同溝の底面で検出した。直径約 0.6 m、深さ約 0.3 m の小穴である。

須恵器 1 点、土師器 44 点が出土した。1 点図示した。837 は、ほぼ完形の土師器の鉢である。2 次焼成を受けており、表面の剥落が著しい。底面からほとんど外傾せずに立ち上がる。胴

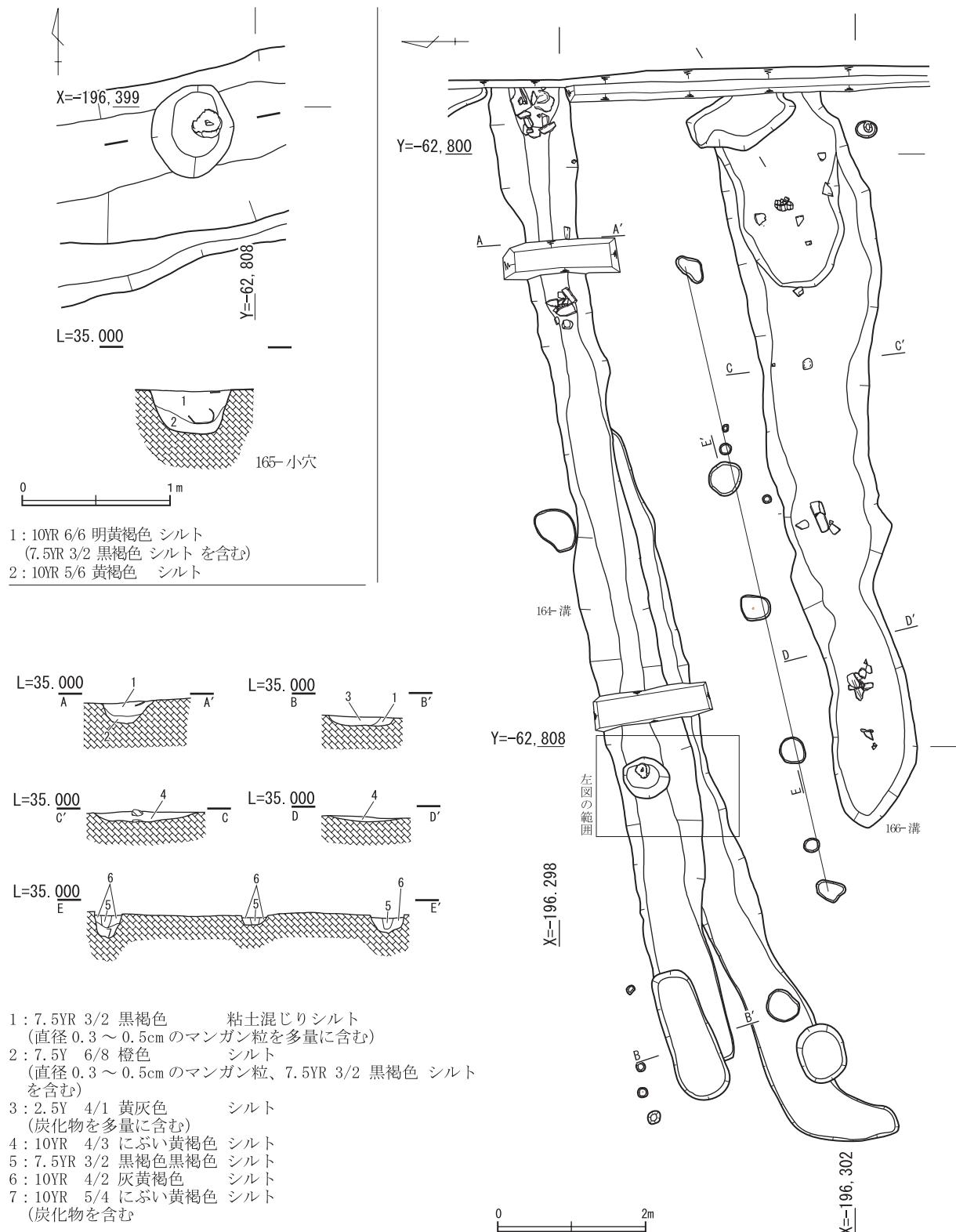


第 129 図 7-4 区 156、158、165- 土坑 出土遺物

部下部はユビ押さえ、口縁部付近は横ナデで調整しているが、粘土紐の継目が器表からも観察できる。口縁部は、ほぼ垂直に立ちあがっているが、一部、わずかに片口状に傾いている。

## 溝

164- 溝（第 130 図、第 132 図） 調査区の西側に位置し、東西方向に並行してはしる溝のうち 1 基である。最大幅約 1 m の溝で、当初は西端部が南へ屈曲していたが、再掘削を受け、



第 130 図 7-4 区 164、166- 溝、165- 小穴

西へ直線的にのびる溝へと改変されている。

平瓦 41 点、丸瓦 19 点、須恵器 19 点、土師器 32 点が出土した。374 から 377 の 4 点を図示した。374 は平瓦である。375 は須恵器の小形の坏身で、焼成は土師質だが、163- 土坑から出土した 373 とよく似た形態をとる。内外面に黒色の樹脂が付着している。164 は土師器の皿、377 は土師器の把手である。

遺構の位置から考えて、紀の川市教育委員会の実施した試掘調査で H 区から検出された SD-1 と同一遺構と推定される。

**166- 溝（第 130 図、第 132 図）** 調査区の西側に位置し、東西方向に並行してはしる溝のうち、南側の溝である。最大幅約 2 m、最大深さ約 0.16 m、東に向かって幅を広げ、底面の凹凸が著しくなる溝である。

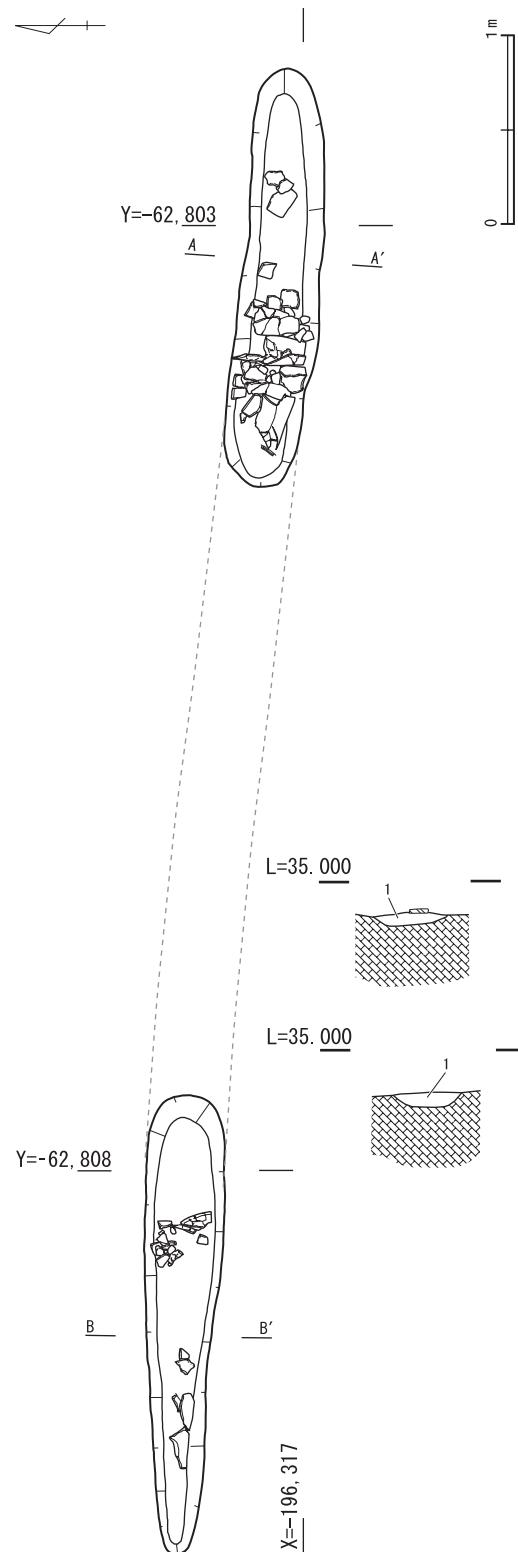
平瓦 16 点、丸瓦 12 点、須恵器 4 点、土師器 3 点が出土した。378、379 の 2 点を図示した。378 は須恵器坏身、379 は行基式丸瓦である。

遺構の位置から考えて、紀の川市教育委員会の実施した試掘調査で H 区から検出された SD- 2 と同一遺構と推定される。また、164- 溝と 166- 溝の間に位置する東西方向に 5 基並んだ小穴が、SA-1 の延長上の遺構に該当するとみられる。

**167- 溝（第 122 図、第 132 図）** 床土直下で検出した遺構である。調査区の西端に位置し、南北方向に並行してはしる素掘りの小溝が複数重複して掘削されている。

平瓦 15 点、丸瓦 6 点、須恵器 2 点、サヌカイト製石器 1 点が出土した。1 点図示した。380 はサヌカイト製の石器で、裏面には主剥離面がそのまま残る。左側の側縁は細かな調整剥離を施すが、右側は調整を行わない。基部には部分的に自然面が残る。

**168- 溝（第 122 図、第 132 図）** 調査区の西端に位置し、東西方向にはしる幅約 0.4 m の溝である。完形かそれに近い平瓦が折り重なって出土した。6-2 区 119- 溝、8-5 区 202- 溝と同一遺構である。166- 溝の延長線上に位置するが、相互の関係は不明である。



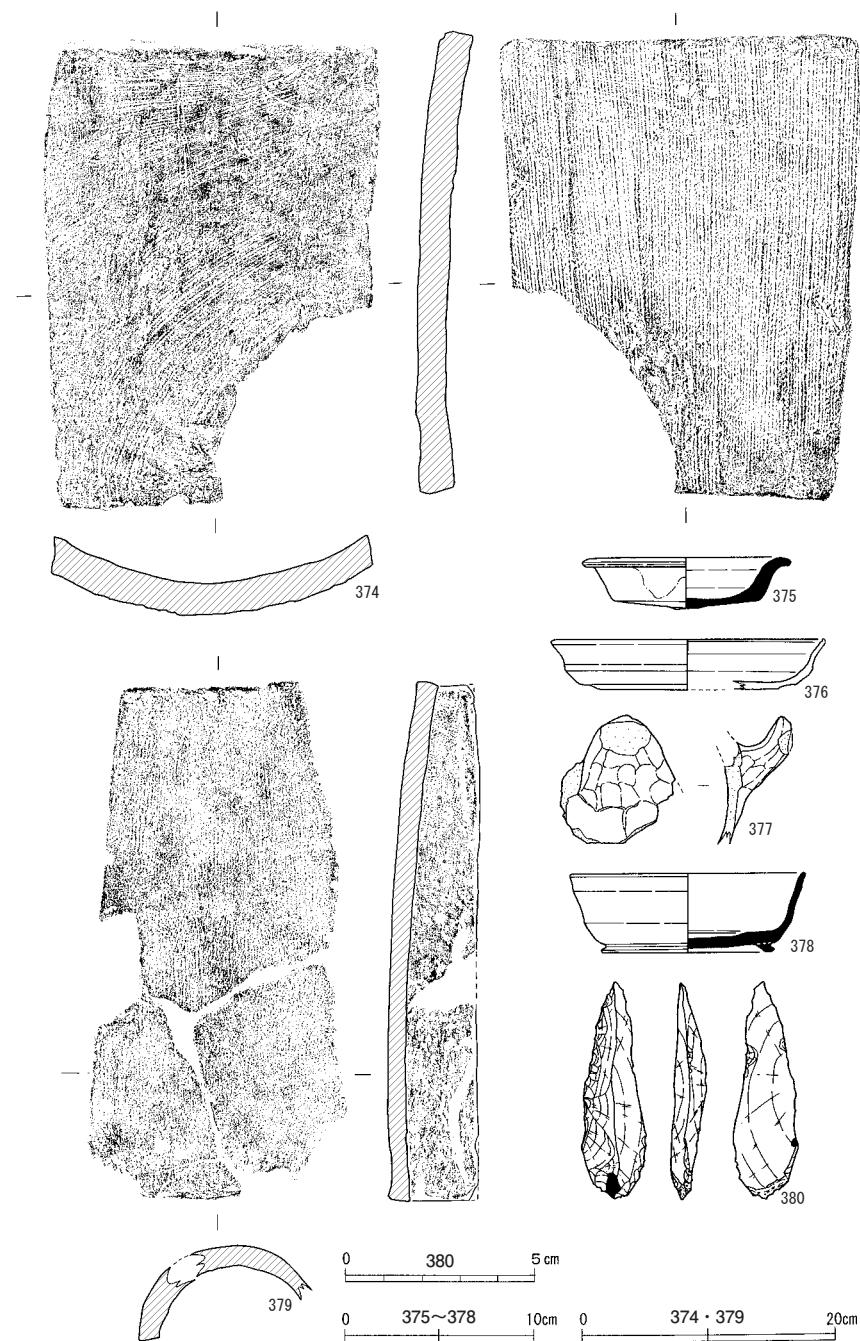
1 : 10YR5/2 灰黄褐シルト

第 131 図 7-4 区 169- 溝

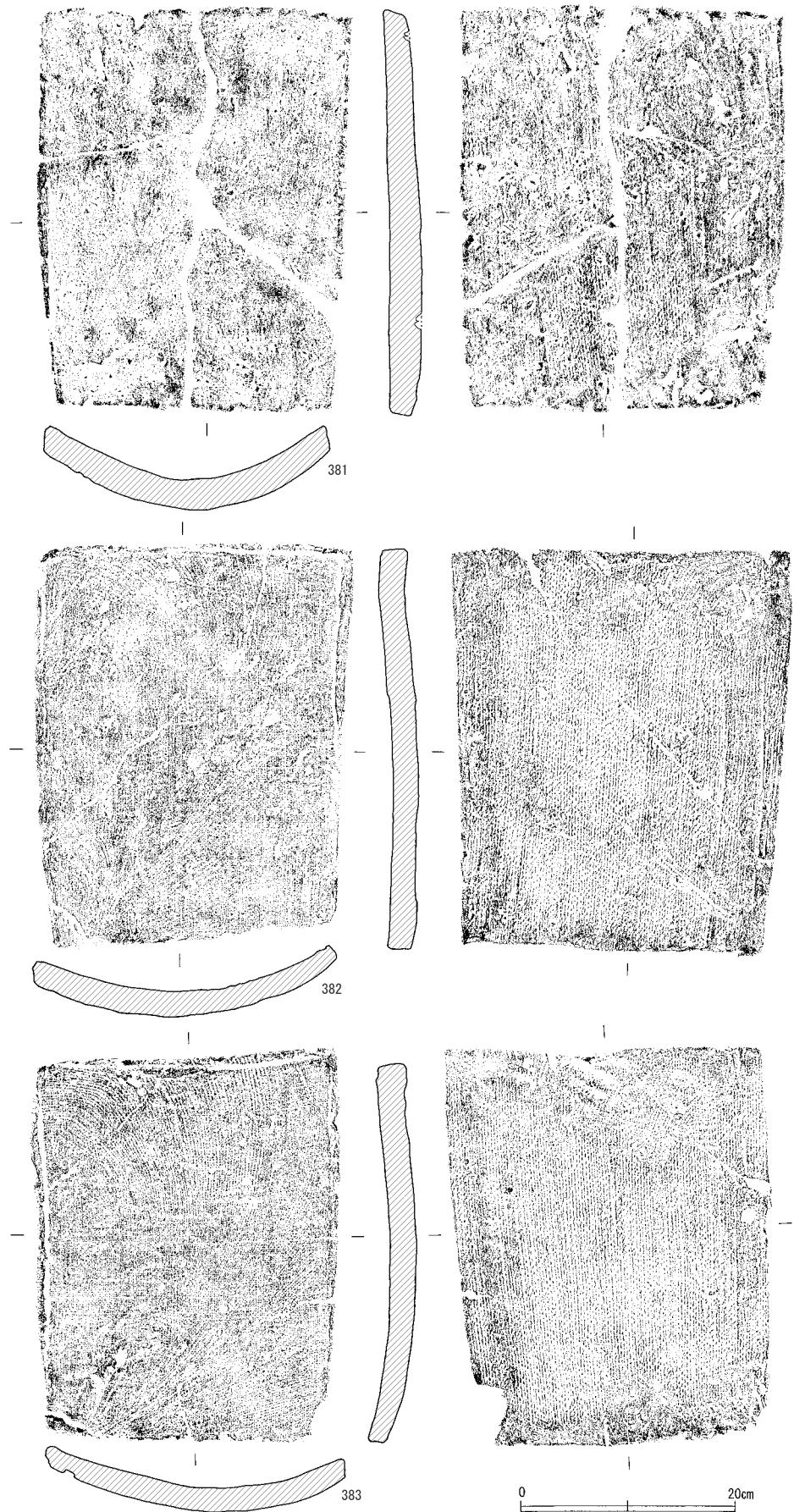
平瓦 100 点以上、丸瓦 36 点、須恵器 2 点が出土した。このうち、381 から 386 の 6 点を図示した。いずれも、一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。凸面の広端面には、左上を向いた連続的な指頭圧痕が見られる。

**169- 溝（第 122 図、写真 11）** 調査区の南端に位置し、東西方向にはしる幅約 0.4 m の溝である。内部から、丸瓦が密集して出土した。2 条の短い溝として検出されたが、断面土層や遺物の出土状況から、同一の遺構と判断した。

平瓦 27 点、丸瓦 200 点、須恵器 3 点が出土した。169- 溝から出土した丸瓦は、いずれも薄片状の碎片となっており、図示できなかった。



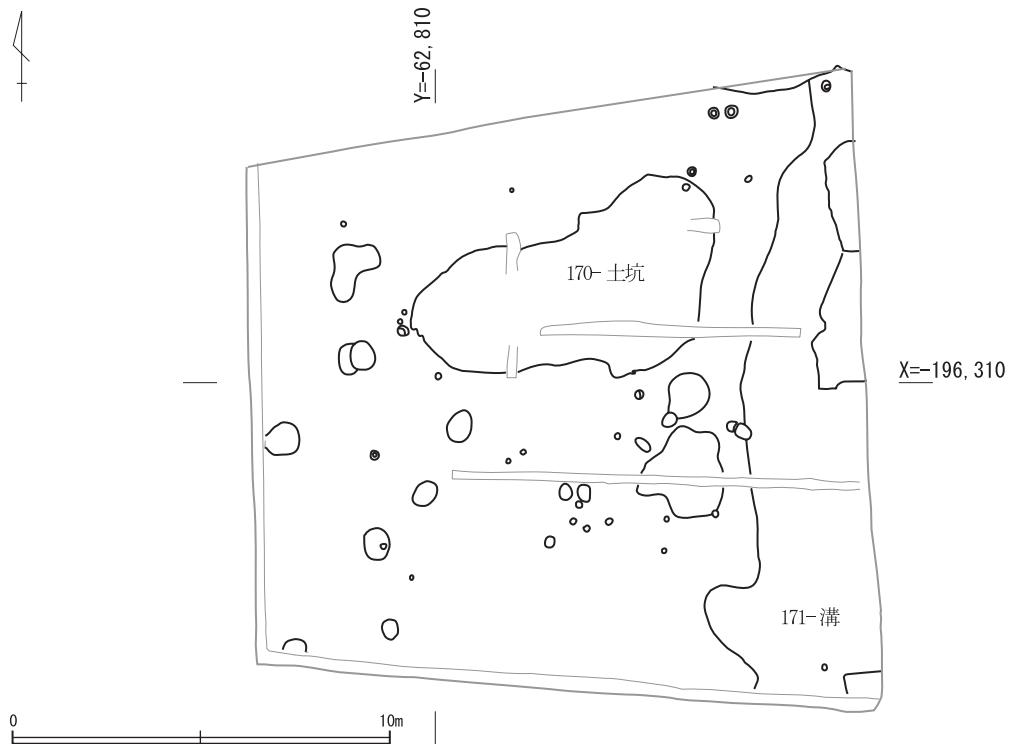
第 132 図 7-4 区 164、166、167- 溝 出土遺物



第133図 7-4区 168-溝 出土遺物（その1）



第134図 7-4区 168-溝 出土遺物（その2）



第135図 7-4区 第2遺構面 遺構全体図

## 第9節 7-4区 第2遺構面 (第135図から第144図、写真図版20)

### 調査区の概要

7-4区の西側では、先述したように、基本層序第3層を掘削後に検出された黒色系のシルト質土を除去後、遺構検出作業を行った。その結果、166-溝の南に広がる浅い落込みと考えていた遺構の一部が、周囲よりさらに一段下がることが判明した(170-土坑)。また、南東隅で紀の川市教育委員会の試掘調査で検出されたSA-2の一部が確認された。こうしたことから、追加の調査が必要となり、西側の一部を遺構面2面として調査した。このうち、166-溝より北側の調査成果は、6-1区第2遺構面の項で既に記述している。

166-溝より南側では、基本層序第4層に相当する土が、0.1m弱と周辺の調査区に比べて薄く、土質も他の調査区と差がある。第5層には礫が混じる。土坑、溝等が検出されたが、調査区西端から東へ約5mの範囲では、遺構の分布が希薄であった。

### 土坑

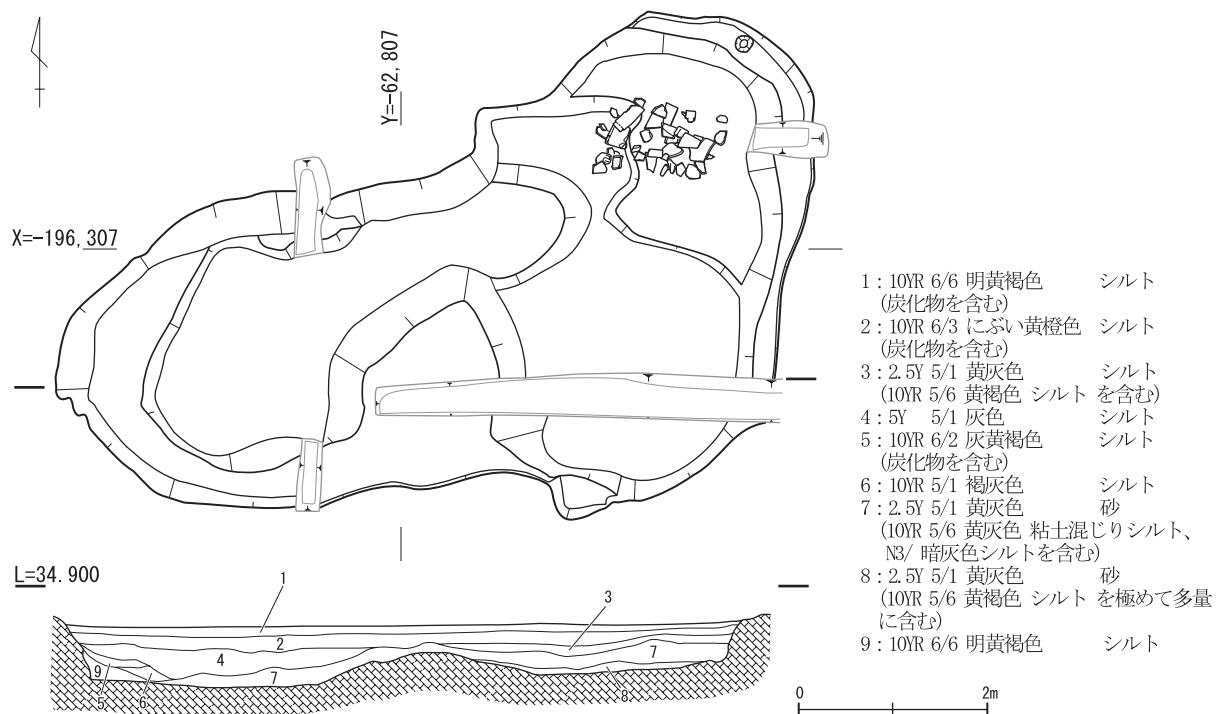
**170-土坑 (第136図、第137図)** 調査区中央で検出した。長径約7.4mの不整形の土坑である。断面土層図の1層が、黒色系シルト質土にあたる。2層以下が、第2遺構面の調査で掘削した土層になる。2層以下の土層は上下2層に大別され、2層から6層がシルト質、7層以下が砂質となる。底面は凹凸が激しい。遺物は、主として7層上面(調査時には「下層」と記載)から出土した。

軒丸瓦1点、平瓦100点以上、丸瓦27点、須恵器7点、土師器9点、滓1点が出土した。このうち4点を図示した。387は、行基式の丸瓦。388は、玉縁式の丸瓦である。いずれ

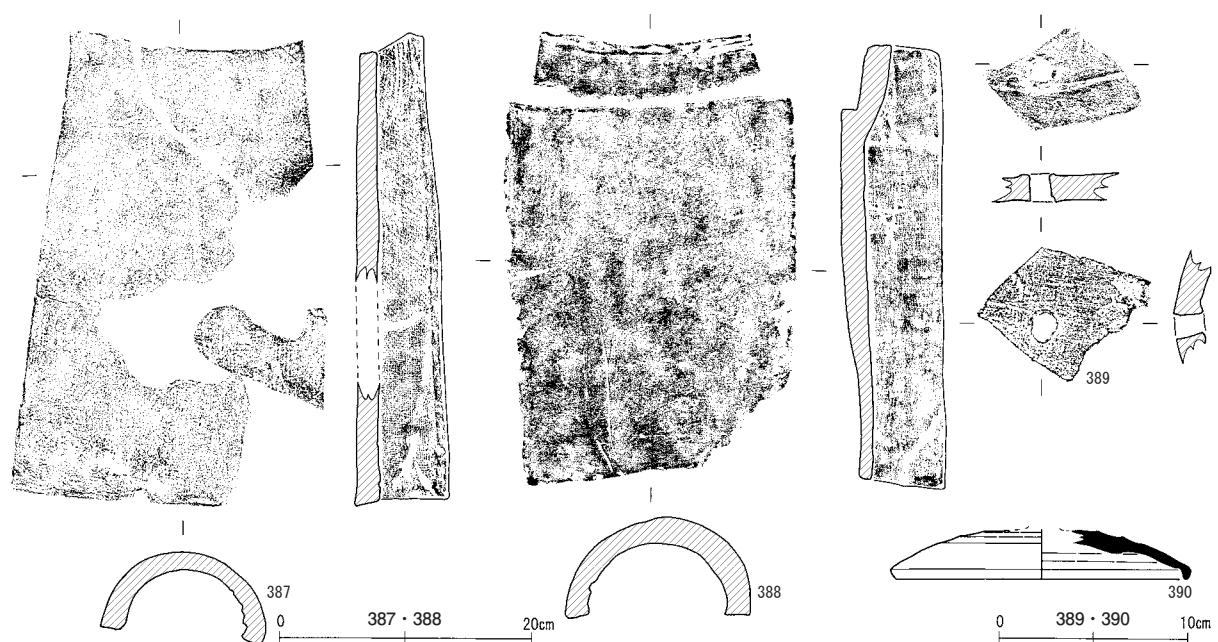
も凸面は縄目タタキののち、表面をナデで調整している。389 は形式不明だが表面をナデで調整したのち、方形の釘穴を凸面から凹面に向けて穿っている。390 は須恵器の壺蓋である。

## 溝

171- 溝（第 138 図から 143 図、写真図版 22、写真図版 47） 調査区の東に位置し、北から南へはする溝である。第 2 遺構面調査当初は、溝の中間部付近で溝の立ち上がりの上端より

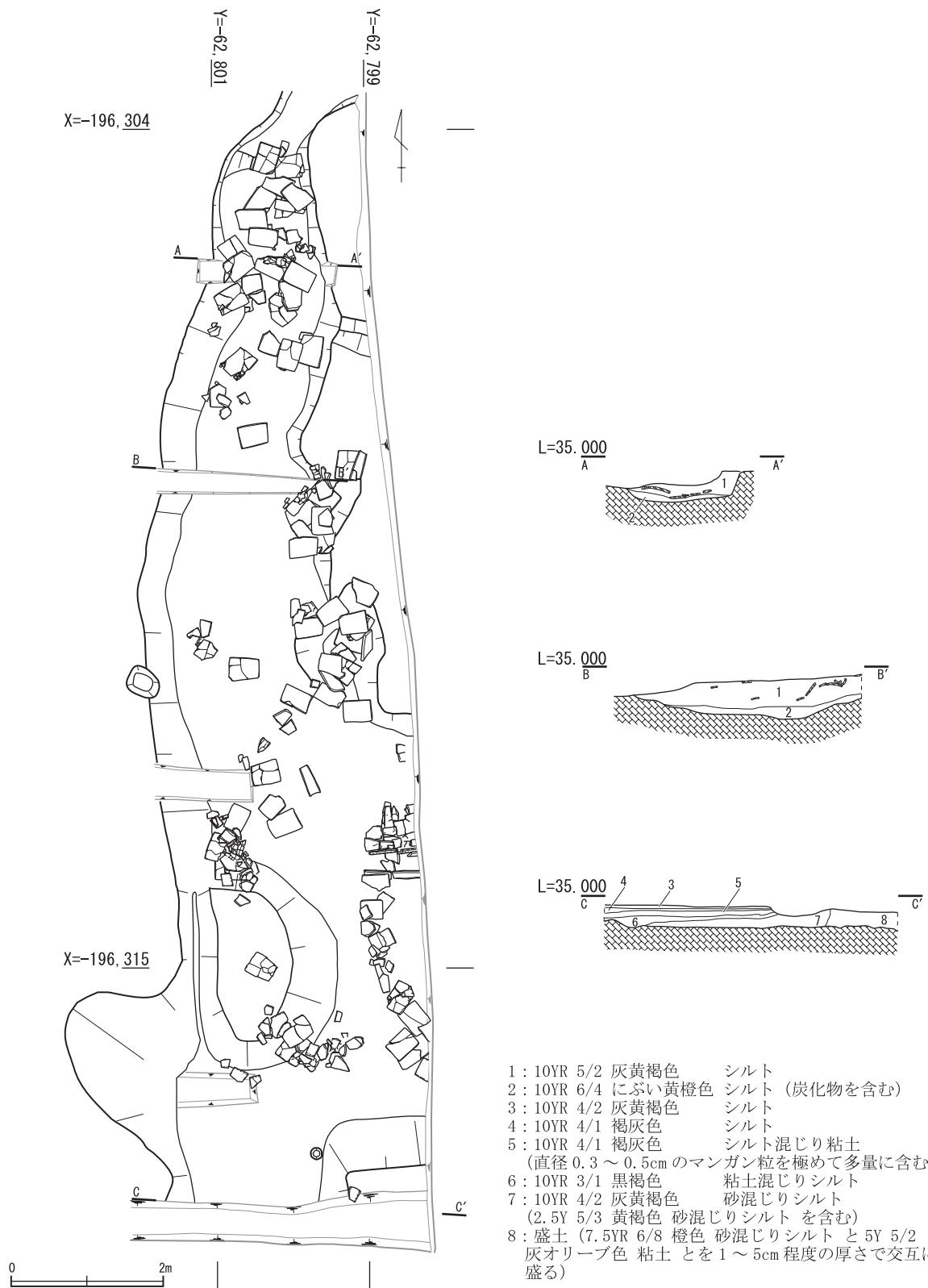


第 136 図 7-4 区 第 2 遺構面 170- 土坑

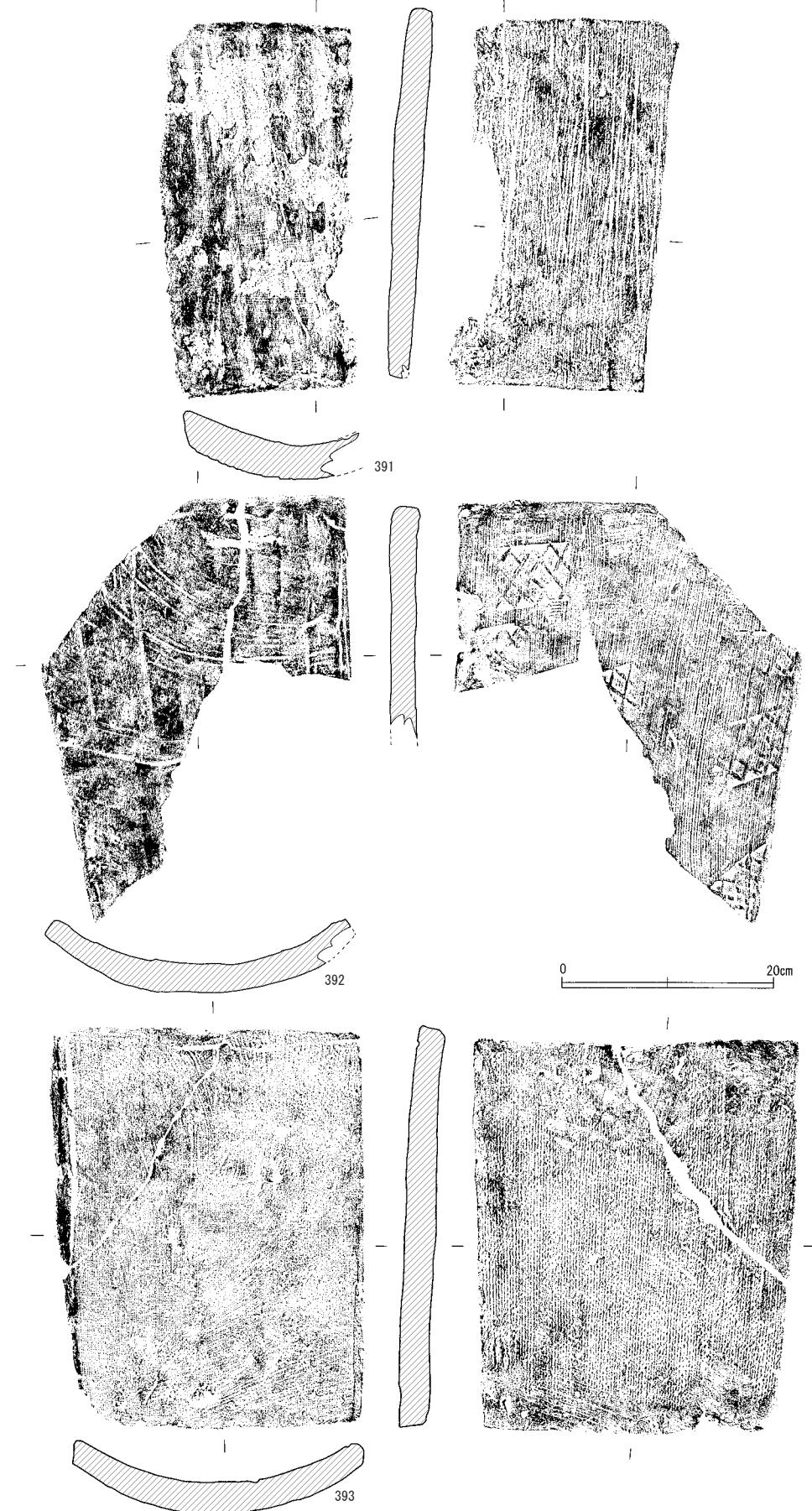


第 137 図 7-4 区 第 2 遺構面 170- 土坑 出土遺物

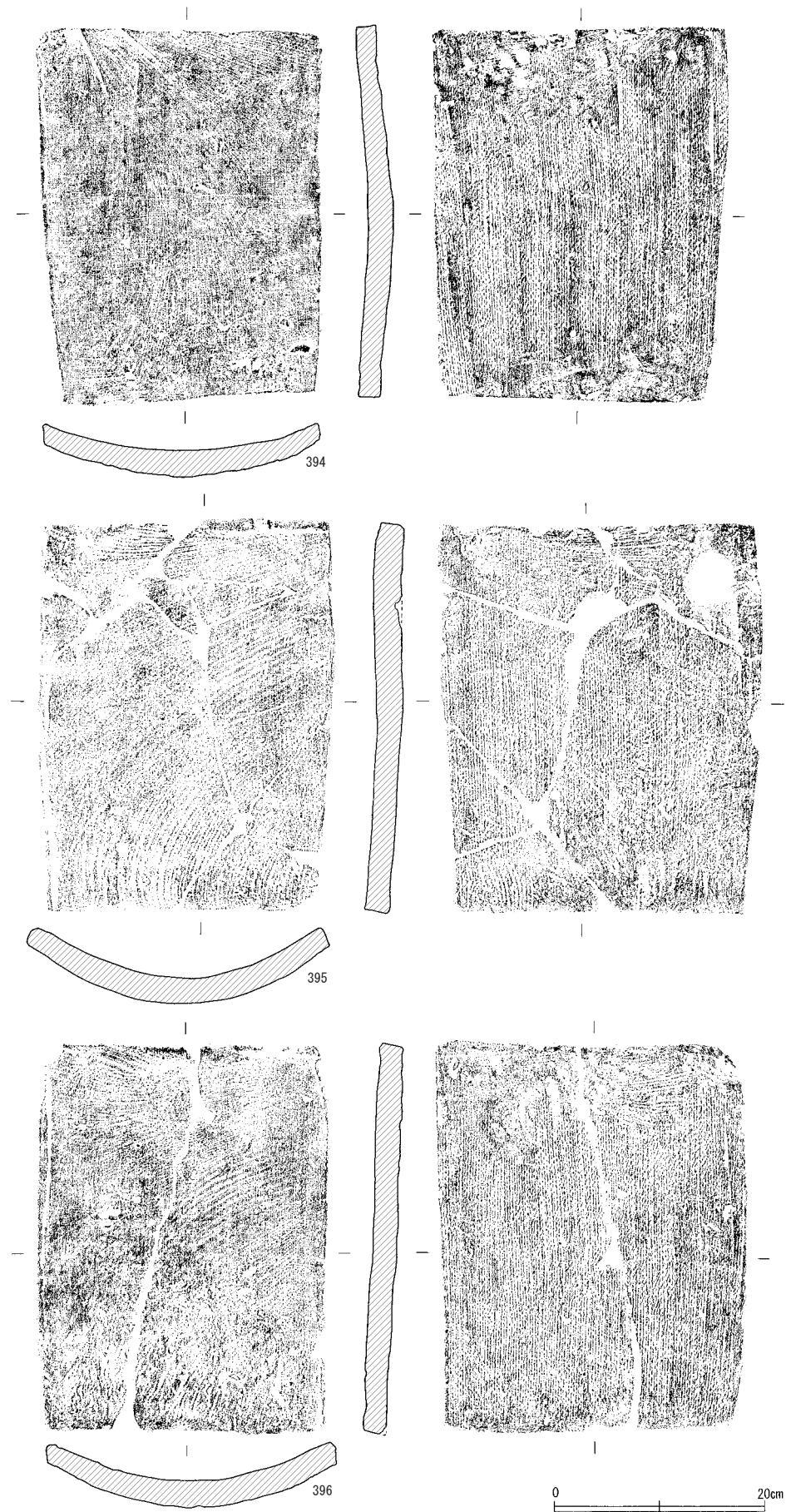
も高い位置まで覆土が堆積していることから、盛土の可能性も考えたが、断面土層図のA、Cラインの状況から、溝として報告することにした。断面土層図のAラインとBラインでは、黒色系シルト質土除去後、Cラインは黒色系シルト質土除去前の断面土層図を示している。A、Bラインで溝の上端が平坦でないのは、黒色系シルト質土が上部に堆積していたからである。



第138図 7-4区 第2遺構面 171-溝



第139図 7-4区 第2遺構面 171-溝 出土遺物（その1）



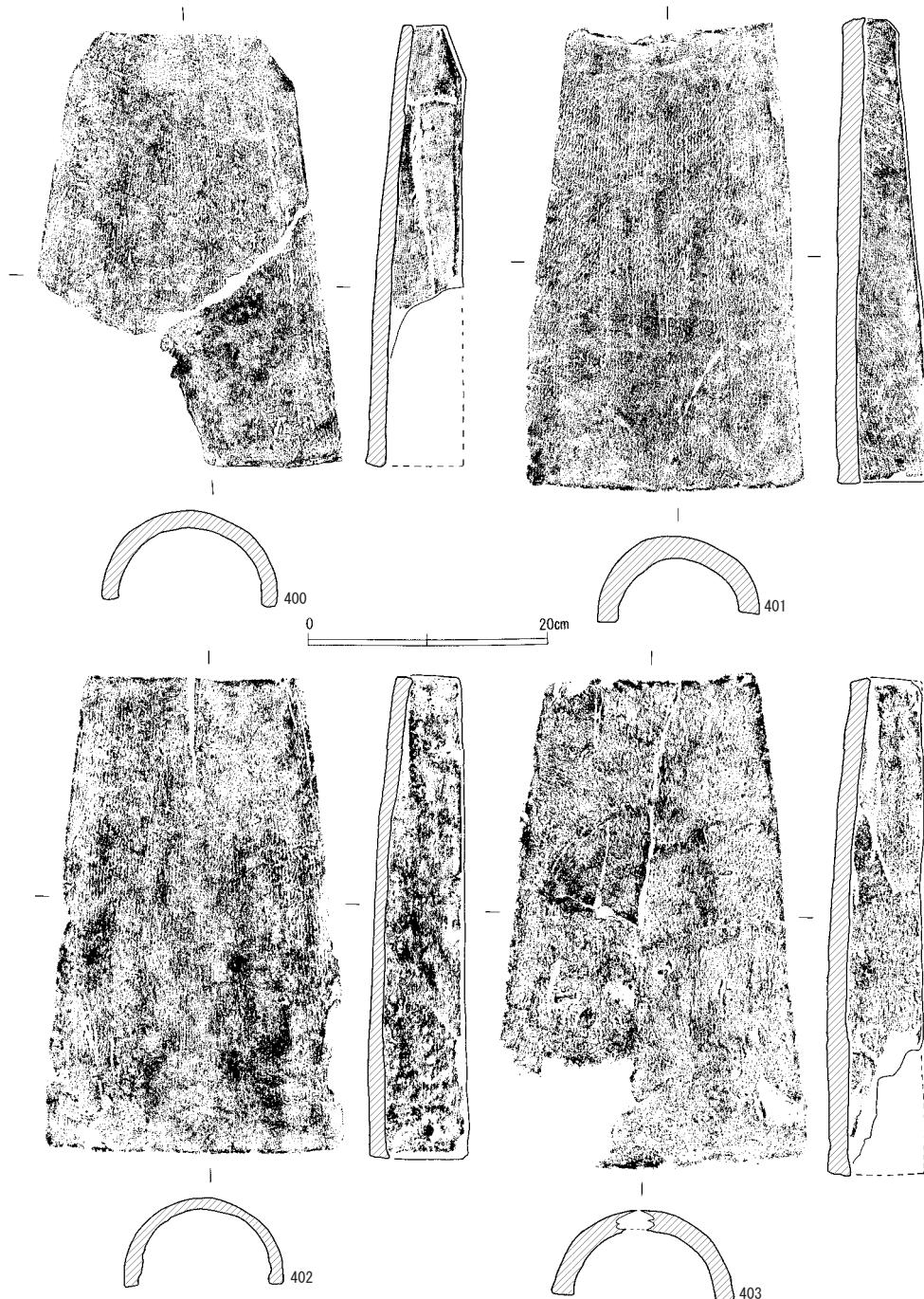
第140図 7-4区 第2遺構面 171-溝 出土遺物（その2）



第141図 7-4区 第2遺構面 171-溝 出土遺物（その3）

Cラインでは断面土層図4から6が黒色系シルト質土にあたる。図面右側で土層が切られているのは、試掘トレーンチの掘削跡である。A、Bラインの1層に対応する土層ではなく、2層に対応する土層として7層がある。8層は盛土層である。2層および7層の下部は基本層序第5層が広がっている。

遺物は、1層中および2層直上、7層直上から出土した。2層、7層からの遺物出土は、僅少である。調査区の南東端では溝底部から0.2m以上高い位置から、瓦が垂直に立った状態で列状に並んでおり、何らかの遺構が存在する可能性もあったが、掘方等は検出できず、性格を明らかにすることはできなかった。



第142図 7-4区 第2遺構面 171-溝 出土遺物（その4）

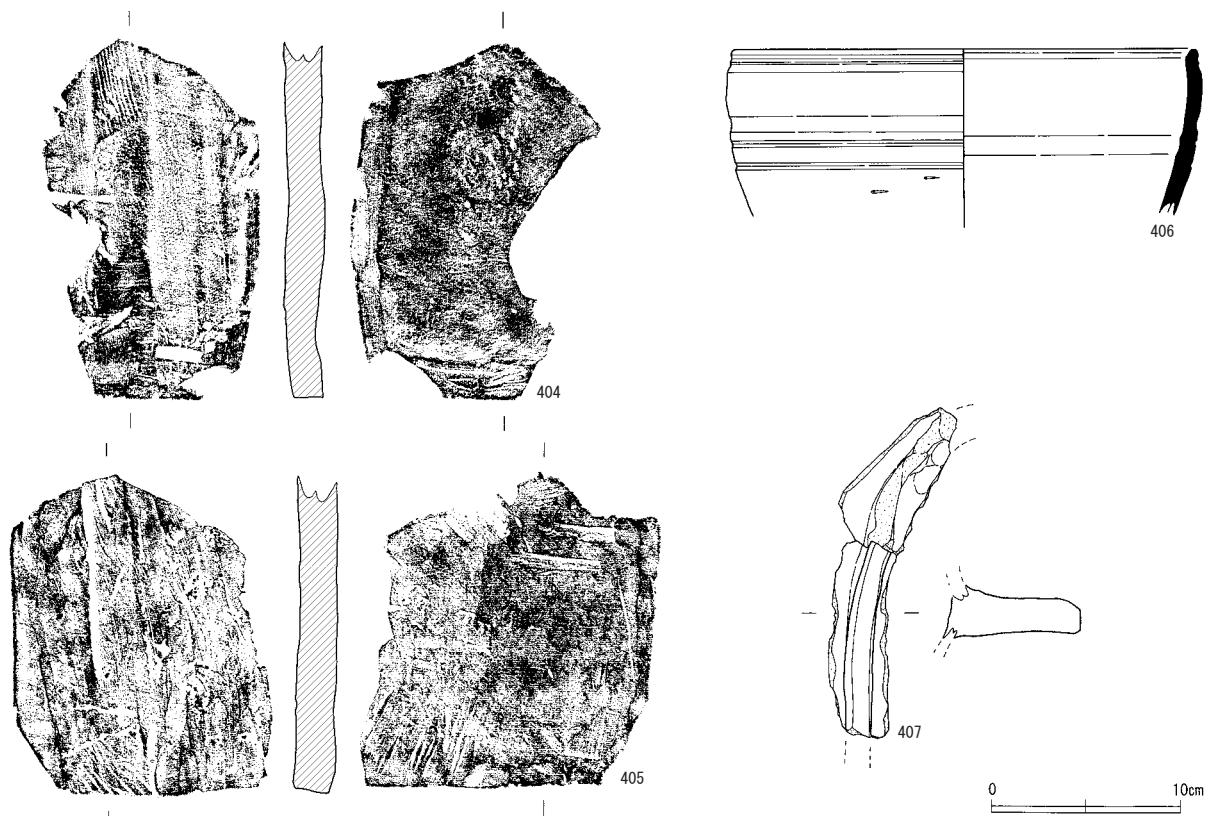
遺物は、平瓦 200 点以上、丸瓦 100 点以上、須恵器 27 点、土師器 43 点、鉄器 1 点が出土した。完形、あるいはそれに近い平瓦が極めて多量に出土した点に特徴がある。391 から 407 の 17 点を図示した。

391 から 399 は平瓦である。391 はやや厚手で、凸面には粗い縄目タタキを施す。凸面の一部には、離れ砂が付着している。392 は、桶巻造りで、土師質焼成の平瓦。凹面には糸切り痕が残る。凸面は、ハケ状の工具で全体を調整したのち、まばらに格子タタキを施す。凹凸両面の端部は、丁寧に面取りしている。393 から 399 は一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凹面の糸切り痕の方向は、個体によって差がある。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。凸面の端部には、連続的な指頭圧痕が見られる。393、394、396 は須恵質焼成、395、397 から 399 は土師質焼成である。土師質焼成のものには、赤橙色から赤褐色系の素地に灰白色から黄灰色系の粘土が筋状に混在しているのが観察される。素材として 2 種類の粘土を十分に混和しないまま使用した結果であろうか。なお、須恵質焼成のものでは、こうした特徴がほとんど観察されない。

400 から 403 は行基式丸瓦である。いずれも凸面に縄目タタキを施す。400 は、狭端面の角を焼成前に切り落としている。401 が須恵質焼成で、残りは土師質焼成である。土師質焼成のものには、平瓦と同様に、2 種類の粘土を混和不十分なまま使用した形跡が認められる。

404、405 は桶巻造りで凸面をナデで仕上げている。405 の凸面には、布目痕が部分的に観察される。406 は須恵器の鉢、407 は竈の焚口である。

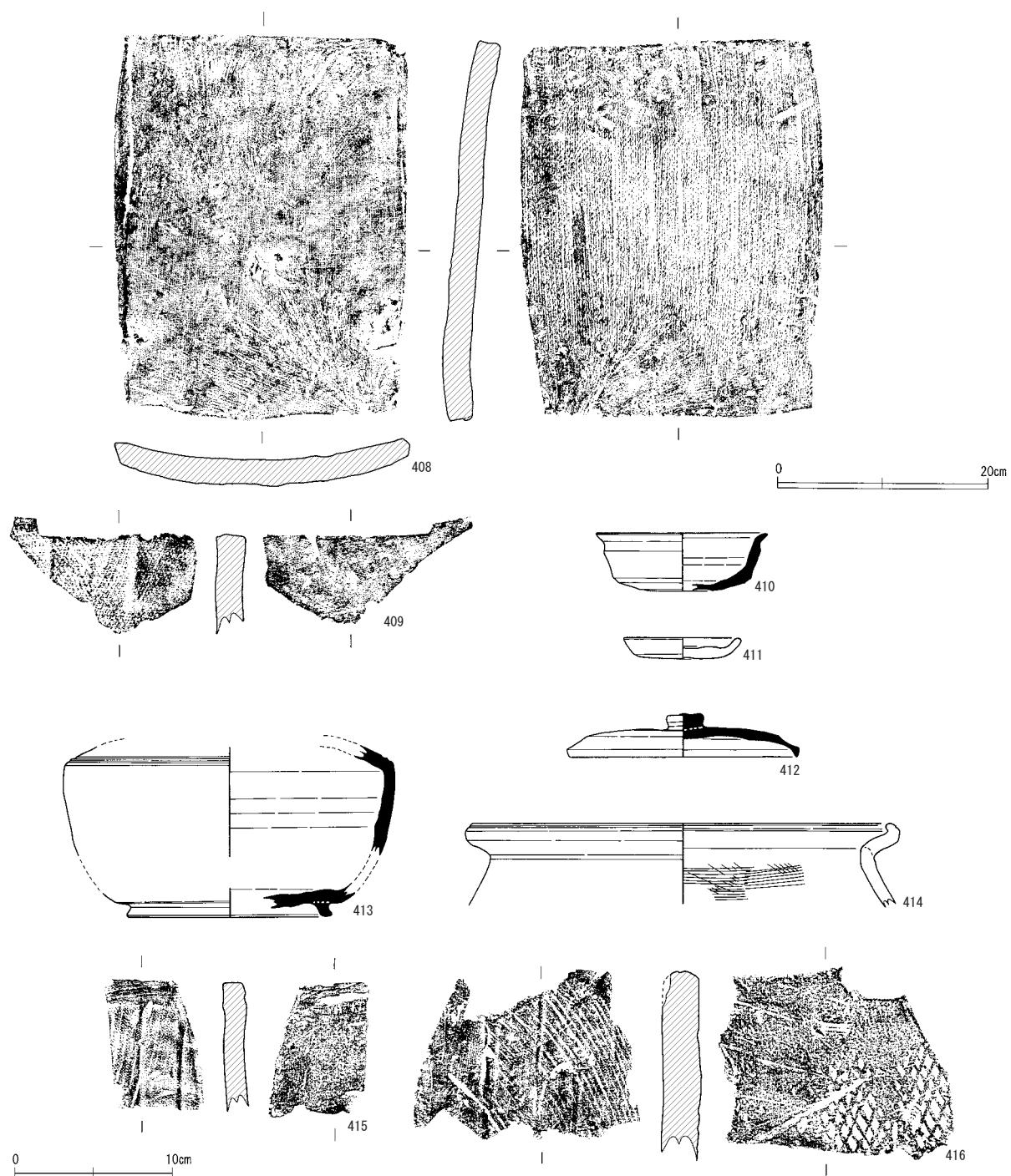
当遺構は、位置等から考えて、紀の川市教育委員会試掘トレーニング I 区の SD-3 に該当する。



第 143 図 7-4 区 第 2 遺構面 171- 溝 出土遺物 (その 5)

### 包含層（第 144 図）

包含層出土遺物のうち、目に付いたものを図示した。408 から 410 は第 2 遺構面検出作業中に出土した。410 は黒色系シルト質土掘削中、412 から 416 は基本層序第 3 層掘削中に出土した。408 は出土地点から考えて、171- 溝に帰属する遺物の可能性がある。409 は道具瓦で、桶巻造りで凸面をナデ調整した平瓦の上端を切り欠いている。415 は桶巻造りで凸面をナデ調整しているが、通常の瓦に比べて厚みが半分程度しかない。



第 144 図 7-4 区 包含層 出土遺物

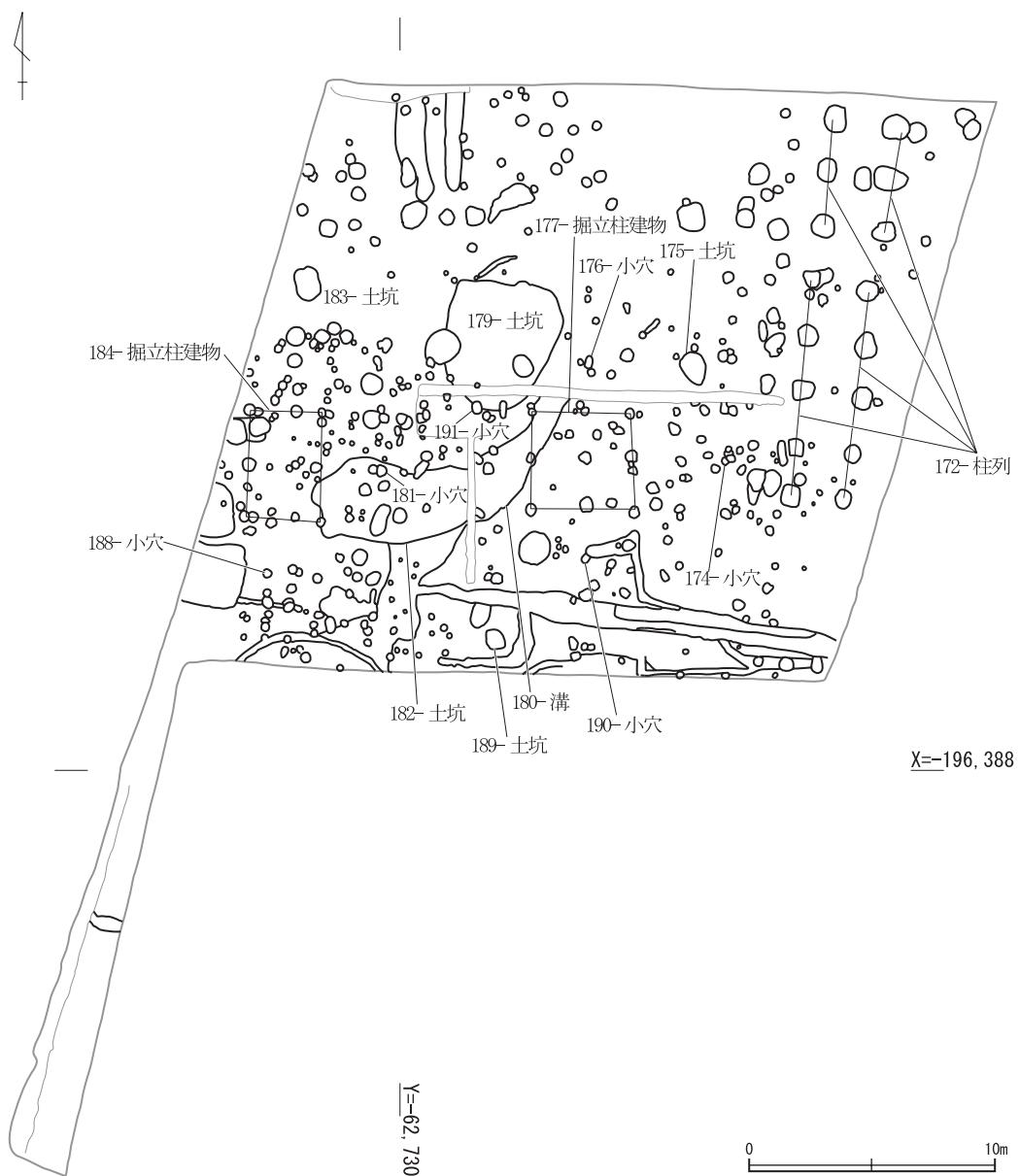
## 第10節 8-1区（第145図から第150図、写真図版25、写真図版48）

### 調査区の概要

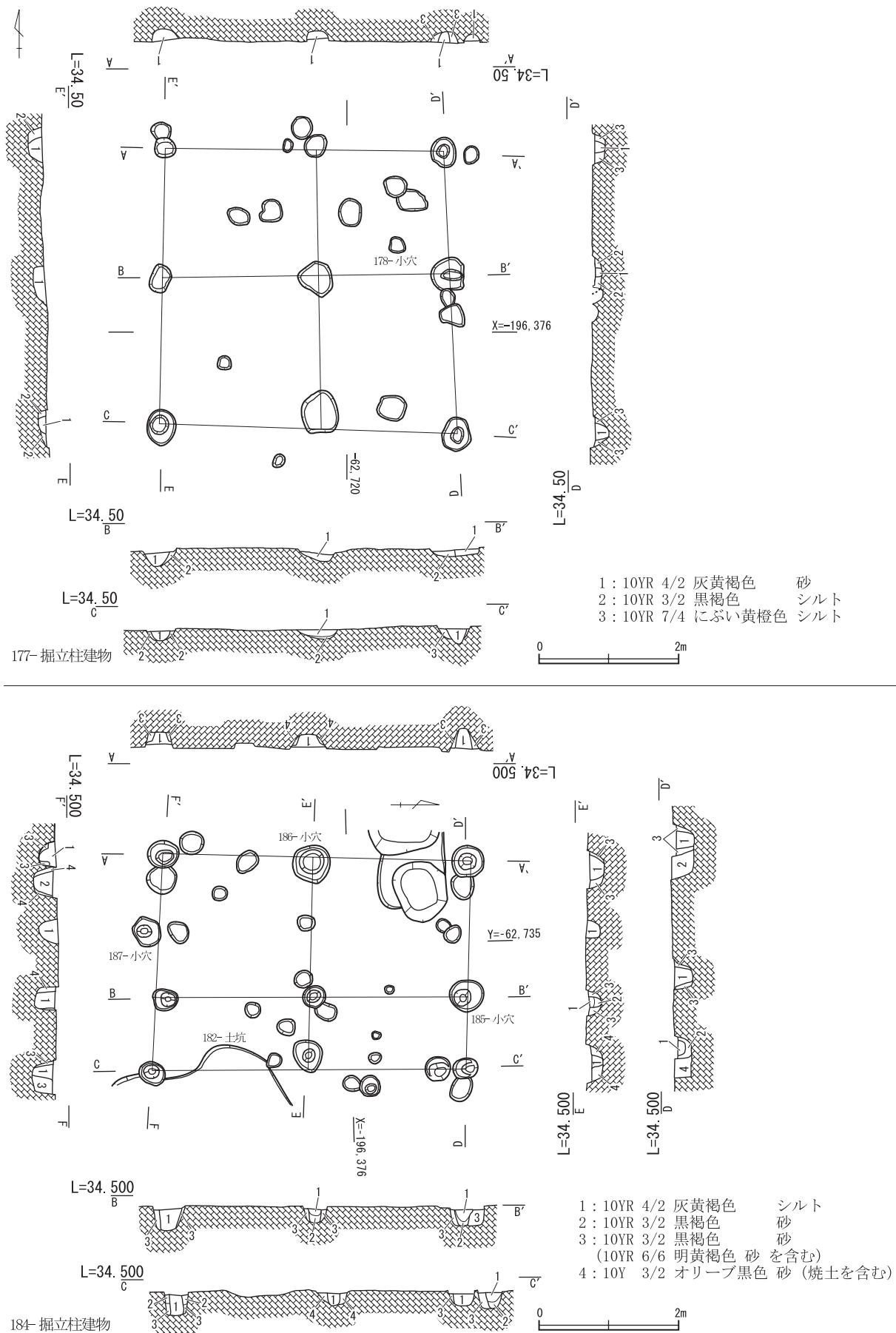
A2区画、1-2区の南、2区の西に位置する。調査前の現況は果樹畠である。紀の川市教育委員会と和歌山県教育委員会とがそれぞれ1ヶ所ずつ、試掘トレンチを設定している。調査区全域に中世の包含層が遺存している。包含層は、北側部分が比較的厚く、東及び南に向かうに従って薄くなる。小穴が集中して出土する地点がいくつかあり、掘立柱建物の存在に留意しつつ掘削を進めたが、建物として認定できたのは、2棟にとどまった。遺構密度は極めて高いが、地山と遺構覆土の差が少なく、遺



写真12 8-1区 調査区中央部小穴群



第145図 8-1区 遺構全体図



第146図 8-1区 177、184-掘立柱建物と周辺の遺構

構検出は困難であった。2区で検出していた柱穴列、竪穴建物の延長部分をはじめ、掘立柱建物、土坑、溝等多数の遺構を検出している。

### 掘立柱建物

**177- 掘立柱建物（第146図、写真図版24）** 調査区中央部で検出した2間×2間の総柱の建物である。柱穴の深さは0.2m前後である。瓦器等中世の遺物が出土している。

建物を構成する小穴ではないが、内部に位置する178- 小穴からは第150図462の白磁が出土している。

**184- 掘立柱建物（第146図、第149図、写真図版24、写真図版48）** 調査区西端で検出した掘立柱建物である。南北方向に主軸をむけた2間×1間の建物で、東側に庇が付く。遺存度は177- 掘立柱建物よりも良好で、柱穴の深さは約0.3mである。

西側中央の柱穴にあたる186- 小穴から418の土師器小皿が、北東隅の柱穴にあたる185- 小穴から458の土師器小皿、459の瓦器碗が出土している。また、建物を構成する小穴ではないが、内部に位置する187- 小穴からは第150図464の土師器小皿が出土している。

### 柱列

**172- 柱列（第147図、第149図、写真図版23）** 調査区東端で検出した。掘方は直径約0.6mから約1mとばらつきがある。柱列を構成する小穴は、掘方埋土、柱痕覆土ともによく似ている。図上では、3基と5基で一対の柱列として報告するが、南側の5基一組の柱列は、北側の3基と南側の2基に細分することも可能であろう。

遺物は土師器碎片が散発的に出土しているだけだが、柱列構成小穴である173- 小穴から出土した417を図示した。土師質焼成の土器で、小形の把手であろうか。表面は丁寧なナデで仕上げている。

### 土坑

**175- 土坑（第148図、第149図、写真図版48）** 調査区東側で検出した。長径約1.4m、短径約1mの楕円形で、深さは検出面から0.15m前後である。

土師器36点、瓦器13点が出土した。3点図示した。426は土師器の小皿である。427は、把手、あるいは短い脚と思しき突出部を持つ土師器である。外面にはススが付着している。428は土師質の羽釜である。

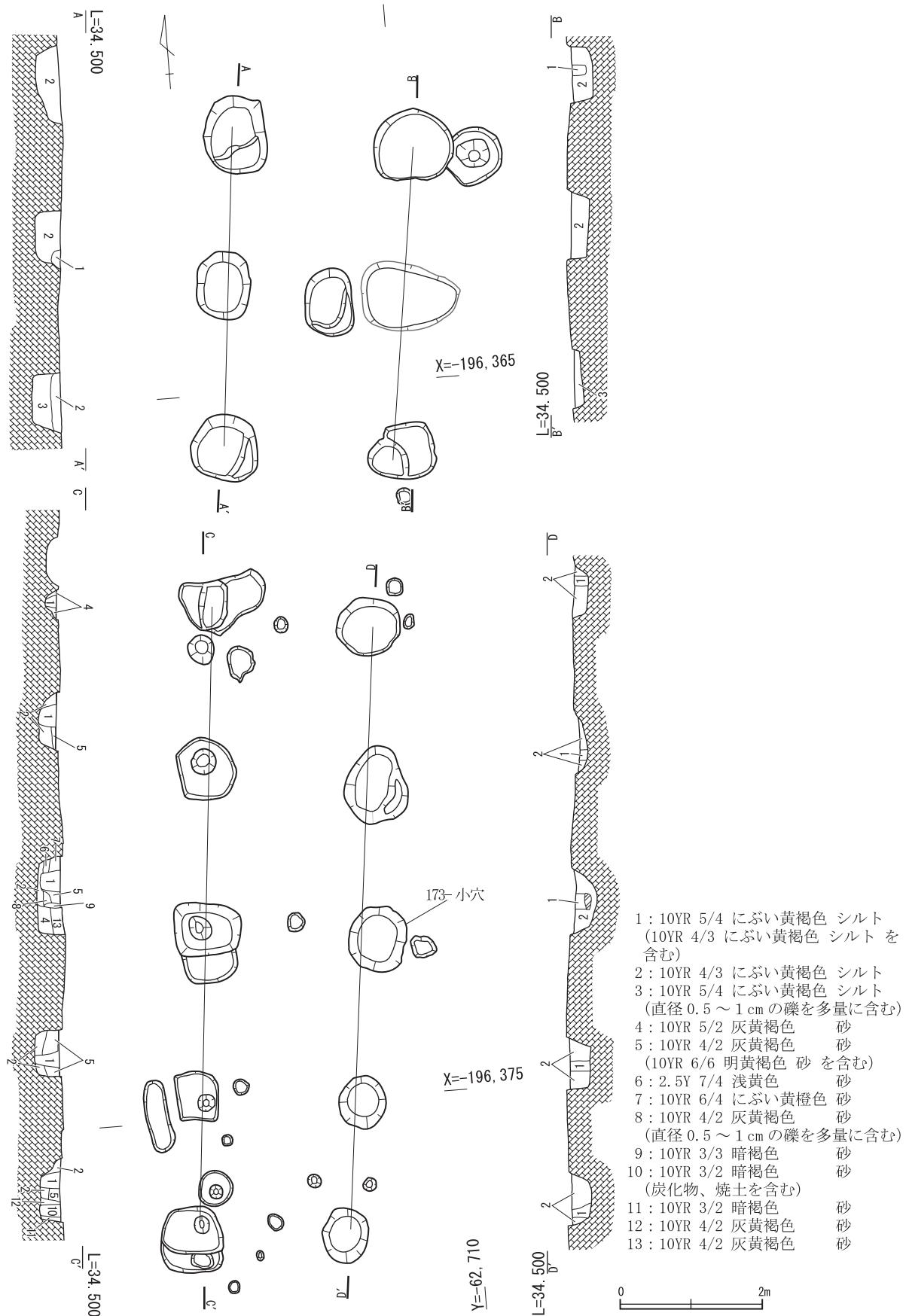
**179- 土坑（第145図、第149図、写真図版25）** 調査区中央で検出した。直径約4.5mから5mの不整形で、深さは検出面から0.25m前後で、遺構と検出面の境界の不明瞭な、落込み状の土坑である。

石器1点が出土した。425は石庖丁様の結晶片岩製石器で、両側縁を浅く切り欠く。未製品であろうか。

**182- 土坑（第145図、第149図）** 調査区西南側で検出した。180- 溝に接続するとみられる不定形の土坑である。184- 掘立柱建物を構成する小穴に切られている。

平瓦1点、丸瓦50点以上、土師器50点以上、瓦器30点が出土した。429から437の10点を図示した。429から431は土師器の小皿、432は、土師器小皿と類似した形態だが、

瓦質焼成である。433は土師器の碗である。434は退化した貼付け高台を持つ瓦器碗である。50%程度しか残存していないため、不明確な点もあるが、見込みには、3から4回転する



第 147 図 8-1 区 172- 柱列

暗文を施している。436、437は羽釜である。437の羽は、粘土紐の低平な貼付けにまで退化している。

**183- 土坑（第145図、第149図、写真図版25、写真図版48）** 調査区西端で検出した。南北方向に主軸を持つ土坑である。南北約1.2m、東西約0.9m、深さ約0.15mである。北西部の底面から土師器皿4枚と鉄製刀子が検出された。

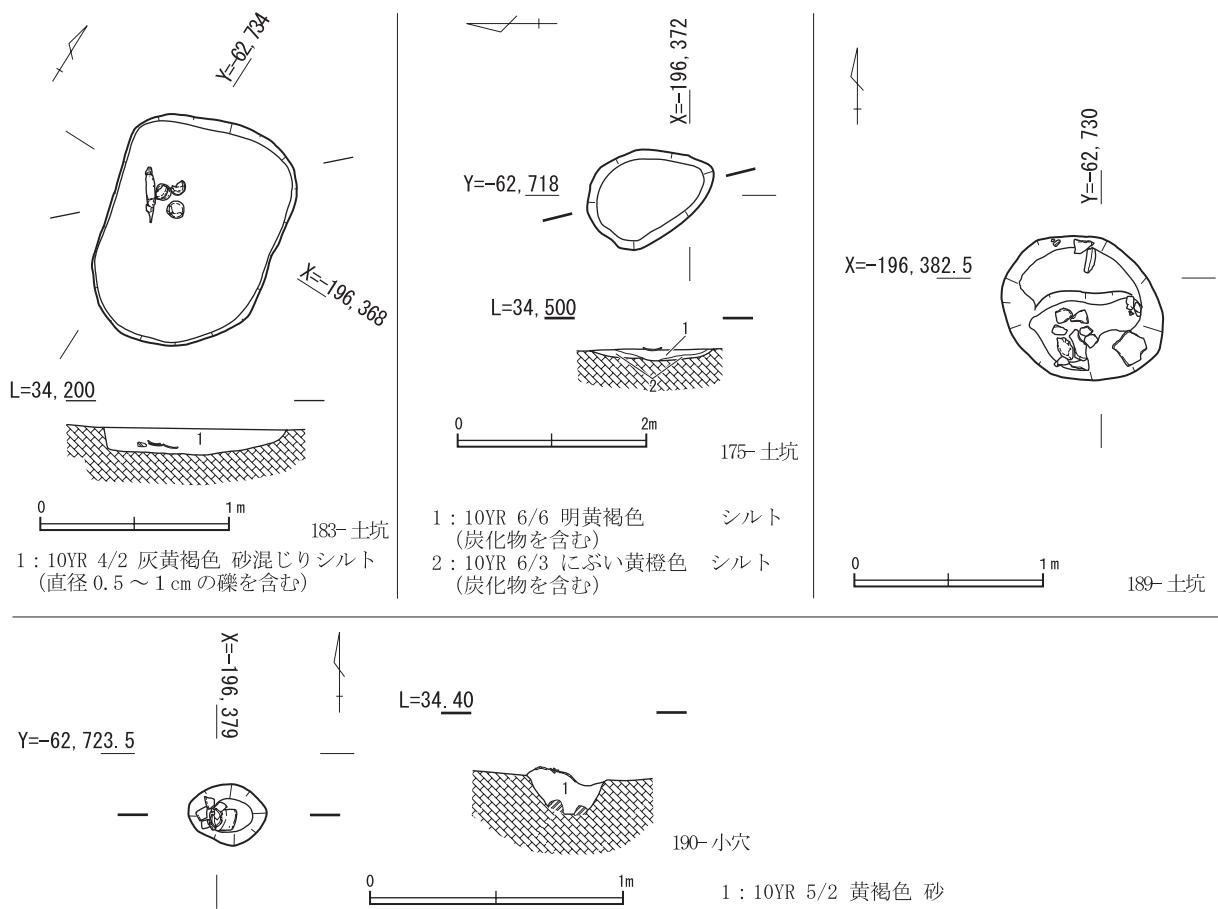
平瓦2点、丸瓦2点、土師器25点、瓦器3点、鉄器1点が出土した。底面から出土した4点を図示した。420は鉄製の刀子である。全長約30cm、先端部を欠損する。刀身には木質が僅かに残る。茎には、樹皮を巻きついている。肉眼では不鮮明だが、X線写真上にて明瞭に観察できる。421から424は土師器の小皿である。一括して出土し、口径はほぼ同じだが、421のように薄手でシャープな造りのものと422のように厚手のものが混在している。

**189- 土坑（第148図、第149図、写真図版25）** 調査区南端で検出した。長径約0.9mの土坑である。底面から遺物がまとまって出土している。

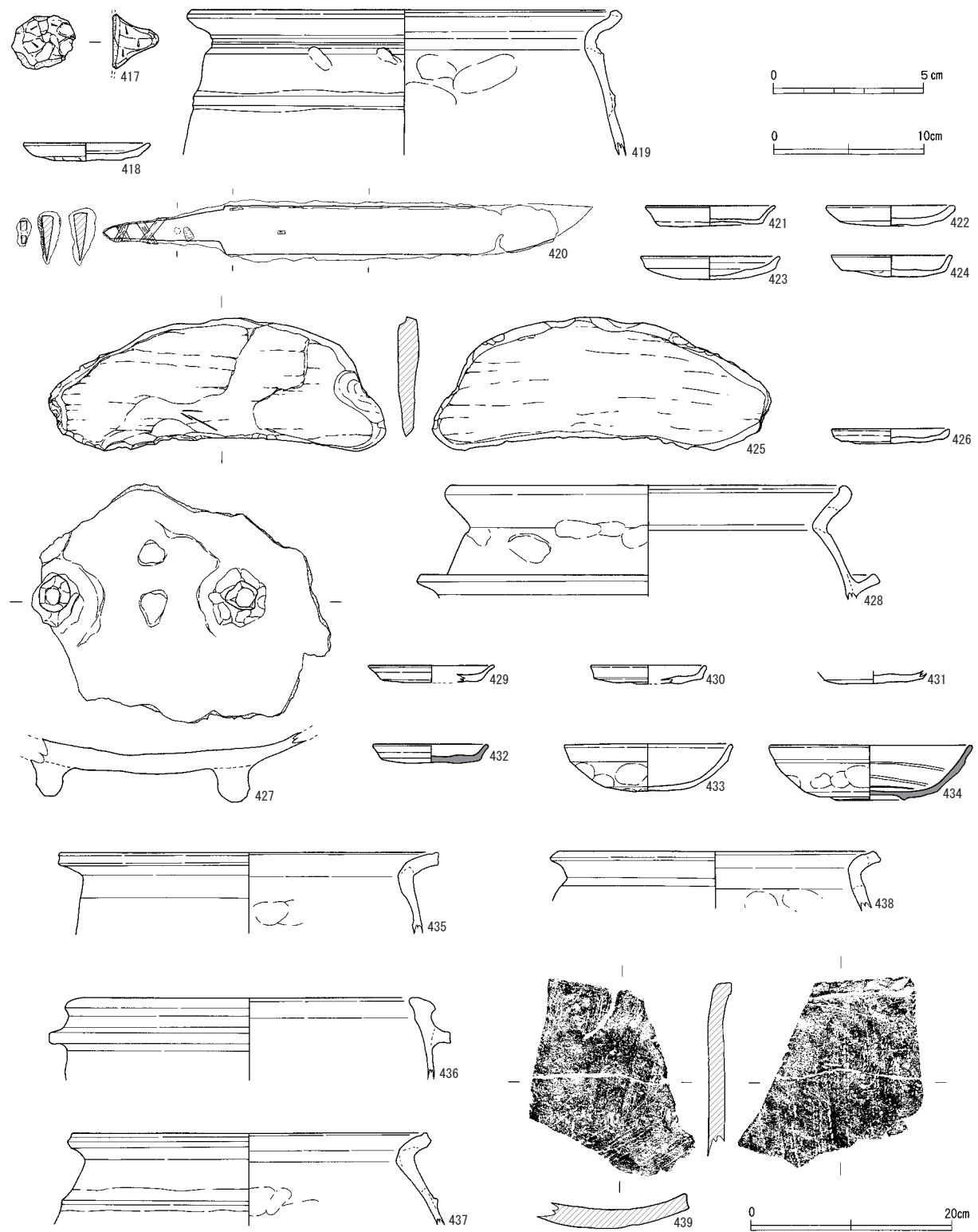
平瓦17点、土師器3点、瓦器38点が出土した。1点図示した。439は内面に糸切り痕と布目痕、外面に繩目タタキと離れ砂を持つ薄手の瓦片である。離れ砂には、角閃石と思しき粒子が含まれている。

## 溝

**180- 溝（第145図、第150図）** 調査区のほぼ中央で検出した。182- 土坑の北東側に位置する、



第148図 8-1区 183、175、189- 土坑、190- 小穴



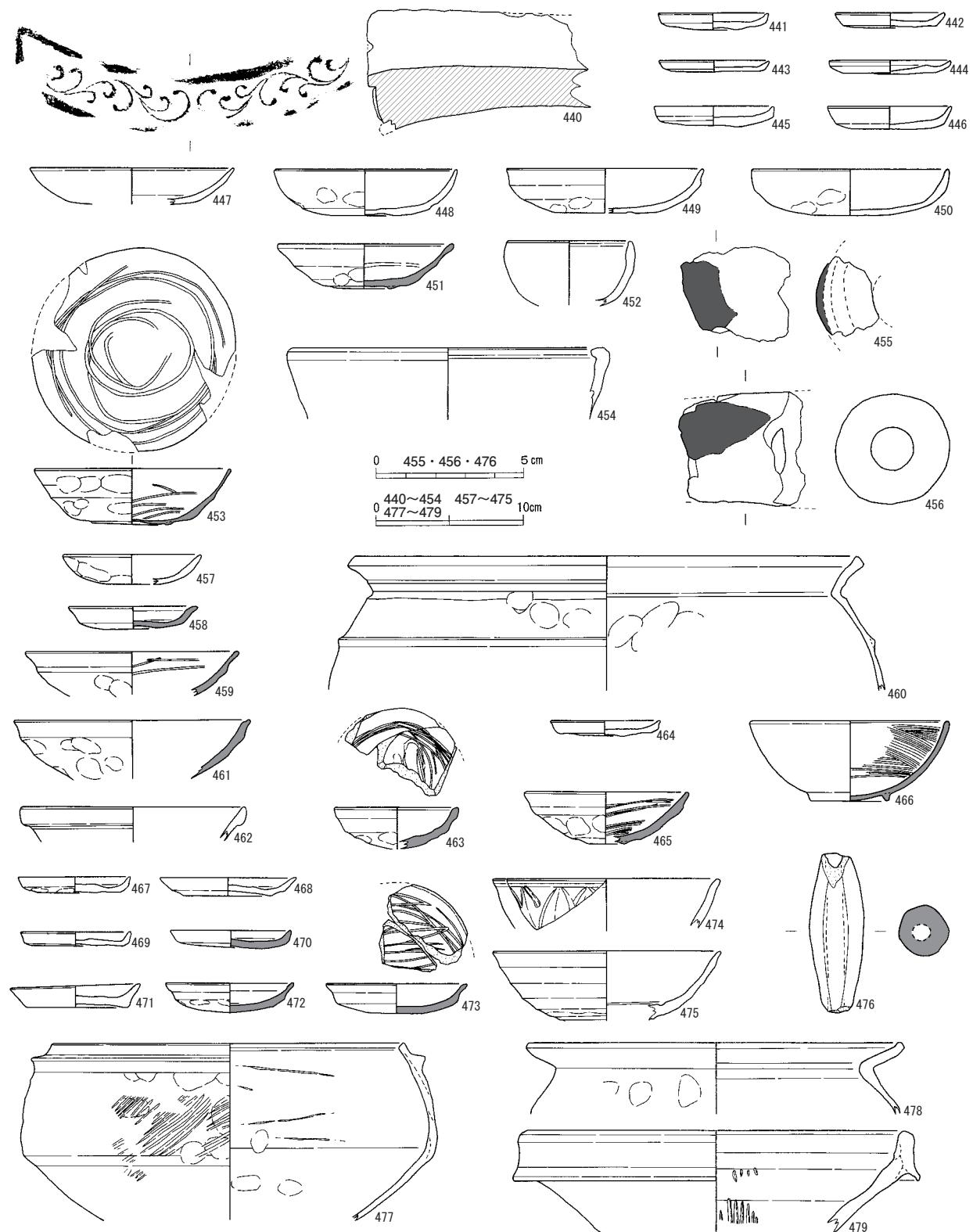
第149図 8-1区 175、179、182、183、186、188、189- 土坑、173- 小穴 出土遺物

細長い不整形な遺構である。182- 土坑と一連の遺構の可能性が高い。

軒平瓦1点、平瓦37点、丸瓦5点、須恵器2点、土師器100点以上、瓦器100点以上、羽口片11点が出土した。このうち、447から456の17点を図示した。440は対向唐草文軒平瓦である。頸は突出せず、外縁部も幅が狭い。平瓦部の凹面には離れ砂が密に付着している。

441から446は土師器の小皿である。447から450は土師器の皿である。歪みの大きな

口縁部からの復元実測であり、若干の幅はあるが、口径は、おおよそ 13cm 前後である。ただし、口縁部の立ち上がりや調整方法は、多様である。451、453 は高台がほぼ完全に退化した瓦器碗である。453 は円を描く暗文が明瞭に施されている。452 は土師器の碗である。455、456 は羽口である。内径は約 14cm。図上では、ガラス化した範囲を塗りつぶしている。



第 150 図 8-1 区 180- 溝、小穴類、包含層 出土遺物

## 小穴

8-1 区からは、多量の小穴が検出された。特に、179- 土坑周辺やその南側に高い密度で分布する（写真 12）。直径 0.2 m から 0.3 m、深さも 0.3 m 程度と小規模ながら、比較的豊富な遺物も持つものも少なくない。以下に、目に付いた遺物を出土した小穴を列挙する。

174- 小穴（第 145 図、第 150 図） 172- 柱列の西側で検出した小穴である。

土師器 2 点、瓦器 10 点が出土した。463 は瓦器の小碗。底部はややとがり気味で安定感に欠ける。外面は底面を強いユビ押さえ、口縁部をナデで仕上げる。内面は、強いユビ押さえとナデののち、細い原体で暗文を施す。

176- 小穴（第 145 図、第 150 図） 177- 掘立柱建物の北側で検出した。土師器 4 点が出土した。457 は土師器の皿である。

181- 小穴（第 145 図、第 150 図） 182- 土坑を切っている。瓦器 4 点が出土した。463 は退化した貼付け高台を持つ瓦器碗である。

188- 小穴（第 145 図、第 149 図） 調査区南西端に位置する。この小穴を西北隅の柱穴として、東西方向に主軸を持つ 3 間 × 2 間または 4 間 × 2 間の掘立柱建物が存在するとも考えたが、柱間が不安定で、断定に至らなかった。

188- 小穴からは、土師器 38 点、瓦器 5 点が出土した。419 は粘土紐の低平な貼付けにまで退化した羽釜である。

190- 小穴（第 148 図、第 150 図） 調査区南側、177- 掘立柱建物の南側に位置する。遺構検出面とほぼ同じ高さから、遺物が押しつぶされた状態で出土した。

瓦器 21 点が出土した。1 点図示した。466 は断面台形の貼付け高台を持つ瓦器碗である。内面には細かなミガキが密に施されている。器面の荒れが激しく、見込みの暗文は図示できなかった。北山廃寺、北山三嶋遺跡では出土数の少ない、やや古相を示す瓦器碗である。

191- 小穴（第 145 図、第 150 図） 179- 土坑を切る小穴の一つである。179- 土坑の南端に位置する。

瓦器 3 点が出土した。461 は瓦器碗である。

## 包含層

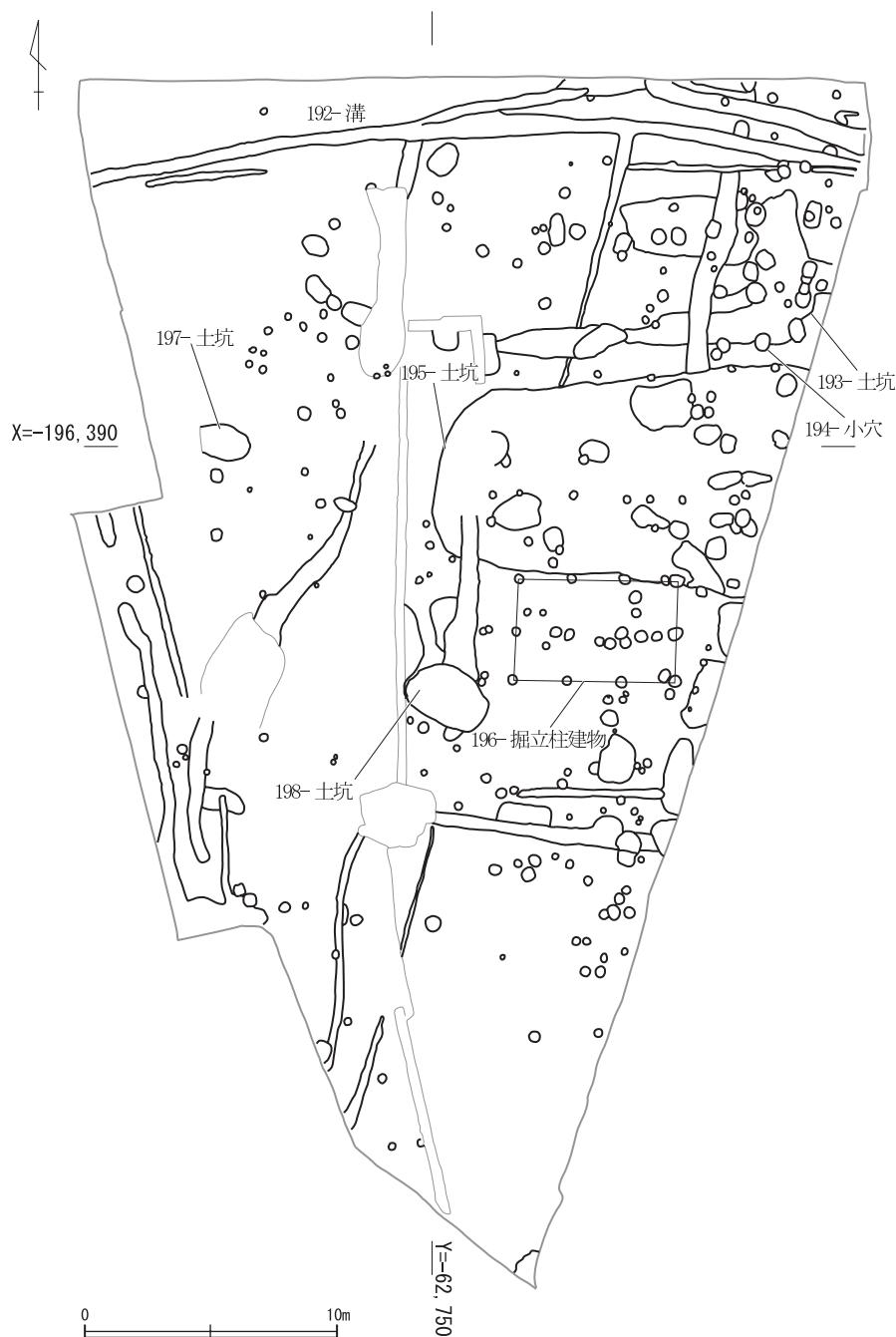
遺物包含層からは、古代瓦片とともに多量の土師器片が出土した。このうち、残りが比較的良好で、遺跡の性格を考えるうえで重要なものを図示した。467 から 469、471 は土師器の小皿。470、472、473 は瓦器の小皿である。形態、胎土とも多様で、467 は古代瓦の一部と同様に、赤橙色の素地に灰白色の粘土が筋状に混在している。469 は雲母粒を胎土に含む。471 は砂粒を含むやや粗い胎土だが、表面を丁寧にナデで仕上げている。474 は青磁、475 は白磁である。青磁、白磁ともに各調査区から小片は出土しているが、図示できるものは数少ない。476 は瓦質焼成の土錘である。477 は土師器の羽釜である。外面の胴部中央にはユビ押さえの後、並行タタキが施された状況が明瞭に観察される。胴下半のタタキは、ナデ消されている。断面には、粘土の継ぎ痕が残る。北山廃寺、北山三嶋遺跡では数少ない例である。479 は擂鉢である。包含層中で、最も新しい時期に帰属するとみられる。

## 第11節 8-2区（第151図から第156図、写真図版26）

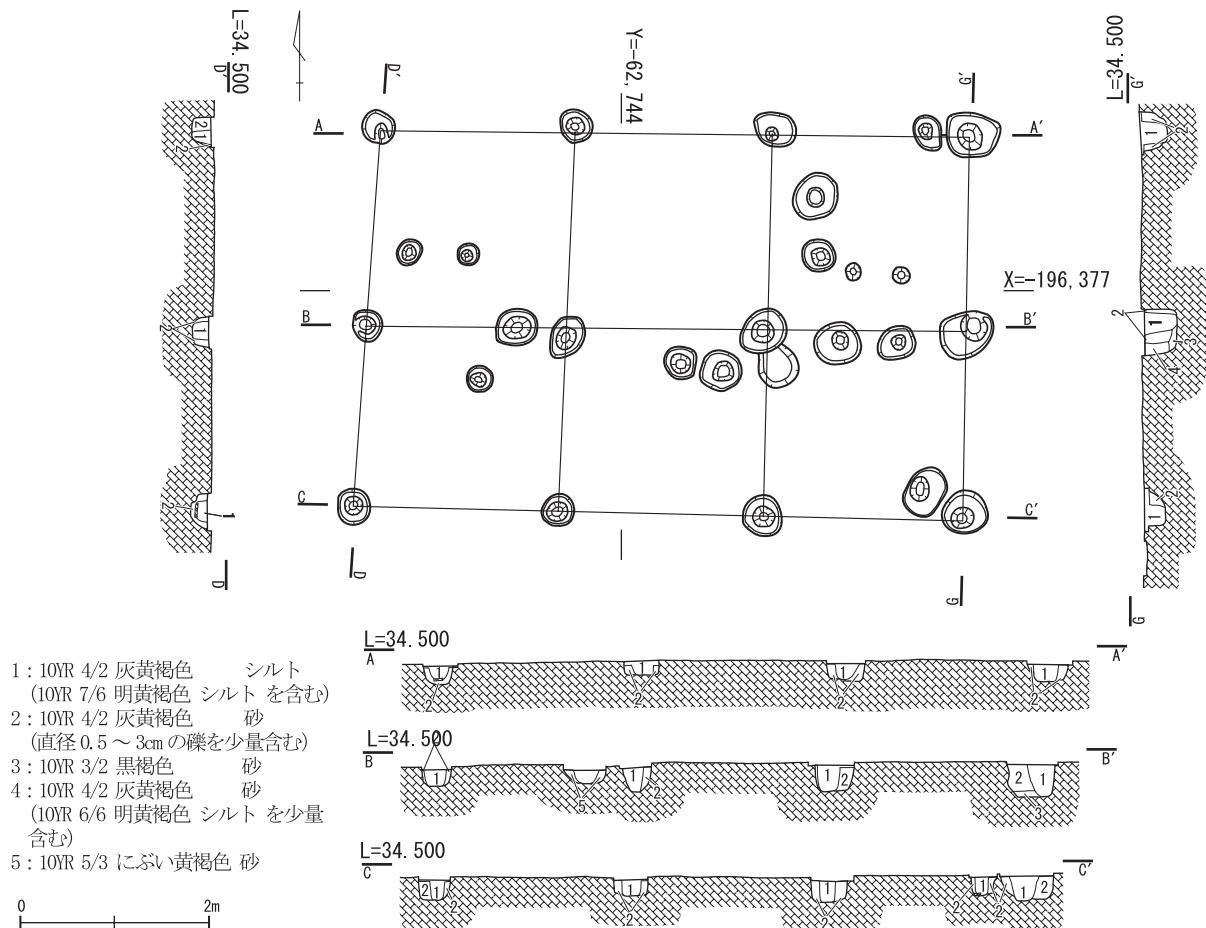
### 調査区の概要

A2、A3区画、8-1区の西に位置する。調査前の現況は果樹畠である。中世の包含層は東半部に僅かに遺存しているが、南半部では確認できない。掘立柱建物を含む中世の柱穴、土坑、溝を検出した。ただし、不定形な溝状、あるいは落込み状の遺構が多数を占める。遺構密度は8-1区に近接する調査区北東部では極めて高いものの、西及び南側の範囲ではそれほど多くない。

この地区周辺に、回廊の屈曲部の存在が推定されていたことから、貴志川町教育委員会が3ヶ所に、紀の川市教育委員会が1ヶ所の試掘トレンチを一部重複させて設定している。なお、調



第151図 8-2区 遺構全体図



第 152 図 8-2 区 196- 掘立柱建物

査区中央やや南よりの位置にある攪乱は、被熱を受けた土坑として報告されていたが、ほぼ完掘されており、トレーナー外に伸びると想定された遺構端も、後世の再掘削を受けていたため、攪乱扱いとした。

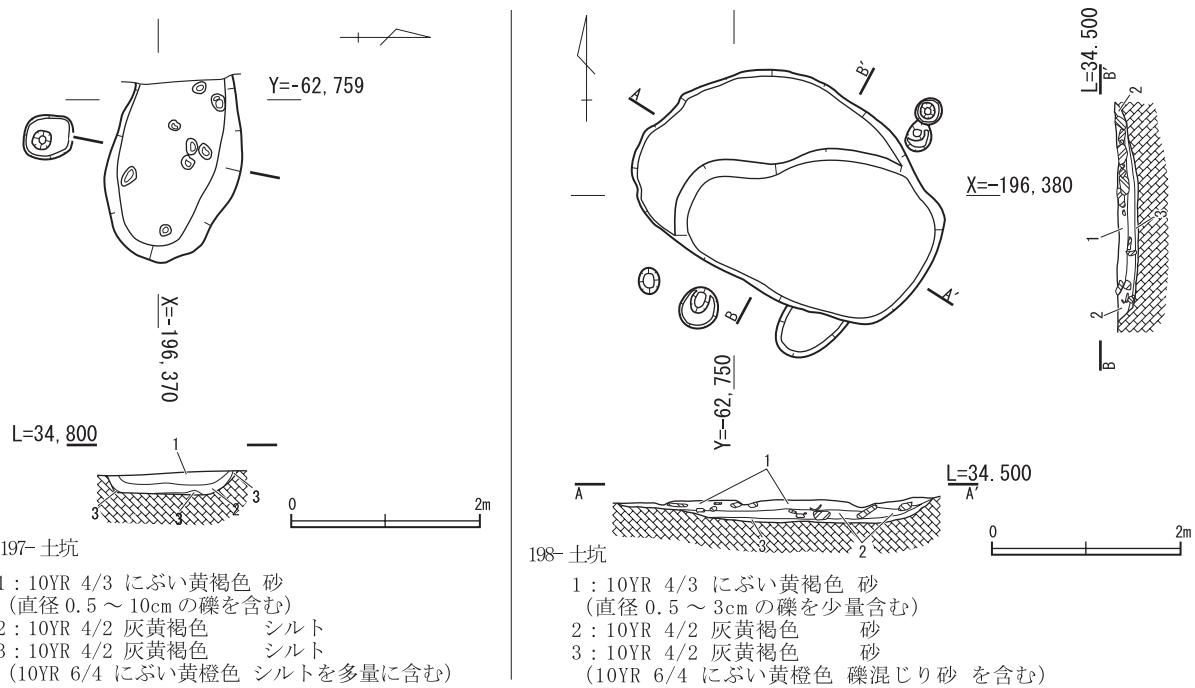
### 掘立柱建物

**196- 掘立柱建物 (第 152 図、写真図版 26)** 調査区東側中央で検出した。東西方向に主軸を取る。3間 × 2間の総柱の掘立柱建物である。柱間は東西方向では約 2.1 m で一定しているが、南北方向は 1.9 ~ 2.2 m とばらつきがある。深さは 0.2 ~ 0.3 m 前後である。柱穴からは、土師器片が少量出土したにとどまる。

### 土坑

**193- 土坑 (第 151 図、第 155 図)** 調査区東端で検出した。やや細長い不整形で、検出面の境界の不明瞭な、落込み状の土坑である。

軒丸瓦 2 点、平瓦 50 点以上、丸瓦 19 点、道具瓦 1 点、須恵器 6 点、土師器 14 点が出土した。480 から 482 の 3 点を図示した。480 は凹面に布目痕が残り、凸面に縄目タタキを施す。焼成は不良で、脆く、胎土に混入した木片が炭化した状態で残存している。通例の縄目タタキを施した瓦に比べて縄が太い。481 は軒丸瓦である、482 は道具瓦である。通常の平瓦よりも幅が狭く造られており、上部端を切り欠いている。



第 153 図 8-2 区 197、198- 土坑

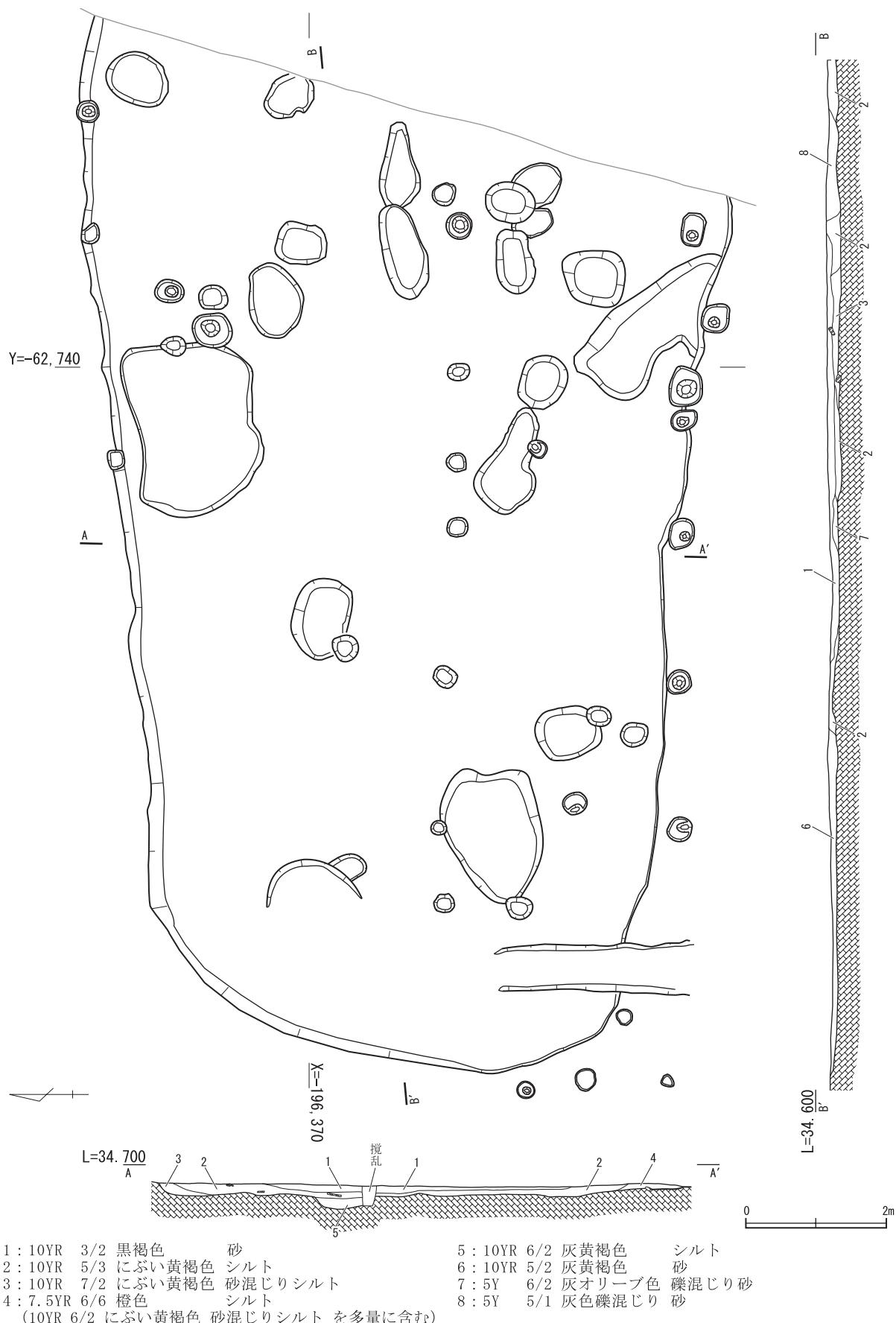
**195- 土坑（第 154 図、第 155 図、写真図版 48）** 調査区東端で検出した。深さ 0.1 ~ 0.2 m 前後と浅く、検出面と遺構覆土との境界が不明瞭な落ち込み状の土坑である。調査時は、断面土層図の 1 層、黒褐色砂質土が堆積している東西約 6.0 m、南北約 4.0 m の隅円長方形の範囲を 3922- 土坑として掘削し、3922- 土坑掘削後に検出した南北約 8.0 m、東西約 13.0 m 以上の土坑を 3935- 土坑として掘削しているが、同一の遺構として扱う。193- 土坑の延長部分は 8-1 区で確認していたが、その段階では、ごく浅い落ち込みと考え、包含層扱いで遺物を取上げている。

道具瓦 1 点、平瓦 500 点以上、丸瓦 100 点以上、須恵器 9 点、土師器 24 点、瓦器 1 点が出土した。485、486 の 2 点を図示した。485 は花こう岩製の磨石である。使用面は、図示した 1 面のみである。花こう岩製の石器は、今回の調査では 485 のみである。486 は破損が著しいが、円面鏡である。よく使用されており、鏡部は平滑になっている。

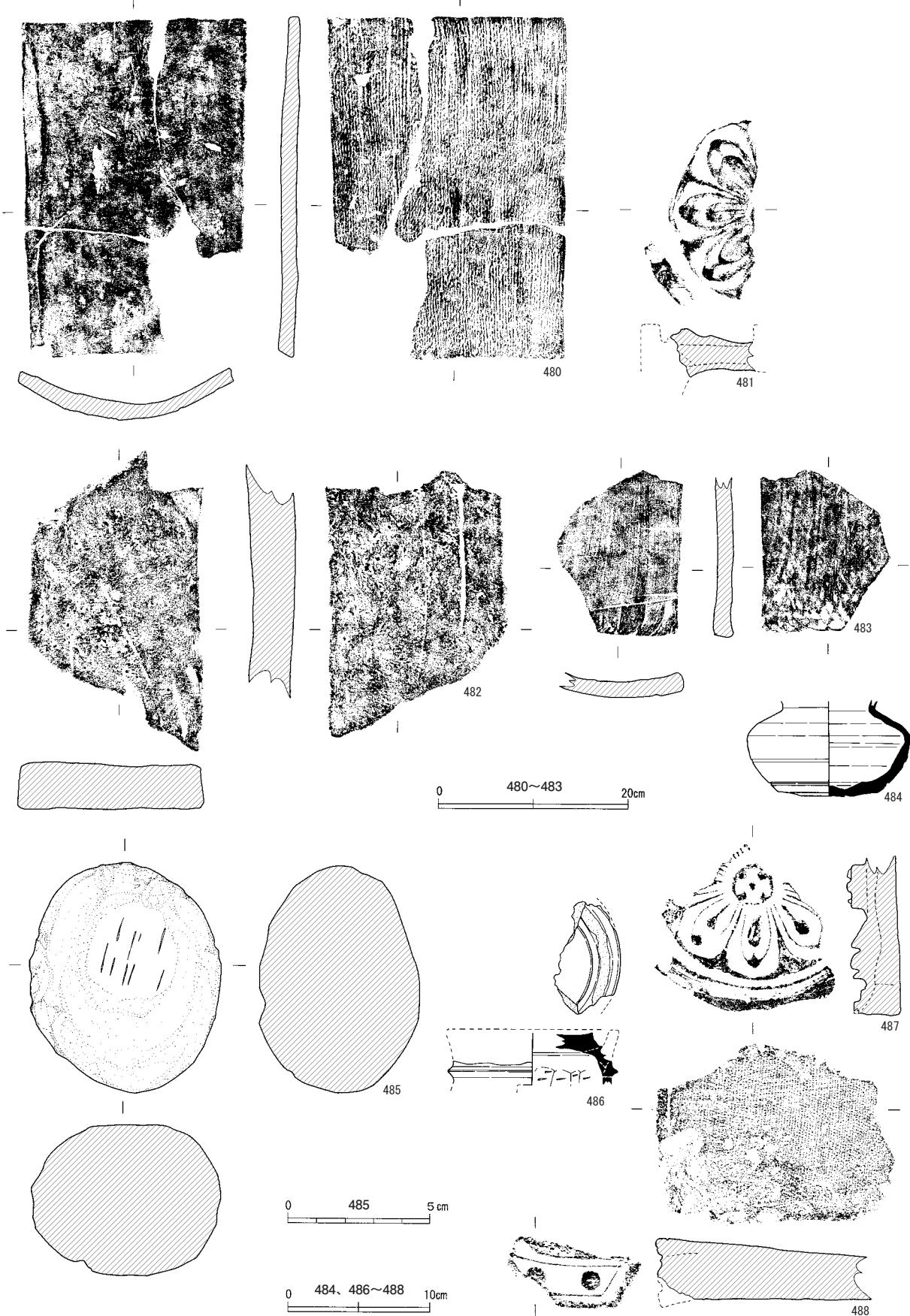
**197- 土坑（第 153 図、第 155 図、写真図版 48）** 調査区西側で検出した。長径 1 m 以上、短径約 0.7 m の土坑である。西端を後世の削平で失っている。底面よりやや浮いた位置から、地山に含まれている礫がかたまって出土した。

軒丸瓦 1 点、平瓦 200 点以上、丸瓦 100 点以上、須恵器 16 点が出土した。このうち、483、484 の 2 点を図示した。483 は桶巻造りの平瓦。凹面の端部から約 3 cm の位置には、横走する断面 V 字型の圧痕がみられる。凸面は、格子タタキの後、上下方向の強いナデで仕上げる。凸面は鮮やかな赤に発色しており、赤色顔料を塗布しているのかもしれない。484 は須恵器の小壺。胴部上半には自然釉が付着している。

**198- 土坑（第 153 図、第 155 図、写真図版 26）** 調査区中央部で検出した。長径約 3.3 m、短径約 2.3 m、深さ約 0.2 m の楕円形の深い土坑である。断面土層図の 1 層、2 層からは、0.2



第 154 図 8-2 区 195- 土坑



第155図 8-2区 193、195、197、198-土坑 出土遺物

m前後の礫と多量の古代瓦片が出土している。

軒丸瓦 1 点、軒平瓦 1 点、平瓦 150 点以上、丸瓦 50 点以上、土師器 38 点、瓦器 6 点、青磁 1 点が出土した。488 の 1 点を図示した。488 は連珠文軒平瓦である。頸はほとんど発達せず、外縁部はごく狭い。凹面には布目痕が明瞭に残る。

## 溝

180- 溝（第 145 図、第 150 図） 調査区の北端、現代の里道の下で検出した。この溝から分岐した溝が、現在の地割りと同じ位置をはしっており、比較的新しい時期の所産かもしれない。

平瓦 11 点、丸瓦 2 点、土師器 6 点、磁器 1 点が出土した。1 点を図示した。489 は土師器の小皿である。器内外面をナデで仕上げている。やや尖り気味で、不安定な底部を持ち、口縁部は強くナデて外反させる。こうした特徴は、土師器の小皿よりもむしろ、8-1 区包含層出土の 473 瓦器小皿に近い。

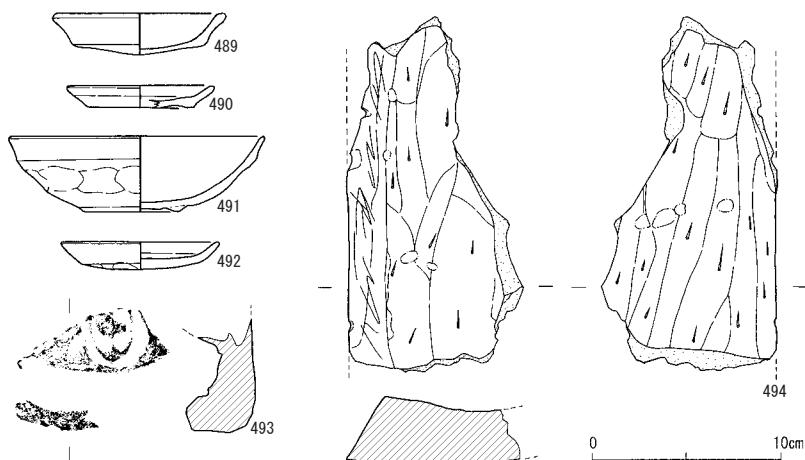
## 小穴

194- 小穴（第 151 図、第 156 図） 193- 土坑を切って構築されている小穴である。

平瓦 5 点、丸瓦 1 点、土師器 6 点、瓦器 1 点が出土した。490、491 の 2 点を図示した。490 は土師器の小皿である。内面にススとみられる炭化物が付着している。491 は瓦器碗である。退化した貼付け高台を持ち、焼成が甘く、器表の炭素吸着も不均一な瓦器碗である。

## 包含層

遺物包含層出土遺物のうち、目に付いたものを図示した。492 は瓦器の小皿である。表面の剥落が著しく、暗文の有無等は確認できなかった。493 は軒丸瓦である。494 は道具瓦と思われる。表裏面とも粗いヘラケズリで整形しているが、ヘラケズリの上に布目痕が付く。須恵質焼成で、堅緻な焼きあがりである。



第 156 図 8-2 区 溝、小穴、包含層等 出土遺物

## 第12節 8-3区（第157図から第163図、写真図版27、写真図版48）

### 調査区の概要

A2区画、中門推定地の南側、3区の北側に位置する。里道の挟んだ東側は8-2区となる。調査前の現況は水田である。調査区内には、貴志川町教育委員会と紀の川市教育委員会が試掘トレンチを設定している。

包含層は遺存しておらず、耕作土及び床土を除去すれば直ちに地山となる。地山面は、南に向かって緩やかに下降する。遺構は調査区中央部ではやや希薄であるが、東及び西側で柱穴、小穴、土坑、溝を多く検出している。

### 土坑

200- 土坑（第158図、第159図、第160図、写真図版27、写真図版48） 調査区東端で検出した。長径約4.6m、短径約2.5m、深さ約0.1m～0.3mの平面橢円形の土坑である。覆土は、炭化物や焼土が含まれている。土坑の底面、側壁は被熱しており、赤変している。遺物は、断面土層図の3層以下に多く含まれる。

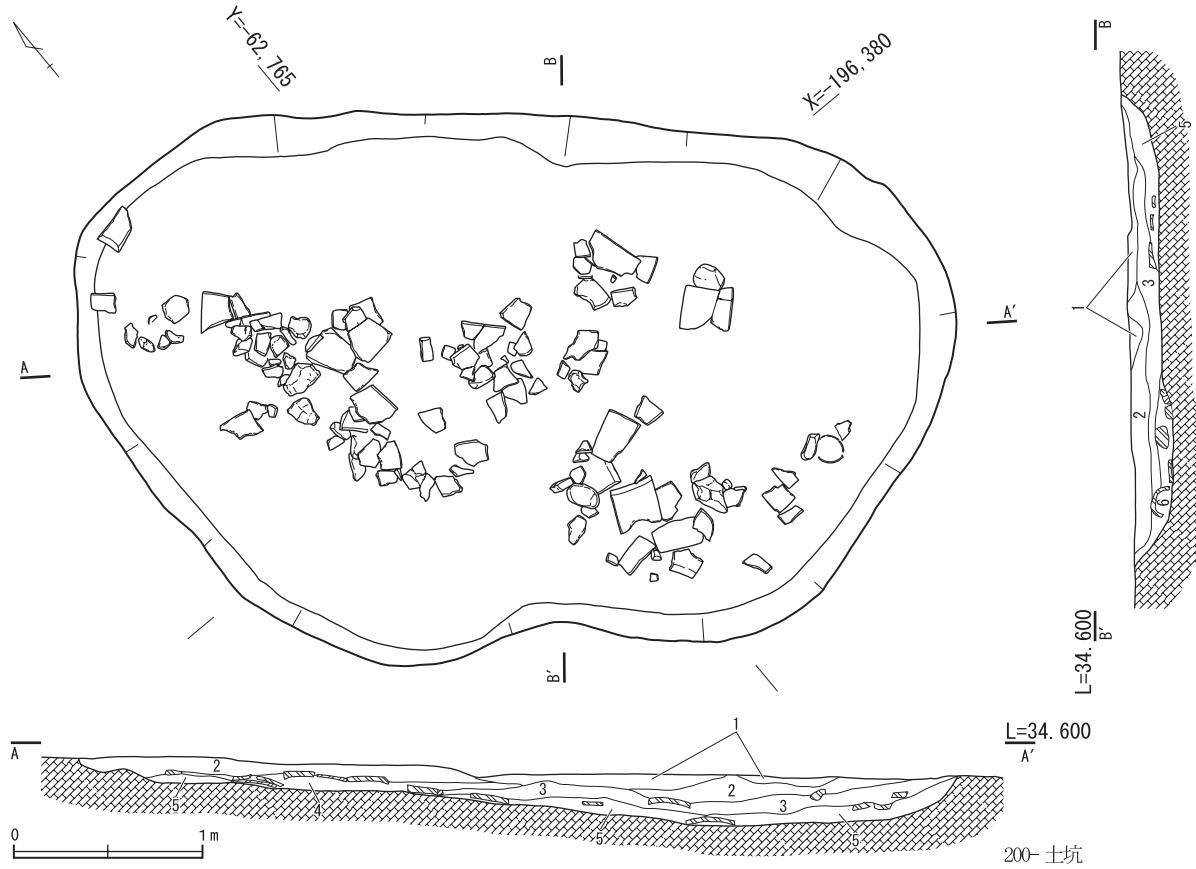
遺物収納コンテナ16箱、軒丸瓦1点、軒平瓦13点、平瓦500点以上、丸瓦50点以上、須恵器6点、土師器22点、瓦器20点、炉壁1点が出土した。495から513の19点を図示した。495から502は連珠文軒平瓦である。全容の判明する資料に恵まれなかつたが、珠文は、3個連続し、少し間隔を開けて再び3個連続している。珠文の外側には細くシャープな圈線がめぐる。外縁部は狭く、上端面の面取りは確認できない。頸の突出はわずかで、瓦の主軸に平行する方向のヘラナデで整形し、外区下端部分のみ横方向のナデで仕上げている。粘土の継目は、比較的明瞭に残されており、製作工程を追うことが可能である。496には珠文と珠文との間の空白部分に範傷が認められる。

503から505は対向唐草文軒平瓦である。8-1区180-溝出土の440とよく似る。ただし、

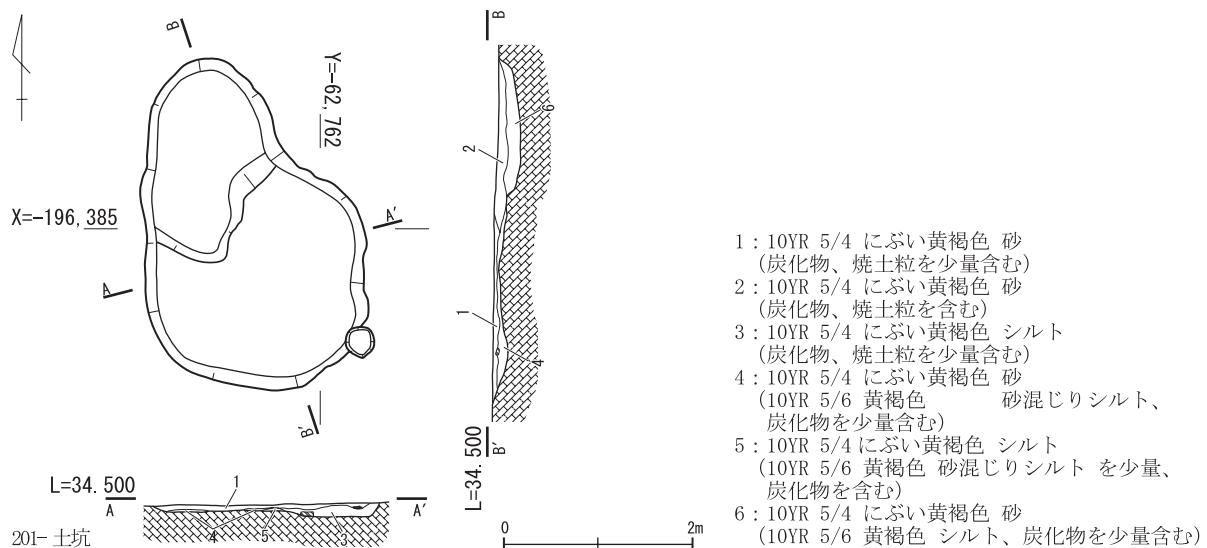


第157図 8-3区 遺構全体図

440 は唐草文の断面が鋭利な三角形だったのに対し、503 から 505 は鋭さに欠ける。粘土の継目は、共伴する連珠文軒平瓦と同様に比較的明瞭に残されており、製作工程を追うことが可能である。



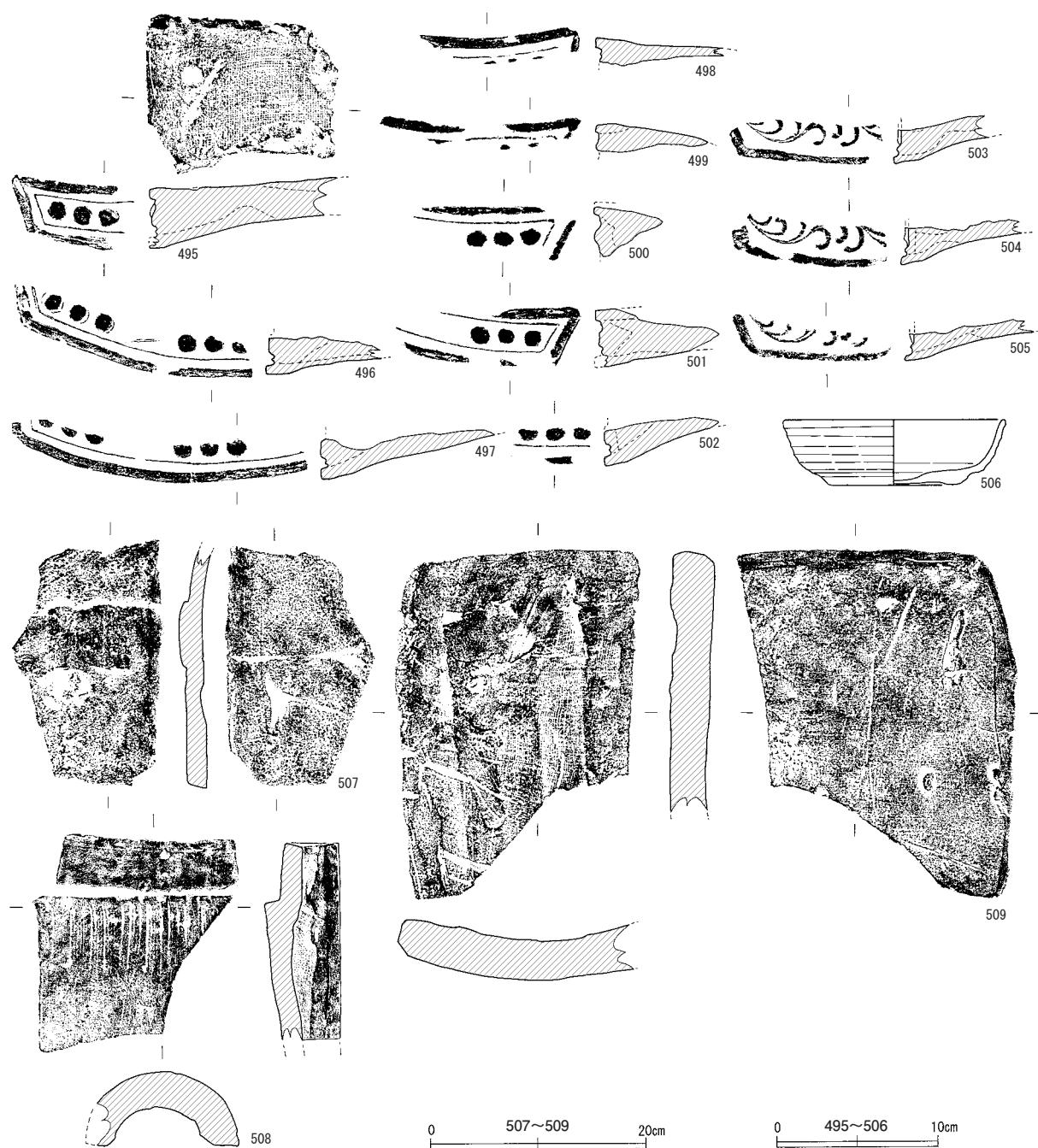
- 1 : 2.5Y 5/3 黄褐色 砂（炭化物を多量に、焼土粒を少量含む）
- 2 : 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト（炭化物、焼土粒、直径 0.5 ~ 2cm の礫を少量含む）
- 3 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト（10YR 5/6 黄褐色 シルトを多量に、炭化物、焼土粒を含む）
- 4 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト（10YR 5/6 黄褐色 シルトを多量に、炭化物、焼土粒を少量含む）
- 5 : 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト（炭化物、焼土粒、直径 0.5 ~ 2cm の礫を多量に含む）
- 6 : 10YR 4/2 灰黄褐色 砂混じりシルト（直径 0.5 ~ 2cm の礫を含む）



第 158 図 8-3 区 200、201- 土坑

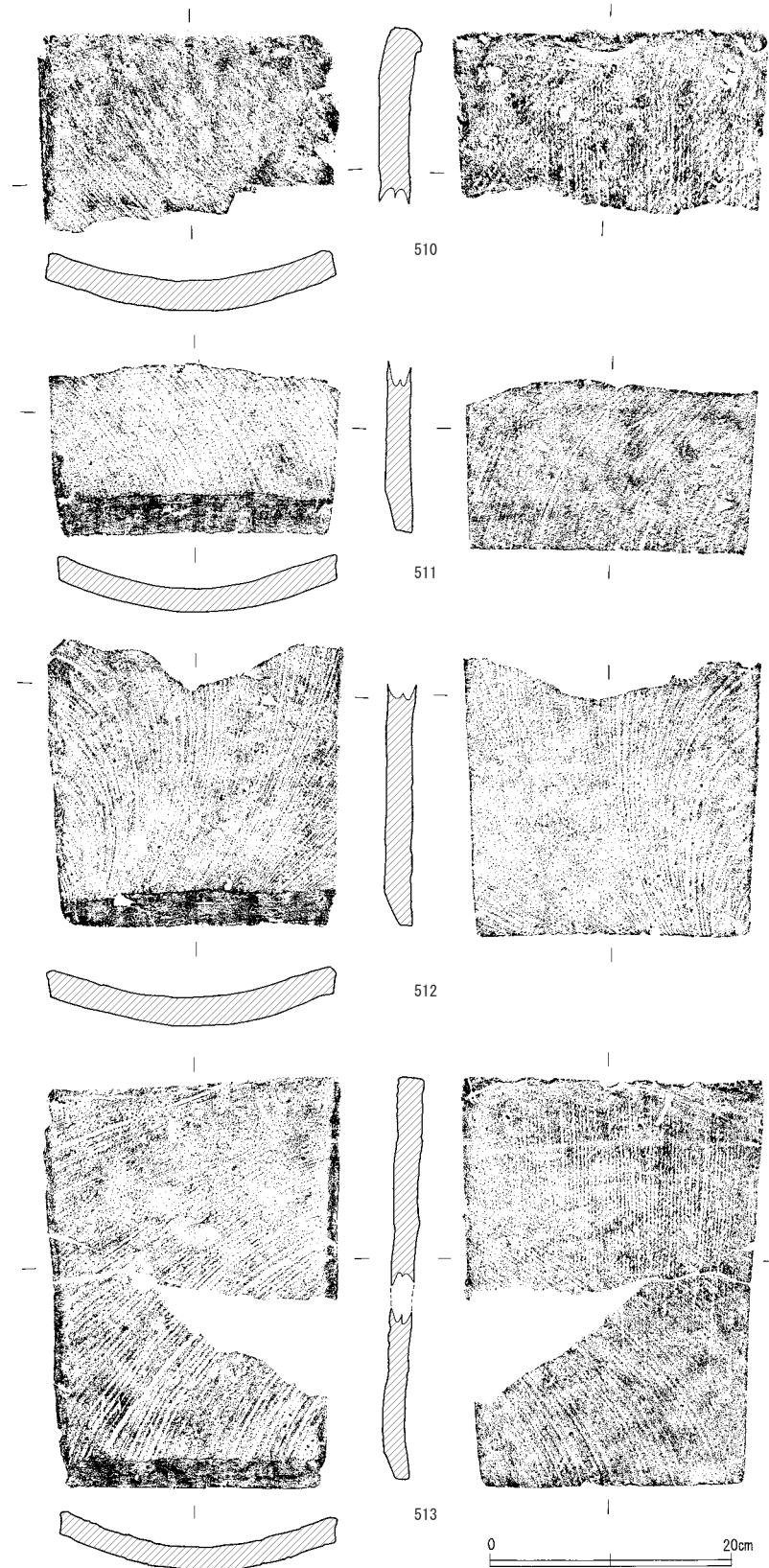
506 は土師器である。外面はヘラケズリ、内面及び底面はナデで仕上げる。胎土は、赤橙色で、濃い赤褐色の粒子と灰白色の粘土塊が散在する。507 は瓦質焼成の土製品。片面には糸切り痕の上から粘土を薄く帶状に接合している。両面とも離れ砂が厚く付着している。道具瓦の一種として掲載したが、詳細は不明である。508 は玉縁式丸瓦。凹面は、布目痕が付くが、玉縁の部分はヘラケズリを施す。凹面は、縄目タタキの後、ナデており、離れ砂が付着する。ただし、玉縁と胴部の接合部分付近は縄目タタキのままで、調整しない。509 は桶巻造りで凹面は部分的にヘラケズリ調整後、面取りを施す。凸面はヘラナデの後、端面の面取りを行っている。混入品である。

510 から 513 は平瓦である。いずれも、凹面には糸切り痕が明瞭に残り、離れ砂の付着



第 159 図 8-3 区 200- 土坑 出土遺物 (その 1)

も顯著である。狭端面には面取りが施される。凸面も凹面と同様に、糸切り痕が明瞭に残り、離れ砂が付着している。縄目タタキを施しているが、糸切り痕が消失するほど丁寧には施していない。



第 160 図 8-3 区 200- 土坑 出土遺物 (その 2)

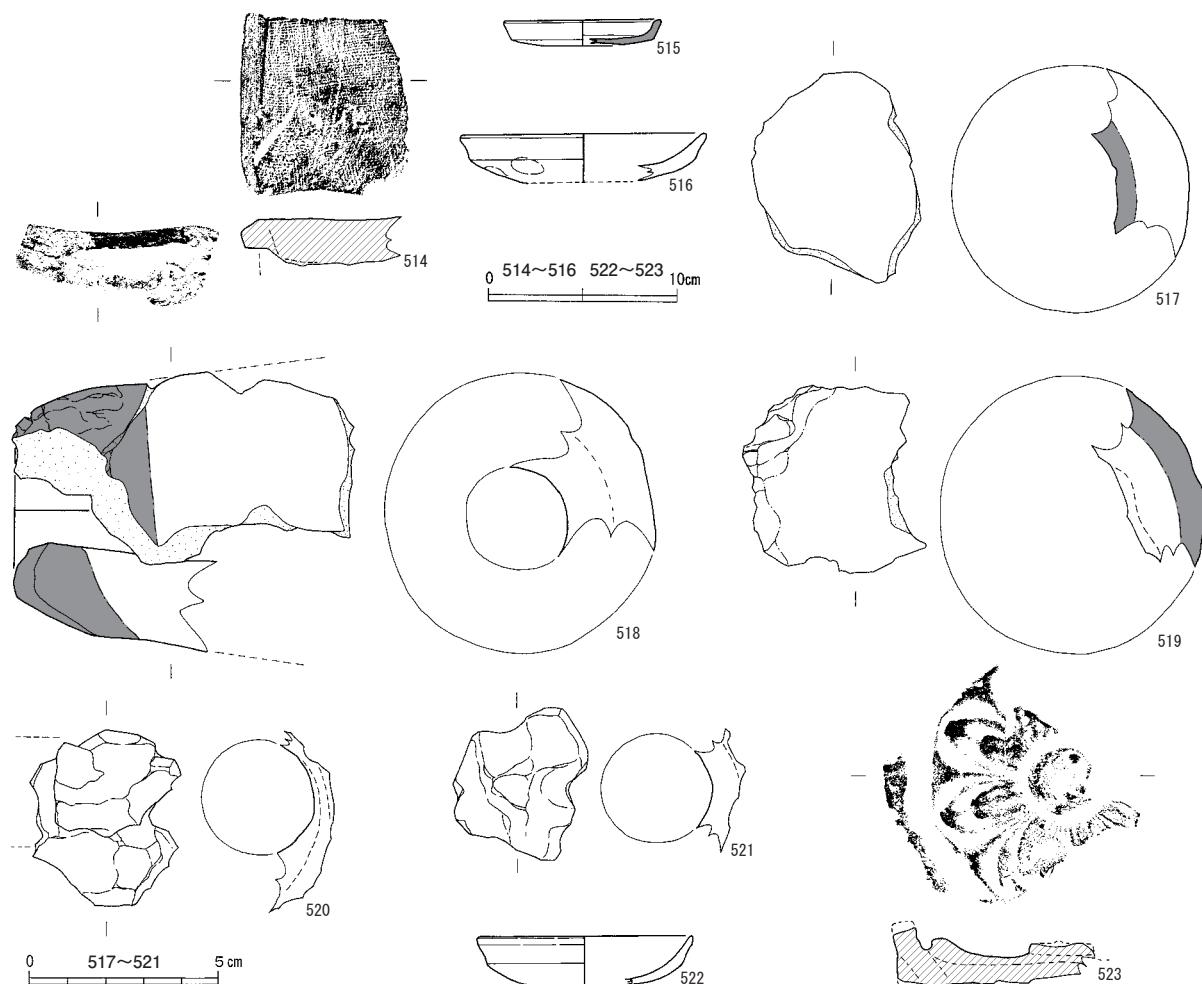
201- 土坑（第 158 図、第 161 図、写真図版 48） 200- 土坑の南側で検出した。長径約 3.8 m、短径約 2.4 m、深さ約 0.1 ~ 0.2 m の橢円形の土坑である。200- 土坑より一回り小さい。

軒平瓦 1 点、平瓦 50 点以上、丸瓦 8 点、土師器 40 点、瓦器 9 点、羽口 19 点、滓 3 点が出土した。514 から 523 の 9 点を図化した。514 は軒平瓦である。上端面が面取された外縁部のみが残存している。凹面には布目痕がみられる。515 は瓦器の小皿である。517 から 521 は羽口である。被熱の著しい範囲には、トーンをかけている。518 は、先端部まで残存する唯一の例である。先端部は被熱し、赤化が著しい。胎土には植物の纖維や糞が含まれており、やや粗い。

#### 瓦溜り

199- 瓦溜り（第 158 図、第 161 図、写真図版 48） 貴志川町教育委員会が設定した試掘トレンチにて確認された瓦溜りの南側の延長部分に相当する。瓦が出土するのは東西約 4.5 m、南北 1.5 m の範囲である。東西に整然と瓦が並んでいるが、これは、貴志川町教育委員会の試掘トレンチの掘削範囲を反映している点に注意が必要である。

軒平瓦 1 点、平瓦 600 点以上、丸瓦 200 点以上、須恵器 3 点、土師器 9 点、鉄器 1 点、が出土した。既に貴志川町教育委員会が報告している遺物と内容がほぼ同じであったため、



第 161 図 8-3 区 201- 土坑、包含層 出土遺物

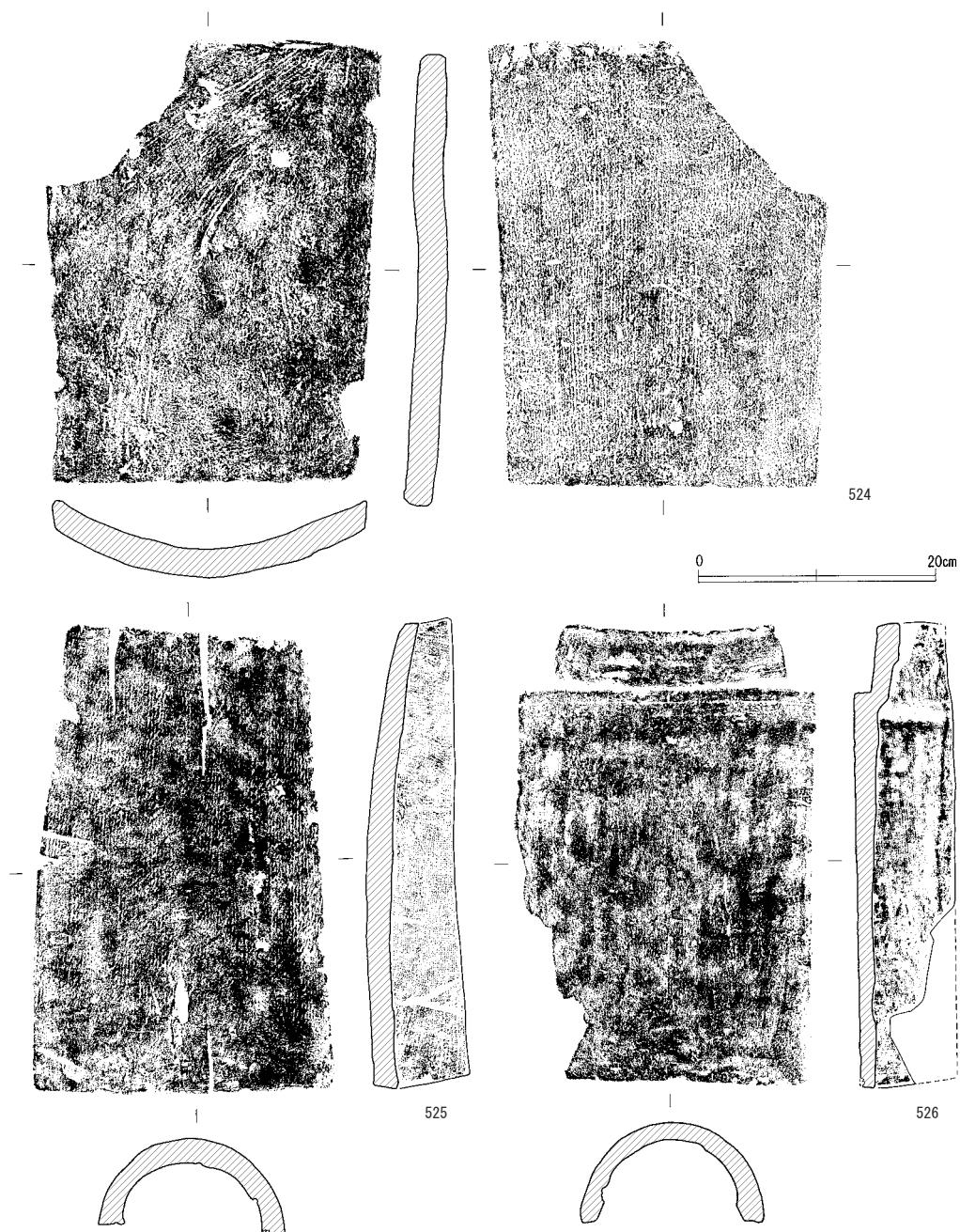


第 162 図 8-3 区 199- 土坑

図化は最小限にとどめた。524 から 526 の 3 点を図示した。524 は一枚造りの平瓦で、凹面の糸切り痕と布目痕があり、凸面には整然と縄目タタキを施している。525 は行基式の丸瓦で、凸面は縄目タタキを施している。胎土は、青灰色の素地に白色の粘土が筋状に混在している。526 は玉縁式の丸瓦である。

#### 包含層（第 161 図）

包含層出土遺物のうち、522 と 523 の 2 点を図示した。522 は土師器の皿、523 は軒丸瓦である。粘土の継目が良く残っている。範の中房に粘土を詰めた後、内区全体に薄く粘土を詰める。内区の裏側に厚く粘土を貼付け、外縁部を形成する粘土を巻きつけている。



第 163 図 8-3 区 199- 土坑 出土遺物

## 第13節 8-4区（第164図から第184図、写真図版28、29、49）

### 調査区の概要

A2、B2区画、保存範囲の西側に隣接する調査区である。調査前の現況は水田である。方形に逆L字形の突出部が付属するような特異な調査区の形状は、地元要望により、10月まで里道およびこれに付設された水路を保全する必要があったためである。調査区内には、貴志川町教育委員会と紀の川市教育委員会の設定した試掘トレンチが1ヶ所ずつ存在する。

調査区の西半部では、現代の耕作土及び床土下に瓦器、古代瓦片を含む遺物包含層があり、包含層を除去すると、地山である砂質シルト層となるが、東半部の207-溝とした広い落込みの部分とその周辺では、包含層下にもう一層、瓦器や瓦を包含する黒色系の砂質シルト層があり、その下で地山である砂質シルト層が検出される。遺構は、地山面だけでなく、黒色系の砂質シルト層上でも検出された。そこで、この面で一度、遺構検出・掘削作業を行い、遺構の記録作業を行った（第164図）。この面では、南側で浅い小溝、鋤溝、北側で性格不明の深い土坑が検出されたのみで、遺物もほとんど検出されなかった。その後、調査区全体で地山面を検出面として遺構検出作業を行った。

保存範囲に接するようにして、西へ約6～8度傾斜しつつ南北方向に盛土跡が走り、盛土に接するように207-溝が存在する。墓とみられる土坑や、溝を多量に出土する土坑などが検出された。建物跡は、確認できなかった。

### 土坑

**203-土坑（第165図、第170図、写真図版49）** 調査区北西端で検出した。不整形な土坑である。

6-2区126-土坑の北に接している土坑の延長部分に該当する。

平瓦1点が出土した。544である。糸切り痕の上に布目痕がのる。凸面はナデで調整している。凸面にヘラ描きの格子文が観察されるが、その性格は不明である。

**204-土坑（第165図、第170図）** 調査区北西端で検出した。不整形な土坑である。6-2区126-土坑の延長部分に該当する。6-2区側に比べて遺物の出土量は少ない。

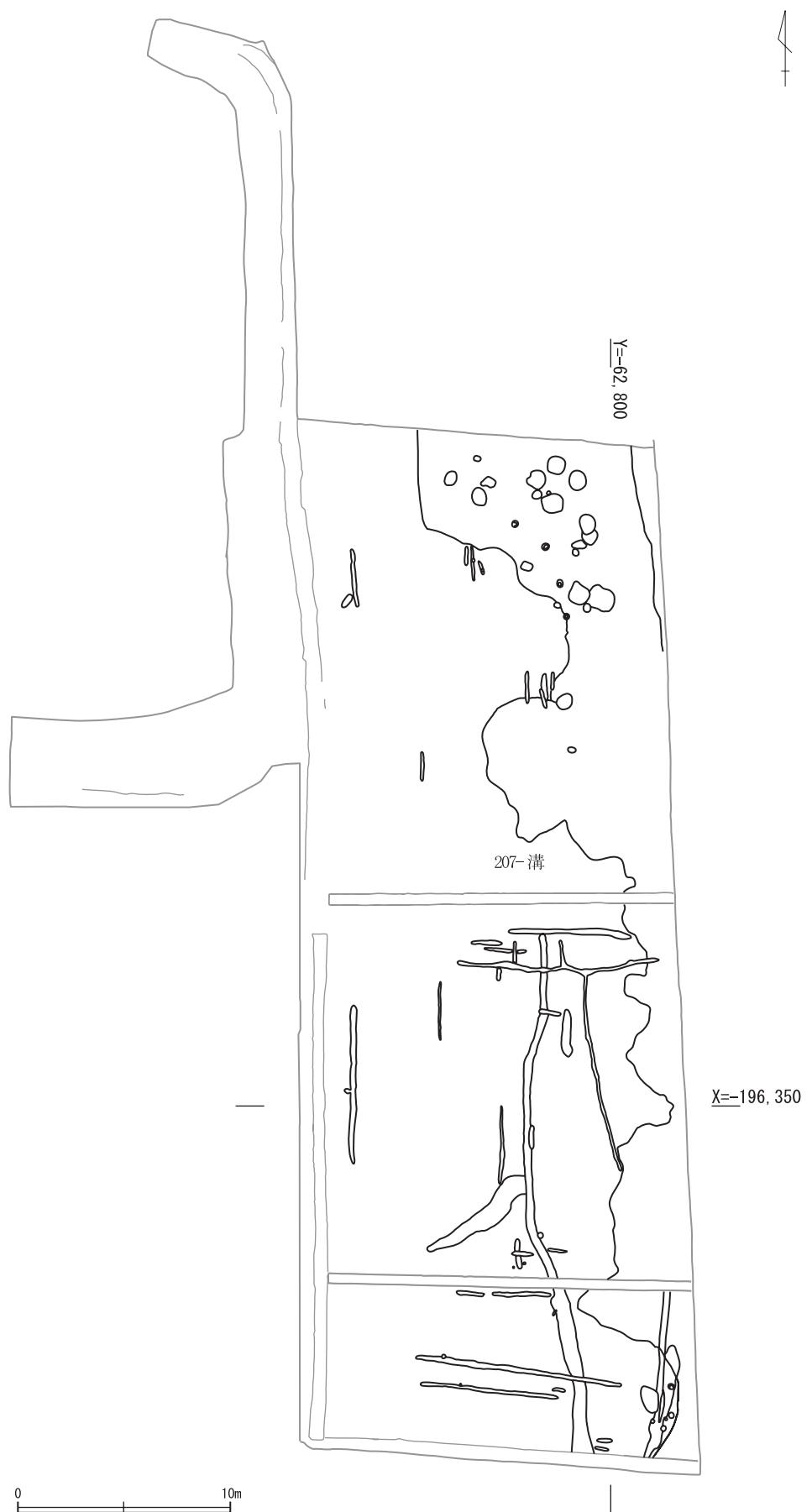
平瓦2点、丸瓦1点、須恵器7点、土師器34点が出土した。このうち、545の須恵器1点を図示した。

**205-土坑（第165図、第170図）** 調査区北西端で検出した。直径約3.6mの土坑である。南半分は削平により失われており、正確な規模は明らかでない。

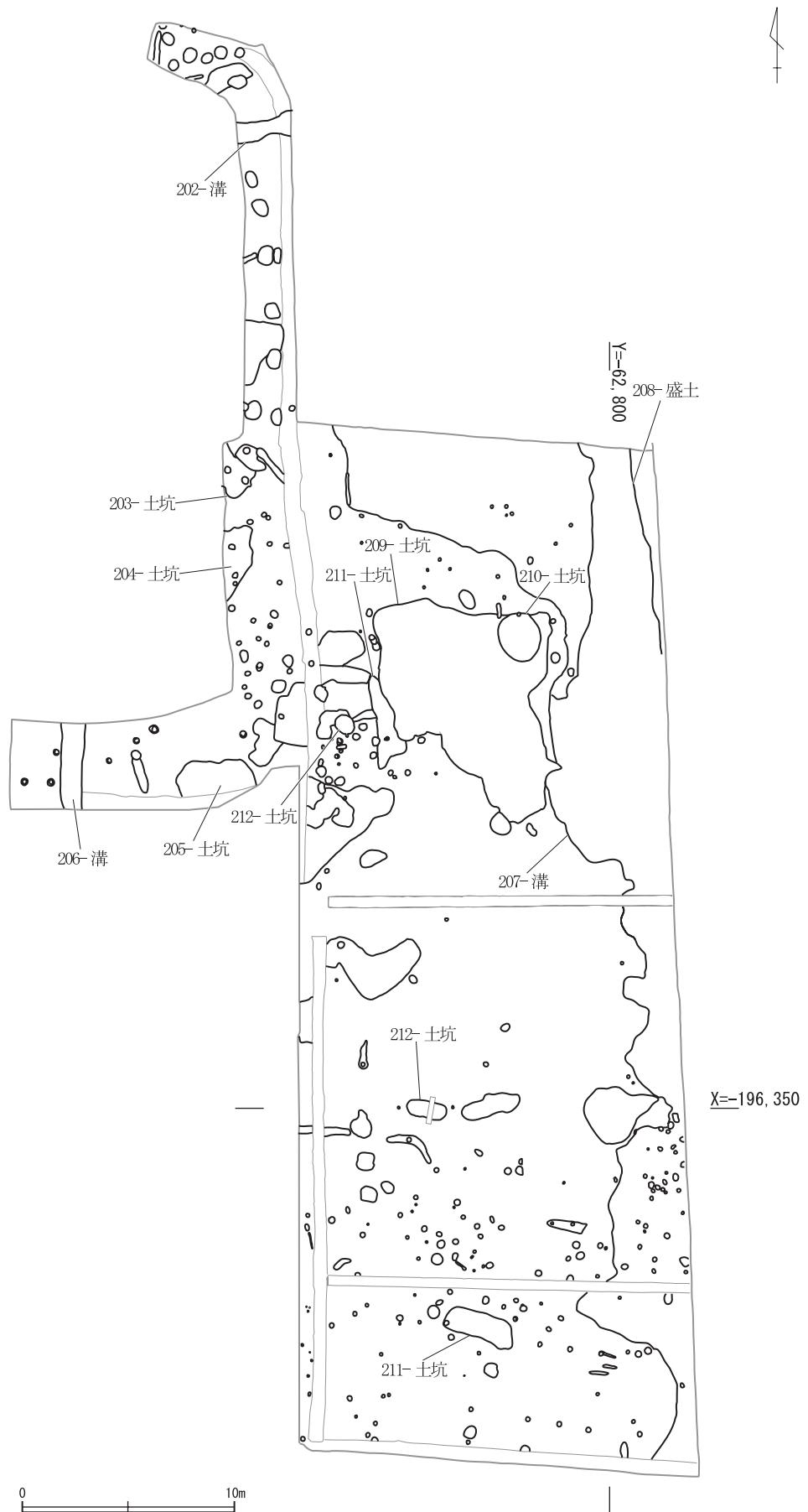
平瓦5点、丸瓦1点、須恵器24点、土師器11点が出土した。このうち、546の須恵器坏身1点を図示した。

**209-土坑（第166図、第167図、第168図、写真図版28）** 調査区北側で検出した。直径約2mの土坑である。210-土坑を切るように構築されている。覆土中層から炉壁、軒丸瓦等がまとめて出土した。

軒丸瓦5点、平瓦78点、丸瓦13点、須恵器15点、土師器15点、炉壁3点、溝52点が出土した。このうち、527から531の5点を図示した。527は、軒丸瓦である。右上の

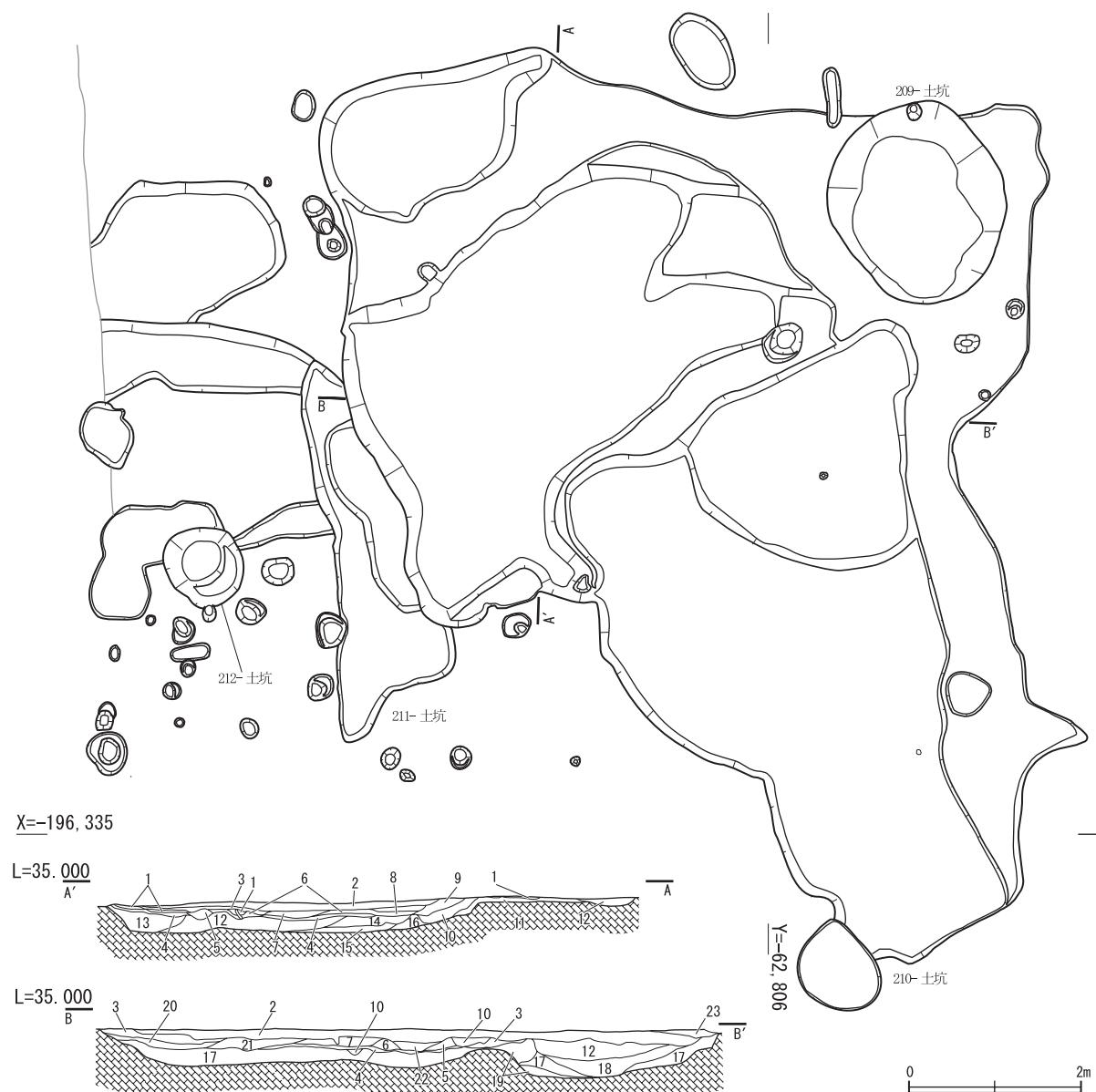


第 164 図 8-4 区 遺構（黒色土除去後）全体図



第165図 8-4区 遺構全体図

花弁には、范傷と思しき凹凸がみられる。528は須恵器、529は土師器と焼成は異なるが、いずれも底面をヘラケズリで仕上げ、口縁部端を水平につまみ出す。2点とも、口縁部内面



- |  |  |                                     |              |
|--|--|-------------------------------------|--------------|
| 1 : 10YR 5/8 黄褐色                         | 砂混じりシルト                                      | 14 : 10YR 5/8 黄褐色                   | 砂混じりシルト      |
| 2 : 10YR 5/8 黄褐色                         | シルト (炭化物を少量含む)                               | 15 : 10YR 5/8 黄褐色                   | 砂混じりシルト      |
| 3 : 10YR 5/8 黄褐色                         | シルト (炭化物を含む)                                 | 16 : 10YR 5/8 黄褐色                   | シルト (炉壁塊を含む) |
| 4 : 炭化物層                                 |  | 17 : 10YR 5/8 黄褐色                   | 砂混じりシルト      |
| 5 : 炉壁塊                                  |  | 18 : 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色               | 砂混じりシルト      |
| 6 : 10YR 5/8 黄褐色                         | 砂混じりシルト                                      | (10YR 5/8 黄褐色 砂混じりシルト を含む)          |              |
| (炭化物を多量に含む)                              |  | 19 : 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色               | シルト          |
| 7 : 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色                     | 砂混じりシルト                                      | (10YR 5/8 黄褐色シルトを含む)                |              |
| (炭化物を多量に、10YR 5/8 黄褐色 砂混じりシルト を含む)       |  | 20 : 10YR 5/8 黄褐色                   | 砂混じりシルト      |
| 8 : 10YR 5/8 黄褐色砂混じり シルト                 |  | (炉壁塊少量、炭化物を多量に含む)                   |              |
| (炉壁塊、炭化物を少量含む)                           |  | 21 : 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色               | 砂混じりシルト      |
| 9 : 10YR 5/8 黄褐色                         | 砂混じりシルト                                      | (炉壁塊、炭化物を少量、10YR 5/8 黄褐色シルト を多量に含む) |              |
| (2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 砂混じりシルト を多量に、炉壁塊を少量含む) |  | 22 : 10YR 5/8 黄褐色                   | 砂混じりシルト      |
| 10 : 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色                    | 砂混じりシルト (炭化物を少量、10YR 5/8 黄褐色 砂混じりシルト を多量に含む) | (炉壁塊を多量に含む)                         |              |
| 11 : 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色                    | シルト  | 23 : 10YR 4/6 褐色                    | シルト          |
| 12 : 10YR 5/8 黄褐色                        | 砂混じりシルト                                      | (2.5Y 6/2 灰黄色シルトを多量に含む)             |              |
| (2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 シルト を多量に含む)            |  |                                     |              |
| 13 : 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色                    | シルト  |                                     |              |
| (炭化物を少量、10YR 5/8 黄褐色 シルト を多量に含む)         |  |                                     |              |

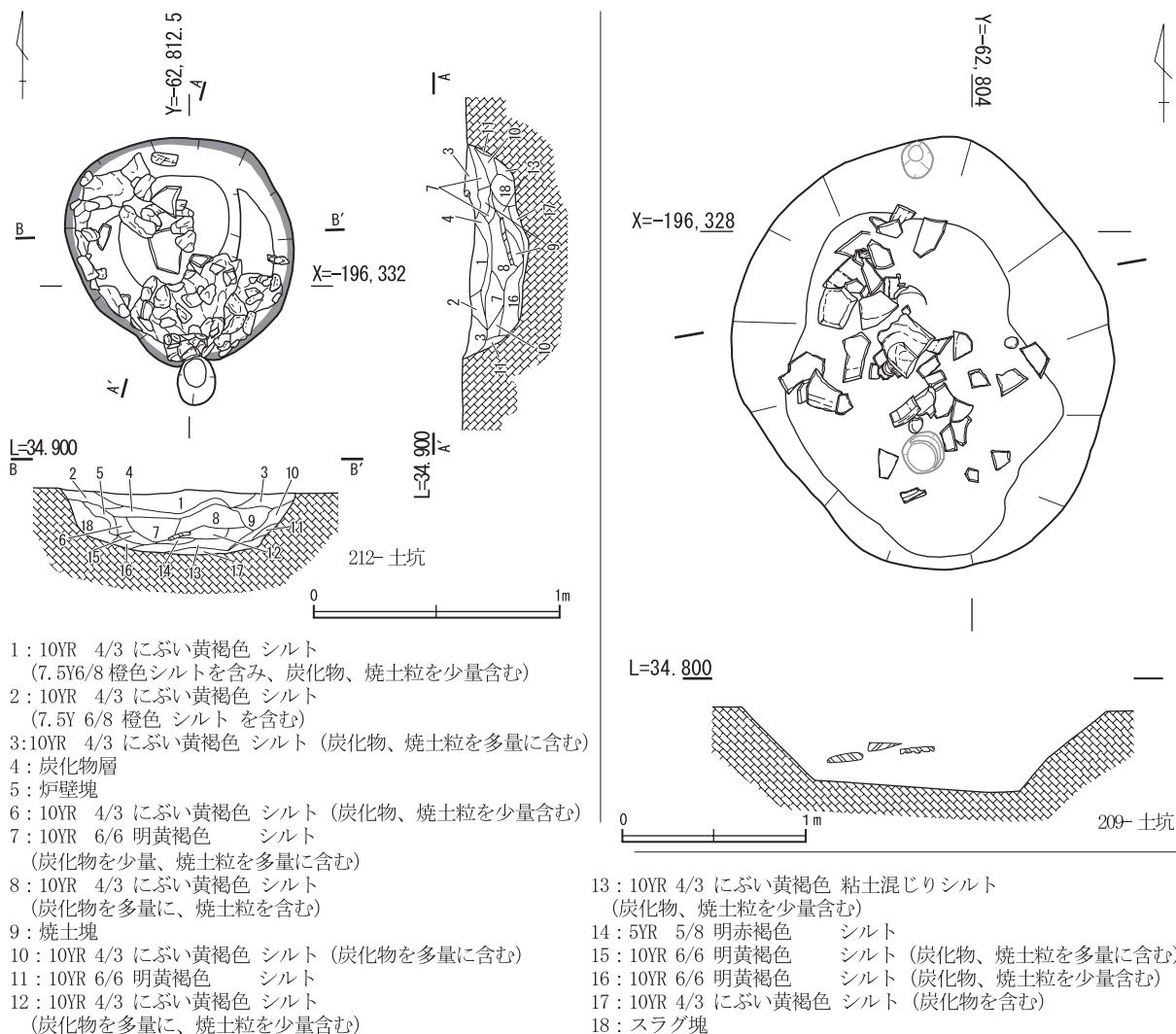
第 166 図 8-4 区 210- 土坑と周辺の遺構

には、黒色の樹脂が付着する。似た形態の土器は、土師質の7-4区163-土坑出土の373や須恵質の164-溝出土の375など、土師器、須恵器とともに調査区内から散発的に出土している。これらの大半には、口縁部や内面に黒色の樹脂が付着している。350は高台付の須恵器坏身、531は須恵器の鉢である。

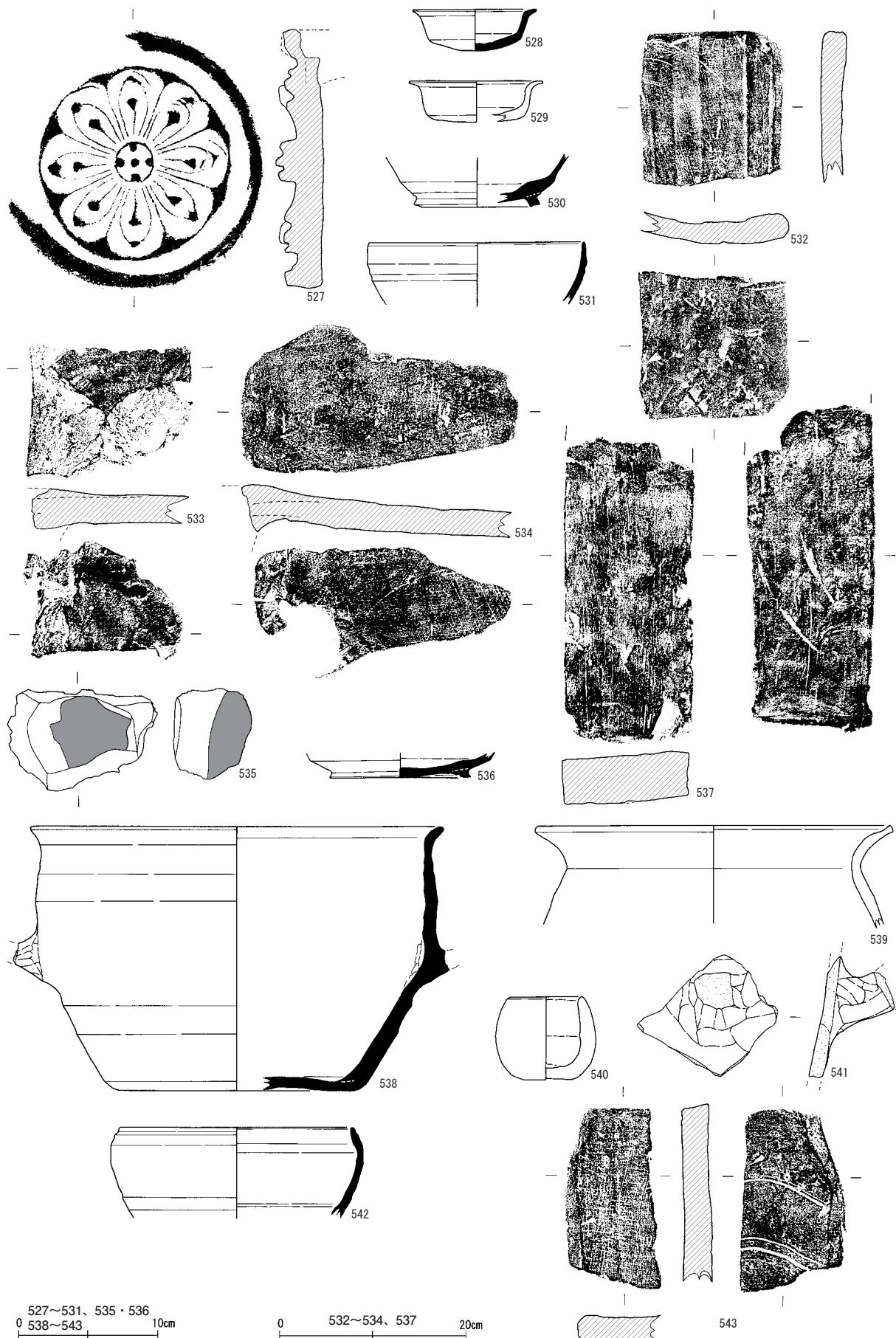
**210- 土坑（第166図、第168図、写真13）** 調査区北側で検出した。最大幅約12mの大形の土坑である。209-土坑に切られている。

当初は大形で不整形な一つの土坑と認識して掘削した。しかし、断面土層をみると、炭化物や炉壁を含む土が切り合いを持ちながら層状に堆積していることから、近接した位置で掘削と炭化物や炉壁による埋め戻しが繰り返し行われた結果、一つの土坑状になった遺構と判断した。底部が不定形の凹凸の連続になっていること、埋土が細分可能で、かつ各層位の土質が上層、下層とも一定しないのも、こうした掘削と埋め戻しの繰り返しの反映であろう。

道具瓦1点、平瓦100点以上、丸瓦42点、須恵器43点、土師器49点、石器1点、炉壁50点以上、滓1点が出土した。このうち、532から541の10点を図示した。209は桶巻造りの平瓦で、凸面は格子タタキの後、ナデで仕上げている。角を丸く切り落とし、端面



第167図 8-4区 209、212-土坑



第 168 図 8-4 区 209、210、211、212- 土坑 出土遺物

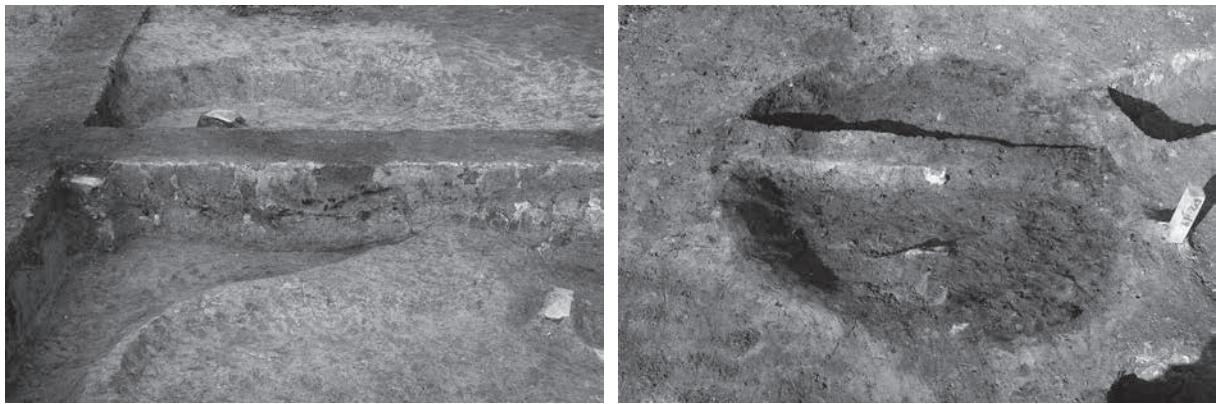


写真 13 8-4 区 210- 土坑断面土層と 212- 土坑検出状況

には面取りを施している。533、534 は軒丸瓦の丸瓦部である。遺存状態は余り良くないが、粘土の接合痕が観察可能である。瓦当面は失われているが、丸瓦部の先端をやや薄くして瓦当部と合わせ、凸面に少量、凹面に多量の粘土を貼込んで接合している。

535 は緩く焼きしまった粘土塊である。トーンで示した部分の表面には砂が付着し、被熱の度合いがやや強い。鋳型の一部であろうか。

536 は須恵器の高台付坏身である。357 は磚と判断した土師質焼成の土製品である。全面をヘラケズリで調整している。熨斗瓦の可能性もあるが、やや厚手のため、磚と判断した。538 は須恵器である。底部は、ナデ調整で仕上げた平底である。胴部の張りは緩やかで、胴部中央で最大径に達したのち、ほぼ垂直に立ち上がる。胴部ほぼ中央には、大きく欠損しているが、把手が取り付けられている。口縁部は大きく外反する。形態的には鍋だが、スヌ等の付着や 2 次焼成痕は認められない。ただし、底部内外面は、摩耗が著しく、平滑になるなど、使用痕が顕著に残る。

539 は土師器の甕である。540 は手づくね土器である。内外面とも、ナデで仕上げている。541 は土師器の把手である。

図示した遺物以外に大形の砥石と思しき石器を提示する。926 は長さ約 50cm、幅約 30cm、高さ約 30cm、赤褐色の石英質の強い片岩である。中央の平坦な部分は平滑になつておらず、置き砥石として使用されたのかもしれない。

**211- 土坑（第 166 図、第 168 図）** 調査区北側で検出した。最大長約 4.4 m の細長い土坑である。210- 土坑に切られている。212- 土坑から延びる溝状の遺構が取り付いており、これを切るように構築されている。覆土は、炭化物や炉壁を含む土層が薄く層状に切り合ひながら堆積している。210- 土坑に比べて、切り合ひはさらに細かい。

道具瓦 1 点、平瓦 17 点、丸瓦 3 点、須恵器 3 点、土師器 4 点、石器点、炉壁 8 点以上、滓 1 点が出土した。543 の 1 点を図示した。桶巻造りで凸面をナデで仕上げた瓦である。角を切り落とし、端部はヘラで面取りを施している。

**212- 土坑（第 166 図、第 167 図、第 168 図、写真 14、写真図版 28）** 調査区北側で検出した。210- 土坑の西側に位置する。直径約 0.9 m の円形の土坑に、長径約 0.2 m の楕円形の小穴が取り付いている。

覆土は、主として炭化物や焼土を多量に含んだ黄褐色系のシルトからなる。土坑底部よりわずかに高い位置から、塊状の滓が、楕円形の小穴から土坑中央付近までを中心に、放射状に広がっている状態で検出された。桶巻造りで凸面をナデで仕上げる平瓦片が滓に巻き込まれた状態で出土している。土坑側壁は、第167図にてトーンで示した範囲が著しい熱を受け、赤く変色している。底面には被熱痕が確認できなかった。土坑内の焼土や炭化物、滓は、形状を保つため、覆土ごと取り上げ、洗浄を行った。

平瓦50点以上、丸瓦7点、須恵器15点、滓、炉壁および炭化物約7kgが出土した。焼土塊は、表面の観察から認識していたよりも焼結が甘く、洗浄中に水に溶けだし、形状を維持できなくなってしまった。土坑底部付近から出土した塊状の滓も、取り上げ時は形状を保っていたが、乾燥するにしたがって破損が進行し、洗浄中に細かく断片化してしまった。一部は接合できたが、全体の形状を復元することは、できなかった。

1点を図示した。542は須恵器の鉢の口縁部である。2次焼成は受けていない。写真14に滓の一部を提示している。いずれも表面はガラス化が著しく、黒から暗赤色になっている。ガラス化した表面が発泡している部分もある。ガラス化した面の裏側には、イネ科植物の纖維痕が明瞭に残っている。大きさに比してごく軽く、磁着しない。緑青と思しき緑灰色の粒子が表面に散発的に付着している。

**213- 土坑（第169図、第170図、写真15、写真図版28）** 調査区南で検出した。長径約1.9m、短径約0.7m、深さ約0.3mの楕円形の土坑である。

土坑中央部付近の側壁には、底面の平石と側壁との間に押し込むように、小形の結晶片岩を立て並べている。側壁と石との間には裏込め土が観察され、石が垂直に整然と立つよう構築されている。

底面には結晶片岩の大形の平石を2枚敷き、周囲に小形の結晶片岩の平石を配している。石の敷かれていらない土坑両端には、細かく碎かれた炭が中央の平石の上面と同じ高さまで敷き詰められている。炭は、石敷きの上面にも部分的にだが薄く載せられている。最終的には、石敷きを全て取り外して下部構造を探索したが、遺構等は見出せなかった。

非常に丁寧に構築された土坑だが、遺物の出土数は少なく、覆土から平瓦2点、土師器4点、

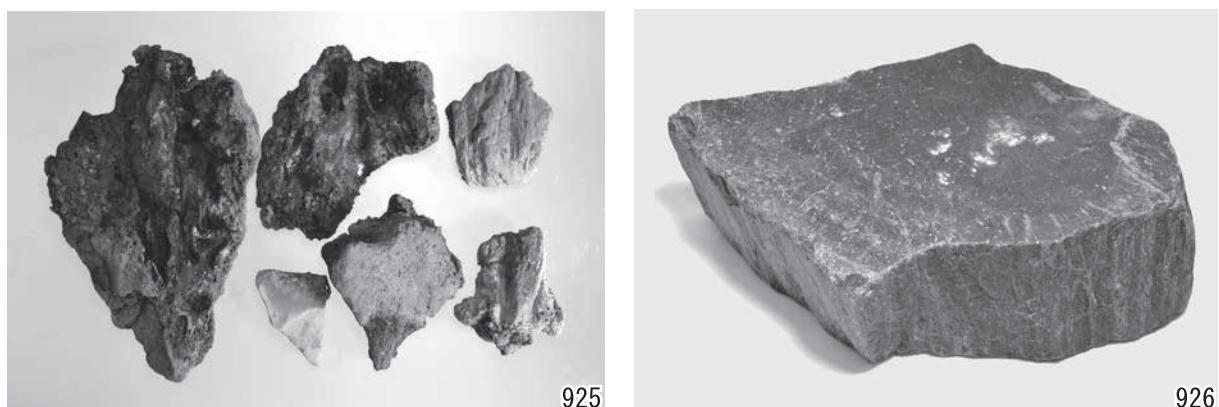
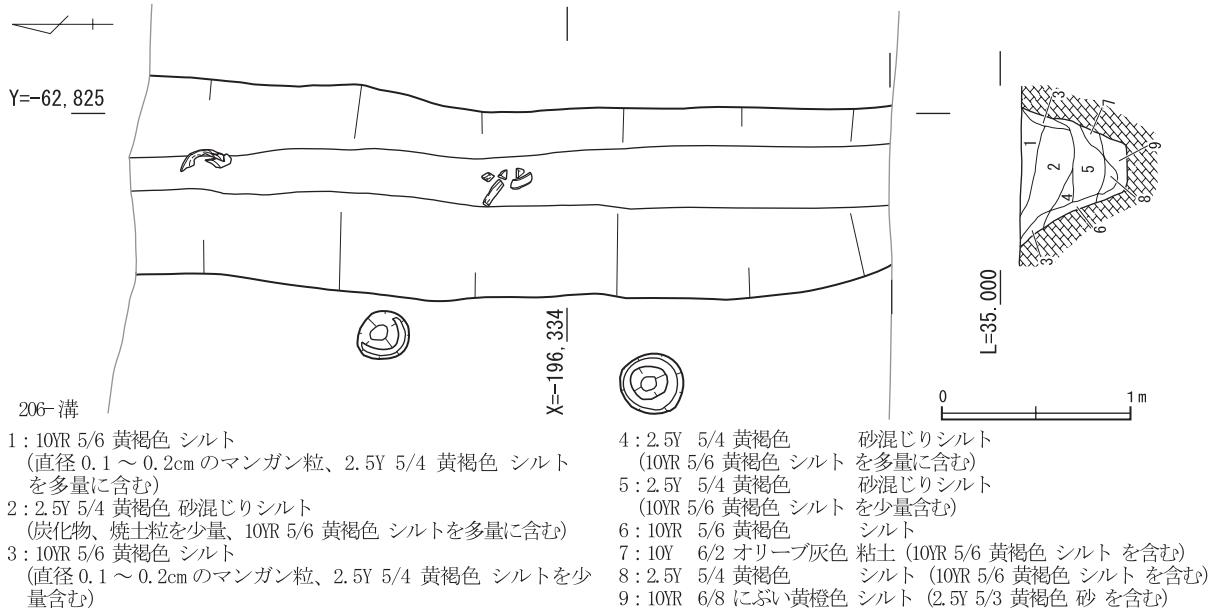
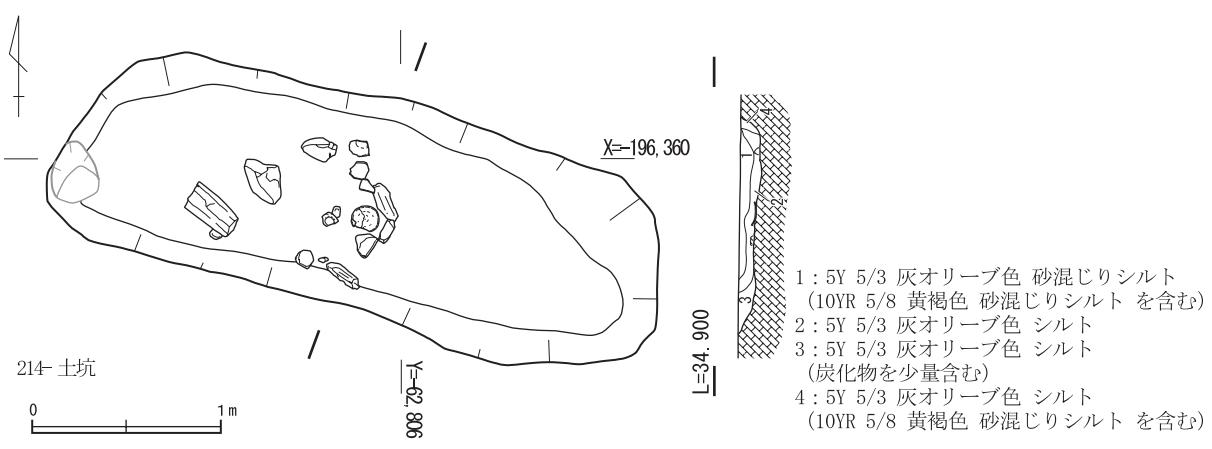
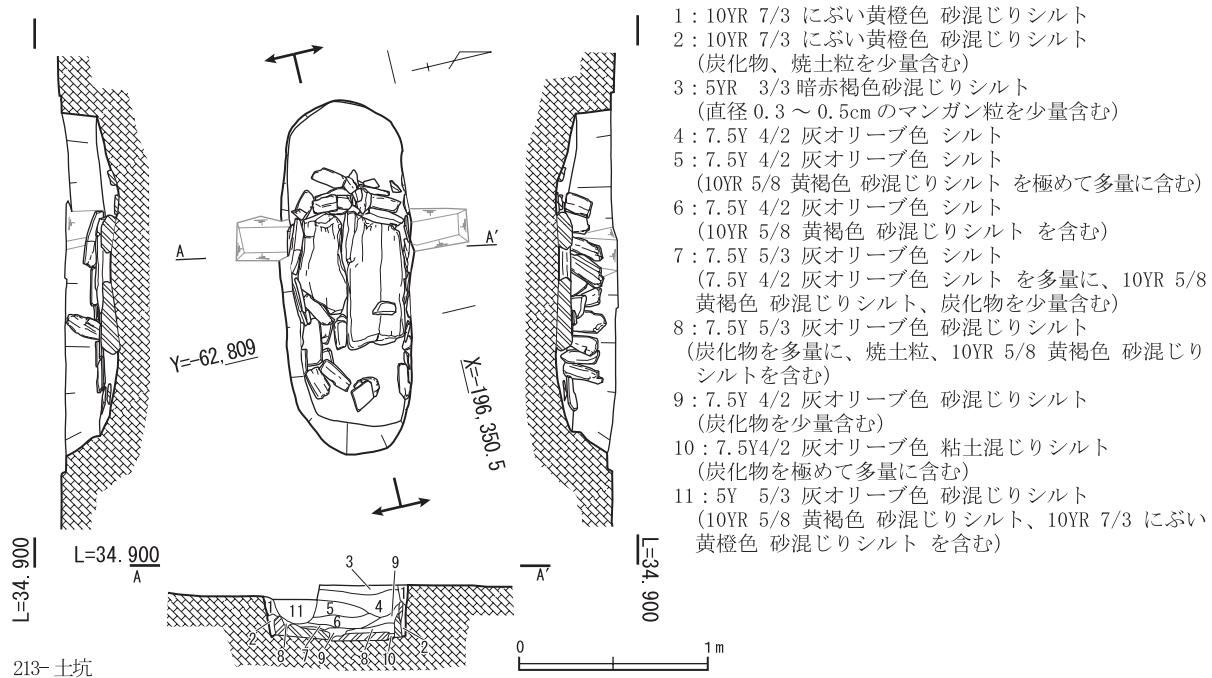


写真14 8-4区 212-土坑、210-土坑 出土遺物



第 169 図 8-4 区 213、214-土坑、206-溝

瓦器 1 点が出土したにとどまる。断面土層図の 8 層、10 層にあたる炭層の掘削に際しては、骨片および微細遺物の存在に留意し、慎重に作業を進めたが、該当する遺物は見出せなかつた。

547 と 548 の 2 点を図示した。547 は混入品とみられる土師器の把手である。548 は瓦器の底部である。ハの字形の貼付け高台を有し、見込みには図示していないが、ジグザグの暗文を描いている。

本遺構は、貴志川町教育委員会が第 3 トレンチ 3-SX 中世墓とした遺構と同一とみられる。貴志川町教育委員会の調査の際は、土坑西端の底面よりかなり浮いた位置で、ほぼ完形の高台付の瓦器碗が、西北隅の底面直上から横倒しになった丸瓦が出土している。

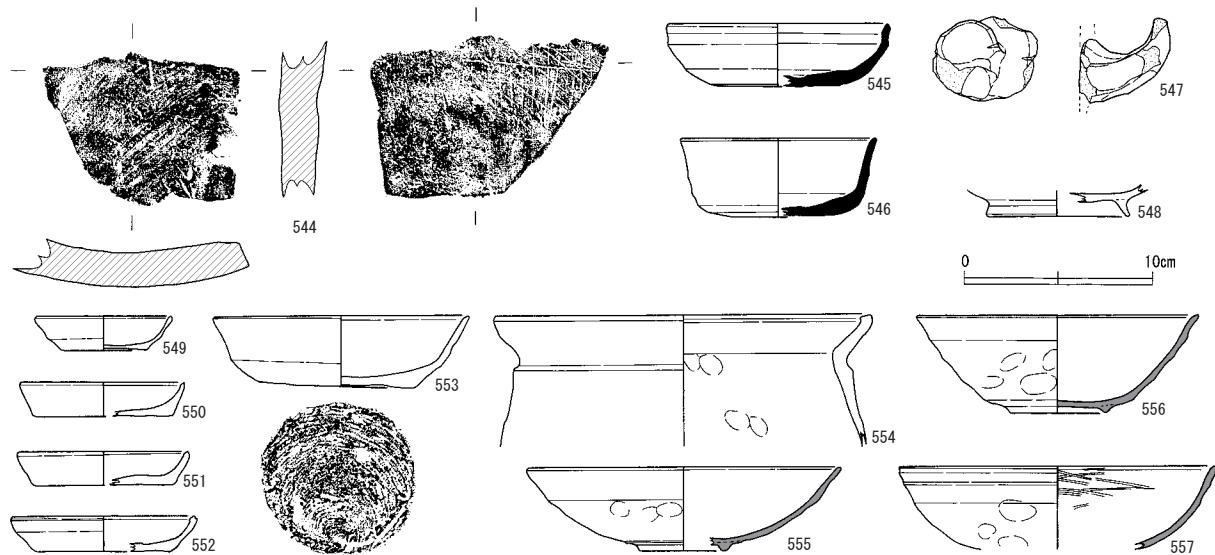
**214- 土坑（第 169 図、第 170 図、写真図版 28、写真図版 49）** 調査区南で検出した。西端を小穴が切っている。長径約 3.2 m、短径約 1.2 m、深さ約 0.1 m の楕円形の土坑である。床面直上から土器、礫塊が半円形に並んだ状態で出土した。土坑墓の可能性もなくはないが、断定することは難しい。

平瓦 24 点、丸瓦 7 点、土師器 100 点以上、瓦器 100 点以上、石器 1 点が出土した。このうち、549 から 557 の 9 点を図示した。549 から 552 は、土師器の小皿である。550 の胎土は、赤橙色の素地に灰白色の粘土が筋状に混在したものである。553 は土師器の皿である。底部は回転糸切り痕を残す。550 と同じ胎土で製作されている。554 は土師器の鍋である。

556 から 557 は瓦器の碗である。いずれも、焼成は不良で、脆く、表面の炭素吸着も不均一である。底部の残存している 555 と 556 には、ほぼ痕跡的になった貼付け高台が観察される。

## 溝

**202- 溝（第 165 図、第 171 図）** 調査区の北へ突出した部分で検出した。東西方向の溝で、



第 170 図 8-4 区 203、204、205、213、214- 土坑 出土遺物



写真 15 8-4 区 213- 土坑

6-2 区 119- 溝、7-4 区 168- 溝と同一遺構である。現代の小溝等に切られており、遺存状態はよくない。

平瓦 22 点、土師器 1 点が出土した。558 から 560 の 3 点を図示した。いずれも、一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。凸面の端部には、連続的な指頭圧痕が見られる。

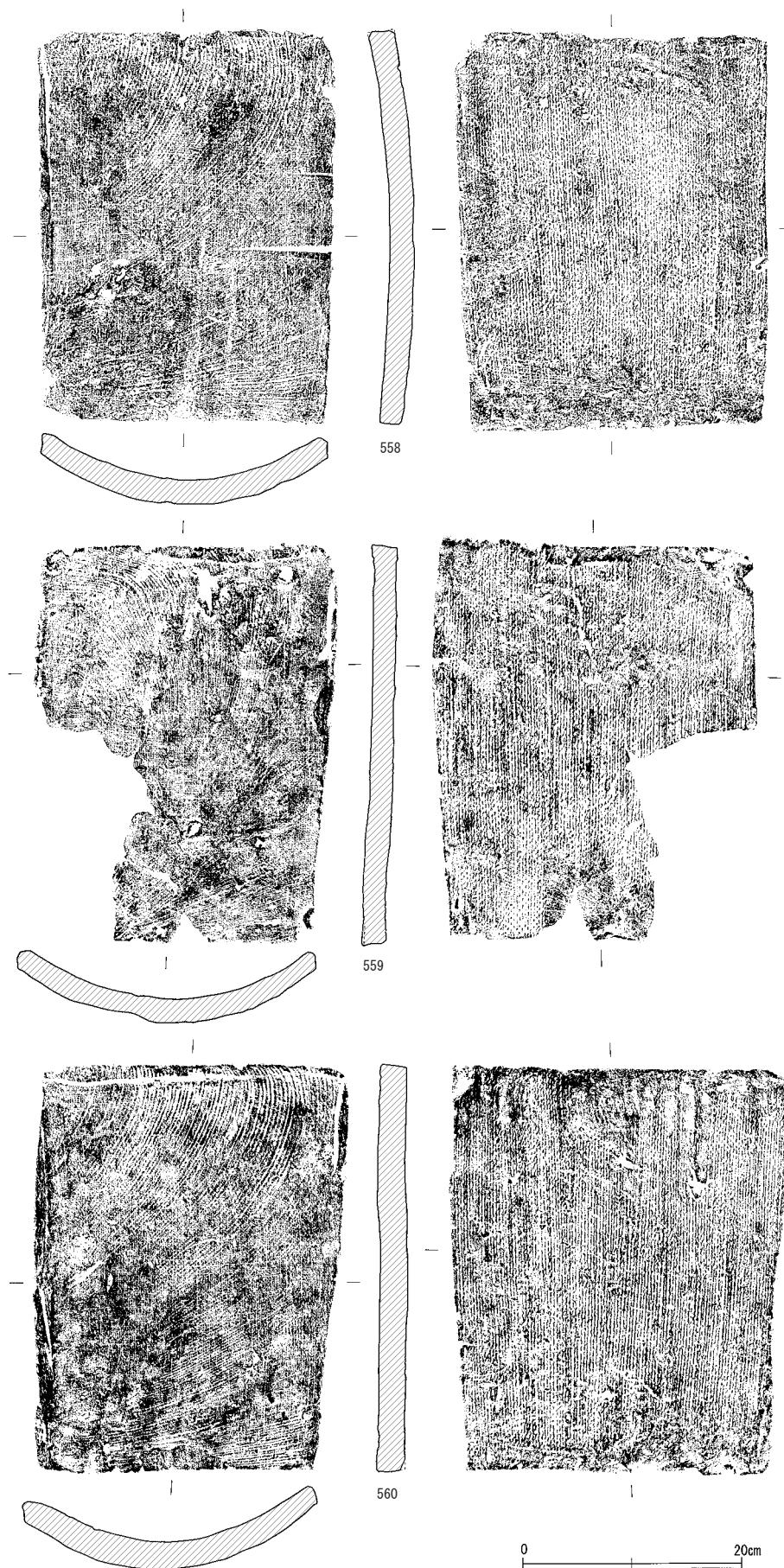
**206- 溝（第 169 図、第 172 図、第 173 図、写真図版 49）** 調査区の西へ突出した部分で検出した。南北方向の溝で、6-2 区 127- 溝、8-5 区 218- 溝と同一遺構である。遺物は、断面土層図 1 から 5 層、特に 5 層中から多量に出土した。8 層までを上層として取上げ、9 層を下層、溝の底面直上の遺物として出土状況図を作成したのち取上げた。しかし、9 層出土遺物は僅少で、図示できたのは 577 の 1 点であった。

長さ 4 m 以下の範囲だったが、平瓦 1 点、丸瓦 3 点、須恵器 100 点以上、土師器 100 点以上、炉壁 17 点と多数の遺物が出土した。561 から 592 を図示した。須恵器の坏類は、身と蓋の区別の難しいもののが多かったが、おおよそ、口縁部が内傾または直立するものを身、外傾するものを蓋として図示した。

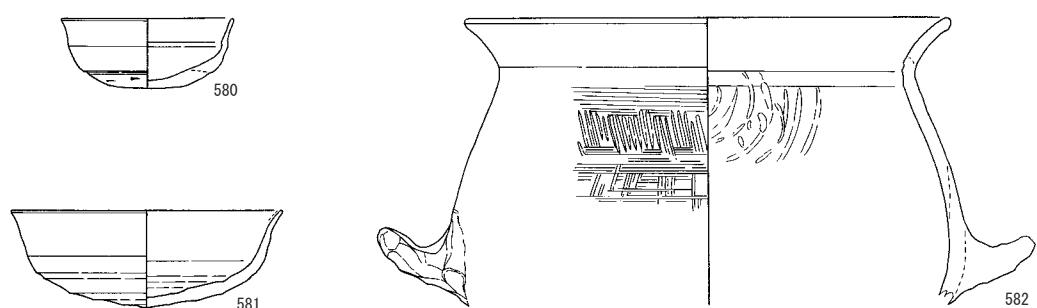
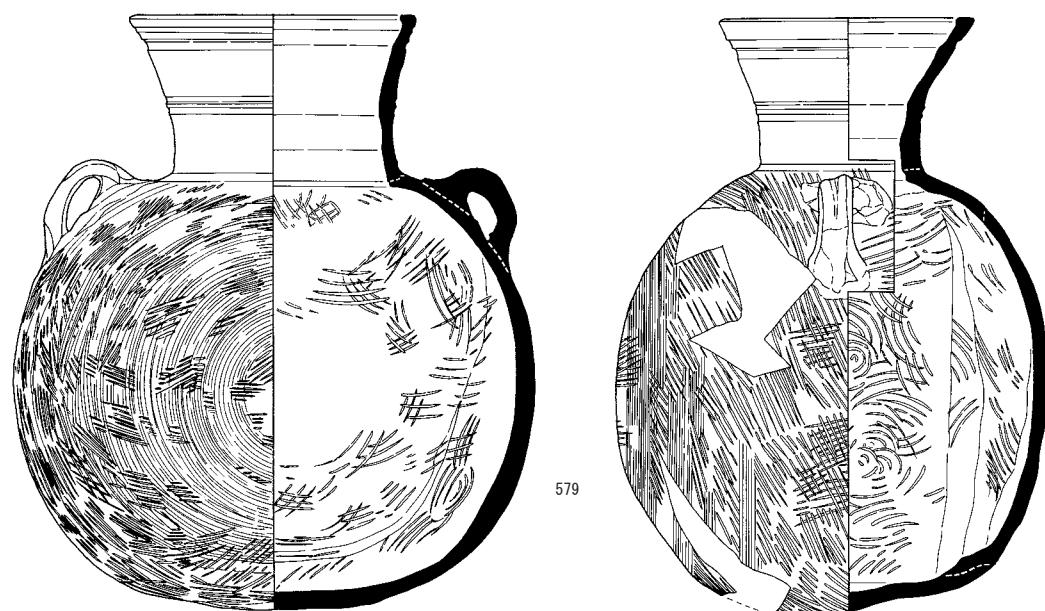
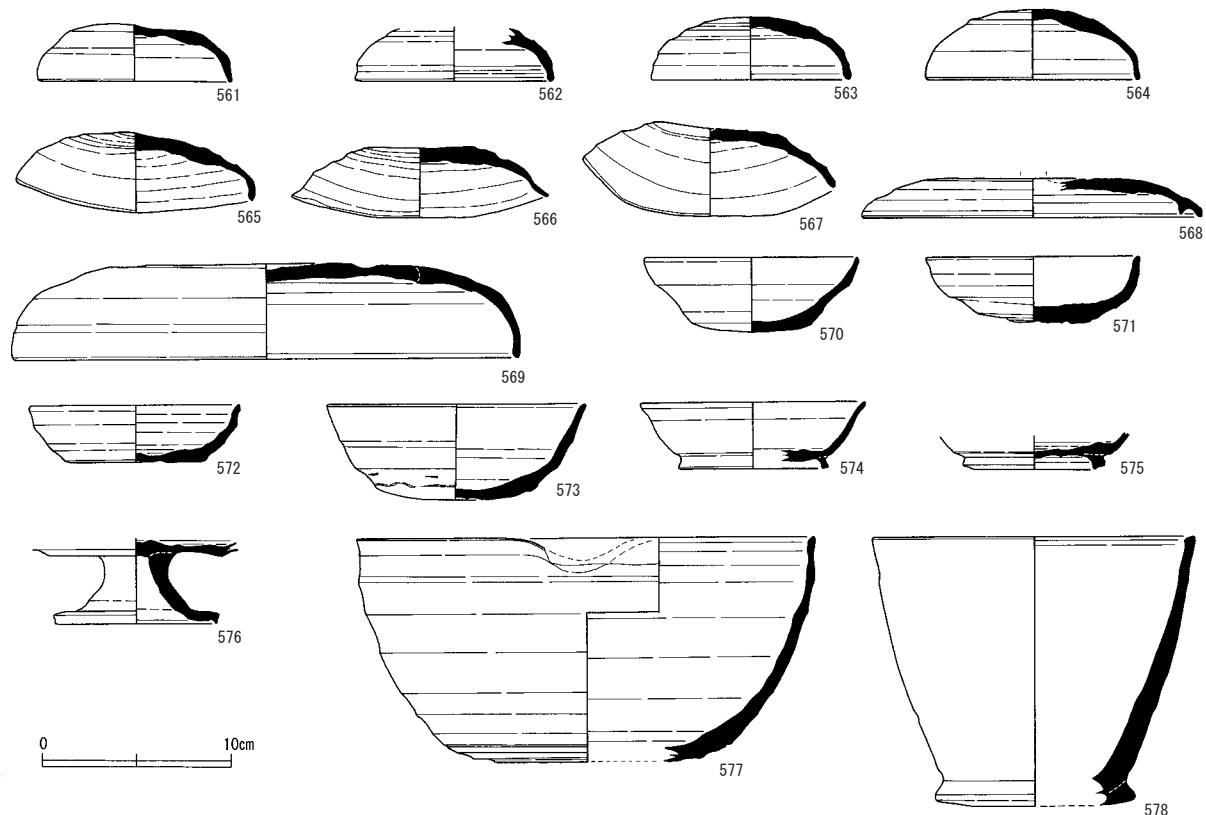
561 から 569 は須恵器の坏蓋である。562、568 は天井部分を回転ヘラケズリで調整しているが、他はヘラ切り離しのまま、未調整である。565 から 567 は焼成時に激しく焼け歪んでいる。歪んだ状態のまま、図示している。569 は大形の蓋である。天井部中央はヘラ切り離しの後、ナデ、天井部でも中央よりやや外側から肩にかけてはヘラケズリ調整を施している。口縁部は、ほぼまっすぐに伸び、端部は鋭く内径する。須恵器として図示したが、焼成は甘く、断面は黄灰色、表面は部分的に炭素を吸着しており、黒褐色になっている。

570 から 575 は須恵器の坏身である。570 から 572 は底面ヘラ切り離しのまま未調整である。573 はやや器高の高い坏である。底部は、ヘラケズリで仕上げているようだが、摩耗が著しく、詳細は不明である。574、575 は高台を持つ。

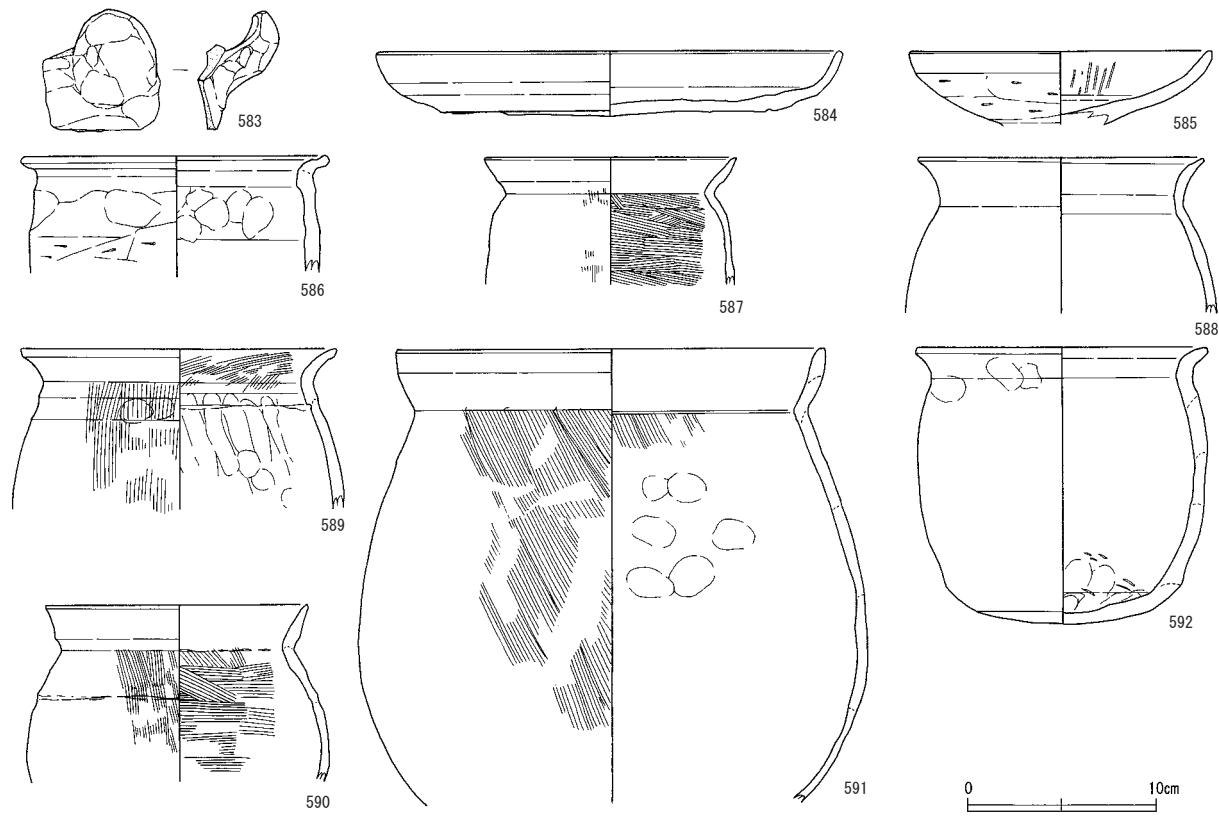
576 は高坏の脚部である。577 は、底面直上から出土した遺物のうち、図示できた唯一の遺物で、欠損が著しいが片口の鉢である。胴部には回転ナデの稜線が明瞭に残り、薄手でシャープな造りである。焼成も良好で、表面は暗緑灰色である。579 は、提瓶である。細片になって出土したが、ほぼ完形まで復元された。胴部外面は整然と平行タタキを施したのち、



第171図 8-4区 202-溝 出土遺物



第172図 8-4区 206-溝 出土遺物 (その1)



第173図 8-4区 206-溝 出土遺物（その2）

片面には、カキ目を施す。内面は、ほぼ全面に同心円の当て具痕が残されている。口縁部には、回転ナデが施されている。全体として非常に丁寧な造りではあるが、破断面からは、粘土の貼合わせ痕が観察可能で、胴部の閉塞や口縁部と胴部の接合状態が判明する事例である。

580から582は、須恵器の技法を用いて製作されているが、赤橙色に焼成された土器である。通例の土師器に比べて緻密な胎土を持つ。色調も、土師器とは異なり鮮やかな赤橙色である。582は、把手付きの鍋である。外面は並行タタキののちカキメを施し、内面は同心円の当て具痕を残す。

583から592は土師器である。出土遺物には、大小の甕が目立ち、高坏等は数が少ない。その傾向は、図示する遺物にも反映されている。583は把手、584は盤である。585は高坏の坏部である。器表の荒れが激しく、調整は分かりづらいが、外面は、口縁部以外をヘラケズリで仕上げ、内面は丁寧にナデた後、粗く暗文を施している。586は外面を粗いヘラケズリ、内面を連続的なユビ押さえで仕上げた甕である。他の甕とは、調整だけでなく、胎土も異なり、緻密で色調は暗褐色、焼成不良で脆い。591は外面に整然と刷毛目を施し、内面には、口縁部直下にハケメ、それ以下にはナデとユビ押さえを施している。口縁部内面には、薄く炭化物が付着している。592は小形の甕で、2次焼成を受けており、器壁の荒れが激しい。

207-溝（第174図から第184図、写真16、写真図版29、写真図版49） 調査区の東端付近、盛土跡とほぼ並行しており、幅は、1m程度から3m以上と一定しない。覆土は大きく2層

に分けられ、上層が冒頭でふれた黒色系シルト質土。下層が7-4区で第2遺構面遺物包含層として掘削した土に対応する。

第174図、第175図は、上層にあたる黒色系シルト質土を除去した状態で図化したものである。208-盛土に重なるように10YR5/2やそれに近い黄色みを帯びた灰色系の土が堆積しており、盛土の上面が確認できる地点でも、盛土より約1m西へ進んだ地点が溝の肩になっている。

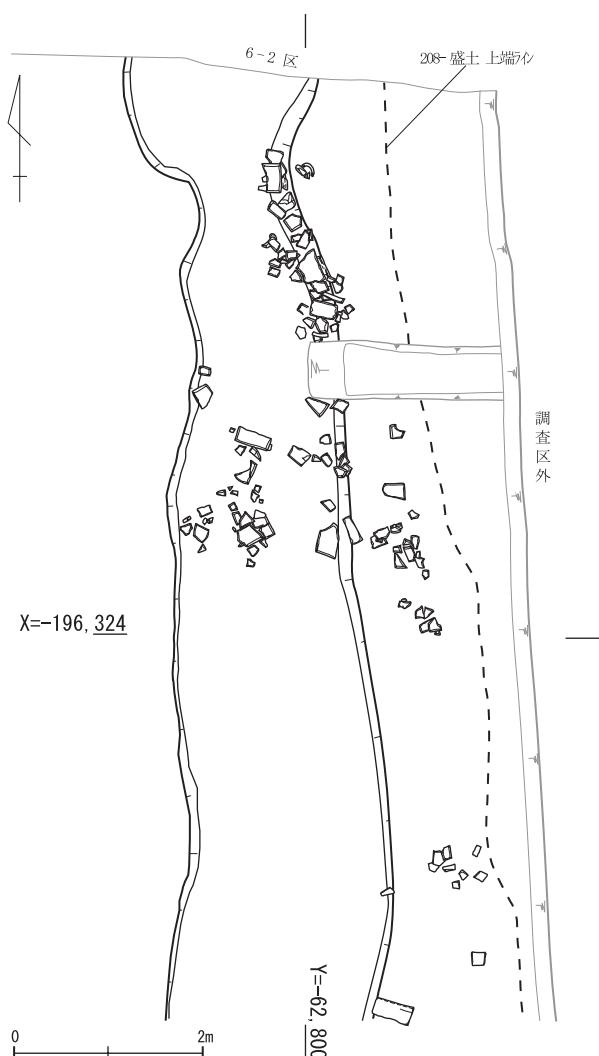
第176図は、下層掘削後の状況である。下層の土を除去すると、基本層序第5層に相当する青灰色系の粘土質の土が現れた。溝の底面は、北が高く、南に行くにしたがって低くなつてゆくが、凹凸が激しく、排水溝としての機能は、考慮されていないか、ごく小さいものであったとみられる。埋土からは瓦を中心とした遺物が出土している。208-盛土が検出された地点では、深さ約0.1mから0.2mの小穴が散発的に検出されている。

断面土層図では、土層番号1から6が上層、7から18が下層、19が下層上面で検出された小穴覆土、20から28が盛土にあたる。

出土遺物は、遺物収納コンテナにして80箱以上、うち、下層出土分が12箱である。大

半が瓦で、土師器や須恵器がこれに混じる。上層からは、瓦器や青磁も少数だが出土している。現地では、地区割りで使用した4mメッシュをさらに南北2m、東西4mに細分した取り上げ単位にて遺物取上げを行った。しかし、平面的な位置関係と遺物の種別との間に関係性を見いだせなかつたため、本報告では、取り上げ単位を用いていない。

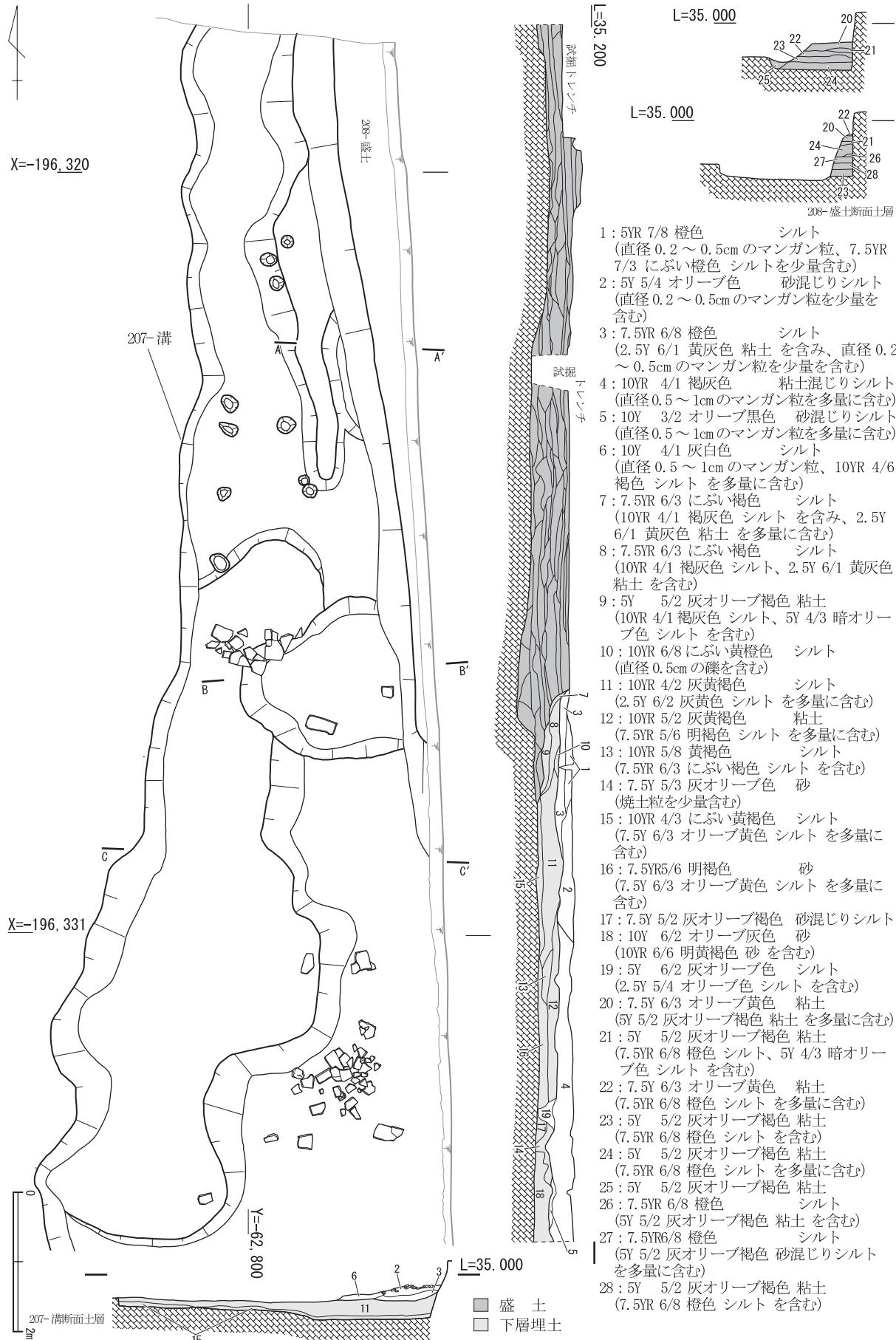
593から608は下層から出土した遺物である。出土遺物の構成を反映し、大半が瓦である。593は軒丸瓦の丸瓦部である。594、595は桶巻造りの平瓦。凹面に糸切り痕と布目痕を残す。2点とも、布の重なりによってできた深い沈線が横走する。凸面は、格子タタキののち、ヘラナデで仕上げるが、格子タタキが部分に残存する。焼成は良好で、暗橙色である。596は桶巻造りの平瓦だが、調整に特徴がある。凹面は、糸切り痕と布目痕を、縦方向のヘラケズリで部分的に消している。端面には、丁寧に面取りを施す。凸面は、縄目タタキを施し



第174図 8-4区 207-溝 北半 (上層検出時)

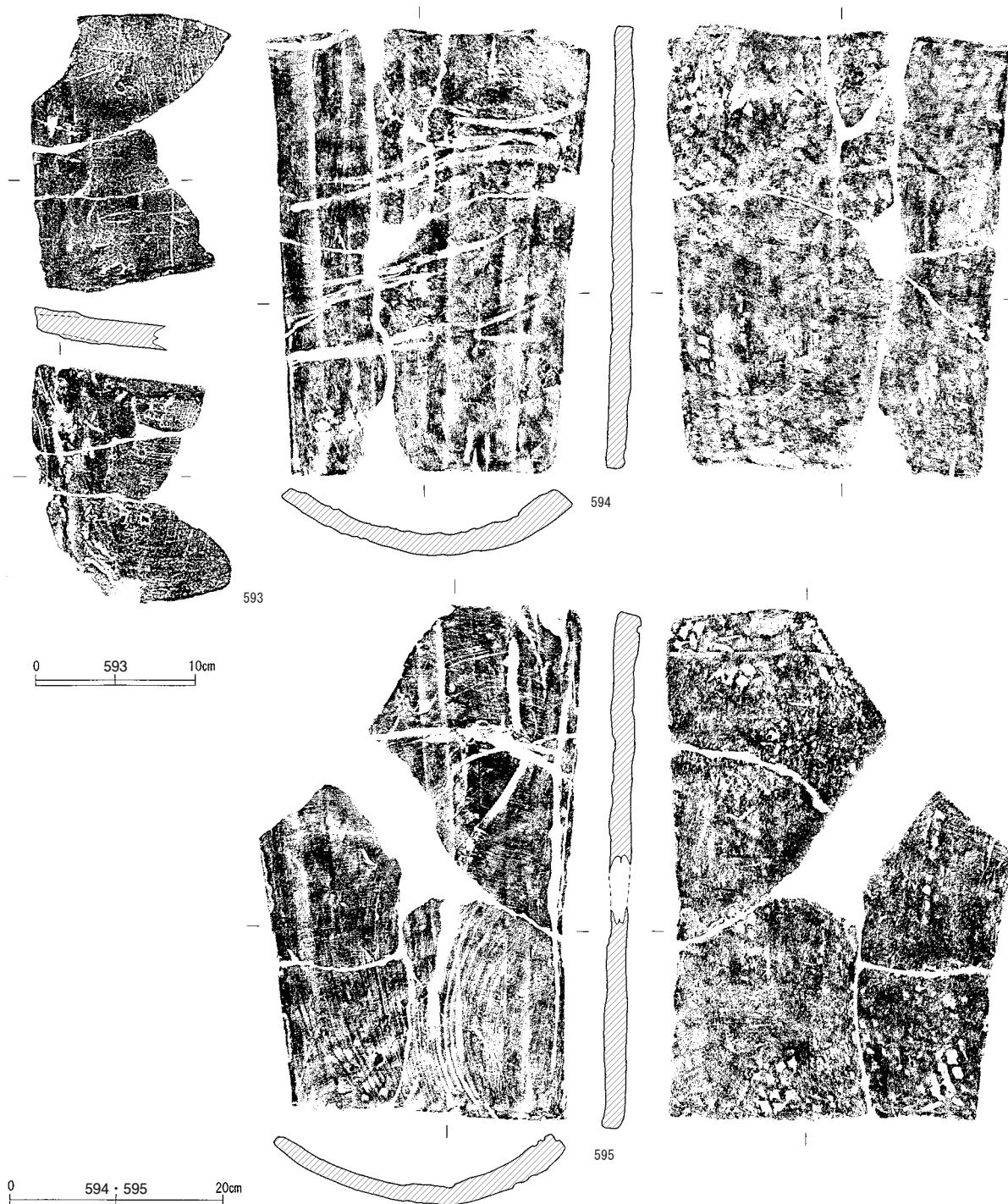


第 175 図 8-4 区 207- 溝 南半 (上層検出時)

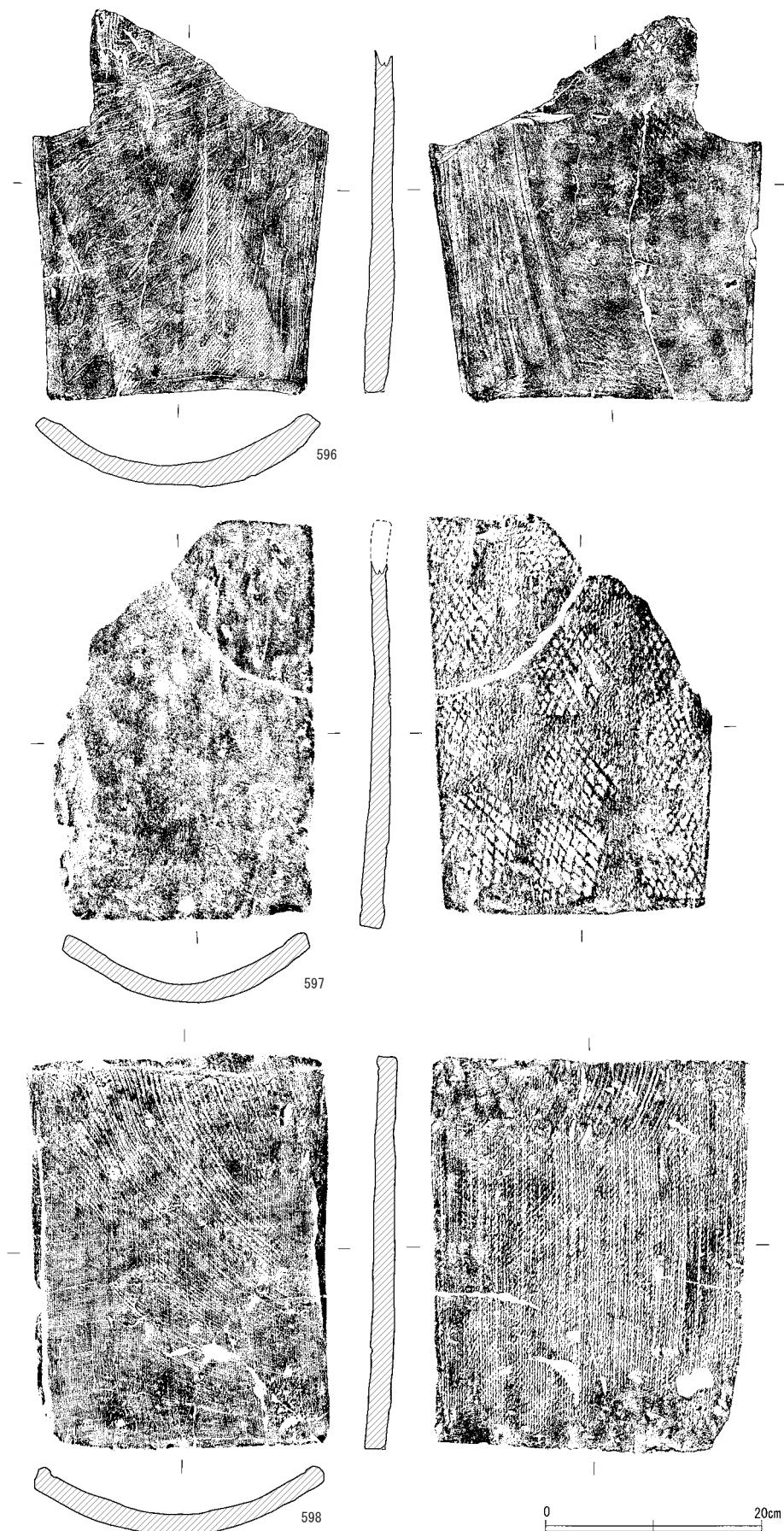


第 176 図 8-4 区 207- 溝 (下層検出時)

たのち、さらに格子タタキを施し、最終的にはヘラナデで2種類のタタキをほぼ消している。端面には、凹面と同じく丁寧に面取りを施す。597は、桶巻造りの平瓦で、凹面の布目痕を縦方向のナデで丁寧に消している。凸面は、密に縄目タタキを施したのち、粗く格子タタキを施す。ナデ調整は行わず、端面の面取りもごく粗い。598は、一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。凸面の端部には、連続的な指頭圧痕が見られる。

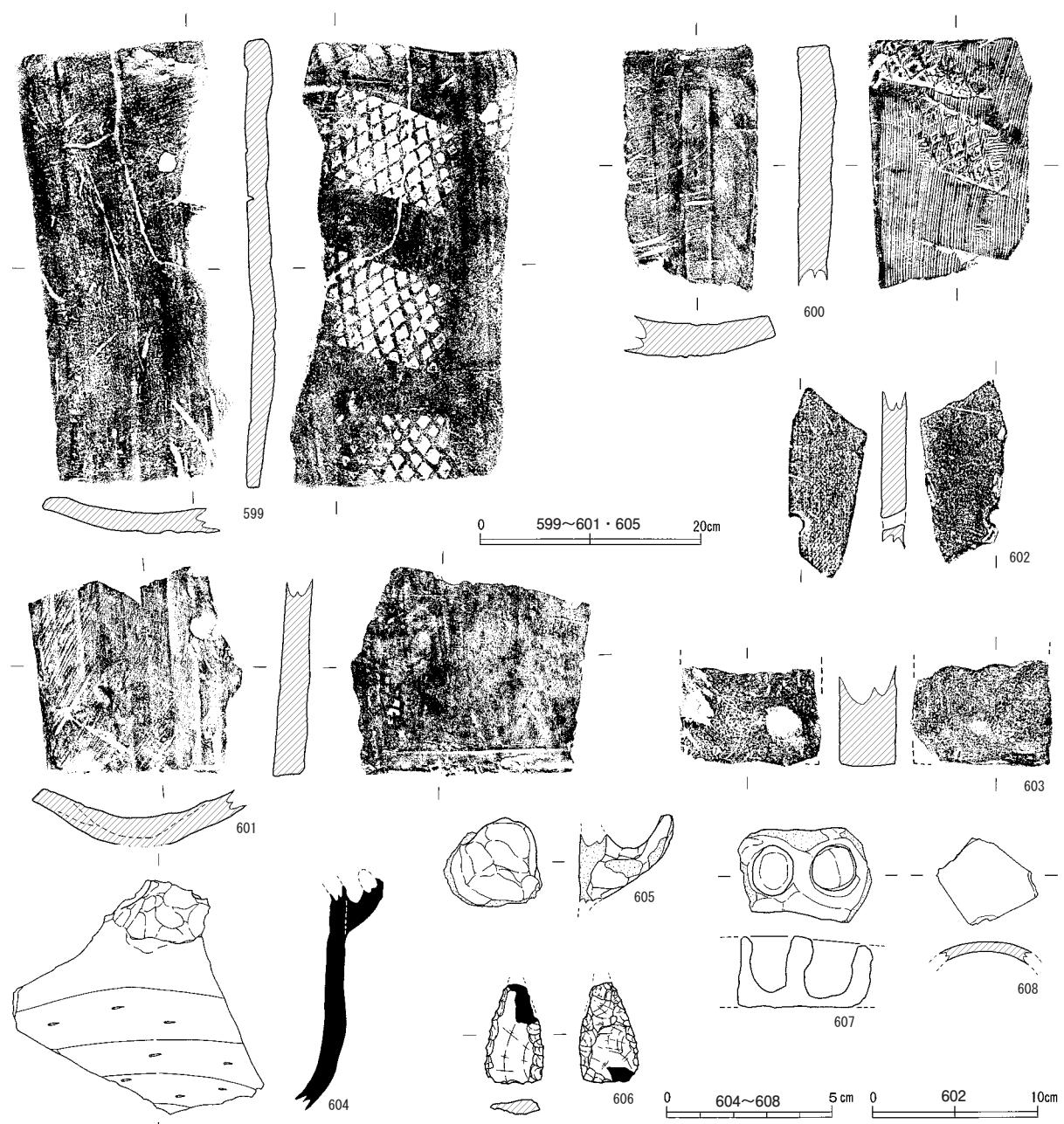


第177図 8-4区 207-溝 下層 出土遺物（その1）



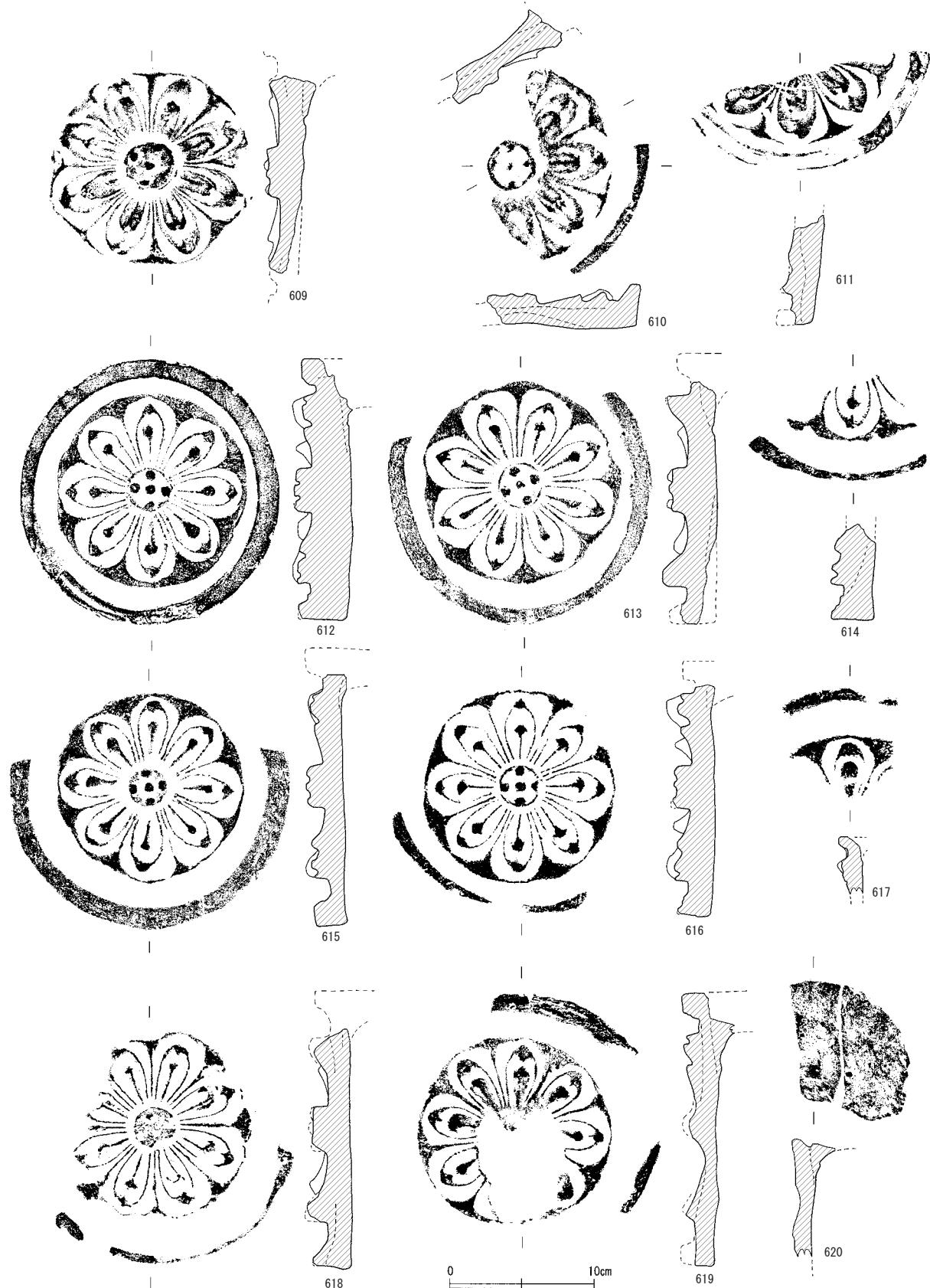
第178図 8-4区 207-溝 下層 出土遺物（その2）

599 は桶巻造りで、凸面はナデ調整の後、格子タタキをまばらに施す。600 は桶巻造りの平瓦。凸面は、ハケ状の工具で全体を調整したのち、まばらに格子タタキを施す。凹凸両面の端部は、粗く面取りしている。602 は小片だが、釘穴を持つ僅少な例のため図示した。603 は道具瓦か磚の破片であろう。604 は須恵器の胴部片。破片からの復元だが、ほぼ垂直に立ち上がる胴部に把手が付く。底部から胴下半は、ヘラケズリ調整で仕上げている。605 は土師器の把手。606 はサヌカイト製石鏃で、混入品である。607 は性格不明の土製品である。鬼板の一部であろうか。608 は円筒形の金属製品片で、図上では直径 10.6cm（外径）に復元される。複数個所に鋳造品特有の鬆がみられること、いわゆる赤錆が全く見られないことから、鋳銅品の可能性がある。



第 179 図 8-4 区 207- 溝 下層 出土遺物 (その 3)

609 から 657 は上層から出土した遺物である。軒丸瓦は小片でも図示し、平瓦は特徴的な調整のものを中心に図示した。そのため、出土品の大多数を占める、一枚造りで凹面に糸



第 180 図 8-4 区 207- 溝 上層 出土遺物 (その 1)

切り痕と布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施した平瓦は、1点しか図示していない。

609から611は北山廃寺の軒丸瓦のうち、A類とされるものである。後述するB類に比べて、出土数は圧倒的に少ない。個別の遺物をみても、残りが悪い。

612から619、621から625は、B類とされるものである。612のように、瓦当面がほぼ完全に残っているものもある。いずれも、B類の特徴とされる、内区全体の凹凸が著しい点では共通する。しかし。拓本では分かりづらいが、612や613といった花弁の線が細く断面3角形の鋭いものと、619のように全体に丸みを帯びたもの、という仕上がりの差や、621から625の花弁の意匠のように、いくつかのバリエーションが存在するようである。

620は文様部分の剥落したものである。626は小片だが、圈線をめぐらせていることが確認できる。

627から632は軒丸瓦の丸瓦部である。粘土の継ぎ痕から接合方法が判明するものを図示した。いずれも、丸瓦部の先端をやや薄く削り落している。瓦当との接合のために粘土を継ぎ足し、ナデで仕上げているため、丸瓦部のものとの調整方法の判明するのは、627のみである。627は格子タタキ後、ナデ調整を施している。

633は桶巻造りで凸面をナデで仕上げている。角を切り落とし、端面はヘラで面取りしている。634と635は釘穴を持つ丸瓦である。

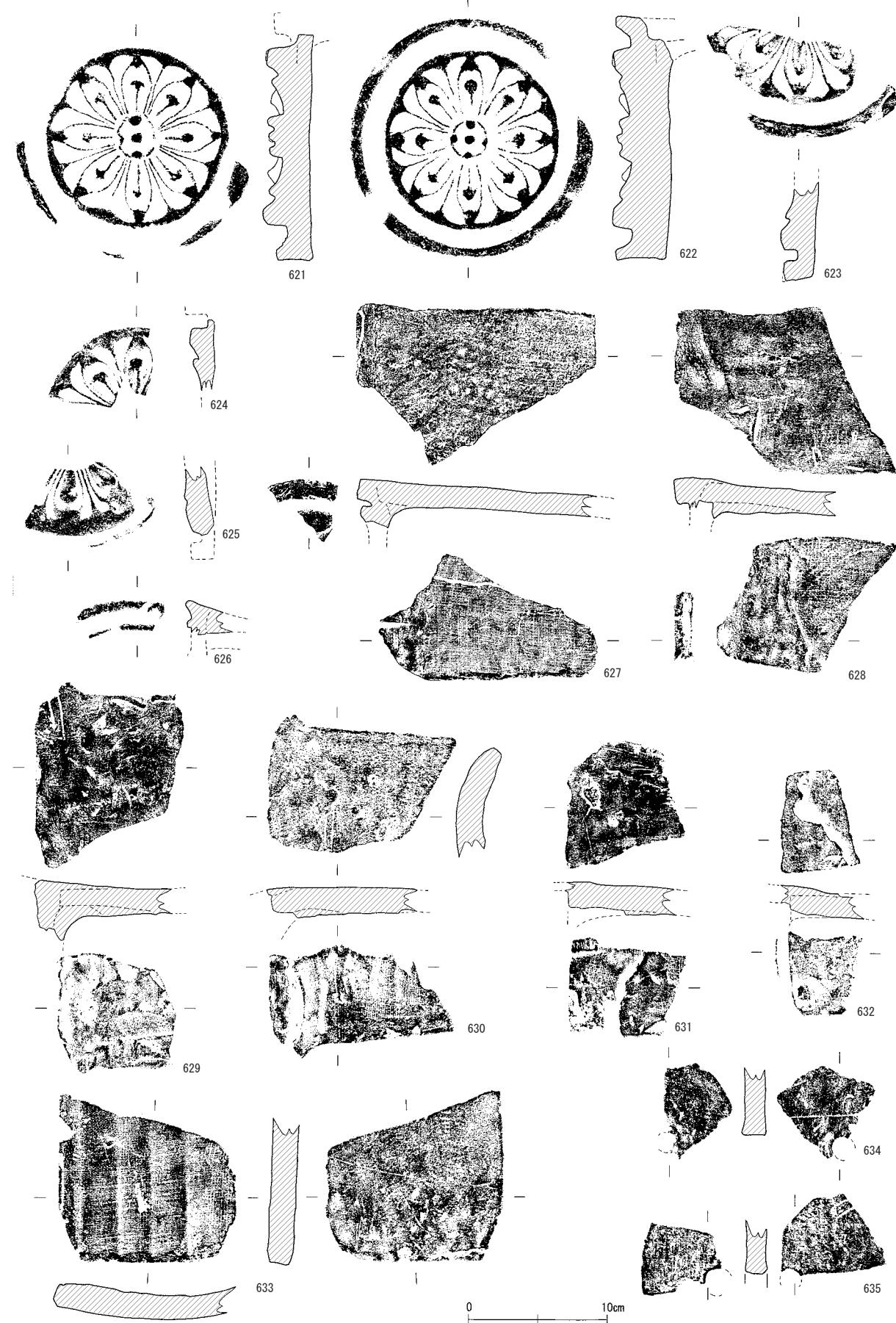
636から644は平瓦である。637は凸面に格子タタキを施し、端部付近に凹線が施されている。639は小片だが、凹面には、布目痕の上から格子タタキが施されている。凸面は、格子タタキの後、ヘラナデでタタキを消している。端面は、ヘラで丁寧に面取りしている。640は桶巻造りで格子タタキを密に施したもの。641は桶巻造りで格子タタキを横方向のヘラナデでナデ消したもの。凹面には、粘土板を継いだ痕跡が明瞭に残されている。642は桶巻造りで、格子タタキをナデ消したもの。凹面の端部を丁寧に面取りしている。643は一枚造りで凹面に布目痕を残す。凸面には、粗い縄目タタキを施す。

645から647は丸瓦である。647は狭端面が丸くカーブを描いている。

648から651は須恵器である。648は蓋である。摘みには、著しい磨滅が観察される。649は高台付の壺だが、硯に転用されている。見込みを硯として利用しており、よく磨滅している。見込みには、赤色顔料が付着しており、朱墨を使用していると推定される。652は土師器の鍋、653は白磁の碗。654は、砥石である。軟質の变成岩で、ほぼ全面を使用している。655は須恵質焼成の土製品で、表面には線刻が施されている。656は縄目タタキを施した平瓦を棒状に加工している。657は土錘である。

## 盛土

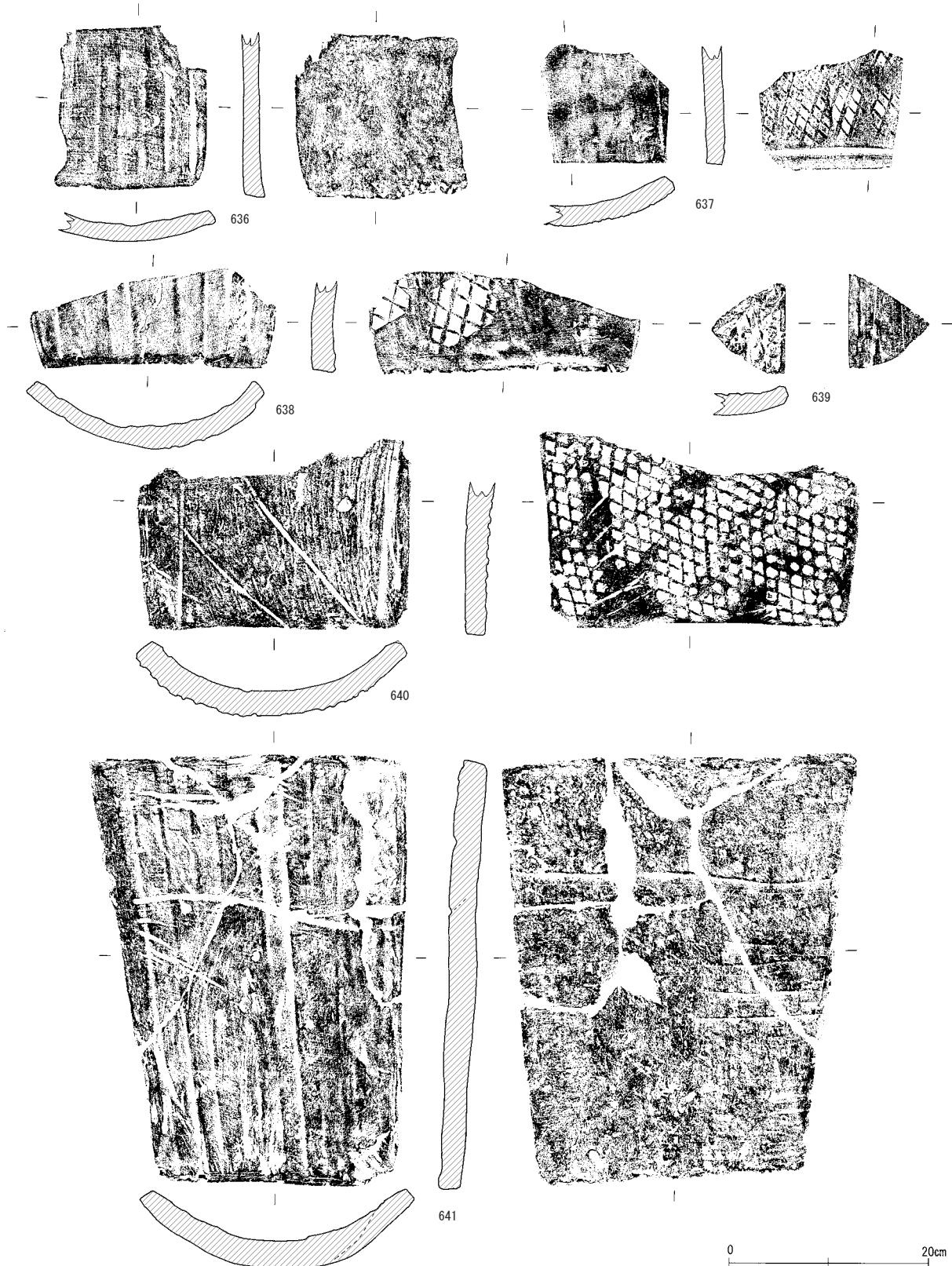
208- 盛土(第176図、写真16、写真図版29) 調査区東端で検出した。現存高約0.4mから0.6mの盛土である。西へ約6~8度傾斜しつつ南北方向にはしる。紀の川市教育委員会試掘トレンチJ区の版築造成土に該当する。基本層序第4層に相当する黄色から橙色系のシルト質土と、基本層序第5層に相当するオリーブ色系の粘土をほぼ交互に積み上げている。盛土に



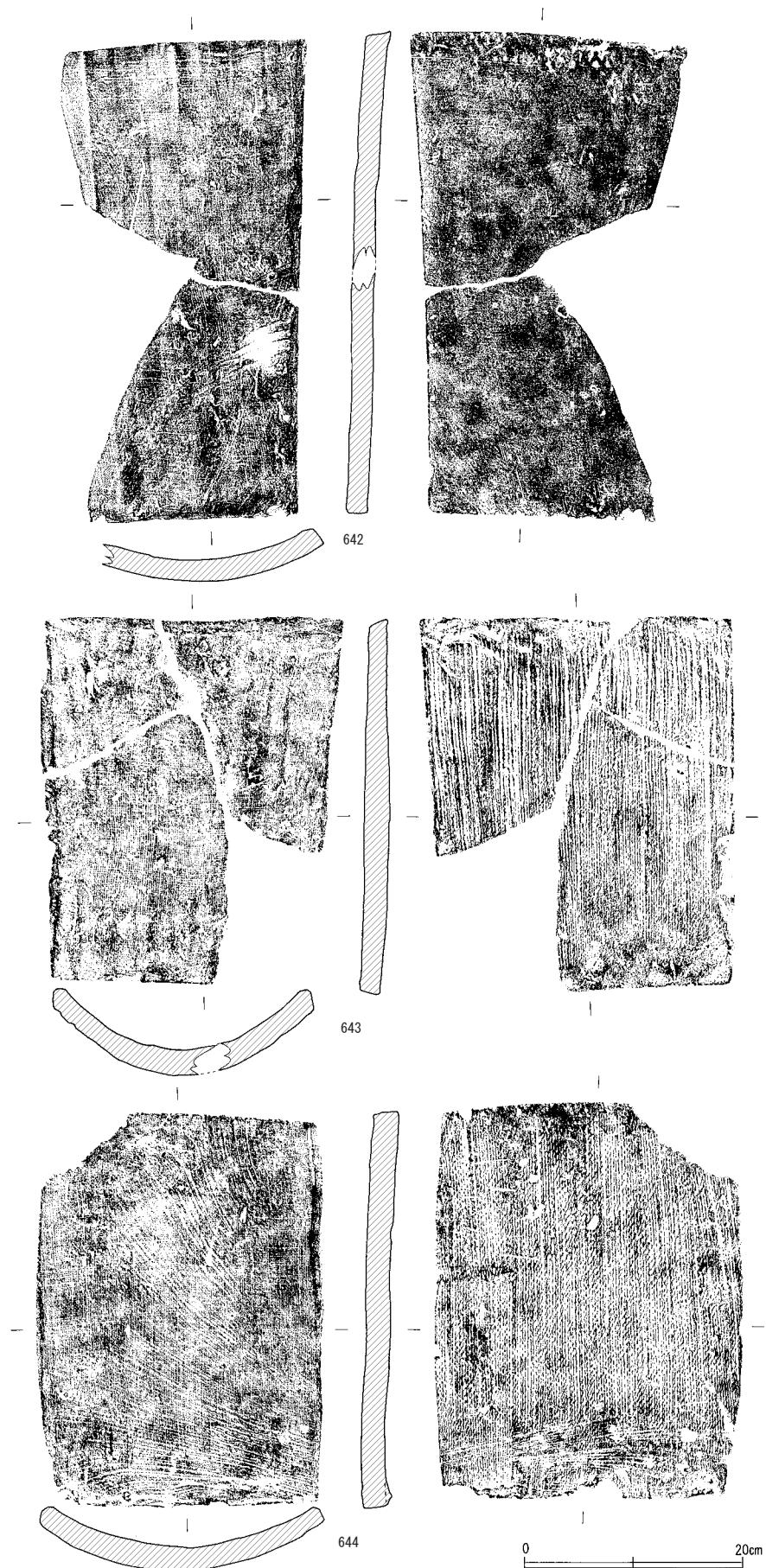
第181図 8-4区 207-溝 上層 出土遺物（その2）

先だって、207- 溝の西肩をおおよその基準として、盛土構築範囲とその周辺を基本層序第5層まで掘り下げている。

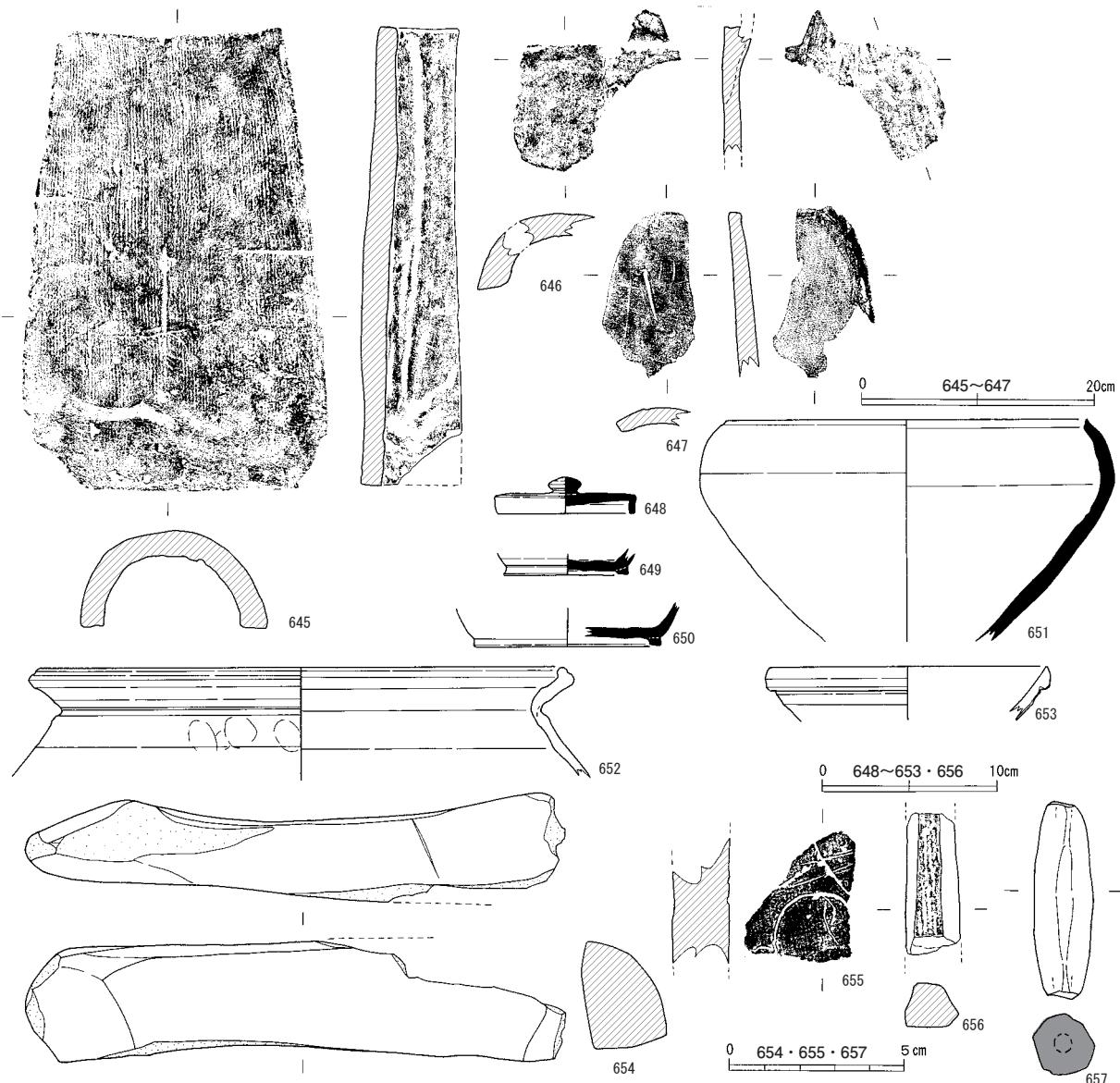
盛土中からは、調査区の東端、X=-196,320付近で甕の口縁部片が1点出土するにとどまった。小片のため、図示していない。



第182図 8-4区 207-溝 上層 出土遺物（その3）



第183図 8-4区 207-溝 上層 出土遺物（その4）



第184図 8-4区 207-溝 上層 出土遺物（その5）

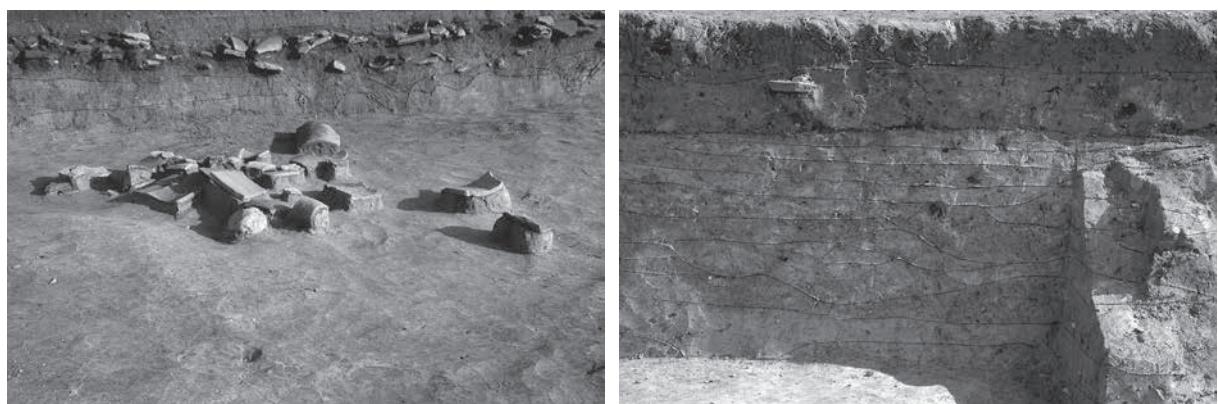


写真16 8-4区 207-溝下層遺物出土状況と208-盛土断面

## 第14節 8-5区（第185図から第191図、写真図版30、写真図版50）

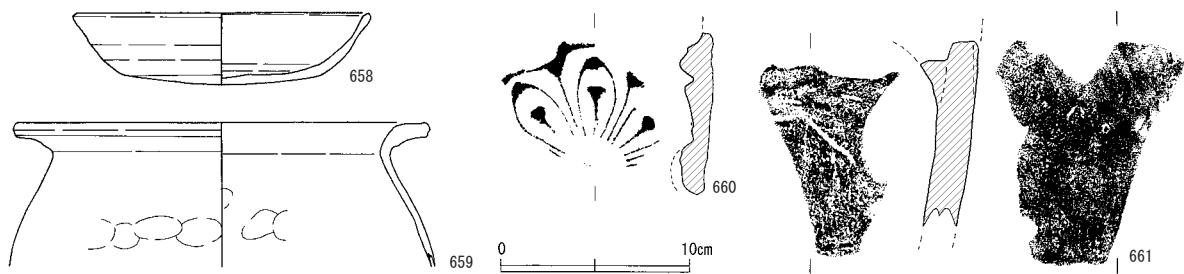
### 調査区の概要

B2区画に位置し、東側には4区が、南側には6-2区がある。調査区内に貴志川町教育委員会の設定したトレーンチが東西に3本位置する。

現代の耕作土及び床土下に瓦器、古代瓦片を含む遺物包含層があり、包含層を除去すると、地山であるシルト層となる。包含層は、北から南に向かって厚くなり、南端付近では2層に細分される。



第185図 8-5区 遺構全体図



第 186 図 8-5 区 217- 土坑、216- 小穴、包含層 出土遺物

包含層中からは古代の瓦や中世の瓦器・土師器が出土している。遺構は、東西および南北に  
はしる溝、小穴、土坑等がある。出土遺物は、218- 溝を除けばごく少ない。

### 土坑

**217- 土坑（第 185 図、第 186 図、写真図版 49）** 調査区東側で検出した。南北方向に長軸  
を向けた長径 1.8m、短径 0.7m の橢円形の土坑である。

平瓦 3 点、土師器 45 点が出土した。658 の土師器の皿 1 点を図示した。

### 溝

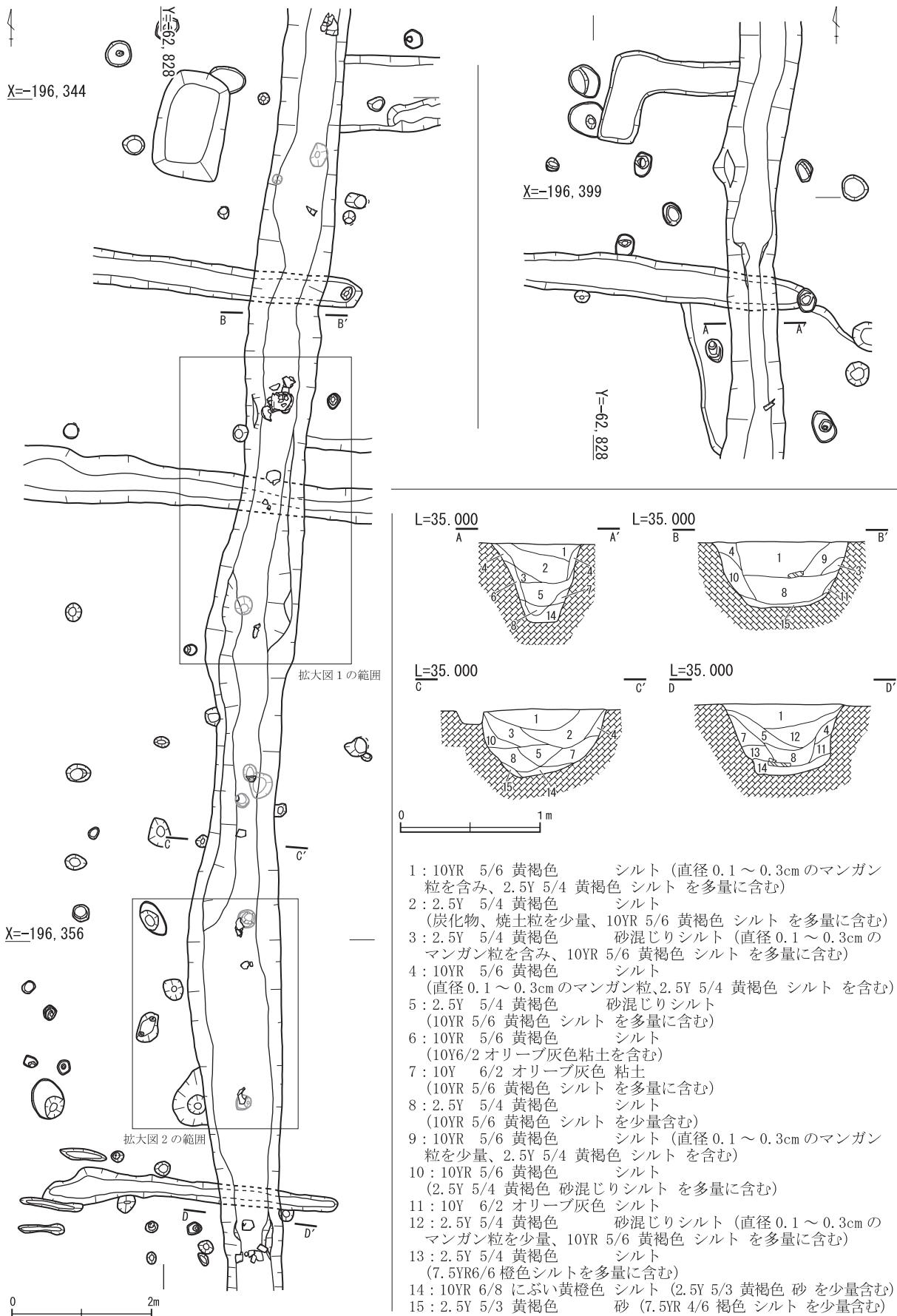
**218- 溝（第 187 図、第 191 図、写真図版 30、写真図版 50）** 調査区の西側で検出した。北  
から南へはしる幅 0.8 m から 1.3 m、深さ約 1 m の溝である。6-2 区 127- 溝、8-4 区 206-  
溝と同一遺構である。127- 溝のような明瞭な再掘削状況は観察できなかったが、各断面土  
層図をみる限り、埋没が複数回に分けて進んでいった過程を観察することができる。

現地では、断面土層図の 1 層から 13 層までを上層として取上げた。14 層以下から出土  
した遺物は、底面直上遺物と考え、図化、取上げを行った。

道具瓦 1 点、平瓦 100 点以上（うち下層出土分 12 点）、丸瓦 9 点（うち下層出土分 2 点）、  
須恵器 400 点以上（うち下層出土分 24 点）、土師器 700 点以上（うち下層出土分 167 点）、  
が出土した。また、混入と思われるが、上層からは瓦器 8 点、白磁 1 点も出土している。  
680 のように、貴志川町教育委員会の試掘調査で出土した遺物と接合する可能性が高い遺物  
も存在するが、現物の照合は行っていない。

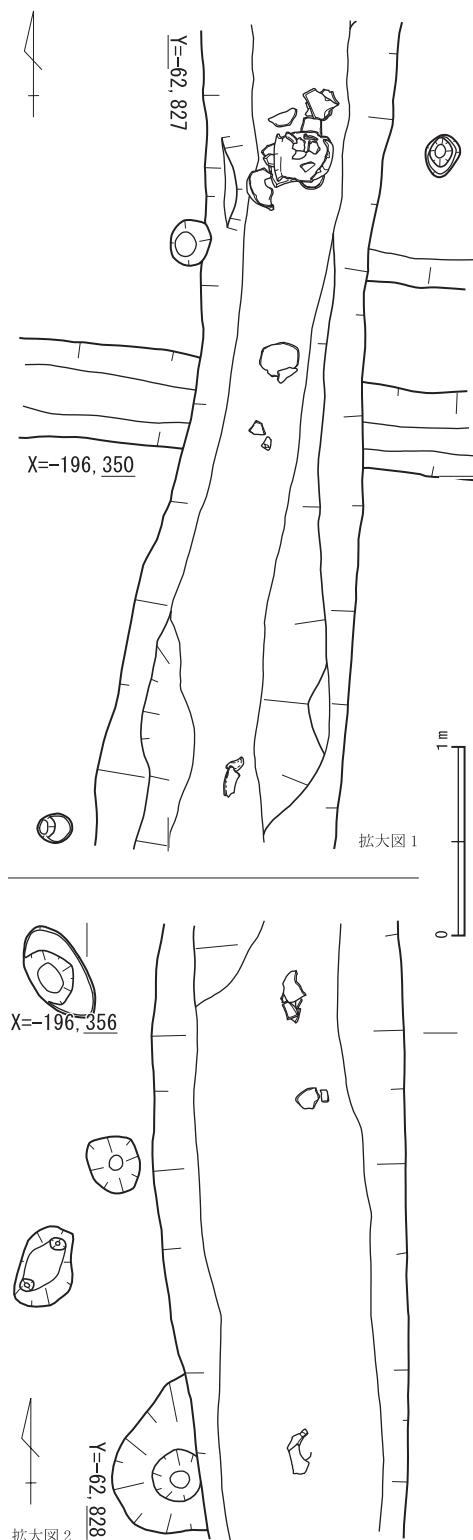
662 から 700 の 39 点を図示した。662 は道具瓦である。表面の剥落が激しく、詳細は不  
明だが、裏面には模骨痕とみられる窪みが 2 条観察される。瓦は、出土量は多いが細片であっ  
たため、提示できたのは、本例のみである。

603 から 684 は須恵器である。特に選別して図示してはいないが、北山廃寺、北山三嶋  
遺跡の古代に帰属する須恵器としては、古相を示すまとまりである。このうち、下層から出  
土したのは 681 のみである。664 から 666 は壺蓋である。664 には焼成前に棒状工具で施  
された線刻がある。669 から 677 は壺身である。高台の付かない 667 から 676 は、底面未



第 187 図 8-5 区 218-溝

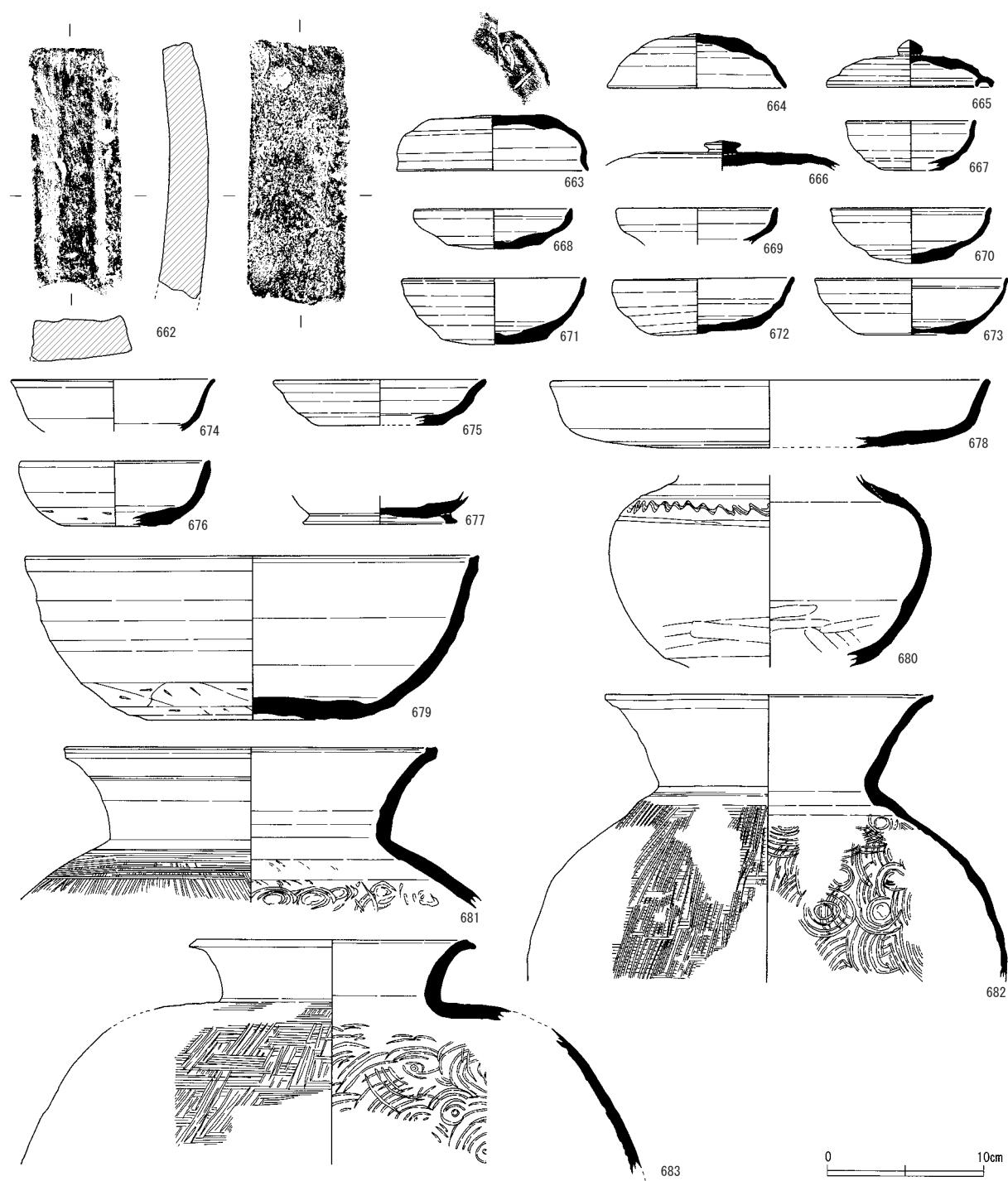
調整である。675 は高台が付くとみられるが、底面の剥落が激しく断定できない。678 は盤である。679 は鉢である。底面中央の一段下がった部分のみ、放射状のユビ押さえ、それ以外の底面から胴部最下部までヘラケズリ、胴部から口縁部はロクロナデで整形する。680 は須恵器の壺。肩に 2 条の沈線をめぐらし、その間に粗い波状文を施す。底面はヘラケズリ



第 188 図 8-5 区 218- 溝 部分拡大

で調整している。681 から 684 は甕である。いずれも胴部外面には並行タタキの後、カキ目を施し、内面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。682 は、非常に薄い器壁だが、焼成時の器壁の膨れが各所に観察される。684 は、ほぼ完形にまで復元された。

685、686、691 は、8-4 区出土の 580 から 582 と同様に、須恵器の技法を用いて製作されているが、赤橙色に焼成された土器である。691 は小さな平底を持ち、外面を並行タタキののちカキメを施し、内面には同心円の当て具痕を残す、把手付きの鍋である。8-4 区 206-



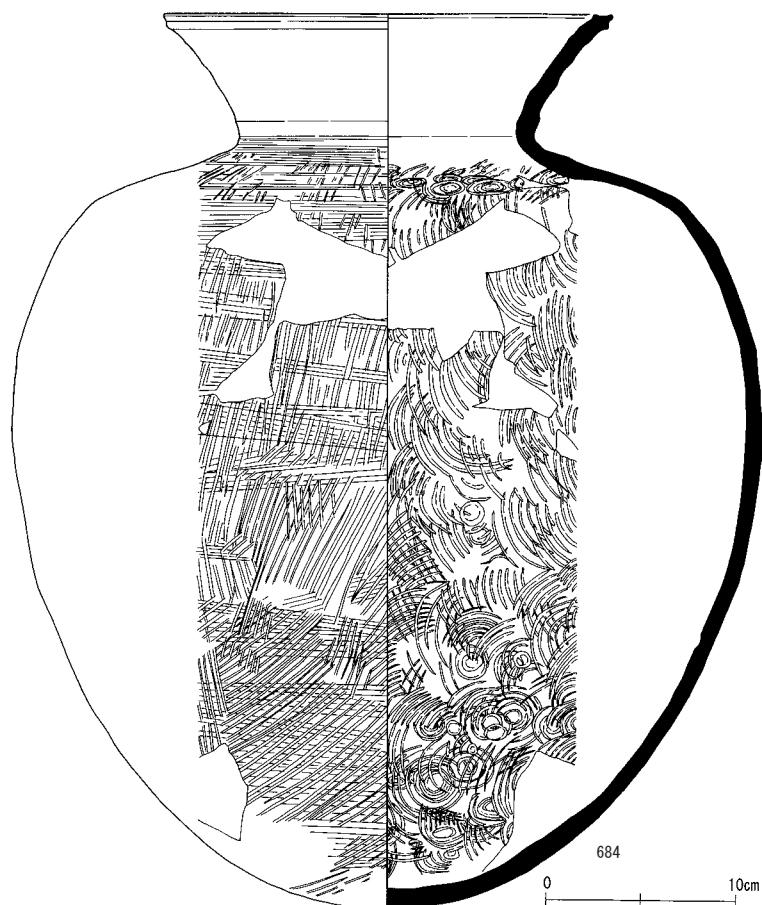
第 189 図 8-5 区 218-溝 出土遺物（その 1）

溝から出土した破片と接合した。底面外側は、摩耗が著しい。8-4 区 206- 溝出土の 582 と非常によく似た形態・調整を持つが接合しない。

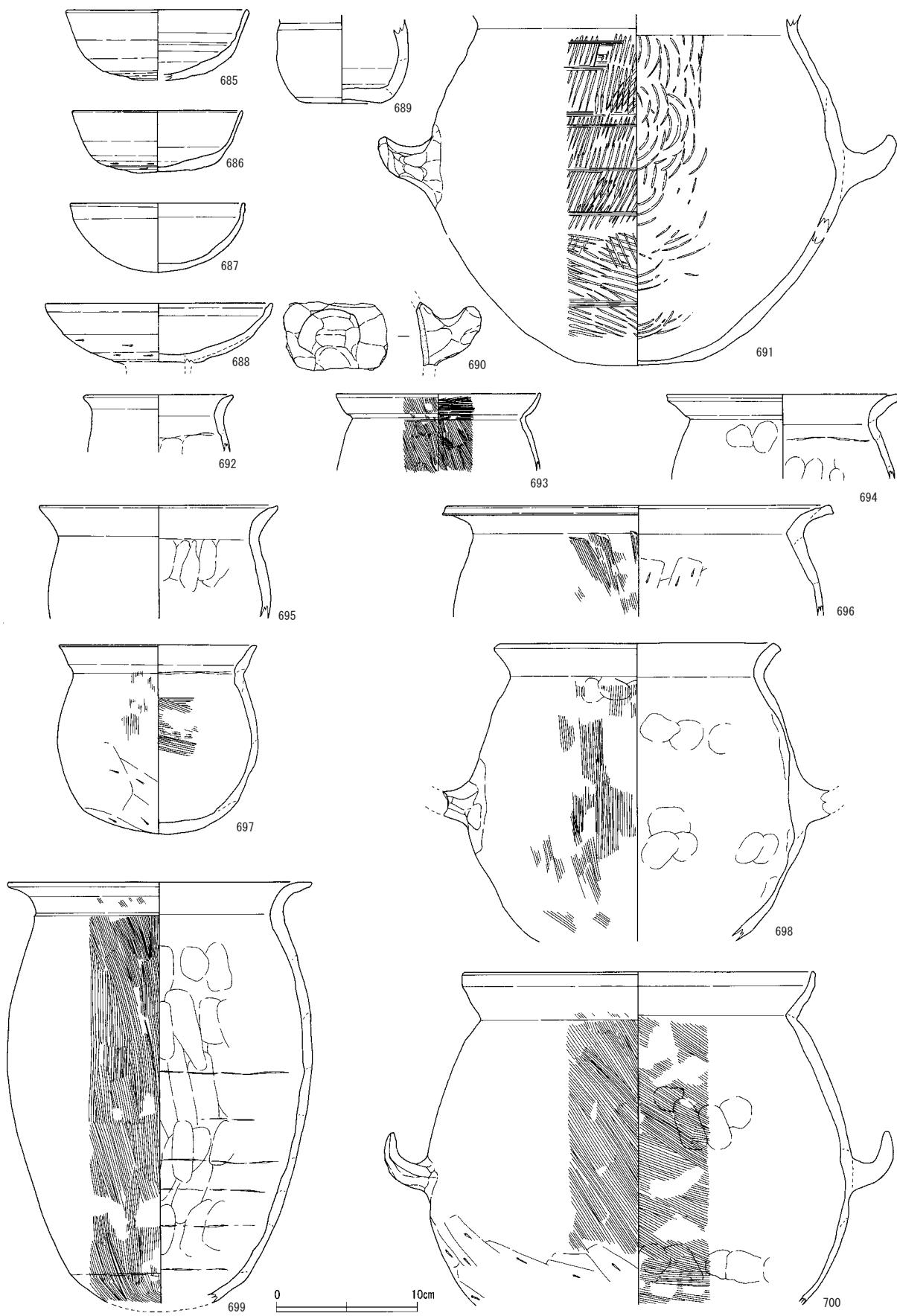
687 から 690、692 から 700 は土師器である。689 は上半を失っているが、甕とみられる。胎土は緻密で色調は暗褐色、焼成不良で脆い。687 は碗である。690 は把手。698、700 は把手付きの鍋である。外面には密にハケを施す。699 は長胴の甕である。底部が一部欠損しているが、ほぼ完形に復元された。外面にはハケを密に施し、内面はユビナデで仕上げているが、調整がやや粗く、粘土紐の継目が明瞭に残る。

#### 小穴

216- 土坑（第 185 図、第 186 図） 調査区中央で検出した小穴である。内部から、土師器が横倒しになり、半裁された状態で出土した。出土時には形状を保っていたが、傷みが激しく、水洗中に 100 点以上の細片になった。659 の土師器の鍋 1 点を図示した。



第 190 図 8-5 区 218- 溝 出土遺物（その 2）



第191図 8-5区 218-溝 出土遺物（その3）

## 第15節 9区（第192図から第197図、写真図版31、写真図版50）

### 調査区の概要

Z区画に位置する。1-2区、2区に隣接する。両地区の発掘調査の結果、遺構が東側に伸びていることが確実となったため、調査対象として設定した地区である。

調査前の現況は水田・果樹畠・竹林及び荒蕪地である。調査区中央部を東西に里道が通る。調査区の主に西半部では、表土層及び耕作土と床土を除去すれば地山である礫混じりの砂質土及びシルト層となり、包含層は認められない。調査区東側及び北側では耕作土と床土下に整地



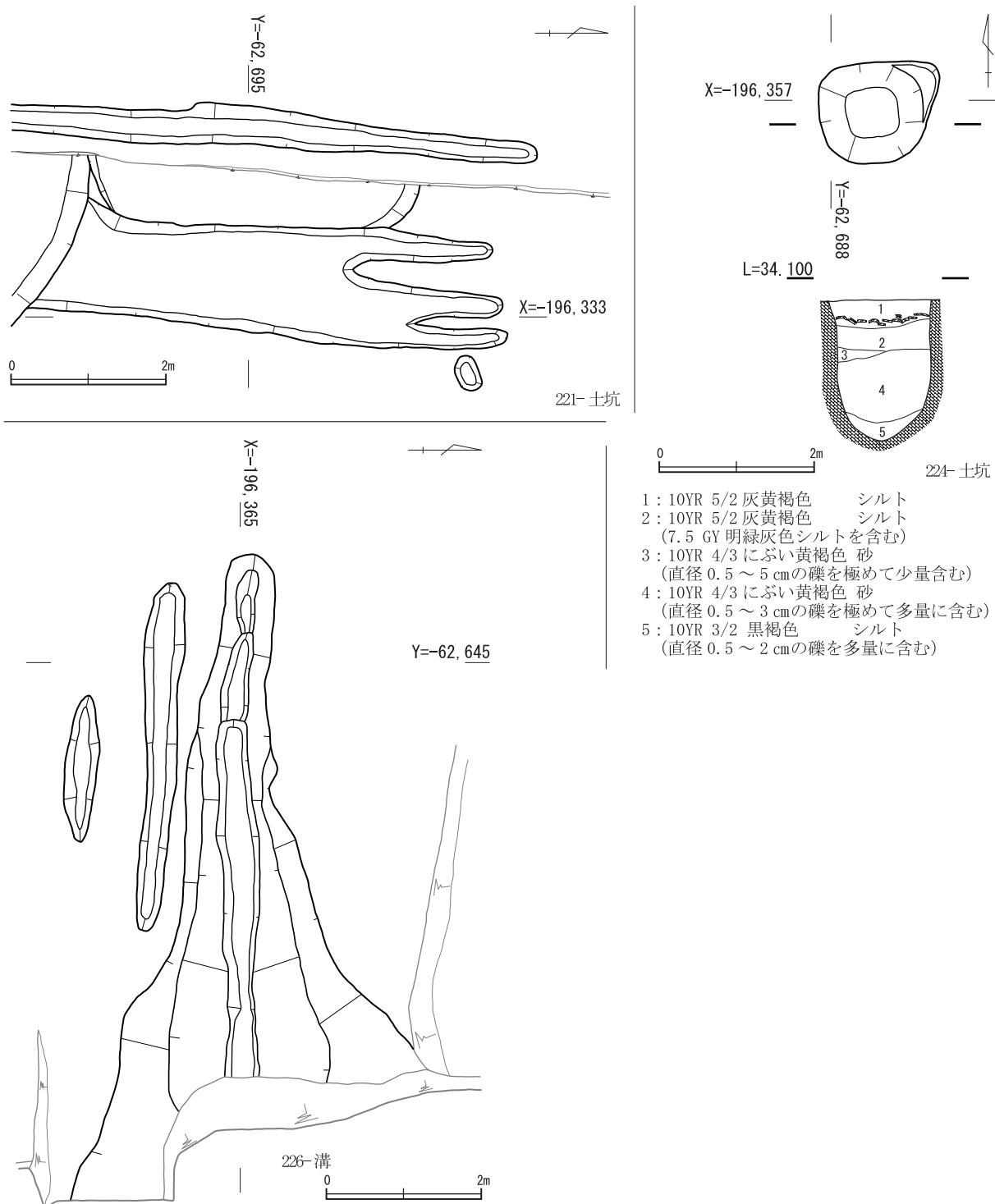
第192図 9区 遺構全体図

層が認められる。包含層は調査区西側のごく狭い範囲にのみ限定的に遺存している。遺構密度はそれほど高くはないが、調査区中央部分で比較的多くの土坑や溝が検出された。

### 土坑

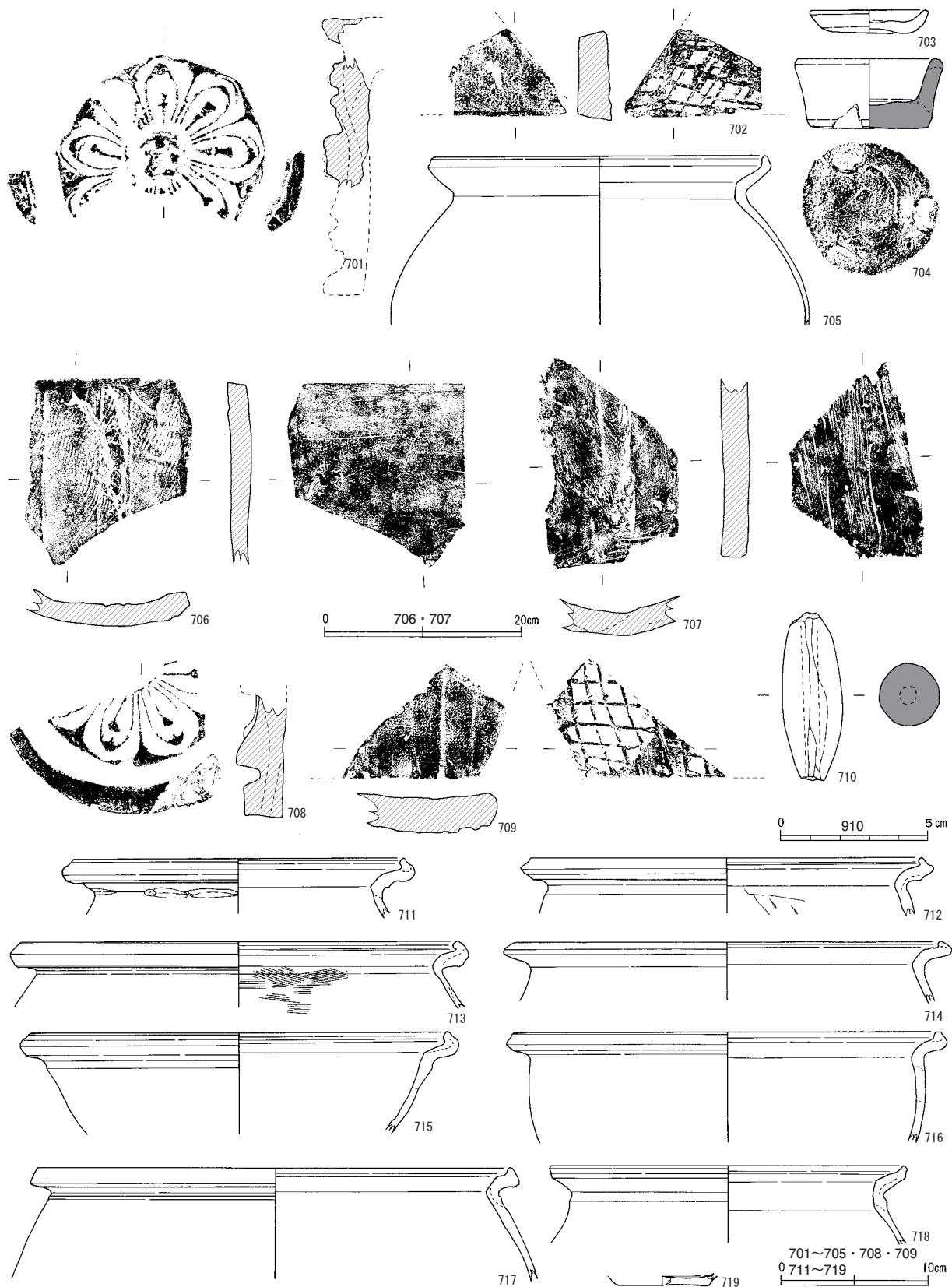
221- 土坑（第 193 図、第 194 図、写真図版 31、写真図版 50） 調査区西側で検出した。他の遺構に切られており、全容は不明だが、短い溝状の突出を持つ幅約 1.4 m の浅い土坑である。内部から、遺物が礫塊とともにまとまって出土している。

軒丸瓦 1 点、道具瓦 2 点、平瓦 27 点、丸瓦 8 点、須恵器 1 点、土師器 100 点以上、瓦器 7 点、



第 193 図 9 区 221、224- 土坑、226- 溝

陶器 2 点が出土した。701 から 705 の 5 点を図示した。701 は、軒丸瓦である。702 は凸面に格子タタキを施した道具瓦である。703 と 705 は土師器である。704 は瓦質焼成の土器で、底面に脚が剥落した痕跡が 3 ケ所確認される。



第 194 図 9 区 221、222- 土坑 出土遺物

**224- 土坑（第 193 図、第 194 図、写真図版 31）** 調査区西側北よりの地点で検出した。直径約 1.2 m、深さ約 1.8 m の土坑である。断面土層第 1 層のシルト層中からは、碎片化した瓦が多量に出土している。第 4 層にも多くの瓦が含まれる。井戸の可能性を考えたが、断定は難しい。

軒丸瓦 1 点、平瓦 300 点以上、丸瓦 86 点、須恵器 3 点、土師器 5 点、陶器 1 点が出土した。出土数は多量だが、いずれも碎片で、摩耗も著しく、図示できなかった。

### 井戸

**222- 井戸（第 15 図、第 194 図、写真図版 31）** 調査区西端で検出した。1-2 区 26- 井戸の延長部分である。26- 井戸検出時とは異なり、上端から底部にかけて石組み状の遺構を確認した。ただし、検出し、写真撮影を行った直後に、湧水等の影響によって崩落したため図化はできなかった。

軒丸瓦 1 点、平瓦 500 点以上、丸瓦 100 点以上、須恵器 9 点、土師器 40 点、瓦器 4 点、陶器 2 点、磁器 1 点、土製品 1 点が出土した。706 から 719 の 14 点を図示した。706 と 707 は多量に出土した平瓦のうち、調整等が特異で目に付いた 2 点である。706 は桶巻造りで、凸面は強いヘラナデで仕上げる。角を切り落とし、凹凸両面とも端面に丁寧な面取りを施す。707 は桶巻造りで、縦方向の強いヘラケズリで仕上げる。中央に粘土板の接合痕が残る。708 は軒丸瓦である。709 は道具瓦とみられる。桶巻造り、格子タタキをまばらに施している。710 は土錘である。

711 から 718 は土師器の鍋類である。718 を除けば、いずれも強く屈曲し、端部を斜め上方につまみ出した口縁部を持つが、胴部の形態は、一定しない。

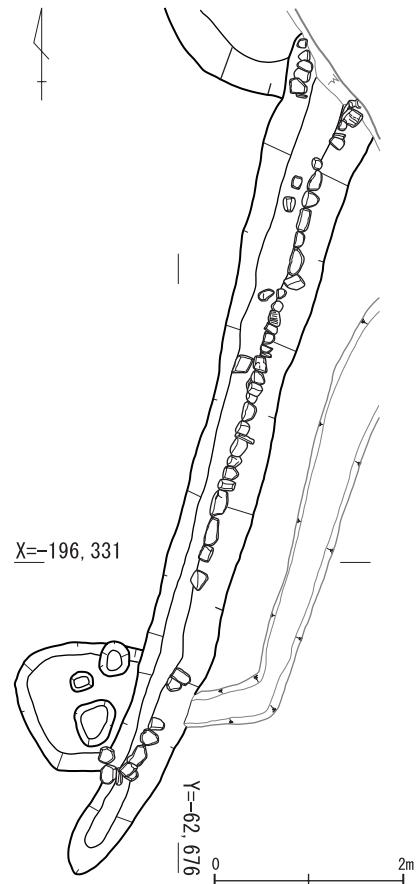
719 は白磁の底部である。

### 溝

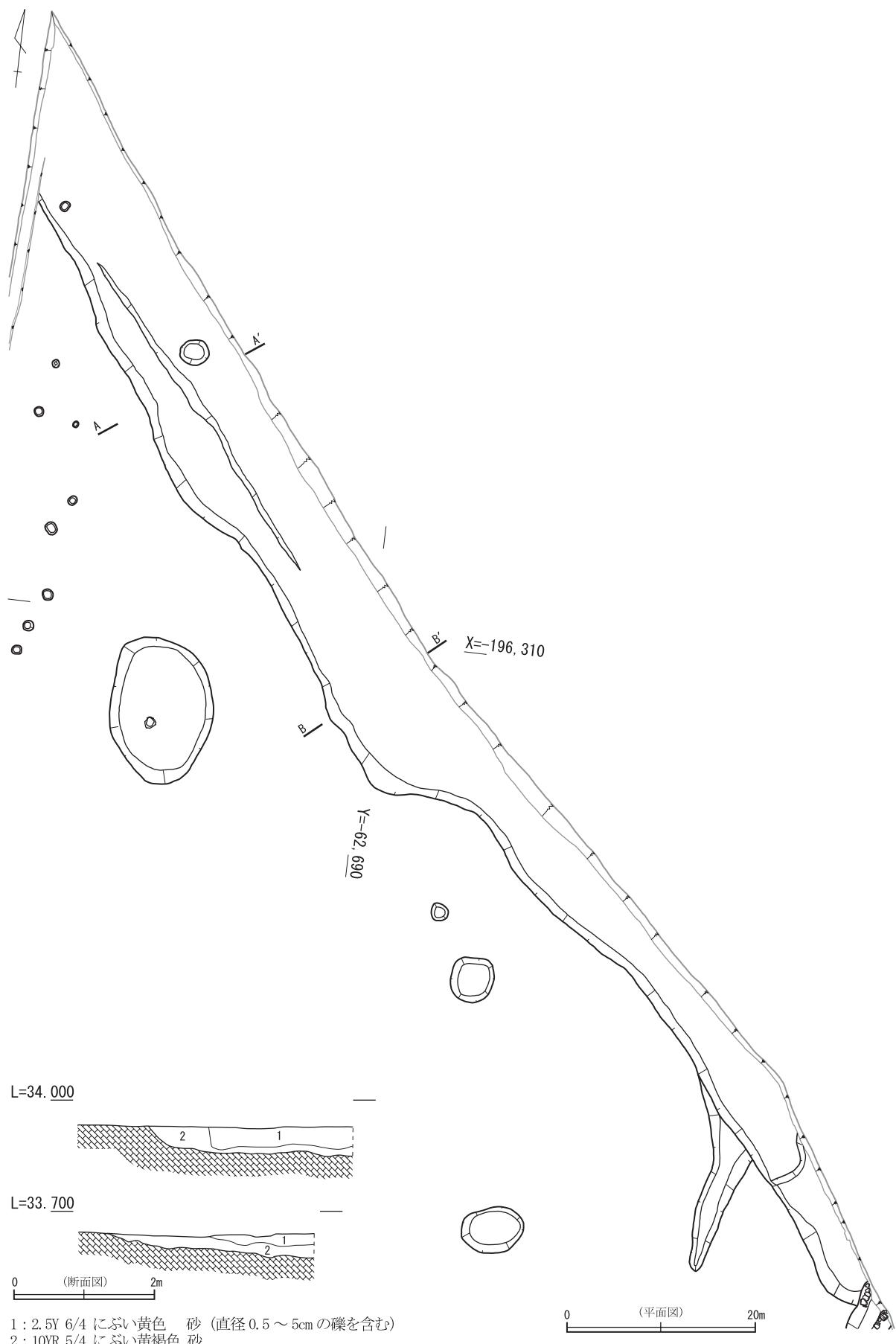
**220- 溝（第 195 図）** 調査区の東北端で検出した。掘方幅 0.8 m の溝である。現代の地割りを区画する素掘りの小溝の直下で検出された。遺存状態は極めて悪いが、石垣が検出された。整地等を行わず、整形しない自然石を乱石積みにした、簡易な造りである。裏込めには、周辺の地山の土が充填されていた。出土遺物や位置から考えて、近世以降の所産であろう。

覆土から、土人形が 1 点出土した。図示していないが、近世以降の所産である。

**223- 溝（第 192 図、第 197 図）** 調査区の西側で検出した、幅約 0.9 m、深さ約 0.1 m～0.2 m の、浅い溝である。224- 土坑に近接するが、切り合い関係はない。ただし、両遺構から出土した遺物が接合した。



第 195 図 9 区 220- 溝



第 196 図 9 区 219- 落込み

平瓦 32 点、丸瓦 3 点、土師器 2 点、瓦器 1 点、陶器 1 点、青磁 1 点、鉄製品 1 点が出土した。720 から 721 の 2 点を図示した。720 は青磁碗の底部である。見込みには文様が施されているが、意匠は不明である。721 は擂鉢。224- 土坑と遺構関接合が確認された遺物である。表面は、暗青灰色だが、断面は暗赤褐色である。使用による磨滅が著しい。

**225- 溝（第 192 図、第 197 図）** 調査区の西端で検出した、幅約 0.9 m、深さ約 0.1 m から 0.2 m の、南北方向にはしる浅い溝である。

平瓦 2 点、土師器 5 点、瓦器 8 点が出土した。瓦器 1 点を図示した。ほぼ痕跡化した貼付け高台を持つ。焼成は不良で、脆く、表面の炭素吸着も不均一である。

**226- 溝（第 193 図、第 197 図、写真図版 31）** 調査区東端で検出した溝である。幅は西から東に向かって広くなり、検出した範囲の西端部分では 0.7 m、中央部で 1.5 m、東端部では約 4.0 m である。底面は西端から約 2 m 東の地点から急激に東に向かって下降する。断面計は隅円の逆台形である。

道具瓦 1 点、平瓦 800 点以上、丸瓦 200 点以上、須恵器 4 点、土師器 14 点、陶器 1 点が出土した。瓦は碎片となり、摩耗が著しい。そのため、出土量に比して、図示可能な遺物は 1 点とごく少ない。722 は、道具瓦である。全面をナデで仕上げている。

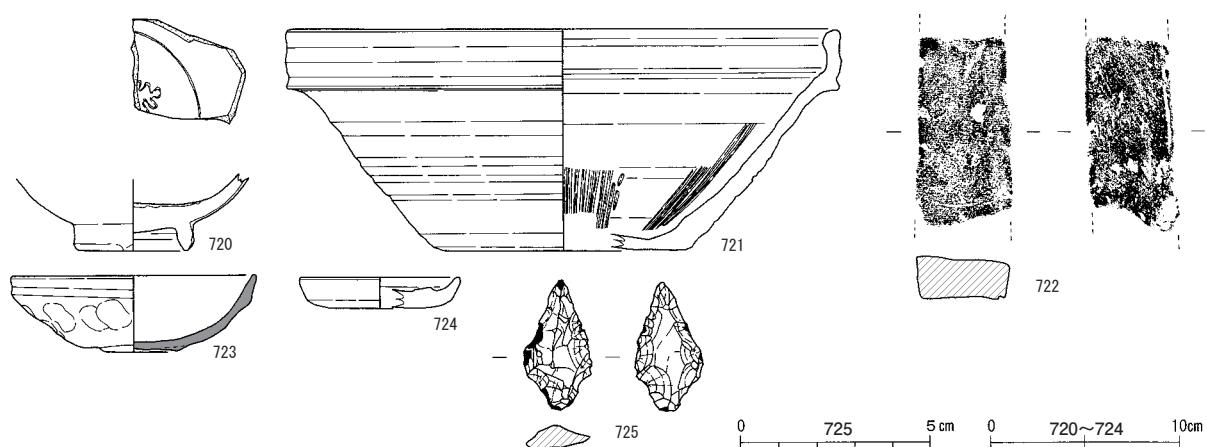
### 落込み

**219- 落込み（第 196 図、第 197 図）** 調査区の北東端で検出した。台地辺縁の落込みである。埋土上層は、地山に類似した礫混じりの砂質土、下層は礫を含まない砂質土で、上層とは色調が異なる。

平瓦 50 点以上、丸瓦 14 点、須恵器 4 点、土師器 50 点以上、弥生土器 8 点、陶器 1 点、炉壁 1 点が出土した。724 の土師器小皿 1 点を図示した。

### 包含層

9 区では、包含層は残りが悪く、遺物の出土量も少ない。725 はサヌカイト製石鎌である。突基式で、鎌身の片面には、主剥離面を残す、やや粗製の鎌である。



第 197 図 9 区 224、226- 土坑、223、225- 溝、219- 落込み、包含層 出土遺物

## 第16節 11区（第198図から第201図、写真図版32、写真図版50）

### 調査区の概要

区画に位置する。南側には1-1区がある。調査前の現況は柑橘畑であるが、それ以前は水田であったようである。耕作土または床土の直下が遺構検出面となっており、遺物包含層は遺存していない。

遺構検出面は北及び東に向かって傾斜する。東側への傾斜は緩やかだが、北側へは、調査地北側の谷に向かって急激に下降している。228-落込みを埋める整地は、水田化の際に行われたと考えられる。整地層の厚さは、調査区の北端では最大0.7m、東端では0.4mである。

掘立柱建物を含む柱穴、土坑、溝を検出した。調査区西側で掘立柱建物を確認したため、東側の小穴のまとまりでも、掘立柱建物の存在に留意しつつ掘削を進めたが、建物と認定可能な小穴の並びを見出すことができなかった。

### 掘立柱建物

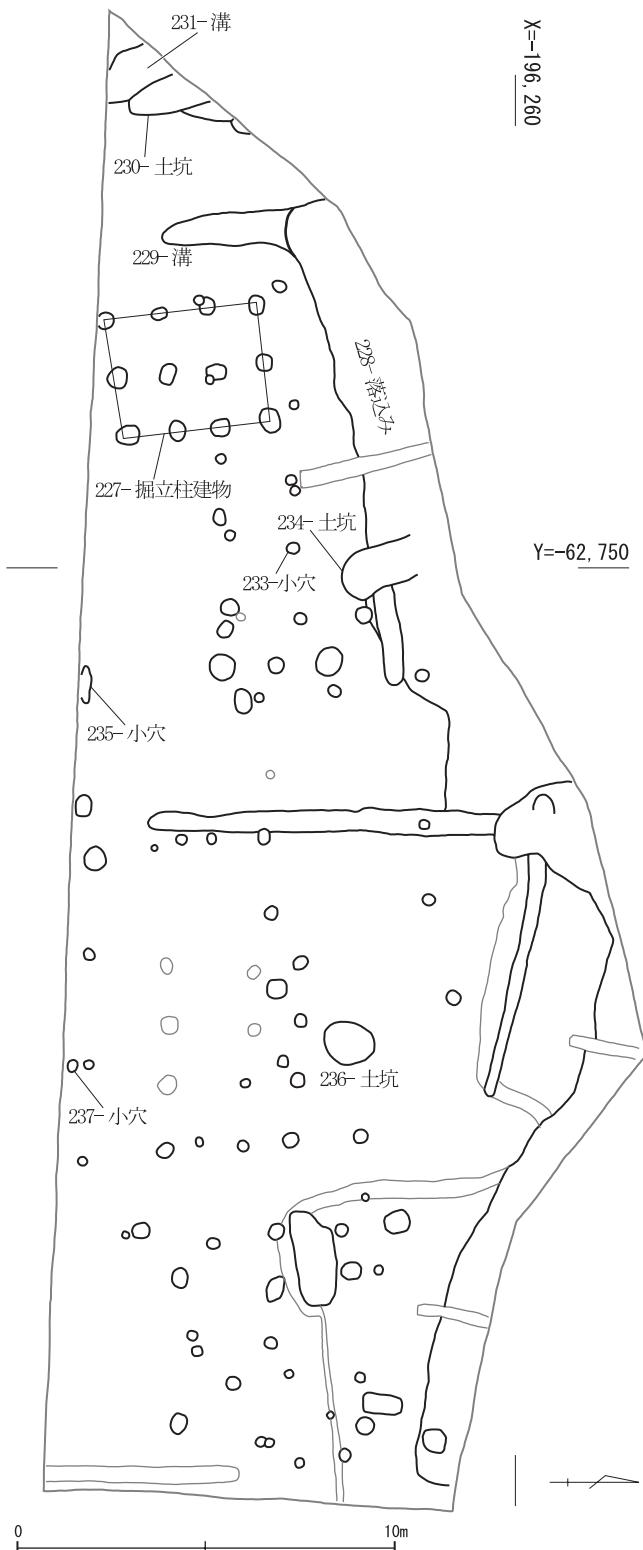
**227-掘立柱建物（第199図、第201図、写真図版32）** 調査区西側で検出した。主軸を南北方向に取る3間×2間の建物である。柱間は、東西方向が1.6m、南北方向は1.3mから1.4mである。掘形は隅円正方形あるいは隅円長方形である。規模は約0.4から約0.5m、深さは約0.2mから約0.3mである。

遺物はごく少なく、須恵器の杯の碎片が数点出土しているのみである。

### 土坑

**230-土坑（第198図、第201図）**

調査区西端で検出した。溝状の土坑である、231-溝を切っている。



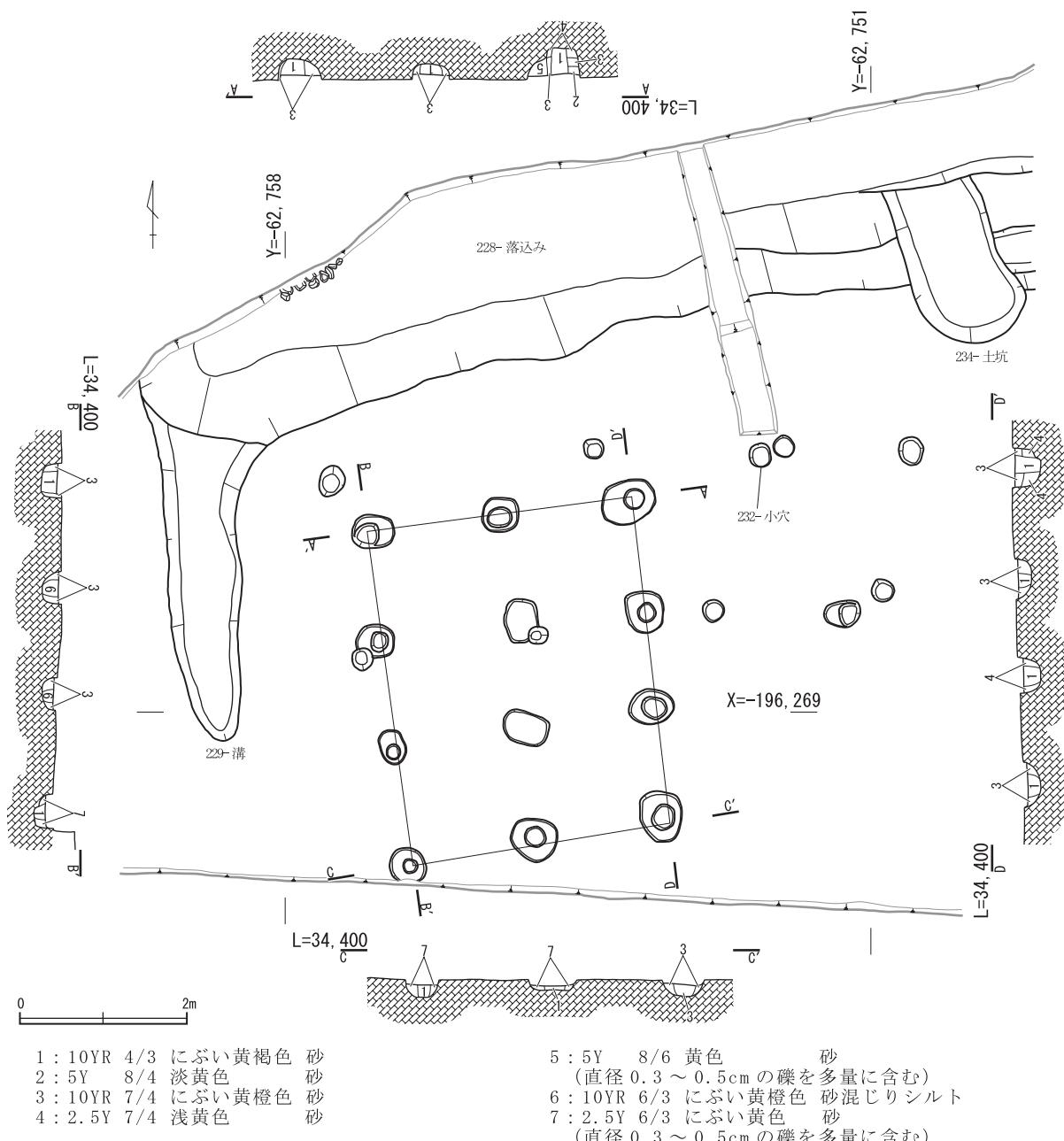
第198図 11区 遺構全体図

軒丸瓦 1 点、平瓦 50 点、丸瓦 21 点、須恵器 25 点、土師器 8 点が出土した。このうち、1 点を図示した。727 は重圧文軒丸瓦である。

**234- 土坑(第 198 図、第 201 図)** 調査区西側、227- 掘立柱建物の北東側で検出した。北端は、228- 落込みに切られている。

平瓦 5 点、須恵器 4 点、土師器 29 点が出土した。729、732 の 2 点図示した。729 は土師器の高台付の坏身である。製作技法は、須恵器と同じだが、土師質の焼成を受けている。赤橙色から赤褐色系の素地に灰白色から黄灰色系の粘土が筋状に混在した胎土を持つ。732 は須恵器の坏蓋である。

**236- 土坑(第 200 図、写真図版 32)** 調査区中央部で検出した。長径約 1.3 m、短径約 1.1 m、深さ最大約 0.3 m の橢円形の土坑である。埋土中には炭・焼土が含まれる。第 200 図のト



第 199 図 11 区 227- 掘立柱建物と周辺の遺構

ンで示した部分は、被熱し赤く変色している。

遺物は、瓦が 1 点出土したのみである。図示していない。

## 溝

**229- 溝（第 198 図、第 201 図）** 調査区の東側で検出した。北に向かって走る溝である。228- 落込みに切られている。平瓦 9 点、丸瓦 1 点、須恵器 19 点、土師器 21 点、弥生土器 1 点が出土した。このうち、726 の 1 点を図示した。

**231- 溝（第 198 図、第 201 図）** 調査区の西端で検出した。幅約 0.7 m、深さ約 0.3 m の溝である。1-1 区 1- 溝に連続する遺構である。平瓦 3 点、丸瓦 4 点、須恵器 4 点が出土した。このうち、728 の須恵器坏身 1 点を図示した。

## 小穴

目に付いた遺物が出土した小穴を列挙する。いずれも直径 0.3 m 前後、深さも 0.3 m 程度と小規模で、227- 掘立柱建物を構成する建物とは異質である。

**232- 小穴（第 199 図、第 201 図）** 227- 掘立柱建物の東側で検出した小穴である。734 の土師器の皿 1 点が出土した。

**233- 小穴（第 199 図、第 201 図）** 227- 掘立柱建物の東、232- 小穴の東側で検出した小穴である。須恵器 1 点、土師器 3 点が出土した。730、731 の 2 点を図示した。730 は須恵器の坏蓋、731 は須恵器の坏身である。

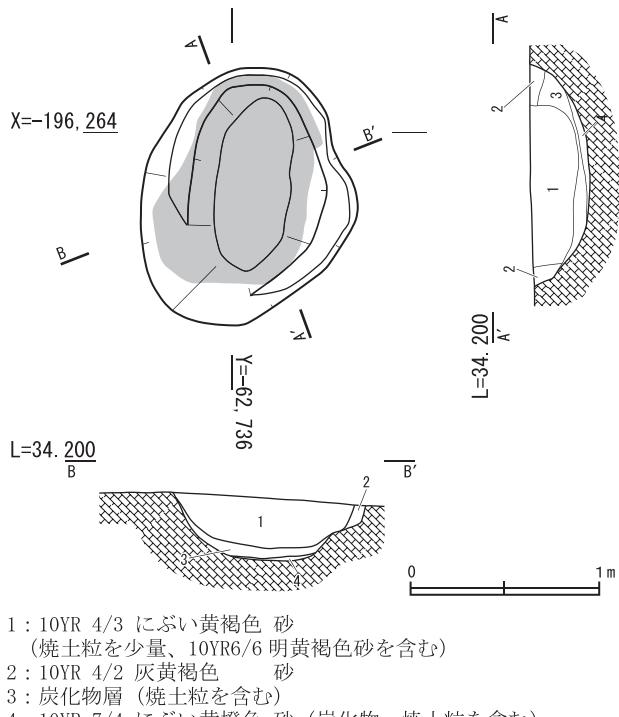
**235- 小穴（第 199 図、第 201 図）** 227- 掘立柱建物の東、232- 小穴の東側で検出した小穴である。733 の須恵器の坏蓋 1 点が出土した。

**237- 小穴（第 199 図、第 201 図）** 調査区南東側で検出した小穴である。土師器 15 点が出土した。1 点図示した。735 は土師器の皿である。大きく外傾した口縁部を持ち、内外面とも稜線を伴う強いヨコナデで仕上げる。胎土には、雲母粒が含まれている。

## 落込み

**228- 落込み（第 196 図、第 197 図）** 調査区の北東端で検出した。台地辺縁の落込みである。埋土上層は礫混じりの砂質土、下層は礫を含まない砂質土である。

平瓦 50 点以上、丸瓦 34 点、須恵器 50 点以上、土師器 100 点以上、炉壁 1 点が出土した。736 から 752 の 17 点を図化した。736 は桶巻造りの平瓦である。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施す。凸面の中央やや下側にはユビ押さえによる大きな窪みが観察される。737、738 は須恵器の坏蓋である。739 から 746 は須恵器の坏身である。底部の残るものは、



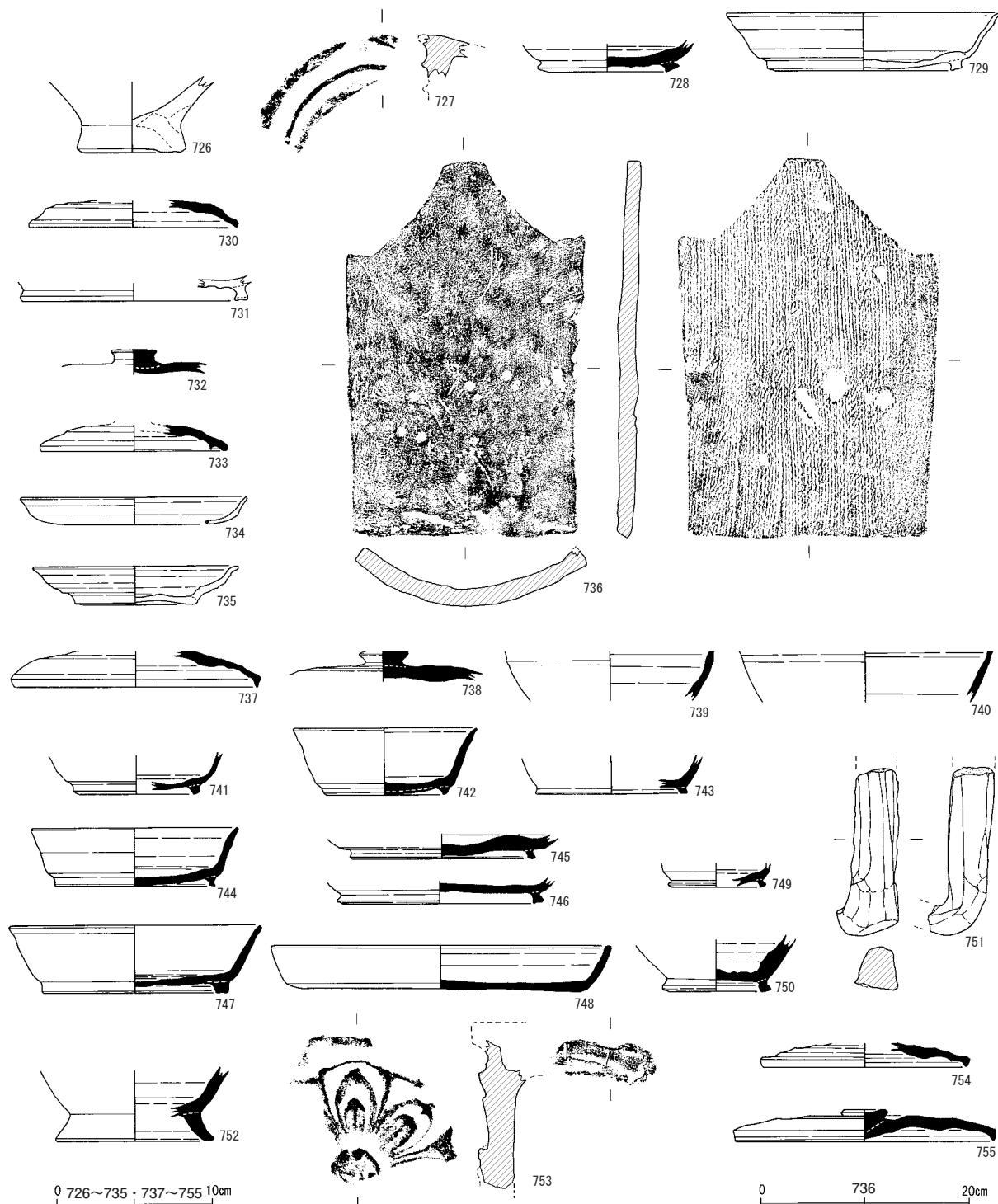
第 200 図 11 区 236- 土坑

- 1 : 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂  
(焼土粒を少量、10YR6/6 明黄褐色砂を含む)
- 2 : 10YR 4/2 灰黄褐色 砂
- 3 : 炭化物層 (焼土粒を含む)
- 4 : 10YR 7/4 にぶい黄橙色 砂 (炭化物、焼土粒を含む)

いずれも貼付け高台を持つ。748は須恵器の盤である。底面はヘラ切り離しのまま未調整。口縁部および内部は回転ナデ調整である。749、750、752は須恵器の台付き壺の底部とみられる。751は土師器の把手であろうか。

### 包含層

包含層出土遺物は、3点図化した。753は軒丸瓦である。丸瓦部との接合面に、ヘラによる刻み目を入れている。瓦当部に刻みを施す例は、少ない。754と755は須恵器の坏蓋である。



第201図 11区 出土遺物

## 第7章 2010(平成22)年度調査の成果

### 第1節 7-2区(第202図から第208図、写真図版33、34、50)

#### 調査区の概要

A1、A2区画に位置し、東に9区、西に7-1区、7-3区が隣接する。調査前の現況は水田及び里道である。方形に里道調査分の突出部が付属する。里道は、北側がコンクリート製擁壁となっており、1-1区との比高差は1.5mを超えていた。

調査区の西半部では、7-1区と同様に強く削平を受けており、耕作土または床土を除去すると地山が検出され、遺構の存在は希薄である。東側には包含層が一部遺存しており、土坑、溝などを検出した。東端は、現在の地割を反映して一段下がっており、耕作土下で地山を検出する。削平を受けたためか、遺構の残りはよくない。里道下からは、石垣とこれに伴う造成痕が検出された。

#### 土坑

**239- 土坑(第203図、第206図)** 調査区北側で検出した。長径2.5m、短径2m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。主として断面土層図の1層から、遺物がまとまって出土している。

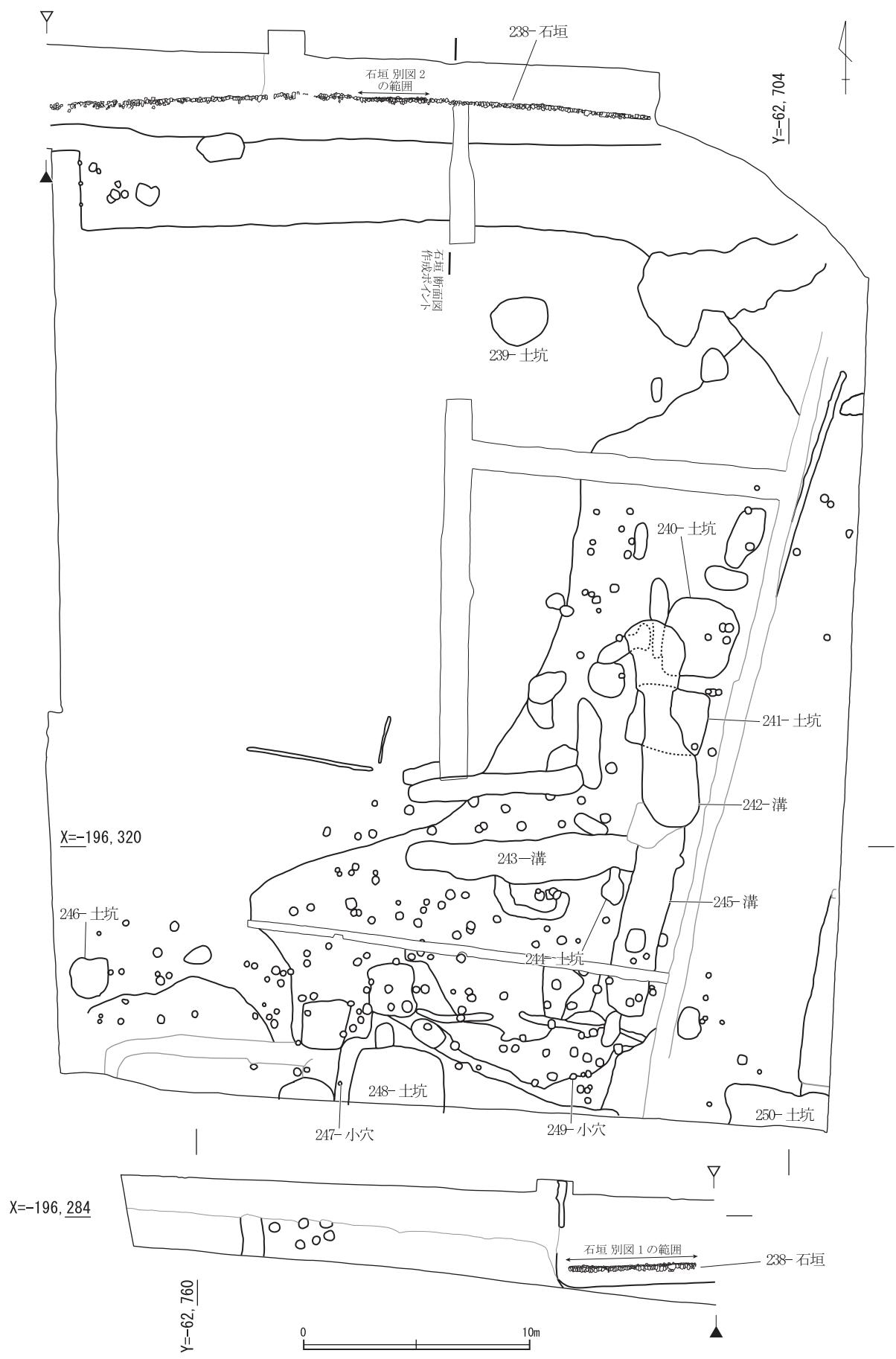
平瓦100点以上、丸瓦20点、須恵器12点、土師器50点以上、鉄器1点が出土した。このうち、1点を図示した。756は桶巻造りの平瓦である。凹面には、布目痕の上から粘土を厚く貼り足した後、ヘラケズリで整形している。凸面は、縄目タタキを施した後、ヘラナデで仕上げる。角は切り落とし、端面はヘラで丁寧に面取りしている。

**240- 土坑(第203図、第206図)** 調査区東側ほぼ中央で検出した。一辺2.8mの浅い方形の土坑である。図では、242-溝を切っているように見えるが、溝が深かったため、掘削中に240-土坑の形状が不明になったにすぎない。

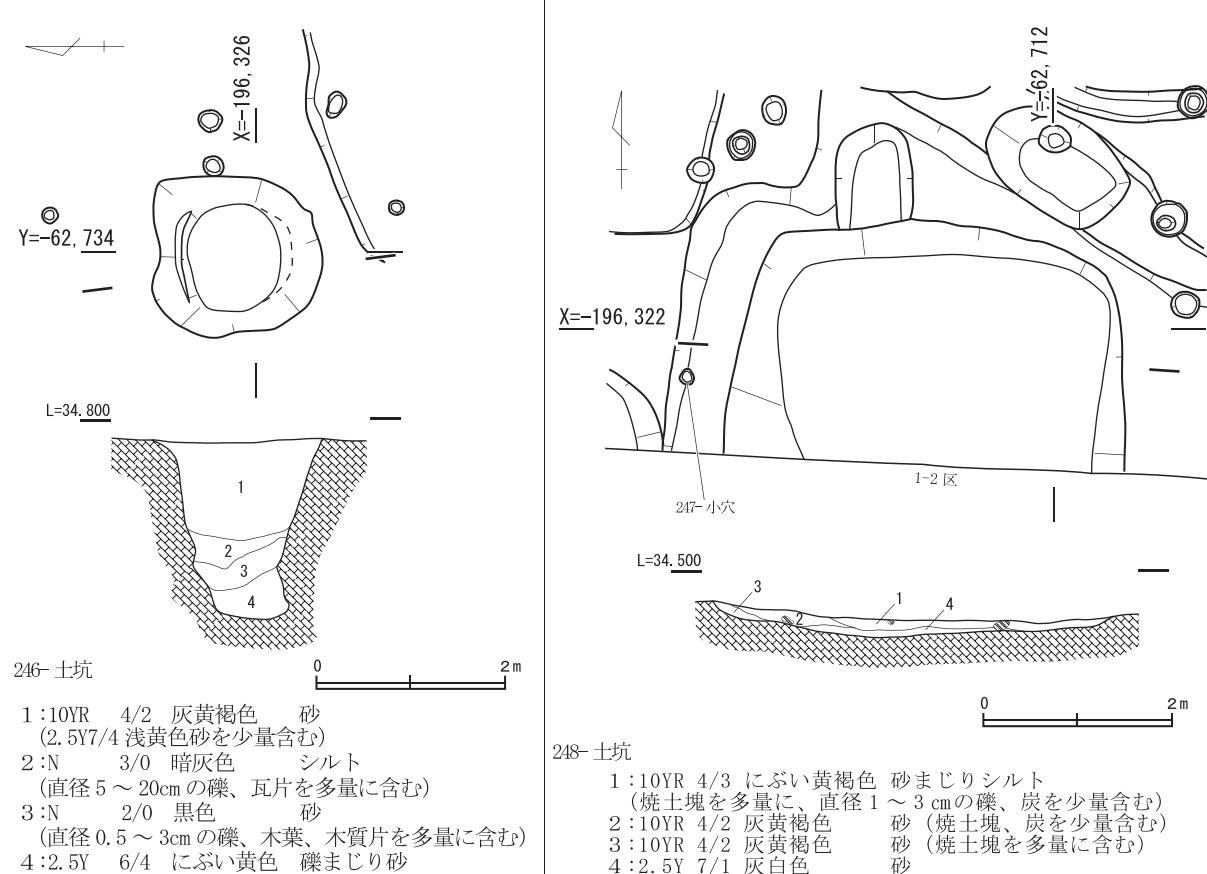
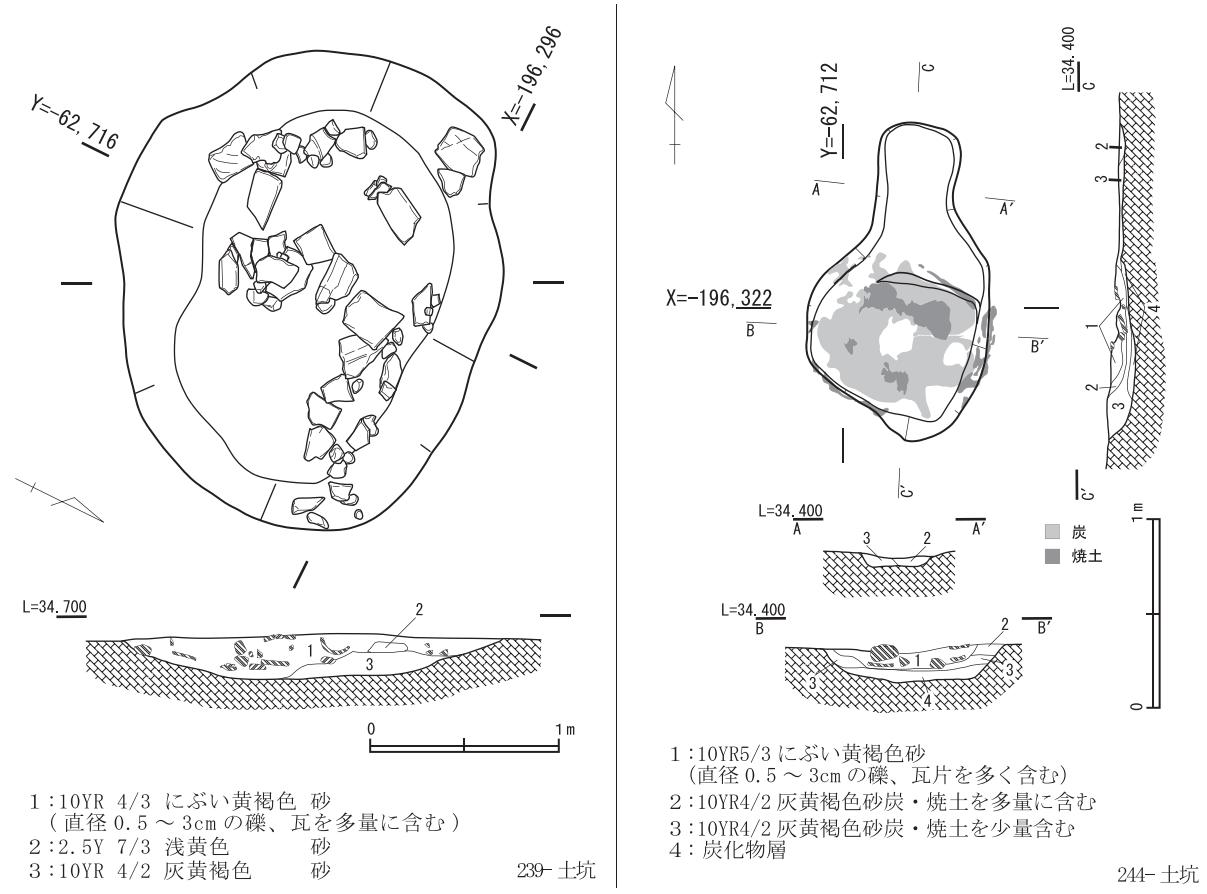
平瓦30点、丸瓦9点、須恵器1点、土師器2点が出土した。このうち、2点を図示した。757は平瓦である。凹面は、布目痕をヘラケズリで一部消している。凸面は、縄目タタキを施した後、横方向のヘラナデで仕上げる。角は切り落とし、端面はヘラで丁寧に面取りしている758は桶巻造りの平瓦である。凸面は、ナデの後、まばらに格子タタキを施す。厚さ約4cmと、通常の平瓦に比べて明らかに厚手の作りである。

**241- 土坑(第203図、第206図)** 調査区東側ほぼ中央で検出した。長辺3.2m、短辺2.8mの浅い方形の土坑である。図では、242-溝を切っているように見えるが、溝が深かったため、掘削中に241-土坑の形状が不明になったにすぎない。

道具瓦1点、平瓦48点、丸瓦16点、須恵器1点、土師器12点が出土した。このうち1点を図示した。759は、須恵質焼成の土製品である。一辺のみの残存のため全体の形状は明らかでないが、わずかにカーブを描きつつ立ち上がり、裏面下半には粘土で帯状の突出部を作り出す。表面の仕上げは粗く、粘土の継目などの凹凸が残る。道具瓦としてカウントしているが、性格は不明である。



第202図 7-2区 遺構全体図



第 203 図 7-2 区 239、246、248、249- 土坑



写真 17 7-2 区 246- 土坑と 238- 石垣

**244- 土坑（第 203 図、第 205 図）** 調査区東側ほぼ中央で検出した。直径約 0.9 m、深さ約 0.2 m の円形の土坑に長辺約 0.7 m、短辺約 0.5 m の浅い方形の土坑が取り付く。覆土には、炭化物や焼土を含む。特に、円形部分の底面には、炭化物層が存在し、側壁および底部には、強い熱を受けた痕跡がところどころに観察される。

平瓦 26 点、丸瓦 2 点、土師器 4 点が出土した。いずれも碎片で、図示できなかった。

**246- 土坑（第 203 図、第 205 図、写真 17）** 調査区南西端で検出した。直径約 1.7 m、深さ 1.8 m の平面不整円形の土坑である。

平瓦 200 点以上、丸瓦 50 点以上、土師器 1 点、瓦器 1 点が出土した。このうち、2 点を図示した。760 は桶巻造りの平瓦である。凸面はヘラナデ調整である。端面はヘラで丁寧に面取りしている。761 は平瓦である。凹面は、匙状の工具でケズリを施し、凸面には、まばらに格子タタキを施す。

**248- 土坑（第 203 図、第 206 図、写真図版 33）** 調査区南端で検出した。一辺約 4.2 m、深さ 0.2 m の隅丸方形の土坑である。1-2 区 9- 土坑と同一の遺構である。

平瓦 8 点、丸瓦 4 点、須恵器 1 点、土師器 11 点が出土した。このうち、762 から 765 の 4 点を図示した。762、763、765 は口径が異なるものの、いずれも丸みを帯び、やや安定性に欠ける底面を持つ。口縁部は大きく外傾する。口縁部端はやや厚く、丸く収められる。764 はいわゆるヘソ皿である。

**250- 土坑（第 202 図、第 206 図）** 調査区南端で検出した。一辺約 4.5 m の不整形の土坑である。1-2 区でも同一の遺構を検出している。

平瓦 4 点、丸瓦 1 点、土師器 5 点が出土した。このうち、1 点図示した、766 は、土師器の小皿である。

## 溝

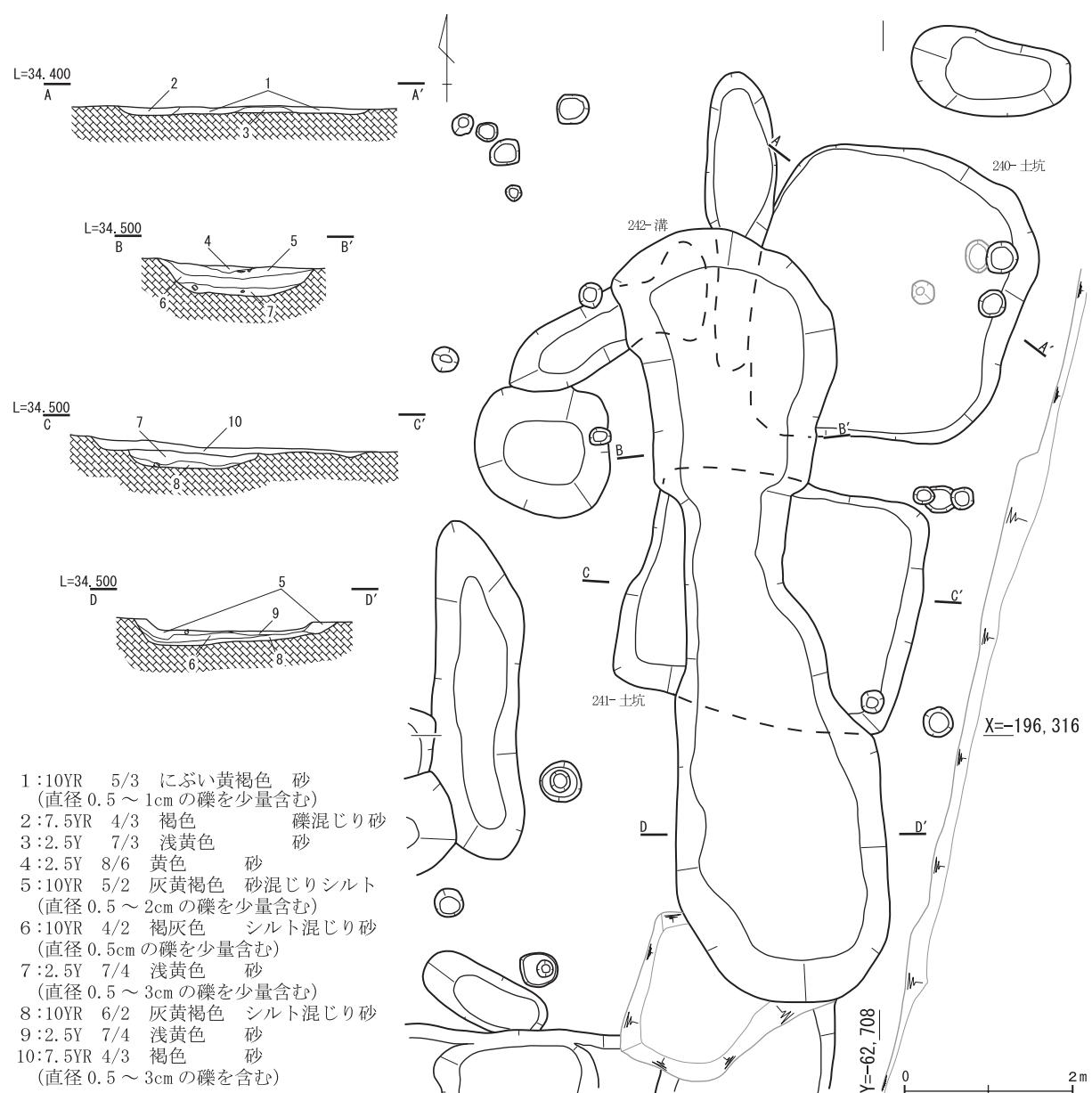
**242- 溝（第 204 図、第 206 図）** 調査区の東側に位置する、最大幅約 2.6 m、深さ約 0.3 m の溝である。241- 土坑と重複する部分の幅が狭くなっているようにみえるが、これは、241- 土坑によって上端を削平された結果であろう。

平瓦 43 点、丸瓦 10 点、須恵器 3 点、土師器 12 点が出土した。このうち、768、772 の 2 点を図示した。768 は、凸面に縄目タタキを施したのち、ヘラナデで仕上げる平瓦。端面には丁寧な面取りを施されている。772 は、一枚造りの平瓦で、凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。

**243- 溝（第 205 図、第 206 図）** 調査区の東側に位置する。最大幅約 2 m、深さ約 0.2 m で、東西方向に走る溝である。245- 溝に切られている。

平瓦 94 点、丸瓦 10 点、須恵器 23 点、土師器 13 点が出土した。このうち、769、770 の 2 点を図示した。769 は須恵器の壺蓋、243 は須恵器の壺身である。

**245- 溝（第 205 図、第 206 図）** 調査区の東側に位置する、最大幅約 2 m、深さ約 0.2 m の溝である。242- 溝と接する部分の大半が攪乱により失われているため、判断が難しいが、同一の遺構ではなく、242- 溝に切られた遺構のようである。



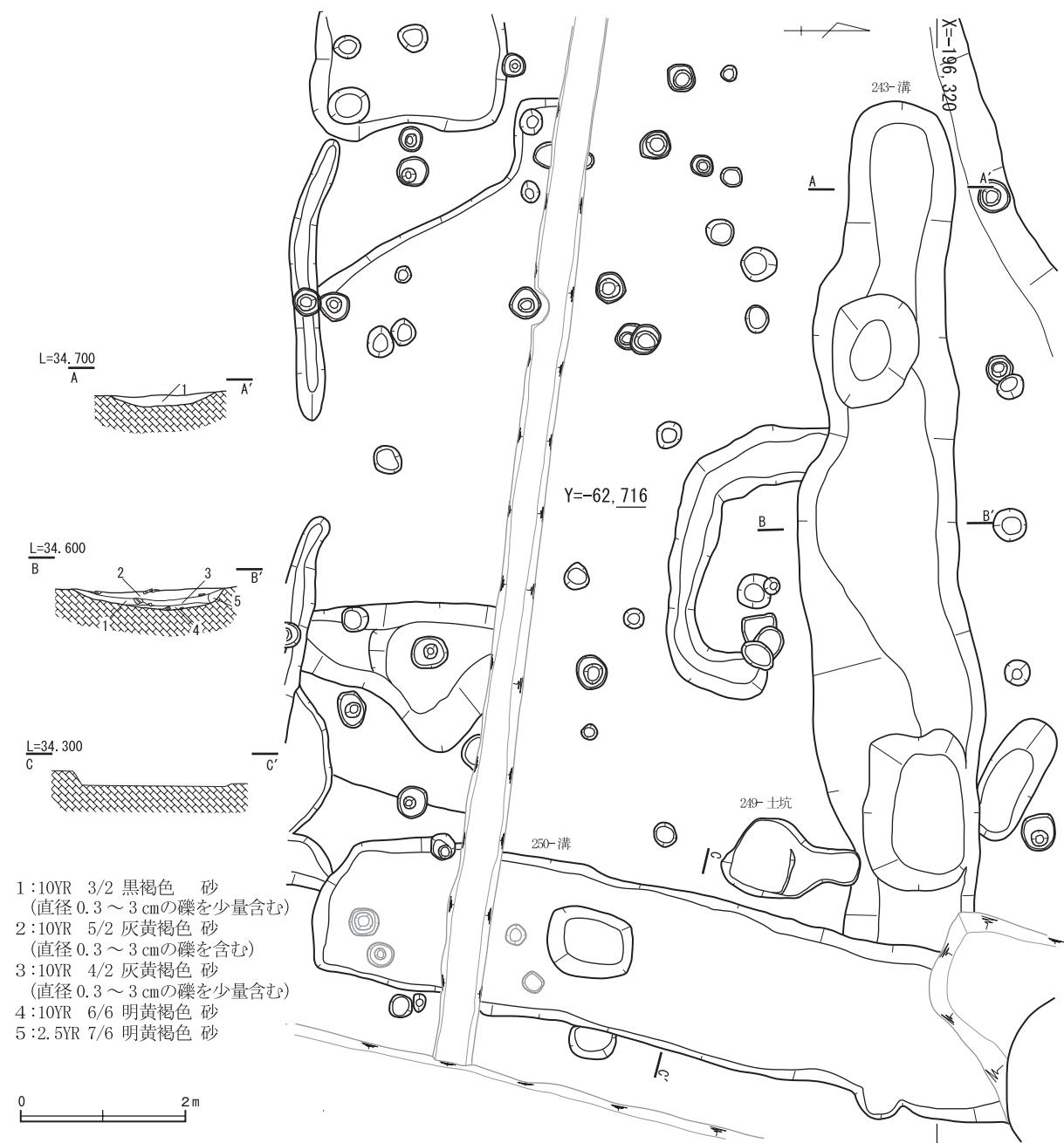
第 204 図 7-2 区 240、241、242- 土坑

平瓦 8 点、丸瓦 5 点、須恵器 8 点、土師器 3 点が出土した。このうち、771 の 1 点を図化した。771 は、須恵器の高台付きの皿である。高台は貼付け高台で、全面を丁寧なナデで仕上げる。

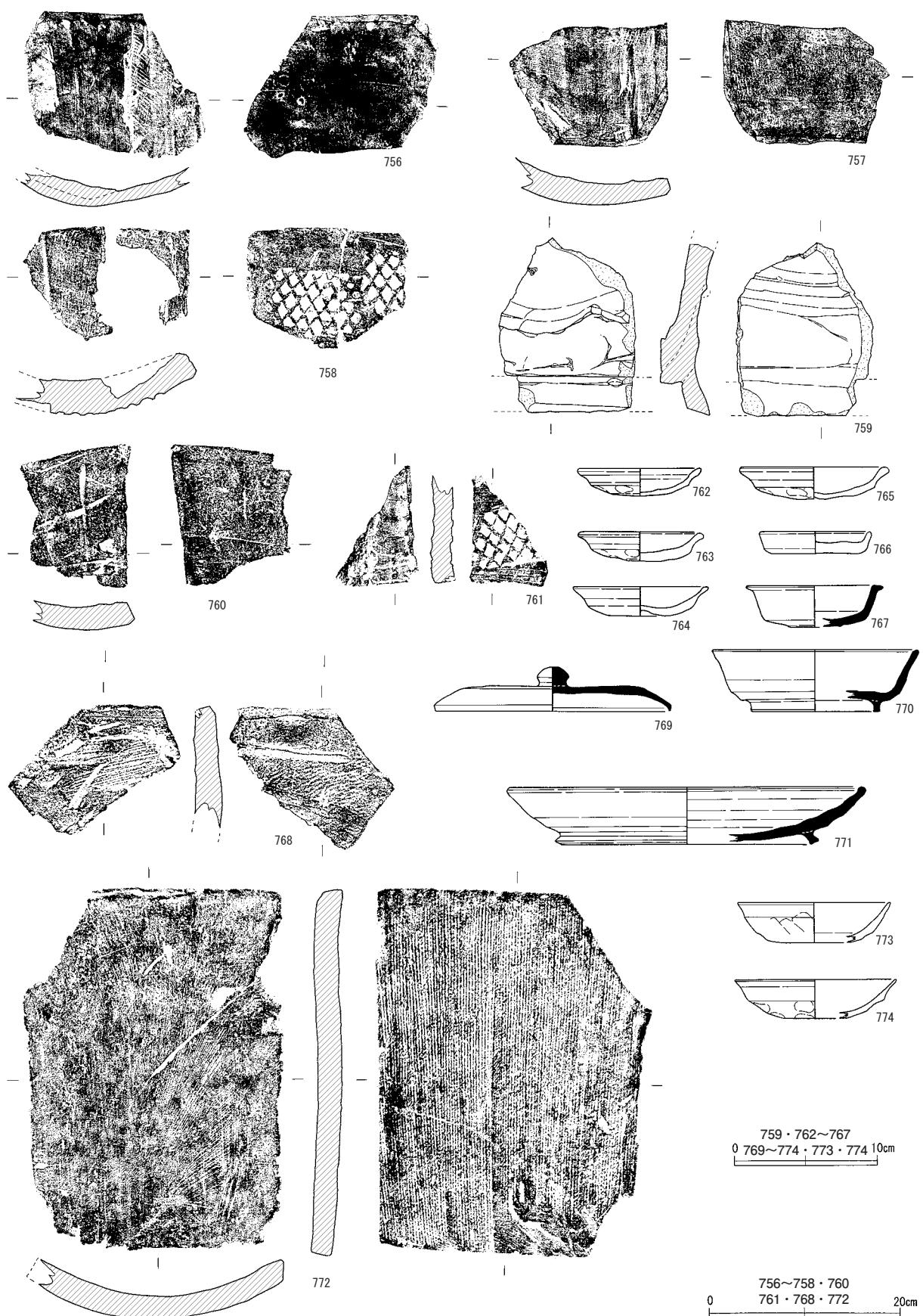
### 小穴

247- 小穴（第 203 図、第 206 図） 248- 土坑の西側で検出した小穴である。土師器 4 点が出土した。773 は、土師器の皿である。

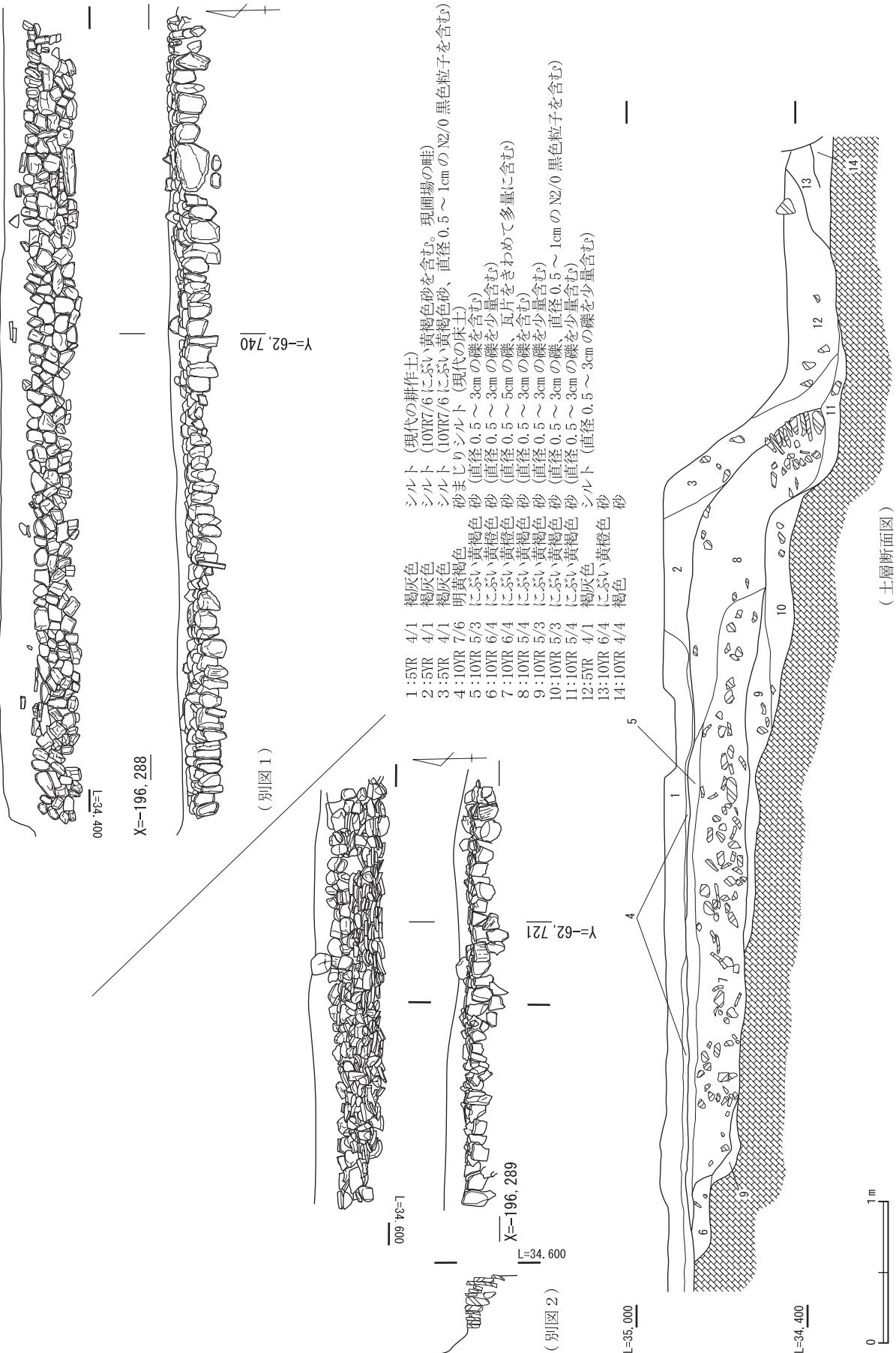
249- 小穴（第 202 図、第 206 図） 調査区南端付近で検出した小穴である。土師器 22 点が出土した。774 は土師器の皿である。247- 小穴出土の 773 に似た形態をとるが、仕上がりがよりシャープである。



第 205 図 7-2 区 243、250- 溝



第 206 図 7-2 区 土坑、溝、小穴 出土遺物

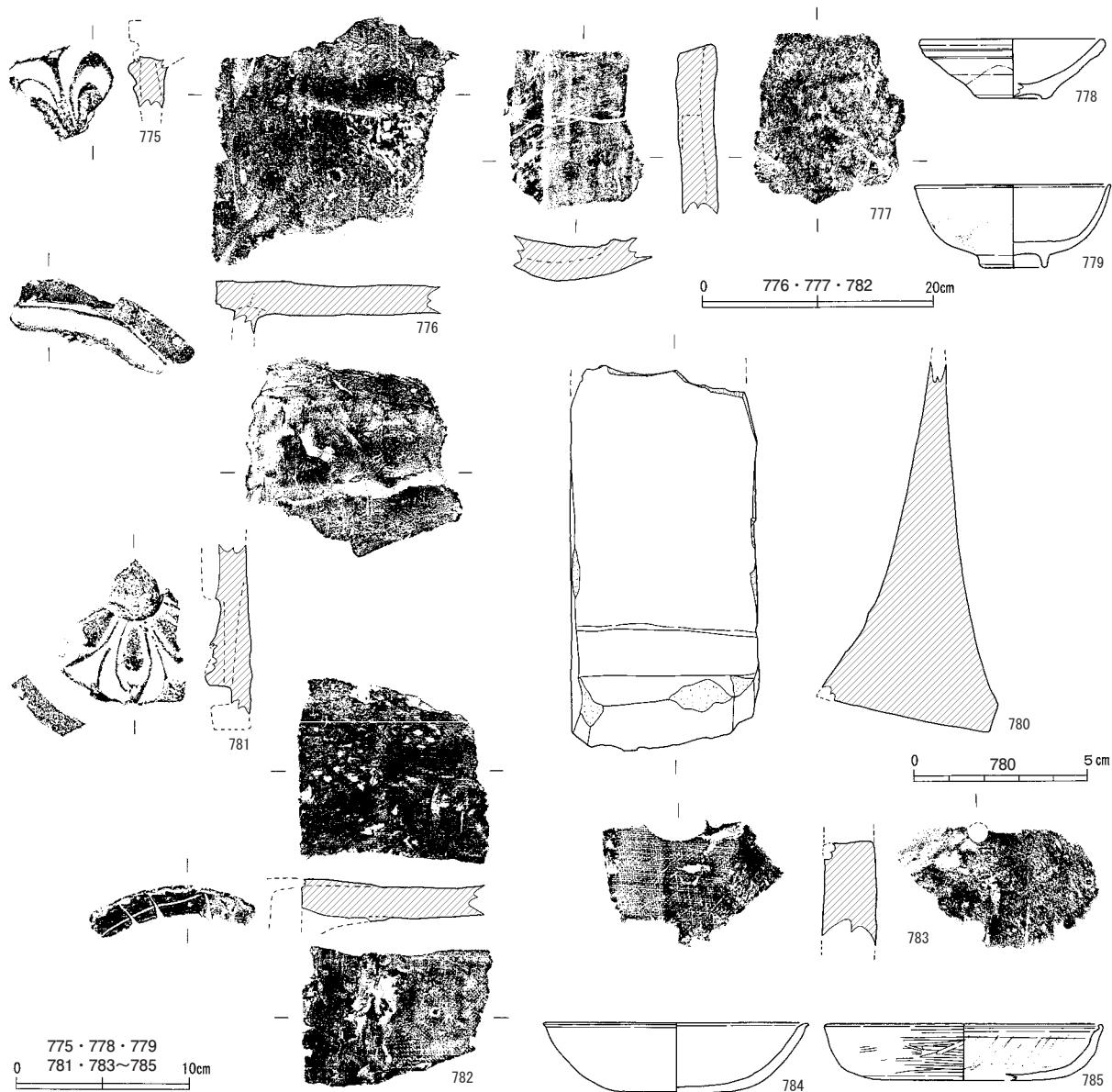


第 207 図 7-2 区 238- 石垣

## 石垣

238- 石垣（第 207 図、第 208 図、写真 17、写真図版 34、50） 調査区北端を東西にはしる里道の下、現在の地割の境界線上に約 40 m にわたって検出した。南から遺存状態は部分によって大きく異なる。天端から下端まで完全に残る地点もあるが、石がほぼ全て消失し、下端の盛土のみが確認できる地点もある。

基底部は、地山を周囲より若干掘削したのち、砂質土を敷き詰めて構築している。石を押さえるための木杭等の痕跡は、認められなかった。石垣は、整形しない自然石を乱石積みにしているが、平坦な面が外面を向き、かつ、小口積みになるように積み上げている。構築の単位は、あまり明瞭ではないが、別図 1 で示した地点では、石垣に用いられている石でも大型の礫塊一つ分の高さを 1 単位として横方向へ順次積み上げているようである。別図 2 の範囲では、古代瓦を多用している。平坦な面が外面を向き、かつ、小口積みになるように積み



第 208 図 7-2 区 238- 石垣、包含層 出土遺物

上げている点では、別図1の範囲と同じである。しかし、構築単位は、判然としない。

断面土層図からは、石垣の構築前に南から北へと落込む地形を0.3cm程度、断面土層図9から10で整地していることがわかる。石垣は、この整地範囲よりも約0.6m北へ進んだ位置に構築され、落込みは断面土層図6から8の整地土によって埋められている、断面土層図8は石垣の裏込め土でもある。断面土層図作成位置では石垣の残りが悪いが、残りの良い地点では、断面土層図8の上部と石垣の天端は一致する。

軒丸瓦2点、平瓦200点以上、丸瓦50点以上、須恵器2点が出土した。775から780の6点を図示した。石垣に使用されていた瓦は、いずれも破損が著しく、図示していない。図示したのは、裏込めにあたる8層、石垣と落込みとの間を埋める整地層である6、5層から出土した遺物である。

775、776は軒丸瓦である。777は桶巻造りの平瓦である。凸面には格子タタキを施している。3枚の粘土板を接合した痕跡が残る。北山廃寺、北山三嶋遺跡出土の桶巻造りの瓦には、粘土板を接合した痕跡の残るもののが散見されるが、777のように直線的な貼合わせ痕が残る事例は、他に確認できなかったため図示した。797は施釉陶器である。削り出し高台を持つ唐津系と思しき小皿である。797は染付である。見込みには、離れ砂が付着している。780は砥石である。石質は粘板岩系で、縞模様が入っている。表裏2面を使用している。

797のような遺物が出土していることから、近世以降の所産であることは確実である。

#### 包含層（第208図、写真18）

包含層出土遺物として、目に付いた遺物を提示した。781は軒丸瓦である。中房が剥落している。752は軒丸瓦の丸瓦部である。凸面は、格子タタキの後、ナデて仕上げている。先端をやや薄くし、端部にはヘラで刻み目を入れてから瓦当部と合わせ、凸面に少量、凹面に多量の粘土を貼込んで接合している。783は桶巻造りの瓦である。欠損が著しいが、釘穴を持つ数少ない事例であったため掲載した。929、930は軒丸瓦である。A類とB類の両者を提示した。

784、785は土師器である。785は外面に横方向のミガキを施している。内面には粗くだがジグザグに暗文を施している。



写真18 7-2区 包含層出土遺物

## 第2節 8-6 区（第 209 図から第 221 図、写真図版 33、34、50）

### 調査区の概要

A2、B2 区画に位置し、北に 8-4 区、8-5 区、東に 8-3 区が隣接する。ほぼ方形の調査区である。調査前の現況は水田である。当初は台地の端部までの調査だったが、253- 窯が調査区外に向かって伸びていたため、調査区を拡張し、崖面も調査対象とした。

調査区のほぼ全域で、水田の造成に伴うとみられる土地改変による強く削平を受けており、耕作土または床土を除去すると地山が検出され、遺構の存在は希薄である。南東端に小規模な谷状の落込みがあり、ここに窯が築造され、灰原が形成されている。

### 窯

253- 窯（第 210 図から第 212 図、写真図版 36、写真図版 50） 調査区南端で検出した。半地下式の窯である。焼成部の一部、幅約 2.7 m、長さ約 3.4 m 分のみが残存している。

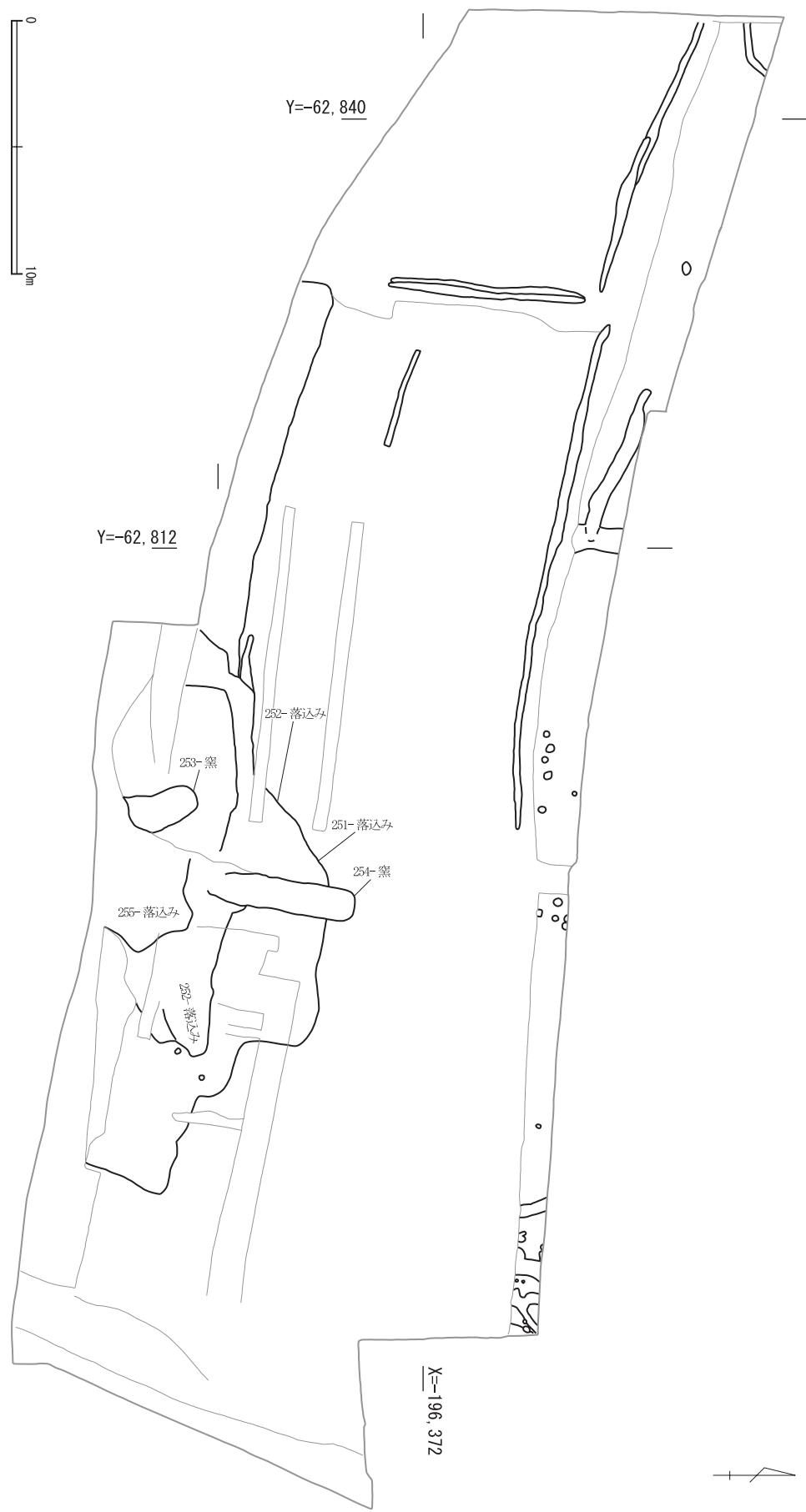
このうち、先端部は後述する 255- 落込みを掘削する際に除去している。第 211 図の断面土層図では、253- 窯と、隣接する 254- 窯、255- 落込みとの関係を明確には示すことができていないが、255- 落込みがほぼ埋没した後、構築されている。

第 212 図の断面土層図 1 から 10 が窯の覆土にあたる。断面土層図 11 から 30 は 255- 落込みの覆土にあたる。なお、20 は、窯の覆土のようにもみえるが、A ラインおよび C ラインの断面土層の観察から、窯の構築前に堆積した土と判断した。この中には、18 や 19 のような炭化物混じりの土層が含まれており、255- 落込みが本窯よりも先行する時期に機能していたことを示す。20 や 21 が窯の下部に伸びていることを考えれば、254- 窯の東側に位置し、255- 落込みに向かって伸びるやや深い落込みと同様の微地形がこの位置にもあり、それを流用したのかもしれない。

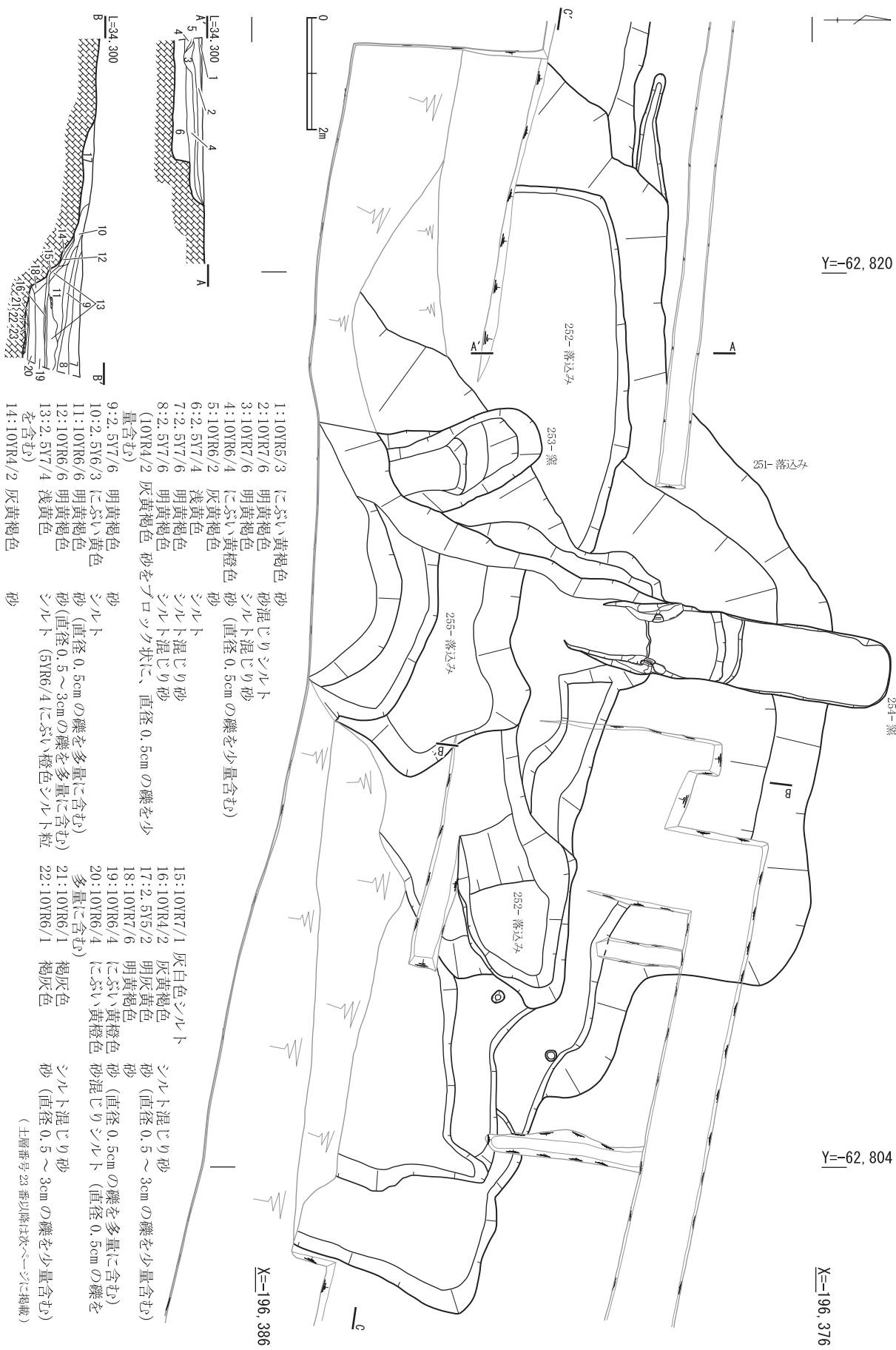
窯の覆土を掘削する際は、窯壁の検出に努めたが、通例なら存在するはずの強く焼けしまった層が確認できなかった。側壁は、もともと赤褐色の礫層であることもあって、被熱痕を積極的には認定できなかった。断面土層図 C ライン付近の平面形の認定が十分にできなかつた要因には、窯壁が存在するとの前提に立って掘削したこともある。

内部からは、多量の瓦が出土している。原因は不明だが、西側の側壁に沿って特に他量に出土した。大半が平瓦である。

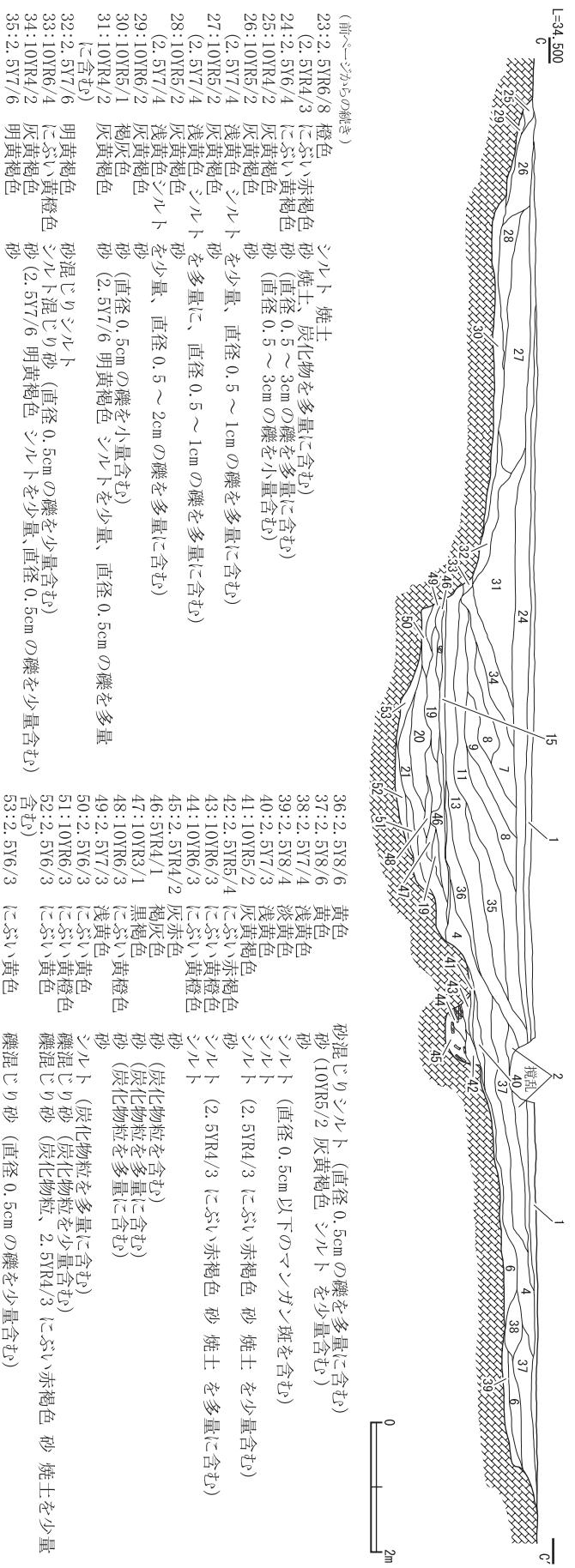
平瓦 100 点以上、丸瓦 4 点が出土した。786 から 793 の 8 点を図示した。出土数は多かったが、全体の大きさや形状を判断可能なものは、786 のみだった。窯という特性から、3 辺が残されているものは、状態の若干悪いものも含めて図示している。いずれも、桶巻造りの平瓦である。凹面には糸切り痕と布目痕が観察され、凸面は格子タタキを施したのち、ナデ消している。内面の端部はいずれも丁寧に面取りを施している。なお、788 は凹面と凸面とを左右逆に図示しているので注意されたい。



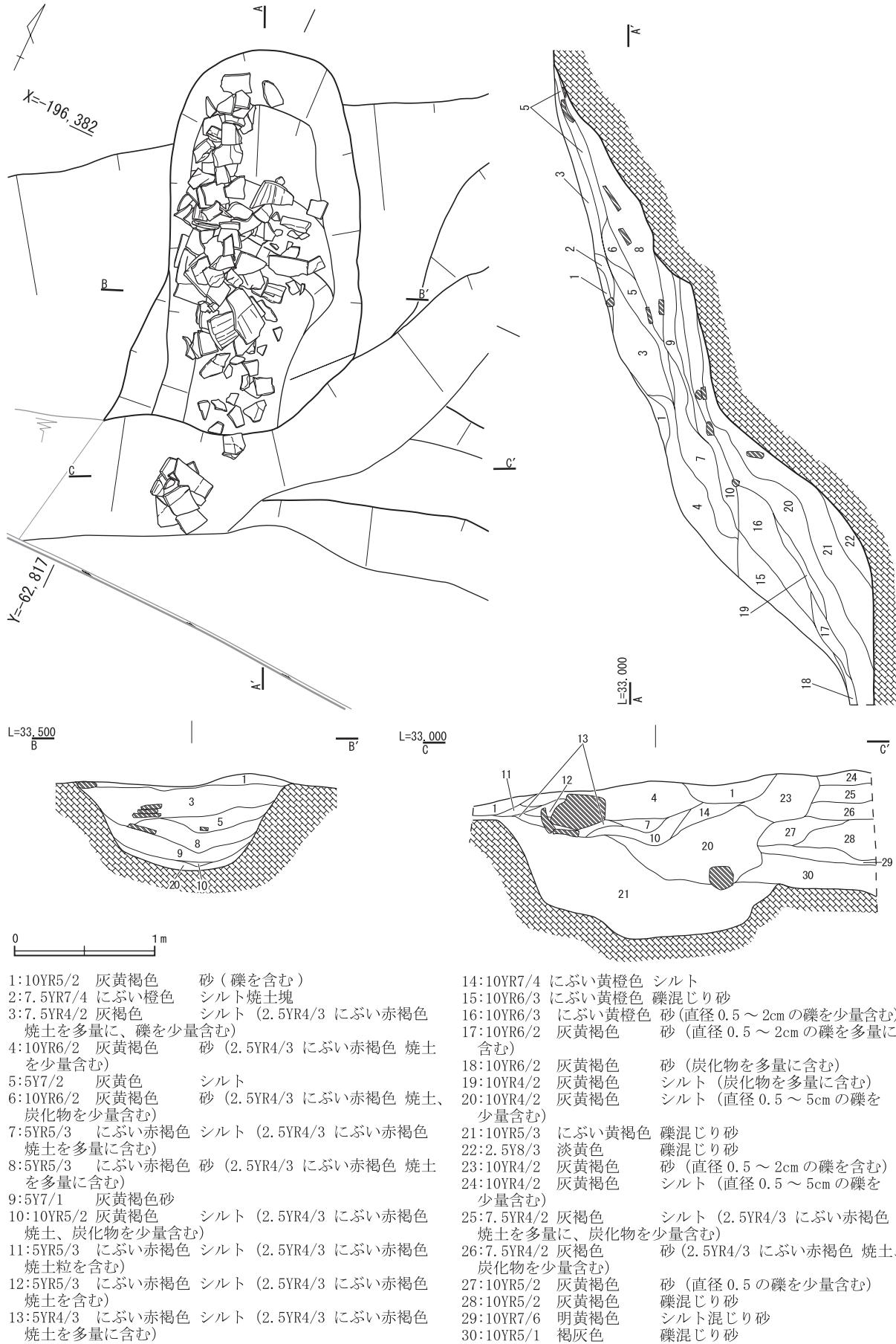
第 209 図 8-6 区 遺構全体図



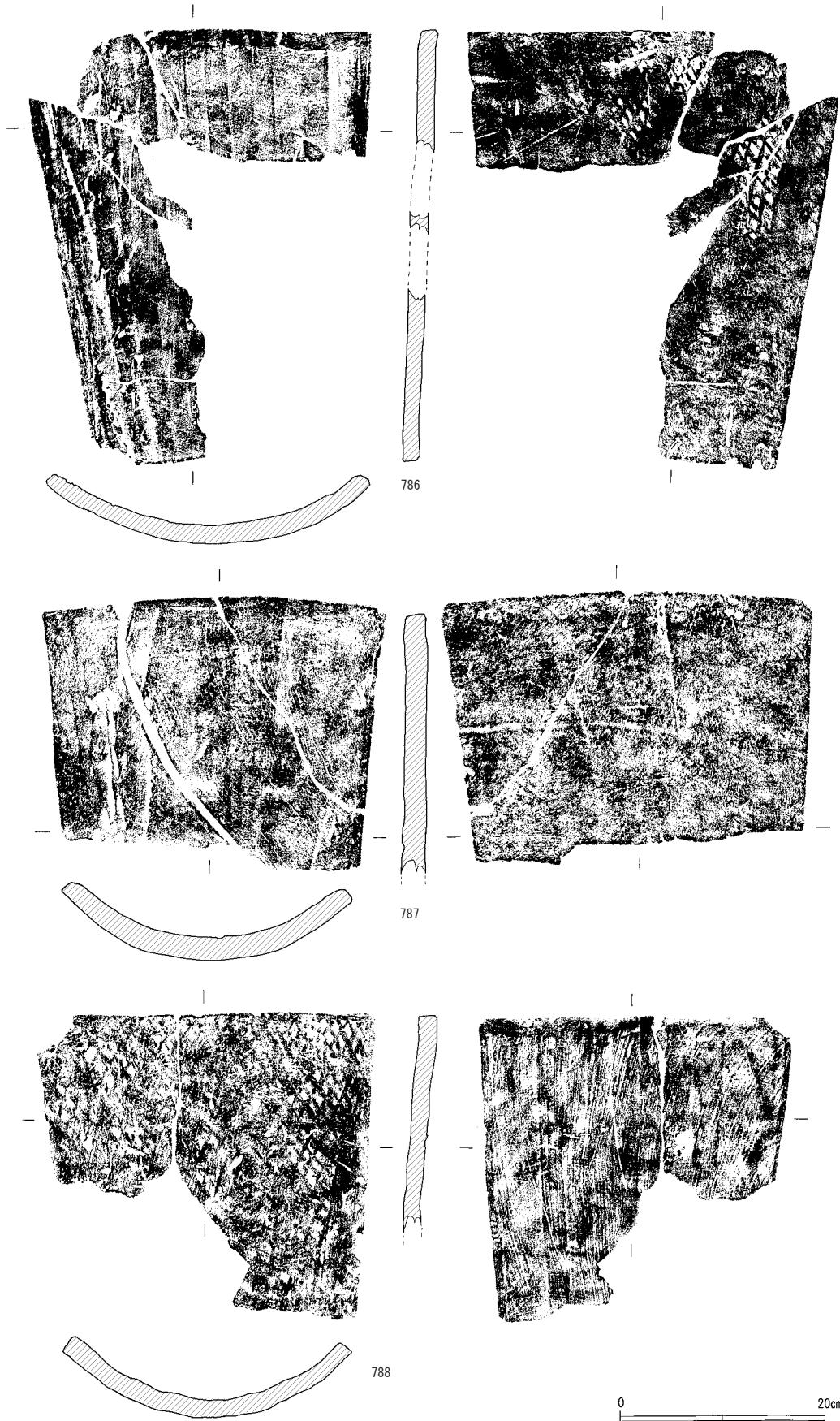
第210図 8-6区 251-落込みと周辺の遺構



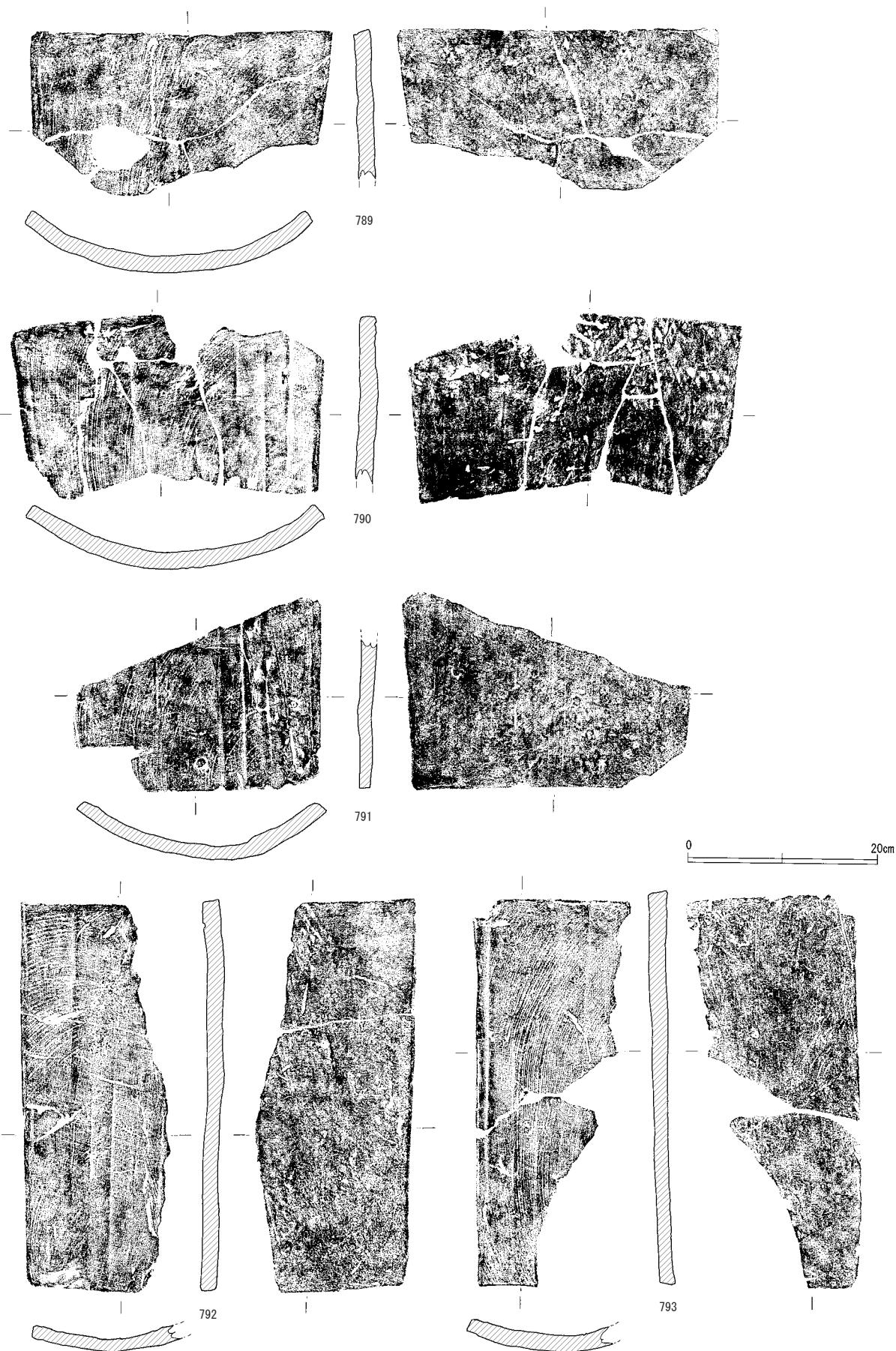
第 211 図 8-6 区 251- 落込み 断面土層図



第212図 8-6区 253-窯



第213図 8-6区 253-窯 出土遺物（その1）



第214図 8-6区 253-窯 出土遺物（その2）

254- 窯（第 215 図から第 219 図、写真 19、写真 20、写真図版 37、38、50） 調査区中央部南端で検出した。全長約 5.5 m、床面最大幅は約 1.3 m である。

煙道部は、削平を受けており、赤変し堅く焼け締まった長さ 0.7 m の範囲を確認したにとどまる。

焼成部はほぼ平行に掘削され、長さ約 3 m、幅約 1.3 m である。側壁は床面から約 0.7 m の高さまで遺存していた。床面の傾斜角は 19° 前後で段は設けられていない。ほぼ全面で、地山にあたる段丘礫面の表面に粘土を薄く貼込み、窯壁を構築している。

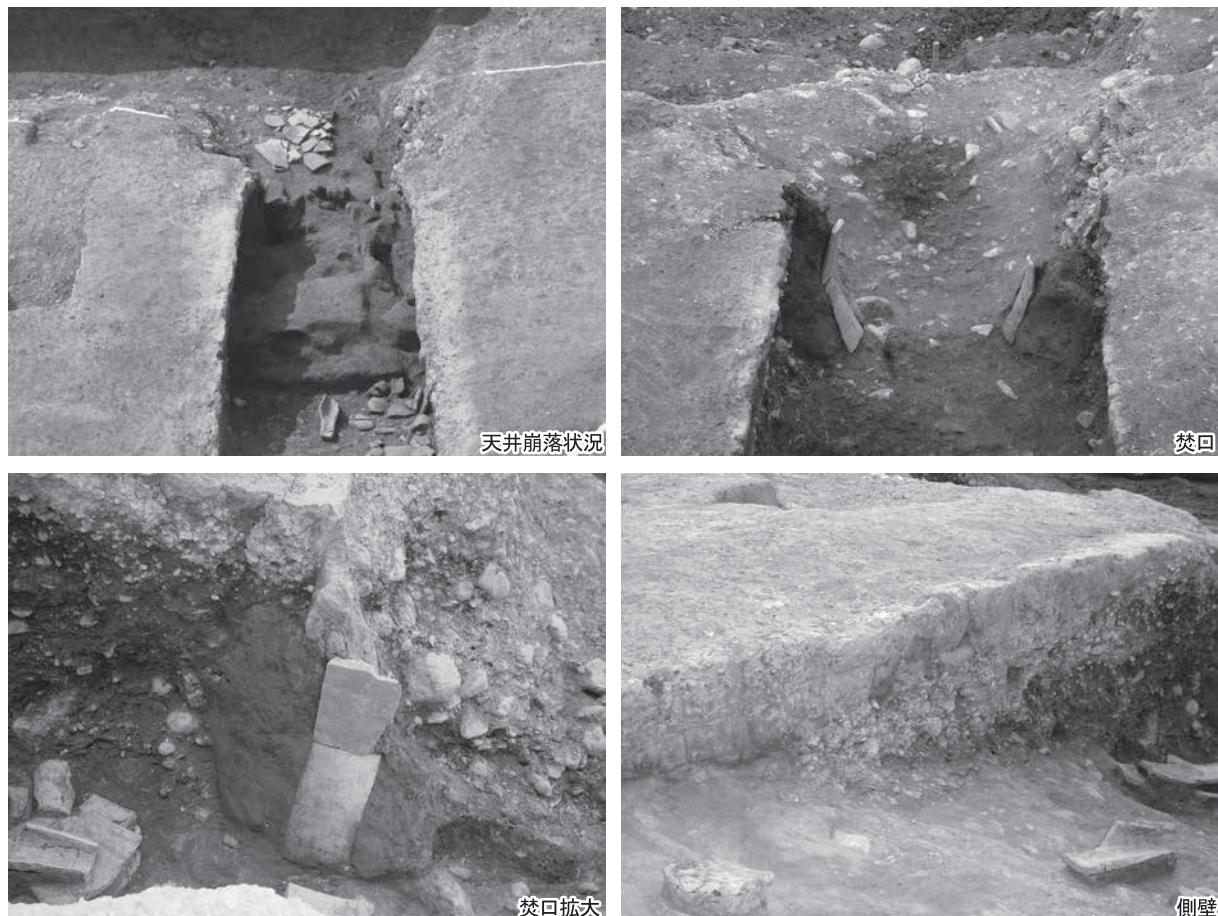
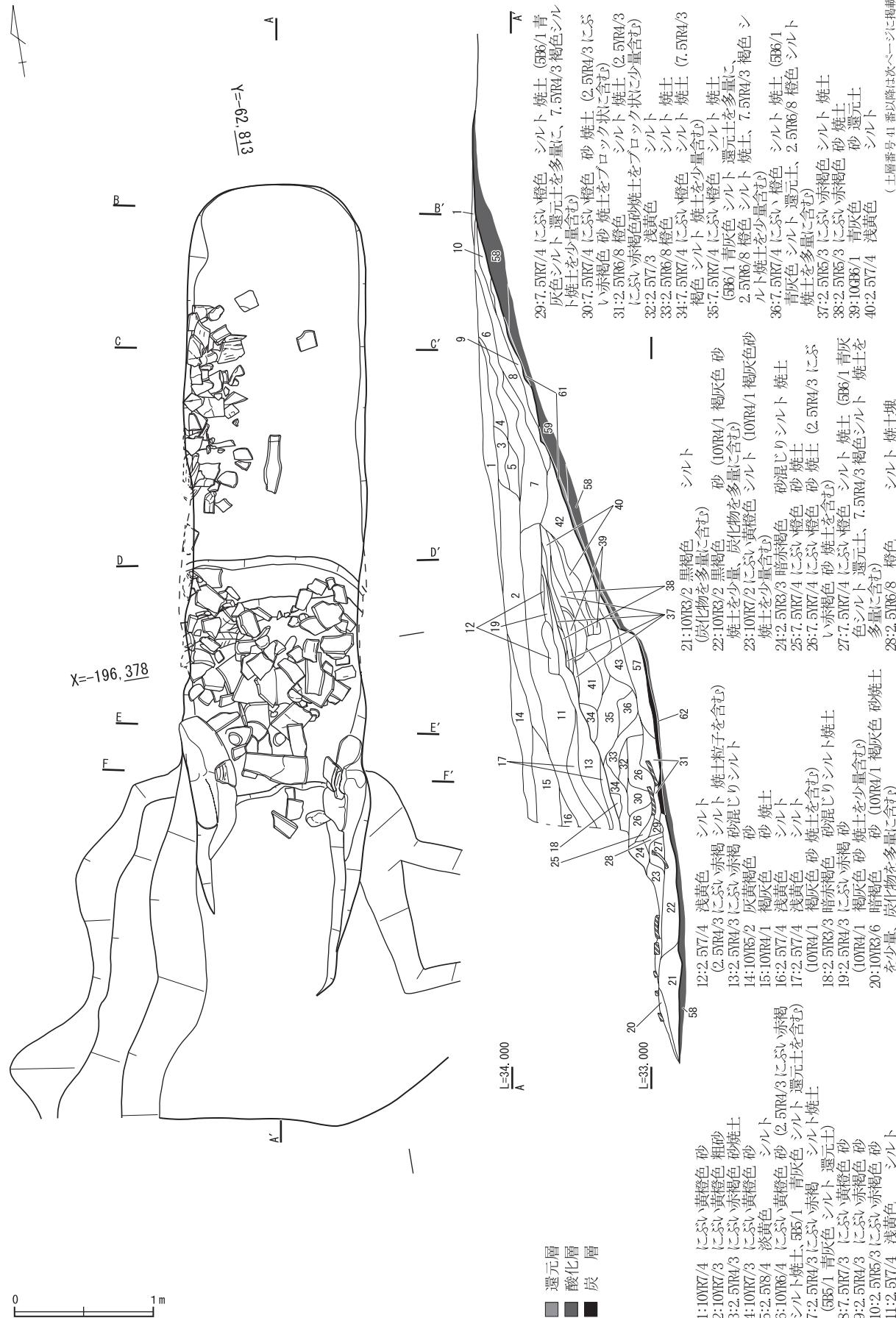


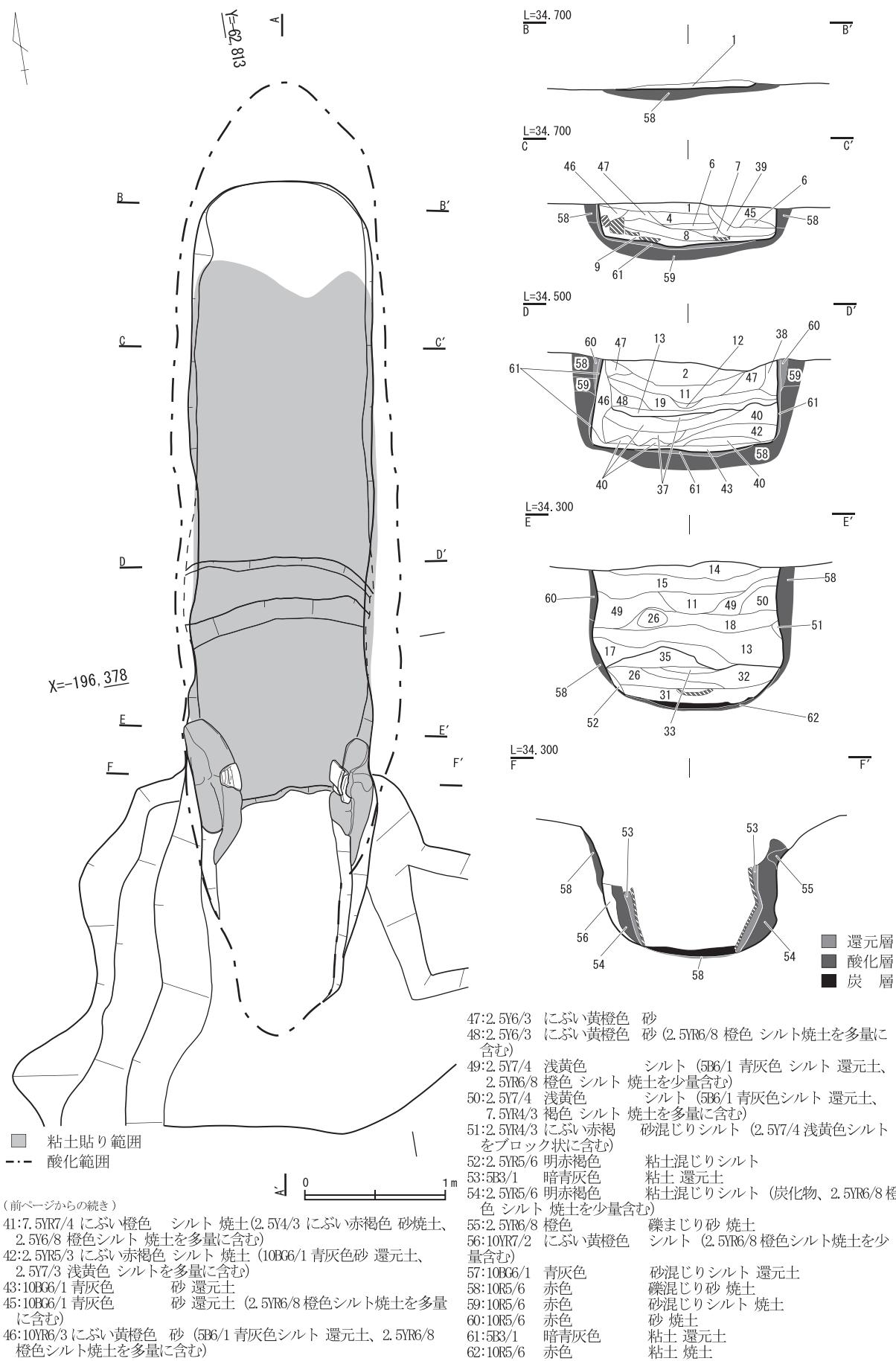
写真 19 8-6 区 254- 窯



写真 20 8-6 区 254- 窯断割り状況と 255- 落込み断面土層



### 第215図 8-6区 254- 窯 遺物出土状況



第 216 図 8-6 区 254- 窯 完掘状況

燃焼部は長さ約 1.4 m、幅は 1.2、高さ約 1 m が遺存している。焚口は幅 0.6 m で、左右側壁には、粘土塊を盛って幅を狭め、その上に平瓦を貼り付けて整形している。

燃焼部から焼成部にかけて、断面土層図の D ラインから F ラインにかけては天井が崩落した状態で検出されている。崩落土の下からは、瓦がまとまって出土している。

なお、本窯に伴う灰原とみられる 255- 落込みの断面土層図の観察から、複数回操業した可能性が高い。そのため、床面の断割り等を実施し、補修の有無等の確認を試みたが、確認できた操業面は 1 面のみである。

軒平瓦 1 点、道具瓦 2 点、平瓦 200 点以上、丸瓦 100 点以上、土師器 1 点が出土した。土数は多かったが、全体の大きさや形状を判断可能なものは、ごく少ない。253- 窯出土遺物と同様に、3 辺が残されているものは、状態の若干悪いものも含めて図示している。

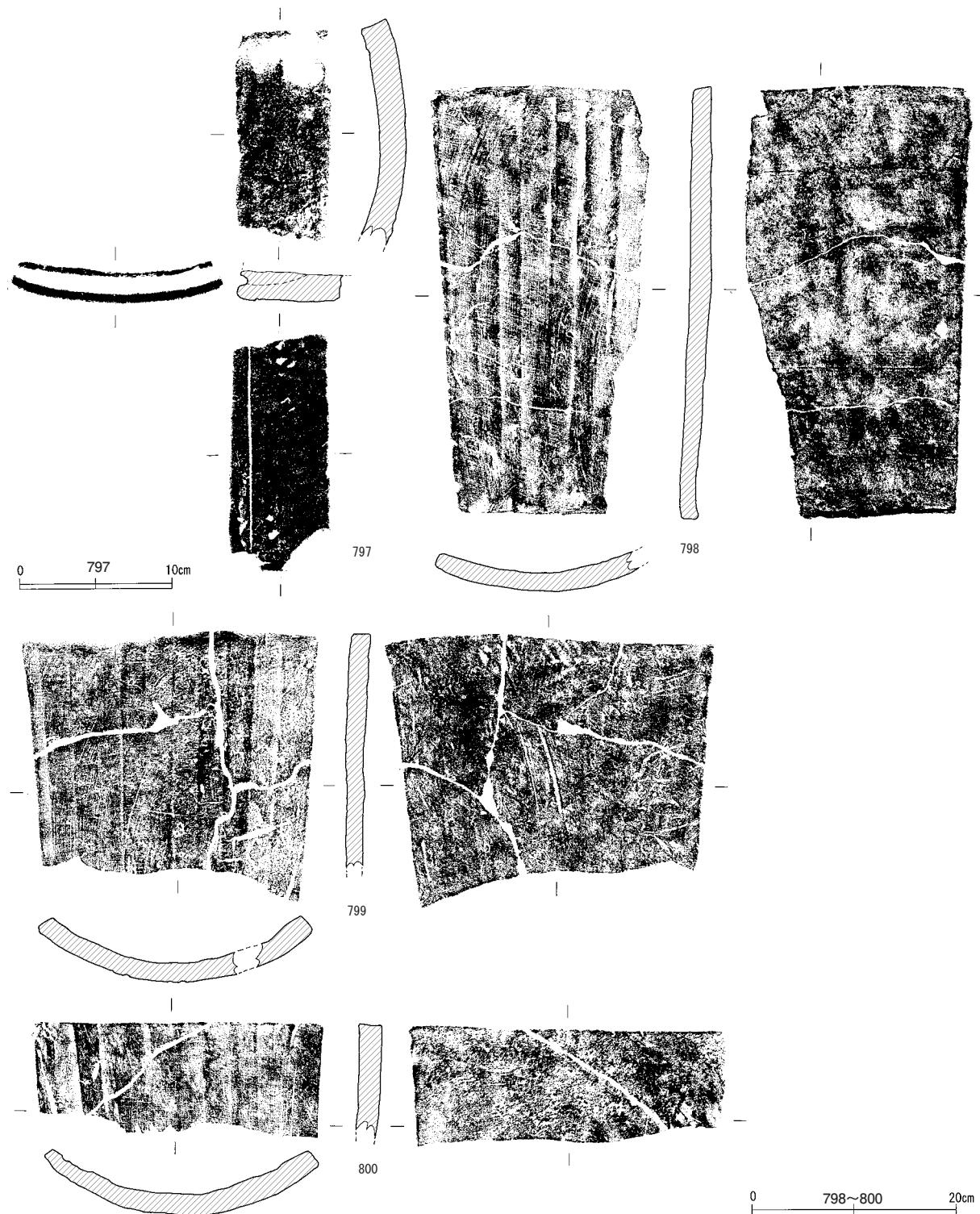
794 から 806 の 13 点を図化した。802、804、805 のように焼成不良で脆く、表面に炭素分が付着し、黒褐色になっているものがある。

797 は軒平瓦である。瓦当面の上半を欠損している。欠損面は比較的なめらかで、粘土の継ぎ目から剥落したとみられる。凸面は格子タタキを施したのち、ナデで仕上げている。重弧文軒平瓦とみるが、破損が著しく、詳細な形式は不明である。

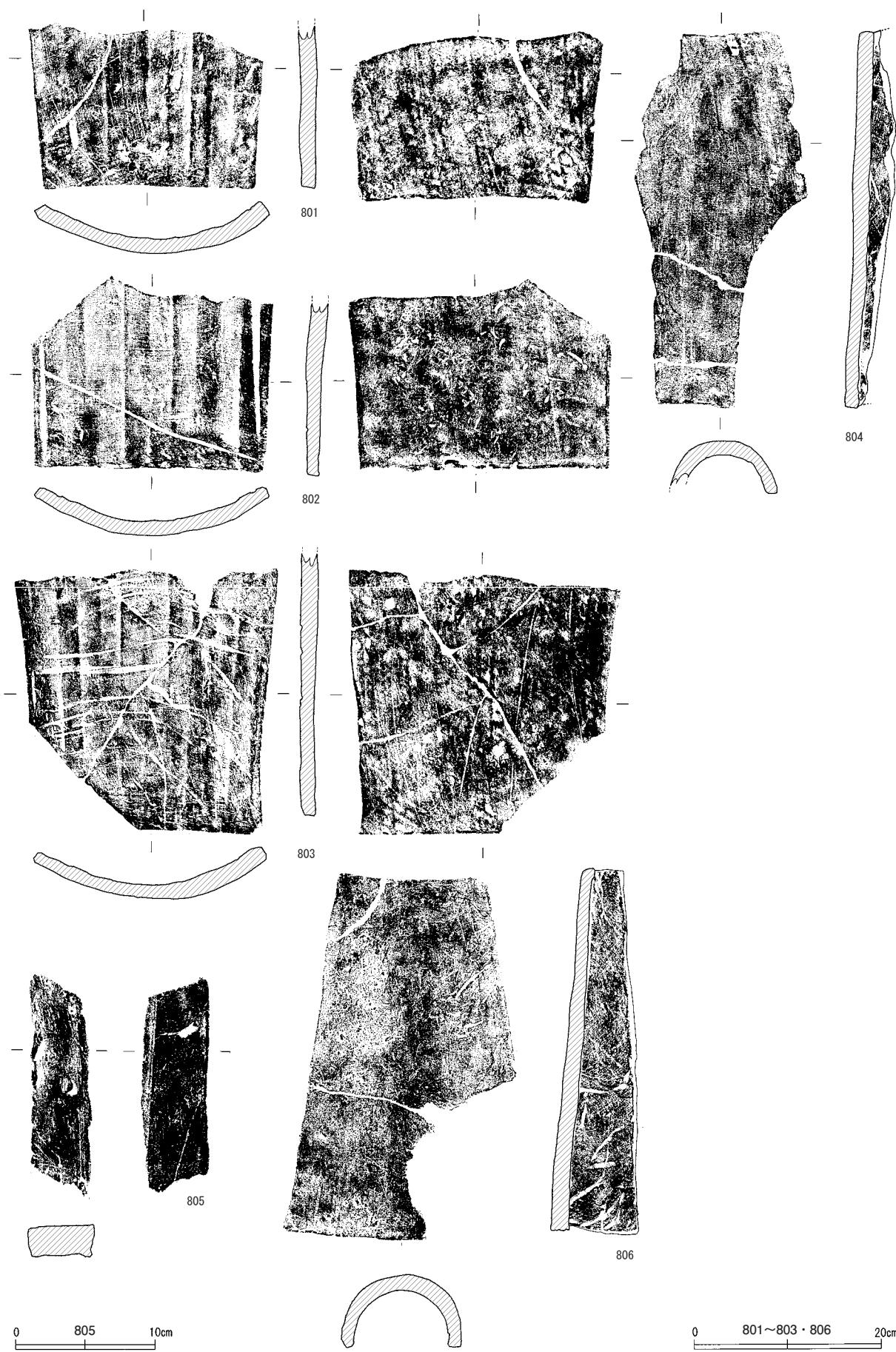


第 217 図 8-6 区 254- 窯 出土遺物 (その 1)

794、798 から 803 はいずれも、桶巻造りの平瓦である。凹面には布目痕が観察され、凸面は格子タタキを施したのち、ナデ消している。内面の端部はいずれも丁寧に面取りを施している。795 は桶巻造りの平瓦だが、凸面の格子タタキをナデ調整しない。本窯出土瓦は、図示分を含め、土師質の赤褐色に焼成されたものと、表面に炭素分が付着し、黒褐色になったものからなり、いずれもやや軟質である。しかし、795 のみは表面青灰色で、しかも、表面に自然釉が付着するなど極めて硬質で良好な焼成となっている。



第 218 図 8-6 区 254- 窯 出土遺物 (その 2)



第219図 8-6区 254-窯 出土遺物（その3）

804、806 は丸瓦である。804 は凸面に格子タタキを施したのち、ナデで仕上げている。凹面には糸切り痕と布目痕が観察される。806 は、縦方向の強いナデが丁寧に施されており、タタキ調整は、観察できない。804 と同様に、凹面には糸切り痕と布目痕が観察される。

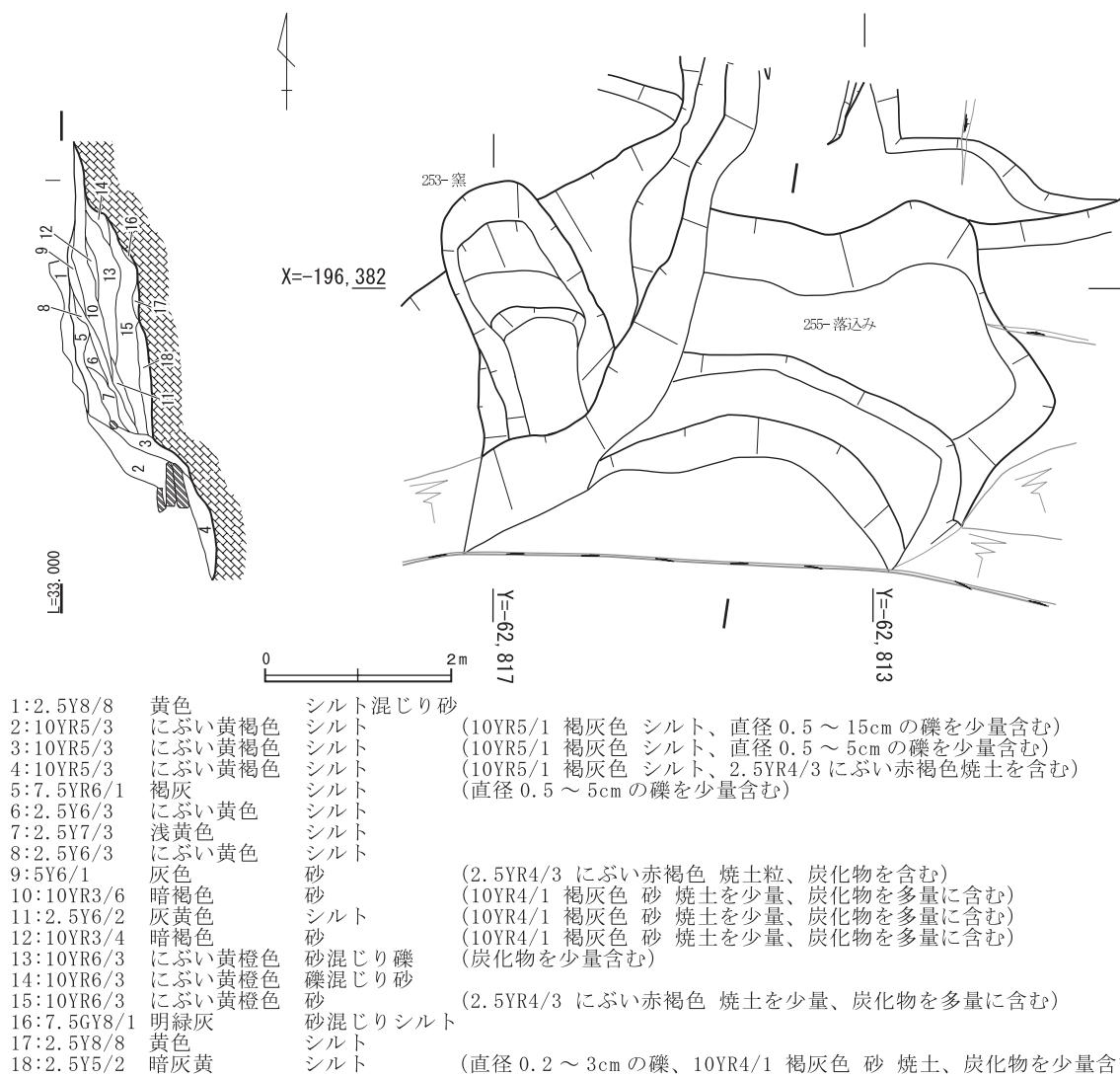
805 は道具瓦である。796 は道具瓦か磚の類とみられる。端面は、フレーク状に破損している。

### 落込み

**251- 落込み（第 210 図、第 211 図）** 調査区中央部南端に位置する窯、落込み類のうち、最も外側に位置する落込みである。調査区南端では、新しいものから 251- 落込み、252- 落込み、255- 落込みが入れ子状になっており、255- 落込みから 252- 落込み、251- 落込みへと深い部分から順に埋没している。

251- 落込みの範囲は、平面図では分かりにくいが、第 210 図の断面土層図、第 211 図の土層番号 1 から 5 である。深さは最大で 0.3 m 程度と浅い。

遺物としては、平瓦 18 点、丸瓦 7 点、須恵器 5 点、土師器 7 点が出土した。このうち 1 点、807 を図示した。土師質の土製品で、中央に穴があいている。近世以降の灯火具の一種であろう。



第 220 図 8-6 区 255- 落込みと周辺の遺構

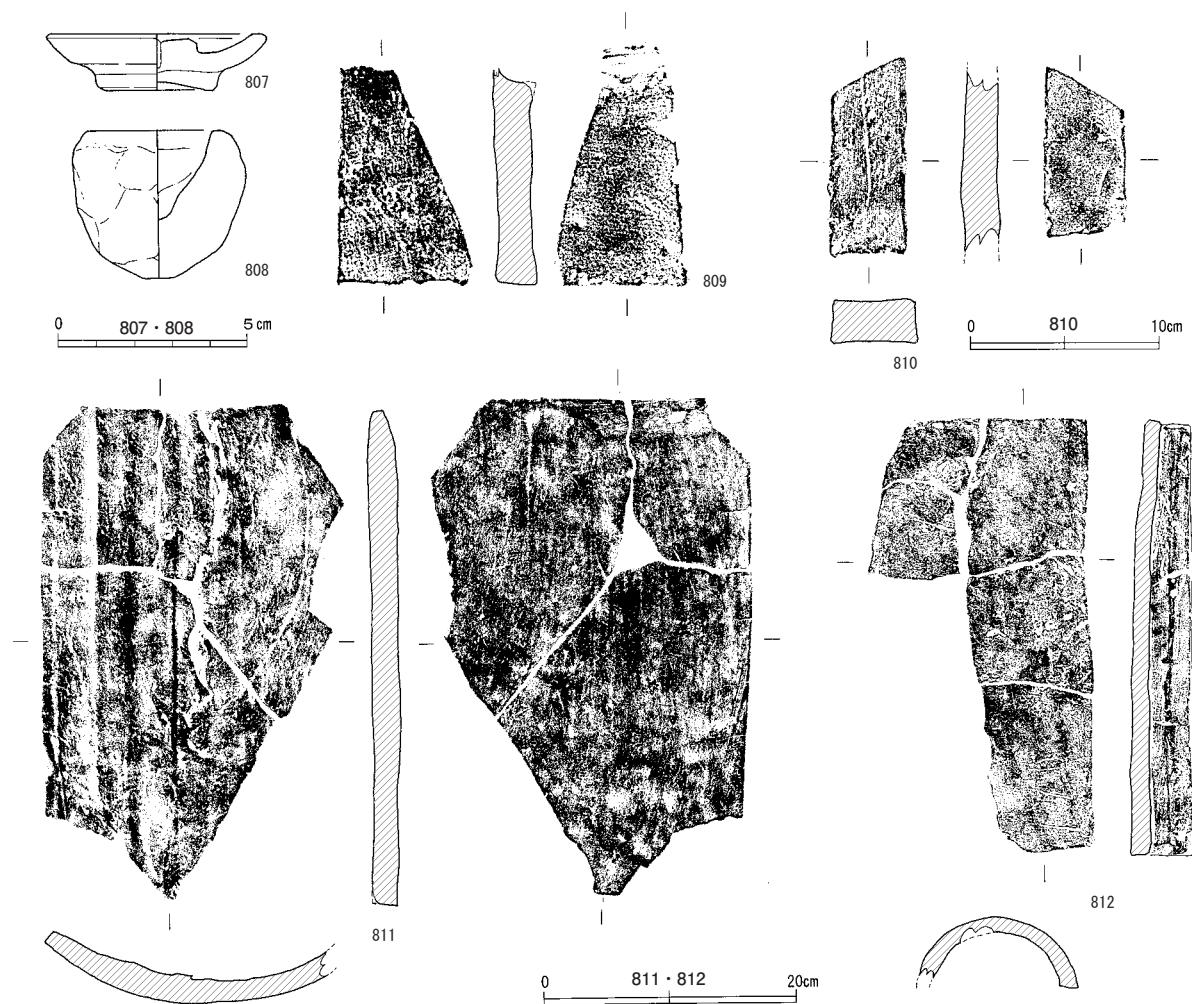
252- 落込み（第 220 図、第 221 図、写真図版 35） 調査区中央部南端に位置する窯、落込み類のうち、内側に位置する落込みである。251- 落込みより古く、255- 落込みよりも新しい。  
254- 窯と 253- 窯の上面を、本遺構の埋土が覆っている。

252- 落込みの範囲は、第 210 図の断面土層図、第 211 図の土層番号 6 から 14、17 である。深さは最大で約 1.2 m である。断面土層図から、西から東へ向かって埋土が流れ込んでいる状況が把握されよう。

平瓦 50 点以上、丸瓦 18 点、須恵器 7 点、土師器 4 点が出土した。808、809 の 2 点を図示した。808 は土製品である。手づくね土器であろうか。809 は性格不明の板状の土製品である。表面は青灰色で、焼成は良好である。

255- 落込み（第 220 図、第 221 図） 254- 窯の南側、253- 窯の東側に位置する落込みである。南端は、後世の地形改変で削られている。254- 窯に伴う灰原と推定される。253- 窯は、本落ち込みを埋める土の上に構築されている。

断面土層図の 2 から 4 は現代の石垣とその裏込め土、1 は埋没後の別遺構の土である。5 から 18 が落込みに伴う土で、焼土や炭化物を含む。10、11、12 と 15 層に炭化物が多量に含まれる。13、14 を間層とみれば、少なくとも 2 面の炭化物層が存在することになる。



第 221 図 8-6 区 252、255- 落込み 出土遺物

254- 窯が少なくとも 2 回操業していることを示唆する所見である。

道具瓦 1 点、平瓦 50 点以上、丸瓦 10 点、須恵器 5 点、が出土した。うち、810 から 812 の 3 点を図化した。810 は道具瓦である。811 は桶巻造りの平瓦である。凹面には布目痕が観察され、凸面は格子タタキを施したのち、ナデ消している。凹面ほぼ中央には、粘土板の接合痕が残る。812 は丸瓦である。凸面に格子タタキを施したのち、ナデで仕上げている。凹面には糸切り痕と布目痕が観察される。

### 第3節 10 区 (第 222 図から第 242 図、写真図版 41 から 43、51、52)

#### 調査区の概要

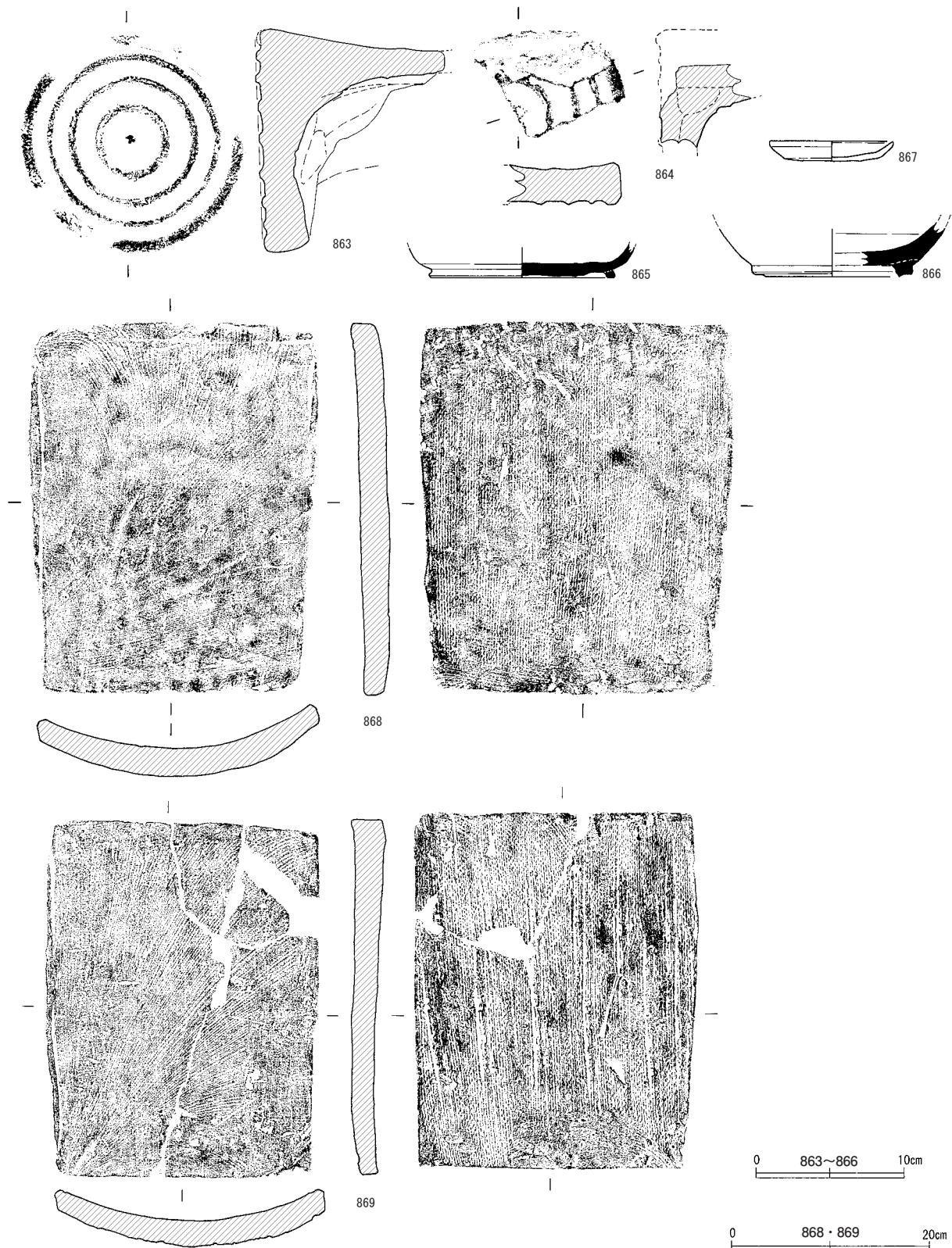
A1、B1 区画に位置し、南に 5-1 区、5-2 区が隣接する。調査前の現況は水田および荒蕪地、池である。調査区の約半分が溜池の内部である。調査の結果、溜池の築造に伴い、台地の端部および池の底面にあたる部分が広範囲にわたって削平されていることが判明した。



第 222 図 10 区 遺構全体図

削平のため、遺構の残りは概して良くない。池の内部調査範囲だったため、掘削したが、ヘドロが厚く堆積しているうえ、湧水も激しく、遺構が残されていないことを確認するにとどまった。

こうした状況ではあったが、2008年度の調査で一部が検出されていた古代および中世の窯跡の延長部分が検出された。特に、古代の窯は残りが良く、構築後の改変等が把握できる貴重な例である。



第223図 10区 土坑、粘土採掘穴、落込み 出土遺物

## 粘土採掘穴

257- 粘土採掘穴（第 222 図、第 223 図） 調査区中央部南端に位置する。後世の削平により、北側が失われている。第 1 遺構面の粘土採掘穴にあたる。

平瓦 50 点以上、丸瓦 100 点以上、須恵器 1 点、土師器 2 点と粘土採掘穴としては多量の遺物が出土した。ただし、いずれも碎片であり、図示できたのは、1 点のみである。869 は、平瓦である。一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。

## 落込み

256- 落込み（第 222 図、第 223 図） 調査区北側、262- 窯の南に位置する。内部には、崖面に向かってさらに一段大きく下がる落込みがある。

平瓦 200 点以上、丸瓦 34 点、須恵器 4 点、土師器 5 点、瓦器 4 点が出土した。このうち、1 点を図示した。868 は、平瓦である。一枚造りで凹面に糸切り痕と布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、糸切り痕を消している。凸面の端部には、連続的な指頭圧痕が見られる。

260- 落込み（第 222 図、第 223 図） 調査区南側に位置する。大半を削平されており、細長く段場の落込みが残されている。北へ向かうにしたがって、削平と遺構、自然地形とのとの区別が付きがたくなる。

内部からは、遺物収納コンテナ 32 点分と大量の遺物が出土した。863 から 866 の 4 点を図示した。863 は有心の三重圈文軒丸瓦である。瓦当裏面は瓦当部と丸瓦部との接合の際に強いナデを受けた痕跡がそのまま残る。864 は、有心の三重圈文軒丸瓦である。残りはよくないが、瓦当部と丸瓦部の粘土貼合わせ痕が明瞭に残るため、図示した。865 は高台付の須恵器坏身である。866 は須恵器の台付き壺の底部であろうか。

261- 落込み（第 222 図、第 223 図） 調査区南側に位置する。260- 落込みの東に隣接する。深さ約 0.1 m のごく浅い落込みである。

土師器 5 点が出土した。1 点図示した。867 は、土師器の小皿である。

## 窯

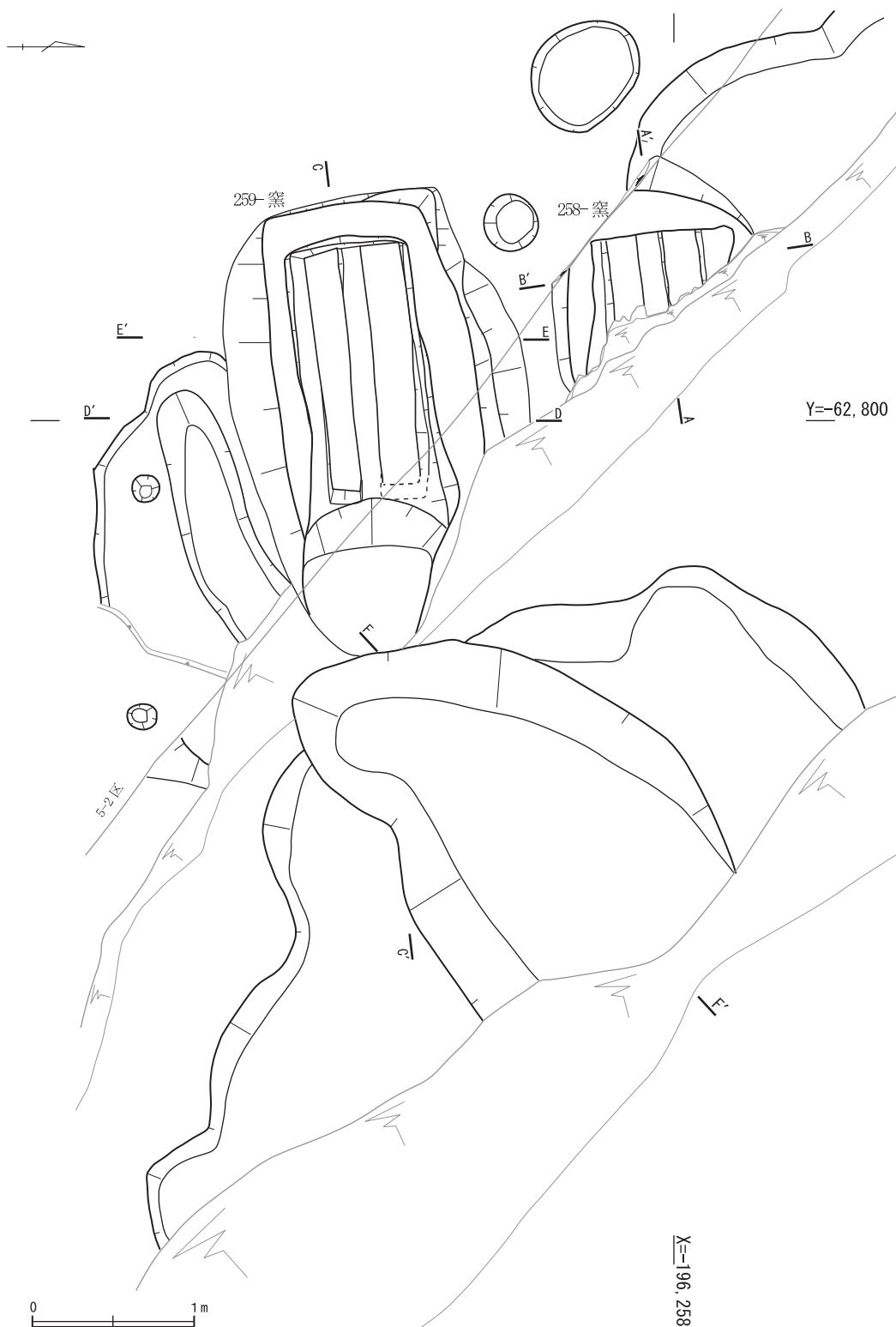
258- 窯（第 224 図、第 225 図、写真図版 39、40） 調査区ほぼ中央に位置する。大半を削平で失っており、焼成部の一部のみが残存している。高さは残存部分で約 0.6 m である。

81- 瓦溜りを約 0.3 m 剥削したうえで、粘土を薄く貼って床面および側壁を構築している。81- 瓦溜りよりも高い部分には、シルト質のややきめの粗い土を積み上げて壁を構築している。壁内に藁スサ等の混和剤は、認められなかった。分焰柱は高さ約 0.2 m、上端での幅約 0.2 から 0.25 m で、粘土塊で構築されている。窯の延長線上には灰原とみられる落込みが位置する。本窯が 259- 窯と同規模であれば、落込みの端部が北へ突出している部分に焚口端が接する。

平瓦 91 点（うち、窯壁内 14 点）、須恵器 1 点が出土した。平瓦のうち、窯壁内の瓦以外は中世瓦だが、薄く割れた破片のみで、図化できなかった。

259- 窯（第 224 図から第 226 図、写真図版 39、40、51） 調査区ほぼ中央に位置し、258- 窯の東に位置する。焼成部および燃焼部が比較的良好に遺存していた。

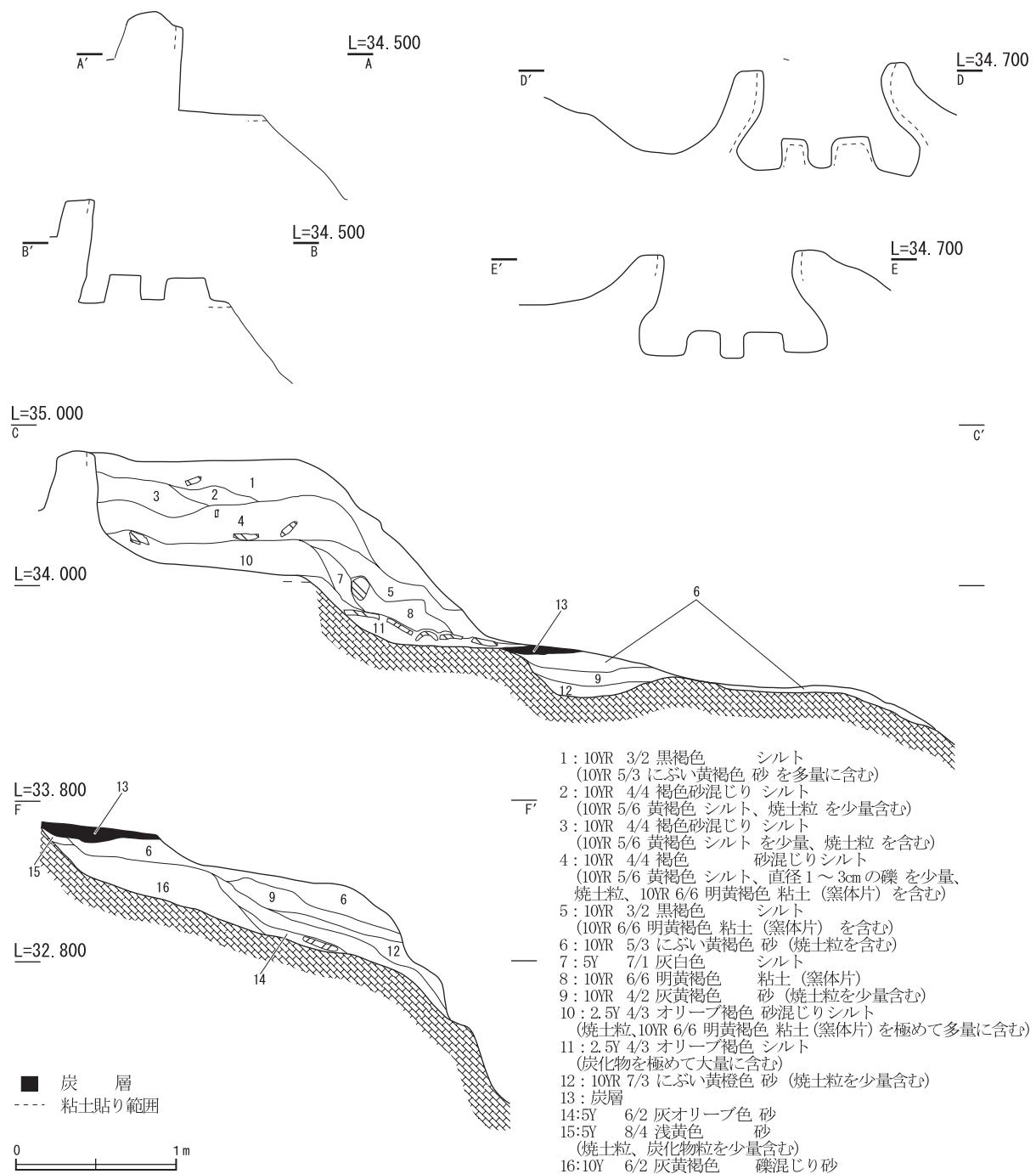
焼成部は、底面で幅約 1.2 m、長さ 1.3 m、深さ約 0.6 m である。窯壁のうち、側壁が大きく内傾しているため、検出面の壁面内側で計測すると、幅約 0.8 m、長さ 1.6 m となる。258- 窯と同様に、81- 瓦溜りを約 0.3 m 剥削したうえで、粘土を薄く貼って床面および側壁



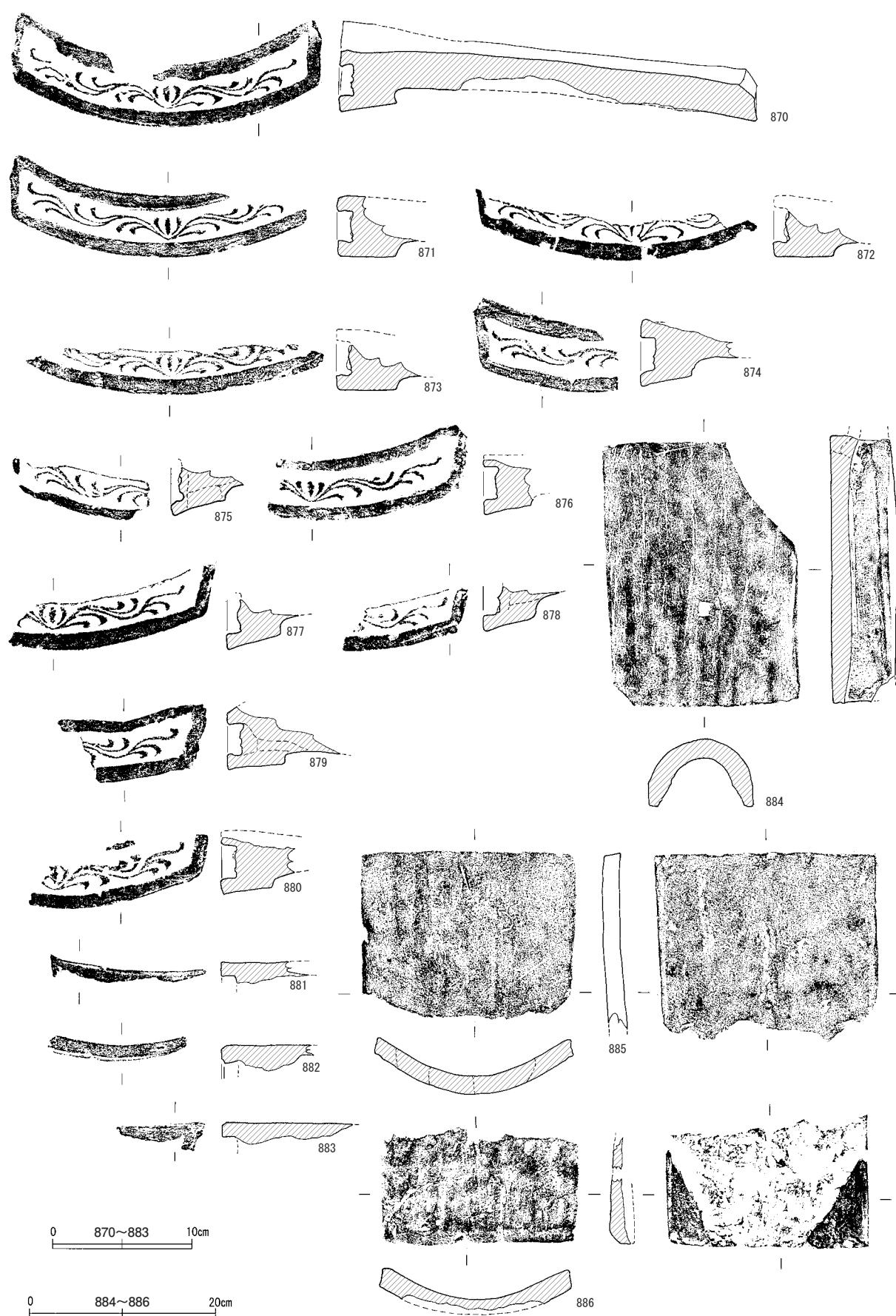
第 224 図 10 区 258、259- 窯と周辺の遺構

を構築している。81- 瓦溜りよりも高い部分には、シルト質のややきめの粗い土を積み上げて壁を構築している。壁内に藁スサ等の混合剤は、認められなかった。分焰柱は高さ約 0.2 m、上端での幅約 0.2 から 0.25 m で、粘土塊で構築されている。断面土層図の 1 から 4 までには、古代瓦がかなりの割合で混入していたが、10 層はほぼ中世瓦のみで、しかも、軒平瓦の占める割合が高い。

燃焼部は、幅 0.8 m、長さ 0.9 m、深さ 0.4 m である。81- 瓦溜りは、この位置まで伸びておらず、地山を掘り下げて構築している。検出直後は燃焼部の上部もアーチ状に残されていたが、内部の土を取り除いたところ、支えをなくしたためか崩落した。



第 225 図 10 区 258、259- 窯と周辺の遺構 断面土層図



第226図 10区 258、259- 窯 出土遺物

窯の東には灰原とみられる落込みがあり、炭層や焼土混じりの土が堆積している。古代瓦以外に中世の瓦も出土しており、位置関係からみて、本窯に伴う灰原であろう。

内部からは、遺物収納コンテナで 12 箱の遺物が出土した。このうち、軒平瓦は全点抽出した。平瓦は、中世瓦で図化可能なもの抽出を試みた。しかし、259- 窯出土の中世の平瓦は、薄く小さな板状に破損し、接合困難なこともあります、3 辺が残る 2 点を図示したにとどまる。丸瓦は、図示した 1 点（接合前 2 点）を含め、5 点しか出土していない。なお、884 は、図化時には別に出土した玉縁と接合すると気付かなかったが、写真撮影前の最終確認の際、接合関係を確認している。

870 から 883 は軒平瓦である。瓦当文の判明するものは、全て均整草文軒平瓦である。瓦当幅は約 22 cm、縦幅約 4.2 cm。中心飾りから、左右に二本一対の唐草が伸びる。左右で最初の反転時の唐草の伸び方が明らかに異なっていることが特徴である。瓦当の文様部分や外縁部を含め全面に離れ砂が付着する。凹型台を使用し、顎貼り付け技法を用いている。瓦当外縁上端部は、遺存している資料全てで面取りを施している。外縁部の調整は粗く、離れ砂の上から弱くナデたのみで、平滑にはなっていない。

884 は丸瓦である。凹面は、布目を強いヘラナデでナデ消している。凸面は縄目タタキを施した後、ヘラナデで仕上げているが、タタキ痕が部分的に残る。広端面には、面取りを施している。

885、886 は平瓦である。両面とも離れ砂の付着が著しい。885 は、広端面が遺存する資料で、凹面に布目痕、凸面に糸切り痕がかすかに残る。小さな粘土塊か、幅の狭い板状の粘土を貼合わせて整形している。886 は狭端面が遺存する資料で、凹面、凸面とともにナデで仕上げ、凹面の端部には面取りを施している。

**262- 窯（第 227 図から第 242 図、写真 21、写真図版 41、42、43、51）** 池西側の水田東端部に築かれた窯である。2008 年度の発掘調査の際、一部を検出したが、調査区外へ延びる焼成部とともに調査を実施することが望ましいと判断して作業を中断していた。

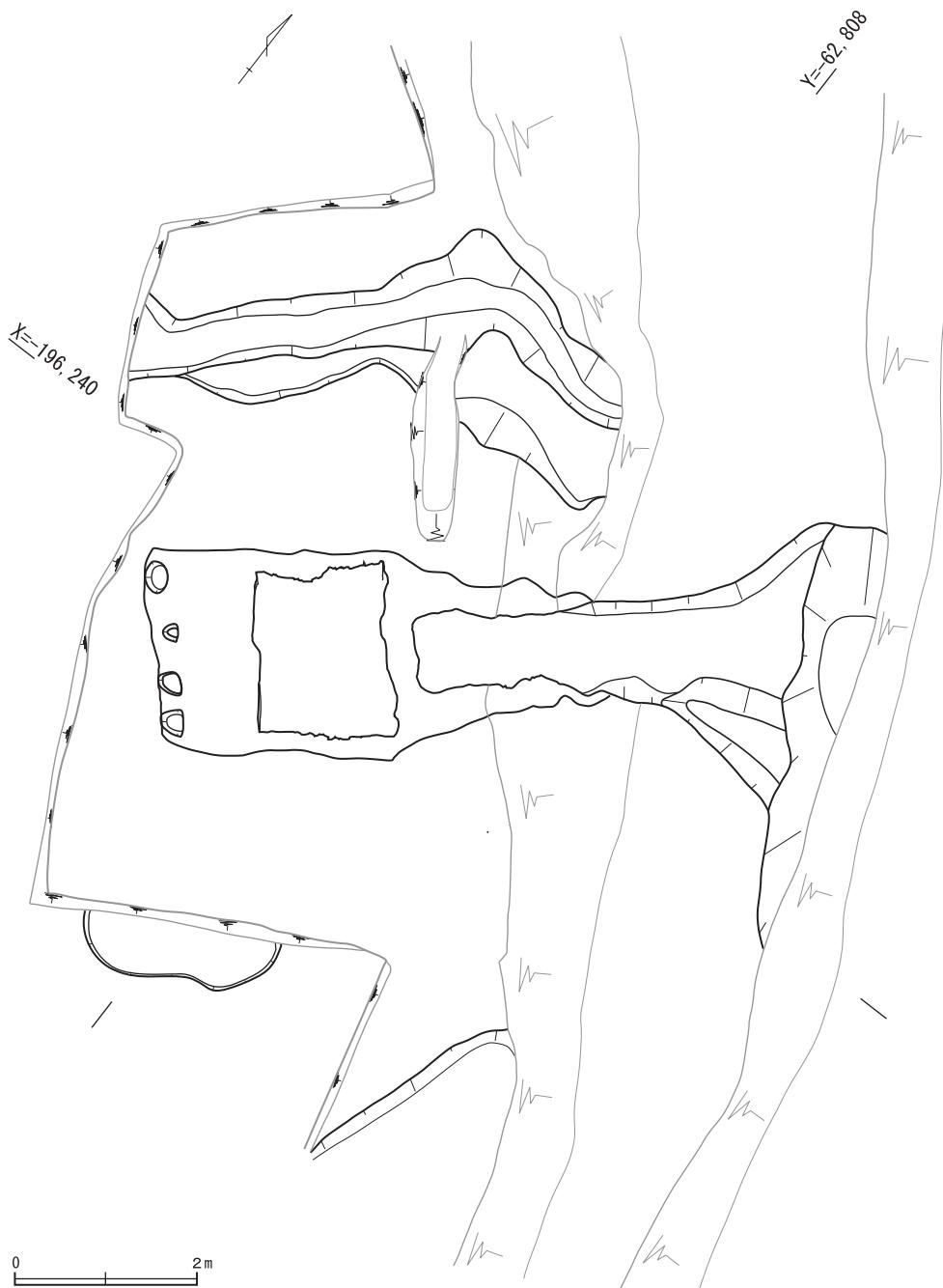
2008 年度の発掘調査時は、基本層序（第 4 図）第 4 層上面で、強く焼結し、西側が垂直に、南北がドーム状にせり上がる壁を確認したため、これを窯尻と考えた。しかし、今回の調査で、第 4 層を約 0.1 m 堀り下げたところ、当時窯尻と考えた遺構の西側に焼成部の方形のプランとその背後にのびる煙道を確認し、窯尻と考えていた部分が燃焼部であったことが判明した。また、底面と考えていた部分が、第 228 図の断面土層図の 5 の窯体塊であったことも明らかになった。

煙道も含めた全長は約 4.9 m である。天井部の多くは破壊されているが、煙道部・焼成部・隔壁・燃焼部・焚口が極めて良好な状態で遺存していた。いずれも地面を掘込んで構築している。

焼成部は、奥行き約 1.5 m、幅約 2 m、最大残存高は約 1.2 m である。内部は、瓦を大量に含む土で埋没していた。焼成部側壁は、基本層序第 4 層および第 5 層を窯壁よりも幅約 0.4 m 程度広くほぼ垂直に掘り込み、外側はシルト質の土を約 0.15 m 程度の厚さで積み上げて

いる。内側は、スサを混和した砂混じりの粘土と半裁した平瓦を用いて約0.2m程度の厚さで積み上げている。底面付近は、外側の壁がなく、地山と内側の壁が接している。内側の壁に用いられた瓦は、一部、外側の壁まで伸びている。第230図では、側壁の下部および奥壁付近の構築に瓦を用いていないように見えるが、これは、表面に薄く粘土が塗られており、瓦が見えなくなっているためである。

奥壁は、側壁と同様にスサを混和した砂混じりの粘土と半裁した平瓦を用いて約0.2m程度の厚さで積み上げている。さらに、後述する分焰柱の下層の瓦の上から平瓦が奥壁に沿って積み上げられている。分焰柱付近は粘土を併用しているが、上部に行くにしたがって粘土の使用は減り、積み上げた平瓦の隙間を埋めるのみとなる。平瓦は、煙道を塞ぐように積み



第227図 10区 262- 窯と周辺の遺構

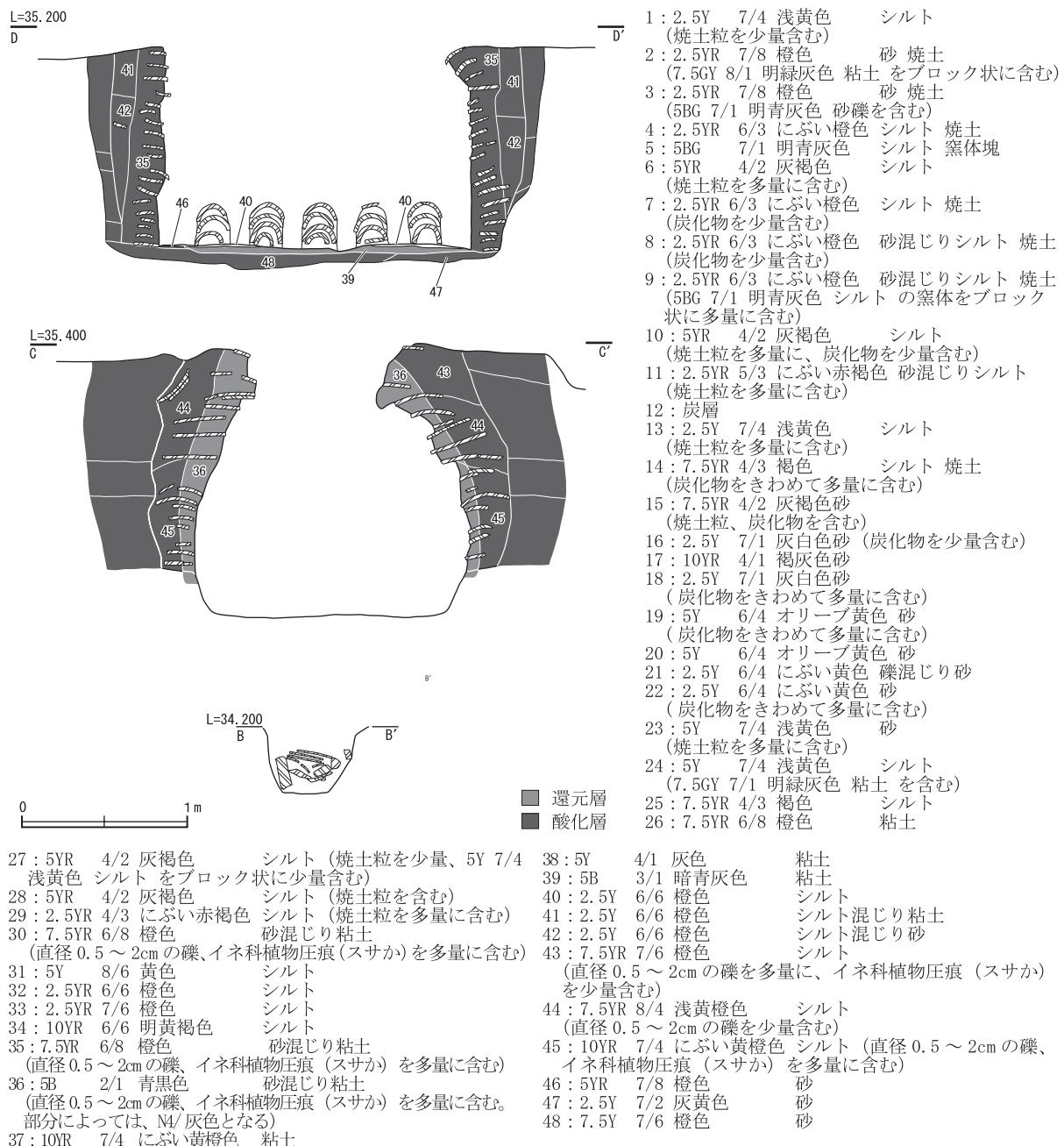


第228図 10区 262-窯 平面と縦断面図

上げられていることから、当初は存在せず、窯の補修に伴って積み上げられたとみられる。

分焰柱は5条設けられている。幅は約0.2m、底面からの高さは0.25mである。再下部は玉縁式丸瓦と半裁した平瓦を、これよりも上は、大形の行基式丸瓦を使用し、スサ入り粘土で瓦の隙間を埋めつつ構築している。分焰柱の一部は、煙道を半ば塞いでいる。

煙道は、断割り等により、構築状況が判明した。一端、煙道の西端まで斜めに地山を掘り込み、その後、煙道の幅を残して高さ約0.2mにわたって埋め戻す。これより上は、瓦の凹面を斜め下に向けて置き、煙道を作りながら埋め戻している。丸瓦は、1点のみ使用し、それ以外は全て関係かそれに近い平瓦を使用している。場所によっては、瓦の下に細長く切斷した瓦片を置き、瓦がずれたり、沈下したりしないようにしている。煙道の下端は、第231

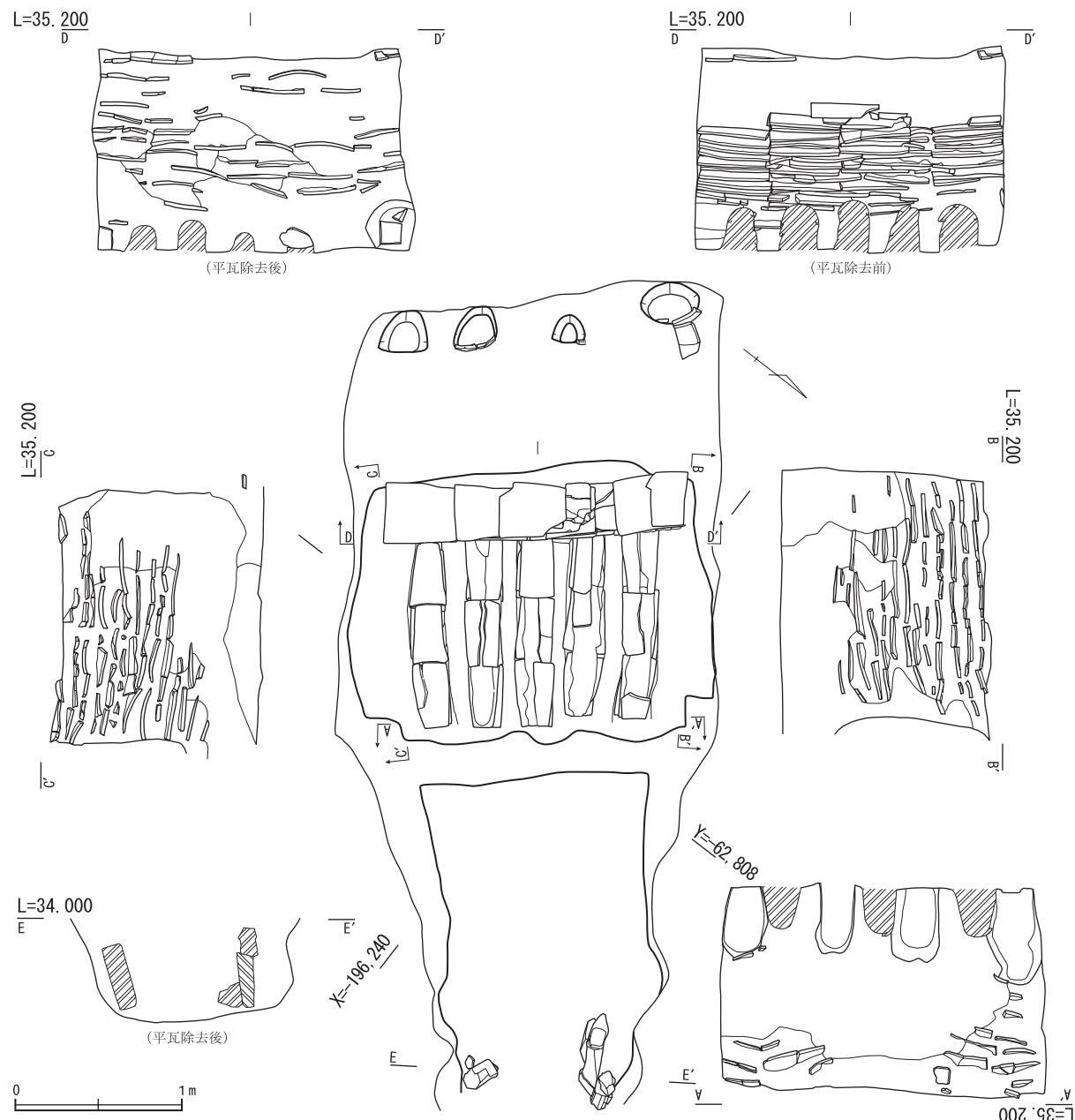


第229図 10区 262-窯 横断面図

図の断面土層図で示したように、灰白色の粘土を置き、さらに、瓦をほぼ垂直に立てて置くことで閉塞している。分焰柱の一部が煙道を塞ぐ位置にあること、奥壁の平瓦が煙道をほぼ塞ぐことから、これらの構築に伴って使用されなくなったとみられる。

隔壁は、厚さ約 0.3 m で、構築方法は側壁等と同様に、スサを混和した砂混じりの粘土と半裁した平瓦を用い、そのうえで、表面を粘土で塗り固めている。表面は被熱によるガラス化が著しい。分焰孔は 4 孔設けられている。

燃焼部の平面形は逆梯形で、奥行きは約 2.0 m、幅は隔壁付近で約 1.7 m である。側壁と構造は似ており、地山を燃焼部の形状に沿って掘り込み、外側はシルト質の土を積み上げている。内側は、スサを混和した砂混じりの粘土と半裁した平瓦を用いて積み上げているが、内側の壁の厚みがやや薄く、多くの瓦が外側の壁に食い込んでいる。また、地山を掘り込ん

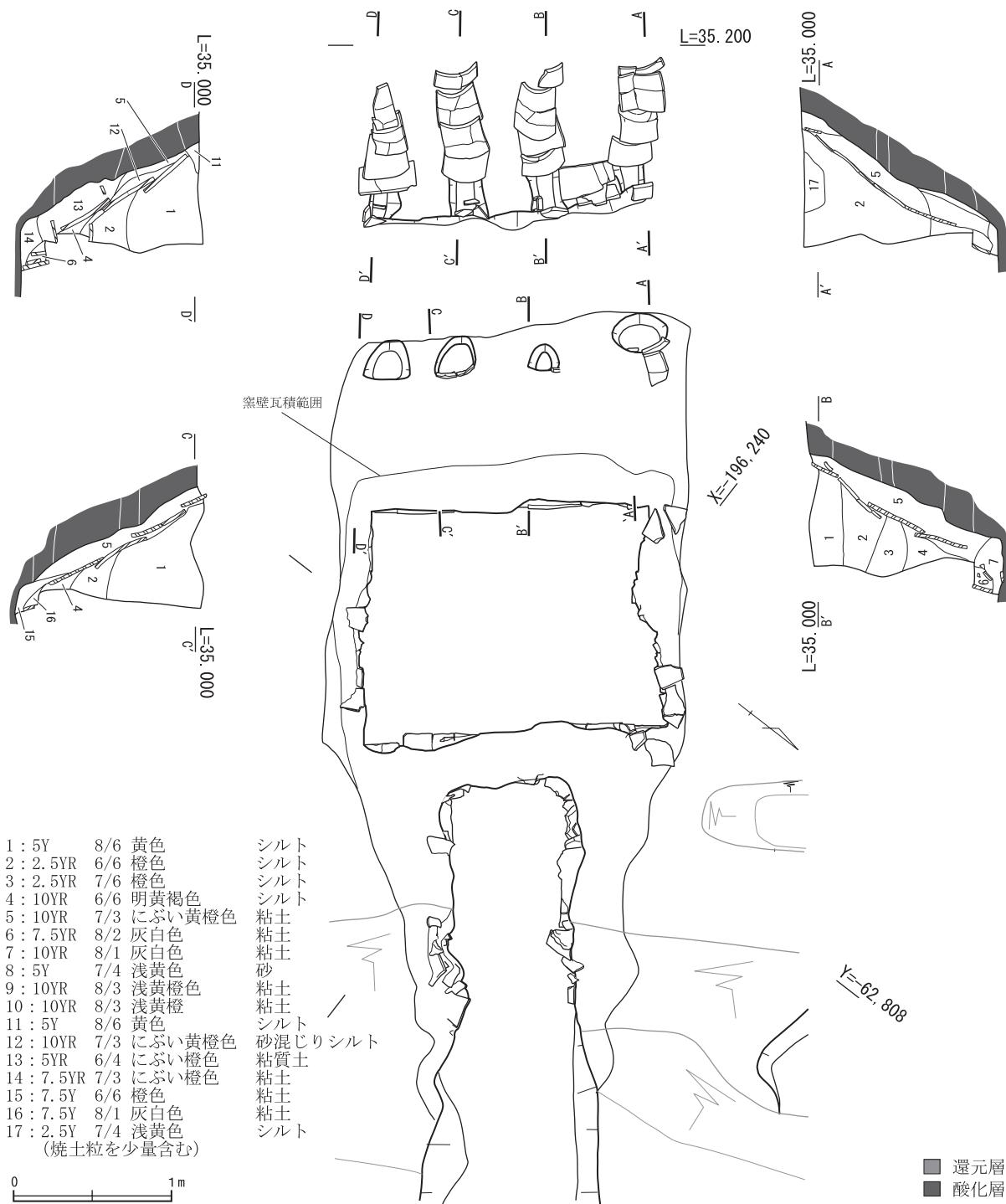


第 230 図 10 区 262- 窯 壁立面図

で構築しているが、断割り調査の結果をみても底面の被熱等の痕跡は、余り明瞭でない。断面土層図の12の直上から、黒色土器の椀(891)が出土している。

焚口は幅0.5mで、両側壁に棒状の結晶片岩を立て、その間を塞ぐように平瓦と結晶片岩の礫を積上げていた。

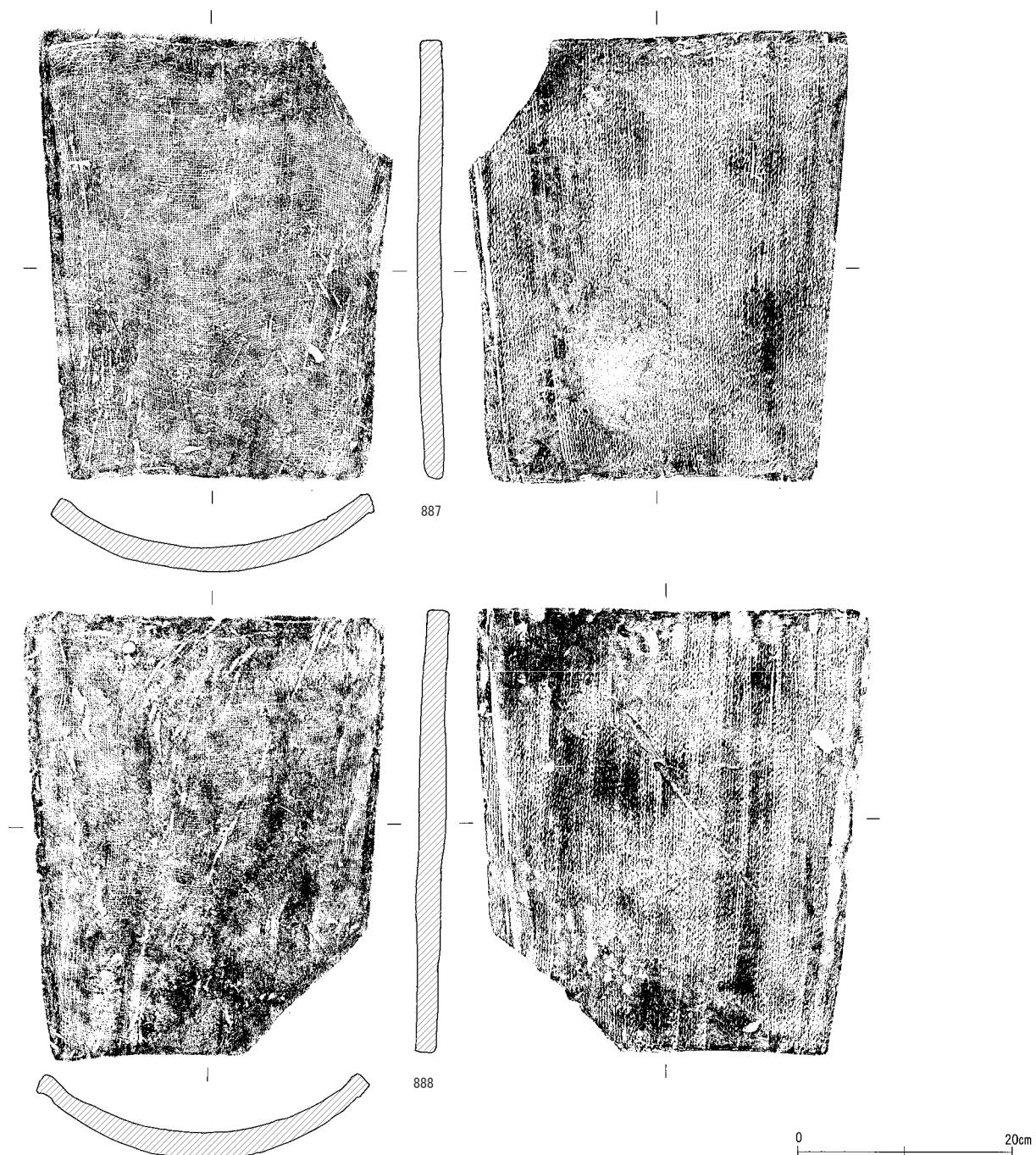
焚口の東側は、焚口から続く溝状の落込みが伸び、その先には灰原と思しき落込みが溜池の築造に伴い、大半が削平されており、詳細は不明である。



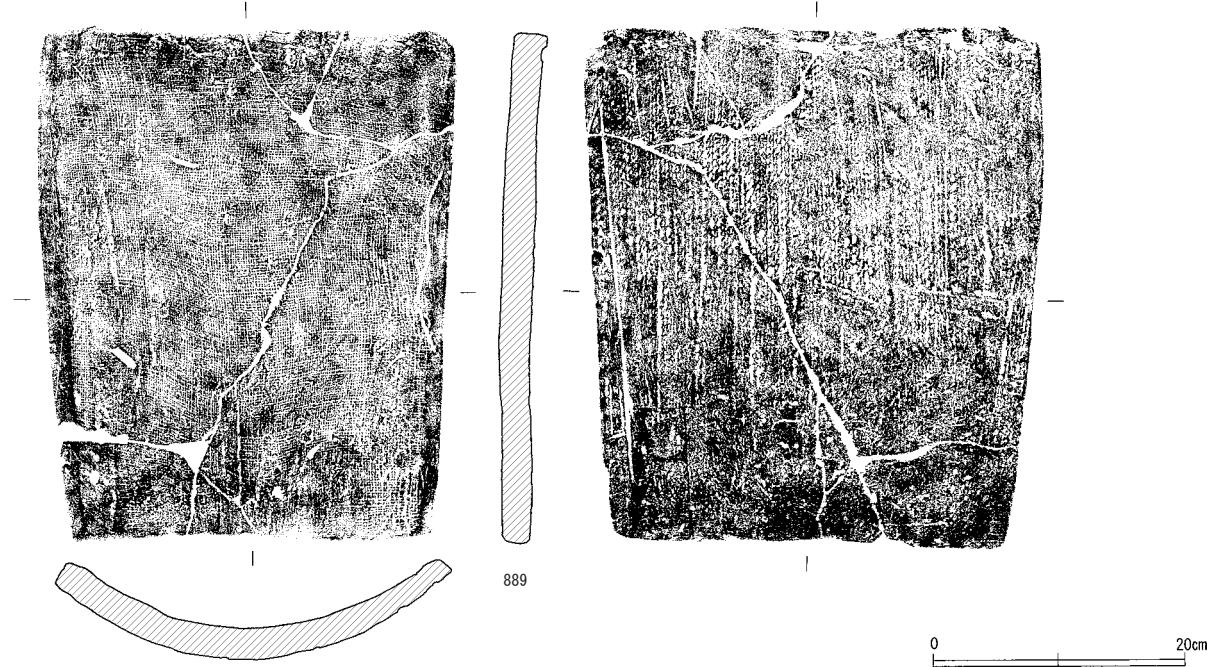
第231図 10区 262-窯 煙道立面・断面図

遺物は、遺物収納コンテナ300箱以上が出土した。遺物の量が多量であったこと、大半が瓦であることから、時期決定に重要な役割を果たす遺物や、出土位置、状況が明らかな遺物のなかから、各種属性からみて特徴的と思われるものを網羅するよう、紙幅の許す範囲で選別して図示している。

焼成部、燃焼部の覆土からは瓦が多量に出土したが、破断面の摩耗したものが多かったため、二次的に堆積した遺物が大半を占めると判断されたこと、特徴的な属性を持つ遺物がなかったことから、残りの良いものも、土器類以外は図示しなかった。



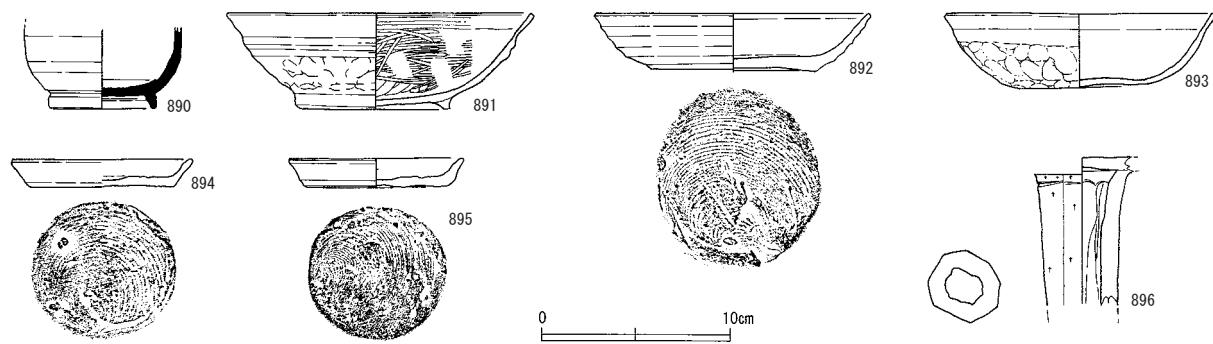
第232図 10区 262- 窯 焚口部閉塞瓦（その1）



第233図 10区 262- 窯 焚口部閉塞瓦（その2）

なお、本遺構出土遺物のうち、焚口の閉塞瓦、分焰柱転用瓦、奥壁に沿って積み上げられていた平瓦、煙道構築瓦は、概して遺存状態が良好であった。そのため、図示したもの以外にも、完形、あるいはそれに近い状態の資料が多数存在する。出土遺物の分析の際は、この点に留意が必要である。

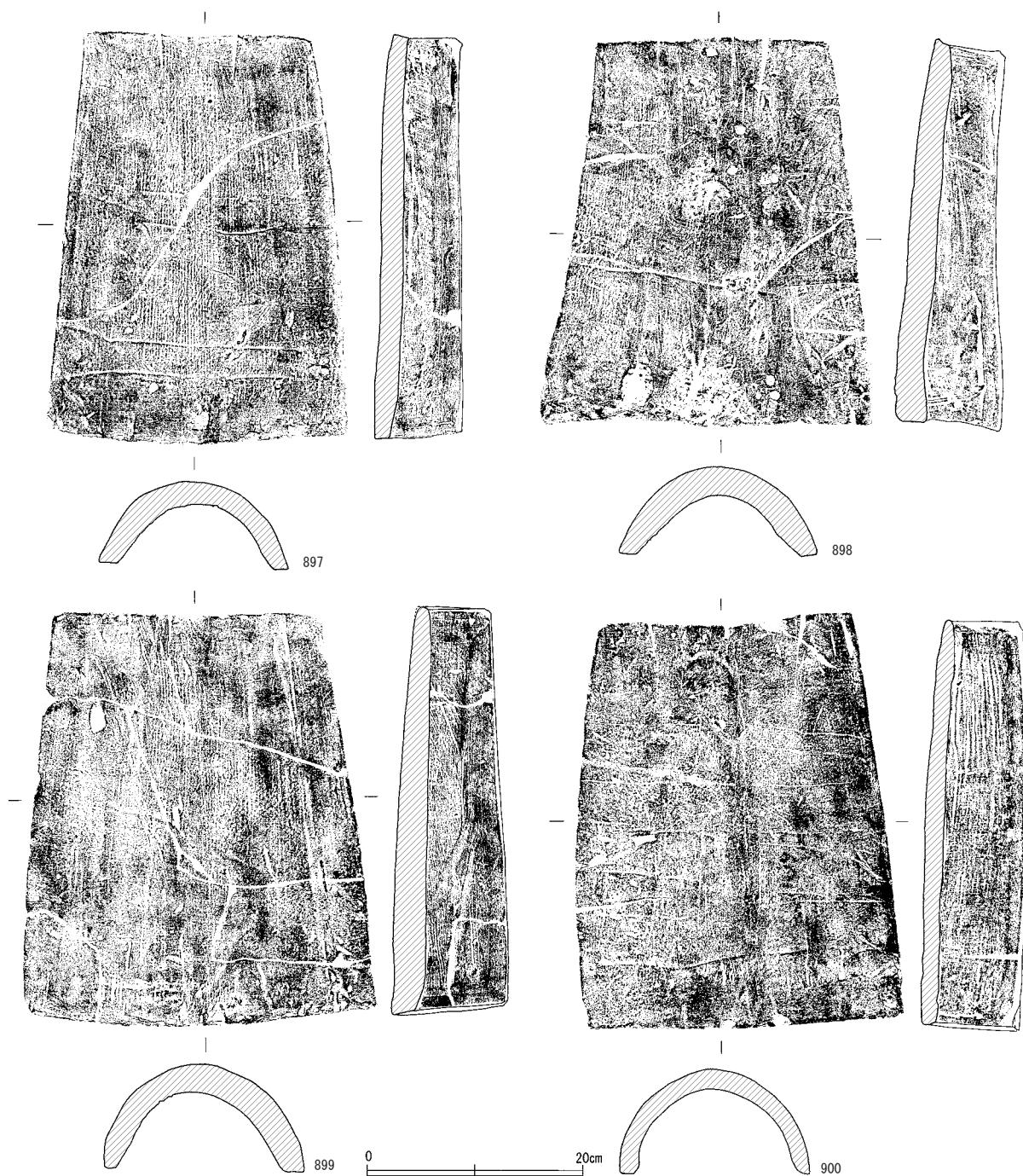
887から889は焚口を閉塞していた瓦である。いずれも、赤褐色の土師質焼成で、一枚造りの平瓦である。凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。また、凸面には離れ砂が付着している。本例のような特徴および大きさを持つ平瓦は、北山廃寺、北山三嶋遺跡では、本窯以外でほとんど出土しない。888の広端面凸面には、指頭圧痕が明瞭に観察される。889は他の瓦に比べてタタキの間隔が不規則で、かつ、やや太めの原体を用いている。



第234図 10区 262- 窯 燃焼部出土遺物

890から896は燃焼部から出土した土器類である。890は須恵器の小形の高台付壺である。胴部はヘラケズリでシャープに仕上げ、ハの字形の高台を貼付けている。焼成は良好で、底部内面には、厚く自然釉がかかる。断面土層図の4から出土した。

891は断面土層図の12の直上で出土した黒色土器の碗である。ハの字に開く貼付け高台を持ち、外面は連続的なユビ押さえが残る。口縁部は胴部よりも薄く仕上げ、かすかに外湾する。内面は、細やかなミガキを施している。焼成は良好で、外面は赤橙色、内面は炭素が均一に吸着し、黒色である。最終操業面で出土した唯一の土器である。

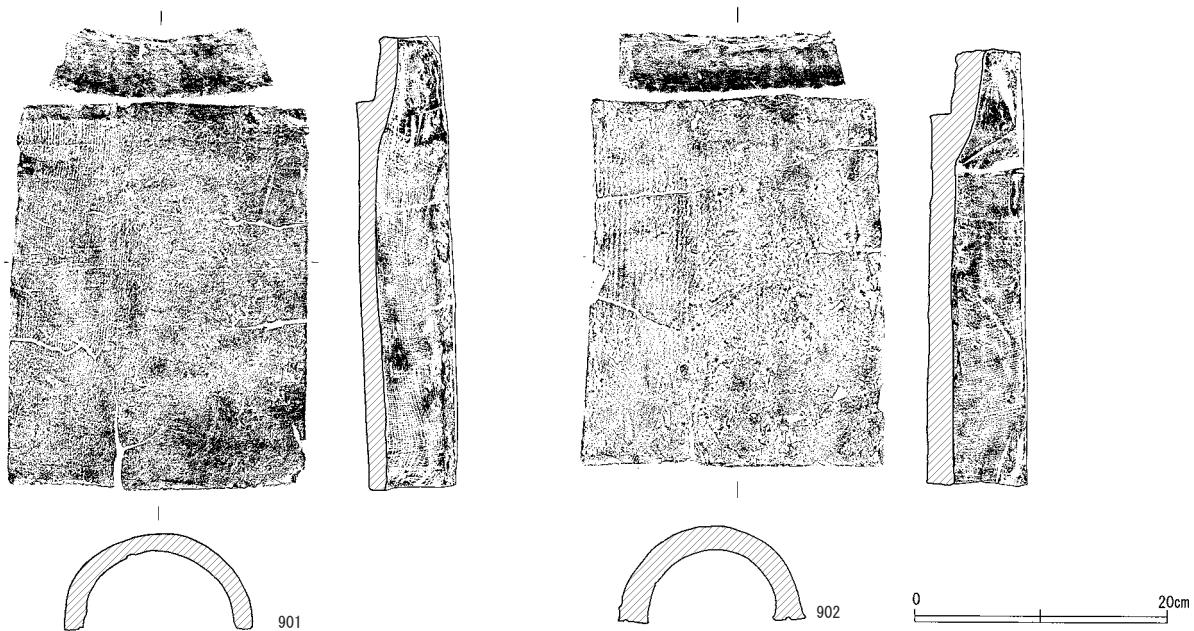


第235図 10区 262- 窯 分焰柱転用瓦 (その1)

892 は断面土層図の 9 から 11 のいずれかの土層から出土した。土師器の皿である。底面には回転糸切り痕が残る。胴部には強い回転ナデにより、稜が形成されている。胎土には、直径 0.2cm 程度の赤色粒が含まれる。893 は断面土層図の 9 から 11 のいずれかの土層から出土した、土師器である。底部から胴下半にかけては、連続的なユビ押さえの痕跡が明瞭に残る。内面は、丁寧にナデている。薄手の造りだが、全体に歪みが激しい。胎土には金雲母粒を多量に含む。894、895 は底部に回転糸切り痕を残す土師器の小皿である。いずれも内面には強いロクロナデの痕跡を残す。894 の胎土には、灰白色の粘土が筋状に混在しているのが観察される。896 は高環の脚部である。

897 から 900 は分焰柱に転用された丸瓦のうち、最下部以外に使用されていたものである。いずれも、凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施した後、ヘラナデで仕上げている。広端面、狭端面の面取りの強弱、ヘラナデの強弱、凹面の布の粗密などの属性からは、少なくとも 4 グループ程度に細分される。図示したのは、各グループの代表的なもの 4 点である。

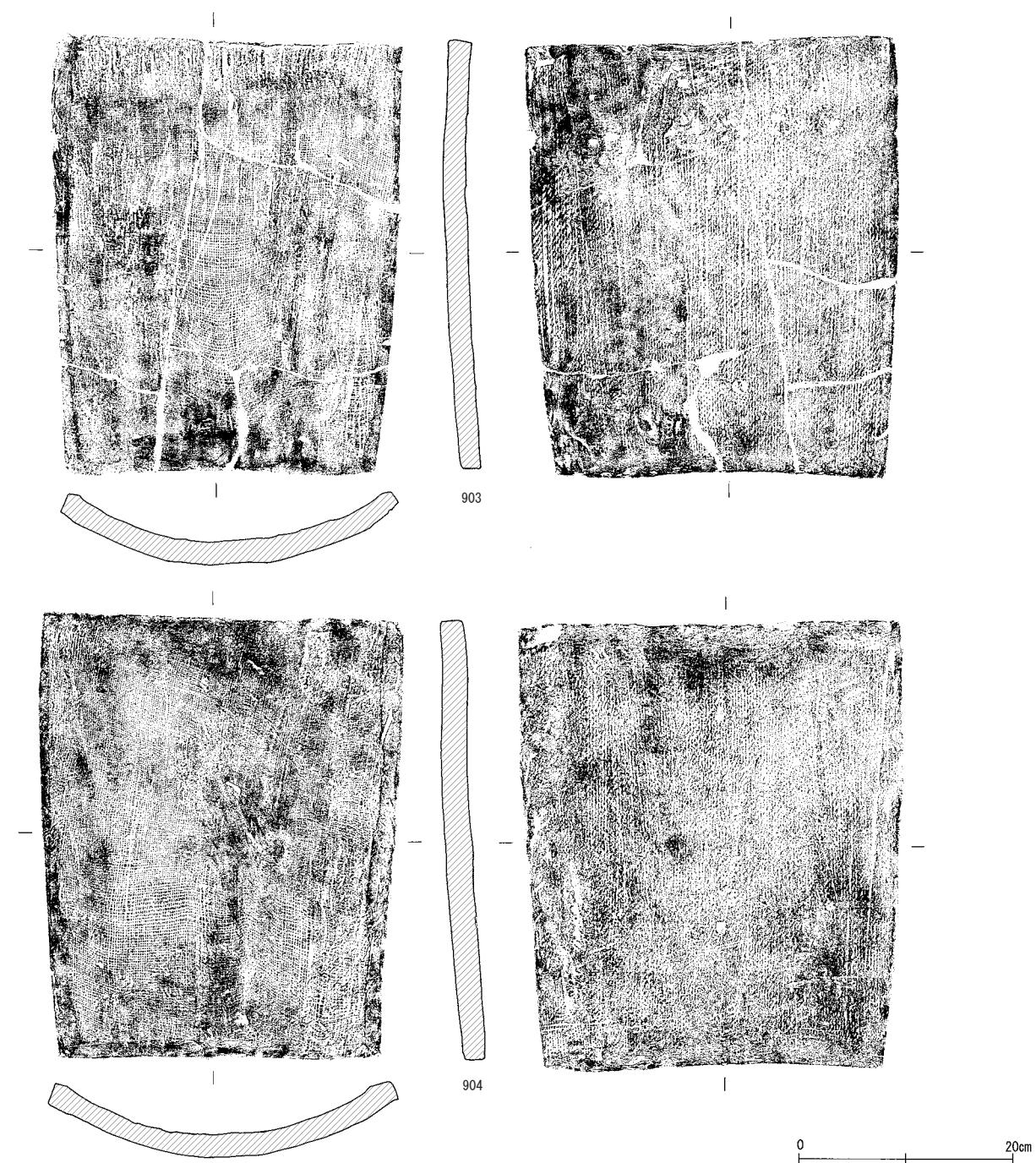
897 は広端面及び両側縁に丁寧な面取りを施す。凹面の布目は、粗い。凸面のヘラナデは粗く、単位は明瞭だが縄目タタキをほとんど消していない。898 は狭端面と両側縁に丁寧な面取りを施す。凹面の布目は、極めて繊細である。899 は、広端面、狭端面、両側縁の全面に丁寧な面取りを施している。900 は、広端面及び両側縁に丁寧な面取りを施す。凸面は縄目タタキの後、強いヘラナデを施し、縄目タタキをナデ消している。凹面の布目は、極めて繊細である。こうした大きさ、特徴を合わせ持つ丸瓦は、北山廃寺、北山三嶋遺跡では、本窯以外でほとんど出土しない。898 の凸面には線刻が観察される。窯印の一種であろうか。出土遺物整理作業中、文字瓦や窯印のある瓦の存在には、かなりの注意を払っていたが、本例以外は確認できなかった。



第 236 図 10 区 262- 窯 分焰柱転用瓦 (その 2)

901 と 902 は分焰柱に転用された丸瓦のうち、最下部に使用されていたものである。玉縁式の丸瓦で、凸面には縄目タタキを施した後、ナデて仕上げている。強い2次焼成を受けしており、歪みや割れが著しい。

903 から 908 は、奥壁に沿って積み上げられていた平瓦である。焚口を閉塞していた瓦と極めてよく似る。いずれも、赤褐色の土師質焼成で、一枚造りの平瓦である。凹面に布目痕を残す。凸面には全面に整然とした縄目タタキを施し、離れ砂が一部に付着している。タタキの原体や面取り、タタキの手法などの属性に注目すると、3ないし4グループ程度に細分される。図示したのは、各グループの代表的なもの6点である。



第 237 図 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 1)

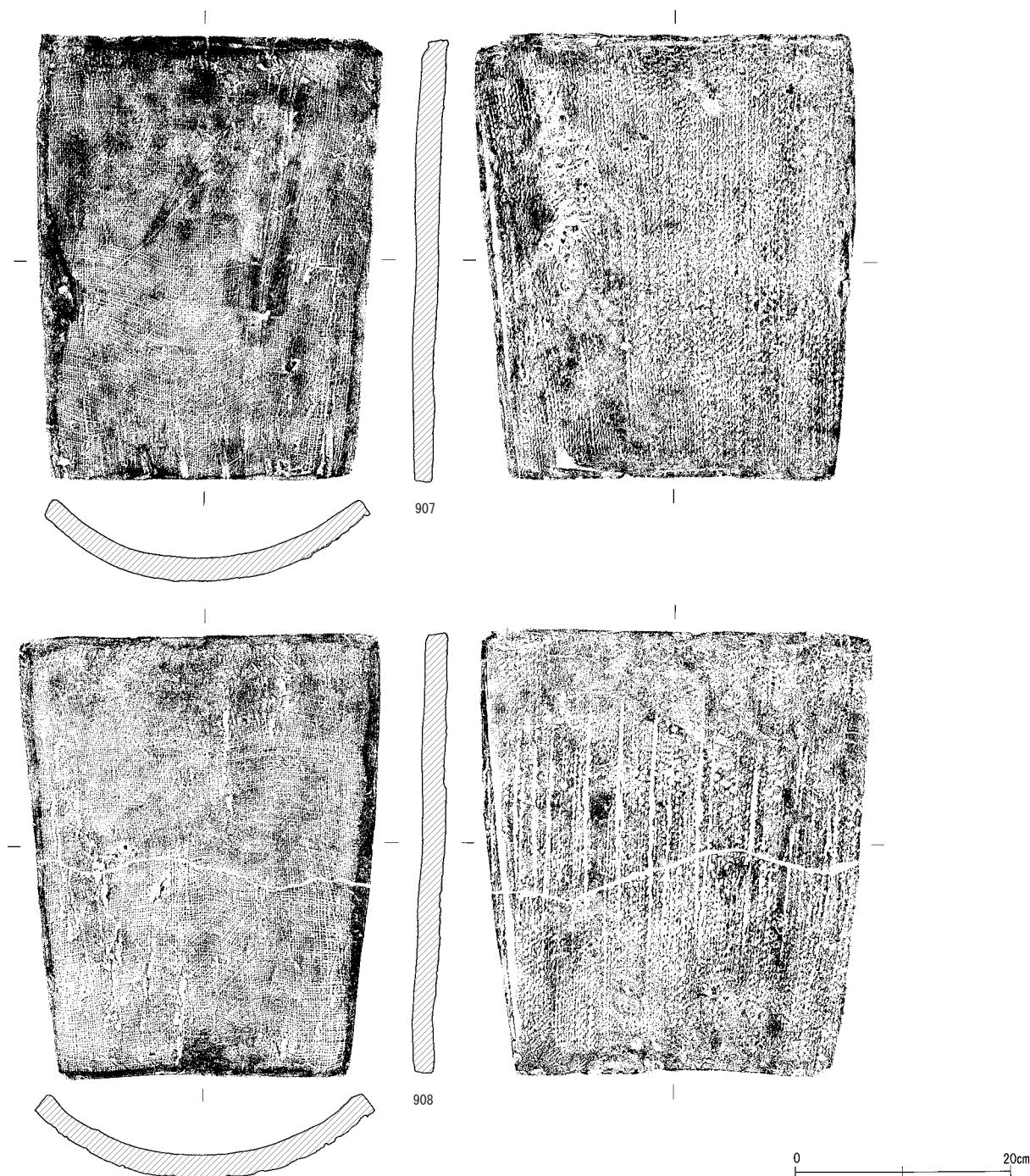
903 は広端面に方向を違えた縄目タタキがかすかに施されている。904 は両側縁を強く面取りしている。905 はタタキの間隔がやや不規則で、両側縁の面取りも粗い。906 は縄目タタキが凸面全面に及んでいないこともあり、タタキ板の単位が明瞭に観察される。

907 から 911 は、壁面を構築していた瓦のうち、目に付いたものである。壁面を構築している瓦は、大半が一枚造りで凸面に縄目を施す平瓦で、ごく一部、全体の一割弱が桶巻造りの古相を呈する瓦であった。ただし、いずれも切断されており、全体の形状が把握できないため、図示していない。



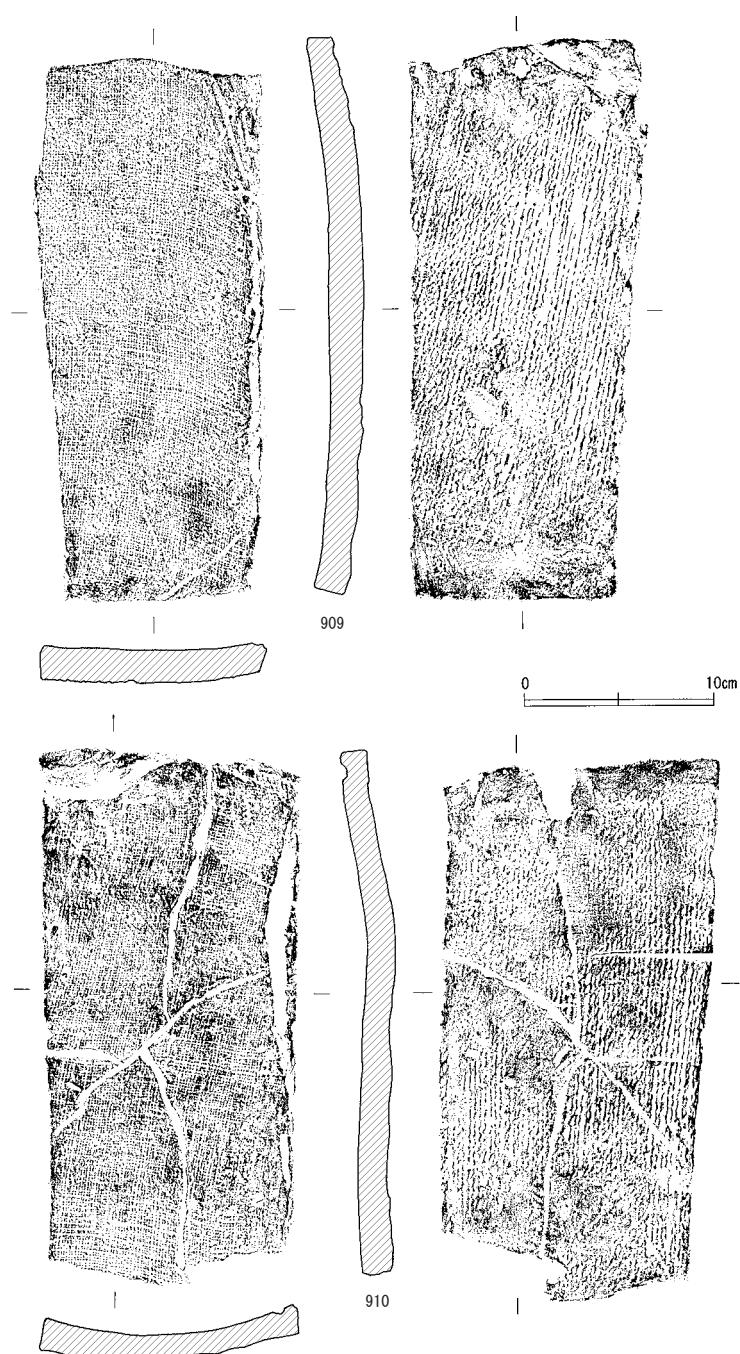
第 238 図 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 2)

909 と 910 は熨斗瓦である。一枚造りで凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした繩目タタキを施している。909 の広端面には、指頭圧痕が観察される。切込みはタタキ調整を切っている。調整終了後、瓦の厚さのほぼ 8 割以上にも達する深い切込みを入れておき、粘土がある程度乾燥した段階か焼成後に、切込みに沿って切断したと考えられる。911 は平瓦である。一枚造りで凹面に布目痕を残し、凸面には全面に整然とした繩目タタキを施している。広端面の角を切り落としている。

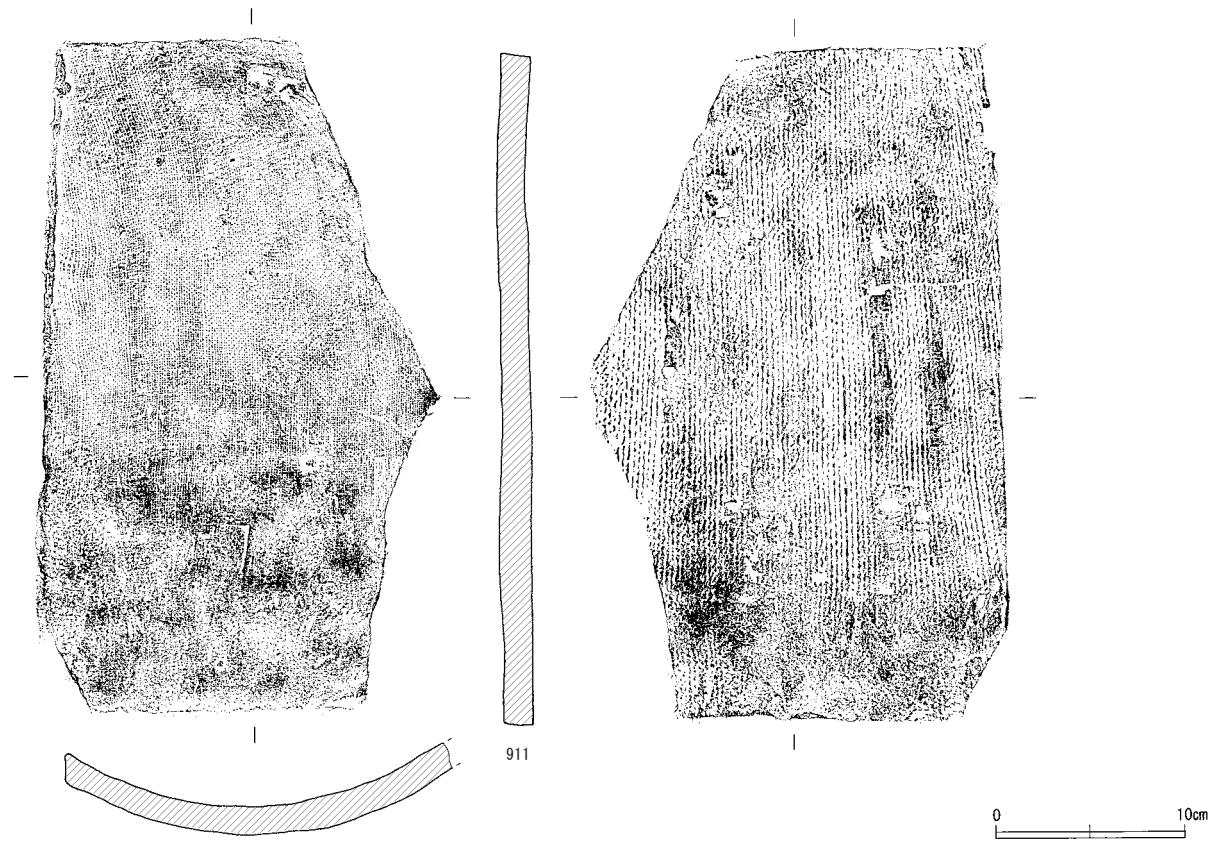


第 239 図 10 区 262- 窯 壁面構築瓦 (その 3)

912から915は煙道を構築していた瓦である。このうち、912から914は一枚造りの平瓦である。凹面に糸切り痕と布目痕を残し、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施している。北山廃寺、北山三嶋遺跡で最も普遍的なタイプの平瓦である。915は丸瓦で、凸面に縄目タタキを施している。



第240図 10区 262- 窯 壁面構築瓦 (その4)



第241図 10区 262-窯 壁面構築瓦（その5）

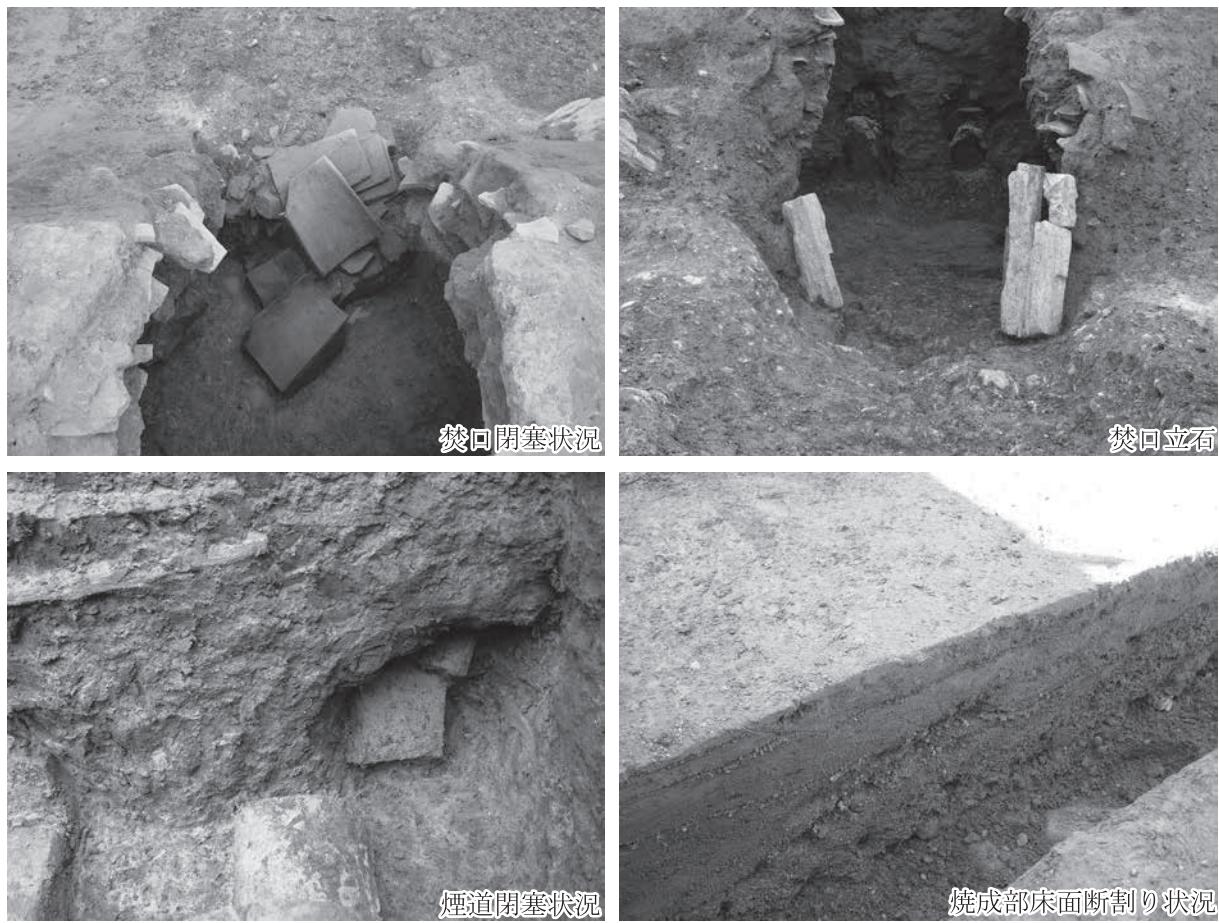
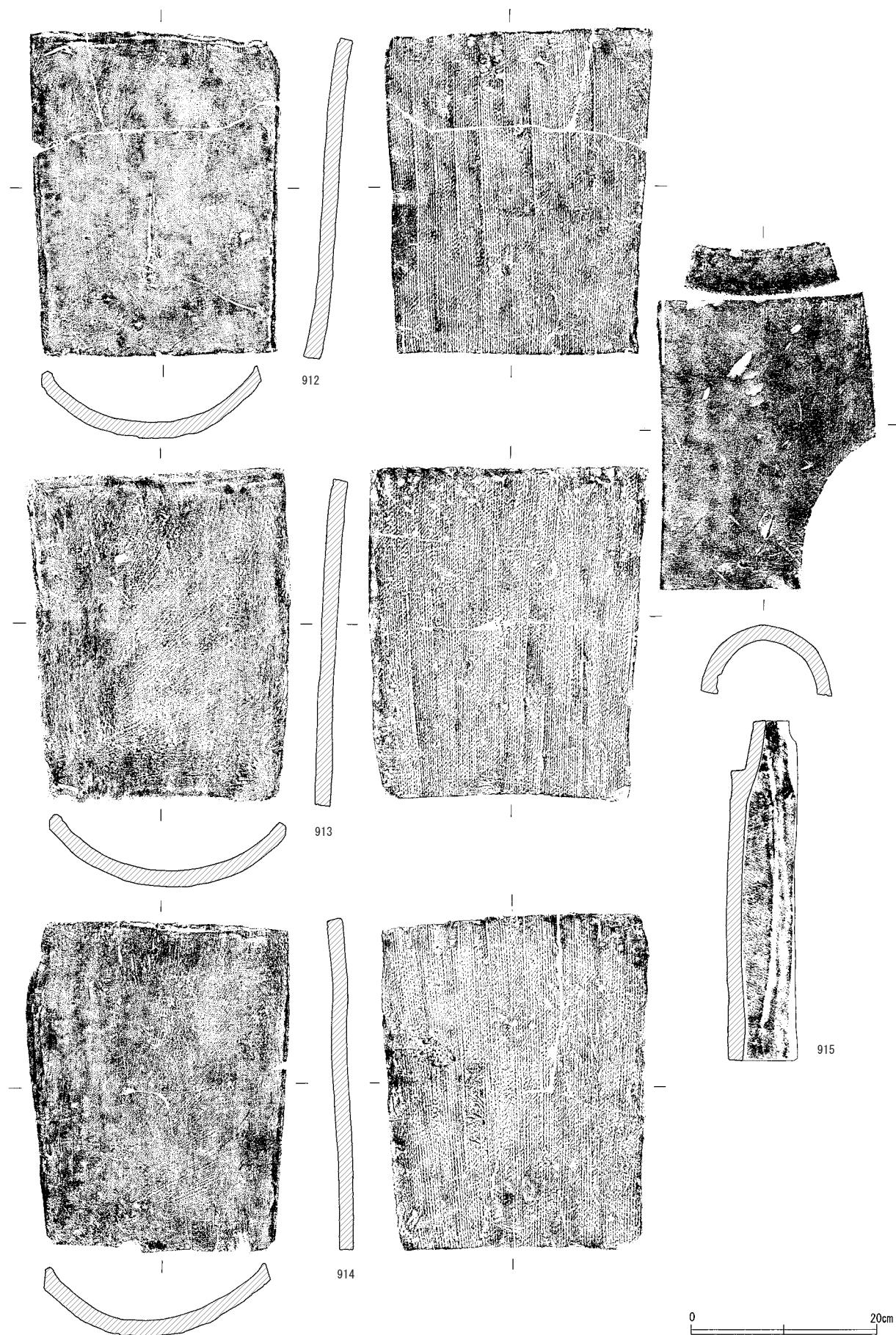


写真21 10区 262-窯



第242図 10区 262- 窯 煙道構築瓦

## 第8章 総括

### はじめに

北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査は、3年次にわたって実施された。総調査面積は25,000m<sup>2</sup>を超える、台地上に展開する遺跡の範囲のうち、現地保存の対象となった一部を除き、ほぼ全面を調査したことになる。その結果、居住域と生産域との関係や、生産域における具体的な活動の一端が明らかになった。本章では、こうした成果を叙述することで総括に代えたい。

成果を報告する前に、発掘調査中に調査地内にて1点、興味深い資料を採集したため、この場で提示したい。931である。出土地点は明らかではないが、A 2区画に仮置きした堆土から出土しているため、7-1区、7-3区、8-1区、8-2区のいずれかの調査区内からとみられる。

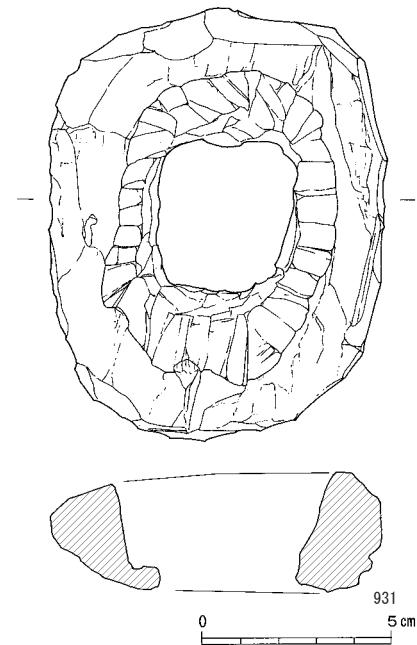
滑石製品で、隅丸方形で、中央に孔が穿たれている。外面は粗くケズられており、工具痕等は確認できない、孔の内側には工具痕跡が明瞭に残る。未製品、あるいは製品作成後の残余の部材であろう。北山廃寺、北山三嶋遺跡からは、古代から中世にかけて形成されたとみられる5-2区81-瓦溜りからも、滑石の素材片とみられる遺物が出土している。剥片等が検出されていないことを考えると、該期に小規模な滑石製品の生産がおこなわれていたのかもしれない。

### 北山廃寺、北山三嶋遺跡をめぐる地域史

本発掘調査では、個別の遺構、遺物をみても大きな成果を上げている。しかし、それ以上に注目すべきなのは、台地上のほぼ全面を発掘調査することで、各時代における遺跡内の利用のあり方の変遷という、経時的な人間活動の流れを把握できたことである。ここでは、大まかに時代を区切りつつ、その変化をあとづけてみよう。

### 弥生時代

弥生時代の遺構は、A 2区画に位置する竪穴建物4棟以外、明確なものはない。ただし、竪穴建物の一部が存在し、遺構の存在が期待された9区では、後世の削平が著しかったことから、台地の辺縁に竪穴建物がさらに複数棟展開していた可能性もある。31-竪穴建物のように拡張がなされているものがあること、29-竪穴建物1棟だけだが、平面形の方形のものが存在することから、ごく一時的な居住地として利用されたのではなく、一定期間、集落として機能していたと推定される。



第243図 表面採集遺物

遺構は確認できないが、弥生時代の遺物は、B1 区画でも散発的に出土する。特に、5-1 区第 2 遺構面のうち、北端、B1-14 ラインよりも北側の古代の粘土採掘穴からは、遺構形成過程は不明だが、第 79 図に示したとおり、完形に近いものも含め、複数の弥生土器が出土している。明確な遺構が残らず、台地上に立地していることを考慮すれば、小規模な畠作や採集活動の場であった可能性が高かろう。

## 古代（第 1 期）

今回の発掘調査では、北山廃寺の中枢域は現地保存されることとなったため、調査対象となっていない。既往の調査成果と今回の周縁部の調査成果を総合すれば、北山廃寺、北山三嶋遺跡をめぐる古代史は、少なくとも 3 期に区分できよう。

北山廃寺の造立は、これまでの見解通り、7 世紀代までさかのぼるとみられる。この時期が、古代の第 1 期にあたる。

北山廃寺の造立過程は、紀の川市教育委員会による試掘調査の成果が示すように（立岡 2010）創建段階で北山廃寺を構成する要素全てが出揃うのではないようである。

第 1 期の段階では、台地上での人間活動も広い範囲には及んでおらず、寺院中枢部とその周辺の比較的狭い空間にとどまっている。

創建期に寺に瓦を供給したとみられる 8-6 区 253- 窯、254- 窯は、寺院中枢部に近接して構築されるが、構築時期には差がある。また、複数回の操業が行われている。しかし、確認された瓦類のうち、平瓦は、1 点をのぞいて、桶巻造りで凸面に格子タタキを施した後、ヘラでナデ消すタイプのもの、丸瓦はヘラで格子タタキをナデ消すタイプのもののみが出土している。また、軒平瓦は寺域では出土していない型式のもの 1 点が出土したのみで、軒丸瓦は 1 点も見出せなかった。

北山廃寺、北山三嶋遺跡出土平瓦、丸瓦は、いくつかにグループ分けすることが可能（富加見 1996、立岡 2010）である。253- 窯、254- 窯出土瓦は、そのうちの 1 種類しか出土しておらず、製作技法も比較的斉一性が高い。このことを考えれば、253- 窯、254- 窯による造瓦活動は、ごく少数の工人集団による短期間かつ集中的な生産活動であったとみる。つまり、古代寺院を構成するような建物の屋根を、複数棟分葺くほどの瓦は、生産されなかつた可能性が高い。

かつて、寺域を区画する「西限の溝」とされた 6-2 区 127- 溝、8-4 区 206- 溝、8-5 区 218- 溝と、これにほぼ 45 度斜行して取り付き、北東から南西へとはしる 5-1 区 70- 溝、6-2 区 131- 溝は、決め手に欠けるが、この時期に掘削されたと考えておこう。126- 土坑も、同時期の所産であろう。粘土採掘穴は、1 枚造りの平瓦が出土する例が多いことから、この時期には、さほど多數は掘削していなかったとみられる。

これは、想像にすぎないが、創建期の北山廃寺は、理念としては、いわゆる古代寺院の伽藍配置を体現しようとしたものの、実際には塔のみが建物として造立され、本来あるべき伽藍の周囲に溝をめぐらして寺院中枢域を示し、排水溝を兼ねた溝で寺域を区切っていたのかもしれない。

## 古代（第2期）

古代の第2期は、8世紀前半である。今回は調査を行っていないが、紀の川市教育委員会による試掘調査成果をもとに推定すれば、創建期に掘削された溝を埋め、伽藍の周囲に盛土をめぐらせたようである。この際に行われた土地改変は、比較的大規模かつ広域にわたる。覆土に一枚造りの瓦が含まれないかごく僅少な253-窯、254-窯、「西限の溝」やこれに取り付く斜行する溝は、この時期に埋没したと考える。「西限の溝」が埋没したことは、寺院に対する人々の意識に変化があった可能性を示唆している。

この時期に製作されたとみられる、一枚造りで凹面に布目痕、凸面には全面に整然とした縄目タタキを施す瓦が、各調査区から多量に出土していることを考えれば、第1期に比べて規模の大きな建物が造立されたか、大規模な改築・増築が行われたと推定されよう。須恵器も総数では、この時期のものが最も多く、第1期に比べて、明らかに人間活動広域化、濃密化している。

一枚造りで、凸面に縄目タタキを施す平瓦は、この時期および北山廃寺、北山三嶋遺跡を特徴づける遺物である。ただし、タタキの原体の種類や、両側縁の面取り、凹面のナデ仕上げの有無など、細部には差がある。253-窯、254-窯の時期に比べれば、技術的、技法的なばらつきが大きいといえる。これは、製作期間に時間幅があるか、創建期に比べ、工人集団の規模や保持する技術力が異なるためとみられる。北山廃寺を特徴づける单弁八葉蓮花文軒丸瓦がA類、B類の2種類、あるいはそれ以上の種類に分類可能なもの、こうした背景があるのであろう。

大量の瓦が出土するいっぽう、これらを焼成した窯は確認されておらず、その探索は今後の課題である。密集して検出された第2遺構面の粘土採掘穴の存在は、瓦生産の盛んさを示す傍証である。ただし、北山廃寺、北山三嶋遺跡の場合、採取された粘土は、瓦の素材としてだけでなく、寺院の中枢部を囲む盛土にも用いられている点に注意したい。第176図に示した5Y5/2の粘土がそれである。粘土は、土木資材でもあったのである。

寺院の造立および維持管理にかかわる遺構として、もう一例、重要な遺構群として、8-4区で検出した212-土坑とその東側にある209-土坑、210-土坑、211-土坑があげられる。

鋳造遺構とそれに伴う廃棄土坑である。出土した滓は、高温によるガラス化が著しいものの、金属分をほとんど含まず、表面に僅かに緑青が観察される。このことから、高温操業を行い、かつ、炉の内部に金属が入り込まないような操業形態が想定される。使用された金属は、緑青が観察されることから、銅であろう。確実に鋳型と判断される資料も出土していない。廃棄土坑の断面土層図からは、小規模な操業とこれに伴う廃棄を幾度か繰り返したものとみられる。こうした所見から、寺院の中枢部からやや離れた位置にあるこれらの遺構は、寺の調度品の補修、維持管理に伴う「鋳掛け」などの作業を示すものと推定されよう。

このように、いわゆる一般的な「古代寺院」のイメージに近い状態になるのが、この時期である。塔に加え、幾つかの建物が建ち、これらを囲むように盛土がめぐらされる。遺跡の近隣では未発見だが瓦窯があり、瓦が焼成されている。瓦の生産に必要な粘土は、遺跡内で掘削されている。寺院の調度品の修理も行っており、台地上をくまなく利用し、ほぼ、自己完結した世界が展開している。

寺院にかかる人間活動が極めて濃密に展開するのに対し、寺院以外の居住、あるいは生産活動は、ほとんど明らかでない。確実に該基に属する建物跡はなく、あえて挙げるならば、172-柱列が2間×1間程度の手狭な建物になる可能性がある程度である。

### 古代（第3期）

古代の第3期は、8世紀後半から10世紀である。262-窯以外で確実に該期に帰属する遺構は、存在しない。ただし、各調査区から散発的に出土している重圈文軒丸瓦は、この時期まで下らせてても問題がないとみる。同じ軒丸瓦でも、単弁八葉蓮花文軒丸瓦とは、製作技法が異なることから、前代に一定の完成をみた北山廃寺は、完成後しばらくして、寺院の維持管理に携わる工人の編成を含め、大きな転換点を迎えたのである。262-窯の検出時に、基本層序第4層よりも低く、第5層より高い位置で遺構のプランを確認したことから、第2遺構面で検出した遺構のうち、時期判断の困難な遺構の一部はこの時期に位置づけられるのかもしれない。ただし、8世紀後半以降の遺物は、遺物包含層からもほとんど出土していないことから、遺跡内での人間活動は、概して低調であったのだろう。

その中で目を引く262-窯の詳細については、第7章にて写真等も使用しつつ、かなりの紙幅を割いて記載した。本窯の特徴は、非常に長期間にわたって使用されてきた可能性が高いこと、使用に伴い、少なくとも1回は大規模な改造を受けている点にある。当初は、焼成部の長さは約1.5m、幅約2mで、分焰孔に対応するように後方へ煙道が伸びている。窯の構造と壁面を構築する平瓦の種類から、古代の第2期以降に構築されたことは確実である。構築当初、いかなる種類の瓦が焼成されたかは、灰原が削平されているため、明らかではない。

分炎柱の設置が、玉縁式丸瓦と平瓦のみで構築された段階と行基式丸瓦によってかさ上げされた段階に区分可能なのか、一度に構築されたのかは、現地調査の段階から、検討を行ってきたが、明確にすることはできなかった。玉縁式丸瓦と行基式丸瓦の被熱の度合いが明らかに異なることを考えれば、2段階あったと考えたいが、決め手に欠ける。確実なのは、行基式丸瓦を用いて分焰柱を高く積み上げると同時に、奥壁に接した位置に平瓦を積み上げて焼成部を狭くし、さらに煙道を塞いだことである。

本窯の操業時期の下限は、891の黒色土器が一つのカギとなる。他にも、底面からはやや浮いた位置で出土しているが、ほぼ完形で出土した892や893も参考資料としてよからう。

なお、分焰柱の行基式瓦や、奥壁に接した位置に積み上げられた平瓦は、北山廃寺、北山三嶋遺跡では本窯以外でほとんど出土しない。少なくとも、図示可能な状態のものは、1点も見いだせていない。そのため、焼成した瓦は大半が搬出されたとみてよからう。丸瓦、平瓦とも、大きさ、調整技法とともに特徴的であるため、資料が蓄積されれば、搬出先も明らかになろう。

### 中世（第1期）

中世の遺構は、細かな時期まで絞り込むのが難しい。建物類からは、良好な遺物に恵まれず、瓦器片の存在から、中世であることを判断することができる程度である。その中で、出土遺物

の傾向等から、あえて時期を設定し、遺跡内での人間活動を追ってみよう。

第1期は、11世紀から12世紀ごろである古代に近い時期である。確実に該期に帰属すると判断される建物跡は検出されなかったが、連珠文軒平瓦や対向唐草文軒平瓦の存在から、寺院の存在が推定される。ただし、軒平瓦が一定量出土しているのに対し、軒丸瓦は1点も出土していない。また、平瓦は、離れ砂を多用するという特徴を持つため、小片となつても、古代瓦とは弁別可能だが、8-1区、8-2区、8-3区以外では、出土が確認できない。瓦の出土数が少數であることは、仮に北山廃寺の法灯が存続していたとしても、規模が小さくなつたことを示唆している。

なお、連珠文軒平瓦はきわめて特徴的な模様を持つが、類例が大阪府堺市日置荘遺跡（市村ほか1995）で出土している。また、対向唐草文軒平瓦の類例は大阪府阪南市金剛寺遺跡（駒井ほか1994）などで出土している。軒平瓦の系譜は、和泉地域に求めることができよう。

羽口が出土していること、貴志川町教育委員会の試掘トレンチ内で壁が被熱し、覆土に炭化物が含まれた土坑が検出されていることから、手工業活動も行っていたことが想定される。しかし、遺構、遺物は、A2区画でも南側に密集しており、他の地区では痕跡に乏しい。ただし、密集して検出され、出土遺物の乏しさから時期比定が困難だった小穴群の一部が該期に帰属する可能性は、十分にあろう。

また、81-瓦溜りから退化した貼付け高台を持つ瓦器碗がほとんど出土していないこと、当該瓦溜りを一部掘削して258-窯、259-窯が構築されていることから、81-瓦溜りの形成時期も本期の可能性があろう。つまり、北山廃寺の終焉が、この時期になる可能性が高い。

## 中世（第2期）

13世紀から14世紀である。北山廃寺、北山三嶋遺跡から出土する中世の土器類としては最も数量の多い、退化の著しい貼付け高台、表面に明瞭に残るユビ押さえ、甘い焼成で脆く、表面の炭素吸着も不均一、という特徴を持つ瓦器碗を指標とする時期である。遺跡のほぼ全域に遺構がみられ、遺物包含層からの遺物の出土も多い。瓦器以外にも、数こそ少ないものの、青磁、白磁もこの時期のものが圧倒的に多い。一端、狭い地点に収束した人間活動が、再び広域で展開されるようになるのである。

掘立柱建物は、大半がこの時期とみられる。特に、88-掘立柱建物は、内部にロクロピットと思しき85-小穴を持っており、258-窯、259-窯との関連が注目される。細長い燃焼部と円形の焼成部を持つ土師器焼成土坑と見えなくもない、249-土坑も、根拠に乏しいが、この時期であろう。

掘立柱建物の分布が遺跡の中でも東側に偏り、生産域が西側に位置するのは、弥生時代と同様に、水はけの良さ、粘土としての好適土の分布といった土質に左右されたものと考えられる。

258-窯、259-窯は、出土した瓦の特徴からみて、この段階に位置づけてよからう。窯から出土したものと同じ特徴を有する瓦は、本窯以外の北山廃寺、北山三嶋遺跡の遺構からは出土しておらず、搬出されたとみられる。262-窯での瓦の焼成と同様に、遺跡内での消費ではなく、

搬出を目的として生産されたのであろう。事実報告で既に指摘したが、瓦当文様は左右非対称の特徴的な文様のため、今後、搬出先の探索が課題となろう。

### 中世（第3期）

15世紀以降である。遺物の出土数は激減する。僅かに、備前系の擂鉢や土師器の小皿が散発的に確認される程度である。現況地割に沿うような溝も確認されることから、耕地化されたとみられる。溝のあり方などからは、現在の景観のおおよその基礎が、この時期に形成されたことが想定される。

該期以降は、近世、近代と同様の土地利用が連綿と続き、現在に至ったとみられる。耕地化された後も、遺構として認識できないものもあるとみられるが、地筆の拡張や分割、台地を広げるために辺縁部の落込みを埋め戻す営みは連綿と続いたに違いない。本報告では、紙幅の都合もあり、近世以降に下るとみられる遺構はあまり取り上げなかつたが、238-石垣が、そうした営みを示す一端である。

### 引用文献

- 市村芳三ほか 1995『日置荘遺跡』大阪府文化財センター  
褐磨正信ほか 1981『貴志川町史』第3巻 貴志川町史編集委員会  
駒井正明ほか 1994「金剛寺遺跡出土瓦の再検討」『研究紀要』2 (財)大阪府文化財協会  
立岡和人 2008『紀の川市内遺跡発掘調査概要報告書』紀の川市教育委員会  
立岡和人 2010『紀の川市内遺跡発掘調査概要報告書』紀の川市教育委員会  
富加見泰彦 1994『北山廃寺発掘調査報告書』貴志川町教育委員会  
和歌山県教育委員会 2009『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成19年度—』和歌山県教育委員会

# 写 真 図 版

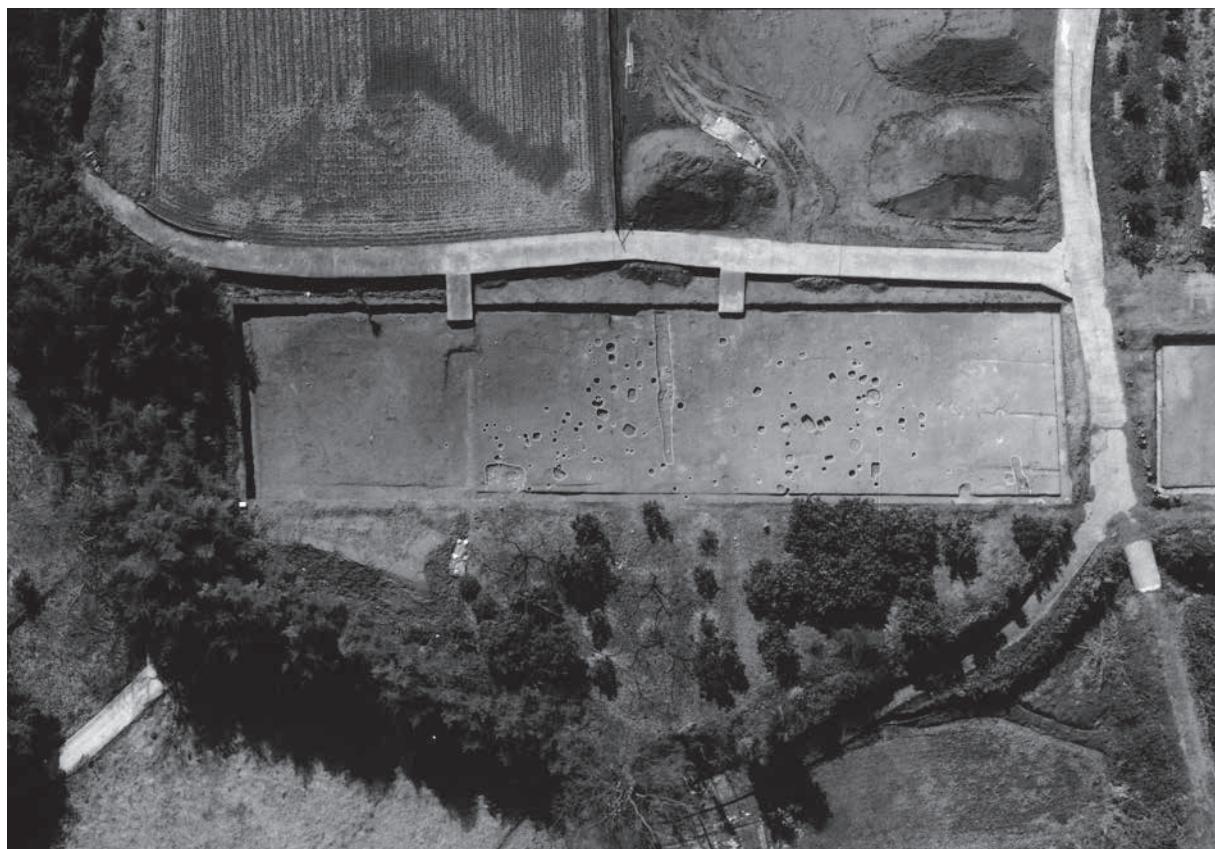


写真図版 1 調査区遠景、近景



写真図版  
2

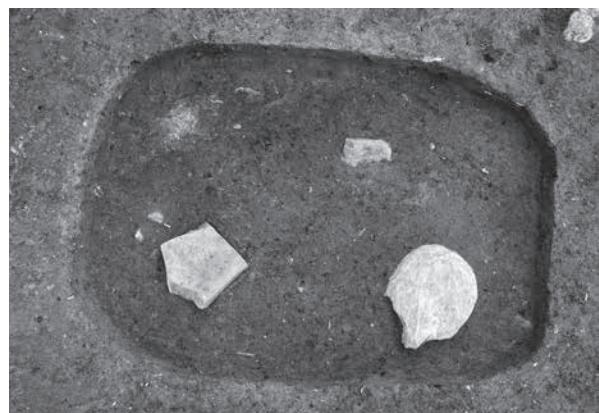
1-1区  
遺構



1. 1-1 区全景（航空写真：上が南）



2. 3 - 土坑（南東から）



3. 4 - 土坑（西から）



4. 1 - 溝（北から）



5. 1 - 溝（北東から）

写真図版 3  
1-2 区遺構



1. 1-2 区全景（航空写真：上が北）



2. 1-2 区全景（西から）

写真図版  
4  
1-2区遺構



1. 23- 土坑（南から）



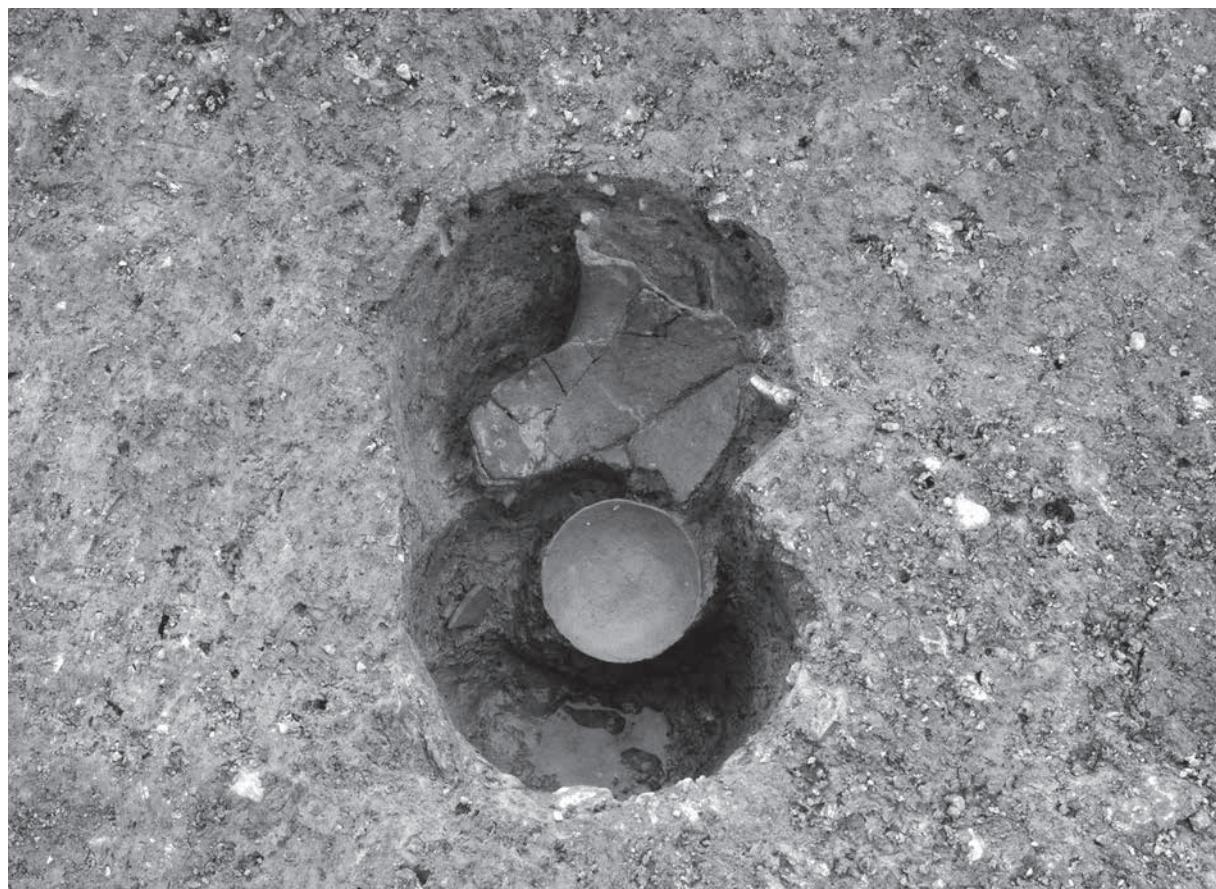
2. 24- 土坑（南から）



3. 28- 土坑（南から）



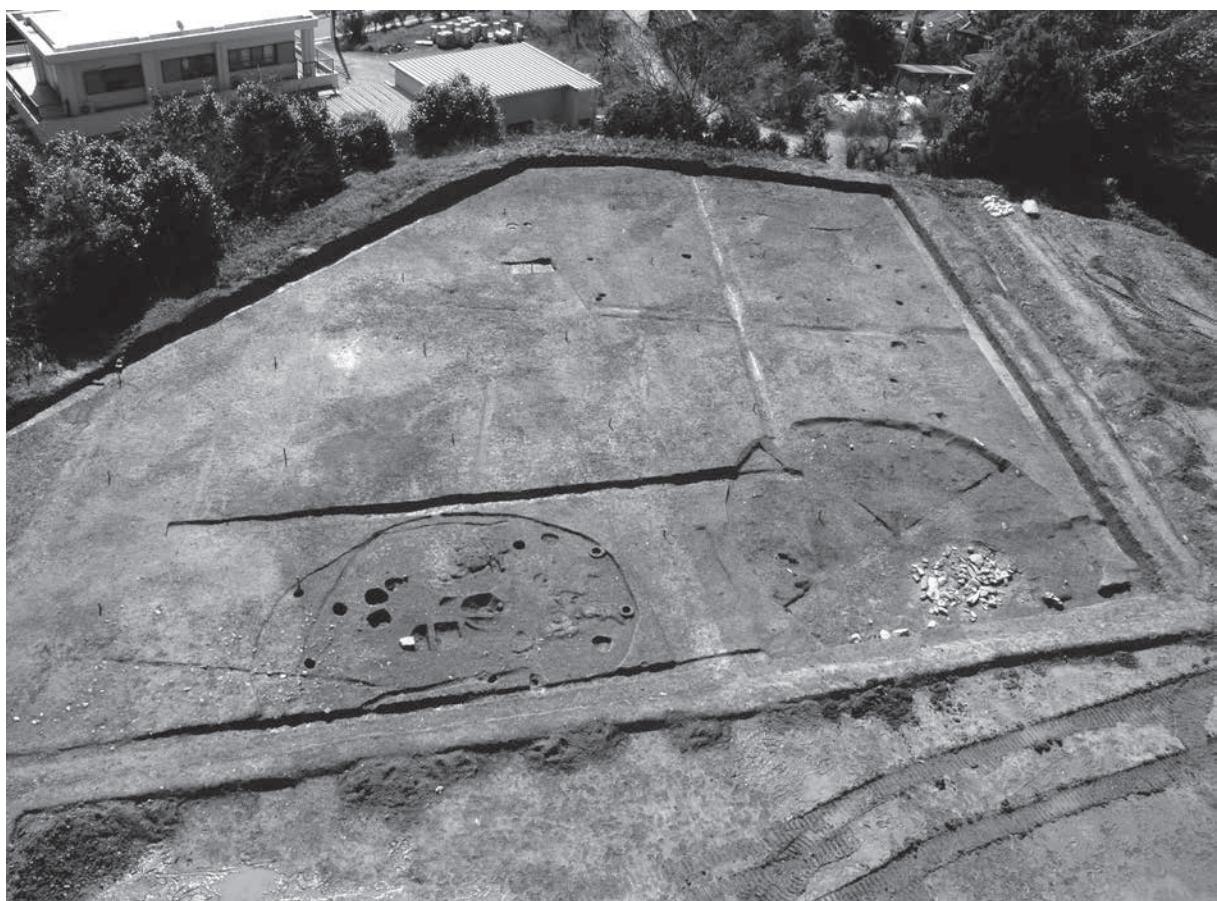
4. 26- 井戸（西から）



5. 17、18- 小穴（東から）



1. 2区全景（航空写真：上が北）



2. 2区31、32- 竪穴建物（北から）

写真図版  
6

2区遺構



1. 30- 積穴建物（北西から）



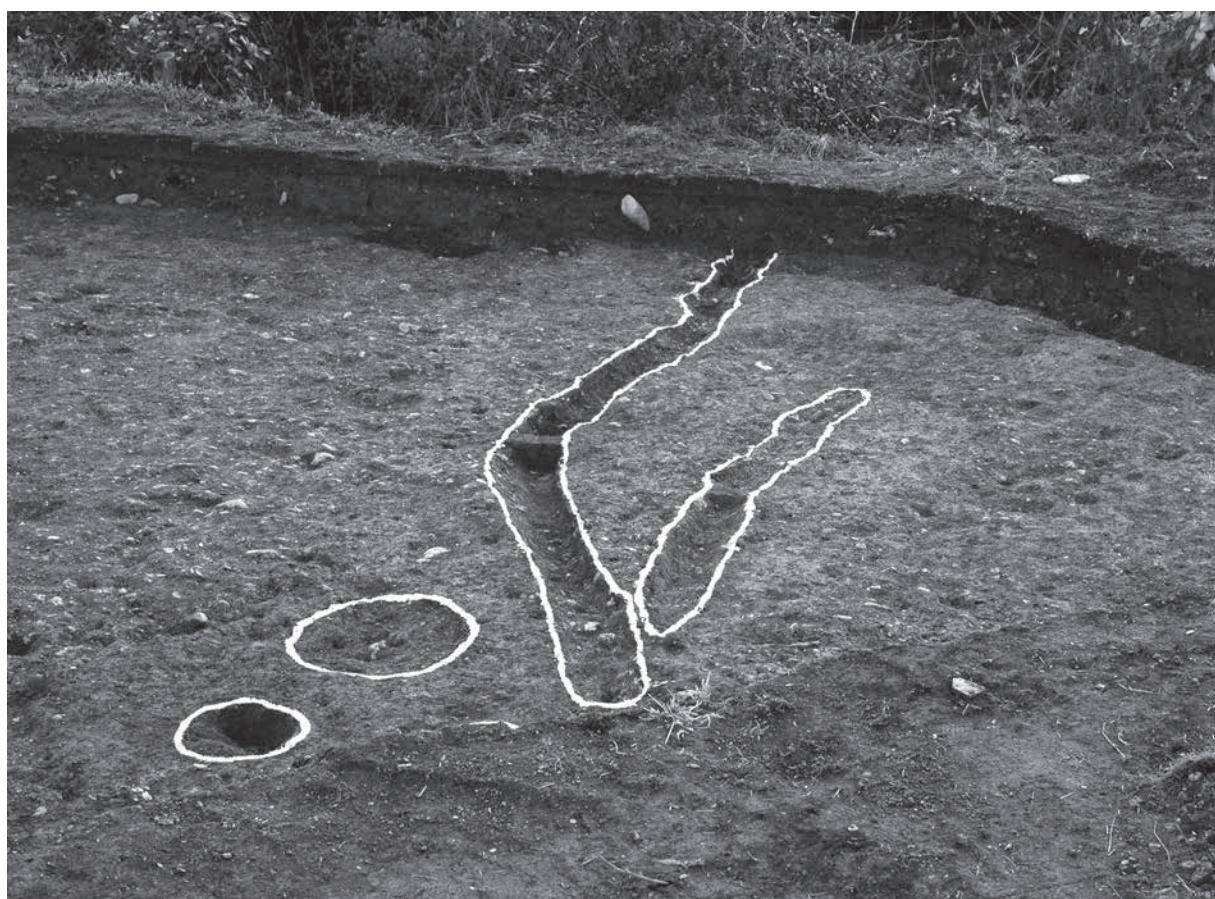
2. 31- 積穴建物（南から）



3. 32- 積穴建物（南から）



1. 3区全景（航空写真：上が北）

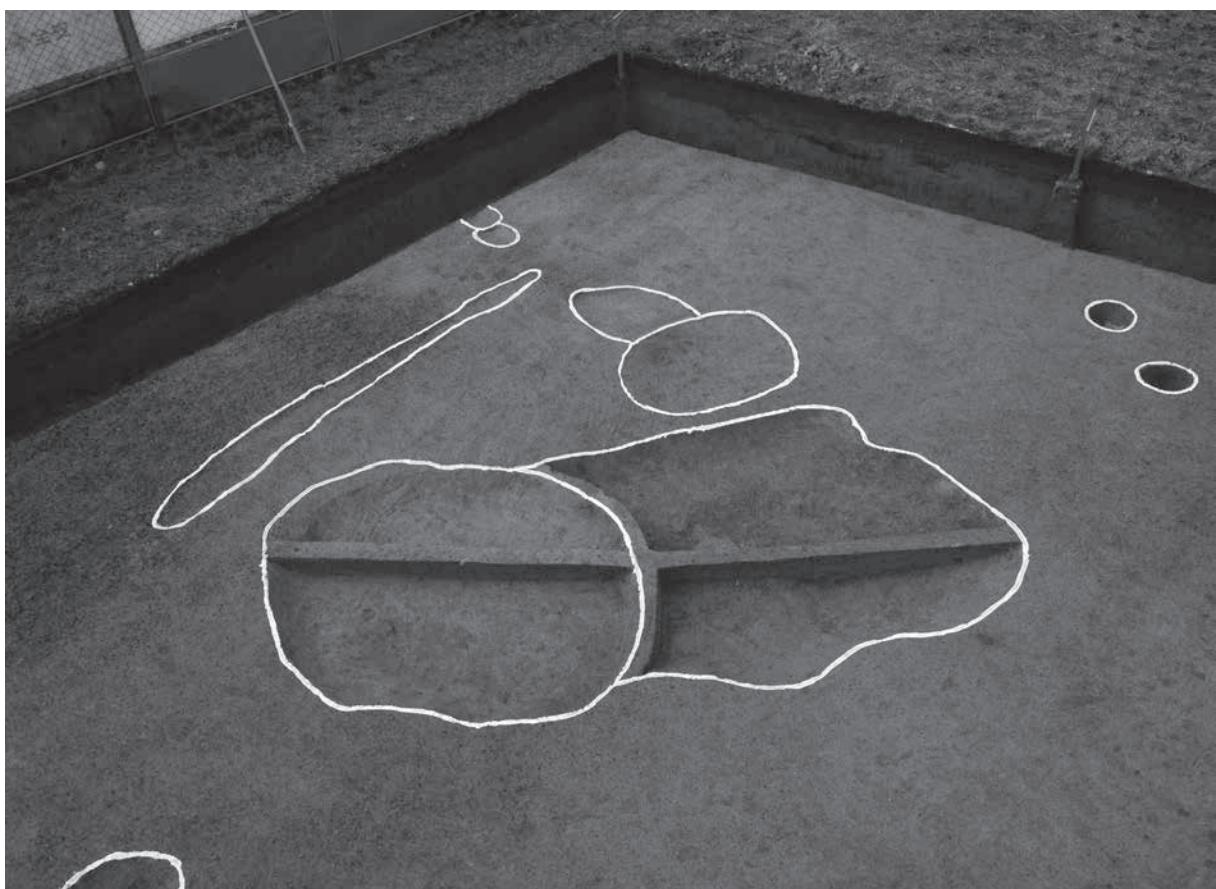


2. 35、36-溝（北から）

写真図版8  
4区遺構



1. 4区全景（北西から）



2. 41、42- 土坑（北東から）



1. 5-1区全景（航空写真：上が北）



2. 45- 土坑（北から）



3. 49- 土坑（北東から）



4. 52- 土坑（東から）



5. 54- 土坑（南から）



1. 69- 土坑（北西から）



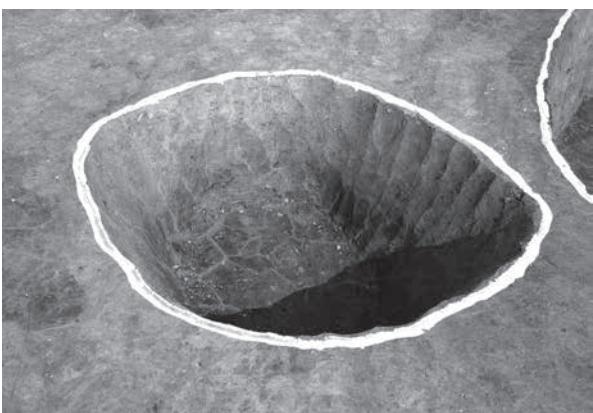
2. 61、62- 粘土採掘穴  
(東から)



3. 65- 粘土採掘穴  
断面土層（南から）



1. 5-1区第2遺構面全景（航空写真：上が西）



2. 74- 粘土採掘穴（南から）



3. 75- 粘土採掘穴（南から）



4. 78- 粘土採掘穴（北東から）



5. 80- 粘土採掘穴（北から）



1. 5-2 区全景（航空写真：上が南）



2. 88- 掘立柱建物ほか（南から）



3. 82- 土坑（南東から）



4. 84- 土坑断面土層（東から）



5. 81- 瓦溜り（南から）



1. 5-1区第2遺構面 2009年度調査分全景（航空写真：上が南）



2. 89- 粘土採掘穴（北から）



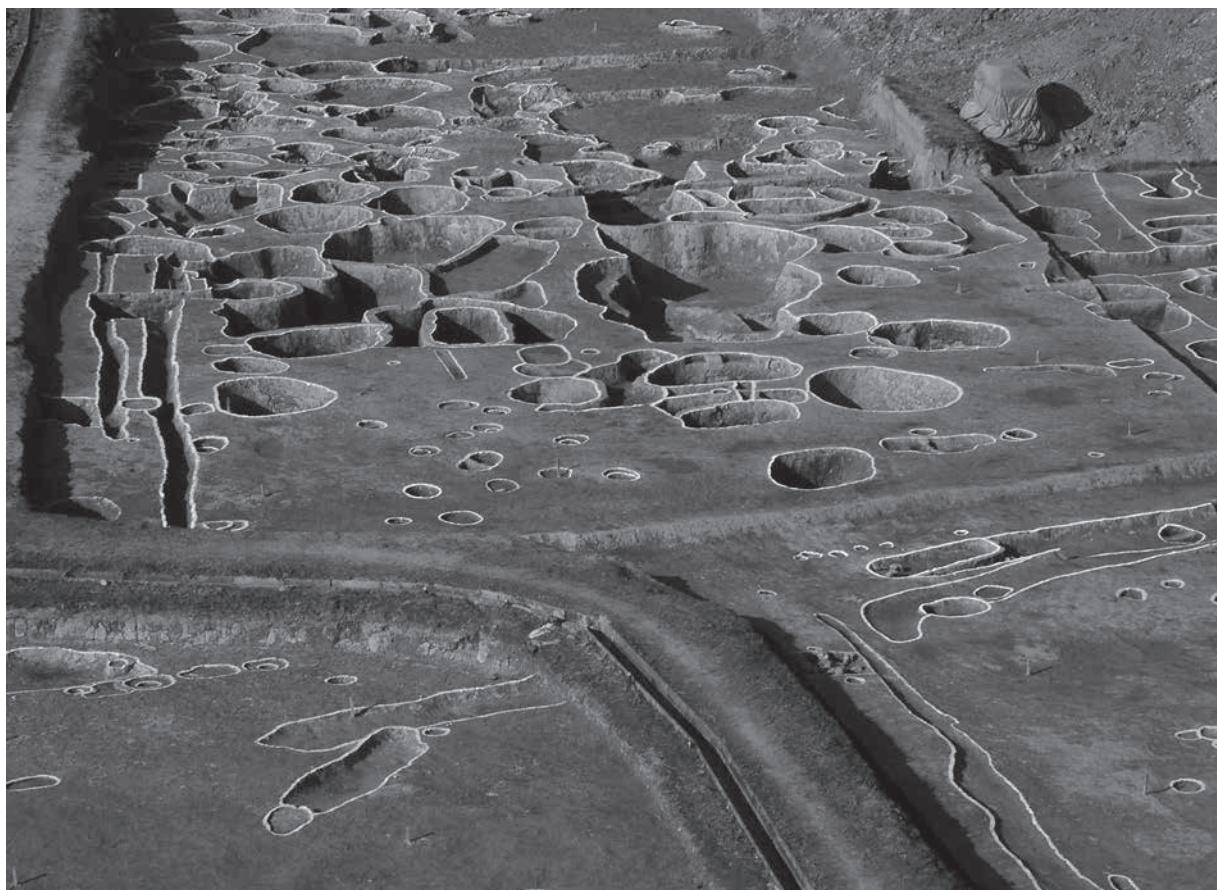
3. 90- 粘土採掘穴（南から）



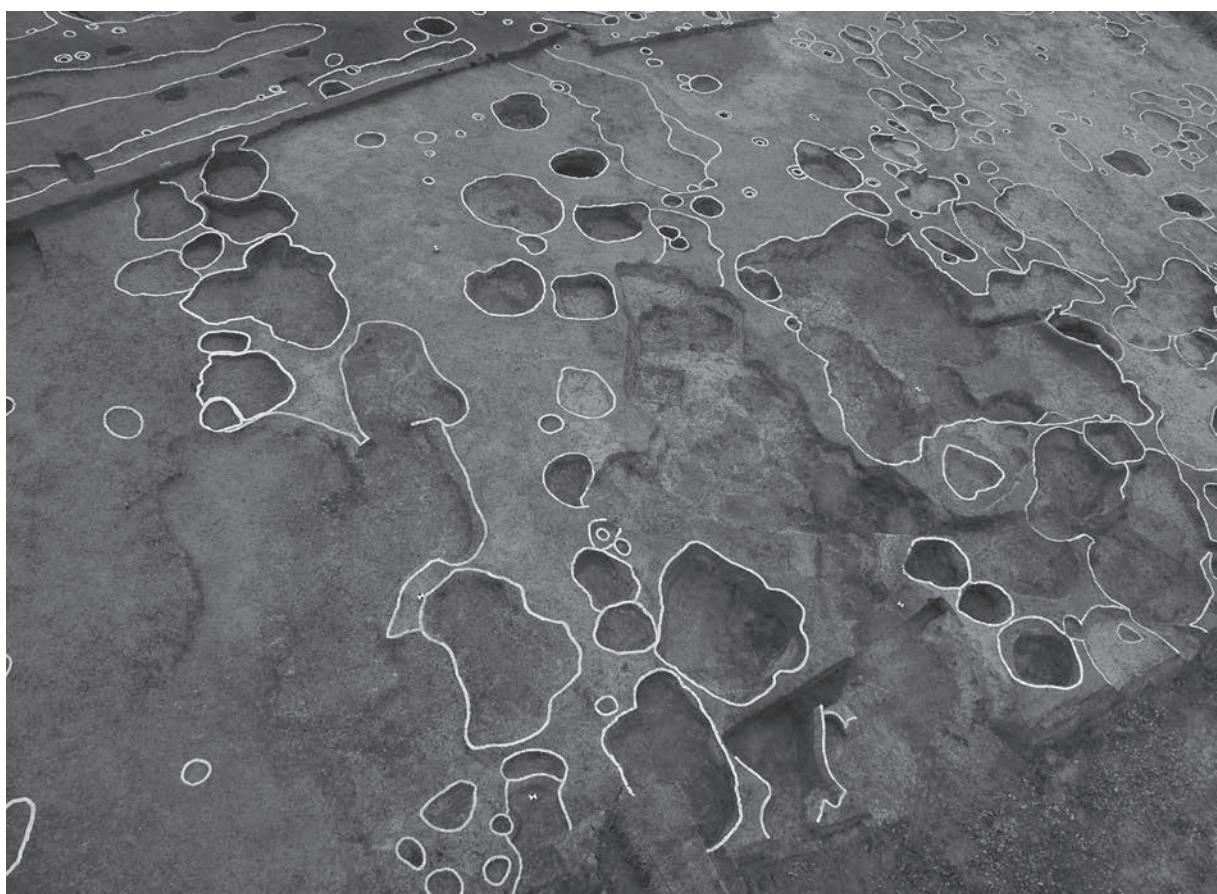
4. 96- 粘土採掘穴（東から）



5. 99、100- 粘土採掘穴（南から）



1. 6-1区全景（南から）



2. 6-1区第2遺構面全景（北東から）



1. 6-2区全景（航空写真：上が北東）



2. 118- 土坑（西から）



3. 121- 土坑（西から）



4. 126- 土坑（北西から）



5. 109- 粘土採掘穴（南西から）



1. 127、131- 溝（南から）



2. 131- 溝（南西から）



3. 129- 小穴（南東から）



1. 2区全景  
(航空写真: 上が南)



2. 6-1、6-2区全景 (北東から)



3. 136- 土坑 (北から)



1. 137- 土坑（西から）



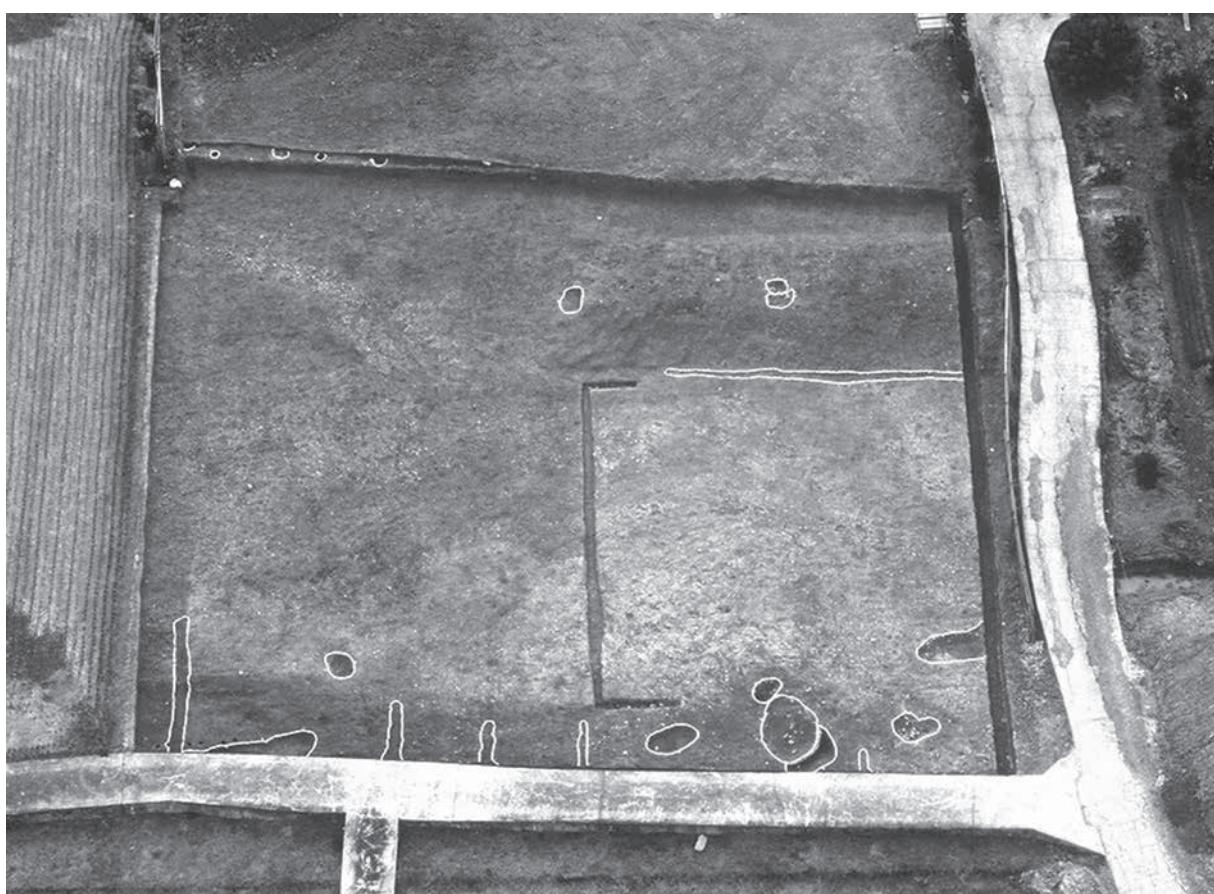
2. 138- 土坑（北西から）



3. 133- 粘土採掘穴（南から）



4. 135- 土坑（北西から）



5. 7-1 区全景（航空写真：上が南）



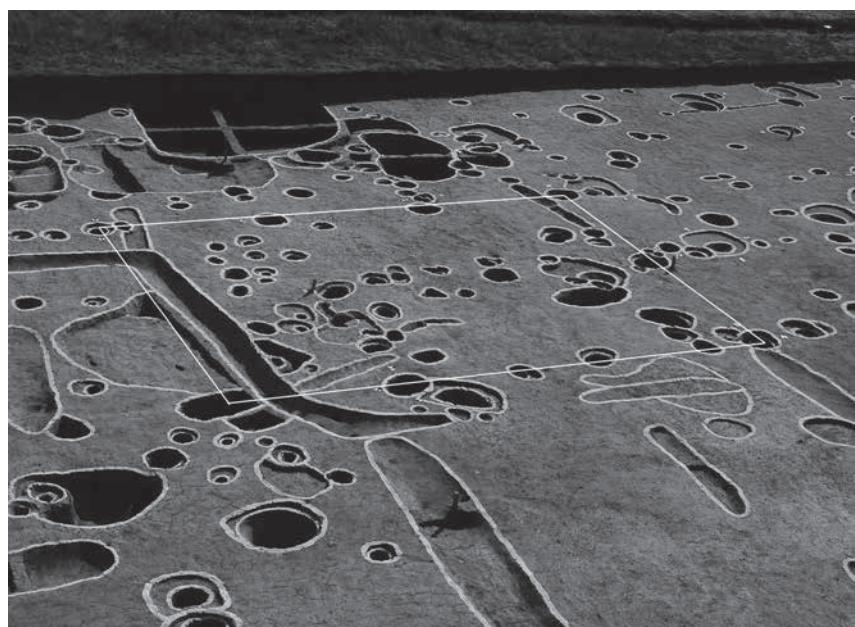
1. 7-4区全景  
(航空写真：上が西)

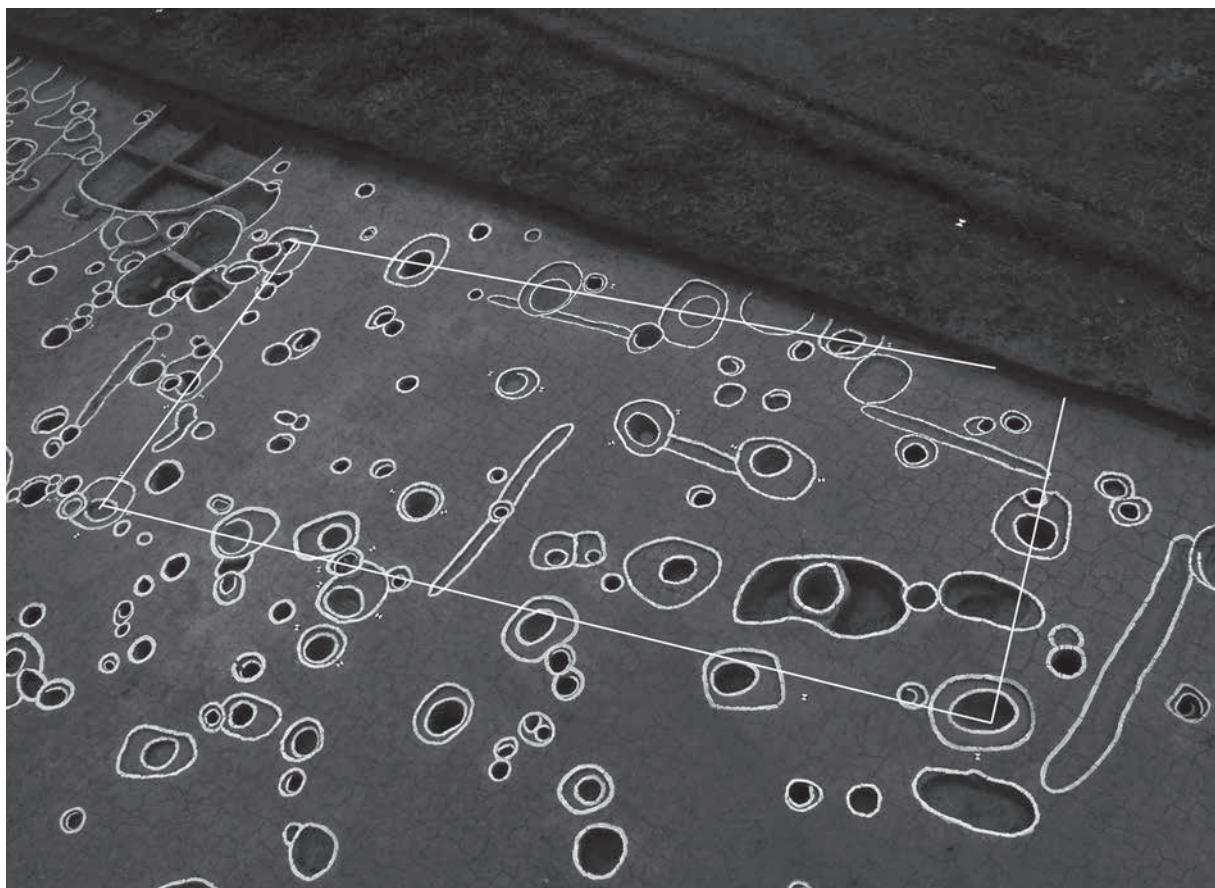


2. 151-掘立柱建物（北から）



3. 154-掘立柱建物（北から）





1. 161- 掘立柱建物（北西から）



2. 150- 土坑（東から）



3. 160- 土坑（東から）



4. 158- 小穴（北から）



5. 165- 小穴（南西から）



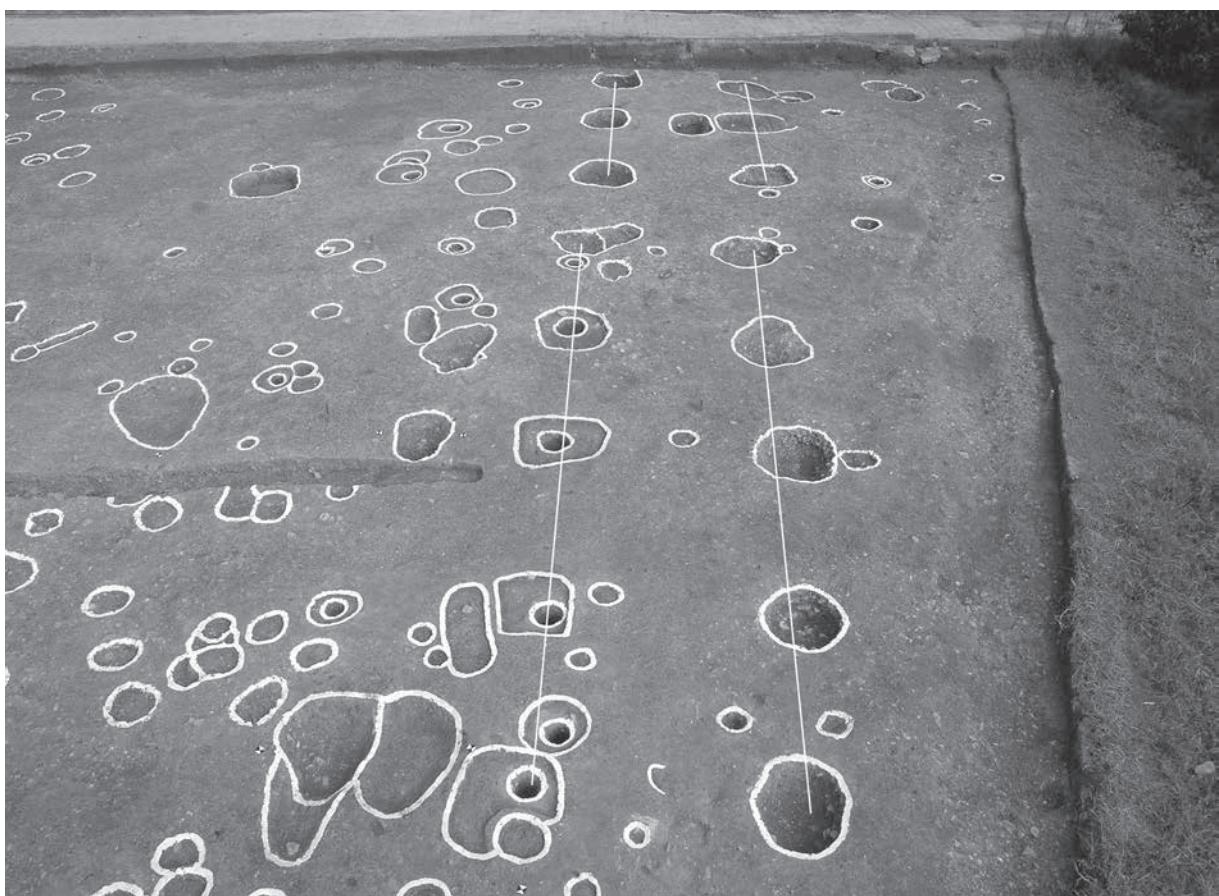
1. 7-4 区第2遺構面遺構（航空写真：上が北）



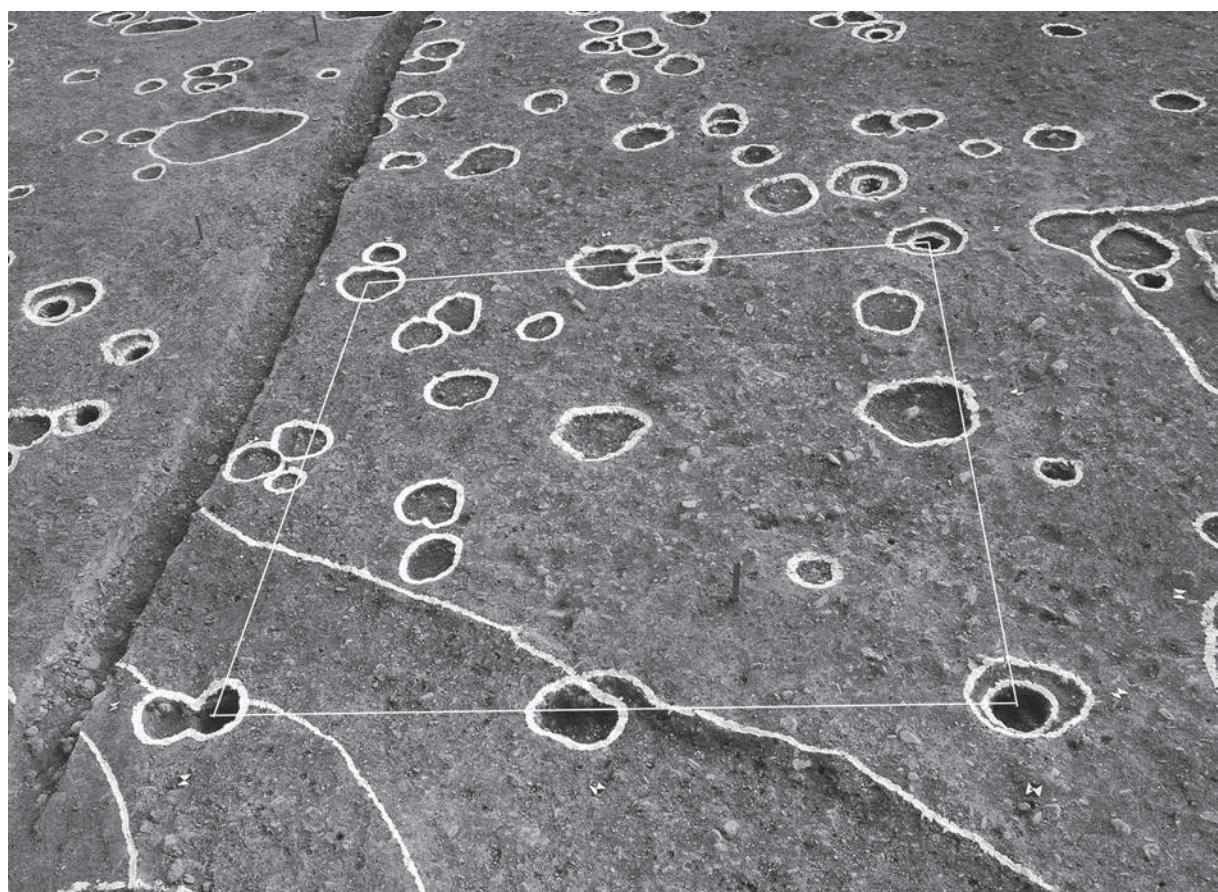
2. 171- 溝（北から）



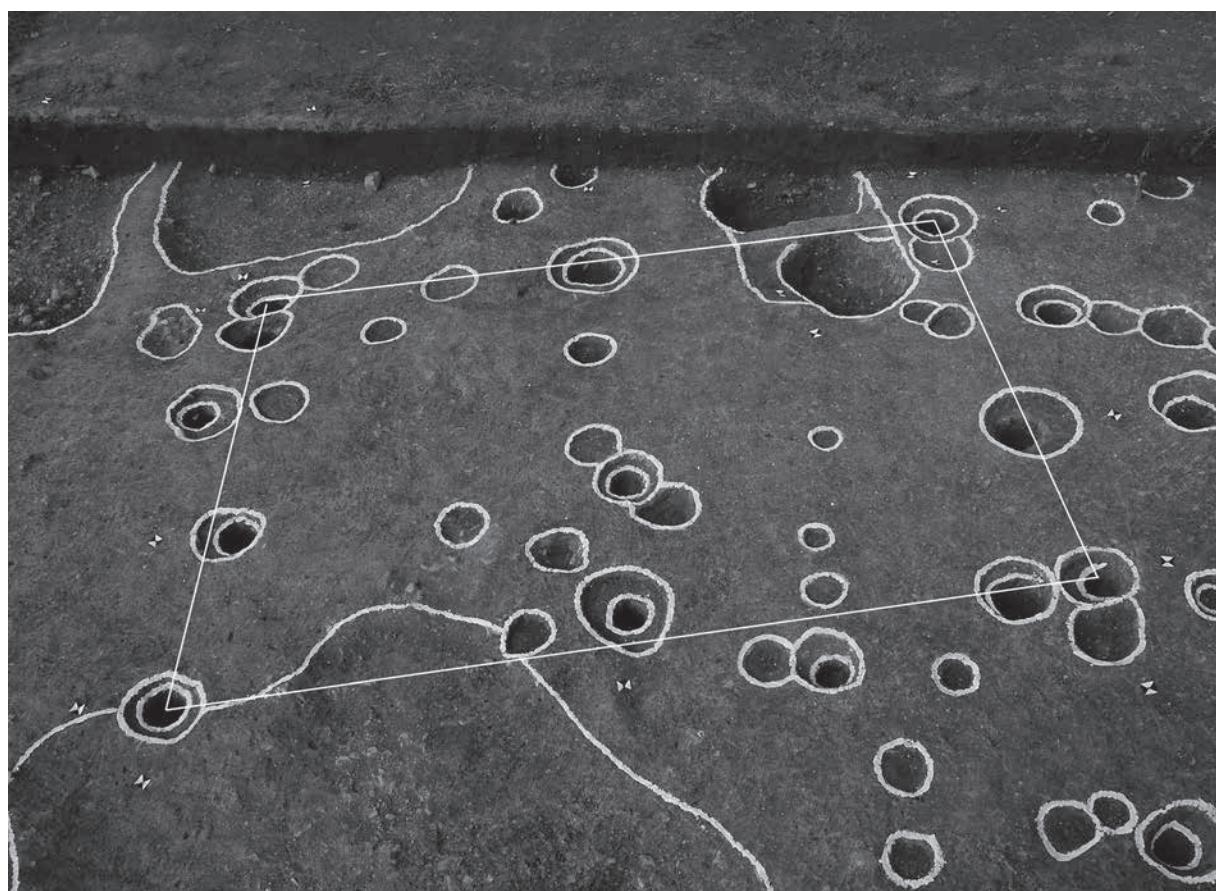
1. 8-1 区全景（航空写真：上が南）



2. 172- 柱列（南から）



1.177—掘立柱建物（西から）



2.184—掘立柱建物（東から）



1. 179- 土坑（西から）

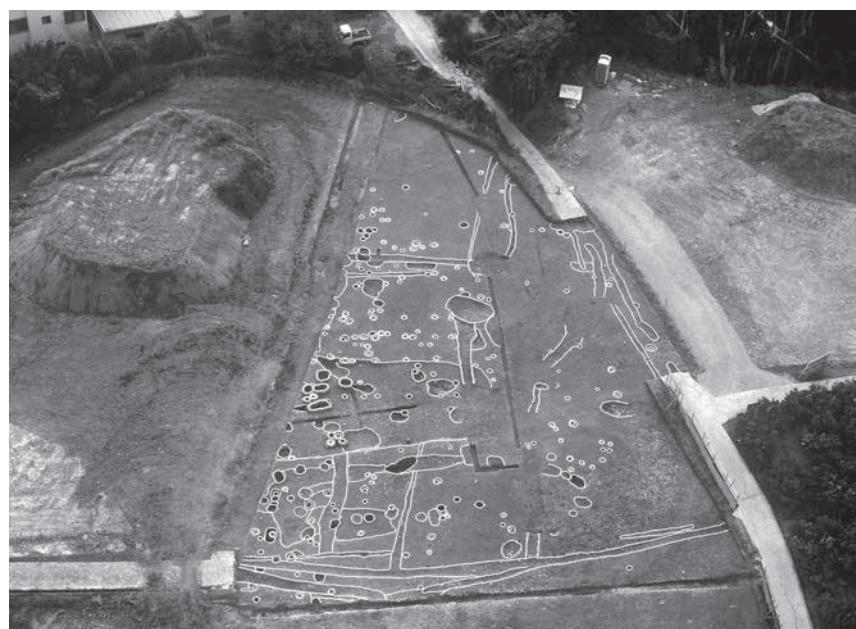


2. 183- 土坑（北から）

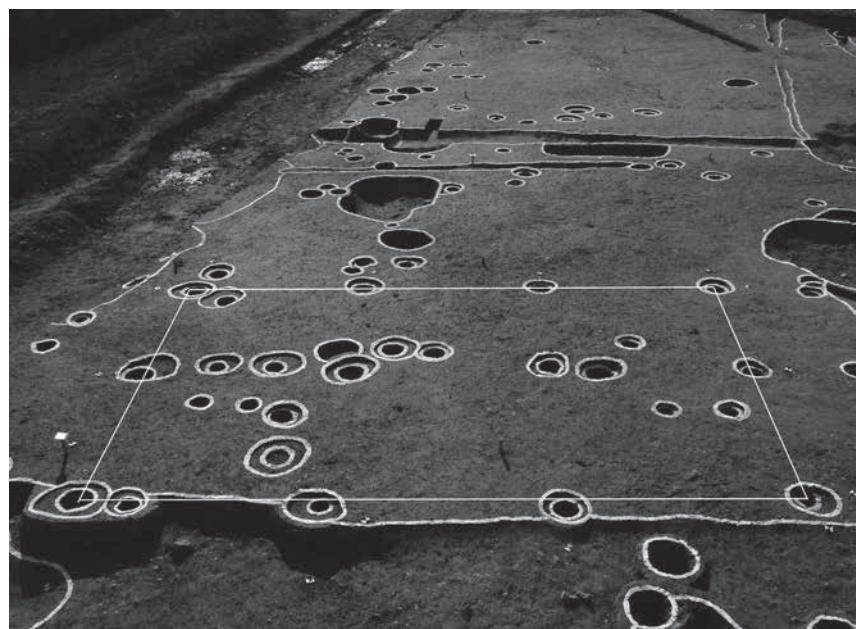


3. 189- 土坑（北西から）

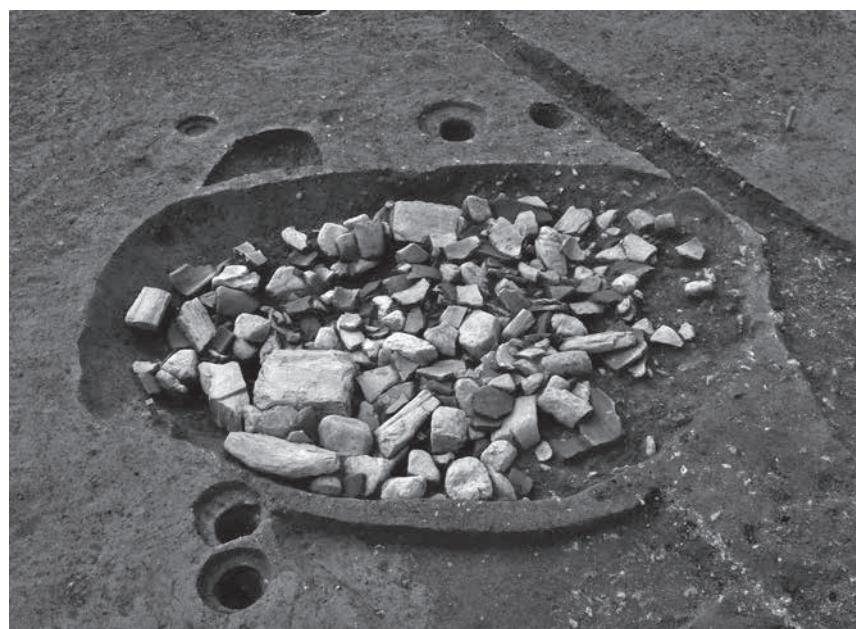
1. 8-2区全景  
(航空写真：上が南)



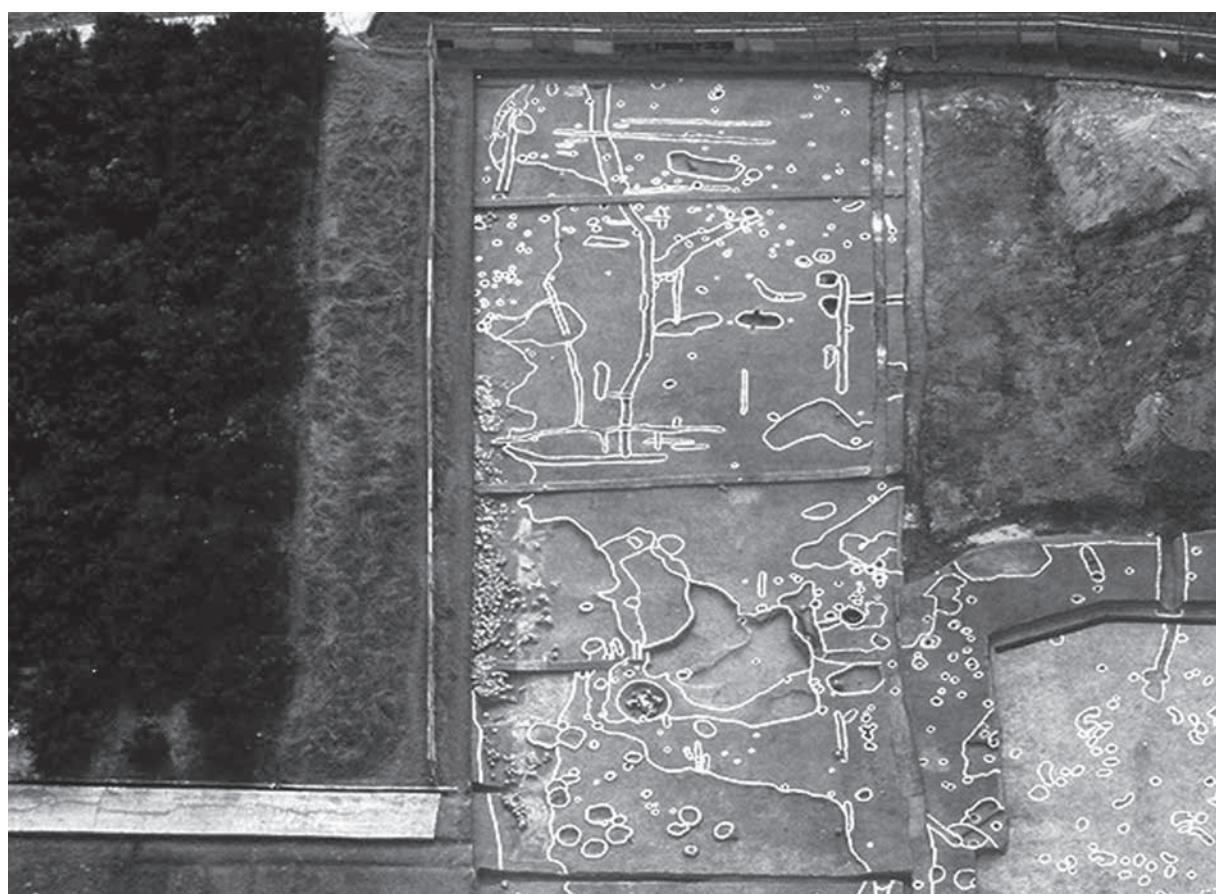
2. 196- 土坑 (北から)



3. 198- 土坑 (北東から)







1. 8-4 区全景（航空写真：上が南）



2. 210- 土坑（北西から）



3. 212- 土坑（北から）



4. 213- 土坑（北から）



5. 214- 土坑（南から）



1. 207- 溝とその周辺  
(航空写真: 上が北)



2. 208- 盛土 (南から)



3. 208- 盛土断面土層 (北西から)

写真図版  
30

8-5区遺構

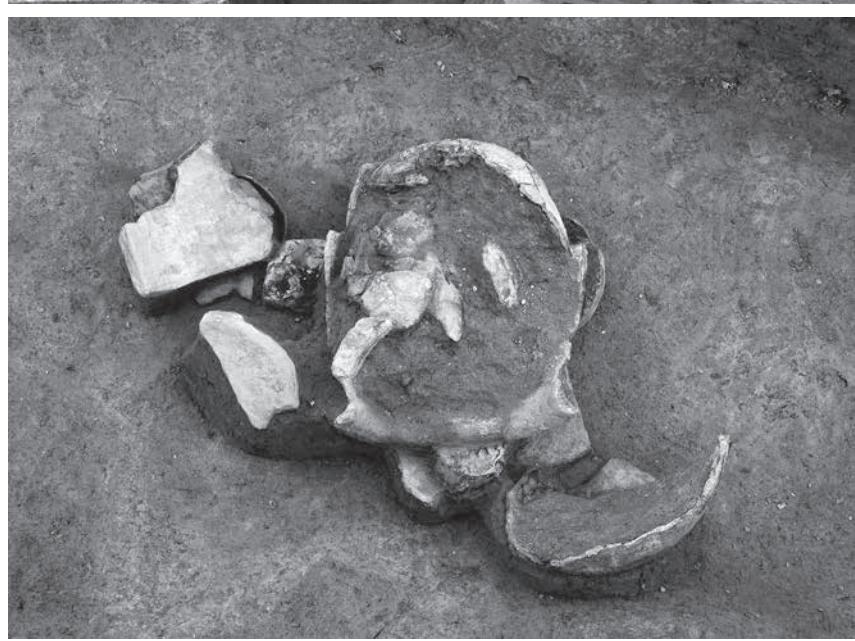
1. 8-5区全景  
(航空写真：上が北)



2. 218-溝（北から）



3. 218-溝（東から）





1. 9区全景（航空写真：上が北西）



2. 221- 土坑（東から）



3. 222- 土坑（北から）



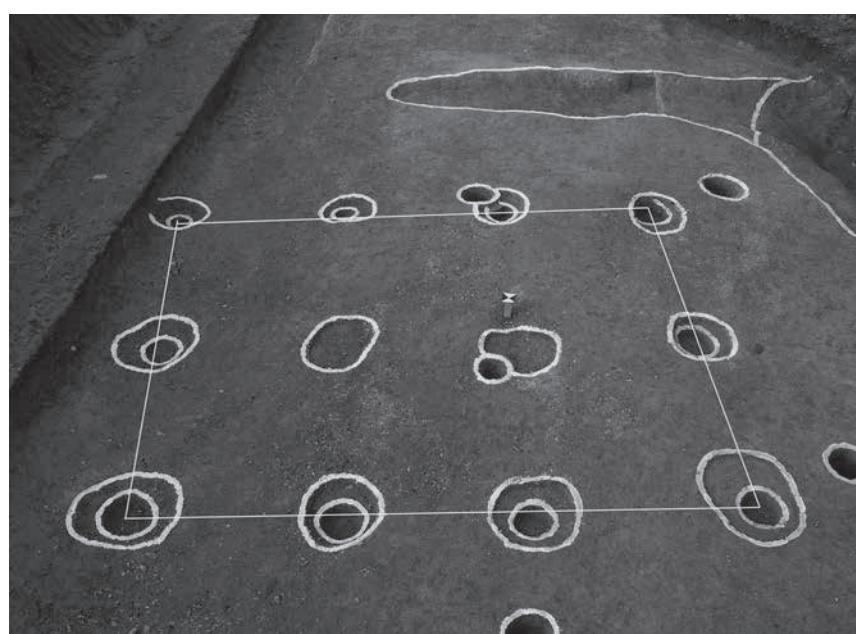
4. 224- 土坑（北から）



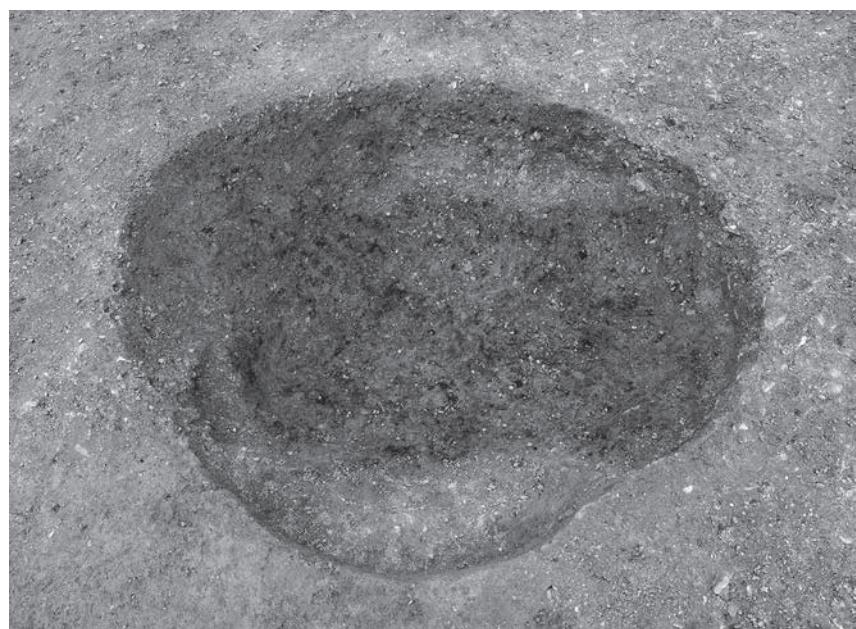
5. 226- 土坑（西から）



1. 11区全景（航空写真：上が北）



2. 227- 掘立柱建物（東から）



3. 236- 土坑（東から）



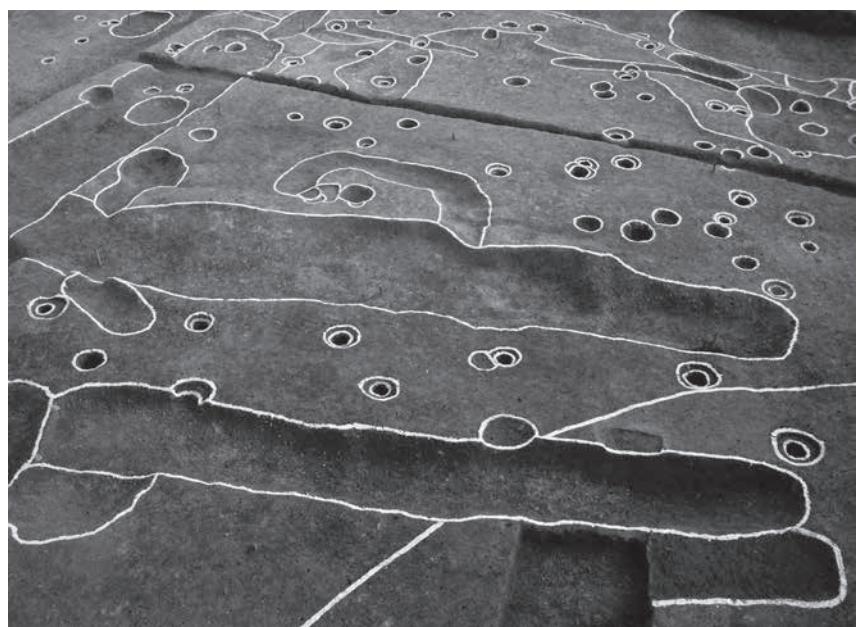
1. 7-2 区全景  
(航空写真：上が南)



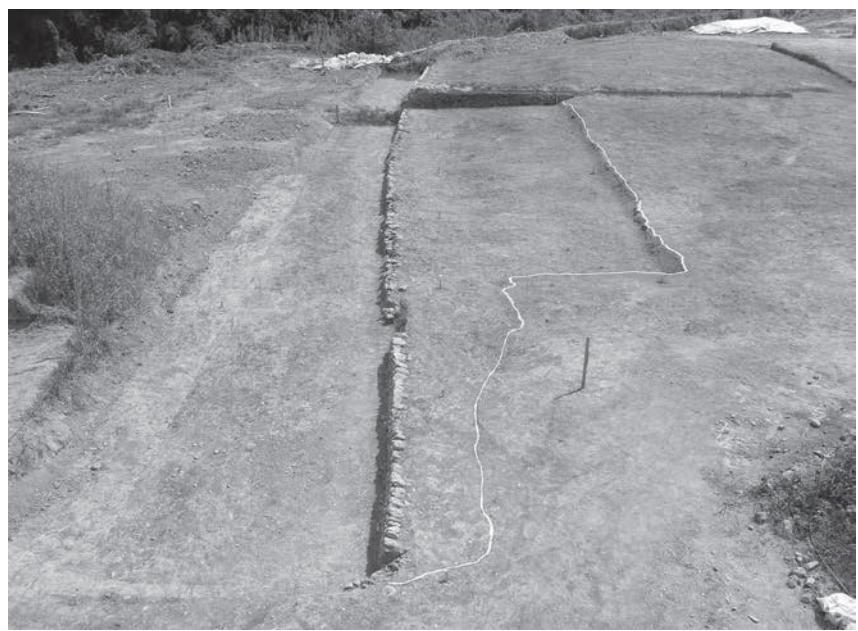
2. 244- 土坑（北西から）



3. 248- 土坑（北から）



1. 243-溝（北から）



2. 238- 石垣（西から）



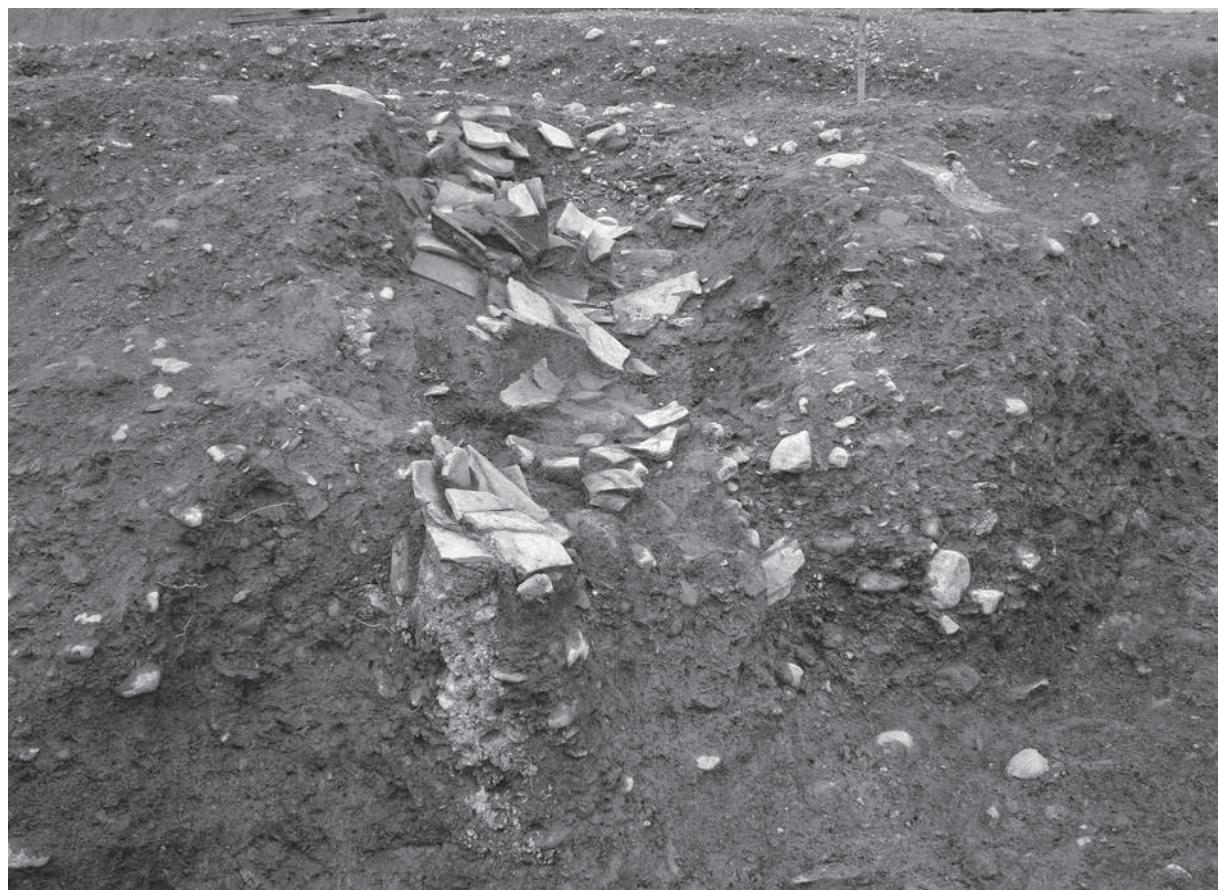
3. 238- 石垣立面（北西から）



1. 8-6 区全景（航空写真：上が北）



2. 252- 落ちおよびその周辺（東から）



1. 253- 窯遺物出土状況（南東から）



2. 253- 窯完掘状況（南東から）



1. 254- 窯遺物出土状況（北から）



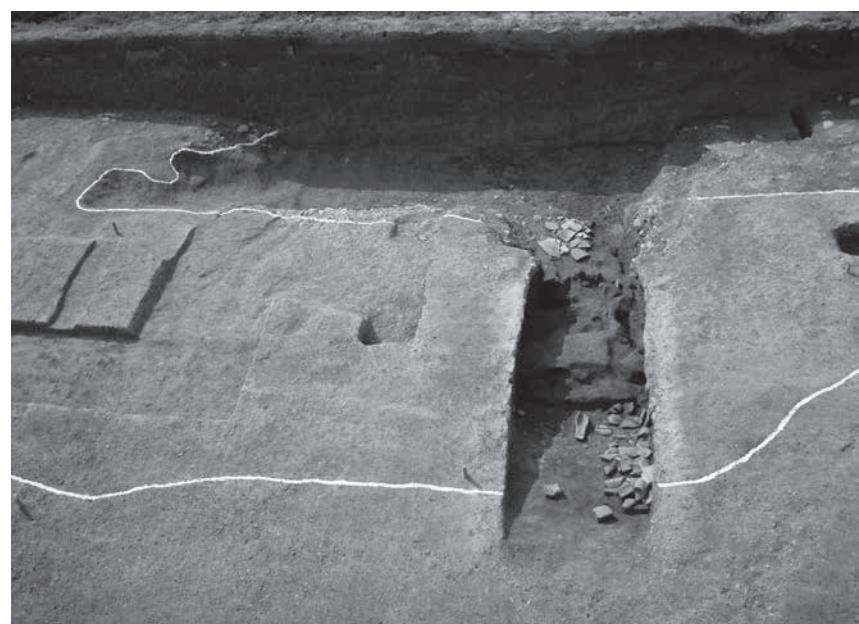
2. 254- 窯遺物出土状況（南から）

写真図版  
38

8-6区遺構



1. 254- 窯完掘状況（南から）



2. 254- 窯、252- 落ち（北から）



3. 255- 落ち断面土層（南東から）



1. 10区全景（航空写真：上が南）



2. 258、259- 窯とその周辺  
(北東から)



3. 258、259- 窯（北から）

1. 258- 窯（北から）



2. 259- 窯（北から）



3. 259- 窯焼成部（東から）

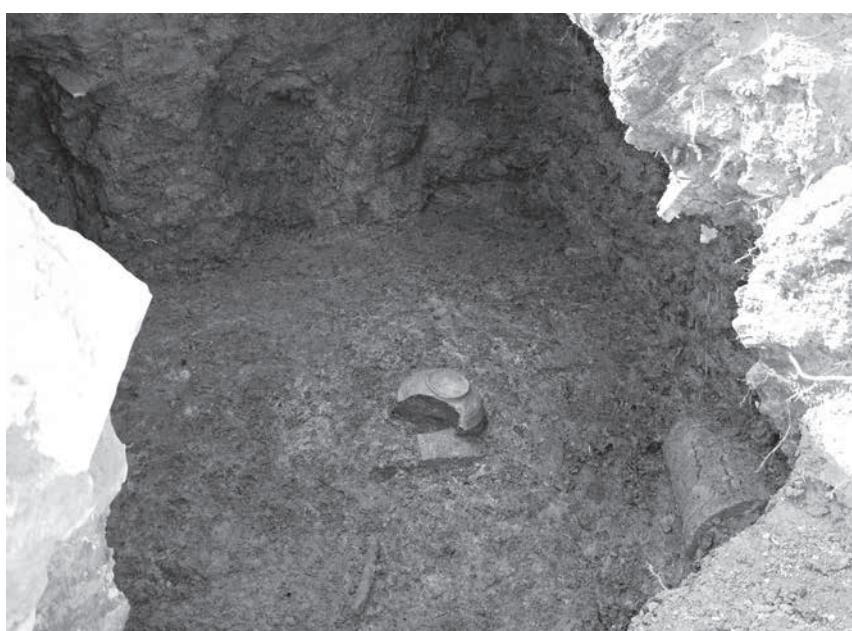




1. 262- 窯とその周辺  
(北東から)



2. 262- 窯 (南東から)



3. 262- 窯焼成部遺物出土状況  
(東から)



1. 262- 烟焼成部（南西から）



2. 262- 烟隔壁（南西から）



3. 262- 烟南側壁（北西から）



4. 262- 烟奥壁（東から）



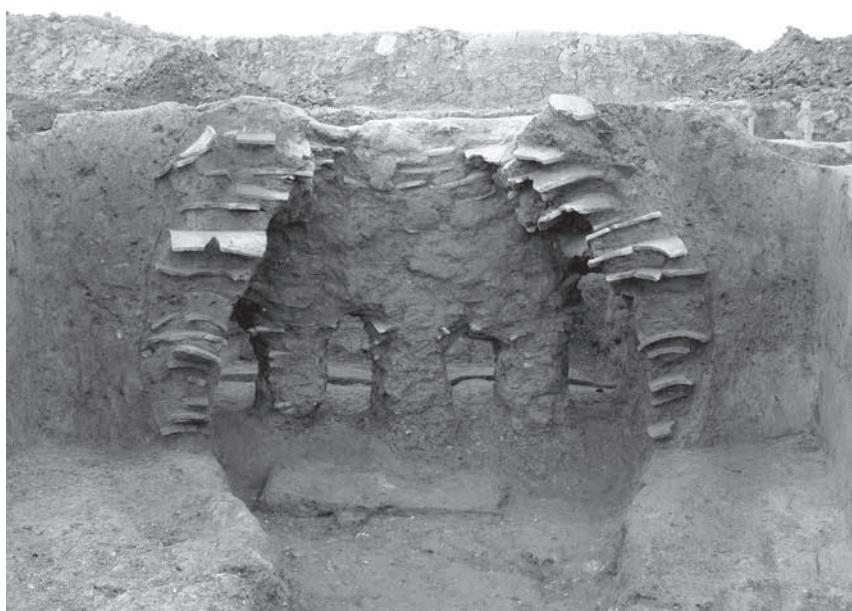
5. 262- 烟奥壁平瓦除去後（東から）



1. 262- 窯煙道構築状況  
(東から)



2. 262- 窯煙道断面土層  
(北西から)



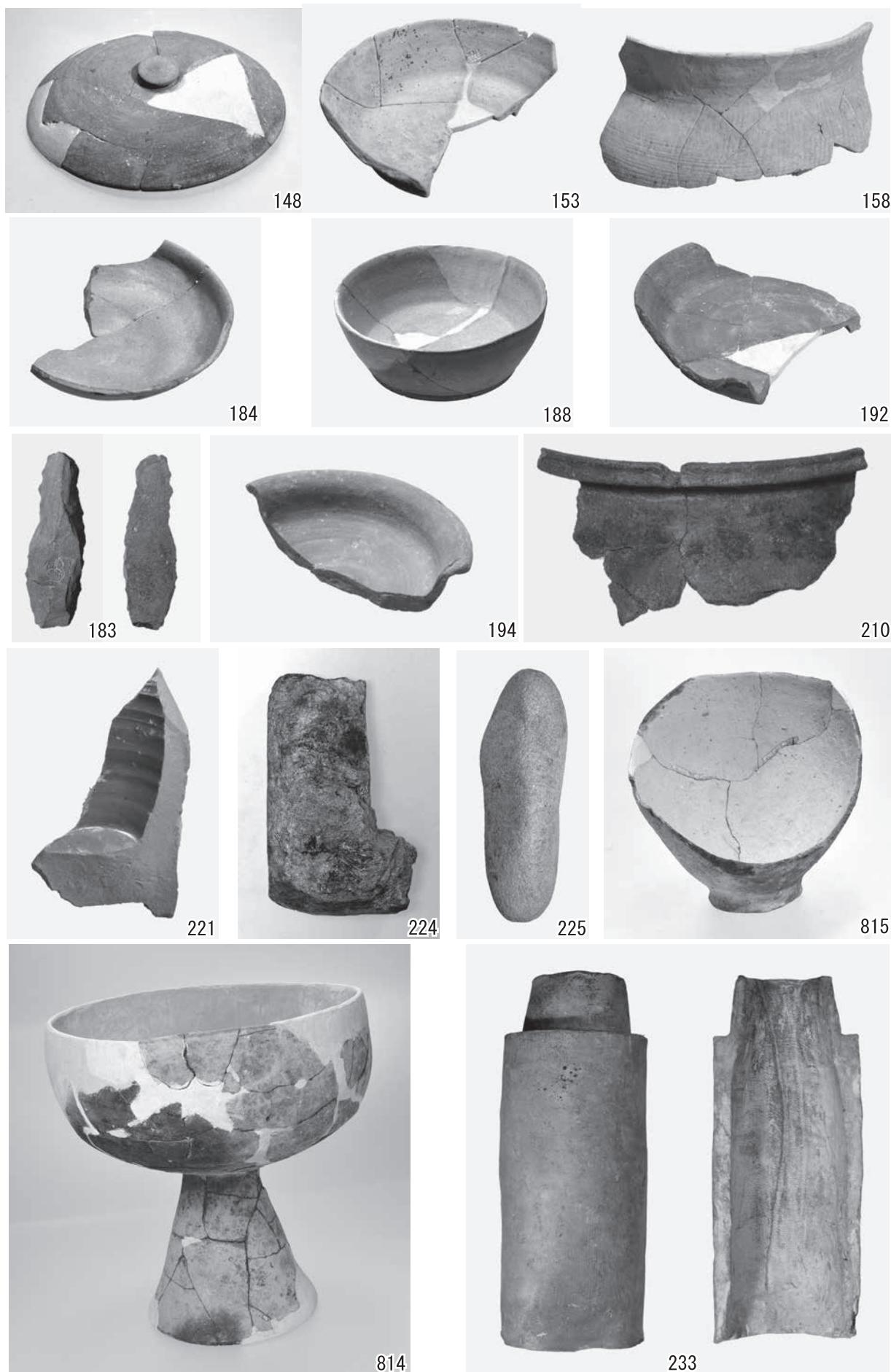
3. 262—窯燃焼部断割り断面土層  
(北東から)

写真図版44  
1-1区-5-1区出土遺物



写真図版 45

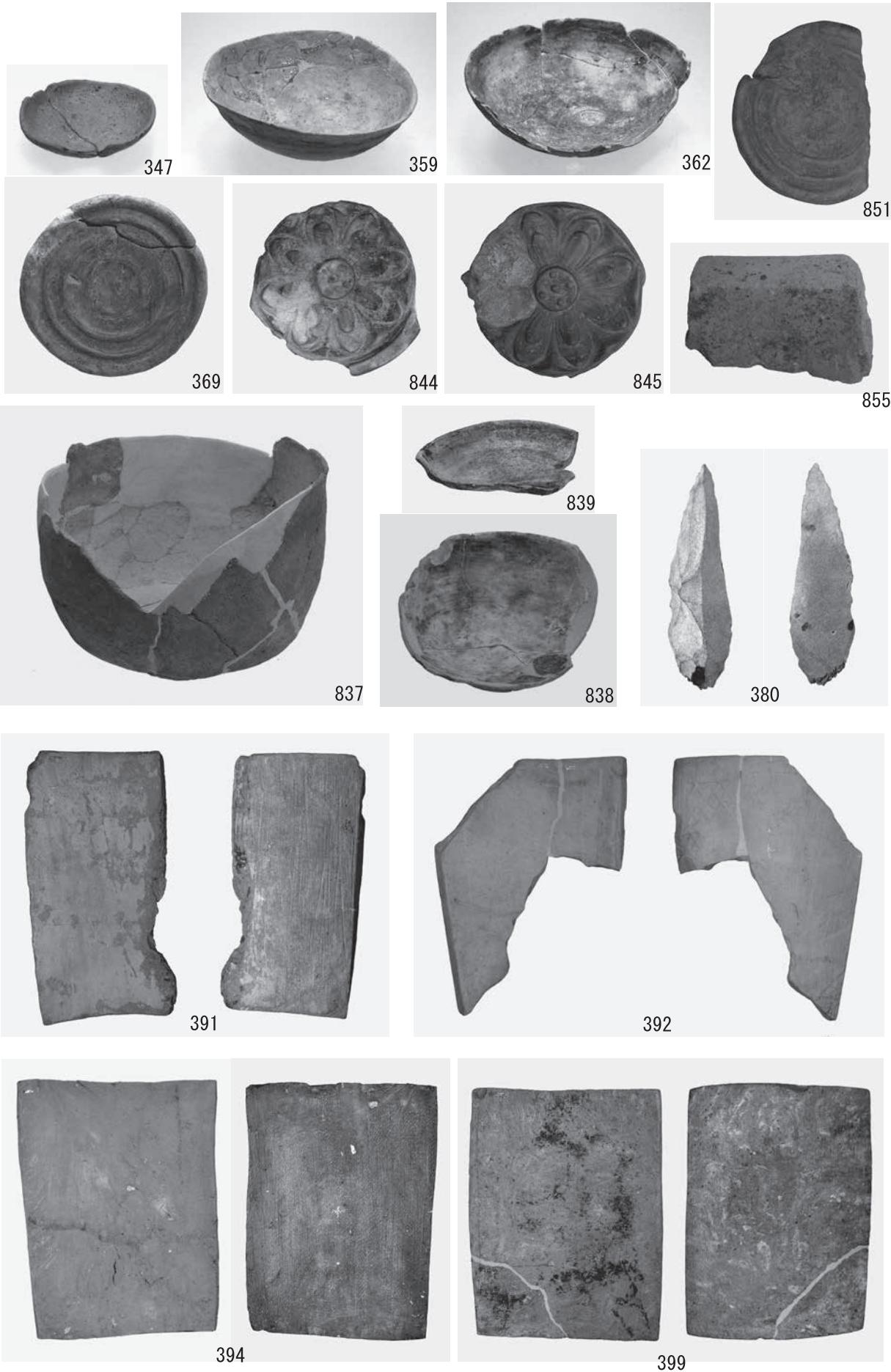
5-1区 5-1区 第2遺構面 2009年度調査分出土遺物



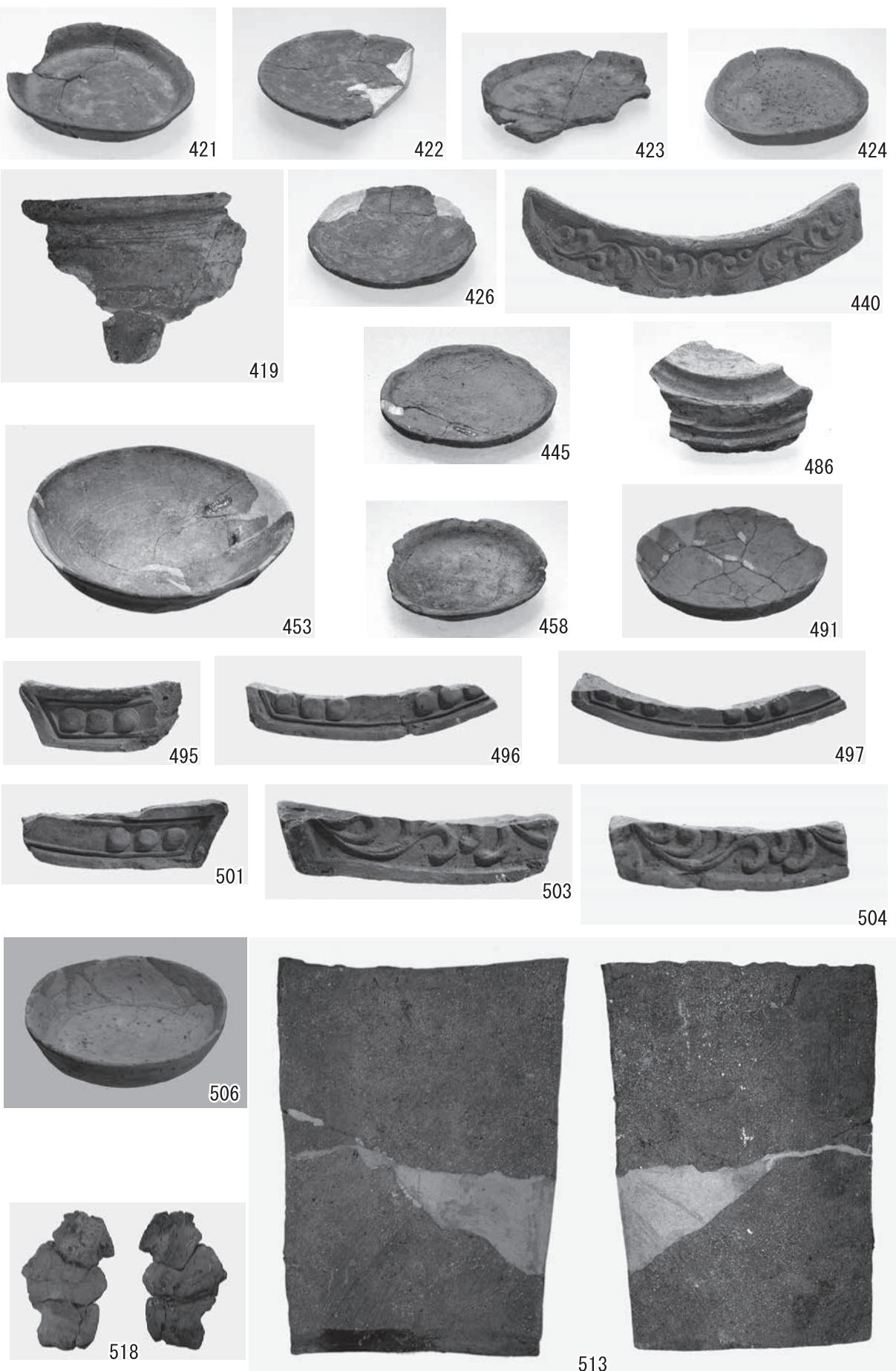
写真図版 46

6-2区出土遺物



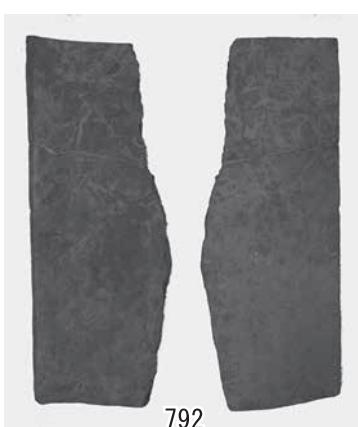
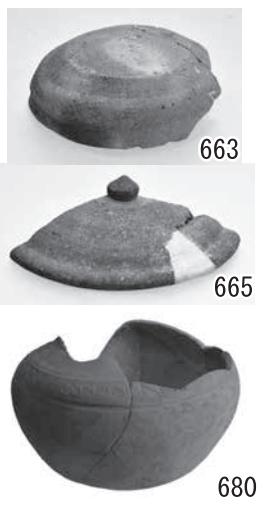


写真図版 48  
8-1区-8-3区出土遺物





写真図版 50  
8-5区・8-6区出土遺物





写真図版 52

10区出土遺物



901



902



903



913

915

## 報告書抄録

## 北山廃寺、北山三嶋遺跡

中山間総合整備事業（北山地区）に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2012年3月29日

編集・発行／公益財団法人 和歌山県文化財センター

和歌山県和歌山市湊571-1

印刷・製本／株式会社 協和

和歌山県海南市南赤坂5-3